

## 労働者階級と生活水準

### 第一部 労働者階級の境界と統一性

#### 第一章 農村における諸集団

##### 一. 農村諸集団と労働者階級

労働者階級という時、人々は互いに共通理解があるものと思っている。しかし労働者階級の境界はどこにあるのか。それは貧民階級と一つになるのか、あるいは、「プロレタリアート」の最も低い層、ほとんど社会の外で生活している浮浪的で悲惨な人々とは区別すべきであるのか。それは、自分の手で働くすべての人々、大工業の労働者ばかりでなく、少なくとも外見上はまだ独立している小生活者、そして日常的に分散していることによって相互に、また一般の労働者と接触できない自宅にいる労働者をも含むのか。これらは根本的な問題であり、我々はこれらに答えるべく試みよう。ともかくも、現代の文明諸国においては労働者大衆の少なくとも一部においては階級意識が発展していると信じられている。労働者階級という表現は、その指示する現実がどのようなものであれ、ともかくも現実の一つを指示することは確かであると信じられているかのように、日常普通に使われている。

しかし、農民階級<sup>ペザンヌ</sup>あるいは農業階級<sup>リュラール</sup>という語によって、外見、性質の類似した一群の人々という一範疇以外の何も指示されていないであろう。この場合、共通して知覚されやすい特徴<sup>カラクテール</sup>を考慮して観察者が分類を施すのか、あるいは、対象すなわち、考察される集団が自然に分類されるのか。我々としては農民大衆<sup>マス</sup>の心理学的なある態度、集合的判断あるいは集合的感情を記録するにとどめよう。あるいは、我々の行政的、科学的、あるいは文献学的な枠組みを変動させるある社会現実<sup>マッセ</sup>に迫ろう。

実際、労働者階級なるものの存在することが認められるならば、労働者階級に対する農民の態度についてあり得る三つの仮説を予想することができる。

第一の仮説としてその利害関心<sup>アンテレ</sup>、生き方、伝統の違いによって労働者階級と明確に対立し、(いくつかの点における不可避な接触にも関わらず)ともかくもそれから区別される農民階級が確かに存在するであろう。労働者階級が農民よりも用意周到さでは劣るが独立性では優り、因習性が小さく、より「進歩している」ことはしばしば観察されてきた。他方、都市への人口集中の増大は、農業の働き手を減少させることによって賃貸農民<sup>フェルミエ</sup>と小地主の状況をより不安定にする。これらの利害の対立、性向<sup>タンダンス</sup>の相違はこれら二つの集団の間の意識的な敵対として現れた。このことは少しも驚くべきことではないであろう。——第二の仮説として、あるいは逆に、労働者と農民という二つの階級は現実には一階級をなすだけかもしれない<sup>(1)</sup>。なぜならこの種の闘争と相違は、労働者階級自身の内部にも、あるいは大工業に属する労働者(家内職人<sup>アルディザン</sup>)との間にも、あるいは、種類の異なる工業の間にも生ずるからである。対立の理由は、しかも、偶然的で一時的であり、それ故第一線的な重み

を失うであろう。彼らの関心は彼らの労働の相似性、富裕な階級に対する従属という一般的关系、すなわち本質的でもあり持続的でもある共通の特徴に向けられているであろう。とりわけ、一方の集団から他方の集団への頻繁な移動があるであろう。田舎から都市への移行は、しばしば農民階級の一部分の乱暴な切り取り、労働者階級によるその併合、と解釈される。しかしまず第一に、移住は必ずしも決定的とは限らない。多数の労働者が閑散期には再び農民となる。アメリカ合衆国へのイタリア移民の半数以上が祖国に戻る。ここでは数字は大した意味を持たない。都市と農村との関係がかつて切断されたことがなく、移民が帰国の道を閉ざさないように思われることが重要である。この意味において、労働者、未熟練労働者が技能労働者に従属しているのと同じく、農民集団は労働者集団に従属していることになるであろうが、彼らは同一の階級に属することになるであろう。農民と労働者との間には、労働者と雇傭者との間におけるのと同じような連続性の中断は存在しないであろう。あるいは最後に第二の仮説として、農民は労働者階級と直に接しかつその外部にあって、混在的で非有機的な、まさに集合意識の欠如によって特徴づけられるところの、一つの社会的な塊り<sup>マツス</sup>を形成するであろう<sup>(2)</sup>。彼らは孤立し分散していて、彼らの生まれた土地の与え得る視界以外のものを持たず、同じ村あるいは同じ地方<sup>プロバンス</sup>の住民を結びつける紐帯以外のものを知らないであろう。地主と賃貸農民との間、あるいは地主と日雇人夫との間にさえ、賃貸農民や日雇人夫と都市労働者との間におけるよりもはるかに多くの類似性が見出されるであろう。その結果農民は労働者階級の延長部分、それもはっきりとはとらえがたく非常に細かく分割された外縁部として、その延長部分を構成することはできないであろう。同じ理由によって、また特に次の理由によって、すなわち、小地主の数が非常に多いこと、雇主と被雇傭者との対立を際立たせるような性質を有する大規模な集団的事業がここでは稀であること、そしてすべての農民が土地の一片を所有しようと望むこと、によって彼らは、自分たちはすべて土地で生計を立てているという観念をとりわけ共にするであろう。しかしむしろこれこそまた不和と疎隔の一要素である。なぜなら土地というものはあらゆるところで同じように肥沃というわけではないからである。その上土地は不平等に分配されている。限定された狭い地域<sup>レジオン</sup>においてはこうした諸条件はほとんどすべての人にとって同一である。このことは、少なくとも国民<sup>ナシオン</sup>の限界にまで拡がるべき一階級に属しているという意識を彼らに持たせるには十分ではない。農業から工業への移動は、それ故一階級から別の階級へと上昇することではなく、とりわけ家族的な伝統と習慣に基づく地方的な結合<sup>グルプアン</sup>を捨てて、有機的な、そして少なくとも国民的<sup>ナシオナル</sup>な一集団に入り込むことを意味するであろう。

- (1) テュルゴ (Turgot) はその著書『富の形成と分配に関する考察』(“Réflexions sur la formation et la distribution des richesses”)において、耕作者と職人とを第一の、そして同一の階級として併合し、「彼らがいかなる所得も持たず、土地からの生産物に基づいて彼らに支払われる賃金によって等しく生活している」(Picard (Roger), article cité, p.629) 点において類似しているとしている。

(2) これはマルクスの見解と一致し得るであろう。彼は疑いもなく職人と同じく農民をプチ・ブルジョアジーの中に位置づけ、これは封建貴族と共に没落階級の典型であるとした。しかし、「農民はそれにもかかわらず十分に展開しきった階級ではない。なぜなら同じ条件の人間の中を『袋の中のじゃがいものように』加算するだけでは足りないからである。利害の一致は『農民』の中に『いかなる連帯も、国民的紐帯も、いかなる政治組織も』生み出さず、この意味において彼らは、一つの階級を形成してはいない。」(Andler Charles) . 「共産党宣言への序言」 p.83, Bibliothèque socialiste, Paris, 1901.

我々は反論されるかもしれない。すなわち、なるほどその通りである。しかし、これらの仮説の間でどれか一つを選択する必要はない。なぜなら、考察される<sup>レジオン</sup>地域により、また時代が異なるにしたがって、これらの仮説は同時に実現されたり、あるいは順を追って実現されたりするからである。例えば小土地所有の古典的な国であるフランスを考えてみよう。そこには、土地が小農民によって所有されており経済状態が非常に類似的で一般に中位にある田舎の近辺に、多数の工業労働者が住むいくつかの大きな工業中心地が発展している<sup>レジオン</sup>地域（とりわけロレーヌ地域）を容易に見ることができよう。賃金だけに生活を切りつめてはいるが独立しているのきな労働者と、「畑地付属の農奴のように」、但し、農奴の場合とは別の性質の紐帯によってであるとはいえ、土地に縛り付けられ、工業労働と耕作のそれとを結合することができず、その欲求を制限し不作を恐れる農民とが、相互に非常に近いところで生活している。彼らは比較され対照される。農民の息子あるいは娘が工場に行っている場合でさえ、このような空間的接近、経済的状況の相違、そして二つの<sup>メデーエ</sup>仕事を結合することができないこと、これらは余り恵まれていない者たちの間では不信、羨望、敵対の感情を作り出す。その場合二つの階級が存在していないであろうか。さらに、対立はそれが明確に現れている<sup>レジオン</sup>地域の範囲をはみ出ているときさえ言い得る。農民たちは普遍的及び人間的な形態の下に生活様式のこうした二重性を体現している。——しかし大所有と大規模事業の国においては、事情がもはや同じでないことは疑いない。いくつかの<sup>レジオン</sup>地域では栽培耕作はほとんど<sup>キユルデュール</sup>工業化<sup>アンデュストリアリゼ</sup>されており、耕作者は工業家のために生産し（甜菜の栽培）、あるいは商人のために生産する（ブドウ栽培）。かれら耕作者は商工業者の条件を受け入れなければならない、彼らの意のままである。この場合土地は耕作栽培が主たる職業ではなくなっている人物たちの利益になるような形でしっかりと抵当に入れられている<sup>(1)</sup>。その場合、最後に、<sup>グラン プロプリエタール</sup>大土地所有者は貧困と大多数の耕作者とを利用して、アイルランドにおけるように、極端に小作料を引き上げる。これらすべての場合に農民は、彼らより豊かな連中や、彼らとその労働生産物の余り明確に決められていない一部を規則正しく譲渡しなければならない連中の全体に支配されているという感情を、ぼんやり持つであろう。これは彼らのあいだに集団意識が発展する一つの理由である。しかし、同時かつあらゆる状況において、同一地域にいる彼らと工業労働者との間にすべて一階級として合流するほどの緊密な連帯関係が樹立されるであろうとは疑いもなく言えない。しかしまた、少なくとも彼ら

の経済状況の中には、ある一障壁がこれら農民を労働者階級から隔離するに十分な理由を認めることはできない。——最後に、別の地域にはまだ農業<sup>レジオン</sup> 経営<sup>エクスプロワタシオン</sup>の古い条件が残っている。主人あるいは賃貸農民と、日雇人夫とのあいだでは、交際<sup>ラポール</sup>は依然として頻繁であり、いまだ家父長制的な性格を刻印されている。小作料の割合はゆっくりとしか変更されず、しかも小作人たちは絞られているとは感じない。最後に、大工業の影響はここにはまだ及んでいない。その場合農民たちは労働者階級にも富裕階級にも集会的には対立していない。多数の農民は存在するが、農民階級は存在しない。低地ブルターニュの場合は疑いもなくこれである。工業中心地から距離的に隔離されていることによって、農民たちはその主人たちの中に同等者ではなくとも、少なくとも自分たちと同種の人間を見る。いかなる共通の利害も彼らを団結させる結果とはならない。いかに強烈な社会生活であれ、複合的な関係と比較とを結果することはなく、また共通意識が生まれ出るこうした集会的思考の流れが結果することもない。

- (1) パス・ノルマンディー地方ではますますこうした状況になりつつある。この点については、Sion (Jules) , les Paysans de la Normandie orientale, Pays de Caux, Bray, Vexin normand, Vallée de la Seine. Paris, 1909.を参照。

なお加えて、諸階級は闘争の折にとりわけ自らを定義するように思われるので、同一の集団が、状況によって、一階級として振舞ったり、あるいは振舞わなかったりすることも予想しなければならない。収穫が良好で労働者の賃金も良好な繁栄の時期には、労働者に対する農民の、時に生じ得る悪意反感も恐らくは緩和される。彼らの注意はむしろ、農業と工業の間に存在する連帯に向けられ得るであろう。彼らは、だからといって一気に労働者階級と結びつくということもないが、労働者階級に対してブロックを形成することに自己の存在基盤を求めるということもしないであろう。——他方、農夫たちが自宅で行なう工業的な仕事(家内工業)のうちに補足収入を見出す地域<sup>レジオン</sup>においては、人々が集まって同一の生産物を製造する工場が設けられるようになる。農夫たちの一部がそこに利益を見出すならば、彼らが工場労働者へと変態し、畑を捨てるに至るであろうことも疑いない。しかし、こうした副業的な仕事もなくなり、しかも土地に縛り付けられたままの者たちは、彼らが労働者の地位に移行することを拒否すればするほど、彼らを労働者から隔てる距離をより大きく感ずるであろう。このことは、さらに彼らの共通の怨恨と窮乏にも関わらず、当面農夫たちが自らを労働者と直接に対立するものとして位置づける一つの原因となるであろう。田舎の人口を減少させる移住の動きが農民と労働者の間の新しい関係を樹立するどころか、彼らの間に溝を作るように作用することは一般に起こり得ることである。ことに労働者になりきり時々故郷に帰ってくる旧農民が、何人かの農民をして彼らを招くべく決心させるような場合には、こうした旧農民は彼らによる状況の変更がより明確に見えるようになるにつれて、一層敵対的な感情を他の多くの人々に吹き込むことになる。——とりあえず、労働者階級に対する農民階級なる者の対立は、対立が生じる場合でさえも、確

認することが難しいという点に注意しよう。逆方向の二つの傾向が展開している。一方は羨望し、そしてこの理由から模倣する。他方は同じく羨望し、そしてこの理由から頑なになる。いかなる心理学も彼らがどの道を選ぶかを先験的に決めることはできないであろう。そして客観的な徴候の欠如の中で余儀なく、彼らがますます貧乏になっているという事実及びいくつかの経験的観察から、階級敵対ということ結論するに至る。

農民が金持ちに対立するようになり、そしてこの態度によって労働者階級に接近し、ついにはそれと合体するに至るケースはより確認しやすい。例えば英国においては<sup>(1)</sup>、18世紀の後半に、土地所有貴族は小作人に課する義務を節度を越えて拡大した。すなわち、異常な賦役労働、恣意的な利率による延滞利子の請求、である。他方で彼らは新たな土地保有民、特に特権市民や自由農民に対して領主の森林及び未耕空き地の一定部分を分与した。農民たちは今日に至るまでその使用权を行使している（共有林での採薪伐採権、放牧権）。このことから、セー氏が言っているように、重大な抗議の動きが結果した（訴訟、暴力沙汰、等）。そしてきわめて残念なことは、彼セー氏が我々に次のことを示してくれていないことである。すなわち国民のどのカテゴリーが最初に、そして最も精力的に蜂起したか、他のカテゴリーはいかなる規模及び順序でそれに従ったか、これらの反乱あるいは抗議は孤立していたかあるいは拡大されて広い範囲での集団を含んでいたか、それらは自然発生的であったか共謀されていたか、といった点である。これらは依然として、生まれ始めたばかりの階級意識の指標である。このことはここでは、次の事実の故に一層興味深いものである。すなわち英国においては中世以来<sup>エボリューション</sup>「進化」がより進行し、それが奴隷を農奴に、そして農奴を自由農民へと変態させたこと、そして18世紀の初めには、彼らに重くのしかかっていた租税にも関わらず、農民と、そして大抵の場合国内に居住していた貴族との間に、特記されるほどの緊張は存在しなかったこと、である。

(1) アンリ・セー Sée (Henri) , 「16世紀から革命までの英国における農村諸階級」パリ、1906.

英国においては<sup>(1)</sup>、同じく18世紀のことであるが、エンクロージャーの大規模な実施が同様の結果をなお一層明瞭な形でもたらした。地方大地主、<sup>スクワイア</sup>「郷紳」と郷土あるいは小地主の間には、疑いもなく、一方が貴族であり他方は貴族ではないという違いが存在している。しかし彼らの経済状態は依然として非常に接近したままである。多くの小屋住み農業労働者■ [農村で小屋に住む代りに労働力を提供する——訳注] ■が共有地（公共用地あるいは<sup>コモン・ランド</sup>空き地）、すなわち、ほとんど手の入れられていない土地に住んでいる。彼らはそうした土地について何ら法的権利を持っているわけではない。彼らはこのような寛容をもちや享受できない場合でさえ、このことに思い至らない。そこにはさらに、多少とも生活の楽な、あるいは多少とも貧乏な<sup>キュルティバティール</sup>「農夫」がいる。小農地の極端な分散と混合——そこに各々の財産が散在している——はしばしば彼らを正真正銘の<sup>エクスプロワタシオン・コレクティヴ</sup>「集団的経営」へと強制する。しかしこれは、危険と圧迫が存在しないところでは、一階級が自らを確定するには足りない。18世紀の半ば頃に農業を投資先と考える大借地農業家の一階級が登場した。所有

地を連続した外壁で固めるような形で併合し再分配すること、また共有地そのものの分割を成就するのは実に彼らである。郷土は最良の土地が彼らよりも豊かな者たちによって保有されるのを妨げることができない。彼らは共有地での放牧権を喪失することになる。小屋付農業労働者とはいえば、彼らは自分たちの住んでいた土地とあばら屋から放逐され、農家から農家へと渡り歩いて乞食のように労働することを余儀なくされることになる。貧しくなった郷土と放浪するかつての小屋付農業労働者はその間に、短期的にのみ耕作可能な一定量の土地が牧場やあるいは狩猟地に変えられていることに気付く。彼らの大部分がとり得る方策はただ一つである。すなわち都市の方に向かって行き、生まれたばかりの大工業にそれが必要とする働き手を供給することである。このように決断する以前に彼らを感じるの、彼らの習慣が動揺させられており、少しずつ土地から切り離され、いつとはなしに土地を収用され、そして最後にはより富裕な農業家の階級によって貧困化させられている、といったことである。彼らの有為転変の類似性と彼らの貧窮の原因の同一性が彼ら自身に明らかになる。そしてこの共通の表象が彼らの集団において階級感情を惹き起こす。こうした感情はすでに労働者が経験したところのものに全く類似している。そして労働者たちの最初の蜂起反乱、彼らの仕事を一時的に奪うかもしれないと思われた機械の破壊は、エンクロージャー法の掲示を阻止する農民の抗議に類似している。

- (1) ポール・マントゥ (Paul Mantoux) 「18 世紀における産業革命——英国における近代的大工業の開始に関する試論——」パリ、1906 年

これらの観察から、農民階級というものが客観的には存在していないという結果が出てくる。しかし、農民の種々の集団の内部では、一定の条件、時期にあつて他の集団と闘争している場合には、連帯の意識的關係が現れてくるであろう。まさしくこのような瞬間にあつては、またこのような地域レジオンにあつては、この連帯感情は、言ってみれば自らを越え、ひとつの階級——個々の農民集団はその一部にすぎず、その階級の利害や経済状況によってよりよく説明される——という表象を彼らの意識の中に結果する。

しかしながらこの仮説は、多くの事実に基づいており多分知性を満足させるであろうとはいへ、向う見ずと思われかねない別のものを含んでいる。まず、階級意識の内容と本当の性質ナチュールを認識するのに、その階級がとりわけ反逆の感情、圧倒感あるいはまた狂瀾怒涛の感覚によって満たされている瞬間に、あるいは逆に、その階級が反省後悔し絶望し、そして彼らを支持する集団が彼らの後に身を隠そうとしていると感じる時に、その階級について考察するのは正しい方法であろうか。闘争に向けて方向づけられている社会意識は必然的に単純化する。そうした社会意識は相敵対する限りにおいてのみ存在し、そして敵によって脅かされている部分のみを、あるいは敵に対して立ち向かわせ得る部分のみを、照らし出す。死が到来しつつあるのを見ている社会意識は鈍くもなっていれば同時に惑乱してもいる。それは自らの及ぶ範囲の人間たちの衰弱、彼らの無力、限界をとりわけ想起する。そして同時に逆の錯覚によって、もっぱら彼らの過去における輝ける局面に、また彼らが

失おうとしている強みにいまだひたすら執着する。したがって一国の住民の国民的感情を正しく認識するためには、戦争の時期における、あるいは解体と併合の後の時期における国民的感情を見るだけでは多分不都合であろう。

しかし階級意識はそもそも、これらとは別の時期に、そして別の状況において存在するのであろうか。我々はここで、今ひとつの別の第二の仮説に遭遇する。すなわち、一階級が存在し自己意識を獲得するのは闘争の場合のみである、という仮説である。闘争の場合以外では、階級はもっと雑然不明瞭であり、不完全にしか意見を表明することができず、さらにはいかなる集合的行動によっても自らを表現しえず、したがって階級の存在を認めることは非常に困難である、と主張されるとせよ。よろしい。これは明瞭な命題であり、また非常に科学的な主張である。もちろん階級を体験することができないということから、それが存在しないという結論は全く出てこない。しかし科学は客観的な社会現象をのみ対象とするのであってみれば、科学はこの階級体験のことを気にかけるには及ばない。但しこの命題を敢行し得るのは、我々が階級を形成してはいないと想定している農民たちのすべての集合的活動と示威運動、生活のすべての社会的側面を逐一検討した場合のみである。我々は、意識的な活動、明瞭な示威運動、そしてその社会的な性質が明らかであるようないくつかの側面のみで事足りるとする権利を有しない。集合意識は往々本能的な形で表れる。時にそれは散乱していることもあるが、だからといってそれは現実的たることをやめるものではない。特に、集合意識を生み出すのは単に口頭あるいは文書によるコミュニケーション、集会、交際、直接的関係のみではない。社会的な<sup>しるし</sup>印は土、制度、仕事の中に刻み込まれている。個々の人間は全く交際せずにいることが可能である。しかし、彼らの思考が同一の方向に向けられ同じような影響を被るのには、彼らの生活、活動、労働が社会によって形成された枠組の中で展開されるということだけで足りるのである。人々が分散して住んでおり、あるいは互いにほんの僅かな関係しかもっていない孤立的な小さな集団を形成しているという事実からは、彼らの思考もまた<sup>エトランジェール</sup>異質的なままであるという結果は出てこない。むしろ彼らが生活している国土はかつて開墾され変形されたのであり、そこへの道がつけられたのである。そこには同一の計画に従って作られた家屋や町が見いだされる。彼らはそこで、彼ら以前にそこに住んでいた集団の痕跡に絶えず遭遇する。そして少なくともそのことによって彼らは結びつく。事態が全く別様たり得るためには交際もせず、話し合うこともなくいつも小さな島々に住み、最初は処女地に創始されたであろう、いろいろな先祖に由来するいくつかの部族を想像しなければならないであろう。ところで、同一国の農民はこうした条件を満たさない。そうだとすれば、全く別の事態を考えるためには、多少とも古い社会的活動のこうした痕跡は農民の思考の中に彼らの共通の状況及び連帯についての観念を刻み込むこと、かくして彼らにある種の階級意識へと接近させること、そうしたことが一切起こらないことを証明する必要がある。

## 二. 農業労働の技術

農業に関わるいろいろな仕事<sup>メデイエ</sup>について考察しよう。農業的な仕事の条件及び要素のうちのいくつかは多分社会的なものである。すなわち、単に自然によっては全く説明されえず、むしろ発明や人間のつくる伝統によって説明されるものである。そうだとすれば、それらは人々に対してある種の社会的作用を及ぼし得るであろう。他方では、工業的な仕事のいくつかの特徴とは対立的に異なることによって、それらは農民集団を労働者階級から隔離する傾向を有するであろう。

我々は多数の文学的、美学的及び道徳的な概念を除去しなければならない。そして農村的職業<sup>オキェバシオン</sup>についての判断において、我々は、農民の生活の諸条件についての我々の感情によって、余りにしばしば支配されていることを嫌でも認めなければならない。

まず第一に、大抵野外で労働するという事実は何ら特別の社会的な意味合いを持たない。なぜならこの事実はあらゆる時代、あらゆる国における労働というものの性質に由来するのであり、さらには農民に固有のことでは少しもないからである。荷役人夫、土方、屋根屋は野外で労働する。梳毛工程において羊毛の精選工は屋根だけの納屋の中で仕事をする。農民が麦打場で小麦を打つ際に屋根だけの倉庫の中でやるのと同じである。大工業、鉱山業、冶金業においても無蓋の場所における労働は例外どころではない。さらに、農業労働のかなりの部分は仕切り壁の間や屋根だけのところで行なわれる（チーズの製造、小麦挽き、ぶどうの圧搾、等）。——農民はその労働によって自然とより直接的な関係にある、土を耕やし穀物や草を刈り果物を摘む耕作者、樹木を切り倒す木樵り、羊の守りをする羊飼い、乳牛を飼う酪農者は、彼らが登場した瞬間から生産物を獲得する、このように言えるであろうか。（彼らが未耕の土地を開墾する場合を除いて）大抵の場合、これは正確ではない。彼らの骨折りが投ぜられる土地は処女地ではない。それはずっと昔から人々によって、その表面、起伏、外観、また特性を変えられてきている。樹木も動物も各時代を通じて、緩慢ではあるが馴化の対象であった。多様な形における農業労働の全系列は単なる自然から結果するのではなく、かなりの部分、社会の組織的活動に由来する。農民がこうした区分と特殊化を作り出すのではなく、彼らはそれらをとにかくも社会的必然性として受け入れまた堪え忍ぶのである。さらに、この点では彼ら農民は労働者と本質的に異なるものではない。実際、労働者<sup>ウヅリエ</sup>は必要な仕事をそれが何のためであるかも知らずに行なう細分化された作業<sup>トラヴァユール</sup>者では必ずしもなく、さらには大抵の場合にそうではない。労働者には彼が変化させる対象に興味を持ち、その自然的起源を認識すると言ったことが起り得る。こうした感情によって羊毛の作業<sup>トラヴァユール</sup>者は剪毛工と結びつき、絹織物の作業<sup>トラヴァユール</sup>者は養蚕家あたりと結びつく。しかし、鉱夫や石切工、畑から石や根株を取り除く農民、排水渠を掘る人あるいはそれを浚える人、の間には、その労苦の対象素材に由来する相違は存在しない。梳毛機を監督する労働者たち、打穀機を運転する者たち、牛乳を煮てクリームを分離するチーズ製造者たち、製糸工場で撚り糸が通過する糊を煮る糊付け作業<sup>トラヴァユール</sup>者、籠に入れて収穫を荷車まで運ぶブドウ収穫の作業<sup>トラヴァユール</sup>者、梳かれた羊毛を籠に入れて一つの仕事場ないしは機会から別のところへ運ぶ労働者、彼らはほとんど同じ動作をしているだけでなく、同じように自然な産物、あるいは少なくともほんの僅かしか洗練されていない産物に対して働きかけてい



るのである。家畜動物は一定効率の機械の総体と見做すことが完全に可能であり、事実農民はそう考えている。なおまた車挽きは労働者であり、他方、豚肉屋や肉屋は<sup>アンデュストリ</sup>「工業」である。生産物が動物的性質のものか、植物性のものか、あるいは鉱物性のものかに基づいて労働者と農民との間に厳密な境界線を引くことは不可能であろう。大地の<sup>トラヴァユール</sup>働き手は、それ自体では明確な一カテゴリーを形成するものではない。

もはや、大地の働き手が工業労働者とは違って、自分たちはあらゆる時代に存在しなければならなかったところの、しかし新たな近代的な<sup>ブズワン</sup>欲求に応えるわけではない<sup>トラヴォー</sup>仕事をやっているのだという感覚をもっていると想像してはならない。なぜなら、「アダムが耕やしイヴが紡いだ時から」、そして人類の記憶がさかのぼる限りの昔から鍛冶場は存在しているからである。こうした違いが大きな意味を持つのは文人にとってであって、農民にとってではない。さらに、農業労働は人間の体を歪めることより甚だしく、ともかくも工業労働よりは強力にその体に刻印を押すと考える理由はない<sup>(1)</sup>。工業界内部にも、さらには同一の工業の内部においてさえ、少なくとも農業と同じ程度に明瞭な、工業に固有の、肉体的外見の差異が存在する。

- (1) クセノフォンは言う。「農業の実践は体を鍛練する。それは体を自由人にふさわしいことすべてに堪え得るものにする。……それは冬の寒さと夏の暑熱に堪えることに慣れさせる。……それは手で耕やす者たちに彼らを力強く精力的にさせるところのある種の運動を強いる。……これよりも他にどのような仕事が速やかに立ち回り、立ち働き、そして軽快に動作することを習慣づけることができようか」(Economie, V, 8)。この一節を後に (p.119■本訳文 86■) 引用するところと比較されたい。(原文ではギリシア語による引用とハルプボックスによる仏訳が記されている。——訳者)

農民は一般に、労働者がその加工する素材と接触する度合に比して、土地とより直接的な接触関係にあるというわけではない。両方の場合共に、道具、器具、機械が人間と物との間に入り込む。これらは二つの点において明確に社会的な側面を有する。——第一にそれらは働き手に一定の順序と速度でのいくつかの動作を強制する。次のことは正しいであろうか。すなわち、農業においては機械は、工業の場合のように人間によって、「奉仕される」ことはありえず、むしろ絶えず人間によって、「制御され」なければならない、というのである。農夫は労働器具に対して、労働者よりも大きな独立性を持っているであろうか。機械は確かに農業におけるよりも工業において、より役割を果たしている。物を打つ蒸気機械が大経営におけると同じく小経営においても有利に使用され得るとしても、多くの場合動物に牽かせる鋤に劣る蒸気の鋤については事情は同じではない。多くの工業的な仕事、鉱山業、建築業において、機械はまだ労働の技術的条件に革命をもたらしてはいない。但し機械が早くから導入されている大工業の相当部分においては、労働者は、監督し修理していようと、あるいは仕事に着手し何かを機械に補給していようと、いわば彼の外でそして彼を越えたところで遂行される生産の一般的リズムに従属しなければならない。農夫の

場合逆に規則的な動きの強制力にこのように支配され制御され引っ張られることはないであろう。そしてこうした強制力がその効果を生み出すのは大抵の場合人間がその作用を許す場合のみである。——しかしこれには、多分ある種の錯覚が存在するであろう。恐らく農夫の労働も同じくリズムをつけて行なわれるであろうし、それも同一の順序という理由によるであろう。リズムがゆっくりしていることは、連続性を排除するものではない。耕作する人間もまたその仕事は総じて補給と始動に限定されているのであり、刈る人もその仕事は自然動因によってなされる一連の操作全体の産物を収穫することに限定されている点が忘れられている。この自然動因は、機械が導入されている工業におけると同様、気候、土壌の肥沃度、温度の偶然的変動にしたがって、あるいは人間の仕事の産物であるところの肥料に比例して、多少とも速く、また多少とも完全に作用するといったことがあり得る。明らかにアナロジーはあらゆる点で正しいというわけではない。アナロジーが正しいのは少なくとも、(ともかくも最重要な) 農作業の同時的かつ律動的な正確を考慮する限りにおいてである。

我々に反対して次のような反論があり得るであろう。すなわち工業的生産と農業的生産とを本質的に異なるものとする特徴があり、それは前者が機械的であるのに対し後者が有機的である、という反論である。とりわけ一つの思い違いがあるとして我々を非難することも可能であろう。工業にも機械とは非常に異なる自然動因が存在するのである。水力、蒸気、電気、熱といったものであるが、これらの力を我々は装置の助けを借りて解放し制御するだけなのである。農業も工業も自然諸力を利用しなければならないという点には双方における類似点の一つであることは疑いない。しかし、工業におけるように機械の助けによって自然諸力を利用すること、あるいは、人間によって動かされる器具ないしは道具の助けを借りて自然諸力を利用すること、すなわち第一の場合には自然諸力を集中させ総体として作動させるが、第二の場合には自然諸力をここの分散的な一連の努力によって働かせること、これらは工業労働の規律正しく統一的な性格を、他方農業労働におけるより大きな自由と変化とを説明する本質的な対立点であろう。

しかし上述の反論もこの非難も我々の命題に対抗することはできない。人間による実際の農業労働以外に、一般に自然と呼ばれるものの中に三つの要素を区別することは容易である。一、生長力や生命力とは全く混同されようのない自然動因、すなわち、太陽熱、湿気、雨といった自然動因、二、植物や動物の有機的<sup>プロプリエテ</sup>特性と呼び得るもの、すなわち、種子<sup>フィジーク</sup>が一定の物理的<sup>フィジーク</sup>条件において持つところの穂をつける能力、植物や動物が自己を再生産し生長する能力、三、自然動因の作用を最も上手に利用することによって同一種の有機体を同時的に生育させるべく、土地を比較的規則的に、また合理的に配分し配列すること。我々が機械と比較することができるのはこの最後の事実の総体のみである。換言すれば、種子ならびに生殖用動物と物理的<sup>フィジーク</sup>条件との間には一種の適応が成立していなければならない。それなしでは相当量の物理力が全く無駄に作用することになるであろうし、また相当量の胚種が発育しないままに終るであろう。適応はとりわけ次の点によって成り立つ。すなわち、ほとんど同一の地質から成る地面の諸部分が同時に同じ物理的作用に曝されるという

ことである。最初の状態はこうではない。開墾し、乾燥させ、灌漑し、堅い地盤を打ち抜き、土地を改良し、肥を施すことが必要であった。さらに地面のどの部分が一定の栽培により適しているか、そしてそれぞれの時期においてどの地面が一定の栽培に最も適しているか（輪作）も認識しなければならないのである。しかしこれは自然動因を（特に熱と水）を最も上手に制御し利用すること以外の何であるか。ところでこれは機械の機能そのものに他ならない。工業的機械の起源におけると同じく、こうした分配と配列の起源においても我々は昔の人々の活動の一つを見出すことができる（集合的欲求の圧力の下に生まれ、<sup>コレクティブ</sup> 集合体によって適応させられた個々の発明）。最もこうした発明は現在ではもうある地面に全く固有のものと思われるほど内在化し、自然という名の下にその土地と発明とが混同されるほどである。その土地は自然に、ここでは麦を、かしこではブドウを生み出してきた、といった形である。結局、機械の場合と同様（そしてこれは我々が特に結論したい点なのであるが）、問題の有機的生命が従うあらゆる習慣の結果は、一定の空間と時間における生産の集中であった。広大な面積の土地の上で、あるいは近接するいくつかの小農地の上で、一年のうちの同じ時期に、同一の労働が、大抵の場合一緒に作業する人間集団によって、行なわれる。同一の条件の下で同じ栽培をもたらす各種の畑のそれぞれについて、作業の時期と期間は一定である。まさに工場におけると同じく、農夫は、大部分彼から独立している生産のリズムに従わなければならない。このような集中の故に、大工業における同じように、一定数の作業者が同時に同じ動作をなさなければならないのである。

機械の使用の真の性質、及び工業における機械の機能を農業において満たすものが理解されたならば、農業における可能な進歩についての、またそれに対応する、場合によっては起こり得る農業階級の変容についてのはるかに広大な構想が得られるであろう。この問題は、種を播いたり土地をならしたりなどする機械を発明することに関係するよりも、最も広大な土地で、そして最高度の周期性で、同種の有益植物を生産するために、同じように日光に曝され灌水されている広大な土地をどのような化学物質が変化させることができるかを認識するといったこと、あるいはさらに、適当に耕作栽培のあり方を変更するために科学的な気象学を樹立し、雨の降り方あるいは暑熱の時期を予見するといったことの方により多く関係する。疑いもなく土地の肥沃度の諸要素をすべて作り出すことが我々にできるわけではない。しかしそれらが最もよく作用するところへそれらを移動させることは可能である。気温を変えることなく作物に最も有効なようにそれを太陽光に曝したり雨に曝したりすることは可能である。実際、機械が工業において果している役割はこれと異なるものではない。——最も自然で容易な適応によって人間は二つの領域から始めた。最初自然な形で耕されたのは、リカードの言ったような最も肥沃な土地ではなく、森林に覆われたり池に遮断されたりしていない最も広大な土地であった。暑熱と太陽光の集中するそのような土地は、自然に耕作を促した。それは、かなりの物理的な力が集中する水の流れや鉱山が最初の工場を呼び寄せたのと同じことである。しかし、こうした適応がより多くの土地に拡大し、精確さと完成度を高めるのに比例して、大規模な事業が発展するであろう。状況に応じてその耕作のあり方を変更することができず、あやふやな実験を敢行する

こともできない小規模の耕作者は、甚だ大きな諸力を浪費する。余りうまく適応していない土地の上であって、彼は粗雑な器具で生産を続けようとする小職人の如くである。それでも彼は彼を取り囲む集団の影響を少しずつ被る。さて影響の及ぶのは我々がすでに述べた方向である。すなわち、広大な土地の広がりに対する働きかけの増大する<sup>ユニフォルミテ</sup>齊一性、同時性及び規則性、生産の増大する集中、生産の自然的でもあり合理的でもある諸条件への働き手のますます全面的な従属、である。このことによって耕作者は、工業労働者から区別されるどころかそれに接近する。

しかし生産の集中は工業においては労働者のますます厳密な専門化を伴う。しかし、農業においては事態は同じではない。ダヴィッド<sup>(1)</sup>は次のように言う。「工業的事業はいくつかの特殊な機械の結合して働くシステムに訴えるが、農業はいくつかの機能が結合してできていて、しかも単独で機能する機械に訴える」。我々は機械という言葉が誤解を招くおそれがあることを指摘した。しかし大工業と農業をそれらが通常営まれているままにとらえておこう。もはや機械を比較するのではなく、働き手とその仕事を比較しよう。労働者が一年中同一の特殊な仕事に従事しているのに対して、農民の仕事は季節の変化と共に更新される。ここでは単なる自然的必然性が問題なのではない。自然的必然性そのものは、孤立的な農民集団に対して、条件の同一性に基づく社会的共通性という観念を念頭に浮かばせることはできない。こうした仕事の継起、変化は農民には一社会現象として現れる。なぜなら農民が何であれある仕事を決意するのに、その畑の様子や気候状態からそれをおいつくだけではないからである。彼は他人が同じ時にやっていること、カレンダーの指示、月と週への一年の分割、日の決まっている祝祭日、そしてある種の伝統的な戒律を考慮に入れる。いつの時代でも、民衆の<sup>バンセ</sup>意想が決定した日付や時期——それは目印のための区分や点としてその現実性のすべてを民衆の<sup>バンセ</sup>意想から引き出す——は人々の精神の中で一定の農業労働と結びついてきた。あるいは刈り入れやブドウの収穫の前の予備的な祝祭の合図、収穫後の休息の合図であった。このようにして社会的<sup>バンセ</sup>意想は農業労働の必然的リズムを固有の流儀で表現し強調する。しかし同時にこの社会的<sup>バンセ</sup>意想はリズムの相違を尊重する。労働者が毎日同じ時間に同じ仕事をするためにやって来る大きな土場を農民が垣間見る時に、自らの仕事と労働者の仕事との対照に驚かないといったことはありえないと思われる。規則と順序が同じように彼ら農民の仕事を支配してはいるが、それらは一サイクルのうちのいくつかの異なる段階を画するだけであって、この一サイクルなるものの単位は数ヶ月、一年（あるいは数年）なのである。同じ日のうちに種々の仕事が相継ぎ、一日をいくつかに区分して種々の仕事が行なわれるということがしばしば起こる。この意味において、特に農業経営の全体は多様かつ相互に結ばれた諸機能を有する真の有機体であり、工業における機械的作業の<sup>リジディテ</sup>単調さと硬直性は全くないと言えよう。

(1) ■原著18頁■

しかしこれは重要性も意味も異なる農業生活の多様な側面を混同することである。農民

の一年が季節の変遷とそれから結果する社会的習慣によって実に様々な諸時期にこうして区切られる一方で、労働者の一年がこれらの影響から免れていると主張する人がいるだろうか。疑いもなく仕事場では作業そのものが全く変わらないことがしばしばである。しかし、工場の壁あるいは窓の後に労働者は月が変わるのに気づかないであろうか。いずれにしてもそうした変化と共に外部の印象の思い出を持っていないであろうか。もし、これ以上定義することは疑いもなく無駄になるというこの側面を無視すれば、たまたま作業を直接考察するためにその多様性だけに留意するならば、それはまさしく何に帰着するであろうか。我々はさしあたり分業という複雑な問題には取り組まない。また、同一の個人の手における多様な作業のあの結合がどの程度まで農業的職業に固有なものであるかについても検討しない。多分この多様性は實際上よりもむしろ見掛け上のものであろう。そしてそうした作業はすべて、かなり限定された一定数の腕ないしは手の運動に帰着する（これは荷揚げ人夫及びすべてのカテゴリーの人夫の労働と同じである）。それらはただ、いくつかの方向において、いくつかの対象について、そしていくつかの異なる場所において行なわれるだけである。他方、非常に専門的な作業、例えば一日中同じ織機を操作する作業は実際非常に複雑であり、写すべき意匠の複雑さ、交換する梭の多様性のために知的な努力を余儀なくされる。しかし農業的職業の多様性は我々にはとりわけ次の点にあると思われる。すなわち、一方では、加速せられ密度の高い作業時期の後には、時間そのものの経過を利用する、あるいは成熟の精確な瞬間を知る必要があることから、休息ではなくとも、少なくとも別のそれほど熱気を帯びない活動の時が来る。その時期には人々は好機をとらえて、慎重かつ熟慮された一種の緩慢さとも言うべき、ゆっくりした態度で保守、修理、修繕といった作業を行なう。他方では、共通に行なわれる作業、あるいは十分目に見える同時性のゆえに明瞭に集合的な性格を有する作業の時期の後に別の時期が来る。その時期には農民は自分の家で鶏小屋、野菜畑、家畜小屋の仕事をし、そして家屋の中でありとあらゆる種類の作業に一人従事する。ところで工業的作業はこの後者の作業に比較すべき性質を持っており、しかもその多様性が小さいというわけでは全くない。

大抵の場合工業において生産活動は一年を通じて同一の強度で行なわれるわけではない。自らの産物を使用しあるいは自らの器具を準備し、また作業の加速と休止の交互的運動を反映しなければならない農業との直接的関係において事業の性質について論じなくとも、一定数の工業においてはいろいろの理由によって閑散期が存在する。気温の変動と日照時間の変動（建築業）、年間を通じての消費者の欲求の質ないしは強度の変動（既製服業界全体、自転車製造、等）といったものである。この他に、規則的かつ連続的な販路を有する生産物の場合でも、間接費を減らすために生産作業を最小限の時間に制限することは工業家にとって利益になる。最後に恐慌の時期がある。その場合には商況を利用して生産を増大させすぎて供給過剰になり、工場内の多くの仕事場が閉鎖を余儀なくされる。その場合労働者はどうなるか。一方には工場、加工場、仕事場にとどまる労働者がいる。作業は緊張度が低く、必然的に緩慢である。修繕や保守作業に従事する。他方には、一日あるいは一週のうちの一部分のみ雇われるか、あるいはまた交代制で働く労働者がいる。この他

最後に、完全失業するある種の労働者がいる。この部類の労働者たちは別のところで仕事を探し断続的なものしかないが、そうした仕事に就くか、あるいは個々の事情で自分の家で働く等する。ところで、工業労働をその集合的形態において考察すれば、次のことが認められる。つまり、労働強度の高い時期（労働日の一時的延長、あるいは極端な労働強度を結果することになる特別手当制度、さらに臨時作業員の採用を伴う）の後には、まだ集合的に働いている者たちにとっても緩慢ないしは弛緩を特徴とする時期、他の労働者たちにとっては集合的な作業から様々な個人的作業への移行を特徴とする時期が続くという点である。

工業的生産のメカニズムは、それ故、そのメカニズムの作動者たちが時機に応じてそれを遅らせたり止めたりする必要がないほど高度に完成されてはいない。時にこのような停止制度が思いがけない形で行われる場合には、それは労働者を仕事のない状態で放り出す一種のカタストロフィーの如き状態となる。大抵の場合こうした急停止と不規則的な動きは利害関係者によって予見され、彼らは前もってこうした強制された閑暇の時期に備えて仕事を準備する。それ故こうした場合、仕事の交替は農作業のいろいろな形態の継起と同じように自然な適応現象である。この適応現象が集合意識において同じ形で表現され、労働者階級と農民集団との間には分離と対立の原理が存在しないことも自然なことである。

### 三. 農民の法的<sup>コンディション</sup>身分

我々は農民を、彼が働きかける土地、彼が行なう仕事、彼が操作する器具から区分した。長い間農民はこれらと区別されないうえきた。農奴は畑に合体せられて、彼の農業活動はその存在理由、その実質であるかに思われ、固有の意思を持たない単なる人間動力として鋤、シャベルに釘付けされていた<sup>(1)</sup>。今日、農奴の状況を工場労働者のそれと比較する時、むしろ農奴が享受したより大きな独立性、そしてこの自由の基礎つまり<sup>プロプリエテ</sup>財産について主張したくなるであろう。

- (1) トックヴィルが次のように書いていることを想起しよう。「ドイツのほとんど大部分の地域においては18世紀の終りにはまだ農奴制は完全には廃止されておらず、大部分において人民は中世におけると同じようにまさしく土地につなぎとめられたままであった」。しかし「フランスではこれに類する者はすでにずっと昔から存在していなかった。農民はその好みそのままに往来し売買し交渉し働いていた。農奴制の最後の痕跡が見られるのは東部地域の一、二の州に限られる。……他の地域ではすべてそれは完全に姿を消していた。……農民は農奴たることをやめはしなかったものの、土地所有者になっていた」(『アンシャン・レジームと大革命』L'ancien régime et la Révolution, p.33 sqq.)。

これとは別にこれらのカテゴリーに属する働き手たちの法的<sup>シチュアション</sup>身分を考察し、二つの階級の支配的かつ弁別的な表象の根拠が見いだされるのは法的身分においてではないか、と

問うてみる事ができる。——日雇仕事をし、いかなる種類の財産も持たず、あるいは少なくとも耕やすべき一片の土地も持たない、多数の農業労働者が存在することは確かである。しかし、農民一般をこのような農業労働者——彼らの一部が場合によっては都市で工業のはした仕事に就こうとするであろうことは疑いない——によって判断しない方がよい。彼らが階級の間接触面及び結合線をなすとさえ言うことはできない。彼らはむしろ一方から他方へと移行し、双方に同時に所属するという事はない。彼らは一時的に属している集団の集積的傾向は受容する。彼らが地主でない場合には<sup>プロプリエテ</sup>地所に対する秘かな願望と伝統的尊敬を、都会の労働者よりも強く持っていると思像することができる。——M.スーシオン<sup>(1)</sup>は次のように区別することを提案している。「規則的に農業賃労働を採用せずには直接経営することは思いも寄らないような大土地所有者。中位の土地所有者、この場合、その家族の人数が極端に多くなくそのすべての構成員が経営に参加協力しているという二つの条件の下に、家長及び家族を養うに十分な収穫がなければならない。小土地所有者、彼らは、生活の糧の一部を賃金によって補わなければならない」。彼スーシオンが農民の土地所有一般の最も代表的なものと考えているのはこのうちの第二のカテゴリーである。まさにこれに属する土地所有農民と工業労働者との間でこそ対立は最も明瞭であると思われる。この土地所有農民は新たな<sup>ディレクツワール</sup>指揮者<sup>パトロン</sup>とか主人とかを持つことはなく、自らの責任において全く独立の条件で経営する。彼らの収入は年間を通じて不規則な形でばまかれており、何週間もあるいは何ヶ月も金銭を受け取らないといったこともある。最後に年間収入そのものは一定ではなく、収穫の良否、物価等によって変動する。——他のカテゴリーの土地所有農民、そしてまた特に土地を持たない農民に目を向ければ、別の特徴点が見えて来ることは確かである。これらはぼかされるが、消えてしまうのではなく、実際にそれらは主要特徴としての地位を占め続ける。自分自身で作業する土地所有者を考える場合には、彼が労働者を雇うことがあるという事実はほとんどどうでもよいことである。理論的には、彼は資本を運用している、と言うことはできる。しかしこれは實際上、彼の主要機能ではない。彼は土地に金を投資する金融資本家あるいは金持ちとは全く比較されえないし、在住して管理運営する大土地所有者とさえ比べられない。前者にとっては土地は様々な理由によって他のものよりも好ましい資本の使い道に他ならない。土地所有農民にとっては農業の実施は<sup>プロフェシオン</sup>職業である。彼は自分が雇う労働者たちを拡大された家族と見做すことがあり得る。彼の収入の大事な部分はその土地財産の改良あるいは拡大に用いられなければならない。その財産は十分に土地との直接的接触に立脚している。他方、小土地所有農民は収入不足の補助を賃仕事に求めるが、支配的な関心は依然としてその土地財産である。彼が他人に使われようとするのは土地を譲渡しなくともよいように、あるいは抵当に入れなくともよいようにするため、時には土地を拡大するため、である。

(1) A.スーシオン「農民の所有」、Etude d'économie rurale, Paris, p.10, 1900.

小作農民と折半小作に関しては、彼らが経営する土地を固有に所有していないことは確

かである。土地所有者に定期的に一定額を支払い、土地の保守改良の作業をしなければならぬという点において、彼らは土地所有者に従属してはいる。しかし土地所有者は一般に遠方に住んでおり、労働者が監督や職工長の監視に絶えず曝されているのとは違って、彼らは土地所有者の監視を受けない。占有し経営しているのは農民である。他方、彼の収入は、土地所有者に彼が譲渡しない部分から生ずること、彼と土地所有者双方の収入は同一の労働に由来すること、他面から言えば土地所有者の収入はより不確定で変動的であること、こうした事情によって、この種の農民が働きながら次のように考えることはいとも容易である。つまり、自分は自己の責任において働いているのであり、地代は昔の十分の一税や二十分の一税と同じく産物から先取される税であると考えるのである。——このような考え方は昔はもっと明瞭に現われたに違いない。18世紀末イギリス<sup>(1)</sup>では、封土の形で<sup>プロプリエテ</sup>土地を所有していた地主は領主に対して、確かに軽いものではあったが賦課租を支払う義務を負っていた。軽くはあったがそれは形式において小作農民が負っている<sup>ラント</sup>地代に似ている。他方、小作ないしは折半小作と土地所有の間にいくつかの中間形態が存続している。すなわち、解約の可能な条件付貸付土地であって、いつでも可能な追奪（congement）に対抗する「<sup>ドクマニエ</sup>土地使用权」を保証せず、現金を保証せず、<sup>テニマニア</sup>農民持分保有地——これは収穫のほんの一部を収めることを条件として耕作者に土地を永久かつ世襲的に譲渡するものである——を保証しない。この場合には法律的形式そのものの中に<sup>フェルマージュ</sup>「小作」と農民持分保有地との血縁関係が表われている。■右■のような中間形態を介して一方から他方へと移ることが可能だからである。——しかし現にその証拠が習慣の中に見いだされるであろうことは疑いない。小作農が土地に関心を持ち、したがって土地を占有するのは一定期間のみだという感情を持つてはいないという点は<sup>プロプリエテール</sup>土地所有者にとっては重大なことである。ここから、契約を更新し同一の小作あるいは折半小作を保持する習慣が生ずるのである。農民にとっては、全く経営に関与しない<sup>プロプリエテール</sup>土地所有者は主人ではなく、<sup>パトロン</sup>所有者でもないが、むしろいまだ多少とも領主なのである。工業のように、労働者とその作業道具との分離は存在しない。

(1) ■原著 25 頁■

しかしながら農民の諸種のカテゴリーについてこのように定義された権利状態は彼らの真の傾向を十分に表わすにはほど遠いものである。中間的な土地所有者のところ定期的に雇われる僅かな数の農業労働者が工業労働者の状況と自らの状況の類似性についての共通意識を持つことは不可能であること、彼らが自らを労働者としてよりも一層農民と感じていること、このことは可能性もあり蓋然性もあることである。しかし彼らがブドウの収穫あるいは甜菜の収穫の時期に、誰か他人の重要な所有地で一時的に働くために、時にはかなり遠い地方から一団をなして到着する場合に、彼らにとって最も明瞭になることは、彼らがただ通過するだけであり、そこで一定量の労働を一定全額と引き替えに売り渡すところの畑に対して、全く何の所有権も持たないということではないか。さて我々がここで



関心を持つのはこのような場合のみである。なぜならそうでない場合には、いかなる集合的傾向も現われては来ないからである。

ある時は都市へ、ある時は田舎へ働きに行く労働者は同時に二つの階級に属することは不可能である、と主張することは、この二つの階級が存在していること、しかも十分に識別可能であること、を認めることを意味するものであるが、この点こそが問題のすべてである。ところで、土地所有者、小作及び折半小作が、自ら経営する土地に対する所有権であれ、あるいはその権利の外見であれ、それを行使すること、ただそのことによって彼らは一つの階級というものを構成するのであろうか。——所有権がここで意味を持つのは、それぞれの保持者に一定の経済的独立性を与える限りにおいてである。土地の生産物を直接に消費する一家族が生きていけるような土地所有は経済的独立性を与える。しかし、一般に農民の小土地所有はこのような経済的独立性を与える。しかし、一般に農民の小土地所有はこのような経済的独立性を与えるものではない。小農民は売るために生産することを余儀なくせられて、農産物市場に従属している。農産物の価値、したがって彼の土地の価値は農業生産総体と密接に関係しており、その変動を反映する。ここでもまたありきたりの考え方はとらずに、土地はそこに用いられる「人間活動の延長」の如きものであると、いったことを忘れ、農民は長い間土地によって生活し土地の上で生きてき、■その土地に■多分に縛り付けられてきたといったことを知らないことにしよう。それこそが孤立と個人主義の原理であり、これは階級意識を基礎づけることはできない。土地は実際生産の「道具」であり、我々が関心を持つのはこの道具に対する農民の態度である。ところで、農民が労働の「道具」を所有しているということ、このことは何の意味も持たないか、あるいは次のように解されるのかのいずれかである。つまり、農民は自然的な経済諸力の作用によって土地所有を剥奪されるということはあるにない、彼は土地を所有し、それを利用し、自らの労働によって生き続けることができ<sup>(1)</sup>、したがって費用を埋めることのできる価格でその農産物を確実に売り捌くことができる、というのである。

- (1) プルードンも利率の引き下げに脅かされている 5%地代の土地所有者に関して同じように考えている。「国家は、正当な違約金を取る場合を除いて、1 エーカーの畑もブドウ畑の一片も犠牲として要求することはできない。ましてや、小作料を引き下げる権利は持っていない。国家は利率を引き下げる権利をいかにして持ち得るであろうか。この権利が正当に行なわれるためには、貸手が別のところで同じような利率を確保し得る投資先を見つけることができなければならない」。そうでない場合には貸手は外見上所有者であるにすぎない。(『財産とはなにか』 Qu'est-ce que la propriété? パリ、1841 年、p.46)

この点に関する状況が好都合である限りにおいて、それが長く続き、農民がそれが変化するいわれを何も感じない時には、彼は実際に安全と独立の感じを持つであろう。生産の流れは消費者の欲求の規則性と同じく、依拠し得る恒常的な法則によって決定されているように思われる。人が恐れるのは自然の厄災のみであるが、これは辛抱よく甘受される

ものである。——しかし今日においては事態はもはやこういう風ではない。一方で生産が突如として増加することがありえる。その際土地所有小農民は穀物価格が競争の重圧の下に下がる事態に遭遇する。他方では、自然の欲求に人為的な欲求が取って代わることがあり得るが、これは計算に入れ得るほど確実ではない。この二つの場合、販路についての心配が全面に出て来る。農民群が絶えず気にかけているのはもはや彼らが労働手段に従属することではなく、他の集団、商人とか工業家とかに対する自らの従属である。シャンパーニュやロレーヌの小土地所有農民は穀物商に対してもはや、かつての独立の織工がラシャ商人に対したようには振舞えない。独立の織物工は一定の価格で生産物を正当に売ることには自信を持っている生産者として落ち着いた確信を有しており、他方小土地所有農民は、既製服店の代理人が決める報酬を予め諦めて甘受する、自宅作業の仕立職人の如くである。ピカルディーの小土地所有農民は工業用植物を栽培している。この地方では他のどんな栽培も小土地所有では生きていくことあるいは身を立てていくことが不可能である。彼らの独立性はそれ故全く形式的である。むしろ彼らは、自分たちの生産物のすべてを投入する大工業の一部門を成しており、彼らの生存はその生産物の運命と寿命とに拘束されている。彼らと、織物工のために自分の羊から剪毛した羊毛を加工する田舎の梳毛工や紡績工との唯一の差異は、彼らの生産物の準備過程がそれほど長くない点である。剪毛工や紡績工と同じく彼らも、分散してはいるが、彼らの生産物が入っていく工場に集められている工業労働者と同じく経済的総体の一部を成している。そして彼らの畑も、工業労働者の労働と同じく、機械が止まる日から無価値物件となるであろう。工業及び商業の進歩の効果は、もし我々がプロレタリアという言葉で工業労働者を理解するとすれば、農民を「プロレタリア化」することでないことは疑いない。そうではなくて、彼らの土地の価値を不確かに変わりやすいものと意識させることによって、彼らを土地から切り離すことである。土地所有はその場合もはや彼らの集団意識における支配的かつ弁別的な表象ではない。

小作と折半小作については、彼らの状況の中に本質的な特徴を認めることはより困難である。彼らの状況からすれば、彼らを工業の給金生活者あるいは労働者一般から区別するものは全くないか、あるいは形式のみである。彼らはその主人から貨幣の形では報酬を受け取らず、彼らの収入は、彼らが市場で売る自然生産物から、すなわち、その生産物の価格から地代を除いた価格、あるいはこの価格の半分ないしはある割合の価格から成り立っている。こうした事情から彼らが小土地所有者に接近していることは疑いない。価格が下がること、あるいは価格から土地所有者のために従来よりも大きな部分を差し引かなければならないこと、これらは同じことではないか。耕作者が彼の生産の一定部分を所有者のために放棄しなければならないこと、あるいは商人から同じ生産物について以前より低い価格を受け入れなければならないこと、地代が上がること、あるいは生産物の価格が下がること、これら二つの場合に耕作者は、彼の財産あるいは経営している畑の価格、彼にとってのそれらの価値が彼にとって外的な、彼の仕事とは何ら関係のない作用によって変動することを知るようになる。このことはしかしながら、小作人の状況が一層従属的になる恐れがあること、高い地代を維持する所有者と非常に低い価格でしか生産物を買ってくれ

ない商人との間で押しつぶされる可能性があること、を必ずしも意味しない。生産物価格の下落は土地貸借の更新の際に地代の低下を結果するであろう。土地の所有者としては、小作が土地を消耗させ切らずにむしろそれを改良する気になるようにするためには、彼から余り搾り取らないことに利益を有するであろう。そうしないと土地所有者はもはや小作を見つけることができないであろう。アイルランドの場合、そこでは土地所有者の無理な要求にも関わらず多数の住民が他の手段を持たず搾取を受け入れなければならなかったのであるが、これは例外的である。一般にはむしろ、小作は小土地所有者と同等くらいの立場にある。なぜなら小作制度は十分に肥沃な土地にのみ適合するのであり、小作人は人よりも進んでいなければならず、重要な技術的知識を有していなければならぬからである。しかし彼の収入は、小土地所有者のそれと同じく、常に農産物価格の推移にまずは依存している。

民法典はすでにして次のことを規定している。すなわち、もし賃貸借の継続期間中に収穫のすべてあるいは少なくとも半分が偶然的不可抗力によって奪われた場合には、小作人はその借料の減免を要求することができる、というのである。しかし農産物価格の連続的な下落は偶然的な事故ではない。この種の下落の場合には小作人はその損失に正確に見合った部分を土地所有者に猶予してもらうことなどとても不可能である。そして価格が騰貴するこれとは逆の場合には、地代の引き上げはすぐには起らず、この増分から最初にそして最も多く儲けるのは小作農民である。したがって次のことが理解される。つまり、小作人にとっても（農産物の価格が余り安定していない時期には）販売の先占が切実な課題となり、彼は土地の主人に対する部分的独立よりもむしろ市場への緊密な従属をより痛切に感ずるということである。

我々の研究を十分複雑にするのは、法的身分の違いに富の不平等が重ね合わされることである。ここから次のような逆説的な結果が生ずる。すなわち、18世紀英国においては、エンクロージャーの翌日には、大地主の土地を借りていた小作人たちは郷紳や農村貴族よりも富裕であり、いわんや前代のヨーマンや平均的地主よりは富裕であった。実際最良の土地だけが耕やされていたのであり、残りは草原<sup>プレーリー</sup>に変えられていた。今日のフランスには（シャラント等に）暮しの楽な土地所有者が確かに存在し、ノルマンディーの小作農民と同じ程度に暮しが楽である。他方ノルマンディーの小作農民たちはシャンパーニュあるいはロレーヌの小土地所有農民よりも裕福である。彼らは一定の地代を払って地主に対して法律的には従属しているけれども、工業労働者とは小土地所有農民とよりも一層異なっているように思われ、他方、農産物価格が低下する時期には農産物商人の意のままにならざるをえない多くの小土地所有農民よりもより自由に経営することが可能である。

こうした条件の不平等性と逆説は土地の多様性と耕作に関わる種々の必要性とによって説明される。我々は恐らく次のように考え過ぎなのであろう。つまり、多様な農業経営は相互に特にその面積によって区別されると考え、そしてこの面積の違いそのものは、歴史的状況、伝統によって、人々の分類と分割を決定する偶然によって、説明するのである。現実には、農業がより合理的になるにつれて、また資本主義的企業の一つになるにつれて、

農村法制は土地の豊かさの不平等と多様な使い方とをますますよく反映している。土壤が非常に貧しいところでは、小土地所有農民はその粘り強い労働によって生活するに足りるだけのものを生産するが、それ以上ではない。土地がもっと豊かなところでは、そして十分に細分されている場合には、土地所有農民はこれらに加えてさらに直接的に経営することも可能であろうことは疑いない。しかし彼は裕福になったあかつきには、最初の土地を耕やし続けながら、小作させるための新しい土地を購入するか、あるいは彼ないしはその子どもたちは耕作を放棄して小作料で満足するか、するであろう。(ノルマンディーのような)別の所では、確実な投資先を探している資本家が小作させるための土地を購入するであろう。こうした土地はいずれにしてもますます賃貸されるであろう。いくつかの土地が地続きで一つになっているようなところ、監視と集中が容易なところでは、管理人が小作人に代るであろう。土地がもう少しやせていて住民が後れているところでは、経験豊かな、そして予めその土地を使いこなしていた耕作人を見つけたとしても、折半小作の方が適当であろう。

したがって小作人の状況は次の二つの要因の作用によって変動する。一、土壤の肥沃度に比例して。餓死者が出、その土地がもはや養うことのできない小土地所有農民、あるいは最も悲惨な労働者の水準にあるアイルランドの小小作人から、ゆったりと生活するに足りる収入を土地から引き出し、自身土地を購入する大小作人に至るまで、多数の中間状態が存在する。しかし裕福な小作人はそれにも関わらずやはり小作人であって、彼の豊かさは次の事実の認識を妨げるものではない。つまり、彼が経営している土地は彼のものではないという事実である。なぜなら彼はそれを売却することも遺贈することもできず、完全な確信を持って貸借の更新を期待することさえできないからである。彼を織物工と比較することはできない。織物工に対してラシャ商人は一定額と交換で織機を貸与し羊毛を渡し、ついで彼からラシャを購入するのである。何か別のことにかまけて、仕事の企画を自分の労働者に任せ、彼らを監督することも、彼らに監督させることもできず、彼らに任せきり、ただ生産物の平均的な一定量あるいは一定全額を要求するだけの<sup>アンデュストリエル</sup>業者を想像する方がよいだろう。(馬車を馭者に貸与している馬車の所有者の場合)。それ故我々は<sup>アンデュストリー</sup>産業界の中に、小作の地主に対する上記のような関係の例を見ることができる<sup>(1)</sup>。小作人は単なる<sup>ロカニール</sup>賃借人以上のものであり、しかも彼はこのことを地主が彼小作人の財産に関心を持っているだけに一層自覚している。これは実際は第二の要因であり、ここでは区別しなければならない。

- (1) 法律では農地の賃貸借は物件の賃貸借とみなされており、労働契約とはみなされていないことは本当である。しかし現実には小作人を、店舗あるいは仕事場の賃借人と比較することは可能であろうか。賃借人は賃借人に対して一定の仕事の実行を何も課さないのに対し、「農村の<sup>エリタージェ</sup>相続財産の借受け人」は「その経営に必要な家畜や用具に装備を施ささねばならないのみならず、さらに「耕作を放棄しては」ならず、「善良な家父の注意をもって耕作し」なければならない、「貸与された物件を定められた用途以外に用いては」ならない。さらに、地主と小作人との間には、我々が見た

ように、収穫つまり生産物の少なくとも半分を破壊するような偶然的事故の場合には、連帯関係が存在している。

二. 小作に当てられた土地の所有者は、その土地を訪れる頻度の大小によって、小麦や家畜の価格に通じている度合によって、そして小作人を自ら監督する、あるいは監督させる度合によって、自分自身のための購買力などの高低を決めることができる。小作人は主人の目を離れてだらだらと働くか、あるいは大いに働くとすればその正確な収入総額を入念に隠すか。しかしきちんと監督されていない労働者の場合も同様であって、彼らは緩慢にだらだらと生産するか、あるいは労働時間の一部を自分自身のために用いるか。逆に、地主が注意深く、自身で小作地の傍に陣どって直接に経営する場合、また他方小作候補者に事欠かない場合には、小作人の独立性なるものは全く幻想であろう。小作人の労働と利益に対しては工場の職工長や監督者のそれと同じように厳しい統制が行使されるであろう。我々は次のように予見することさえできる。すなわち、農業技術が改良される度合に応じて、そして資本が投下される度合に応じて、要するに農業が工業化される度合に応じて、小作人の状況は工業労働者のそれに接近し、地代を超える収入のゆとり部分は工業における給与と同じ正確さと厳格さでもって決定されるであろう。しかし今後は小作人たちはしばしば自分たちが常に地主に従属していることを理解し、ますますその度合を強めることを理解するであろう。これは、地主に対する小作人の関係が、雇傭者に対する給与生活者の関係と本質において異なるものとは、彼にとって思えなくなることを意味する。——小土地所有農民の法的身分におけると同じく小作人のそれの中にも、我々は労働者階級と農民階級の間に対立さらに区別さえも、その重要な根拠を見出すことができないであろう。

しかしながら、土地の所有者としての農民は越えることのできない障壁によって労働者から隔てられているという観念は余りに広く流布しており、また余りに多くの事実によって支えられており、さらにこのような観念と闘った人々はといえば余りに性急な一般化に陥っており、この問題をさらに詳細に検討する必要がないとは言えない。——いくつかの地方における、そして特に危機の時代における小土地所有農民や小作人たちは別の（工業的、商業的）経済主体に自覚的に深く従属していること、他方、工業化された集約的農業の国では小作人は高度の熟練工と同じく多少とも近接して監視され、そして恐らく十分な報酬を得ているであろうが、しかし所有権もその外見も有していないこと、このことを我々は認めなければならないであろう。しかし、自分自身で経営し、危機を乗り切り、商人に対して頭を下げないだけの十分な資源手段を持っている一定数の地主たち、彼らははるかに緩い形ではあるが市場に従属していないであろうか。他方、余り監視されずまたその収入もよくは知られておらず、自分自身のために経営しているという感覚を実際に持っている小作人のタイプ、こうした観念はいまだに非常に広く流布していないだろうか。このカテゴリーが最も重要なものでもなく、農民階級の意識を最もよく代表するものでもなく、またその意識に作用するものでもないということ、これを我々に証明するものは何

であろうか。この点に関して統計は十分な指標をもたらしていない。しかし、この種の経営の数は特に知らなければならないものではない。このような経営は、農村的性格が特に顕著な地方においてのみ優越していることによって、またその古さと安定性によって、他の形の経営よりも数が少ないだろうか。そしてまたこのような経営は、農民の評価としては、まだ余り強固に固まっていない他の種類の経営——その事例は依然として兆候あるいは変形体にとどまっている——がその周囲をめぐっているタイプの経営ではないか。ダニエル・ゾーラ氏<sup>(1)</sup>は、英国の旅行家アーサー・ヤングが書いたものに現れているような、ベアルンの農民小土地所有の牧歌的描写を丹念に集めている。「至る所で人々は清潔、幸福、安楽の雰囲気を呼吸している。その雰囲気は家屋の中、新しく立てられた家畜小屋、小さな庭、囲いの中、住宅の前の中庭から、家禽のための大籠や豚小屋に至るまで行き渡っている。……このことだけでも次のことを証明するに十分である。すなわち、土地の所有こそが苦しく休みのない労働への最も効果的な刺激であるということである。そしてこの原理の広がりとは強さは非常なものであるので、山々の頂上部分を開発活用するための方策として、それらを農民の間に分配するに優るより確実な方法を私は知らない」。もし農民所有の効能がこれほどのものであるとすれば、また他方、この効能が消滅するどころ強化され<sup>(2)</sup>、より多数の人々がそれを共にすることが確認されるとすれば、農村的人口と工業的人口との間で差異が強まると予想してはならないか。

(1) Daniel Zolla, livre cité.

(2) 「農業の領域においては、大工業は、農民すなわち旧社会の城壁を消滅させ、代わって給与生活者を置くという意味において、他のどの分野におけるよりも革命的に作用する」というマルクスの命題を批判してブルガン氏は次の事実を指摘している。すなわち、フランスの農業労働人口は、給与生活者が 39 万 4000 人減少する間に (345 万 2000 人から 305 万 8000 人に減少)、独立経営者は 346 万人から 360 万 4000 人に増加して 14 万 4000 人増えた。ドイツにおいても同じ現象がある (最もドイツにおける独立経営者の数は依然として給与生活者に比べて著しく少なく、二分の一以下であるが)。ハンガリーにおいては独立経営者の比率は 66.6%であり、デンマークでは 83.7%である。(Le collectivisme et l'évolution industrielle, p.218, note.)

しかし <sup>プロプリエテ・ペザンヌ</sup> 農民所有 という概念は依然として曖昧なままである。保守主義者の多くが考えるように、土地所有農民は自らの労働を合体させるところの土地に結びつけられているが故により一層の熱意と楽しみを持って働くというのは本当のことであろうか。このようなものの見方はまさしく感傷的である。むしろあり得るのは、農民は土地こそが働くための、また自らの努力の産物を引き出すための唯一の契機なるが故に、土地を愛するということである。もし彼が並外れた頑強さと精力を示すとすれば、それは彼が多量の困難を僅少の手段でもって克服しなければならないからであり、ともかくも切り抜けることが生死の問題だからである。最後に、もし彼がその期待し得る報酬に対して自らの活動をつり合わせないとすれば、それは彼が相対的に孤立しているからであり、比較的少ない欲求と要求し

か持たないからである。彼の欲求と要求が小さいのは彼の中では、社会的性質を帯びたものがすべて限界まで縮小されているからである。しかしもし所有なるものが、孤立や低い生活水準といった極端な必然性が存在する場合には、このような結果をもたらすとしても、次のことは全く証明されえない。すなわち、かなり肥沃な土地で十分に自らの生計を立てている土地所有農民は所有者なるが故に、利益に関心のある小作人や日雇農夫の場合よりもよく働くということ、またそのことの結果として彼らは自らの労働によって小作人や日雇農民よりもよく稼ぐということも、全く証明されえないのである。

これは何人かの社会主義者が彼らの観点からして明らかに見ることのできなかつた点である。彼ら社会主義者は小土地所有農民のみを労働者と同一化し得るものとして受け入れる。小土地所有農民はその土地から辛うじてつぶれないだけのものを引き出すのである。この場合「小さな畑は農民の道具（我々としては道具の一つ）」であり、鉋が指物師の道具であり、メスが外科医の道具であるのと同じである。農民、指物師、そして外科医はその労働用具によって誰も搾取するわけではなく、社会主義革命によってそれを奪取されるのを恐れる必要はない<sup>(1)</sup>。平均的な土地所有農民だけは労働者階級から排除される。彼らが経済的進化によってふるい落されるまではそういうことである。——しかしこれは理論的分類に余りに大きな重要性を付与することであり、また彼ら労働者階級が社会意識において必然的に持つわけではない現実感を理論的分類に対して与えることである。労働者階級の中にも同じようにある工業部門における人手不足や例外的な繁栄によって儲ける者があり、さらに熟練度の高い者は高い給与を獲得する場合があるが、彼らは前述の階級から除外されるべきであろうか。平均的土地所有者と小土地所有者の間では差異は同一のオーダーにある。さらに、きわめて少数の補助的人員を、それも一時的にのみ使用して、労働者と同じように作業する小さな親方、これは労働者と見做すべきか否か。彼をカテゴリー上除外することは疑いもなく全く恣意的であろう。それ故ここで重要なのは、抽象的に考えられた、彼の相対的独立性ではない。このことは、農民として作業し、何人かの日傭い農民と臨時の作男などを雇う土地所有農民についても同じことである。

(1) ラファエルグ 『農民的土地所有と経済的進化』

#### 四. 都市生活と農村生活

我々はこれまで、農民的性格と労働者的性格とを併せ持つ中間的ないしは混合的タイプについて検討することを避けてきた。彼らが一方から他方へとゆっくりと移行することを示すのは余りに容易であったろう。実際まさに彼らが例外であるが故にこそ、我々は最初からそれに注意することはできないのである。それにも関わらず彼らは非常に興味ある対象である。彼らが偶然に、しかし一定の形で結びつく階級ないしは集団の構成員と彼らとを比較すると、我々は、異なる部分が如何様であれ、ともかく彼らに共通の表象ないしは習慣の総体を、純粹状態でつかまえる可能性がある。特に、彼らが労働者階級と農民集団

に同時に属することはできないこと、このことはこれら二つが互いに異なること以上に顕著な特徴であり、これは彼らを分離する原理についての手がかりを与えるものであることは確実である。

まず第一に、実際少数ではあるが、農業を営む人々で、労働者や職人や小商人が特に含まれている<sup>アグロメーション</sup>大都市圏の内部あるいは周辺で生活している人々がいる。我々はここでは、地代を大都市で使ってしまう地主については論じない。しかし、庭師や多数の農業労働者が都市近辺で仕事をしており、そこに住居をもち、郊外で野菜作りに従事しているのである。

このように移り住んだ<sup>アグリキュルトゥール</sup>農業経営者が都市の影響を免れ、沿革の村で彼らと同じ仕事をしている人々と何らかの強靱な連帯感によって結ばれたままでは思われぬ。彼らの仕事と都市住民の欲求との関係は、彼らにとって直接的にはっきりと現われてくる。他方彼らが自らの収入を出費するのは都市においてである。彼らが自らを、労働者や同じように数は少ないが必要な職人と同じ理由で、都市の欠くべからざる機構の一部と見做すことは容易なことである。ことに彼らの収入は田舎の農民のそれよりも高いので、彼らの生活水準や欲求は彼らが全く混じり合っている労働者のそれらと異なるところはない。彼らの他に、一年のうちの何か月かを田舎へ移住するいくつかの労働者集団がある。彼らはその生まれと労働の苛酷さによって相互に似ており粗野でもあり、都会の中で農民的習慣と心性を保ち続ける。多くの土方は大部屋の寝台に満足し、昼には吹きさらしの中で粗野な食物を食する。彼らは大都市圏の中にまで田舎の農民の生活条件を具現するのである。都会を基盤とする農業経営者たちは、都市の有機的生活を分担しているが故により深く「都市化」されている。

同様に、しかし逆方向の話ではあるが、村には<sup>アルティザン</sup>職人が存在する。住民が余り一箇所に寄せ集められておらず家屋が散在している地方では、鐘楼や村役場のまわりに、みながある間隔で必要とする商人や<sup>ウヅリエ</sup>職人を集めることが村の唯一の存在理由でさえある。しかし、こうした村々がとるに足らぬ大きさのままで農業的性格を保持している限りにおいては、そこに住んでいる蹄鉄工、指物師、石工と、彼らに直接仕事を依頼する農民たちとの間には、前者と都会に集められている同じ仕事の<sup>ウヅリエ</sup>職人たちとの間よりも、より多くの関係、感情や習慣のより現実的な共通性が存在しはしないか。農民と彼らとの意差は非常に僅かなものであり、こうした<sup>ウヅリエ</sup>職人たちは大抵の場合同時に耕作者でもあり、小さな土地を耕やし、必要な場合には農作業に専念しもする。彼らは当然のことながら専門化の度合はきわめて低い。蹄鉄工は同じように鍛冶屋や金具細工もやり、指物師は同じく大工仕事も装飾品作りもやるのである。彼らの生活水準と同じく彼らの労賃も都合におけるよりは低いものである。ありきたりの普通の依頼人の他に、難しい要求はないからである。

<sup>ウヅリエ</sup>労働者集団と農民集団との間の境界を最もよく指示するためにはそれ故、彼らが作り出し、生活し住んでいる<sup>アグロメーション</sup>都市圏混住地帯に注意を集中しなければならない。彼らの間の相違は、都会と村、都市生活と田舎の生活との間に存続している相違に帰着するであろう。

しかしながらこのような対比には不正確なところが残っている。それは生活水準の差異を明らかにするであろうか。しかし<sup>トラヴァニエール</sup>賃金労働者の一カテゴリーによって要求され獲得され



る給与額、したがって彼らが満足させることのできる欲求の量と種類、は農民集団内部におけるのと同様労働者階級内部において彼らを再分類するのに特に役立つであろう。労働者階級と農民集団とをただ識別するためだけでも■右■のような対比に満足することは容易ではない。このような計算の極端な複雑さと不明瞭さについては目をつむることにしよう。ある生活水準が別の生活水準よりも優れているとする場合、それは何によってであるか。尺度の統一性は何であろうか。人は多分労働者の生活水準を、社会的欲求が他の欲求に対して優越していることによって特徴づけるであろう。しかしそれは都会の生活が生長させる同種の諸欲求のうちの単なる一カテゴリーではないか。そして農民の内部では別の種類の社会的欲求がより強烈に表われないであろうか。それならば二つの階級の中の異なる対象に注目するための原理を見出すことが必要であろう。ところでこの原理に到達し得るとすれば、それは収入ないしは支出の数字に満足するのでは足りない。しばしば収入ないし支出は農民のある種のカテゴリーにおける方が労働者のある種の集団におけるよりも高額であり、そして他の比較ではその逆である。ここからどのような結論を引き出せるであろうか。要するに、一階級の内部においていくつかの集団の社会的地位が彼らの収入の単なる数字によって決せられることもあり得るということである（同じくそれが全然そうでないこともあり得る。またむしろ彼らの収入の使い方を考察しなければならない場合もあり、あるいは収入と用途を結びつけて考えなければならない場合もある）。しかし、農民と労働者という二つの集団の分離を説明するのは、仮に富の差を知ることができるとしても、そうした富の差ではない。

農民の生活の細部に立ち至り、彼らの動産や衣裳の目録を作り、食事を記述し、これらの事実によって社会的なものを個人的なものから識別し、階級全体に共通する特徴を地域的多様性から分離すること、こうしたことは必要ではない。農民の生活条件の中には、どちらかといえば単純で等質的ないくつかの特徴があり、それらは彼らの生存の厳格かつ恒常的な物質的基礎をなすが故に絶えず彼らの考えていることに現われ、客観的であり、そして彼らの関係のすべてを支配するが故に社会的である。それは彼らの集団化、<sup>エタプリスマン</sup>機関設置、居住、の様式である。

これらは農民の生活全体に対して最も持続的で抵抗不可能な作用を及ぼすものではないか。これらはまた農民の家族（<sup>ドメスティク</sup>使用人や両親）の者たちとの関係、彼と同じ仕事をする者たちその他との関係、こうした関係の頻度、便利さ、緊密さを決定するものではないか。仕事と家庭生活とをはっきりと切り離したいという、彼を感じる、あるいは感じないかもしれないが、そうした欲求が表われてくるのもこれらによってである。そして最後にこれは、農民の独立性の程度——土地に対する関係においてではなく、土地の上に樹立された集団に対する、そして彼が包含されている集合的経営に対する関係における——を最もよく示すものである。

一．都会生活はますます、きわめて稠密な人間諸集団の真ん中での生存から成り立ち、他方村では家々は非常に分散している。ここではこれは単なる程度の違いではない。大都会から離れる時我々は郊外の田舎が始まる境界を確定することができるし、こうした地域

を1キロメートル毎の人口密度で比較すると、小さな町々、小さくともともかくも町であるところから、たとえそれらがどれほど広大であろうとも全くの田舎へと、全くあるいはほとんど過渡段階なしに移ってしまう。このことは次のように説明される。すなわち、小さな庭が隣にあるにはあるが、但し添え物としてのみあるような家屋群から、もっぱら牧場と畑のための、その真ん中あるいは近くに住居が建てられている、農地群へと移行するのである。

さらに田舎の家屋は非常に様々な形で配置されている。それらは時に街道沿いに一定の長さで一列に並んでおり、中の細い道には行き止まりがある（ミューズのように）。あるいはそれらは極端に分離し相互に離れている（フランドル、低地ブルターニュ）。土地が非常に細かく分割されているか、あるいは地続きのいくつかの広大な地主所有地に分けられているかによって、前者の場合には所有者がおよそ中心点からいろいろの小農地を客易に訪れることができるように家々はかたまり、後者の場合には建物がそれぞれの土地の中心にあって分散している。後者は土地が細分されていない小土地所有の地方であるプロヴァンスやタルネガロンタの場合であり、さらにはバスク地方の場合である。バスク地方では民法にも関わらず所有地は最小限度しか分割されていない村の中心部分にあるのは教会、いくつかの小料理屋兼旅館、小さな商店、そして学校の建物だけである。そしてフランドル地方のフランスに属する部分も分散型である。全く逆の理由によって、次のいくつかの地方では事態が逆、つまり集中型である。カンブレシス、ピカルディーの一部分、シャンパーニュでは所有地は（シャンパーニュのブリーを除いて）特に切り分けられている。ミューズ、ヴォージュの平野では地続きの地所は例外的である。ボースやロワールでも事態は逆、すなわち集中型である。状況を説明するのに別種の理由を援用することもできる。山岳地帯サヴォカでは、家々は分散する傾向にある。土地がやせていて各家族が生活するために広い地所を必要とするからである。低地ブルターニュでも事情は同じである。サヴォアの平野部では家々は大きな街道沿いに集中する傾向がある。これは雪がしばしば通信をと絶させ、道だけが障害を除去されているからである。

ところで家々の分散の本質的な結果が、分散による農民の相対的孤立であるとするならば、この孤立についてその程度というものを認めなければならないであろう。広大な地所の中で大地の起伏の中に消えてゆく農地と厳密な意味での村との間の差異は、後者と、空間が余り管理されていない小さな町との間の差異と同じ程度に深いものであろう。それにしても道に面して軒が並んでいる田舎の道と、よくある例であるがそれをそのまま延長している都会の道とは、どのように区別するのであろうか。実際孤立は農民の性向の向かうところではない。孤立はむしろ農民にとって辛い状態であり、倦怠の原因である。もし教養ある人物が独居孤独の場を田舎に求め見出すとしても、農民はそれから逃れようと苦労しているのである。農民は都会の人々から切り離されて、労働者の場合よりも頻繁に、そして多分より親密に、その直接の隣人や家族と接触している。

田舎の家屋の相対的孤立以上に我々にとって印象的なことは、家々が配置される明瞭な秩序と組織の欠如、である。村の路地、街道の方向、建物の隔たり、道から遠く離れたと

ころにある家屋、これらはすべて偶然の結果のように見える。しかし全くそうしたことでないのは明らかである。しかし都会人にとっては家屋はそれ自体で用を足せる。それは事務所あるいは店舗を表していることもあり得るが、何よりもまず住居である。すなわち人の住むところである。そして都会の家屋は原理的にそれらの相互の行き来と連絡を容易ならしめる目的で、かなう限りの対称性と節約を持って配置されている。他方田舎の人にとっては家屋は何よりもまず経営の中心である。彼は家屋の場所あるいは方向を選定するに際して、すでに建てられているものあるいはこれから建てられるものを考慮する度合は、彼の持っている小農地あるいは土地を考慮するのに比べてはるかに小さい。かくして農村は非常に様々な必要と便宜とに対応する一連の建物から結果することになる。これらの建物は、必要が和合しているか衝突しているかにより、一方の便宜が他方の便宜でもあるか否かにより、並んでいたりいなかったり、調和していたりいなかったりすることになる。村の人たちは集まるべき多くの機会と利害を持っている。共有財産とか祝祭とかである。彼らは時に小農地の混在と建物の統一性のなさによって引き起こされる苦しみを防ぐための手段を講じようとする。とはいえ拘束条件は多い。しかし彼らは村を、彼らを支配し彼らが適応しなければならぬものと思ふとは異なる点である。都会人が家屋や住居について、それは受容しなければならぬものと思うとは異なる点である。田舎の家屋は大抵の場合、そこに住んでいる者の所有である。それはその両親から譲渡されたものである。田舎の家屋はその大きさ、その重要性によって、その所有者の財産の規模と価値とを最もよく表現するものである。とりわけ田舎の家屋の所有者は、その家屋を財産とは別のものとして考えるということはない。——したがってこのような集団における集団意識は他と比べはるかに拡散的である。坑夫町に住まわされている坑夫たちは彼らの家屋の所有者であるが、それにもかかわらず彼らは依然として非常に連帯的である。その理由は家々が隣り合っており、一つの計画にそって建てられたものだからである。しかし農民の家屋は、たとえそれが隣家に接している場合でさえ彼の目には土地に結びついているものと映るので、家屋と結びついている土地が離れているその距離に応じて、隣家とも離されていることになる。隣の土地が彼の土地を制限し彼にとっては障壁であるのと同じように、隣の家屋は彼には閉ざされた領域、無縁の区域と思われる。こうした感情は堅く覆い隠されているけれども存在していないわけではないのである。このような感情の効果は、村の中に非有機的で無秩序な一側面を持たせ続けることであり、そこには農民の孤立とか独立とかではないにしても少なくとも農村集団における社会的紐帯の弛緩が表われてくる。

二. 農民の家屋の状況がこのように彼の財産の場所、細分されているか否か、によって決定されるだけではない。さらに、大抵の場合、農民家屋の内部的配置はその所有者の習慣的住居に依存する。ここにも田舎の生活が都会生活から最も明瞭に区別される特徴がある。都会では労働者の住居はほとんど常に仕事場から離れている（いくつかの例外についてはまた取り上げる）。労働者の住居に彼の器具、道具が見出されることは稀でさえあり、一見したところではそれが下層事務員のものであるか労働者のものであるか識別することはできないであろう。田舎では事態は全く違っている。

いくつかの極端なケース、消滅に瀕している生活形態の痕跡についてここで論ずることはしないでおこう。例えばここに高地アルプスの慎ましやかな農夫の家屋についての描写がある<sup>(1)</sup>。この家屋では迫持造りの通路を通して平土間に入る。彼は平土間のほとんど全体を占めている厩舎の傍らで作業する（主として牧畜で生活している住民は動物のためにすべてを犠牲にする）。台所はきわめて小さい。二階には夏の間宿泊する部屋が一つか二つある。もっと上には、十分に広く吹きさらしのバルコニーのある納屋と穀物倉がある。バルコニーには、非常に早く納屋に収納しなければならずしかも乾燥しなければならない穀物が置かれる。冬の間、十月の終りから四月の初めまでは、家族全員が動物と一緒に迫持造りの厩舎に住む。土をたたき固めた平間の隅にはテーブル、腰掛、椅子、そしていくらかの食器類の入った食器台、台所道具などがある。夜も昼も無煙炭のストーブが一つ燃えている。寝台の間には羊と山羊がおり、真ん中には仔牛がおり、少し離れた隅には豚がいる。——低地ブルターニュでは厩舎と家畜小屋は部屋あるいは居室と同じ棟にあるばかりでなく、今日でも内部に仕切りがあるとは限らない。たまに人の高さくらいの簡単なすのこがあるが、もっと多いのは通路用の戸口の付いた仕切りである。しばしば、簡単な掃除をした後で家畜小屋は居室に変わる。豚は単独の<sup>まぐさ</sup>秣おけをもっているが、多くの場所で彼らはどこへでも自由に行くことができる。——（高地マルタ）ラングル地方では厩舎は常に居室に通じている。戸口の傍らに寝台があり、動物を監視する家人か、家の子供がそこを占める。ブリ・シャンプノーズでは非常にしばしば家屋は家畜小屋に通じている。ヴォージュの平野部では、居室と、収穫や動物のための場所との間に仕切りはない。同じ屋根の下に住み、少なからぬ行き来交渉がある。家人はその中で寝る。女は台所の、昼間は閉められている一種の戸棚のようなところで寝、男は簡単な仕切りで動物と離れて厩舎で寝る。台所の地面はしばしば土と堆肥で覆われている。——動物と人間のこのような混淆は確かに至るところで見られるというわけではない。タルネガロンヌのプロヴァンスでは、厩舎は家屋に隣り合っているけれどもはっきりと分けられている。人は外側にある門を通してしか厩舎に入らない。ロワール、ニヴェルネ、そしてボースでも状況は同じである。高地モルヴァン地方（ニヴェルネとブルゴーニュの間の中間地方）は、部屋の隅に家畜小屋との通用戸口のある古い家屋と、ニヴェルネのようにこの通用戸口がもはや存在しない今日風の家屋とを持っている。少なくとも人々は家の中でしばしば様々な農産物、農器具に囲まれて生活している。例えばプロヴァンスの家の各部分はどうのように役割を配分されているだろうか。平土間には厩舎（ろばと山羊を容れており、<sup>ル</sup>車を置くところとして役立つ）と台所（食堂及び客間として役立つ）がある。二階には四つの戸口がある。一つは小麦袋、いちじく、メロン、オリーブのための物置として役立つ部屋に通じている。第二の部屋は、南面に窓があり部屋が明るくなっていて多くの家具が入っている。これは女たちの部屋である。第三の部屋はいろいろな袋や乾いた穀物などであふれており、これは主人の部屋である。第四は厩舎の上に位置し、<sup>まぐさ</sup>秣を置く屋根裏部屋であり、子供たちはそこで寝る。ローでは平土間は通常穴倉及び羊小屋としての役割を果たしている。人間は二階に住む。サヴォアの山岳地方の山小屋では平土間に家畜小屋があり、冬の貯えや道具類も置

かされている。そこには、持主が冬の間作業する際の小さな仕事場が工夫して設けられている。二階には料理用の竈と共に台所があり、人々は竈の周りに集まる。その周囲全体に寝るための部屋がある。屋根裏には籾がらや麦藁や稈が積み重ねられている。——地方的習慣、様々の文化とそれらの種々の結合によって課される必要性、さら土地の高度と日常の気温、これらによって説明される以上のような多様性全体を通じて常に認められるのは、家族の生活あるいは <sup>プロフェッション</sup> 職業 に関係する部屋、家具、生産物の間に明瞭な分離が欠如している点である。

- (1) 以下の描写は歴史的科学的著作委員会によって企画され、ドゥ・フォヴィュー (de Foville) 氏の ■肝入り■ で出版された『フランスにおける住宅条件に関するアンケート』(l'Enquête sur les conditions de l'habitation en France) から引いたものである。第一巻、1894年(売り切れ)、第二巻、1899年。それは多くの点について(例えば賃料等)資料的価値を著しく異にするが、我々が引いた純粋に記述的な情報は、考察の対象となった地方の住民から送られたものであり、正確度は全面的に保証できる。

住宅が経営のための建物と区別されている場合でも、前者は後者に従属している。時に不足することがあるのは場所である。もはや誰も納屋や家畜小屋で寝ることはないにしても、寝台が階段の下や部屋の片隅に置かれることはあるのである。ミューズでは動物と収穫物のためにすべてが犠牲にされている。厩舎、納屋、そしてアンテソワール(脱穀されていない小麦、オート麦の置場)が建物の少なくとも三分之一を占めている。各部屋は大きくはなく、それぞれにいくつかの寝台が置かれている。家人と子供は、両親が台所で寝るのに対し、分かれて寝ている。フィニステールでは1901年において<sup>(1)</sup>、6人、7人あるいは8人から構成される世帯の大多数(そしてより少数からなる世帯についてはさらに多数が)は、ただ一つの部屋に住まっている。——相応に大きな経営で空間にゆとりがある場合には、家屋の状況は納屋、厩舎、牧場の状況に依存する。例えばカンブレジスの家屋を特徴づけるものは、切妻部分が通りに面していて窓がないことである。家屋の入口と正面は庭に面している。肝要必須の建物である納屋は奥の方に建っている。家の主人が常時人間と動物を監督できることが重要なのである。同様にピカルディーの農家は<sup>(2)</sup>、内庭を囲んで完全に閉じた四辺形に並べられた一続きの建物からなっている。これらのうちの主要な部屋は納屋であって、正面向きの建物の全側面を占めている。住居用の家屋は建物全体に接合されている。それは納屋に面し、家畜小屋と厩舎に隣接していて、しばしば内部の一つの戸口によって通じている。

(1) ■原著 46■

(2) ■原著 46■

かくして仕事への配慮が田舎の生活全体を支配し生活全体に浸透している。これが恐ら

くは農民を、少なくとも農民家族それぞれを互いに分離させる最大のものであり、彼らの階級意識の全体的発展を阻害する最大のものであろう。一度工場を出た都会の労働者は工場のことは忘れることができるのに対して、彼らがいる街路、彼らの居室が配分されている家々はいわば有機的な枠組みであって、彼らはそこで相互に接近し、混じり合い融合する。しかし農民はこのように自分の仕事から逃れる感情を持たず、彼らの居住そのものが全く仕事によって浸透されているので、経営の分散と居住の分散とは同一の一般的事実の二つの側面である。もちろん、日雇労働者のあばら屋から、ちょっとした小屋敷風の外観を備え、例外的にのみ人が入る応接室を持つ模範農場に至るまでの間には多くの中間形態があるであろう。しかしある水準から別の水準に上昇したからといって生活様式が根本的に変わるというものではない。低地ブルターニュでは<sup>(1)</sup>、<sup>ド</sup>自有地<sup>マ</sup>農民を除いて、あらゆるカテゴリーの農民の生活水準はどちらかと言えば似通っているとされている。農民階級は明瞭に都会の住人から区別され得るけれども、この階級の内部には下位区分はほとんど存在しない。<sup>ベザン</sup>農民、<sup>プロプリエテール</sup>土地所有者、<sup>フェルミエ</sup>借地農民、<sup>ドメスティク</sup>作男たちは平等に暮しており、居住条件は互いにほとんど違わないといつてよい。度合は弱くなるがすべての地方で事情は同じようなことであろうと思われる。実際彼らが仕事をしている間、作業に没頭している時間には、彼らの社会的状況の違いについての自覚は最も小さく、互いに対決し比較し分類し合う可能性は最も小さい。ところで、仕事のための配慮は常に農民の念頭にある。これは農民の家屋が示していることである。そこでは住居は経営のための建物と区別されていない。これが農村集団において一つないしは複数の階級意識が都市住民と同じ程度に展開するのを阻むところの事情である。ある種の工業的職人の家では住まいと仕事場がしばしば融合するほどに結びついていることがあるのは本当である。

(1) ■原書 47■

絹織物工、いわゆるカニュ（リヨンの絹織物工のこと）が古くから住んでいるリヨンのクロク・ルスルの地区では、織機が住居の間取りと大きさを決める。人はすぐさま主要な部屋の高さに驚かされる。その部屋は同時に仕事場及び食堂として使われるものである。ジャカード機が組み立てられているのは織機の上である。ジャカード機が高ければ高いほど作業は容易になる。ジャカード機を取り付けるために天井はいくつかの桁によって分割され、その桁を、ジャカード機を滑らせるための導線としている。窓は一つの面にしか付けられていない。光線の具合によって物の見え方が変わるのを避けるためである。しかしこの窓そのものの数は多く、少なくとも二つはあり、三つが一般的であり、時には四つ、五つもあり、非常に大きなものである。部屋の大きさは織機の数によって変動する。部屋は間仕切り壁によって二つに分けられる。最も大きな場所は仕事場に残される。間仕切り壁と奥の壁の間の部分はさらに水平の仕切りによって上下二つに分けられる。台所はその下の部分に作られる。時に台所が仕事場に作られることがあるが、その場合には寝台が仕事場に置かれる。これが最も地味な世帯の場合である。上の部分には「<sup>ス</sup>屋根裏部屋<sup>ト</sup>」があり、

梯子で昇り、一人立ちしていない職人、徒弟、子供たちが眠るところとなる。世帯が比較的ゆとりがある場合には、さらに隣に全く長い部屋があり、そして窓の反対側に寝室用の凹みがある。疑いもなく以上は非常に特殊な例である。リヨンの工業は早い時期から地方的な性格をもっていた。そして山岳農民を通してリヨン人全体で行なわれている家内工業と結びついている。カニュ（リヨンの絹織物工——訳者）の階級は別の見方からすれば過渡的形態を代表しており、大工業の発展と共に消滅する傾向にある。但しこうした生活条件は独立の職人がいるところではどこでも表れる度合を異にする。労働者階級の中には歴然とした次のような部分が存在する。すなわち、二つの異なる場所が仕事の場と住み生活する場とを分かつた家庭生活がいまだ仕事の中にはまりこんでいるような一部の労働者である。それ故このような形は農民全体に固有の特徴ではなく、また農民をあえて工業労働者に対立せしめる特徴でもないであろう。工業生活の諸条件は初期には農民の生活諸条件を原型として形成されたこと、それ故その起源に非常に近いところにあるいくつかの仕事においてはいまだこの原初的血縁関係の痕跡がその進化にも関わらず見出されること、を仮に認めてもよい。しかしこのことは大したことはない。こうした職人たちは、推測的ではあるが、労働者階級の中に包含されており、それ故労働者階級と農民階級との過渡形態、中間的境界点とみなし得るであろう。

しかし農民の場合における、住居と、納屋とか仕事用の建物等とのつながりの緊密さは、職人の場合における仕事場と住居との接近とは全く別の価値を持っている。後者の場合は実際のところ偶然的であり付随的であるが、前者の場合は本質的である。職人の住む場所はその労働の性質自体によって、職人の仕事場と同じように、ほとんど決められていない。職人は、一方では顧客を考えて、駅、工場の近さによって、あるいは住居の安さによって、一定の地域、地区に居を構えることが利益になり得る。しかしこのことは彼に大きな行動の自由を与えもする。彼は一つの都市、一つの地区に結びつけられてはいない。彼には節約のために同じ場所で住み働くことが利益になり得る。しかし経営が大きくなるとすぐ、住居は仕事場と区別されそれから離れる傾向を持つ。そして作業の快適さはそのことによって減少するところではない。農民の場合には逆に生活するところに居を定めることはできず、彼の農地とほとんど接していなければならない。彼は、居を定める時、そして同一のところにとどまる限り、変化する可能性もある好みやしばしば一時的な状況から何かを思いつくことはできない。住居、経営のための建物、そして耕作の間のこのつながりはより一般的な一事実の表現に他ならない。これは土地への<sup>アタシュマン</sup>愛着という曖昧な言葉で呼ばれているが、いまこれを分析することは重要である。

三. フランスならフランスという一つの国 (pays) の中で農民が住んでいる書地方の極端な多様性、性格の相違及びそれと結びついている<sup>ビヤン・エトール</sup>幸福感の相違、まず第一に強い印象を与えるのはこのことである。このようにばらばらの諸集団全体にいかにして同一の名前をあて、これらを同一の階級に分類するのか、まことに疑わしい。しかしすべての集団が次の特徴によって互いに似ている。つまり、農民諸集団を彼らの国につなぎとめるきずな、である。農民 (paysan) という言葉が表わしているのはこれである。彼らは労働者と対比

的に、土地との直接的接触によって特徴づけられているというわけでもなく、自然の直接的作用を被るというわけでもない。ラッツェル (Ratzel) は土着の人 (autochtone) という言葉の意味の変容について次の点を主張している。すなわち、この言葉によって、一国の原初からの住民ではなく、そう信じている人々を理解すべきであるというのである。現在ある土地を占有している人間たちを引き寄せたものが土地それ自体では必ずしもないばかりでなく、大抵の場合、彼らが自然条件、地形、肥沃度等によって一定の土地に引き寄せられたということもありそうにないことである。

農民たちにあってはその習慣がよりよい土地戸より楽な作業を求めることを思いとどまらせているという事実を認めなければならない。「ヴォージュでは山岳地帯の凹凸部分に到るまで人々が入植している。彼らは森林を犠牲にして谷の低い山腹部分、日当たりの悪い斜面に自分たちの場所を作った。低地部分、比較的長く長い丘陵部分では、石の間にライ麦の、あるいはライ麦と小麦の混合播種が可能な限りにおいて、山岳農民の納屋や常住の住居が散在している。800メートル以上のところまでぎりぎり納屋が建てられている。ついで200ないし300メートルさらに高いところには藁葺きの家があり、夏の牧場がある」<sup>(1)</sup>。非常に古い時代(16世紀以前)からこれら山岳の住民たちは工業的手段と土地からの僅かの産物を結びつけてきた。彼らは森林を開いた。製材所や製紙用圧搾機は川の力を利用した。ガラス工は砂を用いた。織物工は一人何役をも兼ねていた。このような生活条件はごく普通のものである。したがってこれら山岳住民の非常に多くが人手を探していた近代工業の労働力として自らを提供した。しかし彼らのうちで、より肥沃で働き手に不足していた田舎に移住したものは非常に稀である。これはブルターニュの住民についても同じである。「ブルターニュの荒野、森、畑地、空き地は切り離すことのできない全体の中にはめ込まれており、人々はその記憶を持ち運んでいる」。泥だらけの小道の間に、また木々の下に消えてゆく農地の中に孤立しながらブルターニュ人はいま少し実りある自然を懇願する必要を感じない。彼らが自らの国を愛するのは貧困と開墾のために費やした努力とのためである、とすることは、ボース人の土地への愛着の理由としてボースの富を引き合いに出すのと同じく説明的ではない。実際にブルターニュ人もボース人も共に、といわけ彼らの習慣、自分たちの国における社会生活の特殊な形態に愛着しているのである。

(1) Vidal de la Blanche (Paul), *Tableau de la géographie de la France*, Paris, 1903. 以下の引用はこの著書からである。

このことは様々に異なる生活形態が、非常に近接している場合でも一方から他方へと浸透したりすることなくそれぞれ存続するのを見れば、なお一層注目し得る事柄となる。ボースとその隣の湿潤地とを比較されたい。「長い間ボースの農村には大きな経営が置かれ設立されてきたが、隣の地方は池が散在し霧に覆われた貧しい土地にすぎなかった。そこには惨めなマヌーヴリエと呼ばれる人々が住み着いているが、大抵の場合地代を支払う能力がない」。同じくトゥレーヌでは高原地帯の生活と山岳低地部の生活との間に大きな対照



が見られる。高原地帯では土地はしばしばやせており、荒廃地によって切り込まれている。「高原地帯の農民はすでにフランス西部地方の農民の特徴を数多く示しており、折半小作地の中に孤立し、温和の外見の下に迷信と不信猜疑の精神を養っている。逆に山岳低地部の山腹には都会的な生活と、特に村落的な生活がしっかりと根を張っている。ブドウを栽培する陽気で楽しい生活、これに比較すれば湿潤地帯と高原地帯の人々は哀れな人々と見える」。やせた土地ががれき、えにしだ、ブナあるいは柏といった雑木に覆われている地方ル・モルヴァン、寒冷の土地、狼の国は、一定の人口を持っているが、その実り少ない生活はその隣の「平原地方」の耕作農民やブドウ栽培の生活とは全く似ていない。ノルマンディー■は■対照する場合、豊かさにおいて劣るわけではない。豊かな借地農民が土地を利用している平原部と村の傍らでボカージュ・ノルマンの人々は荒壁あるいは■頁岩■の家屋を散在させている。そこの住民は小さな儲け口を工夫し案出し、小規模な耕作の資源と小さな工業の資源とを結合しなければならなかった。「特に昔はそこを流れている水の豊富さが小さな鍛冶屋を増加させた。水が圧縮機を動かしたり、皮革を仕込んだり、布地を漂白したりするのに役立たないような川はなく、仕事場の鼓動が失なわれているような村もなかった」。隣のゴー地方ではこれとは逆に豊かな農業が発展していた。果樹園に囲まれリンゴの樹の間に散開する農地には長い間多数の人口が集中していた。

このような事実関係について結局のところその原因は確定できない。不毛な地方の農民がより肥沃な土地へと移動するのを妨げるのは、肥沃な土地がすべて所有されてしまっているという事態によるのであろう。彼らは山の住民——彼らはその昔そこに押し込められたが故にそこにとどまっているのだとある人々は主張する——と比較されねばならないであろう。このような説明は次の事情によって一層信憑性を失なう。つまり、実際には多くの地方において「農業は人手不足である」こと、土地所有者は借地人を求め、借地人は作業者を求めていること、そして貧しい地方の小土地所有者は彼ら自身このような移住によって利益があるであろうこと、それにもかかわらず彼らはそうした所に移住することを拒否し、やむを得なければ工業労働者になることを選ぶ、こうした事情である。——彼らを引き止めるものはその不動産であろうか。固定資本の比率が大きいところではどこでも アンデストリー 業種 プロフェッション ないしは 職種 の変更は困難であり費用がかかるものである。恐らくは土地の値段が下がっているであろうその時点で土地を売却すること、これは小土地所有者がその前に立ちすくみ後ずさりするような問題である。もし彼らが別の分野で大きな利益を獲得する確信を有していた場合ならば、土地を売却することにすくんでしまうことはなかったであろう。さらにもしこのような場所の変更の深刻な必要性が発展していたならば、土地の動産化の何らかの実践の様式が構想され実現されなかったであろうか。しかしこのような必要性ははっきりとは指摘されず、小農民たちは自らの地方の土地の上で生き延びるために努力をただ倍化したのである。——多分むしろ他の地方における農業の条件についての彼らの無知、そして新しい道で粘り強く骨の折れる忍耐を敢行し自らを賭けるある種の能力の欠如、を指摘しなければならないであろう。

なお我々が関心を持つのはこのような不動性、永続性の原因ではなく、むしろそれから

結果するところの、そして労働者階級の中には見られない集合表象である。ところで、彼らがいかに多種多様であろうとも、彼らに共通しているのは、物質的生活条件と彼らの住む地方の自然との直接的関係という理想、つまりいってみれば、ある地方に対応し土地の属性のように比較的安定した、生活様式という理想であると思われる。自然と土地とはこの場合それぞれ単独には考えられず、それ自体として考えられることもない、とさえ言い得る。前面に出てくるのはその地方に住む集団の構成員を生産する通常の活動、純粹に農業的な活動、あるいは農業的でもあり工業的でもある活動、である。そして、人々が表象する生活様式は、この生産活動を簡単明瞭に測定し、最も理解しやすい言葉で表現するものである。

この生活様式という集合的概念に含まれており、労働者階級の表象には本性上どうしても合体しないと思われる二つの要素について考えよう。

まず第一に、もし我々が「<sup>くに</sup>国」(pays)という言葉から、それ自体で自足しなければならない統一体を思い浮かべるとしても、それは諸部分が相互に役立ち、養い合うような有機的全体として国を見るということではない。個人主義はここでは単に頂上にあるばかりではなく基礎にもある。疑いもなく、進んでいるいくつかの地方において連帯的組織の萌芽が見られる。ジュラ山脈の農業は人工的起源を有するものと思われる。そこには「中世時代、不可侵権によって植民者を引き寄せようとする教会あるいは領主の影響の下に、田園生活の興味深い一類型が誕生した」。共同放牧場の資源は草原と結びついている。しばしば800メートル以上の山の中に孤立し、冬の間は様々の産業(桶作り、貴材細工品、時計作り)に従事し、彼らは濃密な小社会を形成している。一般組合あるいはチーズ製造販売組合の業務のあり方が濃密な小社会と合うのである。いずれにしてもこのような連帯的組織は散発的で萌芽的である。ほとんど至るところで農夫の理想は自らの生産物で生活すること、自足すること、交換経済を犠牲にして家内生産を発展させること、にとどまっている。分業の欠如はいかにも通則であると思われる。都会ではこれは逆に例外である。都会では個人はほとんど常に他人のために生産し、必要な商品を他人から賄わなければならない。都会は、<sup>カルティエ</sup>地区と同じように、単に個々人が並存する統一体ではない。都市的集団編成の理由自体、都市に結びついている個々人は、単独では、必要を感じずすべての対象を作り出しえないということにある。——村々はともかくも同種の有機体である、と考えることもできない。ヴィダル・ド・ラ・ブランシュ氏はフランスの西部と東部とを対比して、農夫と村人という風に区別している。西部では農家は小農地、牧場、池、水溜りの間に散在しており、互いに孤立している。住民は祝祭日か市の日以外はほとんど会わず、雨の多い長い季節の間は互いに離れて生活している。「西部は(全体として)緊密な一つのかたまりであり、60キロメートル平方以上にわたって比較的一様な生活条件が支配している」。東部すなわちロレーヌ、ブルゴーニュ、シャンパーニュ、ピカルディーでは逆に農村住民は教会の鐘のまわりに寄せ集められている。「■いか■に視界が狭く外部の雑音が弱まって到着するにしても、村は影響の全般化を蒙りやすい一小社会をなしている」。しかしわれわれはすでに、一般に土地の細分化と水の不足によって説明され得るこのような密集した人口集団

が組織ではないこと、そして家屋が近接しているにしても人々は土地の共有部分に関係せず、連帯を促進するものを何も持たないその固有の利害と心配事によって切り離されたままであること、を見た。このことは別の点で集合的形態における意識と表象を発展させることを妨げるものではない。しかし彼らがこうして<sup>くは</sup>「<sup>くは</sup>」として集号的に表象するものは、相互にはっきりと区別され独立している個々人からなる一列であり、彼らの空間的接近は単に偶然的な統一性を表示するにすぎない。

彼らがこうした個々人をその習慣と生活様式によって同類と考えることは本当である。しかし、その結果として形成され得るのは単に「<sup>くは</sup>」という表象のみである。ボース地方は「そのきわめて純粋な観念は民衆の精神の中に存在している、土地の形式と生活の形式の表現」であると言われている。より正確にはそれは労働条件と生活様式との間の関係の表現である。ところでこの関係は労働者階級の意識の中にも反映される。反映されないということはありえない。しかしこの関係が同じ意味合いにおいて反映され同じように解釈されることはまさしく不可能であると思われる。農民にとっては彼の生活様式の水準を測定し、その種類を確定すべきは、直接的に、一定の条件下での彼の労働の生産性である。もし彼の働く土地が僅かしか生み出さなければ、あるいはさらに僅かしか生み出さなければ、彼らは自らの欲求を制限する、あるいは減少させるであろう。もしその土地がもっと多く、あるいは潤沢に生み出すならば、彼は欲求を発達させ欲求により多くの自由を与えるであろう。他面、収穫の悪い時に備えて、また経験によって土地の生産性が単に労働によって増大する度合はどちらかといえば微弱であることを経験上知っているので、彼は節約、用心、日常的節度を心掛けるようになるであろう。——労働者の場合にも同じことが言えるかどうかは疑わしい。ことに大工業の労働者は一般に、彼の労働の産物全体の価値がどれほどであるかということに関心を持たない。なぜなら大工業における労働が価値を持つのは他者による異なる性質の生産努力と結合することによってのみだからである。彼の生活水準は習慣によって、そして彼の経済的機能ではなく、工場の外の、彼が生活する社会的環境から恐らくは説明されるいくつかの作用因によって、決定されるように思われる。他方、彼がより一層働こうと、あるいはよりよい給与を得ようと、彼が受容したり、我慢したりする、あるいは抗議する条件を大体において決定するのは彼の習慣的な生活水準である。——しかし独立の職人は、彼が確定的で不変とみなし、その生活様式を適合させなければならぬ諸条件に基づいて出費を調整するであろうか。彼はまたその仕事の生産性について弾力性、不確定部分を有し、その結果、自らの努力と技巧によってそこからより多くの資源を引き出し自らの望む出費水準を予め決めることができないであろうか。ここでは労働条件は自然的であるよりも社会的である。すなわち土地と気候の性質に依存する度合が小さい。注文者の数、彼らの欲求の大きさ、競争等に従って仕事の生産性は上下するであろう。ところで人々は社会的条件に対して働きかけるものである。彼らは、仕事場を別の場所に移したり、ある仕事から別の仕事に移ったり、小さな工業から大工業に移ったりして、社会的条件に対して多少とも抜け目なく適応し、やむを得ない場合にはそれを変更する。

工業労働者たちはその状況の如何にかかわらず、農民よりも寄り集まって生活している。そして工場や仕事場の外では、また通りや家の中では仕事を離れて、社会生活を展開する。それ故彼らは、彼らが満足させたい欲求の質と限度とを集合表象の中に明確化できるようになる必要がある。このような表象はいったん形成されれば部分的にはあるが彼らの労働（と要求）の強度を説明するであろう。しかしこのような集合表象が農民大衆の胸の中に立ち現れることはありえない。彼らはその家屋の散在によって、また労働の際の技術的必要性によって、余りに孤立している。この事情は彼らの家庭生活と仕事のやり方とを相互に切り離しがたいものとする。さらに、このような障害がなくともこのような集合表象は、その効き目がないうままであるから、生命を保つことができないであろう。ブルターニュあるいはシャンパーニュの農民がより潤沢な生活を想像しようと、より多数で複雑な欲求を示そうとどうしても構わないことである。なぜなら彼らはその土地にとどまっていたは、それ以上利益を引き出すことはできないだろうからである。彼らはその生産のための仕事の原理としてではなく、結果としてしか生活水準を表象することができない。これは、多少とも広い面積の土地では農業労働の生産性は平均的には同一であるからであり、そこでの生活条件は似たようなものだからである。そこにはまだ集团的構想あるいは集团的組織の原理は見られないであろう。

\*

\*

\*

農民集団についてこれまで考察してきたところを要約しておこう。我々は農民集団の労働者階級に対する関係がいかなるものでありえるかを問い、三つの仮説を認めた。彼らは労働者階級に対して階級としては対立するであろうということ、彼らは労働者階級の一部ないしはその延長にすぎないであろうということ、そして最後に彼らは階級としては存在しないであろうということ、である。

さて我々は次のことを証明したと信ずる。すなわち農民の間に階級意識が存在すると想定するならば、その階級意識によって農民は、まず最初に、そして主として、労働者階級との緊密な関係を（彼ら農民自身いつの日か労働者階級と共に一階級をなす以外ないとあらかじめ予測できるほどに親密な関係を）認めるに至るであろうという点である。農民はその法的身分と同じく経済的活動によってますます工業労働者と一体化する。彼らの労働の対象、技術、機械使用の不均等な発展、土地所有の分散、借地農や折半小作が示す特殊な契約様式、これらはいずれも農民、労働者という二つの全体を対立させる集合表象の対象たり得ないものである。農業の発展と工業の発展の間には技術的観点からすれば、連帯性が存在する。労働者と農民の間には、ある種の法規の適用あるいは廃棄に関して、利害の共通性が存在する。彼らがこうした関係についてよりよく認識するようになるにつれて、彼ら双方の全体は自らを一個同一の階級と認識する傾向を強めるであろう。——確かに大工業の発展の中には、また、田舎の人々が感じたような「産業革命」の余波の中には、敵対の理由も存在するであろうが、しかしそれは一時的な理由である。一つの集団（ある

いはのう農民の場合のように多数の集団)が伝統的諸条件に根拠を持ち、伝統的条件を少しも変えないために努力を倍化し、莫大な犠牲を甘受して伝統と結びついている時、しかも一方では他の集団が伝統的諸条件から十分に解放され全く別の条件を固め、増加する構成員を取り込むことによって、まさにその源泉のところ<sup>で</sup>新しい条件を達成する時には、農民集団と労働者階級との間に対立が存在することは不可避的であろうと思われる。しかしこのような危機は工業の内部においても同じように生み出され、部門と部門の間にもこの種の敵対は存在するが、これが労働者階級を恒久的に分裂させることはない。一方で均衡が強制的に樹立されなければならないが、他方では接近する条件は、単により恒久的であるのみならず、対立させる条件よりも深いところにある。——ただ、農民階級が何かに反対することによってはっきりした姿をとっていたならば、あるいは彼らがますます連帯感を持つような全体の一部として解放されていたならば、このことは農民全体が階級として確立されえることを意味したであろう。ところで農民が拡散しており無機的な状態にとどまっていることは農民の集団意識にとって基本的な事項であると我々には思われた。農民の生存条件、すなわち、住居が寄り集まっている場合でさえ効力を発揮する彼らの散在性、社会生活に対する家庭生活の優位、そして家庭生活に混ぜ合わされている仕事への絶えざる心配り、最後に土地、その生産性、それから結果する生活様式への適応及び慣れ、これらは分散の力でもあり同じ程度に自己主義の原理でもある。階級意識が生れるためには、恐らく社会生活が十分に強化されること、すなわち十分に有機化<sup>オルガニゼ</sup>されること、なおさらに言えば、自然から、労働が人々に課する機械的物質的關係から、十分に解放されることが必要であろう。これらは明らかに都会生活を特徴づけるものである。田舎では人々<sup>は</sup>一日中まだ余りにもものと混ぜ合わされている。野良仕事はたとえそれが終わった時でも表象の中に、そして都会と同じであるには余りに恒常的な、生活全体も侵略する気配りの中にまで延びて来る。農民大衆と都市の労働者全体は二つの階級として対立するのではなく、二つの生活様式として対立する。このことは労働者階級を定義すればよりよく理解されるであろう。

## 第二章

### 労働者の労働の技術的ならびに法的条件

大都市において、労働者階級とその傍に生活している他の社会集団は、明確な障壁によって分離されているであろうか。熟練労働者と商工業の下級使用人あるいは下級役人との間では、境界線を引くことは容易なことと考えてよいであろう。そして「<sup>フオンクシオン</sup>職能」には明らかに類似性が全く存在しない。しかしここで特に重要なのは職能であろうか。同じく、小商人と労働者は互いに対立する以上に混じり合わないであろうか。これらはまさに留保し得る問題である。これらの問題は、もし労働者階級そのものが集号的統一体として存在していたならば、もし工業的生産——これについて我々はまだその経済的定義しか知らない——の作動因全体の中で、その限界にまで自己拡大し解体と多数化へのあり得る諸力を乗り越えるに十分な、包括的、有機的そして強制的な階級意識が発達していたならば、解決されるであろう。かくして自らの属する階級の境界線上にいる労働者は、彼ら自身がより実質的な「<sup>コール・コレクティブ</sup>集団」と結びつけばつくほど、隣接<sup>アンペラテイヴ</sup>集団の吸引力的な作用を蒙ることが少ない。そしてこの隣接<sup>グループ</sup>集団の構成員は、最高の熟練工が労働者階級の中で比較的連带的であると自らに映る度合に応じて、最高の熟練工たちからより大きく距離をとり、精神的にも遠ざかるであろう。

労働者の階級意識の存在ないしは欠如を、それが存在すると信ずる人々やそれを代表すると主張する人々の様々な<sup>マニフェスタシオン</sup>意見表明にだけ注目して確かめようとするのは無駄なことである。労働者の階級意識という言葉自体がかなりしばしば労働者階級の名において語られるということ、さらには、労働者のみが加入するある種の制度ないしは組織が恒久的かつ合法的な存在権を獲得したということ、こうしたことから労働者階級が存在するという事は結果しない。労働者の個人あるいは労働者の集団が、労働者階級なるものは存在すると信ずること、非労働者を、あるいは労働者たち自身を、説得すること、から利益を得ることはありえることである。国家あるいはエリート労働者はこのような階級を編成して発展させることに専念することがあり得る。もし労働者が分割されている様々な経済的集団の社会的本性の中に、このような融合あるいは統一に対する障碍物が打ち勝ち難いものであるならば、労働者階級なるものは一虚構にとどまり、その階級意識なるものは全くの幻想であろう。——他方、何らかの科学的方法で、いわゆる<sup>マニフェスタシオン</sup>意見表明が重大な価値を持つこと、それが日を追ってますます重大な価値を獲得すること、それが集団の一つあるいは何人かの構成員からではなく、階級全体から発していること、これらを証明することはほとんど不可能である。このような意見表明が適宜に行なわれる場合を挙げなければならないのみならず（なぜなら意見表明なるものは人為的に作られることがあり得るから）、意見表明が生れる以前に、階級が存在すると想定する点においてすでに意見表明が行なわれてしまうといった形ではないすべての場合を挙げなければならないであろう。もちろんこれには誰もが失敗するであろう。他方まさにこの点こそが次のような特徴を有するすべての歴史的説明が提起する一般的反論である。すなわち、個々の歩みに基づく歴史的説明か、

あるいはその集合的性格がはっきりしない歴史的説明である。歴史的説明において人は、意見の流れ、心意行動様式の進化をたどっていると信じている。しかし実際には彼らは将来を占おうとしており、証明し得る以上のことを想像しているのである。ただある集合体<sup>コレクティヴイテ</sup>全体の、あるいはその真の代表者たちの共通の努力と活動から結果するある種の制度のみが集合的思考の客観的標徴として役立つことができる。

我々はそれにもかかわらず、この問題に取り組む能力を欠いている。まず第一に、もし労働者階級の統一性に対する信仰を妨げるような集合意識の状態を指摘することが可能だとしたら、またこの集合意識の状態が曖昧でなく、幻想的でもなく、客観的な所与と一定の関係を有しているとしたら、我々の到達する労働者階級の統一性についての結論は、正否なしではなく否であり、ともかくも科学的ではあろう。しかしながら、もしこの集合意識の状態が事実の不正確な解釈ないしは表現であること、あるいはその意識状態そのものが虚構的<sup>フィクティブ</sup>であること、つまりそうした意識状態の存在を証明したいと思っている人の思考の中にのみ存在すること、こうしたことが明らかになるならば、結論は、正否なしでもなく、正でもなく、もはや、否に非ず、でもないであろう。この場合我々が認め得ることは、労働者の階級意識が組織されることを妨げるものは何もない、ということである。最後に次のようなことがあり得るであろう。つまり、事実所与の研究、労働者の事実条件の研究が以下のような結論に導く場合である。すなわち、労働者階級はしかじかの関係の下では自らの統一性についての意識を獲得するにちがいない、そして彼らは自らを定義することを状況によって余儀なくされる時には階級意識に到達するであろう、というのである。実際、労働者階級を見掛け上解体させる隔壁のもろさを暴露するならばそれはすでに大なる一歩であろう。

## 一．労働者階級と諸工業

労働者の定義：自らの手でもって工業的生産のために作業する人。これは労働者を他の人々から区別することを可能にする特徴を示すものではある。しかし、かれ労働者が自分自身を非常に抽象的に表象すること、自らの機能についての観念の中で最前面にあるのが、彼がなす活動の特殊な種類でもなく、彼が雇われている工業の特殊な種類でもないこと、これらを証明するものはこの定義の中には何もない<sup>(1)</sup>。さて調査記録は労働者の様々な職種がどのくらい存在するかを教えてくれる。そして産物の多様性そのものも、労働者間での非常に進行した職種分化を想像させるものである。——他方、国民センサスにおける分類は社会階級とは全く別の観念に基づいて設けられていることは明白である。労働のあらゆる様式を区別し、同時にそれらの技術的類似性に従ってそれらに関係づけることに調査者は専念している。下位分類が多ければ多いほどセンサスはより正確になる。しかしこの点について、限定されており、時には空間的に分散している非常に少数の労働者からも構成されている職種カテゴリーは、何ら社会的現実に対応していない。——（狭義における）同一の職業に集まる労働者たちはすでに、接近する傾向<sup>メテイエ</sup>と同時にある種の組織に

においては（職業の連合体）互いに離れる傾向を示している。そうしながら彼らは恐らく自らの利益にのみ、彼らがそう信ずるものにのみ、そして職業的防衛の戦術にのみ従うのであろう。このことから、彼らは別の関係の下であれば特殊な集合意識を発展させるであろうということは引き出しえない。実際、職業という概念は依然として複雑である。まず第一に、一つの職業の名の下に結合される諸活動の総体はしばしば非常に限定されていて、もいれば非常に変動的でもある。非常に専門化した作業の場合には特に限定されており、分業の多様かつ継起的な様式のゆえに非常に変動的である。しかし他方では、このような技術的側面、ある工業的生産の要因総体におけるその位置、と並んで職業はある社会的意義を獲得し、当分の間それを保持する。それは他の職業に比して難度を異にし、多少とも長い見習期間を含意し、その多少はあれ一定の給与を得させる。ところでもし我々がセンサスの極端に増殖せられた分類とその下位分類にこだわることをやめるならば、またもっと広い、大きく一貫した職業分類を構成しようとするならば、我々はそれぞれ疑わしい個々の解釈に身を曝すことになる。我々は外的特徴を目印にして、何らかの側面で類似し、優秀な労働者の中で、また様々に異なる工業的有機体の真ん中で訓練された職業を一つにまとめるか、あるいは主として一地方、一工業において訓練されたとはいえ、その同じ地方あるいは工業において訓練された人々よりも全体でははるかに多数の構成員を含む職業は、もしその利害が連带的であれば、その多様性にも関わらず構成員全体の組合の中心及び原理となることができるということを忘れるか、いずれかをあえて選ぶことになる。それ故、もし我々が余りに限定的な集団、鉱山の工場とか鉱層がそうであるがその孤立が余りに偶然的な集団、内部に明瞭で持続的な「社会意識」が発展しえない集団、これらにこだわることをやめるならば、境界が流動的でしばしば恣意的な職業にとどまらずに、諸工業におもむかねばならない。——なおまた二つの理由によって、諸工業から研究を始めるのが好都合である。第一に、もし類似の職業が異なる工業におけるその遂行によってとりわけ区別されるとするならば、またもし工業の種類の違いが類似の職業間の接近の主たる障害であるとするならば、我々は、同一の工業に属する労働者たちが明瞭な社会集団を形成する傾向がどの程度あるかを認識することによって、そのことを知り得るであろう。他方、比較的限定され散在している職業、集団は、労働者階級意識の形成に対して、非常に局限されてもおもしろくも非常に重要である種の工業よりも、かなり弱い抵抗しかささないという事情がある。

- (1) ポール・ピック氏 (Paul Pic) はその著書『工業法の基礎』(“*Traité élémentaire de législation industrielle*”)の中で次のように書いている。「法律の意味における労働者とは、雇主あるいは担当者のため、及びその監督下で手による労働(古いフランス語では マヌヴリエ manouvrier)を行なう人間のことであり、その仕事が行なわれる施設の性質(工場、各種作業場、商店、貯蔵所)を問わず、また同じく税の取られ方、給与の支払われ方の如何を問わない。それ故労働者とは手仕事(■メティエ■)、すなわち工芸あるいは手芸を他者のために行なう人々、ならびに見習期間を必要としない単純な手による労働(人夫、土方、人足、その他)のために補助者として雇い入れられる人々



である。商業及び工業のすべての補助者は逆に、契約によって雇主に従属しているとはいえ、事務員（■ユミ■）あるいは使用人（■アンブロワイエ■）としての資格を与えられなければならない。肉体的というよりもむしろ知的な性格の仕事に任ぜられている。……彼らは労働者のように機械的な労働はせず、奉公人のように人間に仕えるということはしない。彼らの役割は、ヒエラルヒーのどこに位置していようと、雇主の仕事に補佐することであり、そのようなものとして、彼らを雇主に結びつける契約は、サービスの真の賃貸借を構成しているとはいえ、一種委任の觀念のニュアンスを帯びている。この相違は工場の内部組織において際立っている。工場主は自らの傍らや事務所の中に事務員や使用人のヒエラルヒー全体を有しているのであるが、この事務員や使用人は労働者や職工長を受け入れ彼らに仕事を割り振るのである。工場の知的な管理に關与しているこれらの労働者は、ある部分では非常に僅かであるが、労働者一般と混同されてはならない。」(pp. 632-633)

工業が定義されるのは加工される素材によってである。繊維とか金属とか鉱山といった素材がある。素材が集める労働者の相当数、生産全体における彼らの役割、そしてとりわけ余り広くない地域への彼らの集中、これらが存在し、ある種の工業が発展する能力を有している場合、それに参加している集団においては労働者階級一般の意識とは区別される集合意識はまず第一に次の如きものであろう。

実際、人間の努力が行使される素材の違いはずっと以前には人々の間に外観と気風の違いを結果させ、その違いは自他の意識のうちに反映していたように思われる。ここで遺伝が介入しているか否か、人々が曖昧に行っているように典型的な属性があれこれの働き手の「脳髓実質の中に刻み込まれている」かどうかはほとんど問題ではない。それらは何の関係もなく、鍛冶屋の息子や坑夫の息子がしばしば鍛冶屋や坑夫になるとすれば、それは全く別の理由によるということ、これは十分考えられることである。さらに、民衆の意見では、鍛冶場と鉄床かなどこの間で火に焼けた顔をして屈強な男たちといる鍛冶屋、坑夫、石切場で奴隷のように働いている地下坑道の工兵と囚人たち、紡ぎ車と織機が田舎と家父長的イメージを喚起する紡ぎ工と織物工、これらは伝統的で明瞭に区別され得る像として浮き出てくる。疑いもなくこれらは一世紀余りの間に大きく変化した。坑夫たちはもはや背中に石岩かごを背負って梯子を昇るわけではない。彼らはもはや、最後の瞬間まで光を失わないための棒を持ち、頭の前から足の先までじとじとしたラシャに身を包み、長い坑道を這いつくばって進み、挙げ句ガス爆発を招くということもない。18世紀以来、鍛冶屋はその内部職能が分化し、重要な企業となっている。そこには石炭工がおり、鑄造工、鋸工がいる。いまなお昔の鍛冶屋を想起させるのは蹄鉄工である。最後に、現代の製糸工場や織物工場の中にはもはや、羊毛や綿を扱う昔の労働者の半ば田舎風の気風と仕事の痕跡は認められない。それにもかかわらず、たとえ過去のすべてが忘れられても、今日の工場や企業の中に■右■のような特徴の本質的部分が存続していることに人々は気付くであろう。たとえ道具設備が改善され機械が導入されていたとしても、採掘抽出される、あるいは加工されるのは同じ素材なのである。昔と同じように労働者は依然として素材との直接的か

つ持続的な接触のうちにある。彼は様々の産物が要求するところの多種多様な操作の影響を常に蒙っている。彼の思考の中では、彼の職業的集団のイメージと、絶えず彼らの努力が集結する素材とが緊密に結合しているに違いない。

坑夫と炭坑との間ではこの結びつきはとりわけ堅固なように思われる。換気は昔よりもはるかに良好であり、入口と出口もはるかに便利になってはいるけれども、坑夫の労働条件は依然として民衆の想像力の限界を越えている。石炭は地中深く隠されており、大きな肉体的労苦を代償としてのみようやく取り出すことができるのである。それ故炭坑における労働条件が論議されていることは確かである。ある種の人々は、「坑夫の家族の父から息子へと受け継がれる地下での労働に対する愛情、坑夫たちが地底での労働を捨てて他の仕事に変わる時に示す嫌悪、軍隊から帰って再びつるはしを取る時の若い労働者の熱心さ」<sup>(1)</sup>を指摘する。「このようなもぐらの領域では人々はそれに慣れてしまい、その暗さを楽しみ天の光を蔑むようになる」というのは本当であろうか。しかし次のような別の証言もある。

「脇腹を下にして横になり、しばしば濡れている壁の側で汗にぐっしょりとなり、時に雫に打たれながら、坑夫は 12 メートルから 20 メートルの深さの穴の中で炭塵にまみれ、塵煙を吸い、しばしば空気のないところで、そして時に暑熱の中で、石炭を掘り出す。これが小さな炭坑における坑夫の状態である。膝まずくか、あるいは伸び上って、時に足場を組んで、いずれにしても自然な体勢ではなく、常に苦痛を伴う状態で。これが大きな炭坑における坑夫の状況である」。このように様々の解釈が存在することは余り問題ではない。さらに指摘すべきこととして、炭坑労働は、恐らくすべての大工業の中で、労働素材に対する労働者の従属が最も顕著なものであること、それは単に行動や態度におけるばかりでなく、労働の持続時間（炭坑を掘り起こすまでの長い行程、そして僅か三十分の中断をはさんでの連続作業）にも現れていること、がある。堅坑の入口に積み上げられている、非常に遠くからでも見える廃棄物の山以上に、働き手の目に彼自身の仕事の性質をよく示すような工場の煙突はない。大桶の水での洗浄の後、坑夫がしつこい炭塵の凝結からまぬかれているのは僅か数時間の間だけである。金属加工業では時間表は変わる。熔鉱炉の中の金属が攪拌棒で突つかれて高炉から出て砂型の溝に入って行くようにすること、鋼が溶解した金属でいっぱいはがねの容器——転炉というが——から流れ出て鑄型に入るようにすること、鋼型の削り取り部分の鉤あるいはアスパデルと呼ばれる部分のへらで、いつも口を開けている精錬用の炉の焚き口の前に集っている精錬工が、炉の金属を鍛錬のためにやっここでつかんで運ぶ前に攪拌すること、白熱の鋼の塊が金槌で平らにされ、円められ、穴をあけられ、赤熱状態のうちに焼き戻しのために冷たい水に入れること、これらのために作業者の注意と活動は常に火の作用によって可鍛状態にある金属に向けられている。金属加工業における作業を「自然状態にある素材に対する非常な筋肉力の展開」というふうに特徴づけ得る度合がますます小さくなってきていることは本当である。精錬工とその補佐を除いて——彼らの仕事は依然として骨の折れるものである——、その他の労働者は機械の進歩によって、力の生産者から単なる操縦者になっている。しかしながら精錬工の他に、「高炉及び製鋼所の精錬工とその補佐、鉄板工場の圧延工、鍛冶屋とその補佐たちはいまだに、

焼けるような炉の周囲で赤熱の金属を加工しており」、その他の者たちも「それほどの筋力を発揮するには及ばないものの、それにもかかわらず、絶えず火気のこもった仕事場の消耗的な高温に曝されている」。ただ、仕上げ工、施盤工、研磨工、組立て工、最終仕上げ工たちだけが「他の工員が火熱の中で粗造りした産物を冷めた状態で完成させる」のである。要するに彼らの職業生活は金属が受けるあらゆる操作と緊密に関わっており、その職業生活が■右■のような過程で用いられる大きな窯の反映によって色どられないような状況はほとんどありえないと思われる。習慣となっているにも関わらず「彼らはそうした場においてやはり、各段階における力業や光景の美しさに心から驚嘆し感動し、輻射熱のさ中において注意を集中し口をきかず、ほとんど宗教的な雰囲気帯びるに至る」こと、このことを指摘する必要があるであろうか。労働者が黙示録的なあるいは非常に文学的な心を持っているものとしなくとも、金属の示す抵抗は甚だしく強いと彼らが感じていること、——それは強力な機械力の投入と、学者もその真の性質については必ずしもすべて理解しているわけではない化学的処置によって征服しなければならない——このことは確かであると思われる。他方、彼らは経験によって、溶解状態にある金属は適機に捕え上げ加工されねばならないこと、しかし直接的接触は避けねばならないこと、いかなる不注意や失策も溶解金属の中に閉じこめられている恐ろしいエネルギーを解き放ってしまう可能性があること、を知っている。作業時における鉄鋼労働者の無言、不励、待機のあの態度、重々しく張りつめたあの表情はこうした事情から結果するのであり、作業外の時間にもその体付きや表情にその痕跡を残す。それはもはや暗い反射光の揺らめきの中に顔面を曝し、鉄床に金鋸を振る時には金属に対して超人的な力を発揮するように見える古典的な鍛冶屋ではない。しかし工場においては、力は炉の火床から来る。それは狭い空間の中に集められた法外な力の解放であり、その中において労働者は各段階の産物をうまく自分の位置に来させ、彼らの骨折りが及ぶ点にまでそれらを差し向け、ともかくもほとんど体の位置を変えずに移動させるべく、細心正確に体を回転させなければならぬ。こうした条件においては、人間は自然力に対する自らの力を示すと同時に自然力に直面した場合の自らの弱さをも意識しなければならない。これは民衆の想像の中で金属労働者という観念に結びついている二重の感情であって、他の工業とは異なるところである。繊維工業における労働では人は軽くふわりとした、そして柔やかで弱い素材と接触する。これはいくつかの能力を要求し、全く新しいいくつかの困難を提出する。製糸作業とそれに先立つ作業に限定するならば、「絹の糸を作る作業はまゆの繊維を解きほぐし結び合わせ撚り合わせることに限られている。別の種類の繊維の場合に必要な作業は、まず分割分離と洗浄の複雑な処理であり、次に、繊維を並べ、重ね合わせ、連続的な滑り（glissement）をかけ、そうすることで規則的な繊維間の組み込みを作り、最後に撚りによって最終的に繊維を固定するための作業である」(2)。これらは機械の導入が最も深いところで革命的に作用した産業分野である。今日では羊毛や綿を梳くのは機械である。連続自動紡績機は繊維の最終伸張、撚り、巻取りをすべて自動的に行なう。織物工場では、杼を操つり、織機に縦糸を通すために往復運動するくしを動かすのはもはや織物工ではなく、さらにペダルを押して縦糸を交互に下げ

るために綜統（織物製造の際、縦糸を通す杼道を作るために経糸を上げさせる用具——広辞苑）を操作する（あるいは紐を使って、縦糸を低いところから高いところへ上げる）仕事さえもはや織物工のものではない。ジャガード機や、最近のノルトロップ機に付いている、綿や羊毛のさばき器の発明は織工の仕事を、織機の始動と監視とに少しずつ減少させてきている。しかしこうした改善が人手を抑制しつつ生産をますます増大させることを可能ならしめてきたとしても、労働者は依然として繊維素材と直面している。機械がかつては労働者の動きであったものを自動的に遂行するとしても、ミュール精紡機や最新の織機の中には昔の手作業のあらゆる要素を見ることができる。紡績工や織工は彼らが結び合わせる繊維に絶えず接触している。彼らは監視している機械のあらゆる作用を理解し確認している。ところで理解するとは、分解し同時に再現させることである。機械の増大する速度（この速度はしかし、加工される素材の質によって制限される）にも関わらず、この運動は、かつて紡ぎ車を使った紡績工や手ばたを使った織工が達成したのと同じしなやかさや精確さのための条件を満たさなければならない。労働者はこの場合もはや、坑夫のように堅く重い素材に打ち勝つために巨大な肉体的力能を費やす必要はない。彼らにはまた、金属労働者のように、自らの腕の代りに自らの意思に従って、しかし危険を負担して操縦しなければならない器具と機械とによって、直接接触を妨げられている素材に対して、様々な操作を加えるといった必要ももはやない。生産は彼らの監視の下に自動的連続的に行なわれる。しかし繊維素材は繊細であることからして、絶えず機械内部における触覚の欠如を補わねばならず、場合によっては機械を止め、繊維を結ぶ必要がある。簡単にいえば、優れた眼と軽やかに動く指を持っていなければならない。繊維労働者は、工場において、生産装置の視覚触覚器官たるにとどまっている。それは、裁縫や刺繍について一般に想像されるように、単調でしかも油断できない作業である。単調であるというのは作業が、比較的活動的な労苦の時間を際立たせるところの安息の時間によって、区切られていないからである。油断ができないというのは、一目で全体を把握しなければならない杼や糸の数、あるいは交互に目を配らなければならない繊維の数にもよるが、ともかくも常に一定程度そうしたことを続けていなければならないからである。昔のリヨンの織物職人の仕事場における紡ぎ車の絶えざるうなり声、杼の杵木への連続的な衝突音、は人々に対して早い時代から、織機と注意深い忍耐との連想的結合を教え込んできた。糸の細さ、羊毛の軽さ、生地の透け具合と微妙な厚み、これらはその作業がとりわけ繊細で巧妙であったことを意味している。今日の織物工場や紡績工場を一度でも訪問すれば、これ以外の印象はほとんどありえない。——かくして、以上三つの工業のいずれにおいても、その基礎にある素材の違いによって、異なる技術的適性のみならず、思考習慣、感覚習慣、そして人間と自然との関係に関する非常に異なる表象がこれら三種の工業の構成員の間で成長するに違いなく、またこのことは彼らとその職業ないしは職能を同一あるいは比較可能なものとするを思いとどまらせるに違いないと思われるのである。

(1) ■原著 67■

異なる産業、職業カテゴリーへの労働者人口の分布、これはまさに技術的基礎を有するが故に、社会階級の形成を説明することはできないであろう。なぜなら社会階級は何よりもまずヒエラルヒー化されたものであるから、と考えることが可能である。各産業は非常に異なる職能を集めており、その一方は非常に専門化され熟練的であり、他方は未熟練労働者にも可能なものである。それらは社会において垂直区分を画するものではあろうが、水準の相違を決めるものではない、というわけである。——しかしこれはわかりやすいことでは全くない。産業そのものがヒエラルヒー化されているということはよく理解し得ることであり、それは実際にいくつかの社会において起ったことであり、将来別の社会体制においても起こり得ることであろう。これらの産業の社会に対する有用性（有用性は他の方面に対しても様々に考えられ得る）、そうした産業の問題点、それらが行使する反発力あるいは引力を人々は考慮する能力を持っていたし、今後も持つであろう。したがってまず我々が見た三つの産業において、それらが一般にどのような職業資格を含意し、どのような印象を惹起しているかを認識し、次いで必要があればこの視点からこれら三つの産業を分類することが重要なのである。我々が指摘した三つの産業の間の差異は、あれこれの集団の集合意識が記録するところの差異であると思われる。——しかしこの差異はこの事情の故に、価値判断に等しい道徳的ないしは社会的評価に結びついているであろうか。このような価値判断が定式化され得るような場合は稀である。このような場合は事実として存在しているし増えることもあり得るであろう。多くの国々で様々な産業の組合サンディカが、地方事業の取引所や組合間の会議で、関係を持ち合っている。しかしそうした際に、問題になっているのは、あらゆる対立を消し去ることを重要課題とする組織化の試みである。そしてこの戦術が様々な労働者の職業集団の現実的感情に対応していることを証明するものは何もない。さらに、社会主義体制においては、コレクティヴィテ「集団」による給与の決定は職務の比較、その重要性と困難度の比較を義務づけると想像される。しかしその場合に出てくるであろう傾向や意見を確定するためのポジティブな要素は欠けている。いずれにしても、産業をこのように分類する必要性は、■右■のような価値判断が現実には存在してもそれを定式化せしめるほどには強力ではなかったこと、あるいはこのような分類が現実には少しも対応していなかったこと、こうしたことは十分に考えられること、あるいは確かなことである。

様々な産業に関連する表象の中で、それぞれの産業の構成員の社会的水準を表現するのは、他と区別することが実際必要である。

ところで、一集団の社会的地位はその集団の別の諸集団との関係によって定義されるものであるが、他方、我々が強調してきた集団の諸特徴はすべて、各集団の持つ作業素材との、あるいは一般に自然との関係に関連している。素材によって、また様々の分野における機械使用の進歩によって、費される肉体的活動力が同一でないことは疑いない。さらにまた、一日の労働時間が、また労働から結果する苦痛が（連続的な重労働の結果としての単純な筋肉疲労、身体及び精神の激しい努力や余りに大きな緊張の後の憔悴、余りに多く

の類似的対象に長時間関心を集中することによって惹き起こされるめまい状態、など苦痛は場合によって異なるであろうが) 同じでないこと、あるいは余り比較に馴染まないといったこともあり得る。

しかしこうしたことは余り重大なことではない。各集団のうちで長い間には、それ以下には落としたいと思う労働条件、もちろん改善を望みはするがそれをこれまで受け入れてきたからにはやはり標準的と考えられる労働条件についてのある通念が定められてくるのである。もしある産業において労働者の不満が持続的に表明され、その労働者たちが常に犠牲にされていると考え、他の産業の労働者よりも悪くは待遇されていると考えるならば、この事態は彼らを他から分けてある部類に入れる理由たり得るであろう。人々が避ける労働条件もあれば、人々が望む労働条件もあるであろう。競争が起きるのである。現実には、生産のある分野で猛威を振るう執拗な危機の場合を除いて、労働者は変更不可能と彼らが認めた諸条件に慣れるものである。彼らは彼らが含まれている産業を自ら選択したわけでは必ずしもないし、さらに言えば、多くの場合自ら選択した、とさえ言えない。しかしある程度の時間が経過した後では、あたかも彼らがある産業を自ら選択したかの如く、彼らが多分自ら獲得した適性はあたかも彼らにとって天性のものであるかの如く、そしてそれ以後は彼らはその活動力のより適切な使用法は見出しえなかったかの如く、すべては経過する。もし各集団がその職能にぴったり適応しているならば、もし諸産業を分け隔てる障壁が天性そのものによって設けられているのであれば、そしてもしその障壁が生来の適性の相違に対応しており、ある集団によってその特権的立場を強化するために設けられたとは思われないならば、各集団の間に何らかの社会的不平等を認めることはできない。さらに、労働者はその際幻想の犠牲である。もし彼らが、フーリエの対比的に組み合わせられた<sup>セリー</sup>系列におけるように、作業を比較しあれこれの作業を順次行なうことができたならば、彼らはいかに労働条件が違うかを認識し、各集団のうちには消極性と忍従の能力、あるいは盲従の能力が発展する、と言ってみても無駄であろう。——我々が関心を持つのは状況の現実的相違（これを直接に測定することは相当に難しいと思われる）ではなく、労働者集団が状況について彼らの心に作り上げる観念である。ところで実際には、もしある労働者集団が彼らの要求のうちに時折とげとげしさとほとんど絶望の調子を帯びさせているとしても平穩の時期には彼らは他の労働者集団に劣った状況にあると首尾一貫して考えるわけではなく、また自己愛からにせよ習慣からにせよ、自らの産業や集団を低く評価するわけでもない。

もしいま、我々が各分野において区別した産業労働の特徴をより一層詳しく検討するならば、産業が何であれ労働者の作業についての社会的定義をそこから引き出すことが可能であり、その一般的概念は労働者階級の意識において各産業に固有の表象よりも大きな位置を占めるといえることが大いにありそうであること、この点が見えて来るであろう。

社会の中でのみ労働者は（農民もそうであるが）、生命のない素材に対して直接にその労働を行使し、従って日々素材と接触することができる。——他の社会構成員はすべて、自由業であれ商人であれ、さらには勤め人であれ、その仕事を通じて人間との、あるいは人

間的素材との関係のうちに置かれる。ある者は刺激を与え、命令を出し、助言を与え、またある者は書き、伝達し、実行を確保し、あるいは結果を査察する。一人労働者のみは命令あるいは指示を受けるだけにとどまり、そして労働者がそれらを実行する時にはただ素材に対してのみ働きかけるのであって、もはや人間に対して働きかけるのではない。彼らはある社会の中のあらゆる部分によって取り囲まれているわけではなく、彼らの活動を越えた（すなわちその活動が展開される外部の方向の）人々及び内部の（すなわち彼らに対して刺激と命令を発する）人々に対して適応する必要はないのである。手で握る部分にまだ人間の印を残してはいるが、本質的に労働者の働きが伝わる諸部分における物質<sup>マテリアル</sup>に他ならない道具と同じように、労働者はいわば硬化し頑なになり、彼らの自然な人間らしい風貌に代えて、角張った線を示さなければならず、厳しく激しい外観でもって、無生の事物を見据えている彼らの人生の正面全体を、すなわち彼らの活動の全体を、覆わなければならないのである。現代のある哲学者は知性について次のように定義した。すなわち「人工物、特に道具を作るための装具を作る能力」と。社会は物質的労働を委ねられた人々からなる一階級全体を自らの内部に形成することによって、あるいはむしろその階級を自らの外部に移行させることによって、道具を扱う道具、を作り出すことに成功した、と我々は安んじて言うこともできよう。こうした事実の社会的帰結は無視できないものであることを我々は見るとであろう<sup>(1)</sup>。

- (1) 我々にとって根本的なこの考え方をその全局面にわたって提示するための時間をいただきたい。指摘され得るあらゆる例外はうまく説明されるであろう。——非労働者階級の中にもその職能が同じく物質と関係するところの人々が多数存在する。芸術家、画家や彫刻家である。しかし、もし彼らが命令に基づいてのみ働くのであれば、またもし彼らの仕事が一面においてのみ労働であって、他面においては彼ら自身が喜びを感じる想像であることが前提されないならば、さらに、もし彼らのうちに二種類の人々が存在すること、一方は（労働者と同じように）実行し、他方は自らの嗜好及び他者の理念によって、構想し命令するための靈感を得る人々であるが、この二種の人々が存在することが前提されないならば、彼らも同じく労働者であろう。——他方、労働者階級の中に位置づけたくなりはするものの、我々の定義に従えばそれとは結びつかない人々がいる。すなわち人間の世話を任ぜられている人々、理髪師、浴場の世話係、カフェのボーイ、家事使用人、等である。彼らの立場は、世論からすれば少しく曖昧であって、このことは我々の命題を支持しており、彼らを何らかの階級に位置づけようとするには無理があることを十分に認識する必要がある。

いまや我々は、このように日々物質的対象と親しむことから結果する労働者心理のいくつかの特徴を指摘することができる。孤独の中で育まれる、昔からの重々しい精神の傾向、緩慢で荒削りな思考、抑制的で鈍くなった感覚、社会的な交友からはっきりとその思考を離れさせることを余儀なくさせるところの作業に彼らの真剣な部分が費やされてしまうことによる、日常生活における恐らくは見掛けの上だけの無頓着、比較的乏しい社交性と大

きな連帯性、すなわち、社会とその習慣に対する一定の無関心、そして彼ら自身と同じように物質に立ち向かう人間に対する本能的共感、である。

これらは彼らの階級意識の前面に現れる支配的な表象であろう。この支配的表象は、それに基づく社会的統一性が、一産業の全構成員に共通の表象（これについてはすでに見た）によって、あるいは一職種<sup>メティエ</sup>の全構成員に共通の表象（これについては後に見る）によって攪乱されることがないくらいに十分に強力なものとして想定されなければならないであろうし、さらにはこうした共通表象が形成されるのを妨げるに十分なくらい強力なものとして想定されなければならないであろう。しかしこの支配的な表象そのものは集会的であろうか。労働者が彼らを他の人々から分つところの■右■のような一般的性向を身につけるという事実から、彼ら自身が確かに形成するところの階級意識、この点における彼らの社会的<sup>シチュエーション</sup>位置の共通性が結果し得るわけではない。——彼らがそうした感情を持っていることは疑いない。彼らに幻想を抱かしめ得るもの、このほとんど抽象的な形式の下における彼らの階級上の定義を彼らが発見するのを妨げ得るもの、それは組織の多様性あるいは産業の種別によって異なる産業体制の多様性であろう。一つの産業の中で、我々がその特徴をよく知っている大工場と並んで、注文をもらう顧客の一団との持続的で伝統的な関係の中で職人たちが存続していると想定してみよう。さらには、生産者自身が企業の運営を保証し監督する、生産の協同が成り立っていると想定しよう。このような条件はこのような集団の範囲も、本来の賃金労働者の範囲も、共に限定することになるであろう。彼らは相互の間に区画線を見出すであろう。職人たちは、都市とか地区とか村とかの、人間的に限定された一定の地域に結びつけられ、商人と労働者の機能を併せ持ちつつ、自らを物質に向けられた単なる道具と見做すのではなく、人間の環境の一部分にほかならぬ意思とも見做すであろう。そしてこの意思は環境に従属すると同時にそれに対して働きかけ、いずれにしても習慣による絆によって環境に結ばれたままである。他方協同者たちは彼らが創始し管理している企業に結びつけられ、同一の事業所<sup>エタプリスマン</sup>の働き手として、連帯的な集団を形成し、各人は集会的<sup>アンビュルシオン</sup>推進力に機械的に従うばかりでなく、その集会的な推進力のあり方を決定することにも貢献するであろう。こうして彼は自ら統御するところの人間諸力を介して、直接的にも間接的にも物質に対して働きかける。——しかし、我々の知っている大工業においては、職人と協同者は確かに例外的である。そこでは「鉦夫の顔」は見られないし、また例えば紡績業や織物業におけるように、近代的産業体制の下で昔の職人の考え方や生き方を永続させようと努める家父長組織も見られない。実際大工業の労働者は、まさに生産遂行のための一道具にすぎないが故に、（例えば農民のように）地域的に限定された社会環境とも、また統一的指揮の下にある工場あるいは企業とも何ら有機的な関係を持ってはいない。

労働者は工場における自らの位置を、例えば事務系職員<sup>アンプロワイエ</sup>の場合とは全く異なる風に表徴している。事務系職員は、その多くの特徴点を通じて、その経営者の事業に実際に一体化させられている。事務所では、事務系職員は経営者により近いところに位置し、経営者を目にする頻度が比較的高い。技師が与える指示の一部は事務系職員を通じて行なわれ、事



業の全業績が記録されるのは彼らがつける帳簿においてである。(給料支払いの際における)労働者との直接的関係において、また銀行家、実業家、商人との直接的関係において、彼らは時に書記、あるいは自動的な配達係としての役割を果すにすぎないけれども、徐々に自らを経営者の代理人あるいは代表者と見做すようになる。最後に、彼らは一定の固定給を受け取るのであるが、それは一般に在職期間の長さと共に(必ずしもその業務によってではなく)増額される。こうした条件の下では、彼らが工場、その歴史、その繁栄について労働者よりも大きな関心を持つのは自然なことである。

労働者は逆に、その労働力をどこそこの区別なく投入する。仕事場はどこも似かよっており、長期間いようが短期間いようが、給与や労働時間は同じである。彼の作業の成果は同じ生産に協同した作業全体の成果の中に紛れ込み見えなくなる。彼らが自らの労働の結果に関心を持ち得るのは、それが作業全体の成果からまだはっきりと区別され得る、すなわちそれが工場の活動全体に無関係である、その限りにおいてである。労働者は彼らが作業する事業所によって限定される<sup>グループ・コレクティブ</sup>集合体的集団を形成するわけではない。工場を代表するのは経営者であり、その技師であり、その事務所である。労働者は契約の一方の当事者にすぎず、紛争の際に彼らが支持者を求めるのは、他の工場の仲間たちからである。労働組織がこうしたものであるので、労働者は各部署の長にも事務系職員にも労働市場にも、また他の労働者に対しても、何らの行動も起さない。したがって労働者は、彼を取り囲む人々すべてとの関係における孤立を、彼が加工する物質との永続的接触とは対比的に、各瞬間に感じることになる。

## 二. 職業<sup>メティエ</sup>と分業

各産業において加工される物質の性質が、各集団においてそれに対応する社会的表象を決定するとは全く思われない。例えば石炭を採掘するために地下で働く労働者の意識は、彼ら自身の間でも、他の労働者との間でも一定の社会的関係を何ら含んでおらず、したがって我々の観点からすれば社会的ではない。しかしこのことから、労働者はその労働の際に、ある集合表象が生ずるようないかなる相互関係も保持しておらず、すでに述べたようにただ物とのみ関係し、人間とは関係していないと結論すべきであろうか。

近代産業組織の研究が我々に教えているのは次のことである。すなわち、分業はますます細分される作業担当の中で生産の担当執行者を専門化すると同時に、彼らの活動が相補的になるにつれてますます緊密に相互を結合しもある、という点である<sup>(1)</sup>。ところで、社会生活は全面的に分業を基礎として成り立っていると言ってよい(但し労働ということばを最大限広く、すなわち労働者の作業と同じく軍事的、知的等すべての活動領域を含めて、理解してであるが)。「実際、不同性もまた結合の<sup>ユニオン</sup>第一原因である」とブグレ氏は言う。「氣質の異なる友人について、また結婚している男と女についての真実は、社会全体についても、専門化した協力者の間についても真実である。まさに相異っていることによって彼らは補い合い、絶えずそのことを感じているのである。分業は彼らの目的を彼らの全生涯に

わたって交錯させ混ぜ合わせることによって、各人に対して毎日、一人一人では不十分であることを想起させる。それは各人に対して、他者と協議し、他者の行動の変化に応じて自らの行動を規制することを習慣づける。一言でいうならば、分業は絶えず各人の心に、自分は全体の一部分であり、全体の幸福が自分の幸福に依存しているように、自分の幸福も全体の幸福に依存していることを新たに蘇らせる。……それ故分業が一集団の中で展開される場合には必ず成員相互の間に社会感情の網の目が張り巡らされることが明らかになる」。但し彼は次のことを付け加えている。すなわち、職能の分割がこうした結果をもたらすのは、「職能が多様な能力にできる限り適合していること、そしてこの目的のために職能が自由に選択される」という条件においてのみである、そしてこのことは結局、諸条件が平等化されていること、すなわち階級がもはや存在しないこと、を意味するであろう、というのである。この状態の下では（ブグレ氏の）命題は科学の観点からして申し分のないものである。それは実際社会的道徳に属する一命題である。

(1) (分業に関して) 後述部分のためにカール・ビュッヒャーの次の書物を参照。『国民経済の成立』(Die Entstehung der Volkswirtschaft, 2<sup>e</sup>edition, Tübingen, 1898)。フランソワ・シミアン(François Simiand)氏によってこの著作について付されている解説を見られたい。(Année sociologique Deuxième année, 1897-98, p.440 sqq)。またブグレ氏による「分業に関する最近の理論の全般的検討」(Revue générale des théories récentes sur la division du travail, Année sociologique, Sixième année, 1901-02, p.73 sqq)、特にビュッヒャー氏については、pp.74-85。ブグレ氏はビュッヒャーの分類を採用している。その際彼は労働移動のカテゴリーを削除し(L.ドゥシュヌの Spécialisation et ses conséquences, Paris, 1901.において無効と判断された)、職業の創造というカテゴリーを追加することによって、二点の修正を施している。(職業の創造に関しては彼は、O.プロランの die Entwicklung der Arbeitsteilung in Leipziger Gewerbe, von 1751 bis 1890 に従って「昔知られていなかった財の出現によって引き起こされる」としている。(写真、自転車の製造、等)。

しかしながら、産業における分業と、社会のその他の領域における分業との間には性質の違いが存在するということをアプリアリに証明するものは何もない。ところでもし産業以外の社会領域における分業の効果が人々の間に有機的連帯関係を作り出すことであるならば、また、その効果が産業においても同じように作用するとするならば、まさにこのことこそ我々を動揺させる命題である。我々が想定している労働者は、彼らが作業している限りにおいては、物に対峙して一人一人は切り離されているのであるが、■右■の命題の場合には、人間関係の網の目に取り込まれ、少なくとも作業の仲間との絶えざる関係の中にあることになるであろう。産業有機体はそれ自体非常に緊密に結合した一つの巨大な社会であるのに、また生産に協力する人々の間に生まれる諸関係は人々のあいだに社会的結合を作り出すのに、労働者の作業が労働者を社会から離れさせることになるのは何故であるのか。労働者たちを切り離すどころか、工場は彼らを接近させる、そして、彼らの努力が結合されると同時に彼らを包むのは、全く新しい社会生活である。これが我々がいま考

察しようとしている理論である。工業的生産のメカニズムはどの程度、またどのような場合に、労働者の中に協力の意識を目覚めさせるのか。この感情はもしそれが存在するのであれば、労働者の全体を、社会的に密接に連係している諸任務のすべてを含むそれぞれの集団に分割還元するものであることを予想しなければならない。これらの集団のそれぞれは一つの職種<sup>メティエ</sup>を代表するであろう。そして我々は職種なるものが何らかの社会的現実に対応するものとするならば、職種を定義するこれ以外の方法を知らない。各職種の内部において（工場内部においてさえ）成員相互の社会諸関係が存在するのであるが、労働者たちが各職種の内部において相互に接近する度合に応じて、我々が定義したような労働者階級は解体される方向に向かい、その統一性は危うくなるであろう。

労働の組合わせと分業の様々の様式についての最も精密な分類はビュッヒャーの業績であることをここで指摘しておきたい。ところのそのビュッヒャーは、階級の相違を職業の相違によって説明する理論にはっきり敵対する態度をとった。我々はこの分類からヒントを得るであろうから、まずその本質的な特徴を指摘しておく必要がある。——アダム・スミスは分業の三つの例を提示した。すなわちマニュファクチュアラーのピン、鍛冶屋の釘、日雇に人夫の服、である。実際これらは分業の三つの異なる様式である。毛織物の生産は異なる企業の間での分業から結果する。これは生産の分割である。針の生産は同一の企業における分業から結果する。これは労働の分解（■デコンポジション■）である。鉄釘の生産は一つの原初的職業（鍛冶屋）が別個の職業（鋤を作る鍛冶屋、釘を作る鍛冶屋）に分割されることから結果する。これは専門化である。他方、アダム・スミスはこの三つの分業の様式とは区別される別の分業については述べなかった。最初は家族によって営まれていたいくつかの職業がそれから分離する。これは職業の生成（■フォルマシオン■）の一つの場合である（職業形成の別のケースは新しい必要<sup>ブズワ</sup>に対処するためのものである）。新しい職業はそれまで独立に行われていた生産に間接的に関与する（衣類の生産を目的とする裁縫ミシンの製造）。これは労働の移動（■デフラスマン■）である。■右■に見たすべてのケースにおいて人々は、生産活動が非常に複雑であること、またそれが非常に多様で、容易には統合されえない諸能力に訴えるものであること、こうした理由によって協力して作業しなければならなかった。作業と、人間の力の限界との間に質的な不均衡が存在していたのである。——しかし今やこれら二項の間の不均衡が量的にすぎないようなケースが出てきている。一人の人間の労働能力の方がある種の作業のためには大きすぎるという場合がある。その場合には（ある意味で）分業の逆のケースが起こり得る。一人の人間が全時間を活用しあらゆる能力を利用するために、複数の仕事を同時に行なうのである。これは労働の統合である。しかし特によく起きるのは、一人の人間の労働能力がある種の作業のためには小さすぎるという場合である。そのような場合には人々は協力し合う。ある場合には彼らは単独では作業することが心情的にできない。ここから共働（travail eu compagnie）が生れる。またある場合には、単独で作業することが肉体的にできないことがある。その場合彼らは、（一つの建物を建てる複数の石工のように）独立性を保つケースであれ、（織物を張り枠に張る人や麦打ちをする人のように）作業を結合するケースであれ、

集団で作業する。前者は単純な作業の加算であり、後者は作業の連鎖である。最後に、労働者を集団化せしめるものとして技術的必要がある（例えば、車を作る場合）。この場合、作業の連結（■リエゾン■）である。

労働者の作業の技術的条件が、それを表象する労働者から見て、いかなる社会的意味を有するかはわからない<sup>(1)</sup>。この観点から見れば、（広義における）分業の■右■のような諸様態のそれぞれは別個には考察されえない。分業諸様態のうちいくつかは、それらが規定すると思われる社会諸関係の性質が同じである度合に応じて、相互に接近し得る。——まず第一に、同一の場所における作業という事実は幾人かの労働者を他と区別された一集団へと（心情的な意味において）近づけることができる。しかし、労働者たちが作業するに際して、場所を同じくしないということがいつか言われたことがあるだろうか。同一の場所とは、お針子たちが集められている部屋であろうか（共働）、石工たちが建物を建てている工事現場、麦打ちの作業者のいる平地であろうか（労働の加算の二形態）、あるいは鍛冶場であろうか（労働の連結）。しかし、労働者たちが同じ建物の中で隔壁や床によって隔てられて作業している場合（労働の分解）、あるいは同一の工場の中で容易に連絡できるいくつかの建物が、一方では羊毛選別工や紡績工を収容し、他方では器具を修理する機械工を収容しているような場合（労働の移動）、彼らはやはり「同じ場所で」作業している、と言われなかったであろうか。しかも（我々は生産体制を捨象しており、したがって労働者が生産手段及び生産物の法的所有者であるか否かは重要ではないので）、■右■のようなケースから次のようなケースへ、すなわち同じ分野ではあるが専門化のあり方が違っている生産者たち、例えば靴製造工、馬具工、皮なめし工（専門化）が、あるいは同じ素材が連続的加工を施されつつその手を通過してゆく生産者たち（生産の分割）が、同じ通り、同じ区画、同じ都市で働いているといったケースへ、感じられない程の変化を通して我々は到達しないであろうか。例えばある炭坑の各種の切り羽の間の、また何らかの理由で分散している一工場内のいくつかの建物との距離は■右■の場合に比して小さいわけではない。それ故、炭坑とか工場とかの境界線を精密に指示することはほとんど不可能である。境界線の手前であって、その内側では諸施設が空間的に接近していることとか、労働者がそれについてもっている考え方とかだけでは、ある施設集合を別の施設集合から区別する境界線を指示することはほとんどできないのである。こうした関係は労働者には全く偶然的、そして深い社会的意味はないものと思われるに違いない。同一職種の仕事場の労働者の間に、親密性のきずなが生ずることはあり得る。しかしこれだけでは、同一の職場で呼ばば応えることのできるような労働者たちの間の方が、より広く同一の建物、工場、町の区画、等の中で近づくことのできる労働者たちの間でよりも、親密性の絆が形成される理由が大きいとは言えない。——むしろ、空間的接近は作業の相互依存性の、しばしば雑然たる表現に他ならない。ビュッシャーによって区別された、労働の結合及び分割に関する八つの様式は、この点で三つの大カテゴリーに帰着するように思われる。まず第一に、社会の中には、明らかに異なる種類の商品の生産に帰着するという点で異種の職業（職業の形成）が、そしてこれと並んで、類似してはいるが分化している職業（専門化）が見出さ

れる。これら二つのケースにおいて、生産者及び生産は確実に独立的である。しかし、もし社会全体を一つの生産有機体として考えるならば、あるいはまた、専門化した生産がまだ分離していない状態を頭の中で考えてみるならば、それらの相互依存関係について語ることは可能である。しかしそれは、労働者階級の登場を考慮していない観点である。——第二に、それぞれが以下の理由によって相互に関連づけられた作業の複合的全体を想定している職業がある。例えば車とか家屋とかの商品の生産は、それぞれが一つの職種に対応する部品あるいは操作の結合を必要とすること（ビュッヒャーが作業の連結と呼んだもの）、あるいは、例えば皮鞣、革屋、靴屋の場合のように、同一の対象に対して複数の連続的かつ明確に異なる作業が必要であること（作業の分割）、最後に、一つの職種で生産に用いられる機械そのものが他の職種によって生産されなければならないこと（労働の移動）、である。そこには関係集団の意識に課せられる、明確な職業的連帯の原理が存在するであろうか。しかしこれらの異なる職種の、あるいはむしろ異なる生産の作業者を関係づけることは、いかなる程度においても意識的活動ではなく、前述の労働者の同意を求める問題でもない。疑いもなくこれらの職種の諸条件は相互に関連しており、こうした異なる職種は何らかの程度において相互に条件付け合っている。18世紀半ばに飛杼が発明された時、織物職人の作業は、相当量の糸を生産する手段が発明されないうちは速さの点で大いに優っていた。他方これらの職種の一つでストライキがあれば、それは最も直接的に連係している職種を麻痺させる。しかしこうした関連が感知されるようになり、先のように相互に依存し合っている職種の労働者が、社会有機体の中で同一のシステムのいくつかの部分を表示していると自覚するのは、ほとんど危機の瞬間においてのみであり、つまり非常に稀なことである。通常は、指揮運営に当たっている者のみがこのことを自覚しており、職種間の調整に配慮するのである。もし共通の利害のゆえに、隣接する職種の労働者たちが時に同盟するとすれば、それは事実上彼らが同じ主人に依存することが非常にしばしばあり得るからであって、彼らの作業が相互に補い合い適応し合っているからではない。ある種の企業家たちが、密接に関連しているいくつかの生産を一つの企業の形で、結合しているのは、こうした職種の依存関係から靈感を得てのことであることは疑いない。しかしこのことから、■右■のように組織されている労働者の総体の中に、利害及び職能の密接なつながりの自覚が持続的に存在しているに違いない、といったことは結果しない。——第三に、これが我々にとって最も興味あるケースなのであるが、いくつかの職種は単に密接に関連しているばかりではなく、同じ始動機構に従う単一の機械の諸部分として振舞い、相互に歯車のようにかみ合っている場合がある。これはビュッヒャーが加算される労働及び労働の分解と呼んだ二つの様式において生じる。第一の加算される労働の場合は単純なこともあり、とりわけ複数で作業することによって時間を稼ぐ必要から説明され得る（隣り合って作業する石工や坑夫）が、複雑なこともあり（作業の連鎖）、一定のリズムに従属する（鍛冶屋、麦打ち）。第二の労働の分解はアダム・スミスの古典的なケース、ピンの製造に当る。「第一作業者はボビンから針金を引き出し、第二作業者はそれをまっすぐにし、第三労働者はまっすぐになった針金を切り、第四作業者は切られた針金の先端をとがらせ、第五作

業者は天板を付けるもう一方の先端を研磨する。この天板自体も二つないしは三つの別々の作業の対象である。鍛造は一つの特種な仕事であり、ピンを磨くことも別種の特種な仕事である。紙をとめてそれにピンを押すことさえ異なり区別される仕事である。「分解」と、すでに述べた、密接に関連する職種（皮鞣し、製革、靴製造）の間の「分業」との間には程度の違いしか存在せず、どちらの場合にも同一の対象、素材がいくつかの異なる手を通るのであり、作業の時間的間隔、仕事場の空間的距離の大小はほとんど大した問題ではない、と考えることも可能ではあろう。しかし、間隔はそれどころか非常に重要である。間隔を最小限にすること、これこそが作業がいかに分割されていようとも、それが本当に有機的構造を与えられかみ合わせられるための条件だからである。実際加算される労働と労働の分解は、そしてこれらのみは、どうしてもある種の計画と訓練とを前提する。これらとは別種の生産は試行錯誤法的に相互に調整し合うことを義務づけられてはいない。その結果常に釣り合いがとれなくなる危険はある。しかし、これほど多くの異なる職種が存在するのであり、（したがって）作業が連続性を維持し得るだけの、また互いに待ち合っていないなくてもよいだけの、比率的調和が各作業の労働者の間に存在する（アダム・スミスによれば一人の労働者が二つか三つの作業を遂行することもあり得る）。

- (1) 我々はこちらではただ形態のみを、しかも生産組織の形態のただ一つの要素のみを、すなわち分業の程度と種類のみを考察する。我々は（職人制であれ、同業組合制であれ、資本制であれ、協同組合制であれ、その他いかなる制度であれ）何らかの産業上の体制を想定するが、施設の大きさとそこに集まっている労働者の数（生産形態の別の要素）がこの場合いかなる重要性を持ち得るかについては全く検討しない。体制と生産形態の区別については、フランソワ・シミアン (François Simiand) の『経済科学における実証的方法』(“la méthode positive en science économique” F. Alcan, 1912, p.157 et pp.172-177) を参照。

様々な作業のこうした連続性と相互的<sup>アンプリカシオン</sup> 関係性が最もよく感ぜられるのは、機械が導入された時だけであろうか、さらにそれが果す役割の大きさに比例してであろうか。マルクスは<sup>マシーヌ・ウティ</sup> 機械を次のように定義している。「しかるべき運動力を受け取って、労働者が以前行なっていたのと同じ作業を労働者のと類似の器具を装備して行なう仕掛け」。彼マルクスにとっては、蒸気が<sup>メカニスム</sup> 機械に応用される瞬間からはじめて産業革命は存在するのである。マントゥー氏<sup>(1)</sup> による定義もほとんど変わらない。「機械とは、以前は一人ないし複数の人間によって行なわれていたある技術的操作の複合的運動を、単一の動力によって遂行するところの仕掛けである」。いずれの定式も生産労働の機械による単純化と集中化にとりわけ照明を当てている。その社会的帰結は確かに重大であり、我々はやがてそのいくつかを検討するであろう。しかし我々がここで見たいと思っている、分業のみに由来する社会的結果、という観点からすれば、機械がこの分業を変えるのは程度の問題であって性質の問題ではない。動力が人力や動物の力によって提供されるか、あるいは無生物のちからによって提供されるか、また手動のポンプがスチームハンマーと同じ資格において一つの機械で

あるかどうか、こうしたことがここでは事実上問題にならない以上は、機械の持つ効果はとりわけ、様々の生産作業をより厳密で連続的な関係の下におき、人間による作業が比較的独立的であることに由来する不確定、遅滞のあるいは停滞の諸原因を出来る限り取り除くことである。ところでこのような統合はより低い程度においてはあがあるが、すでにマニファクチュアーにおいて存在している。そこには機械は存在していないが、同時的に作業している労働者の間で作業が分割されていた。このような組織の結果として作業はより速く、そしてより「機械的」に、より自動的になる傾向を示す。各労働者は彼を取り巻くすべての人々から圧力を蒙り、彼らの速さに従わねばならず、しかもその速さは言わば彼らから独立に決定される。これは集合的リズムであり、機械のリズムとして各人の上に課せられる。昔、組をくんで働いていた労働者の辛い作業に合わせて歌われた歌は、彼らの努力を外的規律に従わせる役割を担っていた。それは彼らとその運動を規制するための振り子と同じであり、彼らとその帰りを待つ、蒸気で動く貨車あるいは台車と同じである。このリズムが厳密なものでないことは確かである。しかしそれが変わるとすれば、それは全体的なものであろう。すなわち、集合的決定によって（石工たちが一致してその作業を遅らせる場合）、あるいは集合的受容ないしは忍従によって（繁忙の時期に生産が強化される場合）であろう。いずれにしても個人の主導権と独立性は完全に消え去っているであろう。

(1) ■原著 87■

このようにある種の作業が持っている連続性の関係は、集団の意識において、階級表象としてではなくとも、少なくとも職種メティエの表象として現われ、そしてとりわけ、このような表象は労働者階級としての意識の形成を妨げあるいは遅らせるくらいに明確である、と想定すべきであろうか。労働者が加工する生産物の性質の違い、その様々な種類については捨象しよう。我々はすでに、製造される素材一般（鉄、繊維等）を考える場合には、そこには社会分化の原理は何も存在しないことを見た。他方、特殊的生产物なるもの、注文で売り渡されるような生産物が労働者にとって重要性を有するのは、それが生産活動の一定の配置を意味する限りにおいてである<sup>(1)</sup>。生産物の効用と社会的意義には、労働者の関心は少しも向けられない。機械工は武器の部品であろうが機関車の部品であろうがかまうことなく組み立てるし、植字工は活字を組むページの意味内容には意を用いない。同じく法律的条件についても捨象する必要がある。法律的条件は實際上非常にしばしば、その大小はともかく、産業（一般）に関係づけられることが可能だからである。多数の労働者を集め、彼らの間で作業を分割するためには、とりわけ人手に代えて機械を充てるためには莫大な資本が必要である。大産業においては、労働者とその労働手段との分離及び雇傭者の経済的支配権はより顕著であるが、このことはここでは重要ではない。しかし、労働者の活動が相互に組み合わせられているという単純な事実から、彼らの様々なカテゴリーは一つの職種メティエと呼ばれ得るような、他と区別されるべき一社会集団を形成すると言えるであろう

か。そうは思われない。

- (1) しかしこのことは、労働者組織がその「<sup>フェデラシオン</sup>連盟」の原理を定義しようと試みた場合にしばしば素材あるいは生産物の統一性から着想を得ていることを否定するものではない。しかし、労働者組織は産業の十分に明確な概念に到達したとは思われない。かくして「建築同盟は、多様な素材を加工するが、同一の対象を建造するのに寄与する構成員から成っているが、他方金属同盟は全く逆である。金属同盟は、金属のみを加工するが産業全体に及ぶ多様な対象の建造に寄与する構成員から成っている」のである (Raoul denoir, *Revue syndicaliste*, 1<sup>er</sup> décembre 1908)。ここではっきりと意図していることはただ、原理の名において、但し可変的な手段によって、統一性を実現することである。先の著者は次のように付け加えている。「時計製造職人や眼鏡職人が鍛錬鉄工といかなる関係も持たないことは否定できない。このことは圧延工と光学職人、旋盤工と装飾品製造者、鋳造師と錠前職人、彫金師と鍛冶屋、等についても同様である」。そして「統一」のより断乎たる反対者は次のように言う。「染色仕上業の連盟と染物兼ドライクリーニング業の連盟とは別々のものである。馬具の製造業と販売業は皮革業のことを知ろうとは全くしない。軍服製造部門は被服業の連盟に対して憎しみを抱いている。石版画連盟は紙業界と連合したことはなく、活版印刷業とも出版業とも連合したことはない。坑夫達はスレート採取業者の連盟を尊重することを宣言してでなければG.G.Tには加入しなかった。運輸は運搬・搬送業からは切り離されている」。我々はこれまで職種あるいは産業の連盟によって種々異なる形で解決されたこの戦術問題を考察する必要を持たなかった。我々は労働者組織の現状が労働者の種々のカテゴリーの間の現実的な社会関係と対立とを不完全にしか表現していないと指摘するにとどめる。

ゾンバルトは<sup>メティエ</sup>工芸を狭義において、すなわち小工業における職人の生産的活動と定義した。すなわち「芸術と、習慣化された手作業との中間に位置する活動分野」である。これは、<sup>アルティザン</sup>工芸職人はその仕事において何らかの個性を保持し、その作業が質と大きさにおいて彼の適性と主導性とに大きく依存していることを意味する。習慣が働く度合に応じて作業は個性を失う。これは分業が余りに進展させられる場合に生じることである。しかしその場合労働者は、彼が個性的で自覚的である限りにおいては、その生産作業に取り込まれる度合が<sup>メティエ</sup>工芸職人に比べてはるかに小さい。こうした場合にこそ、(その<sup>ブズワン</sup>欲求、趣味嗜好、社会的見解及び表象によって特徴づけられるところの)彼自身と、量によって売買され、<sup>マティエール</sup>素材物質と機械とに接触することによって自身もますます機械的物質的になってしまった彼の<sup>フォルス・ド・トラバール</sup>労働力、すなわち比較的均質な商品、とを区別する理由がある。この意味において、非生産的な物質力によって作業者にますます大きな孤立感を感じさせるのは、単に機械ばかりではなく、窮屈に調整された活動に従事する労働者が作り出すこのような自動的全体でもある。それらは労働者が関係する蒸気とか電力とかの新しい物質的動因によるばかりではなく、彼の作業仲間が種々の操作の自然的比率に基づく規律により一層従がうのに比例し、また自然的理由によって最も人をとらえるあるリズムに従うのに比例し、さらに彼らが相互に決定し合い限定し合う単なる機械的諸力としてお互いを考えるような



ことがあれば、それに比例する<sup>(1)</sup>。そのためこのような分業形態は、それに組み込まれている者たちの間に新しい連帯関係を作り出すどころか、むしろ彼らを分散させ孤立させる結果となる。これは時に指摘されることであり、極端な分業の結果としての細分化された作業は、労働者から産業全体の歩みに対する関心をなくさせるに至ると言われる。

- (1) Ad.ビュッヒャー氏はその著書『労働とリズム』(Arbeit und Rythmus, 2<sup>e</sup>édition, Leipzig, 1899)において、多数の「労働歌」に基づいてリズムの役割は、作業を自動的なものにするによって作業の苦しみを軽減することにあることを示した。(休止の時間によって分けられた簡単な努力の継続)。

ところでこうしたことは、作業が細分化されているからでは全くなく(大聖堂を建築した石工は建物の全体を常に想像し、彼の役割は自らの目に映っていたと思われる)、分業が存在するからでもない(一つの作業は単純なものであっても、センスと能力とを要求することがあり得る)。しかし一層加速され機械的になった作業は、労働者に、一方ではある人々からせき立てられ他方では自らがある人々を動かす、歯車の一部へと変わることを余儀なくさせる。このことから関心の移動が起り、注意は遂行しなければならない特殊の仕事にもっぱら固定してしまい、他の作業者たちから離れてしまうことになる。——かくしてこのような労働組織は、それが最高に発展しているところでは、源初的な社会表象の原理であるどころか、逆にすべての労働者に共通のものとして、素材物質と向い合う中での孤立の感情を増大させる。

たとえ機械がこの点に関して多くの場合に手作業を単純化し、また機械そのものがますます複雑になり精妙になったために労働者の仕事を始動、監督、清掃、燃料、材料等の補給及び製品等の取り出しに還元したとしても、機械を製造し据え付け運転し修理する者たちは往々、比較的稀な科学的知識と技術的能力を備え付けていなければならない、したがって機械が、難しい仕事をやってのけるある種の労働者たちを消滅させることはなく、彼らに全く取って代わることは不可能であった。普通、熟練労働者と未熟練労働者とは対立させられている。これは労働者全体を二つの階級に分けることを可能にすると考えられている本質的な区別でさえある。これについてはどう考えるべきか。——かつて職人たちが徒弟奉公に縛り付けられ、一人前の職人となるために製作する昇級作品を製作することを義務づけられ、厳格な規則の下に置かれていた時、彼らはその作業の技術上の性質によって、自らを坑夫や石切工や、岩塩鉱の労働者よりも社会的に優位にあるものと見做すことが可能であった。彼らの作業の専門性、完成された伝統的方法と、農夫のそれに非常に近い比較的下級の粗野な仕事であり職人の仕事というよりもむしろ奴隷の仕事を思い出させるこれらの仕事の間には、ほとんど移行部分というものが存在しなかった<sup>(1)</sup>。今日でもまだ、羊毛工場で、羊毛選別工や選抜された者たちであって、随意にどんな仕事でもするというわけではない労働者たちの仕事場から、糸結び工が純粹の未熟練労働者として含まれている紡績工の仕事場に移動すれば、あるいは印刷工場で、印刷機が置かれており、紙差し工

と取り出し工が紙葉を置くことと取り除くことだけをやっている仕事場から植字工と組版工の仕事場に移動すれば、作業の難度の相違に特に驚かされるものである。——しかし給与については捨象し、なされる操作だけに注目することにしよう。なお一定数の未熟練労働者は、婦人あるいは、後にもっと熟練工的になるであろう子供であることに注意しよう。一つの工場の中で労働者をその「資格」の高低に従って異なるカテゴリーに分類できることは確かである。しかし、そうしたカテゴリーはどのようにして作られるのか。その能力によってほとんど<sup>アルティスト</sup>職人あるいは技術者の水準にまで上昇する労働者は僅かである。専門的な能力を全くもっていない未熟練労働者はもっと多数であろうか。このような労働者に欠けているのは特に、たとえそうした機会は少ないとしても、自らを他とは別のものにする機会ではないか。ところで、もし労働者がこのようにその能力を考慮して相互間で「分類」し合うとすれば、彼らが考慮しなければならないのは彼らの潜在的な能力であって、彼らからは独立している理由によって彼らに課せられている労働条件ではない。生産にちょうど十分なだけの鍛造工や釜たきや鋸工が生まれてくると彼らが考えはしないことは確かである。また彼らは次のように想像することもない。すなわち、もし十分な訓練期間をもっていたら、もし空いている職がもっと多かつたならば、もし責任と欲求がもっと彼らを刺激していたならば、より困難な仕事でもやれたであろう人々もその資質を全く利用しなかったがためにそれをすっかり失ってしまうということ、また職業は一般に人間を決定的に変えてしまうということ、である。なおさらに、もし一つの<sup>メティエ</sup>職種あるいは産業から離れ、この場合にはこれが正しいのであるが、産業的労働全体を考察するならば（なぜなら狭義の産業の中にも広義の<sup>メティエ</sup>職種の中にも我々は何か独自の社会的形成体が作られる原理を見出さなかったのであるから）、未熟練労働者をして少しずつその作業をより迅速に、より容易に、そしてより確実にこなす能力を獲得せしめるいくつかの移行段階、熟練労働者も器用さと同じく筋力も使わなければならないようないくつかの移行段階、が存在しないであろうか。坑夫のように、彼らは熟練労働者であるか、あるいは彼らの仕事ぶりはむしろ土木人夫や未熟練労働者のそれに近づいていないか、を正確には言えないような相当数の労働者の集団が存在しないであろうか。

- (1) アルフレート・ドーレン (Alfred Doren) は、*Studien aus der Florentiner Wirtschaftsgeschichte*, T.1 1910 において、14 世紀以降フローレンスでは、毛織物工業においてはすでに非常に進展していた分業は、非常に明確な、生産習慣にまで及ぶ社会的分化を伴っていたと記している。

ここで境界線を引くことの難しさはしかし、境界線が全く引かれなかったと信ずるに十分な理由とはならないであろう。ある<sup>メティエ</sup>職種に必要な訓練期間の平均的な長さからヒントを得ることもできよう。これは疑いもなく、ある作業の<sup>クラリフィケーション</sup>格付けの最も客観的な標識であると思われる。しかし産業の現状においては、そしてまたその急速な変容の故に、訓練期間はもはやある職種への接近のための必要条件ではなくなっている。<sup>メティエ</sup>職種はもはや閉ざされたものではなくなくなっている。そのための経営者は、訓練期間にそれほどの時間をさかず、

それほど要求を持たず、その仕事の高さぎりぎりの労働者を働かせることに利益を有する。また、ある種の作業はそれまで専門化されていた労働者とは異なる労働者によって行なわれるということも起こり得る。労働組合が見習期間の法制化に失敗したことを確認してウェップ夫妻が述べたように、「民主的でも科学的でも経済的でもないこの訓練様式は消滅を運命づけられている」<sup>(1)</sup> ののである。実際、そしてこうした条件においては、長い訓練期間を背景に持っている労働者は、その他の労働者に対立して結束するわけでは全くない。

(1) Webb (sydney and Beatrice) . Industrial Democracy. (8<sup>e</sup> mille, London, 1906) Chapitre X. The entrance to a trade, p.454 sqq.

給与を考慮に入れて職種を分類することも可能であろう。最も熟練度の高い労働者に最も高い給与が与えられると仮定されるであろう。しかし、作業ではなく給与すなわち収入というものがこのように前面に来るということ以外に、作業の難度と報酬との間に確定的で恒常的な関係が存在するということが、確認されているわけでは全くない。非常に難しい作業でも、技術的発見、消費の移動、経済的進化一般の結果として無用になることがあり得る。同一の職種でも国によってこの必要度という点に関して高低があり、その職種の労働者の受け取る給与に高低があり得る<sup>(1)</sup>。——さらに、労働者のあるカテゴリーが別のカテゴリーの労働者の高い給与に対して抗議したケースを挙げることはほとんど不可能であろう。あらゆる労働者が、全体としての労働者階級はその階級のエリートを増大する要求によって利益を得ると感じている。労働者の統一性が必ずしも彼らのすべてのグループの利益に完全に一致して現われていないことは確かである。19世紀全体を通じての未熟練労働者の際限なき増加とその結果としての彼らの間での競争とによって彼らの多くが苦しめられた。もし彼らが未熟練労働市場から何らかの協定によって競争者の少なからぬ部分を排除することができたならば、彼らがそう決心したであろうことはほとんど疑いない。しかし彼らの状況はすべての点で似通っていた（彼らの唯一の財産は依然としてその労働力であった）。いかなる原理の下に彼らは相互に差別化し合うことが可能であったか。差別化に成功するたびに、種々の口実の下に同業組合的エゴイズムが明らかになった<sup>(2)</sup>。しかし、このような反応は稀であって、深さも持続性もないものであることが明らかになった。彼らは、あるカテゴリーにおける進歩が他のカテゴリーにとって害になるとは感じなかった<sup>(3)</sup>。給与の上昇においてきっかけを与えるのが熟練労働者の給与であるといった場合があり得る（熟練労働者は未熟練労働者よりも、作業の計画的停止によって生産を麻痺させる能力においてともかく上である）。のみならず熟練労働者自身、「下の方で」獲得された有利性を強化することの効用を多分感じているであろう。熟練度の低い仲間を支持するために連帯のストライキに彼らが参加するのはこのためである。また彼らが、「(質において)不平等な作業に平等な給与」という原則を是とするように思われる給与の統一を受け容れさえするのもこのためである。

- (1) 例えば繊維産業についてブラザートンは次のように言う。「イギリス繊維産業の労働者は、綿工業のほとんどすべての分野において、イギリス職種別労働組合トレード・ユニオンズの貴族のうちに数えられる。……今日、イギリスにおいて繊維産業が拡大しているすべての地方において、経済的、社会的繁栄の最も顕著な徴候が見出される。……繊維労働者は多分、今は彼らが占めているに優る地位を得ることはないであろう」(Revue syndicaliste, mai 1907)。彼は紡績分野においては週給 50 フランが平均であることを記している。Ch.ブノワ氏はフランスのアルメンティエールの綿工場の平均日給として次のように記している。紡績工(班長) 6.5 フランから 7.4 フラン、糸結び工 3.6 フランから 4 フラン。ポーシュの綿工場では紡績工 5 フランから 5.2 フラン、糸結び工 3.25 フランから 3.5 フラン(1905年)。レームの羊毛紡績業では、給与は紡績工で 5 フラン、糸結び工で 3 フランから 3.5 フランであった。(1909年の労働取引所書記長による)。
- (2) 婦人に対して。1898年同業組合会議において一代表は次のように宣言した。「印刷業連盟は婦人の組合加入を認めない。そして十分に強引なすべての連盟は同様の方針を取ることが望ましい」。外国人に対して。もしサン・フランシスコの労働者が中国人と日本人の移民に反対したとすれば、それは彼らが中国人や日本人との競争に恐れを抱いていたからである。彼らは白人労働者に対しては、その水準は中国人や日本人よりも非常に劣る可能性があるけれども、同じように反対することはできないであろう。かつてイギリスにおいては(今日ではアメリカにおいても)組合に結集し自らの職業から非組合員を排除し高い給与を維持したのは主として熟練労働者であった。つまりこれが、彼ら熟練労働者が見習い期間アプレンティサージュという古くなった制度に頑なに執着する主たる理由である。
- (3) 未熟練労働者と一緒に作業している経験ある労働者メティエが最も給与のよい選り抜きの労働者のカテゴリーに属する場合には、経験ある労働者の比較的高い給与が常に、未熟練労働者の給与をいささか上昇させることになるのは確実である(Cornélissen, ouvrage cité)。

未熟練労働者の間には労働者のエリートに対する敵意や嫉妬の感情は何ら認められない。多分このことはそこでの作業がすべて手作業であること、従って相互の間には程度の差しか存在しないことによるであろう。未熟練労働者は多分熟練労働者たちに無条件にとって代わることはできないことを理解しているであろう。なぜなら彼らは作業を比較することができ、その難しさを評価することができるからである。生産のための種々の作業の必要性を認識したからには、彼らは作業を責任をもって適切に遂行する人間を嫉妬することはできないのである。知的な作業に対する彼らの評価は往々全く別である。知的な作業は空間における運動としては表現されず、むしろ身体の相対的不動性に通じており、また物質的作業とはほとんど両立しえない。他方では知的作業は一般に指揮統制の作業である。ところでもし補助労働者あるいは未熟練労働者が多くの場合熟練労働者と協力しているとすれば、もし例えば紡績工場において糸結び工と掃除夫が紡績工の劣位の補助者であるとすれば、彼らが服従しているのは一人の人間というよりも技術的必然性に対してであり、彼らの班長も同じように手を使って作業しているのである。知的作業は逆に明らかに孤立しており、手作業から離れている。労働者はこの孤立をいとも簡単に敵意と軽蔑と解釈しや

すい。これは高いところ、すなわち事務系職員を熟練労働者から隔てる境界のところでは断絶が余りにはっきりしているがためであり、低いところでの別の断絶を労働者は気にしないからである。最後に、下級の労働者にとっては、職業水準を高める手作業の労働者にあえて対立して、その上で自らの劣位を全く認めないことよりも、むしろ自らを彼らと一緒にして区別のない一つの総体とすることの方に、自己愛の利益が存在する。

熟練労働者の態度はこれとは全く別のものであり得るであろう。熟練労働者の内部に、非常に強固な一種の労働貴族性を樹立しようとする傾向が実際指摘できるような場合が現われている。ここではもっぱら彼らの戦術に注目して進む必要はない。それは一定ではなかったからである。イギリスの第一期の労働組合員たちは、非熟練労働者から自らを切り離し、自分たちの職種への彼らの接近を阻む傾向を持ち、固有の利益を獲得するために、また得点として、自らを組織した。もっと後になって彼らは、政治的闘争における労働者の主要な力はその数であることを認識し、非熟練労働者の組織化を励まし援助し彼らと緊密に結びついた。<sup>コルポラティブ</sup>同業組合の会議や新聞の中で熟練労働者とその他の労働者との間の公然たる対立が存在しなかったこと、このことは彼らに感情的区画線が存続している時でさえ、闘争のために統一することの効用を彼らが認識していたことを示すものといえる。熟練労働者はその能力、訓練期間、練磨によって十分にエリートたるに値する。何故に彼らはこのことから何らかの誇りを引き出さないのであろうか。何故に彼らの各々のうちにある技術的優越という個人的感情は、彼らの集団全体において階級感情として表現されないのであろうか。——しかしこのような優越性が具象化される可視的で恒常的な特徴は存在するのであろうか。ここでは肉体的構造は問題ではない。どのような仕事も長い間にはそれを遂行する人々の身体と同じような形に変容させ、観察者であればその肉体的徴標によって働き手の職業を大体識別することができはするであろう。しかしこのような肉体的徴標を、仕事の困難度の増大と労働者の能力の増大とに対応するいくつかのカテゴリーに分類することは不可能である。この場合には、卑しい変形あるいは高貴な変形といったものは存在しない。——ある労働者の技術的優越性が示されるのは労働の対象、生産物においてである。しかしこの技術的優越性はいわば消え去るためにのみ現われるものである。なぜなら、生産物はすぐさま他の生産物の総体の中に見えなくなるからであり、その生産物が部分として追加されたのと同じようにすぐさま別の生産物が追加されるからであり、集合的作品としての結果——これは別のある者に帰せられなければならない——の中にそれとして確認することはもはや不可能だからである。芸術家や技術者は他の人間と共同して作業する場合でも、やはりその作品の中に彼らの個性の印を刻み込む。彼らの作業、彼らが担当した作業部分は、その固有の美質及び欠点と共に識別可能な形で存続する。芸術家や技術者は一定の限界内で自発性を示すことが可能であり、革新によって全体を部分的に作り直すことが可能である。熟練労働者の場合はそうではない。熟練労働者は、布地の全体と彼の独自の計画とを同時に考慮しながら、布地の一部を埋める必要はない。彼はむしろある種の複雑な輪郭をつけ、微妙なタッチを決めなければならない。しかしそれらは他の部分との関係においてのみ価値を有するのであり、残りの部分の中に溶解してしま

い、そして、多分その部分は作品の最も困難な部分を代表するのではあろうが、注意は向けられないのである。熟練労働者の作業のこうした非人格的性質は（本来の）エリート芸術家を単なる労働者の水準に貶しめる。まさに生産物の中に個性を思い起させるものが何も残っていないが故に、全体が機械的方法、あるいは人間による機械的で単純な作業によって遂行され得るものと思われてしまう。ほとんど芸術家であった昔の職人の作業が単純で容易な操作に分解されてしまうのと同様である。近代工業における熟練労働者の作業条件が彼らについてのこうした解釈の原因となっている。そして彼ら自身もまさにこのように判断していることは疑いないところである。彼らはまた、非労働者と彼らとを分つ溝がいかにか深いのか、彼らの傍らで作業する人夫、下働き、未熟練労働者といかに多くの点で似ているかをも感じている。

かくして分業と作業の統合は、種々の労働者間の分離を基礎づけるどころか、むしろ彼らの間の際を消し去る傾向を持つ。労働者を総体としての機械の周辺に結集させること、労働者の活動を複合的な生産のために関連づけること、これらはそれほど集合表象あるいは階級表象につながってはいない。それはむしろすべての労働者に、物質的諸力に直面する中での孤立をより多く意識させるものとなる。機械に仕えることを役目とする下働きの労働者と、機械を作ったりあるいは機械ではできない作業をしたりする熟練労働者とに分割されたこと——これは分業の進展の結果であるが——は、労働者全体の二層への分割をもたらすわけではない。このような分割はむしろ、生産に協力するすべての労働者があらゆる個人的創意を断念し、独立的価値を持たない部分的機構<sup>メカニスム</sup>に自らを同一化しなければならない必然性をよりよく説明するものである。

しかし、作業の技術的条件とその社会的帰結についてのこうした分析はすべて<sup>アンデュストリー</sup>大工業を対象としている。これは、過去の遺物ではなく、多くの地点に土地を獲得し、多分近代経済システムの必然的な一部分をなしている<sup>プチ・アンデュストリー</sup>小企業<sup>メティエ</sup>にとって有効であろうか。——小企業を研究するためには普通、それが職人的生産体制の下で最も発展していた時代が参照される。その当時には作業者は（作業者としての）より大きな独立性を持ち、同時に、仕事に際しては人間、その欲求、その活動についてより頻繁に考察する状況にあったように思われる。ゾンバルトにとっては、手工業（Handwork）<sup>モラル</sup>の特徴的原理はまさしく職人の精神的態度及び心理的傾向のうち求められなければならない。さて職人は自らの独立性にとりわけ執着するであろう<sup>(1)</sup>。手工業の作業者は自足しており、他からの援助を必要としない。彼は芸術家ではない（自らを職人にしたのはルネサンスの芸術家たちである、逆ではない）。しかし芸術家と同じように、彼は技術的能力の他に作品の全体についての構想を持っていないなければならない。近代的意味での学者とも違って、彼に必要なのは生産のための、そして生産上の<sup>フワール</sup>権限の伝承のための知識であり、これはいわば全き一文化のごときものである。天賦の、あるいは獲得された個人的能力、伝承され選ばれ愛好される方法、前面に出てくるのはこうしたものであって、その位置と役割が不変の一事物、歯車の一部にすぎないという感情でもない。

- (1) Werner Sombort. Der moderne kapitalismus. Leipzig, 1902 (1<sup>er</sup> Band) die Genesis des kapitalismus, 1<sup>er</sup> liver et fin du 2<sup>e</sup> ) .

他方では職人はまさにその仕事の完成のために、人との頻繁な交渉に入るのであるが、それは彼らからの注文を受け実行することに限られてはいない。彼は顧客に提案する。しかし押し付けるということは恐らくしない。彼は顧客に対して、顧客には見当もつかないであろうが自分が仕事の中で考えたあれこれの修正や改善を持ちかけるのである。親方と職人との間に存在するのは服従関係だけではない。職人は親方と一緒に作業しており、生産物の質のことが量のことよりもしばしば彼らの心を占め、あるいは少なくとも量と同程度に彼らの心を占めているので、事あるごとに主人に相談し、新しい試みを示唆し、自分の思いつきをあれこれ言うこともあり得る。それ故、職人の作業と近代労働者のそれとの間には、ただその技術のみを考えても、大きな違いが存在するであろう。職人の具体的振舞いの中にはあらゆる種類の人間的表象が融け込んでいるであろう。そこにはより多くの創意があり、機械的なものはより少ないであろう。職人と商業的職業を営む者たちとの間には、あるいは弁護士や医者などの自由業の人々との間にさえ、明瞭な区画線は存在しないであろう。

しかしながらゾンバルトのこのような描写はまず第一に、非資本主義的な体制の下でブチ・アンデウストリ小工業が営まれている場合にのみ当てはまるものである。同業組合制度の下でさえ、そして機械の導入以前においてさえ、労働者がその独立性の大部分を喪失している大工業が存在していた。14、5世紀のフローレンスのラシャ製造の大工業に関するドラン (Doren) 氏の研究はこの点を十分に明らかにしている。フローレンスの同業組合はその元々の性格を失い、連合した大経営者に奉仕する搾取、管理及び規制のための機関となった。労働者たちは同業組合の構成員のためにしか働くことができなかった。同業組合は資本、器具、及び原料の貸付けを通じて労働者を意のままにし、給金を定額に抑えた。ところでたとえこれが恐らくは中世時代における例外的事象であるとしても、今日、独立の職人的生産は非常にしばしば見掛け上のものにすぎず、小生産者の大多数は多少とも集団化した資本家及び商人に対する、法的ではないまでも少なくとも実質的な従事の下にあることを認めなければならない。

小生産者たちが中心的企業と結びついているかいないかは重要な問題ではない。類似の企業の増加とその間の連続の容易さの結果として、すべての小企業家が甘受しなければならない給与と価格の平均水準が定められる。職人的小生産はもはや最も後進的な地域と産業分野においてしか存続しない。顧客が価格事情に通じておらず、他にどこに依頼すればよいのかを知らない場合もある。大企業家にとって、介入し生産を組織化して小工業家たちを支配することに利益が見いだせない場合もある。さらに需要が非常に分散しているか、あるいは手による作業が争うべからざる優越性を保持している場合もある。他のいかなる場合であれ、給与と価格の水準が定められてしまえば、職人は先のような一般法則に屈しなければならず、その結果として作業の時間と強度を固定しなければならず、最も需要の

多い価格の商品を生産することを余儀なくされる。その際彼はその仕事のやり方を特徴づけていた独立性の利点と思いつきの可能性を断念する。

職人がその職務を果す条件は、ますます、労働者が大工業において働く条件と同一化しつつある。その独自の階級表象の起源を見出し得るとすればそれは職人の仕事の技術的条件の中にではない。

### 三. 賃金労働者の概念

技術についてはこのくらいにしておこう。労働者について、彼らに命令と指示を与える人々との関係において、考察しよう。奴隷がその親方のために、職人がその顧客のために、自由な労働者が企業家のために、家内労働者が大小商店のために、時間、難度、技術の点で同一の条件の下で同一の仕事をするとしても、彼らが置かれている法的条件は比較し得るものではなく、彼らもそのことを理解している。まさにここにこそ、全く別種の明瞭に社会的な表象の一総体が存在する。それは条件に従っていろいろに変容することがありえ、労働者階級の意識が分散的に含まれるいくつかの集合意識の明確な中心となることもあり得る。

労働者が直接に働くのが顧客のためであるか、企業家のためであるか、さらには、大企業家であるか、中企業家であるか、小企業家であるか、株式会社のためであるか、<sup>マガジン・ビュブリック</sup>「公営店」のためであるか（その他多くの様態が考えられる）によって、彼らは、彼らを雇っている集団あるいは人物たちを同じように表象するであろうか、彼らはそうした集団や人物たちに対して同じような感情を体験するであろうか。しばしば労働者と親方の間には、とりわけ労働者自身が場合によっては自身企業家になれるような場合には、ほとんど距離が存在しない。家内労働においては、雇傭者はほんの少数の労働者としてしか関係を持たないことに利益を有しているので、雇傭者は彼らに対して大量の注文<sup>コマンド</sup>を発することになる。この場合には労働者は自らが下請業者（sous-entrepreneur）となる。しかしこのような人は彼自身が非常な搾取を受けたことがあるので、自分が雇傭している者たちを今度は自分が搾取するということが容易にできず、彼らに対して別階級の人間の顔をして表れることはないに違いない。独立の小<sup>アンデュストリ</sup>「企業」においては労働者が最後には身を立て開業することを希望する場合がいまだに見られる（小さな時計屋とか錠前屋とかである）。この場合条件はどちらかといえば特殊である。雇傭者とは往々にして、労働者がその家で手仕事を修得し、次にはその腕を別のところ、特に大<sup>アンデュストリ</sup>「企業」で発揮しにくいようになる、そのような親方に他ならない。（比較的稀ではあるが）時に職人の親方に対する古い関係が存続し、職人が今度は親方にならねばならないような場合がある。非常にしばしば労働者は労働者のままとどまるであろう。しかし、親方は彼の傍らで彼と同じように働いているのであり、他方では労働者の人数は非常に限られているので、小作人とその耕作を助ける者たちとの間と同じように、相互の間により親密な関係が形成される。自分で手を使って働きはしない人間のために働くようになるやいなや、労働者の態度は変化することにはならないであろうか。



他の労働者よりも多くの機械と能力を持っていた職人も同じ場所には居らず、職人たちの生活様式と通常の仕事は労働者に接近している。親方は全く別の社会集団に属しており、そこへは職人たちは入り込もうとする希望も考えももっていない。彼らが親方と面識を有し、そして、仕事についての個人的監督を通じて、あるいは利害損得の争いにおける厳しさを通じて、あるいはまたその親切さと人間性を通じて、親方が少なくともその労働者たちに対しては一個人として現われ、彼らが親方に対して一定の感情を持つ場合もあるであろう。往々 <sup>ディレクター</sup> 企業主 自身が <sup>アンデストリエル</sup> 大企業家 に仕える <sup>アンプロワイエ</sup> 被雇傭者である場合があり、彼らは経営管理の全責任を負わない。しかし労働者は、いつもは姿を見せない大企業家の代りに、もっと目に見えない一団の人々、すなわち多数の株主を想像することもできるであろう。このことは時に、昔の親方の家父長的権威と今日の資本による匿名の権力とを対比することによって表現されている。——恐らく雇傭者が被雇傭者に生じさせる個人的ないしは個別的な感情は非常に変わりやすいものであろう。職人的小生産の中には、その社会的水準まで上昇するのに苦勞しただけに一層強欲になってしまい、その結果労働者からは純粹にブルジョアの親方以上に嫌われる、小経営の親方が見られるであろう。逆に、特に関係分野における産業的飛躍の時期にあつて、経営者が労働者の生産努力を（強制の代りに）自ら給与の増大によって刺激しようとしている国では、資本家の <sup>グループ</sup> 集団と労働者の <sup>コレクティヴィテ</sup> 集団 との間には友好的な関係が成立し得る。とりわけこれら二つの集団が、一時的強調こそが彼らにとって、例外的状況から素早く利益を得るための唯一の手段であることを共に理解している場合にはそうである。とはいえ恐らくこれはまさに一時的で狭い範囲の集団に限定された、<sup>コレクティヴ</sup> 集合的反應である。こうした反應の一つがあるカテゴリーに属するすべての集団において恒久的に強いて求められる理由も、また職人、小企業の労働者、大企業の労働者、株式会社の被雇傭者のすべてが生産体制の中のあらゆる識別可能な各集団へと自らを組織する理由も存在しない。——しかしいづれにしても、このような生れかけの集団形成は、たとえ障害がなくはないにしても、労働者階級すべてが置かれている給与生活者という普遍的形式、特徴的状况の下で、労働者階級の意識の中に現れるであろう。

それにしても給与とはそれを受け取る労働者にとっていったい何であろうか。職人的生産あるいは小生産は、大工業がますます支配を強める経済システムの中で存続するために大工業によって作り出された諸条件に屈服し適応しなければならなかったことをまずは認めよう。（我々がすでに見たように）それらの技術は変容させられたばかりでなく、雇傭者に対する労働者の関係も、職人の親方に対する伝統的關係であることを止め、大工場におけるものにますます同一化している。職人の <sup>ト・デュ・サレール</sup> 公定賃金とその変動も大工業における公定賃金に依拠するものとなっている。

しかし大工業においては、給与は（ここでは給与を決定する自然法則は問題にならない）各分野内部における種々の規則に従って決定される。——炭鉱においては、「実際に産出する労働者すなわち石炭の採掘及び通路の掘進に従事する労働者は『出来高払い』で給与を支給され、出来高は、場合によって、掘り出された石炭の量であることもあれば、掘られた坑道のメートルによる距離のこともある。『 <sup>アントゥルディアン</sup> 保全 關係の労働者』は大抵日給で支払わ

れる。しかしながら他方には、むらのない、ある程度持続的な作業をしなければならないのに、生産的労働者と同じように、『出来高払い』で支払われている労働者がいる<sup>(1)</sup>。冶金業では、給与を定めるこれら二つの方法は非常に多様かつ不安定な形で混合している。このような工場では、「製鋼所の従業員全体が出来高払いである。この点は、日当で働いている地金の取り出し人夫を除けば、炉の従業員についても同様である。溶鋳<sup>フオンドゥリー</sup>業では、みんなが日当で働いている。攪鍊鉄工業では、攪鍊鉄工、その補助者、第三補助者あるいは球状塊運搬人、鍛鉄工、圧延工、鑄鉄運搬人、碎鉄工は出来高払いで働いている。目方工、装置運転手、そして計時係りは日当である、等」。繊維工業では、介添工、紡績工、糸結び工は通常、経糸を揃える職人つまり縞割工<sup>しまわり</sup>と同じく日当である。つなぎ工、かけつぎ工、織物工は出来高払いである。しばしば（機械を監督する）介添工自身は、作業量あるいは製造物の量を測定する機械的計器を使って決められた条件及び通り相場に従って出来高で支払われる。要するに、そして一定量の様態を通じて、報酬の本質的な二形態は時間給と出来高給である。

(1) Charles Benoist, livre cité.

さて、出来高払いの労働は労働者に対して二つの自由、すなわちその収入を増やす（あるいは制限する）自由、及び作業強度を増大させる（あるいは減少させる）自由を与え、そして時間給はこのうちの第二の自由のみを与えるように思われることがあり得る。ことに鉱山では、鉱石運搬車の値段はそれぞれの切り羽、仕事場で、切り羽の長と班長ないしは監督——切り羽では彼が雇傭者ないしはその代理人（技師、等）を代表している——との間で相談がなされる。鉱層のあり得べき層丈、層厚が計算され、ダイナマイト使用の請負契約が結ばれる。このことから、「労働者の意思、知性、活動に対してかなり大幅な自由<sup>マルジュ</sup>が与えられ」、彼の給与を上げるのはかなりの程度において親方である、と結論すべきであろうか<sup>(1)</sup>。

(1) Benoist, livre cite, p.220.

しかし、多くの仕事<sup>メティエ</sup>において労働者たちは出来高賃金による労働に対して敵意をもっており、またそれには十分な理由がある。時間給の場合、労働者が可能な限りの全努力を傾けていることを雇主に対して証明するものは何もなく、とりわけ技術あるいは労働組織が変更されたばかりの時はそうである。出来高給労働を設けることによって彼らは労働者を刺激し、労働者はその稼ぎを増やすために力の限界まで行く。ひとたびこの経験がなされるや、時間労働を復活させ、可能と認められた労働リズムを取らない労働者に警告し、あるいはそれを解雇すること、あるいは、出来高労働は維持したままで、労働者の受け取る給与が平均では時間給で働いた場合と同じになるように単位賃金を下げることにせよ雇主がこうしたことをするのを妨げるものは何もない。それ故時間給と出来高の間の

違いはうわべだけのものであろう。時間給労働は労働の最小強度を予想させ、出来高給労働は、労働者が越えることのできない日給の最大限を予想させる<sup>(1)</sup>。これはまさに労働者たちがよく知っていることである。このことは、労働者たちがそれについて示す判断評価という点で見れば、労働に対する報酬のかれら二つの主要な様式を混合することを可能ならしめ、労働者階級の意識の中で表象されている、給与についての、実際消極的ではあるが、第一の側面を規定することを可能ならしめるものである。

- (1) Schloss (David), *les Modes de rémunération du travail*, 3<sup>e</sup> edition. Traduit par Rist (Charles). Paris, 1902.

労働と給与との交換は商業的取引との類似点を全く持たない。しばしば人は、労働市場について語り、よく労働を一定の価値と価格とを有する一商品と考える。マルクスは労働者はその労働力を経営者に<sup>バトロン</sup>売ると言った。それにもかかわらず労働者は商人と自分とを同一視することできない。一定額の金銭と引き替えに自由を買った奴隷が別の主人に自分を高低はともかくある額で転売すると想定しよう。彼は有利な取引をするかもしれないし、不利な取引をするかもしれない。しかし経営者に（もし望むならばであるが）一定量の労働を売る労働者は、その一定量の労働を買ったのではないし、従ってその価格を自分自身で決めることはできない。ウェッブ夫妻<sup>(1)</sup>は正当にも次のことに注意を促している。すなわち、産業的及び商業的な一連の取引全体において、売り手は原則として買い手に対する関係において劣った立場にある。なぜなら買い手は市場の状況を待つことができ、しかもそれをよりよく知っているからである、というのである。ところで、小売業者、卸売業者、取次業者、<sup>アンデュストリエル</sup>企業家は代わる代わる買い手であり売り手であるのに対して、小売業者の顧客は買い手たるに過ぎず、労働者は売り手たるに過ぎない。企業家が労働者に対してその労働を一定価格で欲しいと言う時、労働者は誰か別の人に向かって次のように尋ねることはできない。私から今買いたいと望まれている生産物あるいはサービスのために、私は貴方に対してどのくらい支払ったのか、と。さらにマルクスのように、労働者は自分の売っているものが何であるかを知らず、■六労働時間■を売っていると信じており、実際には■八あるいは十二労働時間■を要求されている、というふうに言うことも正確ではない。経営者は確かに出来高労働や特別手当の他に労働者と訓練するための多くの手段を有しており、例えば技術組織をほんの少し変更するだけで、労働者が監視しなければならない機械の数をあるいは速度を増大させることによって、徐々に労働者の努力の度合を増大させることができる。しかし労働者の側ではいつでも労働契約を破棄することが可能なのであるから、彼が売る用役の「<sup>セルビース</sup>使用価値<sup>ヴァルール・ド・ユサーージュ</sup>」を彼が知っていることは否定できない。

- (1) Webb (Beatrice and Sydney) . *Industrial democracy*. 第三部（労働組合の理論）の第二章（市場におけるかけ引き）において著者たちは次のことを示している。すなわち自由競争と個人契約の体制においては、市場におけるかけ引きは「肉体労働者、資本家雇傭者、卸売業者、店員、顧

客」を巻き込んでの値切りの一「連鎖」へと還元されるということである。労働者の資本家とのかけ引き交渉における二つの本質的な弱点は次の点にある。一、資本家はその年間利益の一部が減少するのを見ればすむのに対して、労働者は飢えの危険があり、二、雇傭者は労働者の状態とその欲求を知っているのに対して、労働者は雇傭者のそれを知らない。(p.654 sqq) .

我々は、それぞれの時期、地域において労働が時価を有することを喜んで認めよう。しかし労働を売ることが商行為たり得るためには、労働市場が存在するというだけでは不十分である。ある商業市場に現われる生産物は、売り手が費した価格とは異なる価格で呈示されている<sup>(1)</sup>。それ故商業的利益が実現されるのは、市場そのものにおいて、売渡しそのものによって、である。逆に労働には一つの価格が存在するだけである。そしてもしある「労働者」<sup>トラヴァユール</sup>がある「もうけ」<sup>ベネフィス</sup>を実現できるとすれば、それはただ、市場から遠ざかるか、市場価格を知らない依頼人（この場合、依頼人であっても経営者であっても構わないが）と交渉するか、市場そのものにおいて傷んだ生産物を売るかあるいは量目をごまかして売るか（これはつまり不完全な仕事をしたりひどく緩慢に働いたりすることである）、あるいはさらに、価格以下でたくさん売ってより多くの現金をもって罷めるか（これは出来高払いでとてつもなくつめて働くことである）することによってであるが、これらは「商売を台無しにする」ことであり、無際限には更新できないストック（身体力）を涸渇させることである。市場において正常に遂行される売買は利益をもたらすものでなく、従ってそれは商業ではない。そしてこのことはすでに、給与というものを、他の多くの報酬様式から明瞭に区別するに足るものである。

- (1) 農夫がその生産物を市場へ持って行く時、そこでの売却は、それが彼に儲けをもたらさない限り商行為ではない。儲けをもたらさなくとも商行為であるとすれば、農夫の買い手に対する関係は、職人の顧客に対する関係と異なるところがないであろう。これはすなわち（我々の社会では）、彼がここで我々が理解している意味での労働の売渡しに帰着することである。

さらに進んで、給与に関連し労働者階級全体に共通する社会表象、しかもここでは積極的な社会表象が存在するかどうかを考えてみよう。その社会表象とは、労働者に対してその労働と交換に規則的に渡され、少なくとも一定期間は固定されている一定の全額、ということだろうか。その際には、給与 (salaire) と、商工業、公共事業における被雇傭者の給料 (appointements)、役人の俸給 (traitements)、自由業の執行に伴う報酬金 (emoluments) 及び謝礼金 (honoraires) とは区別されていない。労働者はその他に、彼の給与がそれぞれの時期に決定される一つないしは複数の原則を想像しているであろうか。労働者はある工場へ入る時、彼と経営者との間で個人的契約が確かに結び結ばれるのではあるが、それは実際のところいかなる議論の対象でもない。相互が仕事と期間に基づいて工場での公定賃金に従うのである。この公定価格はまた、彼らの外部で決定されるように見える。給与は一つの社会現象である。他方我々は、労働者が給与はいかにあるべきもの

と望んでいるか、いかなる規準に従って決められるのが望ましいと考えているか、については探索しようとは思わない。それ故、労働者のある者たちが給与は仕事の難度、強度、重要性と関連させるべきだと要求したり、あるいはさらに彼らの労働の統合的産物を要求したりしていることは、ほとんど問題にならない。

しかしながら、労働者が彼の入った工場で実施されている給与を一言も云々することなく受け容れるならば、そしてひとたび彼が労働者集合体のただ中に身を置くや、彼は労働者集合体の要求と運動に加わることになる。ところで、労働者にとって有利になるものを一般の人々が認識し、労働者自身も最も明瞭に理解するのは、労働者が賃上げを要求し、それを獲得するために十分なまとまりと活力をもって要求する場合である<sup>(1)</sup>。——給与の増額を要求する際に訴えられる動機理由は多様である。疑いもなく最も一般的な者、常に多少とも言外に意味されているもの、それは生活費の増大である。しかし、この生活費の増大なるものは曖昧であり、何時でもというよりも特定の時期に介在し作用するものであること、まさにこのことのゆえに労働者の要求を決定するものではない。彼らが求めるのは一つの口実ないしはより明確なきっかけ、例えば例外的な好景気とか産業における価格の単純な高さとかである（パ・ド・カレの坑山においては石炭の高値の結果として、1889年のストライキの後では特別手当は10%であり、1899年には25%になり、1900年には30%になり、1901年には40%になった）。あるいはさらに、労働者は同一産業において支払われている比較的高い給与を別の地域においても要求し、給与の統一を要求するであろう。これは一産業全体に適用される集会的契約制度によって、時に彼らが実現しようとしているものである。

- (1) フランソワ・シミアン氏は、*Année Sociologique*, 6<sup>e</sup>année, 1903, p.504 sqq に引用されたシュロスの著書の翻訳の初めにあるリスト氏の端書きについて論じて次のことを示している。すなわち、給与の減額のおそれがある時労働者が「同一労働同一賃金」の準則に訴えたとすれば、この準則は特に労働者にとっての利害関係における防衛原則である。彼らの抵抗の背後に、彼らにとって何が正義かについての考え方が存在することは確かである。「それは給与は個人と無関係の原因によって下ってはならないということであり、各人にとっては、同一の労働については今日も昨日と同じく同一の賃金を受け取る権利である……」。それ故、労働者が給与は実際に■確定されている■と考えるのはいかなる場合かを探るべきは、労働者が正義という論拠に訴え、あるいは彼らの利害の背後に身を隠している時期においてではなく、また、給与が確定されていることを彼らが正しいと考えまたそれを望む理由を表明している時期においてではない。それは投機の時期においてである。

その際労働者たちが経営者に対して、経営者が次のような二つの方法で労働者に損害を与えようとするのを非難しそれを阻止しようとするのであれば、それは何を意味するのであろうか。経営者の用いる二つの方法とは次のようなことである。すなわち、彼は予め予測されていなかった価格の上昇によってのみ利益を得ることを欲する。その際には労働者も

同じく利益を得る。第二は、経営者は給与の地域間格差を労働者に不利な形で利用しようとするが、労働者はそのことを認識すればもはやそれを支持しようとはしない。しかしいづれにしても、労働者の上記のような態度は、労働者にとっては給与の定額と価格との間に■一定の関係（ラポール）■が存在することを証明している。価格が上昇する時には給与の上昇を要求したそうさせるからには、公正<sup>エキテ</sup>に関わる問題全体とは独立に、労働者は給与が価格と共に変動し得るものであり、給与の限界は価格との一定の関係において移動するものであると信じているということである。そして彼らが職業全体において給与が同一であることを要求するからには、この給与と価格との関係は、労働者にとっては、価格の共通の一水準が存在するのと同じように給与の共通の一水準が存在するに違いないことを意味するものである。

それ故、給与についてのこうした集合表象のすべてにおいて、二つの事物の間の量的関係——そのうち一方すなわち価格は一つの量であり、他方すなわち労働も同じく一つの量に違いない——という観念が見られるであろう。ここで更に進んで、労働者の意識の中にこの第二の量（労働）そのものについての形式的表象を想定することは可能であるだろうか、さらには有益あるいは必要であろうか。ここでは問題なのはもっぱら表象であること、すなわち意見と信念であることに注意しよう。事物の実質内容はここでは問題ではない。労働が現実、それ自体において、一つの量であるかどうかということもここでは問題ではない。労働は同質的実体であることからほど遠いものである。種々に異なる職種<sup>メティエ</sup>の労働を量的に比較することの難しさは措くことにしよう。それにしても、中間時点における労働の時間、一日の終りににおける労働時間、週の終りににおける労働時間、これらははじめの労働時間と同じものではない。年齢、地域、気候、季節等によっても労働は同じものではない。マルクスのように、あれこれの目的<sup>オブジェ</sup>を遂行するために社会的に必要な労働量について語ることに、あらゆる労働を単位を用いて、労働時■間■（temps de travail）で測定しようとするに、これは確認することの決してできない、そして決して現実に到達しえない一理論を構築することである。繰り返すが、労働が一つの量であるか否かは重要なことではない。社会的思考が労働をそうしたものとして想像することができるということ、その結果として社会的思考が労働を（幻想と引きかえにであれ、非常に抽象的な社会的約束<sup>コンヴァンション</sup>によってであれ）測定することができるということ、これだけで十分なのである。給与の定額制の樹立、定額の相対的固定性、価格が上昇する時には給与も上らなければならないという考え方、そして給与の統一の原理、これらはそれぞれ、社会的思考が■右■のようなことをなし得るということの証明をなしているのである。

さて、労働者階級の構成員に押しつけられるこうした集合表象は恐らく、彼らを事務系職員や公務員から分かつもの、また彼らを階級として経営者に対立させるもの、を彼ら労働者に最もよく自覚させるものであろう。彼らの労働は（その正否はともかく）一つの純粋な量とみなされているので、その際には彼らは自分というものがものの数に入っていないと感じ、容易に取り換えがきくものと感じ、年齢も性質も性向も感情も何ら意味を持たない単位になっていると感ずる。事務系職員や公務員はこれとは異なる（1）。給料

(traitments) や俸給 (émoluments) が一般的諸規則によって決められていることは確かである。しかし、どの規則にも優先する支配的な規則は、彼らの年齢と共に、その仕事と責任が増大しない場合でもいずれにしてもその条件が改善されるということである。報酬が支払われるもの、それは実際に成就された仕事に対してであるか、そしてそうしたものは存在するのか。すべてはあたかも職員が、その関っている企業あるいは公益事業にますます深く関与するようになり、同時に総利益のうち彼に帰せられる部分がますます大きくなるかのように進行する。事業にとっては彼を忠実な仲間にするのが問題なのであり、彼と勤め先との間に連帯の絆を作り上げることが重要なのである。そしてまた彼が徐々に、それなしでは企業が統一性と連続性を欠くことになるのであろう、伝統と精神の如きものを体得することが重要なのである。かくして、働き過ぎ (surtravail) あるいは停滞 (stagnation) の時期には彼らは自らを機械と見做すことがあり得るにも関わらず、大抵は、彼らとその指導者の間の関係は実際に人格的である。指導者たちはこのことをよく知っており、心の琴線に触れる機会を逸することはない。

- (1) これは、ブルガン (Bourguin) 氏による次のような命題を我々が認めないことを意味する。彼は言う。「プロレタリアを作り出すのは給与生活者の条件ではない。それは報酬の乏しさと <sup>エグジスタンス</sup> 暮らしの不安定さである。契約なしに自らの判断で働く自家製家具製造者、自分の生産物を行商するかご細工師、町の人々の小さな仕事をして歩く巡回仕事師、彼らはその独立的状況にも関わらず、プロレタリアに他ならない。このことは十分に仕事がなく報酬の少ない教授、医者、経営顧問、についても時に同様である。その代り、十分に給与を支払われている精密機械工や彫金工、規則的に給料を受け取る公務員や商社の事務員は真の給与生活者であってもプロレタリアではない」(Les systèmes socialistes et l'évolution économique, p.194)。もしプロレタリアということが貧乏を意味するのであるならば、その通りである。しかし著者は <sup>サラリエ</sup> 給与生活者という用語を余りに狭い意味に取ったり (なぜなら彼の言う「独立の」 <sup>トラヴァユー</sup> 労働者は、我々にとっては、実際に給与を受け取る人々だからである)、余りに広く取ったりする (なぜなら、我々が説明しようとしているように、<sup>サレール</sup> 給与と給料 (traitement) との間には根本的な差異が存在するからである)。

労働者は同じ幻想に身を委ねることはできない。たとえ何人かの経営者、大会社が年取った労働者のために救済資金、補償金、年金を予め計画したとしても、また彼らが、労働者の家、という制度によって労働者を工場につなぎとめようと努力したとしても、労働者たちはこうした施策に大した意味を認めないか、あるいは警戒心を抱いている。労働者が工場で、あるいはある職業で過ごした時間が全く考慮されないこと、同じ量の労働はそれが年配の労働者によって遂行されようと若年の労働者によってなされようと賃金は同じであること、年取った労働者はにべもなくいきなり別人に取って代えられること、彼らはこうしたことをよく知っている。働いた時間が雇傭者にとっての労働者の価値を高めるものではないのみならず、彼らの勤勉と能力も彼らにある種の好遇、抜擢をもたらすものではない。給与が時給であれ時間給であれ、本質的な点は依然として一定量の生産物が毎日引

き渡されなければならないことであり、この生産物が一定の型式に合致していることである。本質はそれらが受け入れられなければならないことである。もし生産物が基準に達しない場合には、彼は罰金ないしは給与の減額を蒙らなければならない。もし生産物が基準を越えた出来である場合、すなわち完成度が高く入念な仕事が行なわれている場合、労働者は給与が増えるわけでもなく、ほめられるわけでもない。ところで事務系職員や公務員にとって、賞与、特別昇給、抜擢は、「過剰熱心」すなわち強制されない特別の<sup>セルヴィース</sup> 尽力 に対する、また誰も当てにしなかった成功に対する、報償としてぴったりのものである。これはつまり、公営機関、<sup>セルヴィース</sup> 管理事務部門<sup>アドミニストラシオン・ビューロー</sup> においては、すべてが機械的に行なわれるのではないこと、そこに旧套墨守や無気力が入り込むのを幹部たちは警戒しなければならないことがあり得るということである。そこには規律と規則正しさが必要であるが、それらは工場におけるようには達成が容易ではない。工場では手は機械のリズムと運動に従うことを余儀なくされるからである。しかし事務部門等においては規律・規則正しさが計画され自発的に追求されなければならないのである。そうしたところでは、不手際に対する、簡略化に対する、難しいケースにおける解決法に対する、警戒的な注意が必要である。しかしこのような注意は強制され得るものではなく、しかもその欠如は、歯車をきしませる錆や顧客が受け取りを拒否するような生産物の不出来と同じような速さでは確認されえないものである。それ故に、その活動が見掛け上最も私心なく、その労働が、たとえ有効ではなくとも強靱な善意を示している人々が、模範として推薦され、報酬を与えられるのである。ほとんどの工場長や職工長たちはこの点では事務系職員の心性とも言うべきものを持っている。

また同時に労働者たちは、彼らの労働が一つの量と見做されることから経営者たちが利益を引き出していることを感じている。労働が量と見做されることによって経営者たちは、商人が価格とは別の量に投機するのと同じように、労働という量に投機することができる。産業の経営者たちは常に必ずしも商売をするわけではない。しかし商売をするとなれば、彼らが投機するのは価格の相違に対してよりもはるかに給与の相違に対してである。——投機、これは常に、二つの集団の間で欲求、傾向、意見の正確な適応、一致が欠如すること、これを利用することである<sup>(1)</sup>。小売業及び卸売業の場合このことは自明である。もし顧客あるいは小商人が生産者と直接関係するならば、卸売業の利益は消滅するであろう。とはいえ、卸売業者の利用する不均衡が彼らの努力の結果であり、人為的なものであると考える必要はない。このように間接的関係に置かれ直ちに不一致の状態になるのは事柄の本性によって、この場合、表象の集合的<sup>ナチュール</sup> 本性によってである。小売商人と産業家とが相互に接触を保ち絶えず適応を繰り返すには、小売商人は余りに顧客に気をとられており、産業家はその生産活動と労働者のことに気を取られすぎている。この事情から、彼らの関係という点では、どちらかといえば受動的な態度が現われてくる。双方とも卸売商人の言う価格を認め受け容れる傾向を持つのである。ともかくも卸売商人が一つでも従わなければならないものがあるとすれば、それは産業企業家よりもむしろ小売商人の言うことである。後者は買い手であり、前者は売り手に他ならないからである。とはいえ、産業企業家はと



もかく教養もあり老練な人々であり、また余り統合化された集団は形成しないので、先に述べた無気力、惰性の力を大いに免れることができる。彼らの本来の機能が価格を決定することにあるのでないことは確かである。しかし、卸売商人がそれを通じて直接に顧客に到達するところの百貨店がやるのと同じように、彼ら産業企業家が価格に作用を及ぼし、小売商人の要求を制限するには、彼らの何人かが商人たちの主張に対して抵抗するだけの考えと力を持っていれば十分である。実際労働者たちが、産業企業家も投機家であると考えたとしても、それは間違っていない。産業企業家も商人と同じく孤立した個人ではなく、集団をなしてはいる。しかし彼らの役割は■変動する絶えず適応することにあり■、集団による集合的影響力は抵抗不能のものではなく、彼らの個々人がかなり大きな自発性を保持している。彼らの機能は、彼らが柔軟であること、その評価と態度を速やかに変更することを要求している。一方における労働者、他方における民衆のような、より受動的で動かすのが難しい集合体のあいだにあって、彼らはより速やかに、より自由に動き回ることができる。

- (1) 我々の著書 *les Expropriations et la prix des terrains à Paris* (Paris, 1909) において、我々は投機の本質と役割について研究している。pp.17-21, pp.377-389.

労働者階級は特に、その構成員個々の教養の欠如とその状況の類似性によって、他に比べてはるかに鈍重で無気力な集合的全体である。この階級は一定の給与と一定の労働条件にならされており■<sup>マッス</sup>(1)■、状況の下でしか、またある程度時間が経った後出会いか改善を要求しない。雇傭者が利益を得ることができるのはこのことのゆえである。労働者が、給与は労働量と価格との間の一関係であることを、十分明瞭に認識するのはようやく間においてからであるということ了我々はすでに述べた。この考え方は、それが十分に広まり自覚されるようになるや、労働者たちに、その労働量そのものは増えていない時にさえ、給与の増額を要求させる原因となった。しかしこうした時期以外では彼らの受動性、すでに古くなった条件への慣れは、給与はとりわけ労働量と関係しているとか、給与は労働者の努力の価値そのものを計るものであるとかいった、曖昧な感情の中にむしろ現われる。価格の低落に際しての給与の低下にはすべて彼らが頑強に抵抗するのはこのことの故である。また彼らが、価格高騰が給与の増額を可能にする場合でも、すぐにはそれを要求しないのは特にこのことの故である(2)。このような場合でさえ彼らは、労働量とは何であるかということについて余り明確な表象は持っていない。彼らが給与の引き下げに抵抗するとしても、やむを得なければ同じ給与でさらに一層働くことには同意するであろう。一日の事後と時間の短縮の場合に彼らが以前の一日の給与の維持を要求するとしても、必要とあれば彼らは労働の強度を増大させるであろう。こうしたことは一つの戦術であることもあり得る。労働者は定額給与を獲得するために余りに多くの苦勞をしたと感じており、必死でそれに執着するということである。しかし、次のような混乱した考え方によっても説明され得る。つまり、給与は実際に、労働に付与される一つの量として、労働の価値を表現

しており、一日の労働の価格を減少させることによってこの価格が歪められるのを防がねばならないという考え方である。いくつかの場合にはこうした集合感情は経営者側の思惑を妨げることもある。しかし大抵の場合、これは経営者に有利に作用する。経営者が、価格の騰貴にも関わらずある期間給与を一定額に維持することができ、状況を大いに利用した時にのみ労働者の要求に譲歩するということが可能なのは、労働者のこうした「保守主義」のおかげである。経営者にこうしたことが可能である、その度合には高低があることは確かである。大抵家内工業において、労働者がその価格を知っている製品を有能な労働者と一緒に作っている <sup>アルティザン</sup>職人 の場合には、こうしたことはほとんど不可能である。(但しこの場合には非常に熟練し教育されている労働者を考えている)。しかし給与が存在するところではどこでも、給与生活者は、給与が確定されていることに執着し、時には定額制を要求するにも関わらず、ぼんやりと次のように感じてもある。すなわち、このような固定性から経営者は利益を引き出すことができること、労働を「量化する」このようなやり方は、労働を結晶させ、投機の対象となり得る生産物一般と同じように、労働を一つの <sup>ショーズ</sup>物 に還元してしまい、刻々にその価値が変化する、生きた人格的な一実体、人間活動とはしないこと、である。

(1) ■原著 115■

- (2) ベルギーの労働者の生活条件に関する非常に客観的な調査に基づいてローントリー (Rowntree) 氏は次のように結論している。すなわち、工業労働者の給与がベルギーにおいては非常に低いとすれば(イギリスの場合のほぼ半分である)、それは「労働者は一般にその労働の全価値を獲得するために十分な努力をしない」ことに由来する、という。(Comment diminuer la misère? Etudes sur la Belgique. Traduction française, Paris, 1911)

これまでのところを要約しよう。我々が問題としてきたのは次の点である。我々は労働者階級一般について語るができるかどうか、我々が経験的に労働者という呼称を付しているすべての個人あるいはむしろすべての集団、これらに共通する表象の一総体は存在するかどうか、そしてこれら集団のいくつかに固有の別の表象が逆に前面に登場してそれらの間で分離の <sup>フランシブ</sup>原因 とならないかどうか、という点であった。まず <sup>アンデュストリー</sup>工業 の本性を考察し、そこから炭鉱山、繊維工業、冶金業を比較し、我々は次の点を確認した。すなわち工業という <sup>イデー</sup>概念 は、それに参加する者たちが昇ってゆく一つの明確な社会的地位という考え方とは全く結びついていないこと、それ故工業という概念は階級という社会的表象を基礎づけることはできないという点である。工業的生産の機構と技術的組織、特に分業の主要な様式に目を転じて、我々が見出したのは次の点である。すなわち、様々の活動、労働の種々の局面が非常に緊密に、歯車のようにかみ合わされているところでは、作業のこのような密接なつながりは、<sup>メティエ</sup>職種の多様性——しかも職種のもそれぞれは、このようにつなが合わされた労働の一総体を含んでいる——のうちに表現されるという点である。しかし、多様な担当作業のこのような機械的連結は、このように関係づけられた労働者たちを独立

の一集団として接近させ融合させるどころか、彼ら自身はその歯車にすぎない、機械という観念をますます彼らに押し付け、生々した集合意識が労働者の各集団の中で発展するのを妨げる。最後に、産業組織にではなく、ある面でそれと関係しはするが、技術的能力の差異に由来する例の区別を取り上げ我々は次のことを指摘した。すなわち、いわゆる熟練労働とその他の労働との間に厳密な境界線を引くことが困難であること、下働き労働者のうちにも職人的労働者のうちにも、これら二つの集団を対立させるかも知れない、敵愾心あるいは排他主義の感情を見出すことはできないこと、である。

こうした、労働者の機能を検討するための種々の観点そのものの分析によって、我々は労働者の本質的な一般的特徴を取り出すことができた。すなわち、素材が何であれ、労働者はその作業において、またその作業を通じて、素材と関係するだけであり、人間とは関係せず、自然に直面する形で孤立したままであり、生きていない諸力にのみ衝突するものであること、労働者はさらに、その活動を機械のリズムに従わせなければならず、その行動を作業の仲間のそれに結びつけ一致させなければならないこと、それはあたかも機械のまさに機械的な働きを再現するが如くであり、自然法則と同じように規則的で非人格的な法則に従属してのみ素材を馴らすことができるかの如くであること、そして最後に、労働者は、下働きの労働者であれ職人的労働者であれ、創意というものは何であれ差し控え、信頼できる道具、単純か複雑かはともかく常に単調な作業にうまく適応した道具、これらになること、あるいはこれにとどまることのみを目指さなければならないこと、である。

要するに全体はあたかも次のように経過する。すなわち、社会は、素材物質に対して働きかけるために、その際に社会が利用する人間諸集団に対して、少なくともその作業においては、そして彼らとその作業を遂行している間は、社会生活そのものを、また彼らを結びつける社会的紐帯を断念すること、自らを孤立させ分散させ、固定し、その箇所での思考を、加工すべき素材に、監視すべき機械に、手を入れるべき瞬間に、なすべき動きに、集中することを義務として強制し、「人間的なるもの」、そしてとりわけ社会的なるものすべてがその間彼らにとって無縁なものとなることを強いるのである (1)。

(1) クロノフォンの以下の文章の中には工業労働と社会生活との間の対立がはっきりと記されている。

(以下はアルプバックスによるギリシア語からの仏訳を和訳したものである——訳者)「機械的と呼ばれる<sup>アール</sup>仕事はけなされている。世論が機械的と呼ばれる仕事を尊敬しないのには理由がある。そのような仕事は労働者も彼らを監督する人間もその身体を破壊し、坐った姿勢を続け、日陰で生活し、時に火の近くに長くとどまることを強制する。ところで身体が柔弱になると心も柔弱になる。さらに我々の同胞と国家に対する義務の完遂にとってこれ以上対立するものはない。したがって肉体労働者はよくない同胞、祖国の意気地のない防衛者と考えられている。」(Economi- que, IV.)

労働者についてのこのような定義はしかし、個人的で消極的ではないだろうか。労働者がこのようにいつも置かれている孤立状態の中でも、作業を停止することなくぼんやりと

考え感ずることのできる時間に、自らに欠如しているもの、社会生活、それに苦しむにせよ慣れてしまっているにせよ他の人間との接触の欠如、を彼らが思い出すこと、またその際社会に対する、特に彼らに似ている人間たちに対する自らの立場を自覚すること、これは十分に考えられることである。しかしながら、ある表象が社会的であり得るのは、それが個人の中にあるにしても、その属する集団を根拠として存在し、集団が個人に対して一定の表象を課する、そうした場合のみである。

さて、この欠如の感覚、辛い孤立の感覚、個人は社会に慣れており、その中で生きることを自然と感ずるがゆえにいずれにしても多少とも見られるこうした感覚は、それ自体によって疑いもなく社会的なものである。社会は事実上我々に、社会の懷の中で生活することこそが我々にとって自然であるという観念を強制しており、社会から引き抜かれ切り離されている場合でも我々の感情の基礎にあるのはまさしく社会的な意識<sup>ノーション</sup>であると言うことができる。しかしそれにもかかわらず、個々人のこうした感情は個人的な形を取ったり社会的な形を取ったりすることがあり得る。そのような感情は独房の囚人によってと同じく、例えば家内労働者によっても個々人に経験されるであろうし、また、工場へ行って労働条件について仲間と何ら意見を交換することもなく帰る労働者によっても経験されるであろう。そのような感情は別の場合には社会的に経験されることもあり得るであろう。すなわち、仕事場の精神的孤独の中で生まれ成熟した個人的印象<sup>ペルソナル</sup>ではなく、その集団の中で成長した意見と観念とが労働者の意識において前面に出てくる場合である。

以上の事情によって我々は、労働の組織及び技術、あるいは労働者と素材物質との関係に次いで、彼らを雇う人々と彼らとの関係、あるいは彼らの法的条件を検討しなければならなくなっている。この新しい種類の関係は紛うかたなく社会的な表象を事実上決定するものである。なぜならこの関係は、労働者の集団にとって、他の社会的諸表象と対決する機会だからである。労働者の社会的表象が他の社会的表象と混じり合う度合に応じて、また経営者あるいは顧客との関係に関心をもつ諸集団に共通の見解と混じり合う度合に応じて、これまで分析されてきた諸概念（技術、組織、能力、工業、職種<sup>メティエ</sup>）はある社会的価値を獲得するようになるであろう。

すべての労働者に共通する法的あるいは社会的な表象が存在するであろうか。大小の産業の、あるいは職人的生産の労働者たちは、雇傭者に対する彼らの一般的態度によって区別され得るものではない。この労働者の態度は、雇傭者に対する彼らの位置に依存するよりもむしろ状況に依存するところ大であるように思われる。大産業においては、給与の決定様式は様々であり得る。しかし、時間給と出来高給は区別さるべきであると考えする必要はないが、さりとて、それらを受け取る労働者を同じように考えてもならない。なぜなら出来高給の場合には、報酬は努力に、より正確に比例するであろうからである。現実には相違は見掛けだけのことにすぎない。現実的影響を持たないこのような多様性全体に君臨しているのは給与生活者<sup>サラリエ</sup>の概念であり、これは労働者階級の意識の中で特別に明瞭である。これは本来的に労働者階級の意識の中核である。給与は、それが比較的固定的である点において、また時々の状況、投機の能力あるいは利益機会を共に変動するような部分を含ん

でない点において、まずは商業的利得から区別されるであろう。生産物が顧客に到達する以前に通過する者たちすべての中で、労働者は投機をしない唯一の存在であろう。しかしこの点は給与についてのただ消極的な特徴づけにすぎない。労働者が、あるいは労働者<sup>コレクティブ</sup>「集団」がその給与の引き上げを要求する時には、彼らは給与定額と価格水準とのあいだに量的な（しかも彼らにとっては理解できない）ある関係が存在していると感じていることを我々は確認しておいた。彼らは更に進んで労働そのものが一つの量であり、従って同質で物質的なあるもの、人物から独立し、労働者の固有の質から独立したあるものと（是非もなく）見做すようになる。

この点において労働者の立場は企業職員や公務員のそれとは対照をなしている。後者は商人ではないが、その労働に対してと同時に、職務の古さ、時に臨んでの情熱、知的あるいは精神的な資質に対しても報酬が与えられているのである。またとりわけこの点において労働者の立場は雇傭者のそれに最も明確に対立する。雇傭者は給与に投機し、給与と物価との差異に投機し、異なる地域における同一産業の給与の差異に投機するからであり、雇傭者にこの種の投機を可能ならしめるのはまさに労働者の労働を純粋な量として処理する可能性だからである。

かくして我々の分析の二つの部分は再び結合し、相互に証し合う。労働者は、物質的諸力を前にして孤立し、その作業において人間とのあらゆる関係を奪われているが、彼はそのことから必ずしも自らの条件を一つの社会的事実として表象するようになるのではなく、それを自分の責任と考え、個人的観点から考えるにとどまることもあり得ると言わねばならない。しかし給与及び給与生活者という、我々が特に取り出した概念は、逆に、社会的表象である。個人は、孤立状態ではそのような社会的表象にまで上昇しないであろう。彼の集団、労働者のいくつかの集団の状況を、他の集団のそれと比較することが可能でなければならない。ところでこのような比較は、社会的意識においてのみ可能であり、社会的用語においてのみ表現され得る。——一階級としての労働者階級という意識がこれまで必ずしも存在せず、多分非常に最近まで覚醒せられなかったのはこのためである<sup>(1)</sup>。同業組合の労働者と、初期のマニファクチュア—あるいは炭鉱山に現われ始めた大工業の労働者との間には、今日大工場の労働者と小企業の労働者との間に存在するのと同じような連帯が存在したとは思われない。彼らの法律的立場が異なるのである。国内的ならびに国際的な商業関係と大規模商業が現在のように発展していなかった時代に、親方になる機会を持っていた同業組合の労働者たちは、いつか自身で商人の機能を果すべく期待されていると感じていた。彼らの個人的資質と仕事場での古さは親方の目にとって無視できぬものであった。大マニファクチュア—と大経営の労働者はこの時代から階級意識を示しているのであろうか。階級意識が、中核的ないかなる社会的概念の周りに構成されるのかが我々には見えない。ともかく、給与の概念が、雇傭者に対する労働者の関係という一般的概念と同じく、十分に析出されるとは思われない。初めから経営者の要求に対する集団的反逆や抗議が存在していることは確かであるが、しかしそれは特にかつて家内の職人的であった産業においてである。そしてそうした反逆や抗議はマニファクチュア—に対してより

も、商人、大きなラシャ商人等にむしろ向けられていた。彼らは商人が彼らの生産物を昔の価格よりも低い価格で購入するが故に抗議するのである。特に新しい工業における本来の賃金労働が存在している時には、彼ら労働者は自然法則に対するように低い賃金に甘んじ、彼らの悲惨が余りに大きい時にのみ賃上げを要求する用に思われる。大革命の時期、すなわち強度の集合的生活の時期には、彼らは賃上げをほとんど要求せず、余りに高いパンの価格に対して抗議し、最高価格の決定を要求した。労働量と生産物価格との間の一関係として理解された賃金の概念がまだ析出されていないことは明らかである。

- (1) ロジェ・ピカール (Roger Picard) 氏は先に引用した論文で (p.632)、18 世紀の労働者たちがすでに経営者たちに対して同盟団結しようと試みていたこと、そして、「この階級感情が覚醒した」のは 1789 年の三部回の選挙の時であったことを指摘している。「召集の勅命は団体を形成している諸個人に対してのみ投票と不満の表明を促し、孤立している個人と見做された労働者大衆はこの運動の外に放置した」。■強調の傍点は我々が施したものである■。それ故、労働者がかれピカール氏にとってすでに一階級とみなされるべきであると思われるのは、まさしく彼ら労働者が同盟していないからであり、あらゆる組織された社会全体から、従って社会そのものから排除されているからである。——同じ著者の作品 *Les cahiers de 1789 et les classes ouvrières* (Paris, Rivière, 1910)、特に最初の数章 pp.23-47 を参照せよ。

\*) ピカール氏は、フランス革命の前夜、労働者あるいはその味方の人々が、「いま少し公正な」、すなわち「下記地域における食料品の値段につり合った」賃金を要求したことを指摘している。

Livre cité, p.105.

社会生活が複雑化するにつれて賃金の概念はますます明瞭になっている。一方では、生産の増大、商業と投機の飛躍的發展がますます産業の諸条件を変革し、産業家の精神の傾向と習慣を変容させた。他方では、大工業の労働者たちが労働者階級をだんだんよく代表するようになり、彼らにとっての通常の考え方<sup>コンセプション</sup>をますます大衆に押し付けるようになった。その結果階級間のますます意識的な対立が生れた。というのは労働者階級は、機会によって代わられた有能な、ほとんど芸術家といってよい職人たちの消滅過程の進行によって恐らくは損害を蒙ったからである。しかし、広がりをもった同質的な労働者諸集団の形成と増加、労働条件について論議するためのそれらの組織化、ストライキの経験、あるいは経営者との強調の経験——これらを通じて工業的生産、労使関係、そして最後に賃金という概念構成の一全体が労働者諸集団の意識の中で析出されたのであるが——は、労働者階級にその統一性を認識させる準備となった。——このような階級意識の往時における進化を研究することが我々の目的ではない。しかし我々としてはそうした階級意識の存在を指摘しておきたいのである。我々はまた、階級理論が解明しなければならない諸事実全体の中でこれ以上に重要なものは疑いもなく存在しないことを証明しなければならない。階級を区別することが比較的容易な社会領域もあれば、そうではないところもある。十分に進化した複雑な国民の中には多様な階級意識が形成されるようではある。しかし、工業国にお

いては、そして現代においては、労働者と非労働者との間の溝ほど深い断層はどこにも見られない。

## 第二部 労働者階級における<sup>デバンス</sup>支出

### 第一章 労働者の生活の二側面 ——労働と消費——

これまで我々は産業システムのなかでの労働者の位置を確定することだけに従事し、社会そのものについては、それが生産活動を発展させる限りにおいてのみ考慮に入れるにすぎなかった。労働者の階級意識の統一性はとりわけこの社会における複雑な有機的生活の中での彼ら労働者の機能によって説明されると我々には思われた。しかし、たとえ確かであるとしても、社会的差異が表現され明確になるのは別のところ、もはや生産ではなく消費する限りにおける社会、においてである。実を言えば、階級の差異は、労働者が工場や炭鉱山、作業場で労働しているときに最も際立って表れるのではない。第一に、生産の必要性は、生産の各種の<sup>エイジェント</sup>作用因を、すなわち機械にとり囲まれている労働者と、事務所の中にいる雇傭者および経営者とを、空間において分離し、物質的に切り離すことを余儀なくするので、彼らは比較的対照されることがないのである。雇入れあるいは賃金支払いの際でさえ、労働者と経営者は見掛け上は平等の立場にあるのである。労働契約は理論上は自由である。両者は売り手と買い手のように、取引関係にある。彼らを結びつけ接近させるのは、相互的必要性と、連帯の紐のごときものを彼らが最もよく自覚しているときである。他方、機能と任務のヒエラルヒーは、それらを課せられている者達にとって、それを遂行している間は必ずしも社会的ヒエラルヒーとは思われない。確かに指揮監督の機能は比較的稀な能力を意味しており、また一人の技師の後任を見つけることは一人の労働者の代りを見つけることよりも難しい。しかし、一工場で使われている労働者の全体は、管理統制の任に当る職員よりも必要欠くべからざる点において劣るわけではない。生産のためのすべての<sup>エイジェント</sup>要員が同じ能力と教養とを身につけていると仮定しても、一方が指揮し他方が規律に従い命令を遂行する必要性が少なくなるわけではない。もしそのようでないならば、すなわちもし様々な機能を果す者達が彼らの資質とりわけ<sup>フォルマシオン</sup>教養によって任務を指定されるとすれば、そうしたありようの理由は工場や産業的労働とは別のところに求めなければならない。しかし工業的生産にとどまる限りにおいては、機能のヒエラルヒーはまず事物の本性に基礎を有するものとして表れる。機能のヒエラルヒーは<sup>ベルリネル</sup>人格的な事柄ではなく客観的な事柄である。それは技術的であって、社会的ではない。

実を言えば、経営者も労働者も、彼らが二つの別の階級に属するという意識をとりわけ



て持つのは、工場でもなく、また仕事の時間中でもない。労働者は雇傭者の事務所を、一つの仕事の間、あらゆる企画が練られ、指令が発せられ、企業の骨の折れる全活動が集結し放射される、そのような一つの部署と見做している。厳密に言えば、労働者が経営者や技師たちの仕事のことを、いくつかの点においては彼自身の労働よりもより困難で苦勞が多いものと想像することもあり得ることである。経営者や技術者は様々な仕事場で遂行されるすべての仕事を頭に入れている。彼らはそれらの仕事を社会的に分類することに気を奪われたりはせず、すべてが同一の良心性と完璧さにおいて遂行されることこそ肝要と感じており、それらをいわば同一の平面に置くのである。経営者が工場の各部署を巡回するとき、彼は労働者に対して尊大な気分とか、侮蔑の気分とか、よそよそしい気分とかを持っているわけでは全くない。彼はむしろ、労働者に近づき、暫時彼らの立場に身を置き、彼と労働者とは異なる階級に属することを労働者に忘れさせ、企業に協力する者すべての連帯感情を目覚めさせようと努力している。労働者は、経営者や技術者に対して、彼ら労働者に命令し、発奮させているときでさえ、また非難譴責しているときでさえ、遠いところにいる株主や筆頭役員ディレクターに対してよりも、親しいものを感じていることは疑いない。後者は生産事業に資本を通じて関与しているだけであって、自らの活動を通じて参加しているわけではないのである。ストライキの場合に経営者たちが自分の労働者ではない組合の代表者と議論することを時に嫌悪するとしても、それは彼らが自分の労働者たちに対して恐怖政治を行おうと望んでいるからというよりも、経営者と労働者とは共に同一の有機体の必須の部分であるという感情を労働者の中に目覚めさせ、そうして、工場の外部で発展する階級敵対を緩和させるためであることは疑いない。

しかしながら我々は、労働者の階級感情を彼らの機能に結びつけた。労働者の機能が彼らをして定期的に社会の外に出ることを余儀なからしめると我々は述べた。それゆえ彼らの機能は、彼らが通常浸っている社会生活と比較して、彼らにとって辛く変則的なものとして現れる。この意味においては階級分離の真の原理が求められるべきところは労働の領域ではなく、消費の領域である。外部からの影響が工場に浸透するが故に、階級の際がそこに現れるのである。——社会が組織されるのはただ生産を目的としてのみであり、人々の生活全体は、ただ休息と栄養補給のために必要な時間をはさんで、仕事の遂行のうちのみ経過する、と仮定することも可能である。多分ある種の動物社会はこうしたものであろう。単なる兵卒と同じく指導者も野営地や軍隊から外に出ることが全くないようなある種の軍事社会もこうしたものでありえるであろう。このような社会においては、服従する者たちの、指揮する側の人間に対する従属関係が社会的区別関係として表現される理由は全く存在しない。しかしもし、長期にわたって存続しているからというのではなく、彼らがそれに認める利益アンタレのゆえに、人々の生活のなかの最も重要な部分が、社会の生産する

富を消費することに移行するならば、またこの時期に彼らの<sup>フズワシ</sup>欲求と感情が成長し最上に満足されるならば、さらにその際彼らが自分自身について、そして社会生活がもたらすあらゆる利点について十分に自覚するならば、彼らは、労働の外部で行なわれている習慣とそこで獲得された思い出の総体を労働の中に持ち込むであろう。そうなれば、生産のための要員たちは、あたかも抵抗もせずあるいはむしろ安易に工業的機械仕掛<sup>メカニスム</sup>に自らの行動の範を取ろうとしている、無関心で受動的な人間の一群としてそれの中に入り込むことはしなくなるであろう。彼らは苦しい努力と引き換えにのみ、またよく知っており十分にその真価を認め得る全く別の生活を断念してのみ、工業的機械仕掛の中にたてこもり、それに適応することになるであろう。そして同時に彼らは、社会を捨てることなしに生産活動に参加する人間は、彼らと同じ犠牲を負わなくともよく、とりわけそのことによって社会的に彼らに優越しているという感情を持つであろう。

かくして産業的労働、<sup>タージネ</sup>任務の分割、機能のヒエラルヒーは、もし彼らが生産の領域にのみ生活するならば、彼らと雇傭者ないしは経営者との間の客観的相互依存関係<sup>ソリダリテ</sup>という表象を彼らに抱かせる傾向を有するであろう。しかし、消費の領域から生産の領域へ、そしてその逆という交互的移行の存在は、彼らが労働している時には、自分たちが社会的に劣っているという感情を彼らのうちに目覚めさせ養うものである。我々は労働という用語を越えない限りは、階級意識がどのようにして生れるかを理解することはできない。労働する者たちは消費してきたし、また今後も消費するであろうし、社会の外へ出る以前には彼らは多少とも深く社会の中に浸されてきており、社会の外へ出た後にも社会に再び戻るであろうし、そして、労働者としての彼らの状況の異常な性格は対照的に彼らに明瞭になるだろうからである。彼らは、多少とも目のつんだ人間諸関係で織られている外部の社会生活を、機械的諸条件、工場のなかで産業労働者にもたらされる生活の物質的地平と比較する。そして彼らが社会に関われば関わるほど、社会から引き抜かれ切り離されていることに敏感になるであろうことは自然なことである。

彼らは実際そのことによって、産業労働の「破壊的」影響によりよく抵抗できるようになるであろう。彼らの生活の条件と種類が、彼らに対して及ぼす作用を、単に彼らがあるもとにある時間によって測定することができないことは疑いない。工場への出入によって分けられる労働者の生活の二つの部分を、この時間という点で比較すること自体可能であろうか。

深層心理学者が説明するように、もし時間なるものが特に<sup>バラエティ</sup>変化、時間の中で展開される出来事の更新によって測定されるとすれば、充実した数時間の社会生活は、機械的で単調な作業に当てられたずっと長い時間よりも、労働者にとっては長い時間になるであろうし、彼の意識により一層痕跡を残すであろう。工場に行く農民、あるいは農民的生活に慣れた

人々は、彼らが生活している田舎の単調さおよび寂し<sup>ソリテュード</sup>さと、機械的な仕事に気を奪われている労働者の孤独との間に、何ら重大な差異を認めない。工業的生産領域の外部にある社会生活は逆に複雑で強烈であり、労働者たちはその家族、友人のサークル、教養や娯楽の集まりのなかであらゆる問題に関心を持ち、これらの集団のなかで生れるあらゆる欲求に関係し、これらの小さな社会のなかで、その他のメンバーとの最初の関係によって規定された、彼ら固有の位置を持っているがゆえに、彼らは労働の場に戻るときにその人格的個性全体を脱ぎ捨てることは不可能であろう。国王や、劇場のヒーローと同じように、彼らは社会的舞台から降りてさえ、多数の思考様式、自分自身についての観念、他者のなかでの自分の位置を保持しつづけるであろうし、彼らの物質的職務が完了しさえすればほとんど無傷のままでそれらを再び取り戻すであろう。河の水は外界の冷たい空気に触れると凍結するものである。しかし流れが強い場合には、その流れは氷片が固い大きな塊へと結びつくのを妨げ、それらをゆっくりと押し流し、それらに運動と方向を伝える。同じように、社会生活の流れが速ければ速いほど、それは凝結することが少なくなり、その表面にいる人々は、彼らを固い結晶へと硬化させようとする諸力に対してより多く抵抗する。労働に従事する人間はその社会的本性をますます失う危険があることは疑いない。しかし、社会がその構成員に対して通常及ぼすところのすべての影響に十分に浸透されているならば、彼らは社会的本性の本質的な部分のすべてを、失うことなく保持するであろう。

しかしながら、周囲の社会生活が労働のための時間に及ぼす■右のような■圧力と並んで、生産活動が消費習慣に対して及ぼす影響がより重要で決定である。生産諸器官は社会体を、その構造と機能の全体にわたって、変容させる。労働者は時にその背後に社会生活への非常に強い衝動をもって仕事に就くので、彼らは情熱を失うことなく機械的生産のあらゆる網の目をくぐり抜け、社会とは異質のこの領域を越えて自然に社会に戻り、(あたかもまどろみの時間のあと意識のあらゆる活動力がその連続的生活を中断することなく再び目覚めるように、)そこに足場を造り、わけもなく社会に再適応することを我々は述べた。これは非常に充実した社会生活を仮定している。しかし、不連続な、しかし継続的で規則的な産業的活動の時間が社会生活の流れを緩慢にし分割しに来るとき、社会生活はいかなる程度に充実したものであり得るか。これはまさしく本質的な問題である。以前の我々の分析はすべて、我々をこの問題に向かわせている。社会生活自体、我々がそれについて与え得る解決がない限りでのみ、価値がある。労働者たちは、生産のための建築物や仕事場の圏内では社会との接触を失うことは勿論である。彼らは、人間が使用するあらゆるものと同じように、自然の物質的機械的諸力とますます同一化する傾向のある、道具となる。その時から彼らは、社会的思考様式と習慣に対立する思考様式と習慣とを身に付ける。また、階級の差異が表われある社会的意味を獲得するのはこの産業的活動の領域ではなく、

本来的意味における社会——この領域において人々は消費することによってその起源と本性は何であれ違った仕方で欲求を満足させる——においてであることも勿論である。最後にまた、工場の外の社会生活がある内容をもっており、産業的生活によって彼らに課せられるものではない方向に展開すること、社会生活が人々にとって単に生存の補足とか外延部ではなく、その最も興味あり最も正常な本質的な部分であり続けていること、社会生活の構造および機能はそれ自体として独立していること、社会生活が強度を増せば増すほど、それは工業的機械仕掛がその構成員に及ぼす影響を減少させ無力化すること、これらも言うまでもないことである。しかし、社会生活と労働者の機械的活動とを対置しただけでは不十分である。後者が前者に対して及ぼす影響を精確に規定し測定することが必要である。定期的に工場を通過すること、これはある範疇の人々、産業労働が規則的な間隔で社会から離脱することを強いたところの人々の社会的習慣といかなる点まで、そしていかなる意味方向に変容させるのか。

しかしそのためには、我々は労働者階級のなかで感ぜられ満足せられる欲求の種類と強度を研究しなければならない。工場がもたらす習慣と心理的肉体的変容がこの場合になんら重要な影響を及ぼさないのであれば、我々が想定したように社会がまずは二大階級に、すなわち労働者階級と都市のその他の住民とに分かれる理由はなんら存在しないであろう。例えば、一方に労働者と、他方に同収入の雇傭者と小売店主とを置いた場合、両者の間に社会的<sup>シチュエーション</sup>立場についていかなる相違も指摘しえないであろう。しかし逆に、労働者の消費習慣が、収入水準が同じで職業の異なる集団と同じではないということがあり得る。これはまさに彼らが労働者だからである。

社会生活の影響で自然的あるいは有機的欲求が進化し、より人為的で複雑になり、そして不可避性の度合がより小さくなると仮定しよう。普通は社会の作用を免れて、大きな体力の消耗、とりわけある種の生理的活動を余儀なくされているので、労働者はおそらくこうした自然的欲求をその基本的形態においてより強く感じるであろう。そうした欲求は労働者にとって本質的な欲求となり得るであろう。他方、多くのとりわけ社会的な欲求は長期にわたる教育という代価を払ってのみ発展するものである。そのためには社会との<sup>パーマネント</sup>恒常的な接触、最高の形式における<sup>インテリジェンス</sup>知性、優越性が優越性について深く知りえたものに得させるところのそれについての<sup>サウンス</sup>良識と<sup>グー</sup>鑑識眼、が必要である。こうした形式の外部で生活したために、そしてこうした教養を奪われているために、人々がこうした選好をもはや採用しないようになり、こうした<sup>ピオン</sup>財の優越性を理解しないようになったとしたら、何が起きるであろうか。最後に、あらゆる社会において、最も尊重される財が何であれ、我々がすでに述べたように、財のヒエラルヒーを決定する価値判断が表明されるものである。より統合的な社会部分に移行する度合に応じて、この集合的判断はより明確でもあり命令的

でもある。それは様々の出費の秩序と相対的重要性のなかに表現される。要するに欲求は様々な社会集団において非常に違った仕方で満足せらるのであるが、人が社会に服従する度合に応じて彼は、その属する集団によって、彼の外部でそして彼のために決められた計画に従って、その出費を計算する。換言すれば、社会の影響が効力をもって及ぼされるところではどこでも、生活水準というものが存在するのである。この水準はその高さに高低があるが、そのそれぞれがある均衡状態、一定の欲求のシステムを表現しており、そして欲求が満足され得る程度についてのある予測を表現している。このことは、欲求のそれぞれがそれなりの形でそれ以外のすべての欲求を表現していること、一定種類の一定の出費は他の種類の一定の出費に対応していること、生活は組織性をもち脈絡をもったものであること、様々な消費行為は相互に関連しあっていること、を予想させる。しかしもし集団が周期的にそして長い時間にわたって消滅するならば、調和は乱され均衡は破壊されないであろうか。集団の構成員がこのような中断の後に再び近づくであろうことは確かである。しかし彼らは、彼ら自身の言葉を話すためにしばらくしてから集まりはするが、大抵の場合沈黙を余儀なくされるか、あるいは独り言を言うか、あるいは外国語のような言葉を話す人々と対話するかする人々の如きものである。彼らが再会する際には、彼らが同じことを言わない、また言葉に同じ価値を付与しないありとあらゆる可能性が存在する。同様に、労働者は他の人々よりも社会生活の影響から脱しているのも、その個人的性癖に一層屈服し、とりわけその様々の欲求を一定の計画も秩序もなしに満足させる可能性は十分にある。

かくして労働者の消費についての研究は、工場の影響がどこまで及ぶかを我々に教えるであろう。労働者は労働している間は社会から切り離されているので、彼らが社会のなかに完全な形であるいは即座に持ち込むもの、すなわち彼らの欲求を満足させ彼らの出費を規制すべく、社会のなかで採用されている価値原理と価値判断から彼らが考えつくことに対して（つねに労働の間に身につけた習慣の故に）いかなる障害が対置されるかを我々は見てみたい。

しかしこの同じ研究によって我々はさらに他のいくつかの点について我々の分析の結論を確認し補強することができる。労働条件と消費習慣との間に現れる作用と反作用の関係、役割は多分我々が考えているよりも複雑なものであろう。——労働者階級は一つのものであるか、それとも狭義における職種<sup>メテイェ</sup>あるいは収入によって規定される下位集団に分解せられるものであるか。

我々は、産業のなかにも職種のなかにも、同一産業あるいは同一職種の労働者がいくつかの複数の階級に分類されるものとみなすべき一定の性格と社会的意味を見出さないであろう。とは言え、彼らが一定の消費習慣をもち、それが集団ごとに異なるような、そうしたいくつかの集団を形成するものではないことをアプリアリに証明するものは何もない。

労働の困難さ、労働が課する努力の種類、労働がもたらす疲労と生理的消耗、労働と結びついた精神的変形と知的習慣、最後に労働の道徳的結果、これらは、生産の領域にとどまるならば、いずれにしてもほとんど明瞭ではなく、明示するのが難しいものである。我々はまた、集合意識においては産業と職種は決してその価値に従って分類されていないことも確認した。しかし差異が労働者の消費習慣の多様性のうちに表現されるということはある得ることである。力仕事と忍耐力のいる仕事、屋外の労働と産業、食料品の生産あるいは書物の生産、これらはいくつかの例にすぎないが、多分無意識のうちに労働者のかなり多様な嗜好と選好とを決定するであろう。労働者の消費はこうした観点から研究さるべきである。

収入の差異に関して言えば、それは消費に関連してのみ意味を有する。収入の差異は産業労働の有する特定の性格に対応するものではない。大まかに熟練労働者と非熟練労働者との間に収入の差異が存在すると辛うじて言い得るのみである。それゆえ我々は労働者の労働の技術的ならびに法的条件を検討した折に、収入の差異を扱うことはできなかったのである。とはいえ、収入の差異には出費の配分様式におけるかなり顕著な差異が対応しているに違いないという点は考えられることではないだろうか。似たような収入を持ち、ほとんど同じような出費をなし得る労働者たちは、他に比べて高いあるいは低い収入の労働者とは多分区別されるべきであろう。その結果彼らの間には非常に明瞭な社会的分離が現れるかもしれない。もし労働者階級の中に、感知し得るような、そして各生活水準に位置しているすべての労働者を識別可能な階級へと分類するような隔たりによって分離される一定数の生活水準が存在するならば、このことは特にあてはまるであろう。労働者の出費の研究によって我々はこの問題に答えることができるに違いない。

それゆえ、労働者階級とは何かについて十分に理解し、労働者階級はいかなる点まで一つであるかを認識するためには、いまや消費の領域におもむき、労働者の出費と欲求について研究することが不可欠である。我々は労働者集団が労働者としてと同じく消費者として次のように定義され得るかどうかを知りたいと思う。すなわち、他のすべての住民に比して社会への結びつきが弱く適応していないという点で、彼らから明瞭に区別される都市住民の総体、という定義である。

## 第二章

### 諸資料——データの選択と批判的検討

我々の課題は労働者の欲求と出費、消費習慣について研究することである。このような研究が可能になったのは、ドイツで実施された二つの家計調査が同一の日付で公表されたおかげである。方法も結果も正確にカバーし合うものではないが、後述する理由によって、それらはドイツその他で先に行なわれたものより優れており、納得の行く推論を保証するにすでに十分であると思われる。一つはドイツ帝国統計事務所<sup>(1)</sup>によるものであり、いま一つはドイツ鉄鋼労働者組合<sup>(2)</sup>によるものである。

- (1) Erhebung von wirtschaftsrechnungen minderbemittelter Familien im deutschen Reiche. Bearbeitet im kaiserlichen statistischen Amte, Abteilung für Arbeiterstatistik, 2. Sonderheft zum Reichs-Arbeitsblatte, 77\*, 229 p., Berlin, Carl Heymann, 1909.
- (2) 320 Haushaltungsrechnungen von Metallarbeitern. Bearbeitet und herausgegeben vom Vorstand des Deutschen Metallarbeiter-Verbandes, 159p., Stuttgart, Alexander Schlicke, 1909.

我々は■右の■目的のために最初の出版物の最後の 229 頁および第二の出版物の最後の 103 頁においてかなり詳細に世帯ごとに示されているデータを特に集中的に検討する。我々がそれらを選択し立論の根拠とする理由を説明しよう。

家計調査は多くの反論を招いている。不幸なことに、人々の出費を知るためには彼らに出費を記帳するように依頼する以外に方法がないのである。しかし失敗の可能性を減少させることは多分可能である。1. 書式があらゆる曖昧さを避け、二重記入と記入洩れを予防し、記憶と表記<sup>ノタシオン</sup>を単純化するような形で作成されるように配慮すること、2. 家計予算が実行されるに十分な期間を設けること、3. 入手できる家計予算を多少とも多数採用すること。我々がデータを考察しその価値を評価するのはこのように多様な観点からである。

### 第一節

#### 記載帳の準備と名簿

記載帳に記入する労働者がある種の買入れを隠し、全く買っていない別のものを記入することがあり得るのは言うまでもないことである。しかしこれはいくつかの調査記録、当事者の申告によるあらゆるアンケートにおいて同じように冒される危険である。社会科学

あるいは歴史の研究はすべてこうした事情にある。

我々の場合一定の保証となるのは、アンケートが大きな集会的<sup>オルガニズム</sup>組織によって行なわれたという点である。

ドイツの公式統計はすべて国家機関の権威と威信とともに行なわれるアンケートによるものであり、アンケートが「官公庁と科学に対して」資料を提供できるように指導されている (p.74\*に転載されアンケートにつけられた「通告」<sup>アヴィ</sup>)。そして、平均的雇傭者と設定者 218 名だけでなく 522 名の労働者ないしは職工までもが一年間無料ないしはほとんど無料でこの仕事に従事したことは既にそれだけでも注目すべきことである (2)。

- (1) 我々はすでに *Budgets de familles, Revue de Paris, 1er aout 1908, pp.534-562* においてこの問題について若干の見解を述べておいた。■どこの注なのか不明 (原文にもなし・阿部) ■
- (2) 補遺のところでは我々が言及する個々のアンケート実施者は、この仕事に全面的に従事した場合で、せいぜい 5、10、20 の年間家計を得ただけである。——いくつかの都市はあらかじめ 10 マルクの手当を一回あるいは数回に分けて、あるいは数フランの贈与を約束していた。この問題については p.9\* の、その他の点では不完全であるが、いくつかの<sup>アンディカシオン</sup>報告を見よ。

しかし、鉄鋼労働者組合は次のように言明している。「ドイツ諸都市の統計事務所の大多数の助力を得、また帝国の全住民に問い合わせる帝国統計事務所は 960 の年間家計を手に入れ、そのうちの 879 が失われずにあった。我々ならば、仕事と費用の問題が余儀なく我々を制限しなかったならば、この数を容易に達成したことであろう」(p.7)。組合が年間家計 400 を集めたこと (そのうちの 320 は丹念に作成されていた)、このことは (この時点でさえその大部分は組織されていた 102 名の鉄鋼労働者が帝国統計事務所の方のアンケートにも参加しており、そこでも彼らはアンケートされた全労働者の 5 分の 1 を占めていただけに) なお一層驚くべきことである (鉄鋼労働者のこのような状況はそれだけでも、家計をつける能力をもち新しいアンケートに参加する用意のある鉄鋼労働者の数を著しく制限していた)。それにもかかわらず■右のような■成果を挙げえたのは、明らかに労働者の連帯と、組合組織がその成員に対してますます強く行使している影響力によるものである。

帝国統計事務所のアンケートでは当初、収入は月間手帳の最初の頁に週ごとに略式で記入し、出費の方は逆に毎日詳細に記入することに決められていた。しかし何人かの経済学者 (特にビュツヒャー) の助言により、毎日収入を記入するためのスペースを取って置くことに決められた (p.73\* に記入例が挙げられている (1))。鉄鋼労働者のアンケートでは全く別のやり方が取られている (2)。月毎の手帳の代りに (後で綴じる) ■次のような■記入紙を労働者に渡すのである。各記入紙は一週間の収入と出費の欄をもっている。一週間



の収入は一度記入されることになっている。出費については、毎日の消費品目のリストが複数の欄の天のところに印刷されており、労働者はその欄に毎日商品のための出費総額を記入すればよく、そして一週間毎の（あるいはもっと長い期間の）出費のリストは独自の欄の側に印刷されている。このことには二重の利点がある。労働者はリストを検討してよりよく買物を思い出すことができる。他方では、購入した商品の名前をいちいち記入する労を節約することができ、その上、表作成の仕事を簡単にするのである<sup>(3)</sup>。

- (1) Zeitschrift für die gesammte Staatswissenschaft, 1907, p.142 sqq.
- (2) この質問表が記載されているのはアンケートそのものではなく、Reichs-Arbeitsblatt, V III Jahrgg., Oktober 1910, n<sup>o</sup> 10, p.762、である。
- (3) この書式は、記入ミスの可能性、数字がある欄から別の欄へ移ること、様々な出費を同一のカテゴリに分類する必要があること、例えば「衣類、修繕、新規購入」(■? ■原文ママ)をただ一つのカテゴリに入れるといったこと、あるいは例えば「雑費」といった非常に不確定なカテゴリを作らねばならないこと、こうした理由から批判され得る。他方では、アンケートされる側の人々がこれらのカテゴリを注意深く読む労を必ずとるとは限らないということがある。

間違いの可能性をできる限り予防するだけでは不十分なのである。幸いにして我々は多くの場合コントロールし調整することが可能である（訳注：コントロールとは、類似の調査結果等と照合照査して調査結果の判断を調整することをいう）。この種のアンケートは、短い間隔で、少なくとも記憶の訂正が可能な程度に短い間隔で、アンケート担当者が記入されたものを調べる場合にのみ、ある程度の確度をもって行なわれるものであろう。

帝国統計事務所はアンケート対象がいるに違いない諸都市の統計事務所に依頼した。そのアンケート担当者は、大抵の場合、組合、疫病基金、様々の同業組合および協同組合の仲介によって、アンケート対象者に紹介された（詳細は p.8\*の表にある）。そして彼らの言うところでは、様々の都市で手帳を回収し、コントロールしたのはこれらの仲介者であった。別の場合にはこの仕事は統計事務所の職員によって月毎に行なわれた。時には手帳は郵便で返送された。コントロールは毎月要員がそれを回収するときも、統計事務所にそれがあるときにもなされはしたが、後者の場合には時にはただ表作成の際だけであった。補足的照会のための質問も同じくこれらの仲介機関を通じて行なわれた。集められ公表された家計の大多数（その詳細は p.10\*と 11\*にある）は、各都市自身によって表に作成された。このことは当然コントロールを容易にした。（しかし）ウィーンの統計事務所のワルター・シッフ (Walter Schiff) 氏は、このようなコントロールでは不十分であると述べている<sup>(1)</sup>。手帳の再検討が必要であったのは週ごとであり（これは非常に稀にしか行なわれな

かった)、月ごとではない。しかし、とりわけコントロールの効果を妨げたのは、彼によれば、次の点を終始無視したことであった。すなわち、貯蔵品の一覧をつくり、残っている品の目録を作成し、そして特に倉庫の中にあるものを考慮に入れることである。これをやっていたら、「各週の終りに世帯にある金を知り、収支から結果する差引残高に注意する」ことができたであろうし、これは厳密かつ恒常的なコントロールであったことだろう。――鉄鋼労働者組合は公式統計のこうした欠点を指摘してそれを免れようと努めた。組合はアンケート対象者に（特別の通知によって）「アンケートの年のあいだに」アンケートの初めのときに倉庫の中にあつた全額を記すことを依頼し、アンケート期間の終りには彼らの年間家計の抜粋（彼らの資料による収支の総額、収入と支出それぞれの総額の表示、赤字か黒字かの表示）を彼らに送付し、それらを調べて正確かどうかを確認するよう依頼した。「これは多数の間違いを訂正することを可能にした」。しかしながら、組合がアンケートの間このように二重の連絡を取ることによって補強し彼らとの接触の維持に留意したとしても、この接触はかなり断続的であり、数ヶ月後の訂正はそれ自体おそらくは全く正確というわけにはいかないことも認めなければならない。他方、この「倉庫の中の全額」を彼らは知らせない（多分彼らはそれを使ったことがないであろう）し、そして統計事務所と同じく貯蔵品を数えることもしないし、残ったものの表を作成することもしない。

(1) Zeitschrift für Volkswirtschaft, etc., XIX Band, p.241 sqq.

このような条件の下では「平均の」赤字あるいは黒字として我々に提示されるものは、条件付きでしか認めることはできない<sup>(1)</sup>。(統計事務所のアンケートでは、)被雇者と労働者 852 世帯のうち 406 世帯が年初に黒字をもち、他方 439 世帯が赤字を申告していると述べられている。黒字はそれを記入している家族について平均で（全出費額の）2.60%、赤字は 4.40%である。赤字は特に最高の収入について指摘されている。さらに、ある種の収入は表示されずにいることがありえたこと（チップあるいは救援金、被雇者の妻の家庭内労働、妻には内緒の男の付随的な小所得、両親からの現物贈与、同じように貯蓄銀行からの借金、衣裳の売却金）、他方では行なわれなかったある種の出費が記入されていることがありえたこと（滞納されている家賃、信用買いの商品の代金）、が指摘されている。これらの仮定はしかしかなり不完全である。ある種の出費の報告を省略する、考えられる理由を考慮しなければならないであろう。これらの数字はたとえそれらが一般的なものであろうとも、次のような余分をもっている。すなわち、平均して赤字が黒字分を相殺してしまうことを認めれば（そして赤字が黒字よりも十分に少ないことを認めることはいずれにしても難しいように思われる）、間違いあるいは失念といったことによる不正確さの幅は出費総額の約 2%にもなるということである。それゆえ（労働者の生活条件に関しては楽観的な）このような仮定においてさえ、回答の正確度は非常に近似的なものにすぎないことは否定できない。組合のアンケートにおいて、320 世帯のうち 228 世帯が黒字を出し、91 世帯が

赤字を出した。黒字は平均で 70 マルク 45 であり、赤字は 67 マルク 58 であった。(しかし) 黒字であったり赤字であったりする世帯のそれぞれ平均収入は我々には分らない。全世帯の平均収入は 1856 マルク 19 であり、黒字は 3.8%で赤字は 3.65%であろう。しかし(統計事務所のアンケートに見られるものとは違って) この場合には赤字を報告するのが特に貧しい世帯であるので、黒字は収入のうちの少し小さい割合を表し、赤字は収入のうちの少し大きい割合を表すであろう。それゆえ我々の数字は統計事務所のものに接近するであろう<sup>(2)</sup>。

- (1) この点についてはシッフ (Schiff) 氏はさらに次のことを指摘している。すなわち、収入という語によって、統計事務所の家計では、利益と同じく、ある種の金銭の移動、例えば貯金金庫 (■日本の郵便貯金に当る■訳注であると思われる・阿部) からの引き出し、借金、何かの売却あるいは質入れが意味されていること、同じような混乱が出費についても見られること、鉄鋼労働組合もこれらの用語についての定義を示していないこと、そしてこのような場合には我々は見せかけの出費および収入を前にしている可能性があること、である(■前出論文■、p.243)。
- (2) アンケートによる平均収入はこの最後のアンケートでは 2192 マルク (平均出費は 2234 マルク) であることを書きとめておく。家族構成の平均は、組合のアンケートでは 4.9 人、統計事務所のアンケートでは 4.6 人である。家族の収入、さらに一人当りの収入は統計事務所の場合の方が組合の場合よりも高くなっている。それゆえ、すでに述べたように、またアンケートの報告者が推測しているように、統計事務所の場合は、僅かなものではあるがある種の収入を省略することによって赤字がふくらんでいるように思われる。

これらの結果(赤字総額、黒字総額)自体に拘泥する必要はない。というのはそれらがどの程度まで家族の実際の経済状態を表しているか、あるいはそれらがどの程度まで失念や不正確さを含んでいるかを知り得ないからである。それでもやはりこれらの結果は失念や不正確さの蓋然的な限界についてのある観念は与えるものである。我々の関心は、収入と支出を比較することではなく、諸支出を相互に、そして総支出と比較することにあるので、統計事務所のアンケートでは誤差 2%未満、組合のアンケートではさらに誤差が小さいと考えられることは我々を安心させる状況である。

## 第二節

### アンケートの期間

家計簿は、有効とみなされ得るためには、すなわちある家族あるいは個人の標準的な生活条件を知ることが可能ならしめるためには、どのくらいの期間つけなければならないか。

標準的という観念自体あまり明瞭なものではないことに注意しよう。次の別の問い、すなわち生活条件はどのような社会集団において、そしていかなる時期に最もむらがないか、すなわち年次による変化が最も少ないか、という問題は固有の一研究対象であろう。この問題を解くためには、毎年あるいはかなり近い間隔で、同一職業、同一の家族構成の世帯によって記帳された家計簿を集めるだけでは、例えば経済条件とその進歩が彼らの出費に及ぼす影響を観察しようとする場合には全く不十分であろう。なぜなら、新しく研究されるいくつかの家族が古くからある家族といかなるつながりによっても結ばれておらず、古くからの家族は消滅ないしは移住してしまっており、新しく研究される家族はその国ないしは集団に加わってから間もない、といったことが現に起こり得るからである。

しかし、欲求の進化がどのようなものであったかではなく、欲求の本性と現時点における重要性がどのようなものであるかについては研究課題とすることができる。とはいえ誤ってある年のデータだけで満足してしまう恐れなしとしない。欲求が相対的に変わらないと推測される条件において世帯が選ばれたとしても（外的条件がほとんど変わらないにせよ、その構成員の心理的性質が安定性の保証を提供しているにしても）、非常に大きな間隔でしか起こらないような消費、そして消費の年次が周期性を示さないような場合、がやはり存在するのではなかろうか。他方では、欲求が変わり得るものであるとしても、そのぶれ、不規則性がそれほど頻繁に起るものではなく、それら自体一定の限界内に押さえられなければならないのではなかろうか。それゆえ、観察が長期にわたればわたるほど、こうした偶然から解放されて比較的単純で本質的ないくつかの線が現われてくるであろう。これこそまさに「標準的<sup>ノルマル</sup>」という用語によって理解されるものである。

この機会に、20年間にわたってつけられたホフマンの家計簿を詳細に検討しよう<sup>(1)</sup>。

- (1) 最初の家計簿は妻が食料品の商売をしているある事務員のものである。(1866年から1885年までの)期間の初めには父は26歳、母は25歳である。彼らは1866年の終りには一人の娘、1867年の終りには第二番目の娘、1870年の終りには息子、さらに1873年のなかばには第三番目の娘を得ている。年間収入は2685フランから3503フランに変わっている。第二の家計簿は家庭教師(sekundarlehrer)のものである。■右と■同じ期間の初めに父は40歳、母は25歳である。彼らは1869年の終りに一人の娘、1874年の初めには次女、さらに終りには第三女を得ている。1878年の11月に父が死に、そして妻の父が家族に加わる。年間収入は1500フランから2200フランに変わっている。—■補遺への注記を見よ■。

著者は最初の家計簿について2つの10年間の総額を比較し、次のような比率を算出している。

支出総額におけるパーセント【原著 144 頁の上の表を挿入】

	食料費	アルコール性飲料費	住居費 <sup>(1)</sup>	衣服費	精神的欲求	娯楽	雑費
最初の 10 年	43.1	1.5	24.2	11.6	1.9	7.8	9.9
次の 10 年	46.3	1.2	21.1	11.3	2.5	7.9	9.7

(1) 彼は住居費のなかに家賃、暖房器具、照明、家具、日常生活用具、諸費を算入している。

食料費（この増加は特に子供の成長によって説明されるに違いない）と住居費（この現象は家具日常生活用具費の減少によって特に説明されるに違いない）とを除けば、これらもごく僅かしか変化しないのではあるが、諸支出は全体のなかで同じ位置を占めており、家計の均衡はほとんど変わっていない。第二の家計簿についても我々は同じ計算を施した。次の表は 2 つの 10 年間の本質的支出の比率である。

支出総額におけるパーセント【原著 144 頁の下の表を挿入】

	食料費	住居費	衣服費
最初の 10 年	44.5	21	10.1
次の 10 年	45	22.1	9.2

この場合では、2 つの 10 年間の結果はさらに一層似たものであり、子供が大きくなっているということから考えて我々を驚かすのは、父親が一人の老人によって取って代わられたことである。

しかし、これらの平均の意味するものは何であろうか。これを明らかにするために我々は、二つの最後の数年の平均出費を 100 とした場合の各年毎の出費に当る相対数字をまず計算した。我々は質問のなかで (en quets) 約束された基準単位に従って測られた家族構成を各年毎に計算し、対照して見られる形で記入した<sup>(1)</sup>。

(1) ■後出 p.179 以下■の quet の定義を見よ。以下の記述については■p.146 の表■を見よ。

【原著 146 頁の表を挿入（下表は手直ししてません）】

年次	第一の家計簿（相対数）					第二の家計簿（相対数）				
	世帯構成 （質問に よる）	支出総額	食料費	住居費	衣服費	世帯構成 （質問に よる）	支出総額	食料費	住居費	衣服費
1866	6,5	79	59	120	87	6,5	91	96	78	99
1867	7,5	80	66	96	73	6,5	85	96	90	29
1868	8,6	70	71	94	52	6,5	85	92	86	75
1869	8,8	76	72	118	49	6,5	96	108	87	98
1870	9,1	84	71	152	46	7,5	91	93	96	82
1871	9,4	84	82	107	69	7,6	93	95	109	96
1872	9,7	108	95	127	94	7,7	112	101	180	106
1873	11	101	101	122	84	7,8	112	108	158	62
1874	11,4	108	104	146	89	8,9	132	139	104	148
1875	11,8	108	100	127	118	10,1	118	124	98	108
1876	12,2	100	101	114	72	11,4	120	129	97	121
1877	12,6	95	93	122	55	11,7	120	125	158	103
1878	13	96	92	140	64	12	104	104	112	34
1879	13,4	94	89	142	69	12,3	89	92	102	52
1880	13,8	89	90	112	73	12,6	92	92	128	73
1881	14,2	93	90	96	87	12,9	90	101	116	84
1882	14,6	88	91	92	63	13,2	93	93	108	70
1883	15	94	90	96	101	13,5	85	95	94	55
1884	15,4	98	98	95	103	13,8	112	101	108	106
1885	15,8	101	102	106	97	14,1	89	99	93	94

第一の家計では食料費はかなり規則的な曲線に沿っている。それは最初非常に早く飛躍的に上昇し（子供の誕生、家族の増加）、ある期間その水準にとどまり、次いで低下する（あたかも収入の減少がこの点については圧縮を余儀なくさせたかのようである）。こうした動きは10年単位の比率ではきわめて不完全にしか現れない。衣料費はむしろ非規則的である。そこには上昇、下降の5つの運動が見られ、さらにいくつかの山の頂点は、異なる年数によって相互に隔てられている。住居費は2つの要素を含んでいる。一方（家賃、暖房費、

照明費)は1869年から1879年の間でのみ増大し、ただし1869年には急激に増大している。この方面の費用は前後において同一の水準にある。他方(家具、日常生活用具)は、大いに変動する。この方面の各年毎の出費総額は以下の通りである。149 - 64 - 46 - 59 - 169 - 27 - 116 - 43 - 173 - 93 - 20 - 40 - 120 - 153 - 89 - 65 - 37 - 50 - 58 - 79 (頂点はすなわち6つである)。第二の家計簿では、食料費に関して同じく3つの時期、すなわち、ゆっくりとした上昇、高い水準の連続、そして下降である。まず家族の増加の影響、次いで収入の減少の影響が顕著である(第一の家計簿におけるよりも、家族の増加の影響は小さく、収入の減少の影響は大きい)。衣服費に関しては、第一の家計簿におけるよりも高い頂点があり、またそれにおけるよりも低い最低値が存在する。加えて、同じような不規則性も存在する。住居費は、最初の上昇のあとはほとんど同一の水準にとどまるが、例外的に高い3つの頂点をもっている。——これらの動きからある観念を生み出すべく努力しよう。我々は同じように長期にわたってつけられた家計簿を十分多く持っているわけではなく、また家計簿自体、評釈できるほど十分に詳細なわけではない。とはいえ、変化をより明確に近くするためには——■十日間?■の比率の変化は知見を与えない——年毎に比率の変化を計算することは無益なことではないであろう。我々は第一の家計の最後の10年ないし12年に限り、まず2年間、次いで4年間の総額について比率を挙げておく。

【支出総額におけるパーセント(原著147頁の表を挿入、下表は手直ししてない)】

年次	食料費	住居費	衣服費
1876	47, 7	20, 4	9, 8
1877	46	23, 2	8
1878	45	26	9, 15
1879	44, 4	26, 6	10
1880	47, 5	22, 5	11, 2
1881	45, 5	18, 4	12, 8
1882	48, 5	18, 8	9, 7
1883	45	18, 3	14, 8
1884	46, 8	17, 2	14, 2
1885	47, 3	18, 8	13, 1
1874—75	44, 8	23	13, 2
1876—77	46, 5	21, 8	8, 9
1878—79	44, 5	26, 5	9, 5
1880—81	46, 4	20, 5	12
1882—83	46, 9	18, 6	12, 3
1884—85	47	18	13, 7
1874—77	44, 6	22, 4	11, 2
1878—81	45, 5	23, 5	10, 8
1882—85	47	18, 2	13

我々の観察できることはまず第一に、食料費の比率は年次別では余り変化しないこと（なおこの時期にはもう子供も生まれていない）、しかしいずれにしてもこの比率も変化しないわけではなく、2年単位、4年単位で同じく不規則に（大きくではないにしても）変化すること、である。この最後に述べたことは住居費と衣服費について一層よく該当する。確かに相違は弱められるが同時に強化される。そこには一年の勘定に入れなければならないような不規則性をもはや見ることはできない。そして、これらの数字全体を通してみてさえ（多分食料費の場合を除いて）、支出の配分の恒常的なある型——一時的にそれから外れたとしてもすぐ元に戻るような——を認めることはできない。——それゆえここにこそ、我々が持っている、20年間丁寧につけられた減多にない家計簿の分析から採り上げるべき問題がある。各支出の絶対的総額の研究と同じく支出の配分の研究のためには、2年間、3年間、4年間とつけられた家計簿は必ずしも1年分の家計簿よりも有効であるとは限らない。このような連続年の比較の結果として、ある年が異常であるとか、時期による変化が年による変化と同じように強く現れる範囲をつねに選ぶことができるといったことにはならない。

しかしそれなら何故に1年分のところで止まって、半年分、四半期分、■一月分（一ヶ月分？）■の家計簿まで進まないのか。それは、ある種の支出は年によって大きく変動しても（家具、衣服の購入、引越し、医療費と薬剤費、等）、大多数の支出はほとんど同じであること（食料費、家賃、暖房費、照明費）、逆に月単位ではこれらの数字は総額を表わすところではないことによる。統計事務所のアンケートについての予備研究の過程では年次家計簿を十分に入手できない場合を心配して、数ヶ月にまたがるだけのいくつかの家計簿もいっしょに混ぜ合わせるという考えも表明された。しかしたとえこれらの断片的な家計簿が、同じ家族構成、同じ職業の家族によって同じ記入箇所を書き込まれていたとしても、反復記入と欠落が生じたであろう。なぜなら家計はすべて同じ間隔と時期において購入するものではないからである。これを理解するには、このアンケートの■表X■、42の労働者家族の月毎の収入、を参照すれば十分である。月のうちの最大支出の数に従って月々を分類すると次のような組を得る。3月と12月（7件）、7月（6件）、10月（5件）、4月（4件）、9月と11月（3件）、1月と6月と8月（2件）、3月（1件）、2月は11の最小支出を数えるのみである。さていま、最大支出が最小支出に先行あるいは後続するような場合（この場合ある月の支出が次の月にまではみ出ることがあり得る）、さらに最小支出が2月に当るような場合（これは偏差を増大させ得る）を無視し、その上ですべての最大支出と最小支出を合計すると、(21家族に関する)次のような2つの合計が得られる。最小支出は2.238、最大支出は3.970、相対比は100対178である<sup>(1)</sup>。

(1) 2月の最小支出の合計は1.362で、最大支出の合計は2.549である。すなわち相対比は100対187、



である。同じ表から、支出の最大値は収入の最大値と同じ月、あるいは後続の月（2つのケースのみ）にあらわれる。42家族のうち20家族においてそうである。

年間家計を得るのに、月間の結果を12倍する方法の不正確さをこれ以上よく証明するものはない。

結局1年という期間はこの場合なし得る、最も不自然さのない区切りである。労働者にとって年間収入というものは、公務員や事務員の場合よりも日常性の小さい概念であることは確かである。彼の思いがその給与の支払われ方に向かうか、あるいは日々の支出に向かうかによって、彼は二週間の収入を考えたり、一日の収入を考えたりするであろう。そしてかれ労働者はその給与の全部あるいは一部を失わせるかもしれない多数の偶発事、すなわち閑散期、失業、住居の移動、疾病などにさらされており、年間収入という概念はこの場合あまり明確ではないのである。しかし個々の乱調ではなく、集団が全体として蒙る作用を（これが我々の関心であるが）重視すれば、その場合には各季節の継起、それにともなって欲求の秩序と性質がその強度と種類<sup>エスベス</sup>において変化すること、祝祭日とそれが貧民階級の中でさえ規定する節欲と過剰消費との交互的リズム、ほとんど同じ時期に衣更えをする社会的習慣（衣服の売れ行きがよくしかも品質はよくないほどこの習慣は顕著になる）、食物摂取と季節との関係——これは多分気温によるよりもむしろ商人たちが様々の時期に様々の食料品を売りに出すことによる——、総じてこれらの事情は、支出の研究のためには一年という期間が一周期とみなされ得ることを説明するであろう。他方特に労働者階級においては、家庭のなかで間欠的で例外的支出を奮発することをなるべく避けようとする形ですべてが按配されているように思われる。税金、家賃、食料費の支払いについてはこのことは目に見える形で表われており、これは労働者階級の生活条件を農民のそれから根本的に区別するものである。さらに信用売買の発展、衣服や家具を内金で払う習慣、それがなければ数ヶ月あるいは数年で支払わなければならないかもしれない負担を生涯の活動的な期間全体に分配する保険、これらは労働者の生活過程全体を一層一様化する傾向がある<sup>(1)</sup>。——最後に、富豪は翌年の収入を見越して比較的大きな支出を敢えてしたり、あるいは前年の損失を補うために年間支出を抑えたりするが、労働者の家計はより範囲が小さい。労働者が計算し予測することができ、家計の均衡を乱しそれを回復し得るのは週単位、月単位である。一年間という枠の中では、こうした非常に短期における連続的手直しをすべて確認することは余りに細かすぎて不可能である。

(1) 雑誌代、医者代等についても同様である。

総じてこうした理由によって、1年間つけられた家計簿のみを研究上は取り上げ、それぞれ11ヶ月(26)、10ヶ月(26)、9ヶ月(22)、8ヶ月(10)、7ヶ月(22)つけられた家計簿は付録として公表することにとどめ、6ヶ月ないしはそれ以下のものは無条件に除外したドイツ統計事務所、そして年間家計簿のみを検討した鉄鋼労働者組合は是認に値するものとしなければならない。

### 第三節

#### 家計簿の数

1年間にわたって入念につけられた家計簿を手に入れることは難しいことを我々は述べてきた。同じく、労働者の支出に関する書き入れを回収したアンケート担当者の大部分は、次の二つのやり方のうちのいずれか一つにとどまっている。一つは次のようである。すなわち彼らは可能な限り最大数の回答を得ようと努め、また関係者にその家計簿をつけてもらうことは断念し、その代り彼らには質問するかあるいは簡略化された質問表を埋めてもらうかにとどめた。彼らには「経験」を積み重ねればこうした例外的ケースの影響を打ち消す可能性が高まると思われた。これは外延的方法(*la méthode extensive*)である。いま一つのやり方は次のようである。彼らは典型的な少数のケースを発見しそれらを非常に接近して観察することに従事し、そのために関係者に出納簿をつけてもらい、同時にその関係者たちの状況を照らし出すような個人史的、地方的、等の全詳細を収集した。このように一つの典型を深く究めることは彼らにとっては、その典型に対して作用するあらゆる一般的影響を見出し社会的現実の中心部にさえ達することであると思われた。これは特にル・プレおよびその弟子たちによって行なわれた集中的方法(*la méthode intensive*)である。

さてドイツの調査は現実にはこれら二つのうちのいずれによっても特徴づけられていない。この調査が扱ったケースは、(特にケースをいくつかの集団に分類することによって)ミスと例外的ケースが平均値のなかに消失すると考え得るほど多数ではない。それらは、各ケースについて非常に多数の情報を集めることができるためには余りに多数である。しかし我々はこのことを徒に嘆くものではない。外延的方法も集中的方法もそれほど科学的な方法とは思われないのである。

質問表による方法と同時に外延的方法を適用したアンケート担当者は、質問される労働者の回答のなかに必ず入り込むに違いないミス、不正確、失念といったことについて確かに感ずるところがあり、ケースの数を増やすことによって、大数の法則の作用を通じてこうした間違いを相殺しますます弱めることができると考えた。(それならば)この大数の法則が作用するところまで諸ケースを追求する必要がある<sup>(1)</sup>。——実際例えばルーレットの

遊びでは、勝負を何回も見れば見るほど赤の目が出るケースの数は白の目が出るケースの数に接近することが観察されている。一定量の生理学的小および社会学的的事象についても同じことが言えるであろう。例えば誕生、男女比、疾病頻度、自殺、犯罪等はそれらをより大きな社会的集団の中で研究すればするほどますます顕著な周期性と規則性を示すであろう。その理由は何であろうか。

- (1) 我々の著書『平均的人間の理論——ケトレと倫理統計学—— (La théorie de l'homme moyen; essai sur Quetelet et la statistique moral)』(Paris, F.Alcan, 1913)において、我々は生物学的小および社会学的的事実への大数の法則の適用を詳細に批判するであろう。

我々の経験のなかで遭遇することのできる不規則性について検討してみよう。それは一部は不注意と失念であろう。またある部分は何んらかの方向への誇張であろう。ところで、失念は偶然に起るのでは全くないこと、十分に大きな集団で見れば、そこで取り上げられる種類の忘れ物（封筒の切手を忘れること、列車や車のなかに物を忘れること）の比率はおおよそ同じであることが観察されている。何故か。もの忘れは、当人の不注意の状態と、彼によって遂行さるべき十分大きな社会的重要な部分性をもつある義務との併在である（その証拠に我々の方は忘れながら時を過しているが、社会の方は忘れるという行為が社会に関わりをもつ時にのみそれについて語るのである）。もし失念が周期的で規則的であるならば、不注意の原因と、遂行さるべき義務を指示する原因とが、恒常性を有する力であることが必要である。それらの作用は大抵の場合、別の諸力によって麻痺させられるであろうことは確かである。この別の力は、先の力とは逆に、注意を喚起し、しかも重要な義務の完遂をより稀なこととならしめ、そして不可避免的な不注意の時期のあいだは義務から解放するという傾向をもつ。しかし失念の周期性は、次のことを信ずる根拠となる。すなわち、失念を説明するところの諸力自体は、社会生活の組立てによって発動されること、そしてこの諸力の効果はその恒常的な強度と正確に対応していること、である。もちろんこの強度は微弱であることもありえ、従ってこの力は、たしかに規則的ではあるが非常に長い間隔をおいてしか介在せず、その結果その作用を認めるためには長期にわたって非常に多くのケースを考察しなければならない。他方では別の原因が介在してはならない。それらは観察されている集団の心理状態を変容させ、あるいはその集団が遂行しなければならない義務を増やすことによって、その集団が通常従っているところの社会的諸力の作用を乱すのである。——質問表による方法が用いられているいまの場合、大数の理論はどのようにしてかわってくるだろうか。例えば、収入についての失念が支出についてのそれを相殺する、あるいは（あるカテゴリーに属する収入とか、子供が何人とかの）ある群に参入さ

るべき失念は他の群においてなされた失念に対応する（その結果ある群と別の群を比較することは正当なやり方となる）、こういったことを主張するためには大数の理論による支えが必要であろう。さらに 1000 の、あるいはそれ以上の家計簿を集めれば、1000 の世帯に問い合わせれば、この相殺作用は、もっとゆっくりした方法で集められた 30、50、100、300 の家計簿の場合よりも一層正確に働き得る、と信ぜられている。しかしこれは確実なことでは全然ない。世帯の数は増えるが、それらが観察される時間は大いに減少する。ところで、関係するのは個々人の多様性ばかりでなく、彼らの<sup>ディスポジション</sup>「性向」の多様性でもある。ある人々は非常に忘れっぽく、また別の人々は非常に注意深いとしよう（加えて、彼らはつねにそうであり、アンケートの一日あるいは一週間の間、そのようなものとして自らを示すと仮定する必要がある）。大多数の人々は平均的な注意深さである、すなわち彼らは交互に放心と覚醒の時間を生きる。質問表はどのような時間に彼らを見出したのであろうか。アンケート調査という事実そのものがすでに彼らに対してできる限り注意深くあることを義務づけたであろう、などと言ってはならない。なぜなら注意というものはただ意思にのみ依存するものではないからである。例えば（何らかの意味における）誇張のような忘却の特殊形態について考えてみよう。家賃を払うため、借金を清算するため、何か例外的な出費をするために、大きな支出を強いられ衣食の窮乏に陥っている世帯は、いやでも応でも悲観主義的な思考傾向になるであろう。そのような世帯は実際よりも収入を少なく、支出を多く見るであろう。ある種の副次収入、贈り物に貰った衣服、自らに許した気晴らしの娯楽などは忘れるであろう。逆に、通常の給与のほかに数時間分の追加給を受け取った労働者、偶然に安値で住宅を見出した労働者、などは金の<sup>かた</sup>購買力や自分の収入を過大に考え、生活費を低く考える傾向になるであろう。こうした傾向はしかし他面では過渡的なものである可能性がある。それらは家族の記録帳のデータとしての正確度を何ら変えるものではない。この正確度という点については評価よりも確認作業の方が重要であり、それは人々のなんらかの精神傾向のうちに含めなければならない。しかし先のような傾向も、アンケート担当者のただ一回の訪問によって得られる回答には必然的に反映されてしまうであろう。それゆえ、大数の法則を厳密な意味で適用するのであれば、次のように言わなければならない。最も外延的であったアメリカのアンケート調査においては（現実に利用された家計簿の数は 1 万 1156）、アンケート担当者は同じ家族を 2 度訪問したとして、それが与える数字は、総訪問回数 2 万 2312、同数の「相殺」され得た心理的傾向（注意力の様々な水準）、そして表に見られるような余り大きくない一カテゴリー内部における個々の相殺作用については、当然のことながらはるかに少ない数字である。鉄鋼労働者のアンケートにおいては、労働者が支出を毎日記入するとしてそれが与える日数は 11 万 6800 日、週に 2 回記入するとして（最も好ましくない仮定）、3 万 4560 日である。しかしそれでも

アメリカのアンケートの日数にははるかに優っている。それゆえ、こうした点からしても（そしてこれは鉄鋼労働者のアンケートの主たる優位点であるが）、外延的といわれるアンケート調査は我々のものよりも大数の法則に依拠し得るところ小さいのである。

次のことを付け加えておきたい。それは、アンケートされる側の人々は非常に短い時間で質問されて即座にそれに回答するという事実によって、非常に不自然な状況に置かれているということである。ところで大数の法則が作用するのは、諸事象、表象に向かい合っている諸力が、ある意味では閉ざされた環境の中で、あらゆる影響——これは最初からは現われないであろう——を免れて、作動する場合のみである。大抵の場合アンケートされる側は、質問される時受動的な役割を演ずる。アンケート担当者はある程度彼らに回答を示唆する必要がある。さてアンケート担当者が多数である場合には（同じように大きいアンケートの場合通常そうであるが）、彼らに与えられる書面および頭による指示の統一性にも関わらず、彼らが全く同じように作業することは不可能である。それぞれ少数の世帯に質問する任務をもった非常に多数の人員に直接依頼するであろうか。その場合には偶然的に選ばれた特定のアンケート担当者に頼る必要があるであろうが、彼らはそれぞれ、自分の通常の関心事から、すなわち自分の属する集団の関心事から着想するであろう。つまり医者ならば栄養物の量に重要性を与えるであろうし、組合の書記ならば労働者の一般的状況、家計の黒字あるいは赤字に、経済学者あるいは慈善家ならば、家賃、食料の値段に、重要性を与えるであろう。女性は多分男性よりも衣服、裁縫、クリーニング等のための支出に力点を置くであろう。一定数の、報酬付の職業的なアンケートマンに依頼するであろうか。その場合も、全員に、同じ質問に対して同じ重要性を与えるようにと約束させたとしても、気質と信念の違いを除去することはできない。ある者は短気で、アンケートされる側の人間に無遠慮に対するであろう。またある者は彼らの善意を乱用することを心配するであろう。後者は疑問の持ちすぎ、前者は自信の持ちすぎであろう。ある者は表面的で、またある者は念の入れすぎである、等。まさしく彼らは人数が少ないが故に、アンケートされる側の人間はいくつかの大きな集団のなかに分散させられ、各集団のなかでただ一人のアンケートマンの個人的影響が行使されることになる。

実際にあることであるが、あとで添削して完成させればよいということで、書面の質問表を送り次いでそれを回収して済ますということも起こり得る。アンケートされる側の人間はその間自分自身の判断で行動でき、彼の役割は見かけ上は能動的に見えるであろう。しかし彼はどのように動くであろうか。彼に求められているのは、当日ないしは前日に行なわれた買い物あるいは収入を記録することではない。彼は個々の項目について週、月、年間の平均支出を見積らなければならない。この平均支出という概念は、家賃と税金の場合を除いて他のすべての支出の場合には、多分計算を容易ならしめるであろうが、より恣

意的なものにもするであろう（他に、延滞ないしは支払われない家賃を把握すること、移動、転借人、下宿人等があるケースを全体の研究の中に含ませることはあきらめなければならぬであろう）。アンケートされる人間は彼らが実際に支出するものから発想するばかりでなく（大抵の場合彼はそれを決して自ら決定することはできないというもっともな理由による）、彼の状況にあつて支出することが可能でもあり妥当でもあると思われる支出からむしろ発想する。

以上がこの方法の主たる欠点である。その方法は非常に多数の観察の中から平均を引き出す。観察の数と、非常に様々のケースを含むことになるこの観察の特徴を根拠として、こうした観察全体の中に、ある相殺作用が生まれ、その結果として個々の間違いやごまかしはあつても、平均が歪められることは全くないと人は考える。しかし観察自体がすでに平均であり、最悪の条件の下で全く経験的になされていることに気付かない。科学の目的はこの場合にも、先入観、出来上がった既成の見解、曖昧で矛盾した観念に代えて、事実に基づく正確な認識を置くことである。しかし■右のやり方では■事実があらかじめ歪められ、事実そのものの輪郭を弱め暗くするある種の見解を通して見られている。ここでは人は平均値の円環に入り込む。人々の行動様式、その支出その他は、彼らが動き回る社会環境からの影響によってとりわけ説明され得るといふこと、これはかなりありそうなことではある。しかしこのことが理解されるのは、この影響がどのようなものであるかを、またどのような意味において影響が働くかを、彼ら自身に尋ねることによってではない。それが理解されるのは、彼らの、外力によらない自然の行動の中に、またそうした行動の中でまずは説明不能と思われるものの中に、そして彼ら自身が自覚できないものの中に、その影響を探ることによってである。個人は集団への依存関係の中で成長するものだという観念はしばしば非常に不正確である。個々人の行動は集団に依存する。しかしこの依存がどのようなものであるかが理解されるのは、そうした行動の全体を（この場合には記入される支出全体を）比較し総合して考えることによってであつて、彼らが現にある、ないしはそうならざるを得ない状態についての彼ら自身の見解の全体を比較総合することによってではない。

ル・プレと同じようにこの領域に集中的方法を適用した人々は、多数の個別的ケースを追加することによって平均的結果に到達しようとは思つていなかった。しかし彼らが出発点としたのは平均的と想定されたケースからであり、その注意のすべてを集中したのはそうしたケースに対してである。このような考え方はル・プレの哲学的観念によって説明される。家族会計は実際まず彼の特殊研究の一構成要素であつた。特にヨーロッパの家族の現状、まとまりの度合の不均等、様々の資産状態を把握しようとして、彼はその歴史と物質的精神的状况について典型的と思われたいくつかの家族を選び出した。それらの家族は、

どの程度まで、それが含まれている民族的ないしは職業的全体の象徴たり得ているか。これは論じても無益な問題である。なぜなら我々はそれらと類似の家族について同じような詳細さでは知らないからである。(しかし) いずれにしても、各事例に付与された重要性から見て、その叙述がきわめて綿密入念であること、知り得たことはすべて我々に提示されていること、過去にまで十分さかのぼっていること、周囲の集団とのつながりが強調されていることは理解できる。ル・プレは明らかに、集団の生活がそれから作り上げられているところの個別細部のすべてを結合統合することによって、集団生活の深い本性とその最終的な動因、集団を決定する肉体的精神的諸力に到達できるだろうという考えをもっていた。このような方法は、魂について知るために、自らののであれ全く他人のであれ一つの魂を、しかし徹底的に研究して、一つのケースについての集中的省察でもって非常に広い経験に代える、ある種の心理学者の方法に似ている。家族の中に社会の根本的な要素、細胞、真の単位を見ようとする場合にこうした方法が行なわれることは、他に方法がなければ理解することはできる。そうであってみれば、こうした集団の親密さの中で長い間生活することによってその行動のすべてを知り尽し、その傾向のすべてを洞察することも、一定の注意と共感の能力をもっているならば可能であるということもできる。ル・プレと同じテーマを立てるのであれば、観察ケースの時間の長さと集中度という利益のためにその数を制限することは正当である。

しかし支出について、しかもそれだけを研究する場合には、このような方法をどうして適用できるのかは理解できない。本当のところをいえば、ル・プレが典型的家族にこだわり注目したのは、彼の経験、社会的知識一般が現代社会における家族の主要形態についてのある観念をすでに彼のうちに作り上げていたからである。家族の形態について彼が提示している分類は、(資料整理の) 後で作られたものでないことは確実であり、彼のいくつかの特殊研究は要するに単なる例証として出されているのである。彼は一つの家族類型を、経験豊かなガイドがその地方のことが最もよく分るところへ手っ取りばやく案内するのと同じように、選び出したのである。——しかし我々としては、支出が従うべき法則について、定められた先行的観念はいかなるものも持たない。厳密に言えば、道徳的、宗教的、家庭的習慣、労働条件、公営娯楽、区画や家屋の外観、これらはその一般的特徴においてかいま見ることができる。しかし支出については外部からどのようにして知ることができるのか。多くの世帯は、彼らの家計がどのように均衡しているか、あるいは均衡していないか、について彼ら自身知らない。いずれにしても彼らはそれを他の人間に知らせようとはしない。他方これは、最悪の場合には風俗のもつ規律性や家族連帯の堅さと同じように、見られず、感ぜられず、推測されない。このような領域で、平均的ケースはどこで見出し、いかに探せばよいのか。

全体についてであれ、いくつかの品目についてであれ、余りに多くあるいは不十分に支出する家族を除外することは問題になりえない。余りに多くとか不十分とかの表現はあまりに曖昧であり、すでに非常に多数の比較点を得られている場合にのみ、その意味を確定し得るものである。個人的性向によって支出のありようが変容するあらゆる世帯を除去しようとする場合でも、そうした性向が確かにそうした個人的なものであることを確かめる必要がなおあるであろう。ある種の特徴は、それだけを切り離してみると個人的に見えるが、逆に全体の中に置かれるとある社会的意味をまとうことがある。いずれにしても、個人的特性を認知するためには、まず個人的でないものを全て認知する必要がある。——一つの例が、いわゆる平均的ケースに、それもただそれのみに専念することによって、いかに現実の中の重要な部分を削除してしまうおそれがあるかを示すであろう。例えばアンケートに取り上げられるのは、いわゆる正常とされる構成の少数の家族であろう。この点については（十分疑わしいが）了解があるものとしよう。しかし、一つの社会集団は非常に多くの種類の家族を含んでいるのである。この集団の習慣や行動様式は最も広く見られる家族類型の習慣や行動様式によってだけでは説明されるものではない。多くの種類のそれぞれがそれとして作用する。給与はある生活水準に対応させて決められるものと仮定しよう。経営者たちはいわゆる正常家族の欲求だけから着想し、それだけを考慮に入れるというのは確かなことであろうか。経営者たちは時として労働者だけの通常支出、あるいは子供なしの世帯の通常支出を最重視すること、給与はそれを越えて上げてはならないと彼らが考えていること、その結果子供のいる世帯では婦人の補助的労働や二次的財源等を当てにしなければならないこと、こうしたことは無視されるのであろうか。いわゆる正常家族もその前は、すなわち子供の誕生以前は、正常とみなされる子供の数以前は「変則的」であったろうこと、正常家族はその間習慣を身につけたであろうこと、そして多くの労働者世帯に特徴的な受動性のために世帯が大きくなっても依然としてその習慣を全く変えようとしなないこと、こうしたことも付け加えてよいであろう。労働者世帯が住居を変えることがあるだろうこと、家族の新しい構成員の数と年齢等に比例して食料費が増大するであろうこと、こうしたことを信じさせるものは何もない。——実際もし、ある程度正常と見なされるある資格あるいは特徴を有している家族のみを取り上げるのであれば、この特徴ないし資格の作用、家族の行動様式に対するその影響を（その特徴をいろいろ変化させることによって）研究するあらゆる可能性が失われてしまう。本質的ないくつかの問題を立てることは放棄される。しかし同時に、この特徴が及ぼす影響が知られない以上は、それが何らかの影響を及ぼすと根拠をもって言うことはできない。またこの特徴が余りに際立ち過ぎている、あるいは弱すぎると考えられるようなケースを除外するいかなる理由もこの場合存在しない。換言すれば、正常なものを定義する以前に正常なケースを取り上げることはできない。しかも、それを定義し得るのは、正常であるか変則的であるかどうかを先験的には知り得ない一定量のケースを比較した後だけである。かくしてここでもまたある円環に入り込むことになる。

ドイツのアンケートは、■右のような■問題点は何ら挙げていない。一方では、アメリカ



カとイギリスのアンケート担当者によって集められた家計簿より明らかに数が少ないけれども、ドイツのアンケートは少なくとも本物の家計簿であり、一年の端から端まで毎日つけられた収支計算であり、おおざっぱな質問に対する曖昧な回答ではない。他方では、ル・プレとその弟子たちの家計簿よりも完成度は低いけれども（あるいはむしろそこにあるような補足的な資料を欠いているが）、ドイツのアンケートは多少とも恣意的に典型的として取り上げられたいくつかの世帯なるものには全然関係していない。しかしそれは、世帯の各カテゴリーについて、それから引き出し得る平均の中に、最も一般的で例外的でない特徴を認識するには十分な程度に多数である。もちろん、このようなアンケートでどの位の数の家計簿に注意を払う必要があるかを言うことは不可能である。しかしこれは、一年間にわたってつけられた多数に上る本来の家計簿が我々に呈示される最初の機会である。我々には自信をもってこれの研究にとりかかる十分な根拠がある。

ドイツの労働者の、しかも彼らだけの支出に基づく一研究から、労働者階級全体に有効な結論を引き出そうという我々の主張は多分人々を驚かせるであろう。もし誰かが（我々のと同じくらい正確なデータに基づいて）、国民的性格のいくつかの特徴によってイギリスないしはフランスの労働者の支出についての集合的習慣が、我々がドイツについて指摘するところのものとは本質的に異なるということを証明してくれるならば、我々は即刻結論をドイツの労働者のみに限定するであろう。しかし国による給与の違い、あるいは価格の違い、さらには給与にかかる税率の労働者ごとの違い、すなわち経済的違いを引き合いに出すだけならば、労働者の支出の集合的習慣という性質はそうしたものに变质され得るということであろうか。ある経済条件がドイツでは優勢であるが故にこそここで広く普及している習慣は、イギリスではドイツのような経済条件がそれほど支配的ではないがゆえにこそ、そこではあまり普及しないであろう。しかし、このような習慣と経済的条件との間の関係そのものはそれにも関わらず存続するであろう。習慣がどのように変化するであろうかを見るためには、当然のことながら、できる限り経済条件の方を変化させてみるのが最も有効である。そのようなアンケートで同じ程度に広くそして精密なものが別の国で行なわれれば、それは望ましいことではある。しかし、ドイツにおけるアンケートでとらえられた様々の集団でさえすでに、我々が比較対照する材料には事欠かぬ程度には十分に多様である。

我々がドイツの労働者に執着しようとしまいと、他方で、ずっと以前から労働者の支出に関するデータを集めることに意を用いてきた人々がいるのに、我々は何故に例の二つのアンケートのみを分析してきたのかという点についての問いがあり得るであろう。二つのアンケートだけに拘泥してきたことを説明するためには、ここで家計関係のすべての文献資料についての批判的検討に携わることが必要であろう<sup>(1)</sup>。こうした研究は行なわれてはいたのであるが、方法が余りに多種多様であり、それらを相互に比較して、あるいは二つのアンケートと比較して何か確実な結論に到達することは不可能であることが分るのである。この時代における（19世紀の最終数十年における）支出の変遷を研究するためには、こうした資料はかけがえのないものであり、役に立つものであろう。しかし我々の立てて

いる問題は別のことである。

- (1) 読者は■補遺■のところにこのような批判的検討を見出すであろう。我々は叙述を中断しないためにそれを■巻末■に移した。

#### 第四節 支出の種類

我々はドイツ統計事務所のアンケートとドイツ鉄鋼労働者組合のそれとが、労働者階級一般における多様な支出についてその大きさと相互関係の研究にとって、ずば抜けて有効性の高い資料と思われる理由について述べてきた。いまここで、どのような状態で我々にデータが提示され、我々がいかにそれを念入りに仕上げたかを伝えておく必要がある。

結果の全詳細が再録されているのは、ドイツ帝国統計事務所のアンケートの表 I（地方別収入と支出、pp.1-149）においてである<sup>(1)</sup>。

- (1) 各世帯について次のような指示が与えられている。住所、世帯構成員数、家長の職業、親の一方あるいは両親の戸籍、子供の数およびその年齢、世帯の一部をなしている（両親の場合であれその他であれ）他の人々、（そして、備考として、一定期間家族と共に過した人々）。収入については次の区別がなされている。主たる給与、男子の副次収入、婦人の収入、子供の働きによる金銭的寄与、部屋の転貸収入、その他の金銭収入、現物収入、そして総計。支出については 17 のカテゴリーに分けられている。「食料費、酒などの飲料費、タバコ代等」の支出の詳細は 21 のカテゴリーに分けられている。収入の 7 つの項目と支出の 17 のカテゴリーについて、マルクによる絶対数と共に全体の中で比率が与えられている。まず人口 10 万人以上の大都市、次いで平均的都市、そして人口 2 万人以下の地域、それぞれについてのデータが提示されている（それぞれ 701 世帯、81 世帯、70 世帯である）。

支出を提示するために選ばれた枠組を我々としては強調したい<sup>(1)</sup>。

- (1) 収入に関しては、統計事務所のアンケートと鉄鋼労働者のアンケートとの次のような違いについてのみ記しておく。つまり、鉄鋼労働者のアンケートでは男子の給与と総収入のみが指示されているのである。

あらゆる国における、そしてこのようなデータが集められるようになって以来の、いろいろなアンケート担当者は同じような大きい下位区分を採用するようになったけれども、細部では依然として多くの違いが残っており、このことが比較を一層困難にしている。これらの枠組の特徴についてすべて想起することはせずに、ル・プレと、1853 年のベルギーのアンケートの助手たちがほとんど同時に注目した枠組みがどのようであったかを示そう。

ル・プレは次のように書いている<sup>(1)</sup>。「支出の家計予算の最初の三つの部門は食料、住居、そして衣服という最も絶対的な身体的欲求に関係している。第四の部門は、精神的欲求、レクリエーション、健康維持に関係する支出を含んでいる。最後の第五部門は、家内業、負債、税金、保険のための補足的支出をひとまとめにしている。」我々は食料費をさらに7つの費目に分割することについては再び取り上げるつもりである。住居費は主要な4品目を含んでいる。つまり、家賃、住宅の維持費、家具調度の維持費、暖房および照明費、である。第四部門では、精神的欲求に関係する支出は本質的に宗教と慈善活動に関係している<sup>(2)</sup>。第五部門では、家内業に関係する支出は、単に参考として指示されているが、本来の支出とは見なされていない。同じような状況に置かれている家族で、そのうちのいくつかが家内業を営んでいるような場合について、その「条件の極度の類似を覆い隠すことがないようにするため」である。——ベルギーのアンケートはル・プレの最初の三部門を、身体的ならびに物質的範疇の支出、というタイトルで一つにまとめている。品目は、(健康維持に関係する支出もそこに含まれているが)ル・プレのものと同様である。宗教的、精神的ならびに知的範疇の支出、というタイトルの下には、ル・プレの第四部門の品目の他に(健康維持費は除いて)、ル・プレでは第五部門に含まれている保険が含まれている。最後に、奢侈費あるいは不用意から結果する支出、というタイトルには、負債(ル・プレの場合には第五部門)の他に、ル・プレの場合には第四部門に含まれていた娯楽、レクリエーション、嗜好品(タバコ)が、劇場、賭け事(la jeu)、富くじと同じく含まれている。

(1) Les Ouvriers européens. I, p.290 sqq.

(2) ル・プレは次のように指摘している。すでに十分に複雑化した住民の間では、「宗教感情は、稼ぎと儉約に対する絶えざる専念が生み出す諸習慣に対する自然の対錘をなすものである。……それゆえ労働者階級の中に表われている進歩の射程を測定するためには、宗教感情の成長が用意周到の精神の成長と歩調を合わせているかどうかを確認することが必要である。」逆に、素朴でほとんど用意周到ということを知らないいくつかの住民の間では「慈善の習慣と貧者の苦しみに対する共感<sup>オリエント</sup>は通常強力な宗教的組織とは結びついていない。」東洋の単純な諸民族は親切と施しをなすが、それは義務によってではなく、「自然の性向」によってである。(Livre cite, p.357)

多種多様な支出の分類についての以上のような問題は、データの詳細が非常に歴大なものである場合でさえ、依然として重要である。我々の出発点となるようにデータを表にまとめること、最初の加工、そうしたことのために分類について与えられる解答は、我々にインスピレーションを与えるものである。——ドイツ統計事務所のアンケートにおける分類と、それまでのものとを比較しよう。ドイツ統計事務所のアンケートでは、食料費、飲み物代、タバコ代、レストランあるいはカフェの費用が同一のカテゴリーにまとめられている(これらは食料費等の表の中でのみ区別されている)。ル・プレ、ベルギーのアンケート、そして鉄鋼労働者のアンケートはタバコ等の支出を食料費から切り離している。他方このような支出の性格を確定することは容易ではない。それは肉体的欲求を満足させるも

のではあるが、しかし知的な気晴らしとレクリエーションの位置を占めるものとも見なされ得る<sup>(1)</sup>。発酵飲料についても同じように問題が立てられるであろう（例えば鉄鋼労働者のアンケートは食料費一般の中に発酵飲料を含んでいない）。もし我々が必須の支出と奢侈的支出とを区別しようと望むならば、收拾がつかなくなるであろう。なぜならその場合には食料そのものの間にも多数のカテゴリーを導入しなければならなくなるだろうからである。さしあたり我々はこうした難しさを指摘するにとどめなければならない。いろいろな項目をまとめるか分離するかは、提起される問題の性質によって想を得なければならないであろう。ドイツ統計事務所のアンケートでは、レストランやキャバレーでの支出については食料費一般と結びつけられている。それでもル・プレの場合とドイツ統計事務所のアンケートでは、それらを別にして計算することが可能である（ベルギーのアンケートは外での酒代のみを区別し、鉄鋼労働者のアンケートは外での飲食を区別しては示していない）。

- (1) カランチーの炭坑労働者とアルツの坑夫について述べつるル・プレは次のように指摘している。
- 「最も不可欠の欲求を辛うじて満たすにすぎない収入しか得られない、苦しい作業が、厳しい条件の下にあるこれらの労働者に課すところの窮乏の生活を直視したあとで彼は、喫煙以外のいかなる気晴らしが彼らに与えられているかを探してみたが無駄であった。たとえば年間約 10 フランの支出でもってアルツの坑夫は、休憩の間であれ作業中であれ年間何千回も繰返される快い感覚を、喫煙以外の方法でいかにして手に入れることができるのであろうか。実のところ、炭坑夫と坑夫は、船の監視に当たっている水夫と同じように、北米の森林の中での喫煙を発明したインディアンの狩猟家の置かれている状況にある。」（Livre cité, p.364）

統計事務所のアンケートは、衣服、肌着類、そしてクリーニング代を同一のカテゴリーにまとめている<sup>(1)</sup>（これから我々が論ずることになる支出についてはすべて、たとえ苦勞しても支出の諸要素について計算することを可能にするような詳細な表はもはや存在しない）。ル・プレは衣服について、男子用、女子用、子供用を区別し、またクリーニングを別にしてしている。統計事務所のアンケートが同じような区分をしなかったことは残念ではあるが、少なくともその分類は容認し得るものではある。鉄鋼労働者のアンケートはたしかにクリーニング代を別立てにして示してはいるが、衣服代、（家具、食器類、家財道具といった）新たな購入物、および修繕費を一つにまとめている。これは混乱の大きな要素である。衣服のための支出を不明瞭にし、家賃と、それに最も密接に結びついている諸費用とを比較することを妨げる。ベルギーのアンケートはこれらについては何の区別もしていない。

- (1) 支出は平均で、衣服代だけで 227.68 マルク、肌着類とシーツで 24.53 マルククリーニングおよび洗濯代で 30.23 マルク（総額で 282.44 マルク）である。

統計事務所のアンケートは、家賃および家具調度費を一つの項目にまとめている<sup>(1)</sup>。この二つの要素が区別されなかったことは惜しいことである。ル・プレは家賃と住居維持費

とを同時に指定し、家具調度費をそれから区別している（家具調度にはシーツ、カーテン、タオルが含まれている。別のアンケートではシーツとタオルが衣服に含まれることもありそうなことである）。ベルギーのアンケートは家賃と家具調度とを区別している（しかし住居維持費は指定していない）。鉄鋼労働者のアンケートについて言えば、これは家具調度費と衣服費とをいっしょにしているばかりでなく、家賃と税金とを同一項のデータの中で呈示している。これはアンケート担当者の頼りなさ<sup>アンセルティフェード</sup>であり、これによってアンケート間で比較することがいかに困難になるかを示している。（労働者階級にとって）家賃と最も直接的な関係にある支出、労働者が家賃と最も関連させがちな支出を考慮しようとするのであれば、家賃と交通費とを全体として呈示することには多分根拠があるであろう。しかし依然として、家賃は単独で提示されるのが望ましい。なぜなら家賃の数字は、日給の数字と共に、各労働者が最も明瞭かつ恒常的に想起するはっきりしたデータの一つであり、彼自身を「分類する」のに最も役に立つデータの一つだからである。

- (1) 家賃の平均は 326.33 マルク、設備費および維持費は 72.34 マルク、庭および草木のための費用は 2.60 マルクである。

■暖房費と照明費は、事務所のアンケートでも鉄鋼労働者のアンケートでも■、合算されている<sup>(1)</sup>。ル・プレの場合とベルギーのアンケートではこれらは区別されている。暖房と照明はたしかに異なる欲求に対応している。暖房はまず食料の煮炊きを含み（これは食料費に結びつき得る）、また住居の暖房を含んでいる（これは住居費の中に算入することが可能であろう）。ル・プレにとっては、「燃料の問題は、家族が享受する厚生の水準を測るためのたしかな指標を提供するものである。……燃料の大量の消費は人間的生活の維持にとって欠くべからざるものである。それゆえ生計不如意になった労働者がまず切り詰めるのはこの費目である<sup>(2)</sup>。」しかしこうしたことは家賃についても同じように言い得るので、これはこれら二つの支出を結びつける理由となるであろう。照明費は少なくとも部分的には全く別の欲求に応えなければならない。照明費は、ル・プレによれば「冬の夜の間、読書、会話、近所の人々の集いが提供することのできる楽しみを住民がよりよく味わう度合に応じて、顕著に」増加する。「この支出項目はしばしば各家族の知的教養と社交性の非常に優れた尺度である。」しかし彼は、そうした家族が少なくとも付随的に家内業<sup>メティエ</sup>を営んでいる場合には、その支出項目は「業務費」<sup>アンデュストリー</sup>にも関連し得ることを忘れていた。いずれにしても暖房照明費の変動を研究する場合には、それが満足させる欲求が多様であることを思い起す必要がある。

- (1) ただし総世帯で見れば、暖房費と調理費は平均で 64.13 マルク、照明費は 26.70 マルク（総額 90.83 マルク）である。
- (2) Livre cité, p.333.

統計事務所のアンケートの支出第 5 項目は保健衛生と身体管理に関係している<sup>(1)</sup>。この身体管理の方は鉄鋼労働者のアンケートでは省かれている（あるいは「その他の支出」に関連づけられている）。が、他方では医者代、歯医者代、保健衛生が一つの項目にまとめられている。この点はル・プレの場合でもベルギーのアンケートでも同様である。身体管理もまたはっきりしない複雑な性格の支出である。身体管理はおそらくクリーニングに関連づけられるべきであろう。疾病、心身障害によって惹き起される支出に関しては、これらは、災害保険と並んで■**廃疾疾病保険**■が機能しているドイツでは特に、<sup>プレボワイアンス</sup>養老厚生（*prévoyance*）と呼ばれる支出と一定程度関係を持っている。ル・プレの時代にはまだこのような状況にはなっていなかった。彼は保健衛生費を道徳的欲求に関連させている。なぜなら彼の言うところでは、「病人を手当てもせずに放置しておくことに慣れている家族は、まさにそのこと自体によって道徳的墮落に陥っていることを証明することは容易である」からである。たとえ医療の有効性に疑いをはさむとしても、「道徳的観点からすれば、保健衛生の欠如が及ぼす残念な影響を見逃すことはできない」<sup>(2)</sup>。今日でもまだ医師、歯科医師にかかる費用は、それらが保険によってカバーされていない度合に応じて、ある種の利己主義的な心配に対応していないばかりでなく、同時に家族的連帯の度合や社会的都合によるいくつかの規則によって、説明されていることは確かである。

- (1) この項目の支出は支出総額の 2.3%になる。保健衛生のための支出は平均 41.19 マルクで、(入浴、理髪等の) 身体管理のための支出は 9.67 マルクである。
- (2) Livre cité, p.336.

我々が見ている 4 つのアンケートでは、子供の教育のための支出はすべてバラバラに挙げられている<sup>(1)</sup>。統計事務所のアンケートではそれは支出の第五項目である。第七項目は知的社会的欲求に関係している。同様に鉄鋼労働者のアンケートでは、文化および気晴らし、という一項目がある（そこには労働組合の会費その他は含まれていない）。子供の教育と知的社会的欲求という二つのカテゴリーの支出を区別することには、それらは実際異なる欲求に対応しているのであるから、(これら二つをいっしょにしているベルギーのアンケートが行なっているところとは違うが)、利点がある。子供の教育は部分的には義務的な支出であり、そこには子供により高い社会的地位を確保するために親がなすところの、多少とも大きな配慮が表われている。知的社会的欲求あるいは文化と気晴らしに対応する支出は<sup>(2)</sup>、多くの場合かなり大きな比重を持ち(統計事務所のアンケートでは支出総額の 3.97%を占め、合わせて 4.07%の暖房および照明費とほぼ同じである)、一般にかなり多様であり、もっと深く詳細を知り得ないのは残念である(社会的進歩と共にこれらは増大せずにはいないだけに、またこのことは後に比較対照のための貴重な用語を提供することになるうだけに、一層残念である<sup>(3)</sup>)。とくに我々が知りたいと思うのは、書籍、定期刊行物、雑誌の購入に当てられた支出、労働者が参加できる団体、組合、協同組合、政治団体に支払われた会費、拠金の総額、劇場、コンサート等のための支出総額、印紙、便箋等のための支

出総額、である。ここでもまた総額は、欲求の非常な多様さに対応している。欲求が受け取る満足が小さなものであればあるほど、我々にとっては総額が明瞭であることが重要であろう。

- (1) この支出は支出総額の 1.4% である。これは、子供が大抵は庶民向けの学校へ行く労働者の場合には、事務員や小学校教師の場合よりも遙かに少ない。労働者の場合には、平均 11.63 マルク（すなわち 0.6%）、事務員や小学校教師の場合には 75.23 マルク（すなわち 2.4%）である。
- (2) ただ雑誌、書籍、会費が平均で 52.67 マルク、気晴らしのための支出が 36.11 マルクになることが示されているにすぎない。
- (3) ル・プレの分類ではこの点についていかに混乱が支配しているかを書きとめておきたい。「レクリエーションおよび祝祭」の項目の下に彼は次のような支出を含めている。ロンドンの町工場の刃物製造業者：クリスマスのガチョウとプラムプティング、子供のおもちゃ、グリニッジへの 2 回の旅行、劇場——シェフィールドの町工場の刃物製造業者：12 羽の小鳥と 4 羽の鳩の餌、および 12 の籠と 1 つの鳩舎の維持費、子供のおもちゃ、シェフィールドの定期市で買った食料品——シェフィールドの指物師：定期市で買った英国ビールのエール、パンと香辛料、子供のおもちゃ——ダービシャーの鑄鉄工場経営者：タバコ、ダンス、キャバレー、クリスマスのプレゼント。文化に関する特別の項目は存在しない。

鉄鋼組合のアンケートでは家賃と関連づけられている税金は、統計事務所のアンケートでは、第八の項目として次のように別けて指定されている。すなわち国税、市町村税、教会税、である<sup>(1)</sup>。ル・プレは宗教関係の支出を別けて指定しているが、そこには子供の宗教教育、信仰書の購入、教会の座席料（la place a l'église）、義捐金、が含まれている<sup>(2)</sup>。これらの支出が別の税金に統合される場合もある。というのも、ドイツでは宗教関係の費用への寄与はほとんど強制的であり、（義捐金等）その他の支出は世論ないしは伝統によって、支払うことを強制されている税の如きものだからである。しかし（et）、（新しい法律によってある品目の価格が余りに急激に、また大幅に上昇するケース以外には）明瞭には認知されず、しかも法律家が言うように、気付かないうちに、そして、直接税の場合のように社会意識の独特の反応もなしに支払われる間接税が、直接税と関連づけられ得なかった点は遺憾とするには及ばない。

- (1) この支出は支出総額の 1.4%（税金および賦課税あわせて平均 31.47 マルク）である。しばしば税金の総額は、忘れてしまうことや、支払いの遅滞によって、必ずしも正確に表示されていないことも指摘される。
- (2) マルケンの沿岸の漁夫：宗教儀式維持のための寄付、家族 5 人のための教会座席料。

第九項目では厚生養老のための支出、特に保険が指定されている<sup>(1)</sup>。鉄鋼労働者の組合は、組合会費あるいは労働者が参加している諸団体に支払われるその他の金額を、保険に

統合している。このような合体は遺憾なことである。このカテゴリーの強制的支出とそうでないものを分離し、強制的保険と共済組織の拠金とを別々に指定していたならば有益であったろう。その場合、家計簿をつけてもらうのに非常にしばしば組合が当てにされた（そして鉄鋼労働者のアンケートではすべてが組合員によって記入されなければならなかった）ので、この共済関係の支出の数字は確実に平均より高く、他方、保険だけの支出額はより典型的であったであろう。さらに、保険と共済団体に支払われる拠金の現在における総額と、かつてこうした目的のために支出された総額とを比較したら興味深いことであったであろう。すべてこうした項目が区分されていない以上、こうした比較は不可能になる。

- (1) 保険の支出は、全体支出の3.4%とされている。この支出がもっと大きいことは確実であると付言されている。なぜなら、多くの労働者は、その収入を記入する際に、■疾病廃疾保険金庫■に彼らが支払う分担金を給与から差し引き、したがってこの支出を記入していないからである、とされている。それゆえ■右の■支出額は特に任意保険を表していることになるであろう。しかし、この点は実際依然としてはっきりしない。

第十項目は移動のための支出を含んでおり、鉄鋼組合のアンケートの場合も同じように別立てで指定されている。ル・プレの場合には移動費はほとんど「レクリエーションと祝祭」の項目に現れるだけであり、ベルギーのアンケートでは区別しては全く計算されていない。このことはこの時代には労働者が仕事場から遠く離れて住むことを可能にするような交通サービス部門の組織が存在しなかったことによって説明される。特に欲求の多様性を基準として支出を分類する場合には、仕事場に赴くための交通費が問題であるのか、あるいはその他方すべてに関わる交通費（特に散歩、家族メンバーへの訪問によって生ずる）が問題であるかによって、2つの要素を区別することが必要であろう。

第11項目と第12項目は（家庭内の）使用人の仕事および（家族の内部での）金銭的贈与に関係している。家庭内使用人のための支出は全体の支出の0.6%にすぎず、また大部分は労働者ではない50家族についてみられるだけである。家族内の金銭贈与も同じように非常にわずかであり、社会的原因によるところは最も少ない。それならばこれらは雑費のところに入れるのが適切だったであろう。これは鉄鋼労働者のアンケートの場合に行なわれていることである。ベルギーのアンケートの場合にも同じ構造が取られたようである。ル・プレの場合にはこうした支出は登場しない。

これらとは別に、債務償還と負債の利子（第13項目）、および職業上必要となる支出（第14項目、ここでは道具、器具、作業衣が問題になっている）の記入も同じく無用であると思われる。すでに指示された支出の中に「負債の利子」<sup>(1)</sup>という費目のうちの主要なものが見出されるであろう。そこからその総額を確定することは興味深いことであり得るであろうが、他方では難しいことでもあろう。そして労働者にとっては、こうした費目諸要素は主要な諸支出の中に消え去り、この諸支出の中にこうした要素に対応する明瞭な表現は何もない。それゆえ我々はこれにかかずらう必要はない。負債の他の利子については、そ



れらが非常に僅かであることは確かであるから、「雑費」の中に入れても何ら不都合はないであろう<sup>(2)</sup>。この点は仕事に従事することから生じる支出についても同じである。この支出は他の費目（衣服、交通費）の中に見出されるものであり、あるいはその総額が収入から差し引かれている（ないしはそうされなければならない）ものであり（道具、原材料）、そして我々が指摘したように、取るに足らぬ額である。これらについては別個には取り上げない方がよかったであろう。最後に第16項目と第17項目についても同じことが言える。すなわち、他の支出に向けられない現物収益（*produits naturels*）（この欄はほとんど常に空白である）、および労働者の間では非常にわずかである貯蓄（全支出の1.1%）、である。貯金からの引き出しは、収入の部のなかで別個には挙げられていない。それゆえ実際に貯蓄された元金の動きを追跡することは不可能である。そしてこの費目に記入されているものは見せかけだけのものにすぎない可能性がある。項目11、12、13、14、16、17は無条件に項目15（雑費）につけ加えられるべきであったらう。これは鉄鋼労働者のアンケートでは至極正当に行なわれていることである。

- (1) ル・プレは負債の利子として次のものを挙げている（■前掲書■、第三巻、p.295）。<sup>クレジット</sup>「信用売買で購入される消費品目にかかる、現金売値の値上げという形で商人が受け取る利子（15%）」。これは最も重要な負債のための支出が食料および衣服のための支出のうちに見出されるのであろうことを意味する。彼は別のところ（同上、p.121）で、同じ費目の下に次のものを挙げている。「家屋および庭の取得にともなって（オタール坑山の）上級管理機関に支払われるべき金の利子、すなわち4%の利子」。そして彼が「家屋のうち家族の者が住む部分——残りは転貸される——の家賃」をこれと区別していることは疑いない。しかしながら、（労働者は家屋を取得する際に総額で家賃を減らすことのみを求めているので）、家賃の数字のところにはこれら二つの総額の差だけを記入する方が正確であろうことは疑いない。
- (2) ベルギーのアンケートでは、負債の減価償却の項目はゼロと見積もられている。質入れされた物品についての税負担の利子は（公営質屋の場合）支出総額のかろうじて0.01の割合である。

これがなされていたならば、多数の重要な支出について場所と時間を節約しつつ別に計算することが可能になったであろう。ここでの分析を要約するために次のことを想起しよう。すなわち統計事務所のアンケートは次のものを別々に示すことをおろそかにしたのである。つまり、衣服については、厳密な意味での衣服のための支出（これはさらに家族の構成員が多様であることに関係するいくつかのものを区別することも可能であったらう）とシャツ、タオル等のリンネル製品のための支出、クリーニング、洗濯のための支出を区別しなかったこと、住居に関しては、家賃と家具類（取得のための支出と維持のための支出を別にして計算することも可能だったであろう）とを区別しなかったこと、である。さらに彼らは暖房費、照明費、保険衛生費、身体管理費、教養娯楽費、各種会費を区別しない点で、また、他の交通費は雑費あるいは娯楽費に結びつけて仕事に赴くための交通費は別にして示すことを怠った点においてまちがっていた。鉄鋼労働者のアンケートについて

言えば——これも暖房費と照明費、教養費と娯楽費を区別せず、また交通費をひとまとめにして示し、身体管理費については触れずなのであるが——とりわけ衣服費（クリーニング費をこれとは別にしているが）のなかに家具の取得費と維持費、修繕費一般を入れ、住居代のなかに税を入れ、保険のなかに各種団体会費を入れた点は非難しなければならない。

枠組のこのような違いはこれら二つのアンケートのあらゆる比較対照について、それを非常に困難ならしめ、非常な慎重さを必要たらしめる。この点を強調しなければならなかったのはこのためである。しかしながら、昔の区分と比較すれば（ル・プレの研究とベルギーの 1853 年のアンケートはその中でも最も完成度の高いタイプなのであるが）、今日における支出の分類様式はより科学的であると思われる。肉体的欲求と物質的、宗教的、道徳的、知的欲求との区別、必然的欲求と奢侈的ないしは不用意から結果する欲求との区別において多くの恣意的要素が存在した。それはあたかも食料と衣服のための支出には奢侈的なものはあり得ないかの如くであり、タバコを喫うこと、足繁くレストランに通うこと、また足繁くカフェ、バーなどの酒類提供店に通うこと、これらは労働者の健全な部分にとっては必要とはならないかの如くであった。他方ル・プレのように宗教、子弟教育のための支出を同一のカテゴリーに、レクリエーションと祝祭、そして保健衛生のための支出（祝祭の項目の不調和な性格を考えていない）を救済と施しの中に入れること、これはこれらの支出がすべて同種の欲求に対応していると想定していることによって、人間の性質の過度の単純化である。これらの支出は実際には多少とも強制的であり、多少とも社会的であり、そのことによって支出という以前に、予め列挙されている支出に多少とも接近する。アンケート担当者の間違ひは、次のことを認識しなかった点にある。すなわち、家計簿の主たる効用は様々な欲求、その発展、複雑さ、その重要度についてのデータを我々に教えてくれることであり、その結果としてそれらを分類することを可能ならしめる点にあること、しかしてその体系的分類は後に来なければならない先に来てはならないこと、である。前もって、顕著な特別の支出のそれぞれが（他の支出と有し得る諸関係にも関わらず）枠組の固有部分を占めるような形で枠組を増やし、しかも空白あるいはほとんど空白になるような区分をつくることは避ける形で枠組を増やすことが最も科学的であると思われる。こうした要請に我々が望むほどには応えていなくとも、ドイツの二つのアンケートは、ル・プレの研究やベルギーのアンケートよりはやはりそうした要請をよりよく満たしていると言える。

## 第五節

### 見かけの平均と有効な平均

表Ⅱに移ろう。表Ⅱは家族の収入総額と構成員数に従って、収入源の分布を示している。次いで表Ⅲに行こう。これは家族の収入についての数字と構成員数を示している<sup>(1)</sup>。

(1) 支出の詳細度は表Ⅲでは表Ⅰにおけるよりも高い。17 項目の代りに 25 項目が表Ⅲでは区別されて

いる（我々はすでに注で、表 I について述べた際に、この新たな項目について指摘しておいた）。しかし表 I の 17 項目についてのみ（支出総額に対する）パーセンテージが計算されているだけである。収入については、次のカテゴリーが区別されている。1200 マルク（■？■）以下（13 家族）、1200 マルクから 1600 マルク（171 家族）、1600 マルクから 2000 マルク（234 家族）、2000 マルクから 2500 マルク（190 家族）、2500 マルクから 3000 マルク（103 家族）、3000 マルクから 4000 マルク（102 家族）、4000 マルクから 5000 マルク（34 家族）、5000 マルク以上（5 家族）。各カテゴリーについて 2 人、3 人、4 人から 11 人までの家族が区別されている。

これこそまさに欠くべからざる重要な表である。そこには表 I のすべてのデータ（世帯ごとの詳細なデータ）が、世帯数と収入額（*taux des revenus*）の二点で集計され分類されている。それらが■序章の 12 頁■にわたって（pp.27\*-39\*）分析されている。労働者階級の支出配分の法則を求めるために、何故我々が表 I とその結果とにそのまま満足することができず、それを新たに全面的に作り直さねばならなかったかについて述べる。

まず第一に、収入のカテゴリーの作り方が恣意的で余りに大まかであることである。この点を確認するためには、2、3、4、5 番目のカテゴリーに含まれる家族の数を考え、それを他のカテゴリーに含まれる家族の数と比較すれば足りる。もし第 1 のカテゴリーと第 6 のカテゴリーの平均にある価値が付与されるのであれば、非常に多様なデータをより一層活用し事実をより綿密に分析すべく、より多くの種類の平均を獲得するために、他のカテゴリーをさらに再区分しなくともよい理由は何も存在しない。

区切りのために選ばれた数字が一定の社会的あるいは経済的意味を有すると仮定しよう（このことは証明されなければならないであろう。つまり、労働者の収入が 1700 あるいは 1800 マルクよりも 1600 マルク周辺により多く集中していること、1900 あるいは 2100 マルクよりも 2000 マルク周辺により多く集中していることが確認されなければならないであろう）。しかしその際、一定の数字の周辺に集中している収入群を分断してしまったり、重要な部分を切り取ってしまったたりしないためには、集中的収入群の手前あるいはそれを越えたところで区切りを入れた方がよかつたであろう。逆に、収入が中間的な数字のところ十分に規則的に分布しており、1650 マルクくらいと 1800 マルク、1950 マルクのところと同数くらいの収入群があると仮定しよう。この場合、平均として現われるのは 1800 マルク周辺に集中する収入と支出、1800 マルクの手前あるいはそれを越えたところに相殺しつつ落ち着く数字であろう。しかしこのような規則性は収入と支出の分布において存在しないことの方が大いにありそうなことである。その場合には、隣接する収入群の二つの平均値の合間のところで起こっていることを知る手だては何もない。

我々がここで平均についての理論を全体として問題にしようとしているとは思わないで頂きたい。しかし、我々が典型的と称される個々のケースを信用しないということから次のことが結果すると言えるであろうか。すなわち、非常に大量のケースから結果する平均のみが我々にとって何らかの価値を有し、我々はすべてをそれに従属させねばならない、といった考え方である。確かにこうすることによって例外的ないしは異常なケースによる

不都合が予防されるということはある。それらは他の大量のケースの中にのみ込まれ消失するからである。しかしまさにそのこと自体によって、集められた諸ケースから、それらを多数の群と区別され得る経験とに組み立て直すときにのみ、また諸要因、状況、条件をより多くの方向に、そしてより小分けされた諸量に変化させるときにのみ、明らかになる教訓を引き出すことを放棄することになる。このことは重大なことであろう。収入総額が支出の配分に及ぼす影響を研究しようとする場合、1600 マルクから 2000 マルク稼ぐ人々の支出と 2000 マルクから 2500 マルク稼ぐ人々の支出とを比較すれば足りるであろうか。これはあたかも、ある棒状物質の線形熱膨張率を確定するのに、またそれがどのように変化するかを見るために、一方で 0 度から 150 度の間のあらゆる延びの平均値を計算し、他方では 150 度から 300 度の間のあらゆる延びの平均値を計算すればよいとするようなものである。こうして得られる二つの数字は異なっているのである。しかしこれら二つの数字を研究するだけで、この熱膨張率が僅かずつ増大するのかどうか、連続的に増大するのがあるいは間隔をもって急激に増大するのかわかるか、またどのような温度でそうなるのかわかるかを確定することが可能であろうか。全く不可能である。もっと細かな間隔でこうした変化を計算することが必要であろう。——他方、比較を続ける場合に、間隔のそれぞれに対応する観察の数が少ないと、エラー（読みとりその他の）も相殺ないしは緩和の可能性が小さくなるというのはいかにもその通りである。しかしこうしたエラーは、同一のカテゴリの一部をなす観察の全体の中に生ずるものであるであろうし、同じようなケースに関連づけられる。その場合には、顕著で例外的な<sup>ディバージェンス</sup>「拡散」が見られるであろうが、こうしたケースは除外するのが正当であろう。かくして家計の研究においては、同じような家族構成で同じような水準の収入に対応する家計から余りに離れているきわめて少数のものは除外することが必要であろう。あるいはまたある一つのカテゴリに属する観察が非常に少数で拡散的であり、そこから引き出される平均がほとんど代表性を持たないこともあり得るであろう。しかし平均値の系列の中で、このように少数の例外的ケースを示すものはそれ自体で（偶然ででもなければ）一般的曲線の外部に位置するであろうし、一方におけるこのような逸脱、他方におけるケースの少数さは我々を警戒させるに十分であろう。——かくして、平均を増やすことによって（大数における）不規則性を消去する手段が失われることはたしかであるが、しかし、不規則的なものを認知し、そうしたものの存在を嗅ぎつけ、さらにはそれらを除去するための、効果少なからぬ別的手段が獲得される。大量の観察全体をひとまとめにして受け入れ、そこから大まかな全体像を構成する——そこで期待できることは、精練の作業あるいはむしろ諸要素の間の作用と反作用がそこでの支配的な特徴だけを浮かび上がらせることを可能にする点である——代りに、より限定されより同質的な群として集められたケースを分類できる度合に応じて、大まかな全体像の訂正にもとりかかることができる。

この方法は、非常に多数のケースに対応する平均値の価値はすべて、標準的なケースが例外的なケースよりも多数であること、また本来的な意味における例外は、定義によって、特異な方向において生ずるものであることに由来するのであることを認めるならば、申し

分のないものと思われるであろう。それゆえ我々が反論され得るとすればただ次の点のみである。すなわち、例外的ないくつかのケースを除去し、その他類似のものを別にするることによってデータの一部を放棄し、我々の表の一定の特徴を削り取ることになってしまうことである。なぜなら、例外的なものは一つの平均値の中には表現され得ないからであり（ある標準的な<sup>コンステイテューション</sup>体格は対照的な沢山の<sup>ディフォルミテ</sup>奇形の平均値を反映するものではない）、そしてもし例外的なものを大数の中で捉えるならば、それは例外的なものを除外する時間を持たず、それを必要とは判断しないということだからである。実際、例外的なものは何も教えない。他方我々があれこれのケースを例外的であると宣言するのは、曖昧な経験的観念の名においてではない。それは群あるいは比較的同質的な系列のなかで例外的なものは独特あるいはそれに近いからである。単一のケースは何も証明せず、自らを証明できない。同じような条件下での類似の二つのケースはもっと注意を引く。4、5、あるいは6ケースに対応する平均値は、各ケースの中にほとんどそのままその平均値が見出される場合には、同数の相反するケースが同時に指摘され得る場合でさえも、一定の価値を獲得する。

#### 第六節

#### 家族の大きさの表示

我々が所与の表に依らない第二の理由は、家族が含む人員数に従って家族をまとめることで表の作成者たちが満足していることである。それにもかかわらず彼らは、アンケートされたすべての家族についてその子供の年齢についてのデータを所有していたのである。各群の家族の子供についてどの年齢が優勢であるかを、表そのものにおいて我々に示すことが不可欠であったと言ってよいであろう。しかしそれでも不十分であっただろう。そのような平均は漠然として解りにくいものであっただろう。例えば二人ないしは三人の子供をもつ家族の相互間に乗り越えられないような柵を設けないような形で、表全体が別のプランにもとづいて構成されるべきであったであろう。（すでに大きくなっている二人の子供のいる家族の費用は少なくとも、實際上、三人の低年齢の子供のいる家族の費用に等しい）。これは表の作成者たちが子供の年齢の重要性を認識していなかったということではないが、彼らがそれを考慮に入れようとしている割には、彼らは余りに単純なやり方で仕事をしたように思われる。

その問題を最初に解決しようとしたのはエンゲルである。単に年齢の数字を追加することは問題とはなり得なかった。彼は慣例的な測定単位を導入することが必要と判断した（彼は統計学者ケトレを思い出しつつ、この慣例的測定単位を想起せしめた<sup>(1)</sup>）。

(1) Engel, der Kostenwerth des Menschen, Berliu, 1883.

この単位は適用が容易である。どの子供も満1歳までは一単位と数える。（最初の年を含めて）毎年、0.1単位が加えられるが、それは男子については25歳まで、女子については

20歳までである。その結果、女子が少なくとも20歳で男子が25歳の単一世帯は *en quets* 6.50 を示すことになる。このような計算は恣意的ではない。単位数の増加は実際近似的に人間の大きさと重量の増加に対応している<sup>(1)</sup>。

- (1) センチメートルによる重量表示は、測定される人間の体の長さのうちの1センチメートルが何グラムに相当するかを示している。体を1つのシリンダー——その直径はその高さと共に増大する——と想像すればよい。その結果成長期全体を通じて、センチメートルによる重量表示も増大することになる。エンゲルは一つの表を再録しているが (*die Lebenskosten, etc.*, p.5)、そこで彼は、異なるいくつかの年齢に対応する諸単位数 (*en quets*) と並んで、0歳から25歳までの数千人のセンチメートルによる重量を示している。彼らは、特にベルギーではA.ケトレによって、イギリスではCh.ロバーツによって、アメリカではB.グールドとブラウディッチによって計量された。以下はそれぞれ各年齢に対応する数字である。1歳：*quets*1.10で、132、124、105グラム、5歳：*quets*1.50で、158、143、160グラム、10歳：*quets*2で、188、183、214グラム、15歳：*2.50quets*で、275、262、270グラム、20歳：*3quets*で、350、324、349グラム、25歳：*3.50quets*で、365、392、365グラム。彼は *quets* の系列と重量の系列との間の差違は成長が連続的ではなく、減速と加速を含むことによって説明される点を注記している。さらに同一年齢の人間について、その大きさと重量は、気候、職業、社会状況によって変化する (ニスフォーロ (Niceforo) はその著書『貧困階級——その人類学的社会的研究—— (*les Classes pauvres, recherches anthropologiques et sociales*)』 (Paris, 1905) のなかで、肉体的特徴、身長、絶対体重、相対体重によって階級を定義することを試みている。L'Année sociologique, 9<sup>e</sup>année, 1906, p.498 sqq に、この試みの要求する方法的留保条件のすべてが述べられている)。それゆえ、近似値が問題になり得るのみである。女性に対する男性の比についてはエンゲルは、ガルトンによれば女性の消費は男性の消費に対して12対13くらい (2対3ではない) であることを指摘している。さらに、子供の年齢と共に性別が示されていることは稀なことである (我々の扱っている2つのアンケートではそれは示されていない)。それゆえ子供については、考慮に入れないこともあり得る。

我々のアンケート (p.66\*) でもエンゲルの計算が想起された。しかしまず、毎年新しい部分を付け加えることによって、見かけ上以外には達成の不可能な正確さを追求している点について彼は非難された。他方では、低年齢の子供に余りに大きな数字を与え、大人には不十分な数字しか与えられていない点が指摘された。基礎として次のような関係が採用されていたのである。すなわち、15歳以上の男子1、(同年齢の) 女子は0.8、13歳から15歳までの子供は0.5、10歳から13歳までの子供は0.4、7歳から10歳までの子供は0.3、4歳から7歳までの子供は0.2、0歳から4歳までの子供は0.1、である。さらに、このような単位は採り上げられているすべての家族、例えば (寝台の借受人とか間借り人といった) 他人がいる家族に適用するには余りに恣意的と思われる点が追加指摘されている。そのうえ年齢の高い子供は、彼らが大抵の場合世帯の支出に金を払い、部分的には自活しているという理由で、そのような子供のいる家族がすべて除外されている。標準的とされる 391

家族が残ったが、これらの家族の支出の表示は、pp.190-193 の表Ⅶに、収入のカテゴリによって、またその構成によって、示されている（枠組が変更されることなく要約表■3■と同じ分割である）。この表には絶対数字で（17品目の）支出のみが示されているのであるが、まず（群の全家族についての）総額が、次いで家族ごとに、さらに一人あたりについて（すなわち成人を単位として、単位あたりについて）表示されている。このように単位ごとに支出を計算すると、家族構成員の数が多くなるにつれて、単位あたりの支出が減少することが見出される。単位あたりの支出は、9人家族の場合には2人家族の場合に比して46%少ない。食料費の減り方が最も少なく（31%）、次いで衣料費（34%）、暖房照明費（38%）である。減少率が特に高いのは家賃（66%）、およびその他（56%）である。収入で家族を分類した場合には、例えば収入が3倍の場合、暖房照明費は（単位あたり）3分の2増え、食料費は96%、家賃は3倍以上、衣料費は5倍、その他は7倍となる。ところでこれらの数字はエンゲルの単位を採用する場合にはさらに大きくなるであろう。

金属労働者のアンケートでは、統計事務所の慣例的な単位を採用したこと、そしてその理由が、「同一国における同一単位の使用はいずれにせよ有利であり、そうでない場合には困難な比較を可能にするから」（p.65）という点にあることが言明されている。しかし、統計事務所監査官は、年齢の高い子供は両親にその給与の一部分のみを与え、部分的には「自活している」という口実で、子供が15歳以下の家族のみを標準的な家族とみなしたことについて非難されている。「我々の観察するところではこの点は一般に根拠がない。年齢の高い子供が支出を分担する場合彼らは通常その給与の大部分を両親に与えるのである。このことは年齢の高い子供のいる世帯の収入が高いことから明らかに目につくことである。」さらに、収入の5つのカテゴリについての単位ごとの支出の計算は、統計事務所によるアンケートのデータについて行なわれた計算と同じ結果をもたらさない。特に（1人あたりの）家賃および衣服費の増大の度合ははるかに弱い（1）。

- （1）統計事務所のアンケートは小学校教員や事務員も対象にしていることを忘れてはならない。ここにも大きな混乱の要因があることを我々は見るとであろう。

我々が述べてきたこと、標準的といわれる家族に限定された研究では時宜を得ぬことについて再論することなしには、我々は統計事務所の提起した測定単位を受け容れることができない。エンゲルが「quet」を提起したとき、彼はこれが一つの約束事であること、それでもそれは事実によるデータに基づいていることを認識していた。これを除外する、あるいは取り替えるためには、家族の構成員の大きさと重量に依拠することは家族の欲求の計算において根拠がないことを証明するか、あるいは、その不正確さを明らかにするような実証的観察を生み出すことが必要であろう。ところで、幼い子供あるいは13から15歳の子供の欲求を成人の10分の1あるいは2分の1とすることは、彼らの欲求を低く見すぎることにはならないということだけを統計事務所の関係者は述べている。他方、統計事務所が転載しているもので、エンゲルの数値を1903年のアメリカのアンケートにおける数値、

1897年のデンマークのアンケートにおける数値と比較している表そのものは次のことを明らかにしている。すなわち、18歳まではこれらの数値とエンゲルの数値は非常に接近していること、デンマークのアンケートは18歳からは欲求がもはや変化しないと（これは大いに異論の余地がある）仮定していること、また0歳から4歳、4歳から7歳、7歳から11歳、11歳から15歳、そして15歳以降は欲求が同じままであると仮定しているアメリカの数値は実に気まぐれなものであること、である。ここではソルヴェ（Solvay）研究所のアンケートに従って<sup>(1)</sup>、アトウォーター（Atwater）の数値と比較する形でエンゲルの数値を示すにとどめよう（ただし男子すなわち3.5quetsを単位とする場合である）。

### 【原著 183 頁の表を挿入】

(1) ■補遺 p.469 の注を見られたい。

これら 2 つの数値のきわめて正確な対応関係はエンゲルの議論を支持する重要な論点であり、この点を無視するいわれはない。

しかし、quets における表現が家族の「ボリューム」を都合よく表現しており、標準的食料品の研究にとってもそれが有効であることを認めるとしても、我々がここで考察しているのは欲求の生理学的基礎よりもこうした欲求そのもの、そして諸群においてそうした欲求に対応する社会表象であるから、我々としては、quets、単位、そして「頭数」といった概念を前面に押し出すことはしないであろう。たしかに、家族の構成ばかりではなくその構成員の年齢も知ることは価値あることである。しかしながら、（単位として理解された成人男子の）「頭当りの」支出はどのような表象とどのような社会的現実に対応するのか。そして、quet 当りの肉類あるいは野菜類の支出がかくかくであったと計算するとき、我々は何を知るのでしょうか。家族の長は子供の数と年齢という二つの要素を考慮しつつ支出を規制することはたしかである。彼らはこれら二つの要素、子供の数と年齢とに代えて固有の一表現をもってすることはしない。我々もできる限り同じやり方をし、二種類のデータを結合しなければならない(quets における算定はこれまで確定されたなかで子供の年齢に関する最良の表現であることは依然として了解されることである)。家族の数にとどまっている ■表III ■はいずれにしても不十分なものである。

## 第七節

### 事務員と労働者

データをとりわけ混乱したものにする第三の理由は、データが労働者と同じく事務員や小学校教師にも関係し、大都市の住民と同じく中小都市の住民にも関係していることである。我々は、労働者が彼らの仕事の性質および条件によって、またそれに対応する社会表象によって、いかに自らを事務員から区別するかについて説明した。このような分離が事



務所や工場の外部でも存続するとは限らないことはたしかである。しかし、支出の分配においてこれら二つの集団が自らに関して有している評価が表明され、例えばある社会的性格を有する支出が、事務員の家計においては労働者の家計におけるよりも一層重要な位置を占めるといったことはやはり予想され得ることである。これはさらに、アンケートそのものにおいて事務員の世帯と労働者の世帯との間で試みられた比較から結果するものでもある。■表V■(pp.178-185)は労働者の家族と事務員の家族の平均支出を示している。まず、労働者家族の平均支出と事務員家族のそれとが、同一カテゴリーの収入のものについて、別々に示され(収入のカテゴリーは、支出の詳細と同じように、■表III■におけると同じである)、次いで同一の家族構成のものについて示されている(同上、ただし例の二つの種類の区分は、■表III■とは違って結合されていない)。序論(pp.58\*-65\*)において、この表から重大な結果が引き出されている。アンケートによって得られた、労働者世帯 522、事務員および小学校教師の世帯 208 に関する支出の一般的平均を見てみれば、次のような状況である。食料費については、労働者は全支出の 52%をそれに支出し、事務員は 36.7%をそれに支出する。衣料費はそれぞれ 11.2%と 14.4%、住居費についてはそれぞれ 17%と 19.2%、暖房費と照明費についてはそれぞれ 4.3%と 3.8%、その他についてはそれぞれ 15.5%と 25.9%、である。(子供の数の同じの)同じ構成の世帯を比較すると、■右のような■相違はほとんどそのままである(このことは特に驚くべきことではない。というのも同じような構成の世帯の比率は、労働者と事務員二つの集団のそれぞれにおいて、ほとんど似たようなものだからである)。しかし事務員の場合には、労働者よりも高収入の者が比較的多数であるから、同じような収入の世帯を比較することが重要であろう。しかしこれは難しいことである。なぜなら、1600 マルク以下の部分については労働者では 165 世帯あり、事務員については 2 世帯あるだけであり、1600 マルクから 2000 マルクの部分については労働者世帯 196 世帯に対して事務員 10 世帯であり、他方、3000 マルクから 4000 マルクの部分については、事務員 82 世帯に対して労働者 10 世帯しかなく、4000 マルク以上の部分についてはもはや事務員世帯においても存在しないからである。他方、収入が同一のカテゴリーにおいては、事務員の収入の平均は労働者の支出の平均よりもつねに高い(この点は種々の支出の割合を計算する場合には見えてこない。なぜなら支出の平均は常に 100 に等しいと仮定されているからである。しかし実際には、同一水準の収入の集団が比較されているわけではないのである。この難点は区分がより細くならされたならば非常に緩和されるであろう)。その上さらに、同じ収入水準の労働者あるいは事務員の各カテゴリーにおける家族構成は同じではない。1600 マルクから 4000 マルクの労働者の家族は常に事務員世帯の頭数よりも多くの頭数を擁している(収入が高くなるに応じてこの傾向が顕著になり、3000 マルクから 4000 マルクの水準では、労働者世帯は 8 人を擁し、事務員世帯は 4.7 人を擁している)。同じ収入水準で同じ家族構成の家族を比較することが必要だったであろう。最後に、問題の労働者家族は大部分が大都市で生活しており、事務員と小学校教師の大多数の中小都市に生活しているということがある。ところでこのことは食料費、家賃における顕著な相違をもたらす。そして事務員や小学校教師の場合における家庭消費

財の大部分は（大都市における）価格より低く、このことがさらに事務員や小学校教師の支出の数字を低くする働きをすることになる。こうしたこと全体から次のことが結果する。すなわち、比較が真に代表的典型的な平均について行なわれているのは2000マルクと3000マルクの間についてのみであること、食料費と、特に家賃の数字は、事務員世帯の場合には、彼らのうち大都市に住んでいる者の割合が労働者と同じである場合の水準以下に低くなっていることである。

こうした留保の下に次の点が確認される。すなわち、1600から2000マルクの水準では、食料費の割合は労働者の場合よりも事務員の場合明らかに少ないこと（事務員41.2%、労働者51.7%）、そして次の諸カテゴリーの場合食料費の隔たりは維持され次いで増加すること（すなわち、2000から2500マルクの水準ではそれぞれ41.2%と50.2%、2500から3000マルクの水準では38.5%と50.8%、3000から4000マルクの水準では36.4%と54.4%である）。また衣料費は隔たりが小さいが、たしかに存在しており、1600から2000マルク（14.7%と11%）と2000から2500マルク（14.5%と12%）では事務員の方が多く、2500から3000マルク（14.8%と13.3%）では隔たりはよりわずかではあるが、ないとは言えない。それ以上になると差は存在しない（しかし、労働者の平均はもはやほとんど有効性を持たない）。住居費の割合は事務員の場合の方が常に大きく、差は無視できないところまで増大する（1600から2000マルクの水準では事務員18.5%、労働者17.7%、2000から2500マルクでは18.9%と17%、2500から3000マルクでは19.4%と15.5%、3000から4000マルクでは19.3%と13.9%）。暖房照明費の割合は事務員の方が労働者の場合よりもつねに少しだけ大きい（この費用は明らかに住居費と一定の関連がある）。最後にその他の支出の割合は1600から2000マルクの収入水準以降では明らかに事務員の場合の方が大きい（18.7%と15.3%）。そして、この費用は裕福な世帯になればなるほど大きくなる（2000から2500マルクの水準では21.1%と16.9%、2500から3000マルクでは23.1%と17.1%、3000から4000マルクでは26.7%と14.5%）。

さて各種の支出を詳細部分について調べればかなり特徴的な差異が見出される。食料費に関しては、序論においてまず（p.61\*）、諸表で次のものが示されている。すなわち消費各品目の平均支出、全体支出に対するその比率および食料品全体に対する比率、これらが労働者家族および事務員家族のそれぞれの全体について示されている。平均食料費は、全体支出の平均の差異（1835マルクと3187マルク）にも関わらず、事務員家族の場合955マルクで労働者家族では1168マルクであるので、種々の品目に関する平均支出および食料費全体に対する比率の比較は正当な作業である（他方、全体支出に対する比率は、労働者は事務員の場合よりも食料のためにはるかに多く支出しているのに、ほとんど考慮されていないが）。肉、ハム、ソーセージのための支出は労働者の場合顕著に少なく、227マルク、食料費の22.8%であり、事務員の場合は302マルク、25.9%である。労働者は食用油については著しく多く消費し（事務員家族のほとんど2倍）、バターについては余り用いない（事務員家族のほとんど3分の2）。卵類については比較的少なく、じゃがいもについてはやや多い。生野菜、澱粉質野菜については比較的少ない。果物類についてはきわめて明瞭に少

ない（事務員家族が 3.8%であるのに対し 2.5%である）。パンとケーキについては、平均値は同じくらいで、比率的には高い。コーヒーあるいはその代用品についてはほとんど同じくらいであるが、茶、チョコレート、ココアについてはかなり少ない。ミルクと■飲み物■<sup>ポアッソン</sup>については平均値は少ないが、比率的にはほぼ同じである。葉巻とタバコについては明らかに少なく（労働者家族 19 マルク、2%に対し、事務員家族は 28 マルク、2.4%）、■酒類■<sup>ポアッソン</sup>については明らかに多い（65 マルク、6.8%に対し、58 マルク、5%）。

ところで、同じデータが収入水準にしたがって分類されている表に移れば (p.62\*)、我々は次の点を指摘することができよう。すなわち、各カテゴリー、水準における食料費総額（平均）は、労働者と事務員について、その諸要素間の比較が可能であるためには余りに違いすぎているということ、そして、支出総額に対する食料費の比率も、同じ収入水準について、様々の食料品支出の総支出に対する比率を活用するためには余りに異なり過ぎているということ、である。ただ各種食料品のための支出の、食料品一般に対する比率は我々の注意を引く。我々としてはしかし、2000 から 2500 マルクおよび 2500 から 3000 マルクの収入水準についてのみ検討するであろう（これらの収入水準のみが、平均した場合に、妥当性を持つに十分な数の事務員と労働者とを含んでいる）。さて、■右の■二つの水準のデータの間には注目すべき対応関係が存在する。ただ一つの例外（葉巻とタバコの支出が第二のカテゴリーでは労働者の場合の方がより多く、第一のカテゴリーにおいてはその逆である点）を除けば、各種食料品の支出の最低額と最高額とが適合しているのである。我々は収入の各水準について（事務員あるいは労働者のうちに見出される）すべての最高額とすべての最低額を合計し、そして前者の総額から後者の総額を引いた。こうして同じ金額の様々な品目への配分における差異についての、また同じようには使われなかったこの金額の量についての非常に正確な割合が得られる。その結果我々が見出したところでは、その割合は収入の第 1 カテゴリーでは 20.8%、第二カテゴリーでは 20.7%である。これはその恒常性と同じく多様性の大きさをも示している。

他方、収入水準ごとの事務員および労働者における衣服費、クリーニング費が別々に示されている。これは、これら二つの集団における衣服費一般について我々が指摘した関係を変えるものではほとんどない。しかしながら 1600 から 2000 マルク支出する事務員ならびに労働者についてはほとんど同じであるクリーニング代が、2000 から 2500 マルクの水準の労働者の間では（絶対数でも平均でも）明らかに多く、2500 から 3000 マルクの水準においてはさらに明らかに多いことは注意されるべきである<sup>(1)</sup>。他方、住居費に関しては、設備内装と維持費が事務員の場合には常に労働者の場合を上まわる形で増大し、家賃より多いこともあれば、少ないこともある。ここでは特記すべきことはない。

(1) この点は、アンケートされた事務員の大部分が小都市に生活しているという事情によって説明されることは疑いない。

支出の「その他」を要素に分解すると以下ようになる。全体としては、保健衛生費と

身体管理費が事務員の場合は遙かに多額である（労働者が 24 マルクに対して 119 マルクであり、全支出に対しては、労働者の場合 1.3%であるのに対し、3.7%を占めている）。しかし、この保健衛生費と身体管理費をさらに分解し、収入水準別に考えてみることも可能である。身体管理費については違いは最高水準の収入（3000 マルク以上）の者に関するのみ顕著である。特に変化が見られるのは保健衛生費である。さてこれは部分的には事務員のための医療保険が存在しないことによって説明され得るが、これによってすべてが説明されるわけではない。なぜならこの保健衛生費は 1600 マルクから 4000 マルクまでの事務員について非常に顕著に増加するからである（29、58、81、118 マルク）。二つの集団の間で、一方の集団においてはこの程度に変動的な支出が存在し、他方の集団においては比較的固定的な支出が対応しているということは、いずれにしても二つの集団の間の顕著な差異である。教育等の支出も同じように事務員の場合には遥かに多額である（労働者 12 マルクに対し 75 マルクである）。この差異は収入の最高水準（80 人の事務員がいる 3000 から 4000 マルクの水準）にはしかし存在しない。この場合比較を曇らせるのは、収入の低い水準においては事務員の子供はかなり年齢が低く、またその多くは小学校教師の息子であるという点である。雑誌、書籍、団体加盟のための支出は、1600 から 3000 マルクの水準では事務員よりも労働者の方が多く、3000 マルクから 4000 マルクの水準では逆になる（ただしこの水準に含まれる労働者はわずか 10 人である）。娯楽に関しては、全体では事務員は労働者の 3 倍以上支出する（労働者 21 マルクに対し 76 マルク）。差異はしかし、比較的高収入の者の場合よりも低収入の者の場合の方が顕著である。事務員は労働者よりも多額の税金を支払い、保険のためにより多く支出する。雑費と貯金は事務員の場合には 129 マルク、4.1%である。（これに対し労働者の場合には 49 マルク、2.7%である）。しかしこの場合にも、差異がとりわけ著しいのは最高水準の所得者（3000 マルクから 4000 マルク）である。2000 マルクから 3000 マルクの間の水準では雑費は、事務員の場合やや高く、貯金は労働者の場合やや多い。労働者にとってはその生活習慣によって高いことになるこの水準の所得も、事務員にとってはほとんど十分ではない。——要するに、事務員の家計が労働者の家計となおも区別されるのは、特に健康維持費、子供の教育費、娯楽費が多いためである。

このような比較が場合によっては難しいのは、あるカテゴリーにおいては労働者が多数であるのに事務員は非常に少ないとか、あるいはその逆であるといったことがあるからである。ところでこのことから結果するのは、比較される平均値が同じ価値を持たないということだけではない。さらには、高収入の労働者と低収入の事務員とはそれぞれの階級の（上極あるいは下極の）限界に位置しているので、彼らは他の人々よりもその階級についての代表性に問題があり、彼らが部分的には免れている、経済条件が規定する表象の影響をほとんど受けていない恐れがあるのである。それゆえ、例外的事例を避けるために観察を増やす必要があるのは、まさしく彼らに関する部分についてである。しかし、理由は明らかであろうが、この部分が最も数が少ないのである。

我々はここでは、事務員階級をその構成において定義し研究することはしない。我々が今試みたばかりの分析を通じて、事務員階級はいくつかの下位区分を含んでいること、と

りわけ、3000 フランの収入ラインを越えると支出の配分が根底から変わること、こうした印象を我々も持っている。しかしこのことはもっと多数のデータによって証明されなければならないであろう。ただし我々としてはフランスのある調査<sup>(1)</sup>を参照することが可能である。それは実際のところ、公立小学校教師のみを対象とするものであり、その64%は住民500人以下の市町村におけるものである。他方（まさに小さな市町村のものであるという理由によって）、我々が余り重視することのできない支出項目が存在する。それは住居費であるが、これは余りに微弱にしか見えてこないのである。実際小学校教師は通常下宿しており、示されている数字は見積りに過ぎない。——しかしながら、労働者と同じように低収入の事務員あるいは似たような状況にある人々をつかまえたのであれば、村の中で探すに如くはない。また、小学校教師は教育があるので、かなり複雑な質問表を記入する上で他の人々よりも有能でもあるのである。調査の報告者は次のように結論している。「全体として、そして通常の場合においては、小学校教師の家計は……プロレタリアの家計である。」そして我々は多分それを農民の家計と比較したくなるであろうが、小学校教師はその教養と職業の種類によって、事務員にむしろ近いのである。彼らは同じような社会的水準にある。最後に家賃に関してであるが、比較に際して、この支出を収入全体から差し引き、家賃を除く全支出に対するその他の支出の割合を計算することができる。これは明らかに非常に不完全な方法である。家賃支出が微々たるものであることがすぐさま他のすべての支出の増大として結果することを証明するものは何もなく、むしろ家賃支出が小さいことから増大するのはむしろ食費あるいは衣服費だけかもしれないのである。それにも関わらず、このアンケートにおける広い範囲の労働者集団に対してそれほど広範囲ではない小学校教師の集団を比較するために、■上のような■比較を試みることは可能である。

(1) ■原著 191■

1200 マルクから 1600 マルクを稼ぐ労働者家計と 1500 フランから 2000 フランを稼ぐ小学校教師の家計とを比較しよう。それぞれについて家賃支出を差し引くと、全体支出の平均はそれぞれ 1194 マルクと 1634 フランである。食料費は労働者の場合 66%、小学校教師の場合 54%である。衣服費は労働者の場合 11.3%、小学校教師の場合 17.4%である。暖房照明費はそれぞれ 5.9%と 6.4%である。その他の支出については労働者 16.9%、小学校教師 22%である。これは労働者と事務員という二つの集団について指摘した差異(■原文 186 ページ、第 7 章の 3 ページ目■)に全く対応している。さて今度は、154 人の労働者に対して 1035 人の小学校教師を比較しよう。すぐ上の収入水準、つまり労働者については 2000 マルクから 2500 マルク、小学校教師については 2000 フランから 3000 フランのカテゴリーについて、先と同じことをやってみよう。平均収入はそれぞれ 1815 マルクと 2260 フランである。これら二つの集団は完璧に対応関係にある。食料費は労働者の場合 60.5%、小学校教師の場合 48.7%である。衣服費は労働者の場合 14.4%、小学校教師 16.4%、である。暖房照明費はそれぞれ 4.65%、5.5%である。その他の支出は、労働者 20.5%、小学校教師

29%である。食料費およびその他の出費についての差は依然として著しく、衣服費についてもその差はいまだ非常に明瞭である（衣服費については、小学校教師の場合、大都市だけで見れば確かにもっと多額であろう）。我々は今度は 127 人の労働者に対して、1144 人の小学校教師を比較した。なおまた我々は、2500 マルクから 3000 マルクの収入水準のドイツの事務員 28 人について、同様の比を計算することによって再吟味することができる。彼らは食料費に 51%、衣服費に 17.9%、暖房および照明費に 5.35%、その他に 26%を出費する。それゆえ同じ収入水準の労働者に対する彼らの差異は、小学校教師の場合よりも小さいが、傾向はつねに同じである。

要するにこのことは、事務員の生活様式と労働者の生活様式の間には根本的な差異が存在するという我々の確信を強めるものである。それゆえ彼らを同じのカテゴリーに入れること、同一の平均値によって相互に関連づけられているデータを表示すること、こうしたことはあらゆる混乱に身をさらすことである。このような平均値においては弱められる、あるいはその傾向にあるのは、個々の差異ではなく、社会的な差異の方である。それは相互にぼかされてしまうが、観察者の義務はそれを浮き上がらせることにこそあるであろう。

### 第三章 都市および異なる職業<sup>メテイエ</sup>における支出 ——職業による収入構造の差異——

#### 第一節 地域的影響と支出配分

範囲が余りに大きいこと、労働者と事務員とを同じカテゴリーに混入すること、これらは我々が■表Ⅲ■に信頼できない 2 つの本質的な理由である。しかし、収入水準および家族構成による支出配分の研究は、労働者階級のみについて見る場合、我々のデータで可能であろうか。異なる都市で選ばれた労働者と異なる<sup>プロフェツシオン</sup>「職業」の労働者とを同一のカテゴリーに編入し、都市も職業も異なっていて同質的ではない集団を比較すれば最悪の混乱に陥るといわれるであろう。

都市の多様性から引き出される反論はきわめて重大である。国外に出なくとも、生活様式と地方によって異ならしめるいくつかの地域的特性に我々は驚かされる。これは食料、住居、衣服、娯楽において特に顕著である。しかしながらこうした差異は、最も直接的に気候風土や伝統の影響を蒙る人に部分——これは最も安定していると同時に最も孤立的でもある——、すなわち、農民の多様な集団の間に特に見られるものである。都市ではこの地域的影響は、その住民が純粋に都市的な生活習慣を身につけるにつれて、すなわち彼らが都市住民どうしの間をより多く維持し、農民との関係が薄くなるにつれて、そして他の都市住民との間が増加するにつれて、ますます感ぜられなくなる。地域的差異は最大級の都市ではほとんど完全に消滅する。この観点からすれば、我々のアンケートは独特の利点を示す。つまりドイツはますます工業化されつつある国であり、非常に大きな都市が三十年以上も前から形成され発展してきているのである。

これらの都市は確かにかなり異なっている。その構成と機能によって、(すなわち)都市の中での一定の階級の優位によって、各都市はその住民に対していくつかの習慣を押しつけ、少なくとも別の都市では同じ程度には見られないいくつかの傾向を住民の間で発展させることが可能である。ゾンバルトは、彼がとり上げた諸都市の分類についての論文<sup>(1)</sup>の中で、住民が主として商人であるか、消費者であるか、あるいは実業家と労働者であるかによって、すなわちその経済的機能によって、区別している。もし純粋に労働者主体の<sup>アグロメタシオン</sup>人家集合のなかで、<sup>トラヴァユール</sup>勤労者が労働者階級の中に申し分なく囲い込まれ、彼らの表象に順応するとすれば、別のところでは小商人が、また別のところでは金利生活者や金持ちが、消費習慣や食料費、そして家賃等を決定すると想像することが可能であろう。後者の場合には労働者たちは、労働者ばかりが住んでいる密集地区に集められ押し込まれることもあり得る。別のところでは彼らは他の階級の間人に分散させられることもあるであ

ろう。その結果は十分に想像することができる。——しかし、都市が純粋に消費的であったり、商業的であったり、生産的であったりすることは稀である。ゾンバルト自身、商業のみに没頭する都市は大都市には成り得ないことを指摘している（彼がそのことについて挙げる理由はしかしいたって抽象的である。多分、そのような都市で商人が優勢になるのは、まさしくその都市が発展しないからこそであろう）。大量に消費するだけで生産もせず取り引きもしない都市は、特に温泉町とか海浜街とか、歓楽街とかである。我々の調査はそういったところには及んでいない。鉱山都市（およびその他）を除く、純粋な生産的な都市は、少しずつ商人や実業家を引き寄せる。調査された世帯がある都市の多くはそこに工業が樹立される以前から存在していたものであり、その飛躍が工業によるものであるとしても、その原初における構成要素を十分に保持している。

- (1) 我々はこの論文を、*la Revue d'économie politique* (août-septembre 1905)における、*la ville capitaliste d'après Sombart* (pp.783-747) (■738の誤りか—訳者：原文では783ママ■)で分析し批判している。

しかし、我々の調査した労働者が住んでいる都市がその住民の社会的水準によって区別されるとしても、そして労働者とは異なる階級がそこで優勢であるとしても、なお次のことは証明する必要があるであろう。すなわち、労働者たちはその都市のなかで総体から切り離された集団になる傾向はないということである。実際労働者たちは他の階級が彼らのうえに行行使得る影響に抵抗し、されに非労働者である「同郷市民」とよりも隣接都市の労働者集団との方がはるかに多くの関係をもっているのである。

都市の多様性はそれ自体としては労働者階級に対して作用しないこと、また多様な習慣と傾向をもった集団へと労働者階級を分けることも全くないことを証明するもの、それは都市を分類する際に我々が経験する困難そのものである。科学的分類は、それが適用される具体的対象が組織されていること、したがって対象を分類し区別するに際して、その諸部分の数と大きさ、諸部分の合成の複雑さと堅固さとに立脚し得ること、を想定している。これらの条件は原初的都市の場合実現されていたであろうか。原初的都市は、同一の場所に定住している複数の部族家族の集合によって、そして時に複数の部族の同一空間への集中によって、構成されていたのであろうか。この場合にはこれら原初的都市はその諸要素の種類によって、またそれらを結合する紐帯の性質によって定義され得たであろう。このような都市はしかし自らをいつまでも閉ざしておくことはできなかった。中世の都市は、職人団体をもち、保護規則と禁止規則をもっていて、いまだ組織された社会的統一性を保持していた。都市を構成する二次的諸集団を考慮にいれつつ都市を分類することが可能であった。しかしすでに同業者感情は家族感情よりも活力を欠いていた。都市には早くから、組織されていない多くの異分子が入り込んだに違いない。今日では同業者組合は独立の職人と企業家——彼らの間にはいかなる社会的紐帯も存在しない——および労働者——彼らの間には確かに階級意識が成長してはいるが実際上は大抵の場合孤立している——に席を



譲っている。近代都市は特に、大部分一時的にのみ同じ場所に滞在する人々の並存であり、他方別の人々が絶え間なく到着する。すなわち民族や階級の移住ではなく、個々人の移住である。その結果、都市が提供するものは組織の基礎のみということになる。——もしビュッヒャ<sup>(1)</sup>——が考えるように、現代という時代が全く過渡的であり、もっと後の時代になれば都市住民はより安定的になり、土地に一層愛着を覚えるようになれば、個々人がその職業、境遇、性向により、持続的な各種の会で親しくなり、相互に結びつくといったことも可能である。そうなれば都市は「組織化される」であろう。しかし同時に、もし異なる諸都市の類似的なすべての集団の間で結びつきが強まり、関係が増えれば、その中でこのような組織が階級の差異を緩和する、あるいは消し去ることはほとんど見られないであろう。

- (1) Die Entstehung der Volkswirtschaft, IX. 国内移住と歴史的・進化的視点から見た都市の性質、Tübingen, 1898.同じく die Grosstadt (9<sup>e</sup> volume du Jahrbuch der Gehe Stiftung) , Dresde, 1903, pp.1-32 所収、die Grosstädte in Gegenwart und Vergangenheit.

しかしながら抜き難い伝統が存在し、さらにドイツのような広大な国土においては、経済条件が一樣ではない。他方で、大都市においては、労働者は多勢の同じ階級の人々の最中にいるとすれば、このことは中小規模の都市においては当てはまらない。このような差異が、我々の調査において、異なる規模と異なる位置の各都市の労働者家計に表われているかどうかを調べる必要がある。

統計事務所の調査にはこの点についての情報はほとんど含まれていない。第一に、家計簿の大部分は大都市からのものである(852の家計簿のうち701が人口10万以上の都市からのものである)。他方中小都市の世帯の大多数は事務員および小学校教師の世帯である(平均収入は大都市から中小都市に移るにつれて増大する)。より興味深いのは異なる大都市の家計の相互比較であろう。少なくとも10以上の家計簿を入手できた大都市のすべてについて、平均雑費およびその比率を示す資料がある(p.42\*およびp.43)。しかしそこでも労働者と事務員が一緒にされている。我々は各都市について、労働者の家計簿の数を数え、労働者と事務員の家計簿の総数に対するその比率を計算した。その比率はミュンヘン、マグデブルク、およびバルメンで100%、ドレスデンで95%、デュッセルドルフとヒュムニッツで92%、ハンブルクとニュルンベルクで89%、リュベックで83%、キールで81%、ストラズブルクで80%である。数字が特に労働者の家計に該当しており、研究の対象となり得るのはこれらの都市だけである(労働者家計の比率は突如落ちる。ケルンでは67%、カッセルでは61%、ブレスラウでは52%、大ベルリンでは26%、フランクフルト・アム・マインとアルトナでは20%である)。

【原著 200 頁の表を挿入】

それゆえ我々は最初の 11 の都市を取り上げ、次の二点を示そう。1. 各カテゴリーの平均支出のさらにその算術平均を、すべての都市について、100 と想定した場合の、世帯ごとの平均支出（これらの数字は我々が計算したものである）。2. 各都市について、各カテゴリーの支出が支出全体に対して占める比率（我々はこれらの数字を p.43\* の表から引き出した）。——これらのデータと、我々のもっているデータ、すなわち中小の都市に関する同じ調査とを比較することは、すでに述べた理由で、全く興味を惹かない。しかし、我々はこれを、金属労働者の調査で見ることのできる大都市および中小都市の平均支出と比較することができる。確かに大都市における支出の絶対値はこの調査では、統計事務所の調査の場合よりも高くなっている。金属労働者は熟練労働者だからである。（我々が取り上げている都市では 1810 マルクに対して 1949 マルクである）。しかし、我々の数字はもっぱら比率を表わすものであるゆえ、このことはほとんど問題にならない。また金属労働者は同一産業に属するが、このことは一般に労働者の支出配分に対する、都市の大きさの影響を明らかにする上で好都合である。

まず相対値について考察しよう。大都市の数字と平均的都市の相対値との間の隔たりを正確に判定しようとするのであれば、最初の数字に 100 分の 116 を乗じて値を大きくする必要のあることを指摘したい。そうすると、全支出の最低の平均（マグデブルク）は 88 から 102 に上昇し、最高支出（ハンブルク）は 117 から 136 に上昇するであろう。食費の最低支出の平均と住居費の最低支出の平均（またしてもマグデブルク）は、それぞれ 90 から 103、81 から 108 へと上昇するであろう。それでもなおミュンヘン、ドレスデン、マグデブルクの平均衣服費だけは中都市における当該支出よりも少ないであろう。しかしその他の支出はすべて上昇し、そのうえさらに、しばしば非常に高いものとなる。これは、大都市はいまだいろいろな相違を有するものではあるが、大都市のすべてに共通する特徴である。

大都市の間の差異は重大なものであろうか、またそれらはどのような形で表われるであろうか。最も重要なものはハンブルクおよびキールにおける家賃の高さである（両都市では非常に多数の家計が収集されている）。マグデブルクおよびヒュムニッツにおける家賃の低さは余り重要ではない（両都市では家計簿ははるかに少数しか収集されていない）。上記三都市（ミュンヘン、ドレスデン、マグデブルク）における衣服費の少なさとストラスブルクおよびキールにおけるその高さは一層注目に値する。しかし全体としては偏差はさほど重大なものではない。食料費に関しては、それが 10% から 12% である場合は例外的であって、その他の場合には支出全体の高低の変動に対応している。

他方、全体支出に対する各支出の割合が示されている 8 から 12 の欄を見れば、我々は多分次のことに気づくであろう。すなわち、食費の割合が 5 つの都市で 53%（これは金属労働者のアンケートにおける大都市の場合の割合である）を越えること、しかしこれら 5 つの都市は比較的少数の家計についての数字であること、そして多くの家計簿が集められた都市（ハンブルク、ドレスデン、ニュルンベルク、キール、リュベック）の場合にはこの数字は常に 53 未満であること、である。キールを除けば、このことは衣服費についても

全く同様である。住居費の割合が金属労働者のアンケートの結果を下回る（住居費の場合大都市では割合が高いが）のはまたしても家計簿の集計数が最も少ない部類の都市においてである。キールとリュベックを除けば、暖房照明費の割合は非常にしばしば、別のアンケートの数字よりも小さく、またキールとヒュムニッツを除けば、雑費の割合は全体として別のアンケートの数字よりも大きい。——総じて、額においても配分の仕方においても、大都市労働者の支出は中小都市の労働者の支出とは非常に明瞭に異なっている。食料費は絶対額においては明らかに大きい、全支出に対してはやや小さな割合を示している。このことは衣服費についても同じである。これに反して、家賃は絶対額においても全支出に対する割合においても、中小都市におけるよりも高い。他の支出の比率の著しい減少をもたらすのは、家賃の非常な高さであるとさえ思われる。

しかし、この場合我々は次のように問うことができる。つまり、いくつかの大都市においては、他所よりも遙かに高い家賃が他の支出の一層大きな減少をもたらさないかということである。これは、ハンブルク、ドレスデン、ニュルンベルク、キールといった諸都市において指摘することができる（デュッセルドルフについては家計簿の数が少なすぎる）。食料費の割合が最も少ないのも同じく4つの都市である。最初の3つの都市においては衣服費の割合も同じく比較的低いところにある。これとは逆に雑費の割合は比較的高い。それならば、支出配分の2つの様式が明らかになったきているのであるから、大都市労働者を二つのカテゴリーに分けるのが自然ではなからうか。

事実は見かけよりも複雑である。まず第一に、もし又貸し<sup>また</sup>の習慣が広まっていて（しかも転借人と下宿人とが大都市では他所よりも頻繁に見られるということがたしかであれば）家賃支出は不自然に大きくなり得るといえることがある。次に、家族構成を考慮に容れる必要がある。家賃の増大が、人数の多い家族の割合が大きいことによって説明されることも（他所では明らかでもなく、またありそうでさえないにしても）あり得るのである。最後に家賃の高さは多分は収入の高さと釣り合っているであろう（先の表の欄4と7とを比較すれば、ハンブルク、ニュルンベルク、キール——これらはストラスブルクとともに最高水準の収入を有する——の家賃の高さはこうした事情によることが分る）。

我々はまず、各都市について、異なる家族構成の比率を計算した。

【原著 203 頁の表を挿入（下表は整えていない）】

	Ham-burg	Mun-chen	Dres-den	Nurn-b-erg	Dussel-dorf	Chem-nitz	Magde-burge	Stras-burg	Kiel	Bar-men	Lube-ck
子供 0-1 人	39.5	37	29.5	24.5	*	19	*	41	11.5	*	17.5
子供 2-3 人	43	53	53	60	67	35	90	52	60.5	50	45.5
子供 4人以上	17.5	10	17.5	15.5	33	40	10	7	28	50	37
	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

我々はこの表から次のことを知り得る。すなわち、家賃が比較的高いいくつかの都市は子供がゼロないしは 1 人の家族はごく僅かしかかないこと（ニュルンベルクとキール）、しかし家賃の低い別の都市もそのような家族を全く、あるいはごく僅かしかもたないこと、そして、家賃が最も高いハンブルクは、ストラスブルクとともに、そのような家族（子供がゼロないしは 1 人）が最も多いこと、である。それゆえ我々はこの点からは何も引き出すことはできない。

その結果我々は次の表を作成することを余儀なくされた。この表では我々は（アンケートされた世帯の数が最も多く、いくつかの支出の割合の高低によって平均的タイプから逸れているように思われた諸都市について）労働者家計（その数は欄の 1 に示されている）のみを取り上げている。我々は全支出と、これらの各都市における家族構成の各カテゴリーごとの食料費、衣服費、住居費を計算し、これらの数字を相対値に転換してその比率を計算した<sup>(1)</sup>。同時に我々は住居費からは転貸借の総額を差し引き、支出総額からも差し引いた。

(1) 相対値は、各欄において申し分なく平均的と思われる数値 1800、950、180、280、を指数として、すなわち 100 として、計算した。

【原著 205 頁の表を挿入】

我々はハンブルクおよびニュルンベルクにおける家賃の高さを発見する（相対値で 138 および 113 であり、18.5% および 16.8% である）。ハンブルクではこのような増加をもたらしているのが特に 2 人世帯、次いで 3 人世帯であることは興味深い。この増加分は、ニュルンベルクについても同じことであるが、転貸借による収益<sup>プロデュイ</sup>を差し引くことによってすでに十分に緩和されて現れている<sup>(1)</sup>。これは本質的な修正であって、統計事務所による平均値がいかなる点において曖昧で不正確であることを示すものである。したがってハンブルクの家賃の数字はニュルンベルクの場合と同じく、例外的なものとは思われない。これらの

数字が最も高いのは（相対値を見よ）、等しい家族構成で支出総額が最も高いところ、すなわち、ハンブルクおよびニュルンベルクの2人家族、ハンブルクの3人家族および4人家族、またもやハンブルクの6人家族および7人家族である。これらの数字はストラスブルクおよびミュンヘンで最も小さい。なぜなら（3人世帯の場合のミュンヘンを除いて）あらゆる家族カテゴリーにおいて支出総額がハンブルク、ニュルンベルク、そしてドレスデンにおけるよりも少ないからである。——たしかにこの点について絶対的な規則性は存在しない。いくつかの家族カテゴリーについて見られる家計数の少なさ、吟味の不十分さ（というのは、我々は子供の年齢を考慮に容れていない）は、このような経験則を異論の余地なきものとするを妨げるのである。（しかし）このような知見はそれだけでも、異なる諸都市における家賃についての余りに高い数字と余りに低い数字を根拠とする反論を排除することは可能である。家賃の懸隔は見かけよりもはるかに小さく、支出総額の数字と釣り合っている。同じような集団がその支出配分を都市の違いによって異にすると仮定する必要はない。

- (1) 転貸借による収益を差し引かない場合には、住居費の割合は次のようになるであろう。ハンブルクの場合、18.9%から20%、16.6%から19.5%、15.4%から19.2%、13.6%から17.7%、14.3%から18.2%、13.8%から15.9%、にそれぞれ変わる。ニュルンベルクの場合、最も数の多い4人家族についていえば、14.8%から16.4%へと変わるであろう。

衣服費について指摘した不規則性については、それも緩和ないしは説明され得る。ストラスブルクでは衣服費は非常に高いように見えるが、これは六つの非労働者世帯の存在に因る。この6世帯を除いてもこの衣服費の割合は依然として高いが（というのは平均収入もまたこれによって低下するからである）、絶対額は、（指数に表われているように）、顕著に低下する。衣服費はミュンヘンでは非常にわずかであった。現在では我々は、非常に低い収入水準のカテゴリー（2人家族ないしは5人家族）については衣服費が非常にわずかであること、そして他の二つのカテゴリーのところではそれが奇妙に上昇することを見ることができる。このことはドレスデンとニュルンベルクにおいても同じであり、これらの都市では支出全体と衣服費との間に連続的な関係はないにしても、一方の小ささが他方の小ささに対応してはいる（指数を参照、特に最初の三つのカテゴリーと最後のカテゴリー、そしてニュルンベルクについては第二のカテゴリーと、最後の二つのカテゴリーを参照）。これに対してハンブルクではこの衣服費は、いくつかの最大費目に対して比率においても相対値においても比較的大きい。

まだストラスブルクにおける食料費の大きさを説明しなければならない。ストラスブルクにおける食料費の割合は、あらゆる家族カテゴリーについて、他のすべての都市におけるよりも大きい。しかし最初のカテゴリー（3人家族）は例外的に低い平均収入である。第二のカテゴリーは5家族しか含んでいない。そこでの平均食料費は明らかに少し高すぎるが、次の第三カテゴリーにおいては支出全体とともに低下する。それゆえ支出全体と食料

費との間の関係はいまだきわめて可視的である。

我々は、家計簿が作成された諸都市を考慮に容れて、それらを二つあるいはそれ以上の数のカテゴリーに分ける正当な理由を持たない。調査担当者がすべての都市において同じ構成と同じ収入とを併せ持つような世帯に行き会えなかったということがあり得る。この点から、まずは地方的行為状況<sup>アクションズ</sup>、すなわち伝統、住居あるいは生活費の特別な高さ、異なる地域における欲求の種類と水準の相違を考えさせる差異が出てくる。分析すれば、すべては収入の差異に還元されること、あるいは少なくとも還元されるように見えること（なぜなら研究をこの方向にさらに押し進めることはほとんど不可能でもあり、有益でもないからである）が確認される。

この点について結論を出す前に、家計簿はそれを大都市について分類した場合、金属労働者の調査ではどのように見えるかを見てみよう。19の大都市（および15の中都市、8つの小都市）について世帯ごとの平均支出の表がある（p.52）。その数字をもとにして我々は表を作り変えた（本書 p.208）。その表では、各都市について、各費目の相対値、支出全体に対する比率が示されている。家計簿数が六つ未満の都市のデータは除外し、食料費と飲料費を追加し、各都市について、調査された世帯数を数え上げ、その家族構成を示した（各世帯について大人の数と子供の数が記載されている■表 I ■にしたがって計算した）。しかし転貸から上る収入総額が記載されているのは遺憾である<sup>(1)</sup>。転貸の数が統計事務所の調査の場合よりも少ないことは確かである。ハンブルクの場合、金属労働者の調査では（税金を含む）家賃は306マルクであるのに対して、統計事務所の調査では（税金を含まない）家賃は390マルクであり、後者の場合その数字は事務員および労働者のすべての世帯に関係している。転貸収入および事務員を除外すれば、290マルクから340マルクの間で、後者にかかなり近い平均値が得られるであろう。この平均家賃が、ベルリン（316マルク）、フランクフルト・アム・マイン（401マルク）、■シュトゥットガルト■（348マルク）について同じ調査で挙げられている家賃と同じく、どの程度水増しされているかについて、我々は知らない。

- (1) p.29には次のように述べられている。「大きな住居および三部屋の住居の場合には、一部屋が補助収入のために転貸されることがある」。しかし、これがどのような場合か、また値段はどうかについては述べられていない。

#### 【原著 208 の表を挿入】

いずれにしても、フランクフルトでは家賃の高さは一連の都市のなかで最も高い収入に対応しており、この対応関係は家賃と収入の点ですぐ後に続くベルリンおよび■シュトゥットガルト■についても同じである（欄 3、5 および 10 を参照）。ライプツィヒとカールスルーエについては、住居費の割合は大きく、総支出と家賃はライプツィヒでは小さく、カールスルーエでは平均的である。しかしライプツィヒは、ヒェムニッツおよびブレーメンと共に（■訳者注■?）、調査された世帯が最も多くの家族人員をかかえている都市であ

る（欄 2 を参照）。非常に低い平均家賃を示しているヒュムニッツとブレーメンは、一方は食料費が、他方は衣服費が非常に大きく、しかも家賃は平均より少し、あるいは大きく下まわっている。ブレーメンとライプツィヒで集められた家計簿の数の少なさは他方で多くの推測を可能にする。ヒュムニッツおよびマグデブルクにおける家賃の低さは、恐らく支出総額の低さと関係しているところがきわめて大きい。——さらに、ハンブルクではなぜ家賃が比較的高いのか、そしてミュンヘンの家族構成はたしかに少し大きめであり、しかも支出全体も同じく比較的大きめであるのに、食料費がなぜ大きいのか、という問いがでるであろうことは確かである。転賃、子供の年齢を引き合いに出すことが必要であろうか。こうした点についてのデータを我々はもっていない。しかしこれらの偶然的な相違によってこの偏差を説明することが不可能に思われるほどには、この偏差は大きくない。——さらに、特にライプツィヒ、ブレスラウ、ハノーバー、ヒュムニッツについてであるが、支出総額が最低である場合（欄 3 を参照）、食料費が大抵の場合（欄 9 を参照）大きな割合を占め、そして特にフランクフルト、ハンブルク、シュトゥットガルト、ブレーメンについてであるが、支出総額が最大である場合、食料費は小さな割合しか占めないことに注意しよう。しかしミュンヘンとニュルンベルクはかなり高い支出総額にも関わらず食料費は大きい。実際のところ、一つの都市で作られた 10 ないしは 12 の家計簿から一般的結果を引き出し得るにはここでの平均値は余りに様々の要素を含んでいるのである。収入は 1200 マルクから 2500 マルク、家族数は 2 人から 6 人ないしは 7 人までを含んでいるのである。見かけ上のいくつかの不規則性は場所の多様性を介在させずとも説明可能であること、そしてかなり離れた諸都市においても同じような関係が確認されること、はすでに非常に顕著である。

田舎から出てくる労働者の流入が少なくとも一時的であれ大都市の労働者の習慣をどの程度変容させるか、他方、一つの労働者都市において最高給を支給される労働者カテゴリーが存在するかないかが、いかに他の労働者の習慣と傾向を（もちろん逆の方向にであるが）方向転換させるか、を測定することは自主的な研究の目的であろう。一国の労働者全体を、その諸部分が絶えず移動していて、一つの場所から別の場所へ移り、それらが一時的に包含されている全体のもつ属性以外の属性は獲得し得ないような、一つの全<sup>マッス</sup>体であると表象するにはおよばない。各都市、各地域には、一定数の定住的労働者が存在する。一群の労働者の社会的表象が、彼らがその地域の労働者全体の内部で位置する水準に依存することさえあり得ることではある。しかし、この依存がどのようなものであるか、彼らの支出配分の視点からみた、彼らの社会的地位の（相対的）低下あるいは上昇からどのような結果が生ずるか、をアプリアリに言うことはできない。比較的ありふれた産業と並んで、非常に質の高い人員を擁するある奢侈産業が発展していた一都市が競争その他の結果としてその産業を喪失し、かくして中核部分をとり除かれたと想定してみよう。まだ残存しており、いまや首位にいる余り質の高くない労働者たちは習慣や衣服に対して昔よりも多少とも重要性を付与するであろうか。給与の高い労働者の到来以降多分上昇した支出は、彼らが去った後少しも減少しようとしまいであろうか、あるいは逆に、彼らが捨てた住居、

彼らの買う習慣のあったものでまだ一定期間市場に出ている商品が（多分価格の若干の低下によって）低い収入の労働者たちを惹きつけはじめないであろうか。それゆえ我々は、（家族構成と組み合わせられていても）収入の数字がいろいろな支出の重要性と関係を決定するにちがいないとは主張しない。

しかし、考えられ得るこれら他の影響を考慮しないことが独断的に思われるのと同じように、これらの影響を地方的影響という安易な名称の下に括り、それを一国レベルにおける、非常に複雑でさえある現象に関係する研究を拒否するための口実とすること、そして限られた地理的枠内に閉じこもって一連の個別研究のみに限定することも同じように科学的ではないであろう。そのようなことをすれば、このような地方的影響そのものを分析するためのあらゆる手段、独自のであるどころか、多様な形で組み合わせることが可能であり多くの場所で非常に多様な具体的な形態においてみ出され得る、一定数の要因と条件へとその地方的影響を分解するためのあらゆる手段をあらかじめ捨てることになるであろう。それはあたかも複数の地質的大変動が一地域全体の範囲に連続的に展開しその表面を変容させたかのごとくである。土地の起伏運動、その作用の不等性は、その一般性にも関わらず、作用している同一の諸力、隆起と浸食を最初は認識させず、表面的な観察者はこれらの地域的変化を地域的影響によって説明しようとするであろう。しかし非常に多様なこうした変容のすべてを比較すれば、科学的精神には、こうした変容の原因は同じ性質のものであり、ただこのように重ね合わされた連続的作用を識別することが重要であるという考えが示唆されるであろう。

ところでデータを吟味しても、その労働者の支出配分が類似していること（あるいは同じような法則に従っていること）によって、他のすべての諸都市から区別されるところの近接する一群の諸都市といったものは出てこなかった（不規則性は家賃についてはハンブルクにもフランクフルトにも見られ、食料費についてはミュンヘンにもニュルンベルク、シュトラールにも見られる）。しかし大抵の場合、データがいかにかわりなく、まずく作成されていても、次のような諸関係は垣間見ることが可能である。すなわち支出総額と、他の支出に対する食料費の割合との逆の関係、支出総額の数字と家賃の数字との直接的関係である。これらは確かにいまだ曖昧で不確かではあるが、良好なデータに照らして子細に追求することが重要であろう。同数の家族を持ち同じ収入の労働者たちがいかなる場合にも同じように行動するわけではないということも考えられ得ることである。しかし我々はそれを信ずることはできない。次のような場合にのみそれを説明することが可能であろう。すなわち、そのような多様性が、等しくない強度で、異なる場所で、複数事例生ずる場合である。それは、様々の事例のうちに現われ、大きさも複雑さも異なる、いかなる条件がそれを説明することができるかを確定できるようにするためである。これこそまさに、現在の我々のデータでは多分解決することのできない問題であり、しかも予め相当の理由なしにはある種のデータを除外しないという条件でのみ設定することのできる問題である。

したがって、都市を大、中、小に分けることも余り方法論的に徹底しているとは言えない。このような区別は統計事務所のアンケートでは余り大きな意味を持っていない。この



アンケートでは労働者家計のほとんどすべてがいわゆる大都市あるいはリュベックで集められているからである。他方金属労働者のアンケートではこの区別は比較的大きな役割を果たしている。しかし住民の数、これは必ずしも<sup>エコノミー・ソシアル</sup>社会経済学に関係しない人口学的あるいは形態学的な特徴である。ドイツの諸都市が主として労働者の流入によって増大したこと、非常にしばしば一都市の大きさは産業的経営数およびそこに集められている労働者集団の重要性のかなり確実な指標であること、これは認めることができる。だからといってこれら二つの間に正確な対応関係が存在すると言えるだろうか。大多数の産業は、家賃や商品の値段が高くなりすぎる大都市の外部に移動する傾向があることがしばしば指摘されてきた。ある種の技術的進歩が産業的生産を地方に分散させることは理解できることである。特に一都市の住民数は、種々の収入水準の労働者群の間に存在する比率について、また労働者の由来について、さらに労働者階級が包含しているところの田舎出の人々の割合について我々に何も教えない。ところでこれらこそ我々にとっては本質的な事柄である。その都市の経済的ならびに社会的性格こそが、その規模よりもはるかに我々にとっては重要なのである。このことは（しかし）第二のアンケート（金属労働者のアンケート）について、小都市および大都市に関係するデータを別々に呈示することを妨げるものではないことは確かである。なぜなら小都市の大部分はとりわけ低い給与の労働者を含んでおり、また確かに田舎出の労働者が最も多くいるところでもあるからである。しかしこの区分は我々の目には本質的ではない（一群の工場、一つの鉱山の周囲に形成されているような小都市は労働者の大住宅地域から切り離された一断片のようなものであり、逆に顕著な産業的発展のない大都市は、田舎と頻繁な交流をもっている、かなり分散し密度の低いいくつかの労働者地区に取り囲まれている）。そしてこのことはしかし、全体の、データ全体の比較からその効用、本来の価値を奪うものではない。

## 第二節

### <sup>メティエ</sup>職業と支出の配分

統計事務所のアンケートは、異なる職業と産業に属する労働者を対象としている。これはまさに「経済的な」区分である。我々は、非常に限られた数の職業に属する労働者のみを取り上げる方がよかったのではないか、いずれにしても現実に集められたデータを分類し比較するためには特にこの（経済的）観点に立つ必要はないのではないか、そして最後に、同じ大きさと同じ収入の世帯であってもその世帯主の職業が異なるものを集めている群は何らかの同質性を示すかどうか、と問うことができる。

我々の扱っているアンケートの■表IV■（pp.170-177）には、世帯主の<sup>プロフession</sup>職業による、平均収入と支出とが示されている。区別された40の職業のそれぞれについて（家族およびそれに結びついている人員の総数についての傍記と共に）収入と支出の各項目ごとの平均数字（その詳細は表Iと同じである）および各項目の平均総支出あるいは総収入に対する比率が与えられている（ただし表Iと同じように食費のいろいろな項目は除く）。これらの

表は序論（第五節、pp.44\*-57\*）で分析されている。特に二つの表の（pp.49\*-50\*）があり、そこでは各職業の世帯数とともに、支出の五大カテゴリーについての職業ごとの平均および支出総額に対するその比率（%）が示されている。我々は次の表（p.216）を作成するためにこれを利用した。

【原著 216 頁の表を挿入】

我々はまず事務員、技師、小学校教師等を除外し、10 家計以下のすべてのカテゴリーをすべて除くことによって、職業の数を 40 から 23 に減らした<sup>(1)</sup>。

- (1) 家計数が余りに少ないものを含むカテゴリーは多くの混乱を惹き起こす。次はその一例である。序論では、機械製作工と仕上げ工は印刷工よりもはるかに大きな食料費の支出があると指摘されている（印刷工が 47.7%であるのに対して 55.9%）。まず計算のミスがある。我々はこの食料費が機械製作工の様々な家計においてどのようにあらわれているかを知りたいと思った。さて食料費の割合は（我々が■表 I ■の 150 頁分を通覧してみ出した 6 世帯において）55.5%を超えることは決してなかった。実際には平均総支出は（2360 マルクではなくて）2068 マルクであり、食料費は（1318 マルクではなくて）1060 マルクであり、その結果、食料費の割合は 51.4%となり、印刷工のそれに大いに接近する。他方、次の表は先の 6 世帯のそれぞれについて、家族数、支出全体および家賃についてのものである。

【原著 214 頁の注 1 の表を挿入（下表は整えていない）】

2	1340 marks	542 marks
8	1337	808
2	2087	1157
4	2287	1190
4	2513	1372
3	2644	1317

これほど差が大きく、少数の収入の、またこれほど様々な家族構成の平均が意味し得るものが何であるかも我々は全く理解することができない。このような条件において、家賃の割合が 40.4%から 55.5%に変わることには驚くには及ばない。——これらの結果が検証されなかったことは明らかに遺憾なことである。一つの計算ミスそのものは何事をも証明するものではない。我々は非常に頻繁に計算を検証したがその他のミスは見出さなかったことを言うておかなければならない。しかし、これは平均値に算入される要素を一つひとつ検討することなしに平均値を計算する場合に我々が身をさらさなければならぬ一つの危険である。

他方我々は、<sup>プロフェッション</sup>「職業」ごとに、平均家賃および平均総支出から転貸の平均総額を差引いた後で、常に同じ方法で（欄 3-8）、平均支出を示す数字を相対値に換算した。我々は転貸総額の総支出に対する割合（欄 12。我々はこの割合を計算したがその理由は収入に対する割合しか計算されていないからである。最もその割合は、総支出に対する割合に非常に近いのであるが）を加えて（欄 11 の数字は家賃全体を表しているので）、序論の第二の表の数字を再録した（欄 9-14）。最後に我々は、■表IV■によって計算した世帯平均家族構成を追加した（欄 2）。

この表は非常に興味あるものであるが、性急な解釈は差控えねばならない。例えば印刷工の住居費が割合においてのみならず（欄 11 のなかで最も低い）、絶対的にも少ないこと、それにもかかわらず彼らの家族はあらゆる職業のうちで最大の人数を擁することに我々は驚くであろう。他方では彼らの雑費が割合においても絶対額においても例外的に高いことに気付くであろう。個々人の家計についてみればその中で精神的社会的欲求のための支出が例外的に多いことが確認される。家計の全体についてみれば精神的社会的欲求のための支出は 3.97%（p.21\*）であり、小学校教師の場合 5.4%であるのに対して、印刷工の場合には 6%から 13%である（印刷工のうち 2 人については 13.9%と 14.7%である）のを見ることができる。この家計を、雑費の多い植字工の家計（これは印刷工の場合とほぼ同じ割合であり、これに近いのは「熟練金属労働者」だけである）と比較すれば、精神的社会的欲求のための支出の多さは行なわれる仕事の性質によって説明されると考えられるであろう。この仕事は読書への習慣と意欲を発達させ、精神的事柄と接触させるのである。こうした新しい欲求は印刷工の場合非常に圧倒的なものであろうし、それを一層満足させるためには彼らは住居費を抑制することもためらわないのであろう。——さらに右工の場合の食料費の割合の高さが指摘され得るであろう。彼らの家族は数が少ないけれども印刷工の場合よりも高く（欄 9 を見よ）、また状況が彼らと比較可能な植字工の場合よりも高い。大工職の場合、さらには「熟練建設工」や録物工の場合、食料費の割合は、支出全体も大きいにも関わらず高いところにある。この点に関しては、こうした<sup>メティエ</sup>職種の場合に見られるより大きな肉体力の消費とより実質豊かな栄養補給の必要性とが主張され得るであろう。——他方、道路工の場合の食料費の割合の高さは、御者や運輸労働者と同じように、しばしば（食品の）小売店へと彼らを赴かせる、その生活様式によって説明されるであろう。（食品の項目別および職業別の平均支出が示されている p.54\*および p.55\*の表を参照すれば、実のところ自宅でのアルコール飲料のための各職業一様に非常に大きな支出を見ることができる。第 1 の表では 3.5%、第 2 の表では 4.2%であり、他方平均は 1.5%で、小売店での支出が非常に大きく、第 1 表では 4%、第 2 表では 9.5%である。この数字に近いのは 8.6%<sup>トラヴァニール・ド・アリソンタシオン</sup>の食品業労働者のみである。平均は 2.7%である）。ここから比率および絶対額における彼らの住居費の低さが結果する。なおまた彼らは多分、その庶民としての習慣からして、家庭の暖炉を楽しむという体勢にほとんどなっていないであろう。彼らの雑費に関しては、それができる限り切りつめられていることに我々は少しも驚くことはないであろう。——鍛冶工と錠前師の家計の間の著しい類似が指摘され得るであろう（相対値は錠前師の場合

やや小さい。彼らは総支出が少なく、家族数がやや大きい、転貸借を計算に入れば（支出）比率は非常に接近している。衣服費は錠前師の場合例外的に低いところにとどまっている。彼らの支出水準の相対的な低さがあらわれるのは特にこの部分を通してである。両者間の著しい類似は職種の親縁性によって説明することができ、相違するところは彼らの社会的状況が全く同じではないことに由来するであろう。——繊維労働者が非常に低い水準に位置していることに人は気付くであろう。非熟練労働者の状況は似かよったものがある。しかし（多くの子供をもっている）繊維労働者はより不器用で決断力に欠けるところがあるように思われる。近い収入水準にある非熟練の錠前師や鞍具職人は彼らの支出の4%以上に当る額を転貸借から得ているのに対して、繊維労働者たちは転貸借から1%も得ていないのである。他方彼らの食事は、テーラーや熟練衣料労働者と共に、特に肉類について乏しい（平均が総支出の8.5%であるのに対して、繊維労働者の場合、総支出の7.9%、テーラーと熟練衣料労働者の場合、8.1%である。平均が絶対額で191マルクであるのに対して、繊維労働者130マルク、テーラー138マルク、熟練衣料労働者136マルクである。それに対して非熟練の錠前師、鞍具職人の場合には163マルクから169マルクである）。強い筋力を必要としない職業がこの場合にも作用している。——最後に、庭師と木材労働者との間では違いが大きいように見える。後者の家族は、3.6人であり、その総支出は相対値で103である。前者の家族は5.2人であり、その総支出は相対値で88である。しかしながら支出の割合を見ると、（転貸借を計算に入れた場合）、驚くべき相似性を見ることができ。雑費は非熟練木材労働者の場合やや（わずか）高い。ここで、庭師は依然として農民にとどまっているにせよ、支配的な影響を及ぼすのが職種であることは明らかである。その結果、庭師の衣服費、そしてとりわけ雑費は、熟練木材労働者の資質と生活様式は庭師を田舎のある種の労働者、木樵、製材労働者等に近く感じさせるとはいえ、依然として非常に切り詰められている。——さらに、港湾労働者（その大部分はハンブルクの出と言われており、彼らの高い給与はこのことによって説明されるであろう）の支出と船大工の支出の間には多分もっと緊密な類似が存在する。収入と家族構成は（ほぼ）同じである。食料費と住居費の割合は（双方とも転貸借料を計算に入れば）非常に接近している。衣服費は港湾労働者の場合ほんの少し多い（彼らの作業着は多分より早くすり切れてしまう）。他方船大工は雑費が少し多い（しかしほんのわずかである）。

以上がこの表から示唆され得る本質的な観察である。しかしこの表は、同じデータから作成し得るもののうちで最も為になるものであろうか。そして、支出配分は一職業集団から別の職業集団に移行する時には原理的にそして非常に明確に変動するという結論がここから出て来るであろうか。もちろん、考察されている集団はしばしば非常に小さいものである。我々には、重要な職種のそれぞれについて、金属労働者のアンケートと同じように範囲の広いアンケートが必要であろう。それにしても■上のような■結論についてどう考えるべきであろうか。

まず、比較される各集団は（ケース数とは無関係に）すべてが同じ価値を有するわけではない。あるものは、ある意味ではかなり広い範囲の職種を示している（印刷工、石工、

大工、錠前師、壁張り工、鞍具工、等)。他のものは全体としての産業に対応している(庭師、繊維労働者、道路工、運輸労働者)。すでにこのことが比較を困難にする。印刷工にも多くの種類が存在する(手引き印刷機か機械印刷機か、新聞の印刷か普通の書物の印刷か、あるいは豪華本の印刷か、図入りか、■版刻(板刻?原 974) ■か、カラー入りか、多色刷りか、等)。繊維労働者の場合にはさらに多くの種類が存在する(羊毛、絹、■等、■織物工、製糸工、整程工、等)。一方に該当する指摘は、作業など疲労の種類の間からも、またそれと関連する可能性のある物質的精神的な趣味あるいは習慣の間からも、他方には該当しないであろう。■下記のような■カテゴリーはさらに一層不明確であり、同質的でない。すなわち、石工は別として熟練建設工、大工およびペンキ工、鋳物工は別として熟練金属工、金物工、鍛冶工、錠前師、船および機械の建設工は別として熟練機械工、等、である。「<sup>エクステンシフ</sup>拡散的」と言い得るほどに広い職種には関係していないという点のみを共通特徴とする労働者たちが比較された場合、彼らは何らかの統一性を有する一集団を形成すると想像し得るであろうか。いわんや職業が「非熟練工」である人々、あるいは専門性を示したことがないという点のみを類似点として有する人々について語る場合においてをやである。たしかに彼らが労務者、日傭い人夫、臨時あるいは不規則労働者であることは大いにありそうなことである。彼らを除外することは遺憾なことと思われたであろうし、彼らを分類するにはその家族構成および収入によってしか方法はなかったであろう。しかし、明確なところが何もない職業の、彼らに対する影響を何故に探求するのか。

実際この枠組は余りに広いか余りに狭いかするのである。労働の、その辛い性格の、それが要求する力あるいは特性等の影響を研究することは重大なことであったのか(しかも社会学よりも生理学により多く関係するところの問題)。そうであるとすれば、(すでに多数存在している)この観点からするところの、様々の職種の比較研究の成果に断乎として立脚し、また、大工を石工に比較し、熟練機械工を船舶建設工に比較することを可能ならしめるような、本当に一つの分類(苦しい作業、中程度に苦しい作業、軽快な作業、戸外作業、座業、閉め切った作業場、等)を選択することが必要であった。どちらかといえば人々は、同一の工場で同じ生産物のために作業するという事実が一群の人々に及ぼす影響を確定することを望んできた(すでに我々が先に扱った問題)。この場合には植字工と石板印刷工とを、また石工と人夫、熟練建設工とを分ける必要はなかったのである。一層簡単にまとめられたある表では、はるかに一般的なカテゴリーが示されており、工業労働者は熟練工と非熟練工とに区別され、ほかに労働商業、および運輸労働者、そして固有の名称をもたない労働者が区別されている。これらの集団はそれぞれ 382、54、53、そして 33 人の人員を含んでいる。ここで、熟練労働者と非熟練労働者とが住居費についてまったく同一の額、すなわち 316 マルクであることが奇妙に感ぜられることが予想される(住居費は熟練労働者の収入の 16.8%、非熟練労働者の収入の 18.4%である)。しかしこれは全く単なる偶然であり、このような数字からは何も引き出すべきものはなく、また、これほどまでに不確定な形で集団に関係する数字からはすべて、何も引き出すことはできない。区別すれば有効な多くの特徴が平均の名における不明瞭な表現でいかにぼかされるかをこれ以上

に示すものはない。

この表が示唆し得ると思われている指摘に関しては、それを文字通りにとらないように注意しよう。印刷工が、衣服費および雑費に非常に多く出費するのに比べて、食料費および住居費には他の世帯より多く当てるということはまずなく、比率においても小さいということに我々は驚く。しかし、比率に注意すると同時に、相対値を忘れないようにする必要はある。総支出の数字が非常に高いので、転賃借の総額は、総支出に対する比率は小さいにも関わらず、重要である。そしてそれを差し引かなければ、住居費の相対値（欄 7）は 126 であり、大工の場合とは同等で、石工の場合よりも大きいであろう。ところで、転賃借は多くの事情に依存するものであり、しばしば偶然の事柄であり、その結果、人は住居を転賃借に出すことによってその契約を希望することはできるが、預め金を費やすことはできない。他方、食料費は印刷工の場合、相対値において他のいかなる職業におけるよりも高い。それゆえ言うべきことは、印刷工が新たな出費にゆとりを作るためにこれらの支出を抑制しているということではなく、少なくともそれらが他の職業と同じ程度に満足させられてから、彼らは別の出費をするということである。しかも、このような表現が印刷工をそれを自体として明確に規定するものとする権利も我々はない。なぜなら彼らの収入は明らかに他の職業よりも高いからである。このことは単純に収入の数字と関連して言えることである。

食料費に関して職種との関連で示されている観察も同じく条件つきでのみ受け容れらるべきものである。——石工はもっと実質的な栄養補給に対する欲求をもっているということも考え得る。事実彼らは印刷工よりも少し多めの肉を消費する。しかしこのことは大工や鋳物工については言えない。彼らは同じように苛酷と思われる労働にも関わらず、石工に比べて肉の消費には少ないのである。他方印刷工は他の三つの職種の労働者よりもはるかに多くパンと牛乳を消費し、葉巻とタバコに比較的多く出費する。バター消費は（壁張り工の場合を除いて）ほとんど同じである。食料は正確には同じ種類のものではないけれども、これらすべての職種カテゴリーについて食料費は、収入との関係を除いてはほとんど変わりはないという、ある補償作用が存在する。食料費は収入よりも少し遅れて増大（ないしは減少）する。職種は関係しない。——道路工の高い栄養補給はアルコール飲料のための出費や小売店での買い食いの大きさのみによっては説明され得ない。各品目の三つの最大と三つの最小がすべての職業について示されている。さらにそれらにおける四つの最大も見ることができる。すなわち、「牛乳」「コーヒー」「小麦粉、米、等」「塩、油、スパイス」である。彼ら道路工が食料のために大工——その支出総額はかなり大きい方である——よりも多く支出すること、このことは厳密な意味における職種とは関係しておらず、同じ収入と同じ家族構成にあっても食料のための支出を相互に異ならせる、一般的条件と関係している。彼らは実際、特別ではなく、造船熟練工、船製造工、ペンキ工と指物師、鍛冶工、金物工との間には、同じ大きさではないが同じ種類の一つの違いが存在している。支出総額は違わないのに前者は食料のためにより少なく支出し、後者はより多く支出するのである。——繊維労働者の食料費の少なさは、肉の消費の不足のみによっては説

明されない。しかし彼らは同時に非常にわずかの牛乳しか消費せず（この品目のための彼らの支出は最小のうちの一つである）、ごく僅かしか飲まず、小売店でもごく僅かしか支出しない。彼らは「非熟練工一般」よりも多くのパン、コーヒー、野菜を消費し、非熟練工一般は肉および牛乳により多く支出する。ここにもまた補償作用が存在し、これがこの食料費支出の水準を移動させないのである。それは収入の少なさであり、これが食料費水準の低さを説明する。栄養補給は明らかに、他に衣服と同じように、職種によって性質を異にする。そこには伝統、習慣が存在し、それらは根拠のあることもあれば弊害のあることもある。食料費が変化しない限りにおいては、我々はそれを考慮に容れるには及ばない。これらの家計をより裕福な家計と比較するとき、食料費が不十分であることが証明させることはたしかである。しかし一般的不足が問題なのである。ここでもまた職種それ自体は食料費という一カテゴリーの減少を説明するにおいては関係がない。

最後に鍛冶工と錠前師の家計の間に、また木材熟練工と庭師の家計の間に見られる共通点は、もはや職種の類似によっては説明され得ない別種の共通点の存在を排除するものではない。指物師と鍛冶工の間では、共通性はさらに一層大きくなる（比率を見よ）。指物師の場合に食料費がやや大きい（比率において。絶対数値は同じである）とすれば、このことは彼らの家族の人数が多く収入が僅かながら少ないことによるとも考えられる。これはまたこれらの住居費が比較的少ないことも説明するものである（彼らはほかにもっと多くの転貸借をもっている。この転貸借を計算に入れなければ、二つの集団の住居費は、相対値で 102 および 101 である）。指物師は他に錠前師の場合に全くよく似た雑費をもっている。ところで、指物師という職種と鍛冶工という職種の間にはいかなる類似が存在するのか。それはハンマーを扱うということか。——造船工の家計と湾岸労働者の家計との類似は、前者とペンキ屋の家計との間の類似よりも小さい（とりわけ転貸借を差し引かない場合には）。さらにこのことをよく考えるならば、造船工と湾岸労働者の間の類似は非常に希薄なものである。彼らはお互いに海のへりで働いていると言われる。しかしそれならば、ペンキ工は造船工が建造した船にペンキを塗る、ということも言い得る。……これらはすべて表面的な観念の連合にはほかならない。——最後に庭師の家計と木材労働者の家計の類似はだまし絵トロンブルイエのようなものにすぎない。食料費の割合は同じである。しかしその相対値は庭師の場合の方がはるかに高く、彼らの家族の人数は（鍛冶工の場合と並んで）部類中最も少ない。逆に家族の人数が（■庭師の場合に次いで——意味不明■）最も多い木材労働者は、平均に明らかに劣る食事をしている。要するに木材労働者は食費支出の総額によっても割合によっても、比較可能な水準の収入の集団、非熟練雑務工、繊維労働者にずっと近いのである。——それゆえ、職種という概念を産業という概念に代えるくらいに拡大しても、異なる職種の労働者各集団をその欲求のヒエラルヒーと強度に従って区別することは不可能である。

しかしこの否定的な帰結は多分、（少なくとも部分的には）まさに枠組の広さに起因するであろう。一つの集団が（たとえ近くとも）種々異なるカテゴリーを含んでいるのに比例して、その一般的性格は曖昧になる。他方、これらのカテゴリーそのものの識別可能な特

徴は平均においてただ部分的にのみ一体化する。それゆえ第二番目の試みとして、単一の産業を取り上げ、それを他の産業と比較することはやめて、その中に含まれている様々の職種を研究し、相互の関係によってそれらを分類することは興味深いことである。かくして、産業の違いに由来する差異についてのあらゆる根拠を取り除き、職種のみ由来するものをより確実に把握する可能性を得ることになる〔職種のみ由来するものとは、作業の多少とも熟練的な性格、生産の通常の形態（大規模か小規模か）、そして制度（手工業か大工業か、等）である〕。これは可能なことである。なぜなら金属労働者のアンケートのなかには、一つの表で（pp.120-129）データ（収入と支出の詳細）が示されており、ここではデータが家長の職業に従って分類されているからである。またこの表は、これに先立つ報告（pp.35-41）においてかなり表面的に分析されたものである。——16の職種が区別されている。最も大まかなカテゴリーが「雑」の名の下に、穴あけ工、切削工、粉碎工、掃除夫、を含んでいることは遺憾なことである。これらは他の集団に関連づけるか、あるいは専門性によって区別することがおそらく可能であったはずである。職業毎の平均支出の表が絶対額および総支出に対する比率で示されている（p.40）。我々は、一方で食料費と飲料費を、他方では雑費（保険料と団体費、教養費と娯楽費、その他）をそれぞれ単一のカテゴリーに集め、これらすべての平均（指数としてそれぞれ 1800、950、230、280、300をとった）に対応する指数を計算した。

#### 【原著 226 頁の表を挿入】

最初の 5 つのカテゴリー（収入の大きさに従って分類されている）から次の 5 つのカテゴリーに、そして最後の 6 つのカテゴリーへと目を移していくとき、当初は食料費の比率の増大と絶対額の減少以外には、規則性がほとんど認められない。もし金銀細工師が（相対値で）機械技師よりもやや多く支出するとすれば、これは家族員数が最大であることによって説明され得る。また鍛冶工が（比率において）機械技師よりも多く支出するとすればこれも同じ原因に由来する。旋盤工は（比率において）鋳物工よりも多く支出し、錠前師は研磨工よりも多く支出する（この原因はしかし飲料費等ではない）。その代り第一のカテゴリーの中では二つのケース（訳者：鍛冶工と機械技師）において雑費が、そして第二のケースは（■錠前師■訳者？）においては衣服費がより少ない。しかし、雑費の詳細部分を参照すれば我々は次のことを確認することができる。すなわち、このような不規則性（なぜなら雑費は収入水準が下がるにつれて比率においても絶対値においても減少する傾向があるのであるから）は、保険金や団体費によるのでも、同じく娯楽教養費によるのでもなく、他の支出、特に衣料費および薬剤費（それぞれ絶対値で 24 マルクおよび 37 マルク、ならびに 23 マルクと 43 マルク）、そして狭義における「雑費」すなわち「子供への贈り物、祝日、結婚、クリスマスの贈り物、鉢植えの花や植木、鳥類の飼育、通知」のための費用、また同じく世帯維持のために必要なもの、つまり靴墨、グリス、オイル等、「クリーニングと装飾品」支出（それぞれ 41 マルクと 65 マルク、48 マルクと 87 マルク）に



関連していないものの費用に起因するということである。それゆえこの場合には病気、出産、結婚、自転車の手入れ、等とりわけ偶発的な支出が問題になっており、これらは、他の点では平均的な給与を得ている世帯における食料費のわずかな減少を説明するものであり、職種の違いを引き合いに出す必要はない。鋸等の目立て工と銅鑄造工が、種々の金属労働者、鉄工場職人や鑄造工よりも食料費への割り当てが小さいとすれば、それは彼らの子供の数が少ないことによって説明され、この点は造船工についても同じである。ここでは総支出および家族構成以外の要素を計算に入れる必要はない。それゆえ我々はアンケートの次のような指摘を認めることはできない。つまり、上のことと並んで、「職種によってより大きな集中緊張を余儀なくされている家長の場合における、より実質的な栄養補給への欲求」を考慮する必要があるという指摘である (p.41)。

鍛冶工はより多くの飲料を消費すべく余儀なくされていると言われている。しかし、これが彼らの飲料費の大きさに寄与するところは非常にわずかであり、飲料費の大きさは、収入の高さや、彫版師や機械技師よりもはるかに員数の多い家族構成によって十分に説明され得るのである。彼らの飲料費支出は何も例外的ではない。他方我々は、鑄造工とブリキ職人におけるかなり大きな飲料費支出が職種の実行と関連していることを否認するものではない。「ブリキ職人はしばしば彼らの住居から離れた建物の中で仕事をさせられており、このことが彼らをして小売店でしばしば買い物をすることを余儀なくさせる」。しかし、この支出に関する差異は、それにしてもそれほど大きなものではない。この支出が食料費一般の総額に影響するところは非常に軽微である。それは多分狭義における食料費の減少によって相殺されるであろう。それは職業によってよりも、全く別のことと結びついている可能性のある状況によって説明され得る度合の方が大きい。それは多分すべて食料費のせいにされるべきではないであろう (1)。

- (1) 厳密に言えば、小売店でなされる支出は、肉体的欲求を満足させること以外に、一種の娯楽を提供する。小売店での支出が最も大きい場合には「娯楽費」と「雑費」の特徴的な曲りが認められる。

我々は次のような指摘も認めることはできない。「住居費は他のいかなる支出よりも、収入によって影響される」(p.41)。ここでは例外が規則と同じくらい多数であろう。鍛冶工の住居費は平均的である。彫版工と機械技師は非常に高い住居費を支出している。けれども総支出は非常に接近している。何故に金銀細工師は旋盤工よりもやや多く(訳者:住居費を)支出し、また錠前師は鑄物工よりもやや多く支出し、しかも各対の総支出は同じようであるのか(他方衣服費についてはこの二つの比較の場合関係が逆である)。何故にブリキ職人は明らかに研磨工よりも多くの住居費を使い、しかも総支出は等しく家族構成もほとんど等しいのか。また同じく、鑄造工は雑務労働者よりも多くの住居費を使うのか。たしかにこの住居費は総支出とともに減少するが、その割合はいかなる一定の法則にも従っているようには見えない。——次のような断言はさらに一層不正確である。「衣服費の割合は

住居費と同時に増減する」。金銀細工師から旋盤工へ、鋳物工から錠前師へと目を移せば、逆が起っていることを我々は観察した。このことは最初の四つのカテゴリーについても同様であり、そしてさらに、次のように目を移すときにも逆のことが起っている。すなわち、錠前師から研磨工へ、研磨工からブリキ職人へ、ブリキ職人から雑務労働者へ、雑務労働者から鋳造工へ、鋳造工から目立て職人へ、目立て職人から銅鋳造工へ、銅鋳造工から鋳造工へ、そして鋳造工から最後に造船工へと目を移すときである。つまり、16 ケース中 14 において、住居費の割合が増大するときには衣服費が減少し、またその逆も成り立つ、という法則が逆に確認されるということである。——住居費の衣服費に対する割合が高いか低いかに従って、職種を二つのカテゴリーに分類することがほとんど可能なくらいである。しかしこのように分けられた諸集団はずいぶん異質的であろう。他方我々はいまのところ、このような関係の意味が何であるかについてみておらず、言うべきことをもっていない。まずは変動の原因を少し見てみる必要があるであろう。職種の方のカテゴリー全体に共通して存在し、他方のカテゴリーには存在しない、そのような特徴の中には原因は見出されない。最後に、比較される各集団はしかしそれ自体非常に複雑であり、甚だしく異なる収入の世帯を含んでおり、その構成も非常に多様であるので、おそらくは偶然の作用にすぎないものを自然発生的な規則性と解釈する危険があるであろう。

#### 【原著 230 頁の表を挿入】

いずれにしても、これらの職種のいずれについてであれ我々は事実をもう少し緊密にすることが可能である。もしアンケートの報告者が表のなかで、支出の各カテゴリーに職業ごとにどの位の数の世帯が含まれるか（この点を報告者は検討しなかったのであるが、これはしかし本質的な問題であった）を示していれば（■原書 p.230 を見よ■表…阿部）、つまり彫版工、鍛造工、機械工、研磨工、金銀細工師、そして最後の 4 つの職種についてであるが、彼らは、すべてのカテゴリーに分散するか、あるいは、各カテゴリーにおいて余りに数が少ないことになるであろう。しかし、旋盤工、鋳物工、ブリキ職人、錠前師、および雑務労働者の場合には、連続している 2 つないしは 3 つのカテゴリーに含まれている収入のみを取り上げることによって、そこから正当な平均値を引き出すに十分多くの数を見つけることが可能である。これら 4 つの職種および様々の集団について我々はこれを試みた。世帯ごとに与えられた数字を追加することによって、また我々がやったように、いくつかの支出カテゴリーを単一のカテゴリーにまとめることによって、引き出した平均値を相対値に転換することによって、さらにその総支出に対する比率を計算することによって、我々は■232 頁■の表を作成した。最初の職種（旋盤工および鋳物工）と第三の職種（ブリキ職）においては、それぞれ著しい間隔によって分断されている、支出総額の二つの群と三つの群が存在することが指摘され得るであろう。我々のデータは余りに数が少ないので、大部分の各職種のなかで労働者を二つないしは三つのカテゴリーに分離するところの、一つないしは二つの隔たりを見出し、その意義を見つけることには無理がある。い

ずれにしてもこれは我々を経験の新しいケース、そして以前のよりも比較的単純なケースに直面させる。

【原著 232 頁の表を挿入】

まず第一に、同一の職種において収入の少ない集団から多い集団へと移る間に、食料費の絶対値は増大する一方で、その比率は減少する傾向にあることが認められるであろう。旋盤工の場合比率の減少度が非常に微弱であるとすれば、その場合、最高水準の収入に比較的人数の多い家族が対応していることを考慮する必要がある。錠前師の場合第一の категорияから第二の категорияに移るときに、また雑務労働者の場合第二の categoriaから第三の categoriaに移るときに、同じことがおきている。鋳物工の場合にも比率の増大は微弱であるがこれも同じように説明されるであろう。——第二に、衣服費は絶対値においても（しばしば相当な増加）比率においても、収入とともに非常に明確に増大する（比率については一つ例外があり、家族の増大が総支出の増大と同時に食料費の非常な増大を伴っている最後の categoria 全体がそれである）。——住居費は絶対値においては常に収入とともに増大する。比率においては、錠前師の場合（第二の categoria から第三の categoria に移るところ）およびブリキ職人の場合、5つのケースで減少し、別の二つのケースにおいて増大する。相対値を調べると、第二の categoria の錠前師は同じ収入水準ではブリキ職人よりも（世帯数は多いけれども）やや少なく住居費に支出することが認められる。他方我々はすでに彼らの食料費の割合は、その収入を考慮すれば大きいことを指摘した。このような不規則性をもたらすのはたしかにこれらの子供の数である。しかし第三の categoria の錠前師は住居費として、第一の categoria の錠前師と比率上同じ割合で支出するというのは事実である。そして、ブリキ職人の例外は説明されていない。こうした動きを大いに曖昧にするのは、我々転賃借について知っていないことである。——最後に、雑費は増大する傾向を示す。第二の categoria の錠前師はつねに例外をなし、そして第三の categoria の雑務労働者も、この費目について、予想されているよりもはるかに少なく支出する。しかし彼らは■前記の■錠前師とともに、その家族員数が断然最多の部類に属し、その分だけ食料費も増大するのである。

かくして我々は、種々の職業集団を通じて、同一の法則に従って確定されるのは比較的単純な関係であることをますます見てとることができる。多分、雑費の全額と総支出に対するその割合を説明するには収入と家族構成で十分であろう。我々はいまだこの法則を認識しておらず、規則性が破られた場合には例外を語り得る程度の一般的規則性を指摘するにこれまでのところとどまっている。この例外であるが、しかしこれは我々が比較した集団の複雑性によって大抵の場合説明され得るように我々には思われる。我々は収入が同じで家族構成の等しくない集団を余りにしばしば比較する。とりわけ我々は、職種そのものの影響に帰すべきいかなる規則性も例外も見出さなかった。そしてこれはまさに我々の心を領した点である。

このことは少しも我々を驚かすものではない。逆の結果を期待するためには、職種が身体と精神に非常に甚大な刻印を付し、その結果人が仕事場や工場の外部にあっても、機械、器具、道具から離れていてもその影響の下にありつづけ、ある意味でその雰囲気のうちにあるものと考えなければならない。また、労働によって生じさせられる力の消耗の大きさと様式とに直接に関連している欲求に最も重きをおかなければならない。たしかに産業労働は作業員に対して否定的な影響を及ぼす。労働者は、肉体的疲労、労働の中で身につける心的習慣がその感受性を鈍らせず、十分な精神的エネルギーと内的自発性を彼に残す度合に応じてのみ、住居、食事、衣服についてのある種の贅沢、精神的娯楽の追求、社会的楽しみへの嗜好、といった傾向を自らのうちで発展させることが可能である。しかし我々が見たように、作業中の労働者は生活と社会関係の外部に一時的に移動させられており、事物と機械に対する関係の中に置かれるか、あるいは事物と機械とに一体化している人間の活動に対する関係の中に置かれるか、その結果この諸力の全体は彼に対して積極的ないかなる社会的作用も及ぼすことができない。ところでいかなる欲求も純粹に肉体的あるいは個人的というものではない。諸欲求はすべて社会的である、すなわち、社会が個人に対して提示し提案する目的に向けて方向づけられており、そしてその度合は大きく、また、欲求が存在している集団の中で、社会生活が複雑で緊密であればあるほど、社会性の度合は大きい。労働者の生活のうちで工場あるいは仕事場で展開される部分は全く社会的ではなく、錠前工、鍛冶工、ブリキ職人を一つの社会集団として語り得るのは全く偶然なことでありまた非常にわずかな時間についてのみであり（職業的利害に関する論争が彼らを集団化させる時）、また、社会的欲求と支出習慣が明確になるのはこのような集団の内部においてではない。

しかし労働者はその作業をやめ、作業衣を脱ぎ捨てるや、集合的生活と集合的環境の中に入る。ところでここに理解されているような社会が解体している集団は、その集団がまさに工場の外部に存在し存続しているということ自体によって、職種とは全く異なる影響によって、また集団の区別についての全く異なる原理の名のもとに、形成される。これと逆のものを見るためには、我々が見たように、田舎へ行く必要がある。田舎では、家庭生活が全面的に職業に関与し、文化と営みの違いが地域、村の違いとして表現されるので、事情が異なる。そこでの一日は、社会の外部で労働する時間と、労働せずに社会の人間に戻るもう一つ別の時間とにそれほど明確に分離され得るわけではない。農業的条件が工業主義によって余り深刻に変えられなかったところではどこでも労働が工業労働者の作業に見られた「非人間的」で「社会外的」な性格をもつことはなかった。しかし他方、田舎での生活は一般により孤立的であり、そこでの集団や交流は集中性が希薄である。逆に労働者にあつては社会的欲求は、一日の仕事が終った後では、自然に対する骨折りによって窒息させられ抑圧されていた時間が長ければ長い程、より一層強く感ぜられる。労働者は多分、彼らにのしかかるこのような機械的共同体から免れるためにまずは努力しなければならないであろう。彼らはいろいろ異なる区画や街路に分散し、職業動機とは別の動機によって定め居続けている住居に到達し、レストラン、小売店、大衆劇場、郊外の田舎で、

たしかに彼らに類似してはいるが、職種の特徴によって類似しているのではない人々や家族に、遭遇する。労働者の拡大された家族以上に労働者を緊密な紐帯によって繋ぎとめる社会集団は存在するであろうか。とりわけ家族の構成員の何人かがかれ労働者と同じ都市に居住している場合はそうではなかろうか。しかしこうした家族の構成員、兄弟や従兄弟などは大抵の場合、同一の職業に従事しているどころではない。さらに、食料、衣服等の多種多様の品目が（すべての収入水準のではないが）すべての職種の顧客を有する商店において、また労働者の仕事の種類よりもその金銭的能力からはるかに多く発想し、労働者の好みのみによって導かれるのではなく、より拡大された購買者の一集団の好みに時を追ってますますよく応えることによって、その好みをよりはっきりしたものにし、形づくり、修正する商人によって、店頭に置かれるという事情をつけ加えなければならない。小売商人が一定の職種の顧客を満足させさえすればよいときでさえ（例えば鉱山地方あるいは大きな港）、彼ら小売商人は、他所でも売られている商品でも彼らに提供することをどうしても余儀なくさせられる。そして、同じような支出をなし得る人々に対して、また多分部分的には不確定で身体的な欲求に対して、社会一般によって決定される方向を、最頻の職種を考慮することなく課するのである。

これが必然的な事情である。社会生活が十分に発展しておらず、社会的欲求は社会の最上流階級においてのみ最もよく満足させられるとすれば、労働者の作業およびその結果から引き出される動機はいかなるものであれ、上流階級の支出の決定に何ら介入しない。逆に、上流階級の支出内容は、労働者集団自身の社会意識にとって一つの理想として作用する。もし労働者集団が上流階級の支出内容を自分たちの能力に適合させるべく修正するとすれば、作業条件を所与として彼らの職種の人々の好みに最もよく対応するに違いないものを採用するためではなく、その支出内容を彼らの収入水準にまで縮減することによってである。さらに、同じ収入水準でも複数の異なる支出内容を含み、欲求の重要度の序列があらゆる集団についてそれほど厳密に決定されるわけではないということもあり得る。しかし少なくとも、こうした評価の相違を説明できるとすればそれは、以前の社会的習慣によってか（例えば土木工が昔は農民であるような場合）あるいは異なる性向と嗜好の人々との社会的関係によってか（特に家族を介して、あるいは優劣いずれにせよそうした収入水準の家族との居住の共同によって）である。それは職種の実践によって身につけられた純粹に身体的な習慣、あるいは非社会的な習慣によってでは全くない。

### 第三節

#### 種々の収入源

たとえ労働者がただ給料のみによって生活しているとしても、支出の範囲を決定するのが給料の額であるかどうか、そしてむしろ、給料は労働者の生活費にも消費習慣にも同時に依存してはいないか、ということを決定しなければならないであろう。他方では、同一職種の内部にも非常に異なる給料が見られることも忘れてはならないであろう（■原書

p.247の表を見よ■247に表なし…阿部)。ただし、最もしばしば現れる数字を考慮することによって、各職業について一つの、あるいは二つの、さらにそれ以上の平均給料を計算し、そして多分、給料額に従って職業を分類することも可能であろう。給料の数字そのものがある社会的重要性をもっている。それはある種の労働者集団にとって時に、一種の目印、基準線のようなものであり、それ以下には落ちたくないある水準を彼らに思い出させるものである。従って、一人の人間の職種とその職種の平均給与について正確に知ることは、社会的ヒエラルヒーにおける彼の位置について教えるところ十分である。——実際、地域により時代により同じ分類が通用しなくなる。急激にあるいは徐々にいくつかの職種は見返りが少なくなる。もしそのような職種に従事している人々がこれまで余儀なくされてきた生活の変化に対して反対するとすれば、もし彼らが見返りが小さくなった労働の強度を増大させるとすれば、そして職業的自己愛に因るのであるのか、それはそれまで採用されてきた習慣、生活様式にむしろ因らないのであるのか。職種を変えることが全くできない時にはしばしば彼らは追加的労働、その妻の労働、あるいはその他の手段によって収入を増やそうとする。それにすべての労働者がこうした状態になっている。彼らにとって、支出するときに給料の数字を考慮することはたしかに一つの必然性である。しかし、ある一定量の支出に対処するためにある種の場合には彼らはその収入を増加させることが可能である。

給料が収入の核、(一般的に)最もよく知られた要素であるとしても、労働者がその家計を規制するために計算に入れるのは収入全体である。彼はいかにして支出を収入に対応させるであろうか。確かに稀にはあるが、彼が次のような一定の支出に対して、同じく次のような収入を対応させるという場合がある。すなわち、収入全体は大ざっぱにしか知られておらず、多少とも大きな不確実性をともなっており、また欲求は部分的には無意識的な力であり、人はつねにそれを抑制するものではない故に、支出も同じく概略においてしか予見されない、という場合である。収入を決定するのは支出であるか、それともその逆であるかという問題はいずれにしてもずばりとは解決できない。非常に長期間記帳され、一週間ごとに、少なくとも■一月(一ヶ月?)■ごとにその詳細が公表されるような家計簿があれば、時にはこの問題に答えることが可能であろう。我々にとって本質的なことは次のことに注意することである。つまり、給料というものはひとたび総収入という比較的不確定な一全体の一部分と見なされるや、総収入の中に混じり込んでそれと見分けがつかなくなる傾向を有するということである。換言すれば、人々が給料を見る見方は、労働および特定の作業による収入としてよりも、収入一般の要素としてである。給料のみに限定されている労働者は多分その支出を仲間のそれに準拠して決めるように留意し、家賃、衣服等に給与から同じような出し分を充てるであろうが、給料に加えて別の収入がある場合には、単に総収入が同じ水準の家族の支出を見ているいろいろの支出を思い付くであろう。そして、こうした様々の対象のために支出されるのは総収入の一部分である。

我々はここでは収入とその諸要素については扱わず支出について扱うが、給料と総収入の間の差について一応の概念をつかむことは有益であろう。そのような比較は次の二点に

において役に立つであろう。1. 比較は、どのような場合に世帯が給料で満足するか、あるいはどのような場合に他の収入源をつくり出すべく努力するようになるか、を我々に教えるであろう。後者の場合は少なくとも前途における支出の増大を予想させるものである。2. 比較はいくつかの拡大された集団（職業も給料も異なる労働者からなる集団）における、ある努力をおそらく明るみに出すであろう。つまり、すべてが同じ水準にとどまり、さもないければ彼らをばらばらにしかねないある種の懸隔を除去するための努力である。

第一の点に関して、給料以外の収入の登場という事実それ自体は我々に教えるところ十分ではない。非常に貧乏で、借金をし、他の収入源をつくり出そうという気もない家族が存在する。また、収入で満足してうまく暮らしを立て、副収入のあらゆる機会を逃がさない家族も存在する。この場合、個々の状況が大きな役割を果す。婦人の労働はしばしば、彼女が雇われ得る工場が近くに存在するかどうか依存する。転貸借をする、あるいは下宿人を置く、等の習慣がある都市も存在する。我々が個別的状況に到達し得るのはきわめて個別的な状況の研究と比較を通してであり、また収入と支出との真の関係についてのより正確な把握を通してである（■p.141を見よ■。こうした世帯における黒字と赤字について与えられている指示について我々が述べたこと）。——我々は少なくとも補助的収入を家族構成、その収入の数字、彼らの職業を関係づける（比率）ことができる（アンケートの中でなされていることである）。

まず与えられているのは次の通りである。一般に、(522人の労働者のみを取り上げれば)労働者の主たる給料は全収入の82%である。彼の副収入は2.2%、妻の収入は4.3%、子供たちの収入は2.4%、転貸借の収入は2.9%、他の現金収入5.6%（これは世帯の4分の3以上において見られ、内訳は次の通りである。利子、貯金の使用、借金、売却金、協同組合によって払い込まれる払戻し金あるいは配当金、富くじあるいは賭け事による儲け、ストライキ救援金、旅行見舞金、死亡見舞金、親からの贈与金、等である）、そして現物収入0.4%である。家族構成およびその収入についての章において労働者だけに関するデータが区別して示されていないのは残念なことである。実際、勤め人の<sup>トレチマン</sup>俸給は彼らの収入全体の中で小学校教師の場合を除いて、労働者の収入における給料と全く同じ役割を演じているけれども（81.3%から83.6%）、副収入は全体に僅かである。婦人の収入はさらに僅かである。そして下級の勤め人の場合を除いて、子供の稼ぎは取るに足りぬものであり、そして転貸借による収入も全体にとるに足りない役割しか果していない。逆に、勤め人における他の金銭収入は彼らの収入の8.2%から12.9%を占めており、現物収入は労働者の場合よりも僅かながら多い。しかしながら本質的なことは、補助的収入の割合が労働者と勤め人の場合同じくらいであるということである。他方我々は家族構成ごとの労働者世帯の数を数えた（我々はアンケートが挙げている522世帯ではなく、546の労働者世帯を見出した。これは■後に見るように■、労働者についての我々の定義がやや広いことによる。アンケートのなかでは分類がどのように行なわれたかについて何も述べられていない）、そして、家族構成の各カテゴリーについて、労働者および勤め人の総数に対する労働者数の割合を計算した。この割合は、2人家族の場合69%、3人家族の場合61%、4人家族の場合67%、5

人家族の場合 64%、6 人家族の場合 58%、7 人家族の場合 65%、8 人家族の場合 63%、9 人家族の場合 64%である。変動は僅かであり、アンケートされた全世帯に関して (p.25 に総収入に対する割合で) 与えられている数字を、労働者のみに関しても副収入の総収入に対する比率をほぼ示すものと考えることができる。

総収入に対する賃金<sup>サレール</sup>の割合は、2 人家族の場合かなり大きい (87.2%) のであるが、規則的に低下する (6 人家族の場合には数字が余りにも低くなるがこれは「その他の金銭収入」の高すぎる数字と対応している。この不規則性はこのカテゴリーに入る労働者の割合が著しく少ないことによって説明されると思われる)。ただしこの低下は 3 人家族から 4 人家族に移行するところでとりわけ顕著になる。ここからまた副収入が最も増大し、次いで (比率においても相対値においても) やや減少する。これは同じく「その他の金銭収入」が明らかに増大するところでもある。この収入は 6 人家族および 7 人家族のところまで絶えず増大し、次いで (割合においても相対値においても) 減少する。3 人家族から 6 人家族の場合の転貸借は、相対値について全体に増大し、総収入に対して同じ割合を示し、2 人家族の場合の 2 倍である。子供の稼ぎが一方で転貸借による収入を、他方では成人男子の副収入を、そして最後に婦人の稼ぎを追い越すようになるのは 7 人家族の場合のみである (もっとも子供の稼ぎは当然のことながら絶えず増大するのであるが)。そしてこの追い越しは飛躍的である。こうした動きは次のようにまとめることができよう。2 人家族から 3 人家族に移行するところで増大するのは転貸借収入である。3 人家族から 4 人家族に移行するところで、男子成人の副収入、とりわけその他の金銭収入が (世帯が明らかに年齢的に高くなり) より一層大きくなる。子供が 5 人および 6 人の世帯から子供 7 人の世帯へ移行するところで増大するのは子供の役割である。——婦人の稼ぎに関しては、それは 2 人世帯の場合に非常に高いのであるが、3 人世帯に移行すると (絶対額でも比率でも) 非常に大きく減少する。婦人の稼ぎは 5 人世帯に移行するところで (比率においてはそうではないが絶対額では) 増大し、7 人世帯に移行するところで減少する。婦人はまずはその子供によって働くことを妨げられ、次いで子供の数が増えたときには初めて働くことを余儀なくされ、そして子供の数がさらに増えたときには、多分彼女はもはや働く能力がなくなる一方で、年長の子供たちは稼ぎはじめ、またそうしなければならないので、つまりは働かなくともすむようになる。——この分析から次のことが結果する。すなわち、ここで決定的な役割を演ずるのは家族の大きさだということである。これは収入一般および個々の副収入の増大がとくに欲求の増大に由来するか (これは 3 人ないし 4 人の子供のある家族については真実らしい)、あるいは新たな収入の可能性に由来するか (年齢の高い世帯は多分貯蓄をもっているであろうし、年長の子供たちはすでに働くこともできるであろう) を確認し得なくとも言えることである。——3 人家族から 6 人家族に移行するところで賃金そのものが絶えず増加することは注目に値する。続いて起こる賃金の減少はまちがいになく労働者の老化、および最も多くの子供を抱える世帯はしばしば最も貧乏な世帯であるということに因る。

勤め人<sup>アンプロワイエ</sup>と労働者を同じカテゴリーに統合することは、収入構成を収入総額との関係において研究しようとする際には、重大な問題である。枠組 (これは余りに幅が広すぎるので



あるが)には次のような割合で労働者が含まれている (p.59\*および p.60\*の数字に基づき計算した)。1200 マルク以下 100%、1200 から 1600 マルク 99%、1600 から 2000 マルク 95%、2000 から 2500 マルク 82%、2500 から 3000 マルク 28.5%、3000 から 4000 マルク 11%、である。これらのうち我々が利用できるのはほとんど 2500 マルクまでの数字である (それ以上稼ぐ 142 人の労働者を除いて)。我々は■表III■に基づいてカテゴリーごとに人員の平均数を計算した。それはそれぞれ 3.7 人、4.3 人、4.5 人、4.65 人である。人員数は明らかに収入とともに増加し、あるいは収入は人員数とともに増加する。——1200 マルク以下のところで我々は、成人男子の賃金に対する非常に大きな補助として、相対額においても比率においても非常に高い婦人による稼ぎがあることを見出す。たしかにこの場合家族構成は多少有利ではあるが、このように大きな割合で婦人の貢献が要請されることを説明するのは明らかに収入の低さである。1200 から 1600 マルクのところでは男子の賃金ははるかに重要な役割を演ずる (収入の 88.4%である)。婦人の補助は大いに減少している。それでも 4 人世帯の場合には優っている (そして今扱っているカテゴリーでは世帯人員は 4.3 人である)。またここで男子の副収入が登場する。しかし、転賃借収入 (3%) およびその他の金銭収入によって、総収入の中での賃金、婦人の稼ぎの割合が減少し得るのはただ次のカテゴリー (1600 から 2000 マルク) においてのみである。最後に 2000-2500 マルクのカテゴリーに移行すると、男子の賃金の割合が、絶対額では増大しているにも関わらず、最低 (80.4%) になり、婦人の稼ぎが非常に明瞭に増大し、子供たちの稼ぎも大きな割合を占めるようになる。ここでは婦人や子供に訴えることを余儀なくさせるものはもはや困窮ではない。他方で転賃借収入は減少しない。—— (しかし) 実際には、何か結論を引き出し得るにはこの枠組は幅が広すぎる。

#### 【原著 244 頁の表を挿入】

このアンケートでは職業ごとの収入源泉がとくに研究されている (■表IV■および序論の第五節、p.44\*から p.48\*)。二つの大きな表のなかに 40 の職業について、種々の収入源が平均数で、そして総収入に対する比で、示されている。我々はこれらの表から、すでに以前に取り上げた 23 のカテゴリーについて、欄 1、3、5-11 の数字を引き出し、さらに、平均収入および平均賃金の数字を相対値に変換した (以前と同じような指標として、収入については 1800 マルク、賃金については総収入に対する賃金の平均比率として 1800 マルクの 82%、すなわち 1480 マルクをとった)。我々がとくに注意を払うのは相対値 (欄 2 と 4) および収入に対する賃金の比率 (欄 5) である。

さて、収入は全体として賃金よりも離れておらず、相互に (相対的に) 小さい間隔によって隔てられているように思われる。低い方のカテゴリーにおいては、賃金以外の稼ぎによって収入を増加させるための努力が争う余地なく存在し、高い方のカテゴリーにおいてはこの方向での努力が遙かに小さい。(賃金の場合の) 100 に対して 133、132、126 のような数字は収入については見られない。そして、4 つのカテゴリーが、100 に対して 82、88、

および 91 のような賃金の相対値をもっているのに、平均収入に対して同じ関係にあるのは 2 つにすぎない。——賃金の額に従って整理された世帯を考察することによってかなり明瞭に分けられる、二つの大きな集団を区別することができる。低い集団は鍛冶工のところで終り、その集団においては（木材熟練工と雑役工の場合を除いて）収入を増大させるための努力の方が、単に賃金の上昇による収入の増加という状況を維持する努力よりも大きく、高い集団においては（熟練建築労働者と大工の場合を除いて）前者が後者に全く等しいか（石工と庭師の場合）、あるいは明らかに劣り、そして最も高い四つのカテゴリーにおいては極端に劣る。欄 5（収入に対する賃金の比率）を検討すれば、状況関連の変化については、先の数字のように我々に教えるところはないが、賃金から収入に移行する際に、補助的収入源をつくり出すための努力の減少を非常に正確に測定することが可能になる。この場合、中間帯全体においてこの努力は議論の余地なく存在するが同じ水準にとどまっているように見える（これは 100 と 81、82、83 との間の差によって測定される）。しかしこの中間帯そのものにおいても、下の方では努力が僅かに大きく（ここでは 81、82 の数字が支配的である）、上の方では努力がわずかに小さい（ここでは 82、83 が支配的である）。最初の六つのカテゴリーと最後の六つのカテゴリーにおいては、違いは我々が述べた方向において際立つ。建築労働者と大工はすでにより賃金を得ているけれどもなお一層稼ごうと躍起になっており、熟練木材労働者と雑役工は貧困に甘んじるであろう。一般に次のようにいうことができよう。比較的上流のいくつかの階級、あるいは農民についてさえ多分言えること、すなわち持てば持つほどなお一層持ちたくなるということ、これは最高級の賃金をとる労働者についてさえ通用しない。逆に労働者の場合には、彼が貧困であればあるほど、彼らの賃金が彼らの実際の状況の正確な表現足り得る度合は小さくなる。様々の収入水準の間の懸隔はたしかに存続しているがしかし小さくなっている。これこそまさに労働者階級の統一、数ある徴<sup>しるし</sup>のうちの一つであろう。そして、またこれはこうした研究の全体において収入の数字に付与しなければならぬ決定的重要性の一つの証明でもある。

総収入に対する種々の収入の比率に関してであるが、これは職種の直接的影響を我々に示すであろうか。そして一般に、そのデータを職種ごとに提供している表のなかに、我々は何らかの規則性を見ることができようか。ただ婦人の稼ぎだけでは、余り恵まれていない世帯集団においては比較的高いように見える（しかし収入の数字はそれを説明するに十分であり、他方世帯の様々の構成はこのような研究を容易ならざるものとする）。逆にすべてのカテゴリー（植字工、庭師、船建設工、鍛冶工）における補助収入の高さが見られる。同様に子供の稼ぎの大きさも見られる（熟練建設労働者、港湾労働者、繊維労働者）。転貸借収入の高い二つのカテゴリーが第二の集団（鞍具工、非熟練工）の中に見られる。しかし他のカテゴリー（印刷工、熟練建設労働者、熟練機械工、錠前師）は、絶対額においてはそれと同じ位かあるいはそれ以上の転貸借収入を、相対額においてはほとんど同じくらいのそれを引き出している。その他の金銭収入は、最も恵まれている世帯と最も貧乏な世帯に置いて同じように多い。これらにおいて同じ種類の収入が考えられるのでないことは全く確かである。最も豊かな世帯は貯蓄をもち、最も貧困な世帯は扶助に頼り、

あるいは借金をしているのである。しかしこうした差異は指示されてはいない。そこではまた、職種の考慮が何かを説明するのを見ることはない。

このような傾向をより詳しく研究するために我々は二つの集団の中からいくつかの職種を選定した。収入に対する賃金の比率が高いもの（植字工と錠前師）、その比率が低いもの（石工、壁張り工、ペンキ工）、その比率が非常に低いもの（道路工）、である。■表 I ■を参照しつつ我々は、各家族の員数とともに、各カテゴリーの各世帯の収入とその詳細を調べた。各職業について我々は収入総額に従って世帯を二つの集団に分類し、この二つの集団のそれぞれについて平均収入、平均賃金、総収入に対する各収入源の平均比率を計算した。■P.248 の表■はこのようにして作成されたものである。

#### 【原著 248 頁の表を挿入】

直ちに我々を驚かせることは、各職業において、収入に対する賃金の比率が、収入の多い場合の方が少ない場合よりも、低いこと、すなわち収入が多い場合、賃金以外の収入源がより重要な役割を果すことである（錠前師の場合を除く。錠前師の場合この割合は同じのままである。）このことから次のことが結果する。すなわち、各職種の内部においては、賃金ではなく総収入を考えるならば、低賃金の労働者と高賃金の労働者との間で差がより大きく現れることである。——実際このことは先に指摘したこと、すなわち低賃金の職種は高賃金の職種よりも補助的収入源をつくり出すためのより大きな努力を示すという指摘と何ら矛盾するものではない。

我々が今考察しようとしている集団は、この表の中に以前と同じ現象を見出すには余りに小さすぎ、そこでの世帯構成もまた余りに違いすぎている。しかし次のような一般的動向はこの表を通してでも認めることができる。植字工と錠前師の集団、石工と壁張り工の集団、ペンキ工と道路工の集団を二つずつ取り上げよう。賃金だけを考えよう。そしてまずは高い賃金を考えよう。第一の組（これは第二の組に比べて収入は少ないが賃金は高い）においては、賃金の高い世帯は、収入を増やすために、第二の組よりも努力せず、第二の組においては第三の組よりも努力しない。さて賃金の低い方を見てみよう。第一の組（これは賃金も収入もともに第二の組よりも高い）においては、賃金の低い世帯はその収入源を増やすために、第二の組よりも努力するところ小さい。しかしこの点に関する違いは賃金の高い世帯の間の違いよりも著しくはない（総収入に対する主要賃金の比率（%）は平均 88-79（高賃金）に対して 90-85（低賃金）である）。そして最後に、第二の組と第三の組の低賃金の世帯を比較すると、総収入に対する賃金の比率は平均して同じくらいであることが分る。かくして我々の一般的指摘はまた検証された。——しかし我々の遭遇する例外および特殊な事例の検討から次のことが想定される。すなわち、いくつかの職種において最も恵まれている労働者はその収入源を増やすためにかなりの努力をするが、その他の労働者はその能力が劣るということである。このことは、職種は一つの統一的まとまりとみなされてはならないこと、なぜならそこには賃金の異なる諸集団が存在し、行動様式

も異なるからであること、を証明している。見掛けよりも複雑なこうした動向すべてを明確にするためには、総収入に対する賃金の比率についてのより広範な研究が必要であろう。しかしこれは我々の目的とするところではない。

我々はとくに、労働者世帯を職種で分類すること、あるいは収入構造が同じような職種のいくつかのまとまりによって分類することはほとんど不可能であることを証明できたかと思っている。我々は次の点を見た。すなわち、まだ例外と曖昧さを含んではいるがいくつかの規則性を認めることができるのは、収入あるいは賃金によって、さらに家族構成によって分類することを通じてのみだという点である。この規則性の問題では、職種は収入および家族構成の異なる様々の世帯を含んでおり、そこでは我々は最大の多様性に遭遇することになる。非常な低賃金で員数の非常に少ない家族をもった労働者（道路工の最初の集団）と非常な高賃金で員数の非常に多い家族をもった労働者（壁張り工の第二の集団）はその収入の大きな部分を婦人の労働から引き出している。5人以上から成る家族はすべて（石工、壁張り工、道路工の第二の集団）、その子供たちによってさらに一層助けられている。転貸借による収入については、子供の多い家族にも少ない家族にも、また低収入の家族にも高収入の家族にもともに、あつたりなかつたりする。

しかし同時に我々は、職種によって異なるが、賃金格差の作用を緩和するための、しかし収入を均等化するためではなく、最も裕福な集団を他から分かつところの懸隔を埋めるための、そして最も貧困な集団を減少させるための努力を見てきた。——ところでこのような結果は、もし我々が支出、欲求、および世帯に（世帯たること自体によって）かかる（租税）負担金、（また他方）社会的に規定される生活水準——一方の人々は例外的努力によってそれに到達し、他の人々はそれ以上に昇ることにはただらとしか努力しない——についての観念——これは広範な集団に広まれば広まるほど明確であり、個々人に作用する力が大きい——を全面に置かなければ、説明することが困難であると思われる。それゆえ我々がこれから扱おうと思うのは世帯の支出についてである。

しかしその前にこうした結果を、鉄鋼労働者のアンケートに基づいて得た結果と比較してみなければならぬ。この表は収入の配分を職業ごとに平均で、そして総支出に対する比率ごとに、示している表に従って（p.35 と p.37）つくられており、配分そのものは収入のカテゴリーによって（p.42）分けられている。我々は世帯を（アルファベット順ではなく）その賃金額に従って分類しただけであり、総収入（以前と同じく指標は 1800 マルク）に対する相対値と賃金（指標は 1400 マルク、収入に対する賃金の平均比率はここでは 80% である）に対する相対値を計算した。

#### 【原著 251 頁の表を挿入】

まず大きな収入カテゴリーを見てみると、平均収入は平均賃金よりも相互に間隔が大きく（欄 4 と 6）、これは我々が予期したところと反対である。しかし我々は同じく次のことも確認することができる。すなわち、収入と同じく家族の大きさも非常に著しく増大する

こと（欄 2）、特に第一カテゴリから第二カテゴリ、第四カテゴリから第五カテゴリへの移行のところでそうであり、そこはまさしく、賃金の系列から収入の系列へ移行するに際して差も最大になるところである。それゆえ我々はここに、すでに指摘したところの影響、すなわち家族の大きさの収入構成に対する非常な影響を見ることができる。収入の影響を分離して見るためには異なる収入で類似の家族構成を有するいくつかの集団を比較することが必要であろう。これは職業ごとの収入配分の研究が（ある一定の程度においてのみ）我々に可能ならしめるところのものである。我々は今度は収入が賃金よりも相互間で差が開く度合が著しく小さいことを新たに確認した（欄 4 と欄 6 の数字を見よ）。船建設工と鉄鋼労働者は例外をなしており、余りに小さすぎる集団であり、除外してもよい（同様に少数である彫版工と事務員も、それらを除去しても結果はほとんど変わらないであろう。しかし彼らは唯一非常に高い賃金を体現している人たちであり、一つの集団にまぜ合わせても不都合はないであろう）。なおさらに、船建設工は家族が最小であり、この事情は彼らとその収入を増加させるためにもはや努力しないことを証明するであろう。それでもやはり、他のいくつかの集団に関しては、両極の間の差が 148（最初の二つの集団を除けば 118）から 87 ではなくて、今度は 130（110）から 91 になっていることも事実である。最後の四つの職業を見てみれば、金銀細工師の場合と同じく、収入を増加させるための努力が盛んであることが明らかになる。ブリキ工から鍛冶工のところで収入増加のための努力は鈍化する。旋盤工、彫版工、事務員においてはその努力はますます弱くなる<sup>(1)</sup>。

- (1) 次のように述べられている。「船建設工の場合には、家族の他の構成員の稼ぎの比率は最も低いものの一つである。このことはアンケートされた船建設工がかなりしばしば病気であったことによって説明される。夫の病気のために彼らの妻たちは働くことを妨げられたのである。彼らはまた最大比率の援助費を受領している。」鉄鋼労働者の場合にも事情は同じである。なぜならこうした経営の存在する地方においては経済的諸条件の結果として、その他の収入源が存在しないからである。金銀細工師の場合には逆に家族による稼ぎの割合は最大である。しかしながらこれらの家族の構成は平均より劣っている。これらの家族の場合、婦人に対して、働くための多くの機会、彼女たちが最大限利用するところの機会を提供するのはまさに職種であると思われる。

男子の副次的稼ぎや転貸借収入と同じく、婦人の稼ぎ、子供の稼ぎは区別されていない。同じくここで採用されている枠組ではその詳細も不明瞭なままである。余り恵まれていない世帯に移行するにつれて援助費の割合が増大するのを認めることができる。特に最後のいくつかの世帯に移行する際に、もし家族構成員による稼ぎの割合が同じ割合で増大するとすれば、それはいくつかの例外を留保してのことである。実際ここでは枠組の定義が余りに不十分である。それゆえ（いまのところ）我々の一般的結果にとどまっておこう。

## 第四章

### 家族構成及び総支出の異なる労働者世帯における支出配分

#### A. ドイツ帝国統計事務所アンケート

##### 一. データの加工

我々は表 I を全面的に加工しなおさなければならなかったのであるが、その目的は一、労働者のみを取り上げること、二、表 III よりも細かな枠組みで、労働者をその総支出に従って分類すること（この点については p.176 の我々の見解を見よ）、三、労働者をその家族構成によってばかりでなく、en quets で表現されているその構成員の数及び年齢（p.176 を見よ）に従って分類すること、である。以下は我々の取った手続きである。我々は労働者の世帯のみに関係するデータを、同数の別々のカードの形につくり直した。我々は、自ら労働する独立の産業的生産者及び郵便配達人を労働者のうちに含めた。鉄道、郵便局、商店の事務員と同じく警官は労働者には含めなかった。我々はこの区別の原理をすでに第一部で示してある (1)。

- (1) 郵便配達人の仕事は小包や手紙を運搬することであるが、これらにあつて依然として第一の位置を占めるのは機械的に行なわれる身体的活動である。重い荷物を狭い空間で扱う荷揚人足とは違って彼ら郵便配達人は広い空間で非常に軽いものを分配しているのであるが、これはほとんど程度の差に過ぎない。

警察官は監督者のカテゴリーと軍人のカテゴリーに同時に含まれるが、労働者のカテゴリーには全く含まれない。我々は組合の事務員のあるものは労働者として扱った（彼らは依然として旧式の労働者であり、<sup>トラヴァニール</sup>労働者の生活様式と習慣とを保持している）。より精密な指示が欠けているので我々は商店のある種の <sup>アンプロワイエ</sup>雇員 を除外しなければならなかった。彼らはおそらく「ボーイ」<sup>ギヤルソン</sup> に他ならず、特に荷物を運んだり、使い走りをしたりしているものと思われる。なおまた、我々の扱っている集団のなかでずば抜けて優勢なのはまさしく狭義における労働者である（郵便配達人は 9 人に過ぎない）。

我々はまずすべての労働者世帯を家族構成人員数に従っていくつかのカテゴリーに分類した。次いで我々は各カテゴリーにおいてその支出総額の数字に従って世帯を分類したが、あらかじめ画定された枠組（例えば 1500 マルクから 1600 マルク、1600 マルクから 1700 マルクといった）に強いてはめ込むことはしなかった。我々はむしろ最も頻繁に現われる支出総額の数字を考慮し、その周辺のものを別にし、事実に対して人為的枠組みをかぶせないようにした。このような作業はたしかに少なからぬ試行錯誤を含み、またこのような分類は時に恣意的であり得る。しかしこれが現実の分節化過程自体を指針として進むための、そしてある統一性の様相をもって現れてくる可能性のある集団を分割したり削除してしまったりしないための唯一の手段である。しかしながら我々はこうした集団を作り上げるために総支出額の数字にのみ依拠したわけではない。それに加えて、総支出に対する各種支出の割合についての各世帯ごとの指標を手にしたので、総支出が等しい集団のなかで各種支出の割合が深刻かつ恒常的に異なることを確認することができた。我々

はこのことからいままなお着想を得ており、とりわけ（家族構成が同一のひとつのカテゴリーにおいて）支出が同一の世帯が十分多数存在するときには、それらの世帯が食料費或いは住居費に少なくしか支出しないか、或いは多く支出するかに従ってそれらを二つないしは三つの集団に分けた（食料費と住居費は、総支出に対するそれらの割合がいろいろな集団を最もよく特徴づけるように思われるものである）。我々がこのようにして作成した表——これは巻末付録に載せてある——のなかで、A、B、C、D、E、F、という文字で示されているカテゴリーは家族構成の同じものをすべて含んでいる（2人、3人、等）。A1、A2等で示されているものは同じ家族構成で総支出が接近している家族、そして食料費及び住居費の総支出に対する割合が同じように接近して家族をすべて含んでいる。なお、こうした分類作業のなかで我々は次の三つを除外した。一、人口二万人以下の都市に住んでいる四つの労働者世帯（数が少なすぎることによる）。二、例外的と思われる四二世帯。食料費の異常な大きさ（これはしばしば下宿人の存在によって説明される）、或いは食料費の余りに著しい少なさ、余りに高い或いは低い家賃（大抵の場合は転貸借による）、また特殊的理由（精神的社会的欲求のために家賃と同じくらいの支出をする世帯、このような世帯はある支出全体が余りに少なかったり或いは多かったりして、どのような集団にも正しくは入れることができない）によるもの。三、以上のもの除外した後、300マルク以上の転貸借収入を示した19世帯（我々は、163の労働者世帯が転貸借収入をもち、そのうち104世帯は100マルク以上の収入を得、40世帯は200マルク以上の収入を得ている）。最初547世帯であった労働者は結局482世帯となった。

平均について述べたときに我々はすでに次のことを言っておいた。すなわち、平均値なるものが少数の事例しか代表していない場合には、この事例があり得る限り接近しているということが重要であること、なぜなら事例が少数である場合には、変則的事例或いは例外的事象の影響が緩和されることなく、逆に平均値を狂わせてしまうからであること、である。それゆえ我々は事例のうちで、ほかの一定数の事例との類似によってある社会的に確定された集団に結びついているとは思われないものはすべて厳しく除外することを躊躇しなかった。このような諸事実の分類において我々は、事実なるものは実際いくつかの集団のやり方と傾向を表しているのだという考え方によって動かされてきている。世帯の12%だけが何らかの理由によってこの我々の規則に対する例外をなし、我々の言う集団に入り得ないと思われたこと、これはすでにして我々の確信を強めるものである。これらが除外されれば、それは我々の経験のなかから曖昧さと混乱の一大要素を除外することに成功したことになる。転貸借収入のある世帯について我々はそれらをすべて除外することは考え得なかった。我々はただ、家賃のほかの支出に対する割合が転貸借によって例外的なものになったもの、また家賃のほかの支出に対する割合が平均的なままであっても、生活上の安楽のための何かの条件を変則的に犠牲にすることによって、或いは余りはっきりしない何かの思惑によって転貸借による収入が高くなっているもののみを除外した。しかしドイツの大都市の労働者の間ではその住居の一部を転貸借する習慣は広く普及しており、我々はこの収入源の介入がさほどでもない限りすべてのそうした世帯を取り上げなければならなかった。

たしかに我々が算定した数値はまさしく算術平均である。しかし諸要素を分類するに際

して——我々は諸要素からそれ（不明）を取り除かなければならなかったが——我々は統計学者パウリー（Bowley）が「最頻帯<sup>(1)</sup>」（la region de plus frequence）と呼んだ別の概念からも着想を得ている。この最頻帯という概念がどのような現実に対応するかを、ある比較によって、最もよく理解することを得せしめているのはレクシス氏（M. Lexis）である。彼はおよそ次のように言う。我々が一定数のボールを一定点に落ちるように投げたと想定せよ。あるものは目的点のこちら側に落ちほかのものはその向う側に落ちるであろう。そしてボールが投げられる出発点とボールが落ちた落下点との距離をすべて加算し、ボールの数で、加算された結果を割れば本来の意味での平均が得られるであろう。しかしまた、地面を表わす一枚の紙の上に点をつけてボールが落ちたすべての場所を示し、点の数が最も多く相互の距離が最も近い帯域に注意を向けることもでき、その際最も離れているものを除外し、そのほかのものをその最も近い集団に結びつけても構わない。死亡率の問題に適用されているこの方法は、平均寿命の古典的算定とは全く異なる結果をもたらした。我々が着想を得ようとしたのはこの方法からである。

(1) Bowley, Elements of statistics, London, 1902, p.119

同じ平均が同時に、少数の大きな数字が存在する一群にも、平均的な数しか存在しない別の一群にも対応することがあり得るであろう。一つないしは二つの例外的な数が、それが非常に小さい場合であれ非常に大きい場合であれ、いくつかの限られた群に対応する平均値を全く歪めてしまうこともあり得る。しかし我々はこうした平均値を吟味するための、すなわち平均値が代表している諸事例が平均値の周辺に十分に規則的に分配されているかどうかを見るための、かなり簡単な手段をもっている。それは中央値という方法である。「その各構成要素が高さとか賃金のような測定可能な属性を有する人間或いは事物の集団を扱う場合、我々はその集団を測定するのにこうした量の一つを取り上げることができる。この取り上げられた属性の大きさの順に並べられた全構成要素を想定しよう。その系列のまさに中央に位置する構成要素の大きさは中央値と呼ばれる。<sup>(1)</sup>」もし、ある一つの集団において平均値が中央値に非常に接近している場合には、また平均値が中央値に接近している程度に応じて、平均によって表現されている諸要素は平均値の前後に均等に配分されているものと信じてよい。それゆえ我々はまず、扱っている諸集団のそれぞれについて平均総支出を計算し、対応する中央値を対比的に記入した。その際我々が確認できたことは次の通りである。すなわち、(52の事例中) 14の事例において中央値と平均との差は10マルクないしはそれ以下であること、29の事例においてそれは25マルクないしはそれ以下であること、そして、50マルクを越えたのは9つの集団においてのみであること（そのうちの5つは最後の8つの集団つまり最も子供の多い家族のうちに含まれている）である。同じことなのであるが、下は中央値と平均値の比を示すものである。

A22…… 97%

A 4……104%

C41……102%



C52……101%  
E33…… 97%  
F21……104%  
F22…… 94%  
F 4…… 97%  
F 5…… 98%

(1) Bowley, loc.cit., p.124

差はまさにこれらの事例において非常に小さいことが分かる（5%を越えるのは一つだけである）。それゆえ我々はこれらの平均値を根拠ある表示と見ることができ、またこれらの集団を何ら人為的なものを含まない、現実的なものとみなすことができる。このことは、これらの集団の間にも各カテゴリーのなかにも、大きな間隔の部分が存在するだけに一層、指摘することが重要である<sup>(1)</sup>。この間隔部分が印象的である理由はまさしく、こうした平均を有する世帯が決してでたらめに散らばっているわけではなく（でたらめに散らばっているような場合には平均値と中央値ははるかに遠く離れているであろう）、実際一つのまとまりをなす傾向があること、すなわちその支出によってこうした平均そのものに接近することにある。

(1) カテゴリーAにおいては1400マルクから1660マルクへと突如移行する。カテゴリーBでは、1420マルクから1630マルクへ、また、1660マルクから1900マルクへ、カテゴリーCでは1260マルクから1450マルクへ、次いで1660マルクへ、さらに、2110マルクから2480マルクへ、カテゴリーDにおいては1380マルクから1640マルクへ、1700マルクから1960マルクへ、次いで2350マルクへ、カテゴリーEでは1500マルクから1820マルクへ、1830マルクから2090マルクへ、さらにカテゴリーFでは1400マルクから1710マルクへ、1770マルクから2230マルクへ、移行する。

en quetsの家族構成及び構成員の年齢の表示についてであるが、これの重要性は争う余地がない。我々はquetsの総計のほかに、世帯ごとのその平均数を計算した。カテゴリーA（子供のいない世帯）を除いて、家族構成が同じものでも、集団が異なるにつれて大きさがますます変化することが分る（すなわち、その子供たちは、一つの集団から次の集団に移る場合平均年齢が同じではないことが分る）。子供が1人の世帯については、まだ隔たりが非常に大きいというわけではない（de 7 quets 75 a 8.35、これは2歳半から8歳半に対応する）。これは疑いもなく、子供が大きくなる前に大抵の場合次の子供が生まれ、そのことによってその世帯は次のカテゴリーに移行するからである。子供が2人の世帯については隔たりは増大する（9.25から10.60、つまり子供の平均年齢3歳半と10歳）。そして子供3人の世帯のうちですでにして、quetsの平均数が10.50を越えない一集団（D33）が見出される。すなわち10.50から13の間である（子供の平均年齢は3歳半と11歳半である）。この次のカテゴリーの（7つの集団のうち）3つの集団は13quets以上ではない。ただ家族

構成のみに注目して設けられたカテゴリーは、子供の年齢を計算に入れると、ますます浸食しあい重なり合う。この新しいカテゴリー（子供 4 人）においては、隔たりは 12.50 から 14 の間である（子供の平均年齢 5 歳と 9 歳）。最後に、子供が 4 人より多いすべての世帯を集めた最終のカテゴリーは、すべての集団において明らかに先行のものよりも大きな quets を数える。しかしこれらの集団の間隔はなお一層大きい（14.4 quets から 21.6 quets。これらの家族のすべてが子供 5 人を数えると想定すれば、子供の平均年齢はいくつかの極端な集団においては、6 歳と 20 歳になる）。——他方しかし我々は各世帯の quets の数を、いま言っている意味での集団を形成するためにという目的で、計算することはしなかった。我々はこの数と平均を、一たん集団が形成されてから計算したのである。我々はこれまでの研究によって、家族構成と収入額とがこの場合重要な役割を演ずることをよく知っていた。しかし我々は、我々の分類において子供の年齢を考慮に入れることが本質的に重要であるとは思わなかった。いずれにしても我々は（余りに多くの集団を作ってしまうことを避けるために）世帯についての少数の重要な特徴にのみ注目することを余儀なくされていたので、まず世帯構成を計算し、その区分を訂正したり補充したりすることを差し控え、各集団における quets の平均数を計算することによって、世帯分類を行なった。

## 二. 家族の大きさと支出の配分

我々はまず家族の大きさが支出配分に及ぼす影響を測定することに腐心してきた（家族の大きさということで子供の数とその年齢の双方を意味するものとして）。すべての世帯を、その各々に見出される quets の数に従って分類することも可能ではあったであろう（が、非常に長い時間を要したであろう）。我々としては、我々が構成した集団（巻末の表）に注意を集中し、それらを、各集団について計算された quets の平均数に従って分類する方がより好都合で有益であると考えた。実際、我々が見たように、これらの集団が同質的であり、またそれらが収入及び支出のある種の明確な類型に、同じく明確なある種の家族構成と結合しつつ対応する以上は、我々はそれらの集団に対して、ある具体的現実的全体として対することができる。我々が浮き上げようとしているのは社会的傾向であり、それが現われるにちがいないのは、まさにこれらの集団そのものにおいてであるだけに、一層この方法は有効なのである。——性質の異なるものの影響、特に収入の違いに由来する影響（及び我々が研究を保留しているものの影響）を除外するために、我々はまずすべての集団を二つのカテゴリー（総支出 1800 マルク以下のものとそれ以上のもの）に分けた。我々が世帯集団をその平均規模に従って分類し、同時に第三番目の表において、先の二つのものの総額を提示しているのは、これら二つのカテゴリーのうちでのことである。我々は平均総支出、食料、衣服、住居、暖房照明、その他の費用の平均額のほかに、これらの平均値に対応する相対値、および総支出に対する個々の支出の比率を計算した。相対値の計算に際しては、我々は pp.282-283 の表（諸世帯のその支出総額による分類）——これは本質的に重要な表である——におけると同じ指標（数値 100 に相当する）を採用した。指標の計算方法については該当箇所述べるであろう。

\*\*\*\*\*表 262-263\*\*\*\*\*

まずあらゆる収入の世帯について、支出の比率を検討しよう。食料費の総支出に対する比率は最初の五つのカテゴリーでは 50%から、続く五つのカテゴリーでは 53%及び 54%からほとんど離れないことに我々は驚かされる。10-10.9 quets から 11-11.9 quets にかけて一つの急激な飛躍が見られる。これは多分 11-11.9 のカテゴリーにおいては平均総支出が低いこと（相対値に注意せよ）によって部分的に説明されるであろう。この平均総支出額の低さ自体は、このカテゴリーが平均支出の低い世帯を比率的に非常に大きく含んでいることによる。しかしながら、このカテゴリーに関しては、1800 マルク以下および 1800 マルク以上についてデータが示されている表の部分を参照しよう。我々はそこに 1800 マルク以下の部分は食料費が 54%、1800 マルク以上の部分はそれが 55%であることを見出す。特に、2 人ないしは 3 人の子供のいる世帯が問題である。この急激な飛躍は一部は子供 2 人の世帯から子供 3 人の世帯への移行を表わしていると思われるが、同時に一部は、3 人の子供が、或いは少なくともそのうちの 1 人 2 人が非常に年齢が低い世帯から、彼らがより年長になっている世帯への移行を表わしているようにも思われる。

こうした部分のそれぞれについて、全体支出に対する食料費の割合の変化を検討してみよう。

最初の部分（1800 マルク以下の支出）においては、まず食料費の割合の高さを指摘しなければならない。これは特に全体支出の額の低さ、すなわち 10 から 10.9 quets および 14 から 14.9 quets という数字によって説明されるように思われる。子供が多くしてしかも収入が低い場合には食料費が相対的に非常に大きくなることは当然である。こうしたケースを除けば、残るのは食料費について、連続していて顕著な二つの上昇点があることである（収入はかなり接近している）。つまり、7-7.9（■7.9の間違いか？）のところから 8-8.9（■8.9の間違いか？）のところへ移行する際（年少或いは年長の子供一人の世帯）および 9-9.9 のところから 10-10.9 のところへ移行する際（一般的数字に関して我々が上に指摘した上昇点の前）である。11-11.9 のところから 12-12.9 のところ（子供 3 人の世帯から子供 4 人の世帯へ移行）で急激な上昇点が少なくとも一つある。これは全体支出の急激な低下点に対応しており、急激な上昇点を部分的に説明する（ただし部分的にのみであるが）。実際、12-12.9 のところから始まる最後のいくつかのカテゴリーにおいては上昇は非常に緩慢に見える。それでもやはり上昇の事実は確かであり、それは子供の数によって説明される。なぜなら、16-17.9 のカテゴリー（これは子供 5 人およびそれ以上の世帯を含む）においては、非常に高い全体支出に対して、絶対値（相対値の欄を見よ）においてもほかのカテゴリーよりもはるかに高く、比率においても非常に高い食料費（高い収入には通常低い食料費比率が対応するのであるが）が対応しているからである。

第二の部分（支出 1800 マルク以上）においては、食料費 100（相対値）を越え 108 を越えないカテゴリーのみを取り上げれば、まず上昇が緩慢であることが見出される（さらに食料費が 100 以下の世帯については、同じような動きをたどることができるけれども比率の数字はほんのわずかこれらの数字を上回る、すなわち 47-48-49 である）。次に急激な飛躍が一つある。一般的数字について我々が指摘したものである。（一般的数字は 49-52.2。中間の数値 55 はやや低い全体支出に対応する。たしかにこの数字がこれほど高いのは大部分家族規模の増大による。そしてその故にこそ我々は急激な上昇点をこの点に置くのであ

る。)そしてこの急激な上昇は後続の категорияにおいて安定する(51.5、52.8、中間の数値は47.3、これは対応する総支出の非常に高い数値151によって説明される)。最後に、第一の部分と同じくこの部分においても、非常に高い総支出を有する最後の category は絶対値においても比率的にも、明らかに最も高い食料費を示す。家族構成の影響は収入規模が及ぼすはずの影響を凌駕するのである。

要約すれば次のようになる。最も貧困な category に属する世帯について言えば、低年齢の子供1人の世帯から年長の子供一人の世帯への移行に際しての最初からの急激な上昇、そして比較的恵まれた世帯については、category が移行するにつれて起る緩慢な、しかし連続的な上昇、さらに子供2人の世帯から三人の世帯への移行の際の(或いは3人の子供のうち1人ないしは2人が非常に低年齢の世帯から3人の子供がみな比較的年長である世帯への移行の際の)非常に顕著な上昇、である。これがまさに決定的な点であり、特に比較的恵まれた世帯において、食料費がふくらむ時期である。この点を離れるとこの食料費の上昇は鈍化し、収入が非常に増大するにも関わらず食料費が比率上非常に明瞭になお増大するのは子供の数が最大の世帯においてのみである。

食料費が(あらゆる不規則性にも関わらず)このように一般的かつ連続的に上昇する事実には、家族規模が増大するにつれて総支出に対する住居費の割合が顕著に減少すると

■ (ここに表 2 6 2 2 6 3 ?)

いう事実が対応している。他方、これらの支出の総額が表わされている相対値を検討すると、これらの支出の様相にある違いが存在することに直ちに気づかされる。食料費の絶対額の増大は全体においても第二の部分においても非常に可視的であるが、第一の部分(支出1800マルク以下)においてははるかに見えにくい。第一の部分においては食料費は比率においては増大するにも関わらず、やはりできる限り制限されなければならない、総支出の運動全体に従わなければならないのである。住居費の比率上の減少は、全世界帯において、相対値ではほとんど現われない。最も収入の高い三つ(■の category —— 記者■)に対応する数値を除けば、実際次のような一連の数字が見られる。つまり、93、89、85、79(これらはたしかに次第に減少している)である。しかし次は、92、86、86、である。このような減少は収入1800マルク以上の世帯に対応する相対値においてもほとんど見ることができない。住居費の比率上の減少が一層可視的であるのは別のところである(最初の三つの集団、続く三つの集団、最後の三つの集団を同時に観察すればこの減少を認めるに十分である)。このことは、子供の数が増加するにつれて住居費を制限しなければならない必要性——これはすべての世帯にかかってくるのであるが——は、余りに恵まれていない世帯の上にはるかに重くのしかかることを示しているように思われる。

住居費の全体支出に対する比率を検討しよう。最初の三つの category においては家族の規模が大きな役割を果しているようには見えない(これらは子供のない家族、或いは平均8歳ないしは9歳以下の、しかし大抵は低年齢の子供一人の家族である)そしてほかの支出に対する住居費の割合は、(全世界帯に関係する数値においては)平均収入とまさに反比例の関係にある。次いで、これらの世帯から子供2人の世帯に移行するところで(平均収入はどうであれ)比率の明確な減少が一つあり、子供2人の世帯から子供3人の世帯に、

或いは低年齢の子供 3 人の世帯からもっと年長の子供 3 人の世帯に移行するところで第二の明確な減少があり（これは食料費に関して我々がすでに指摘した断層である）、最後に子供 4 人の世帯から子供 5 人或いは年長の子供 4 人の世帯に移行するところで、やはり明確な第三の減少がある。この低下運動は最も多く家族数を含む最後のカテゴリーにおいても続き、激しくなる。——ところで、世帯を二つの部分に分けて見てみよう。第一の部分（支出 1800 マルク以下）においては、第三のカテゴリー（年長の子供 1 人の世帯）以上では住居費の比率の明確な減少が見られるが、この減少は、同じ箇所に記されている。総支出に対する食料費の比率の増大に対応している。なおさらにこの減少は完全には強まらない。続く第四のカテゴリーにおいては、住居費はやはり依然として最初の二つの数値より小さく、平均収入および食料費と密接な関係にある。すなわち住居費は収入の増減と共に増減し、食料費が減少するときには増大し、食料費が増大するときには減少する。最後に、最終の二つのカテゴリー（子供 5 人およびそれ以上の世帯）においては、そしてその前（子供 4 人の世帯）においてすでに、住居費のその他の支出に対する比率の減少は強まり激化する。——第二の部分（訳者注：支出 1800 マルク。原文 *dépense de 1.800 marks*、多分支出 1800 マルク以上、の意味で、*de plus de 1800*…の間違いであろう）においては、最初の三つのカテゴリーに関してはその全世帯について指摘したように、住居費は支出全体とまさしく反比例して変動する。次に来る連続的な低下運動を理解するためには、総支出がほとんど同じ水準にあるいくつかのカテゴリーに対応する住居費の額を比較する必要がある。第二の数字を第四の数字に、次いで第六の数字に、第三の数字に第五の数字に、次いで第七の数字に比較してみる必要がある。この場合にも我々は、この低下運動を中断させるような、或いはむしろ加速させるような、第五のカテゴリーから第六のカテゴリーへの移行に際しての例外的に激しい低下を確認することができる。この低下は同じ移行（子供 2 人の世帯と子供 3 人の世帯、或いは低年齢の子供 3 人の世帯と年長の子供 3 人の世帯）に際してすでに指摘した同じように例外的な上昇に対応している。——要するに、二つの部分における本質的な違いを指摘することができる。余り恵まれていない世帯においては、収入に対する住居費の比率は、住居費は収入の増減と対応して増減するという形をとるように見える。しかしこの運動は、家族構成の影響によって、二つの時点において妨げられ、そして逆転されさえする。一つは子供一人の世帯への移行の時点であり（急激な低下ではあるが強固な動きではない）、今一つは子供 4 人及び子供 5 人の世帯への移行の時点である（明確でしかもますます顕著になる低下）。より恵まれた世帯においては、住居費の収入に対する比率は、住居費は収入が減少するときには増大する、そして逆の場合は逆となるという形を取るように見える。しかし、子供 2 人の世帯と子供 3 人の世帯との間に住居費の急激な低下があり、これが住居費の運動を妨げる。そして次に続くいくつかのカテゴリーについては、住居費の比率がより小さいことは食料費の比率がより大きいことと一定程度関係している。両方ともかなりの部分家族の増加によって説明される。

衣服費は、相対値を参考にすれば、強度においてではなく方向において支出総額の上下運動に対応する、交互的上下運動によって動いている。実際総体としては連続的な上昇運動があり、これは、最初の三つの数字、続く三つの数字、等を同時に観察すれば十分認め得ることであり、この運動はこれらの集団の家族の増加に帰せられる。第一の部分においては、最初の六つのカテゴリーについて顕著なこの上昇は、その後では続かない。11-11.9

の世帯（子供 3 人）については衣服費はその場合絶対値において最も高いように見える。しかしそれは次に大きく低下する。第二の部分（恵まれた世帯）においては、衣服費の推移は全世帯についての推移と同じようである。すなわち衣服費は変化する総支出にかなり接近した線をたどり、全体的上昇線をたどる。付け加えなければならないことはただ次のことである。すなわち、このカテゴリーの最も裕福な世帯については上昇ははっきり現れるのは、12-12.9 のカテゴリーから次のカテゴリーへの移行（低年齢の子供 3 人および 4 人の世帯から年長の子供 3 人および 4 人の世帯への移行）の際のみだという点である。——しかし、衣服費の総支出に対する比率を検討してみよう。その場合、全世帯について衣服費は総支出に対して同じような比率（10%から 11%）にとどまる傾向があることが認められる。総支出が明らかに上昇するときにはやがて急激で一時的な上昇が起きる（最初は総支出 76 から 92 に移行するところ、次は 96 から 107 に移行するところ。このような動きは最後には総支出の明らかな上昇といった理由なしに起きるようになる。すなわち 14-14.9 から 16-17.9 のところ、つまり子供 5 人の世帯への移行の際である）。——しかし、この比率の変遷は各部分を検討するときには全く異なったものになる。第一の部分（余り恵まれていない世帯）においては、衣服費の比率は最初の二つのカテゴリーから第三のカテゴリー（年長の子供 2 人の世帯）に移行するところで明らかに増大する。10-10.9 のカテゴリーから次のカテゴリー（年長の子供 3 人の世帯）へ移行するところでそれは再び増大するが、続いて非常に低くなり、最後のカテゴリーを除いては、それ以前の水準に上昇することはない（最後のカテゴリーは子供の数が最大であるが収入もはるかに高い）。第二の部分（恵まれている世帯）においては、我々は全世帯について見られる傾向と同じような傾向を再び見出す。最初の非常に軽微な上昇運動（第一の部分におけるよりもはるかに目立たない）を除いて、13-13.9 のカテゴリー（かなり年長の 3 人及び 4 人の子供のある世帯）に至るまで、比率の数値は 11 を離れることがほとんどない。しかしこのカテゴリーを離れると、或いはすでにこのカテゴリーと共に、この比率の数値は増大し始め、しかもますます増大する。——かくして要約すれば、貧困な世帯は、それが年長の子供 2 人、次いで年長の子供 3 人をもっているときには、衣服のために（比較上）最も多く（davantage）支出しなければならない。しかし、それらは、3 人より多くの子供をもつようになると、この支出をますます減らさなければならなくなる。恵まれた世帯においては、衣服費は最初まずほとんど一定（つまり、直前先行のいくつかの世帯のうちでただ一つのカテゴリーのみが到達し得る水準）にとどまり、次いでかなり年長の子供 3 人の世帯及び同じような子供四人の世帯になるとそれは増加し、しかもますます増加する。

暖房照明費に関しては我々には強調主張（■？）すべきほどのことはほとんどない。この費用については、（総支出が同じくらいの集団を比較しても）、家族規模が大きくなるにつれて、絶対値において増大するとも言えないし、他方、減少するとも言えない。暖房照明費はしばしば、非常に収入の異なる世帯について似たようなものであり、また収入が似たようなものであってもそれは異なることがあり、しかもこの？（1157■「間」？）に規則性はなく、また家族規模がこうしたあり方を説明できるわけでもない。——総支出に対するこの支出の比率は全世帯について一定である。それが少し上昇する場合（4.7 及び 4.6）、それは非常に乏しい収入の世帯のいくつかのカテゴリーにおいてである。このことは第一の部分（余り恵まれていない世帯）においても同じである。この比率は 4.8 及び 5 から離れ

ることはほとんどない。この比率が 4.1 まで 2 回低下しているのは、この第一の部分において最も平均収入の大きな、二つの世帯集団においてである。恵まれた世帯については変動はもはやほとんど目につかない。しかし、この恵まれた世帯の場合、集中しているのは 4% である（すなわちこの支出の比率はやはり最も収入の多い世帯の場合低いということである）。この比率が最も下がるのは子供のいない世帯においてである（3.25%）。低年齢の子供一人の世帯ではこれは少し上昇する（4.35%）。これら二つの偏差は高低合（■「相」か？）重なって大きな間隔となり、これは疑いもなく家族規模の大きさに関連させ得る、暖房照明費における唯一の変動である。子供が生まれてからはこの支出は増大するであろう。第三の 카테고리から第四の 카테고리にかけての今一つの偏差（比率の増大）はほかのところよりも小さいものであるが、総支出の減少——これは非常に明瞭である——によってたしかに十分説明され得る。総支出が 107 から 151 に移行する際の暖房照明費の減少は、同じく総支出のかなりの増大によって十分に説明され、また前者が増大する場合には後者の減少によって説明される。——要するに、恵まれた世帯において、子供のいない世帯から低年齢の子供一人の世帯への移行の際を除いては、総支出に対する暖房照明費の比率は、家族規模の大きさには全く依存していないように思われる。

「その他の支出」に関しては、一連の相対値がすでにして非常に明瞭に、家族規模が大きくなるにつれてこの費出が減少する傾向にあることを示している。実際収入が同じ（或いはほとんど同じ）いくつかの集団を比較してみよう。一つの事例、14-14.9 quets の家族に関するものを除いて、すべての場合において「その他の支出」の減少が見られる。しかしこの一つの例外は全く、第二の部分のなかで最も恵まれている同数の quets の六世帯に起因するものである。そして、二つの部分を通じてこの「その他の支出」の減少がすべての 카테고리において観察される。比率を参照しよう。すべての世帯に関係する数値について、観察される場所は同じである。この支出の下降運動は 11-11.9 の 카테고리（年長の子供 3 人の世帯）へ移行するところで特に一層顕著であるが、下降そのものはほかのすべての 카테고리について指摘され得る。そして、この支出は 16-18% から 12-13% まで下降するのであるから、減少は顕著である。しかし、この低下が始まる時点は、部分ごとに分類された数値を検討することによってはっきりさせることが可能である。余り恵まれない世帯については第四の 카테고리（収入の違いも考慮に入れる場合には第三の 카테고리）からこれは始まる。第四の 카테고리（子供二人の世帯）及び第五の 카테고리（低年齢の子供三人の世帯）への移行のところで低下は非常に大きい、次いでその非常に低い水準（約 12.5）からはもはやほとんど動かない。恵まれている世帯に関しては、低下は第五の 카테고리（年長の子供二人の世帯及び低年齢の子供 3 人の世帯）のところで始めて始まるが、次の 카테고리（年長の子供三人の世帯）に移行するところで特に顕著である。この低下運動は（上記六世帯に関する例外を除けば）緩やかに続き、余り裕福でない世帯において支配的な低い水準にまで突如下落するのはただ最後の 카테고리（子供の数も収入も最高の世帯）においてである。——要するに、雑費は家族規模が大きくなるにつれて減少するのであるが、余り恵まれていない家族についてはその減少がはるかに速い。恵まれていない家族は年長の子供 2 人をもつようになるや、大いに雑費を減らすことを余儀なくされ、三番目の子供をもつようになるまでできる限りそれを圧縮することを余儀なくされる。恵まれた世帯においては、家族の増大そのものがすでにして一定の低下をもたら

すのであるが、低下が顕著になるのは特に 3 人の子供が年長になったときである。しかしながら、雑費の割合は、家族が大きくなるにつれて減少し続けるのであるから、可能な限り節減させられるというわけではない。

これまでのこうした分析全体から今結論を引き出すことは余り容易ではない。しかし次の二点はいずれにしても議論の余地のないことだと思われる。まず第一に、支出の様々なカテゴリーの変動は一連の連続的な小さな増加或いは減少を通じて緩やかに生じることがあり得る。そしてこのことは疑いもなく次のことの徴しである。すなわち、世帯があれこれの支出を増大させるにせよ減少させるにせよ、その場合に例外的な特別の努力はしないということ、ほかの欲求を満足させるために制限しなければならない一つないしはいくつかの欲求は、余り大きな苦痛なしに圧縮されることがあり得るということである。他方では、突然の変化、ある水準から別の水準への急速な移行が存在する（我々はこの場合、後続するカテゴリーにおいて引き続き存続し強化される変化、つまりそのような増加ないしは減少についてのみ述べている）。この変化は逆に真の犠牲と解釈されなければならない。余りに緩やかに満足させられた欲求、或いは余りに圧縮させられた欲求は、それが完全に満足させられるためには、そしてますます度を昂じて満足させられるためには、今度は他の欲求を圧縮すること、しかも例外的に圧縮することを強要する。なぜならこうした欲求は生長するに違いないからである。ところで、家族に子供が生まれることから、そして子供が大きくなることから発生する新たな欲求は、我々の経験では、次の二種類の変化を結果する。あらゆる収入の世帯について、食料費が突如増大しなければならない瞬間が存在する。しかしこれは恵まれない世帯とその他の世帯について同じではない。恵まれない世帯においてはその瞬間は最初のころにあり、次いで連続的な増加があるが、しかしそれは非常に緩やかである。第二のその他の世帯については、食料費の増大は最初は緩やかでありほとんど取るに足りず、あたかも、子供がいなくともすでにして食料費は大きく、子供たちの欲求を満たすためにとて特別に何ら重大な犠牲を強いられることが少なくとも最初のころはないかの如くである。しかし子供の数が増えると、食料費がはっきりと増大することは免れがたく、またしかも、その後で新たな犠牲を払う欲求をもはやもたないようになるほどに増大することも逃れがたい。住居費も同じように、そして特に住居費は、二種類の世帯において異なる時点で、すなわち食料費が突如増大する時点において、突如減少する。そしてこのことはほとんど同じ時点において、「その他の支出」についてもあてはまる。この支出はそのときまでは低下していないが、突如節減されるようになる。

しかし、二種類の世帯（恵まれないものと恵まれているもの）において家計の均衡が以上のように変化する時点についてこのように違いが存在することのほかに、同じく好奇心をそそる別の違いが存在する。一つは衣服費にかかわる。恵まれていない世帯は、食料費と同じ時期に衣服費を増やさなければならず、しかもそれを突如の形で増やさなければならない。そうした世帯が衣服費をできる限り高く押し上げてしまうと、次いでそれは緩やかに減少線をたどる。何故にか。それは食料費が再び少し増加することを免れがたいからであり、「その他の支出」を減少させることがもはや不可能だからであり、さらに住居費をもっと節約することは望まれ得ないからである。恵まれた世帯においては事情は全く異なる。最初は、そして食料費が緩やかにしか増加しない限りにおいては、衣服費は変動しない。これは疑いもなく、恵まれた世帯においては衣服費がすでに十分に大きく従って両親



はそれを減らすことが可能であり、また家族が大きくなったときでもそれを増やさないで済ますことが可能であることの徴しである。しかし、食料費を増やすために住居費と「その他の支出」を減少させた後では、衣服費は緩やかながらやはり増えはじめる。恵まれた世帯においては食料費の増加は衣服費の極端な節減を余儀なくさせない。その他の相違点としては次のようなものがある。住居費は、恵まれない世帯においては最初の急激な減少の後、ゆっくりと低下を続けるが、他方、恵まれた世帯においては食料費の増加に対応する形での住居費の明確な減少の後、同じ水準に留まる傾向がある。「その他の支出」については、逆のことが起きる。恵まれない世帯においては「その他の支出」は最初に明らかに減少するが、その後は変動しない。恵まれた世帯においてはまず最初明らかに減少し、次いでゆっくりと減少し、そして後、ますます減少する。これら二つの逆の動きは次のように解釈されるべきである。恵まれた世帯において住居費がもはや減少しないとすれば、それは住居費がもはや減少させられないということでは決してなく、このような世帯は「その他の支出」を節減することを選ぶということである。そしてそうした世帯はこれが可能なのである。恵まれない世帯において「その他の支出」がもはや減少しないとすればそれはこうした世帯の意思によってでは決してなく、その圧縮可能の限界に達してしまっているということである。

我々はこのような経験の後で、様々な欲求の重要性についての秩序をこれから確定することができるであろうか。この秩序が収入により、また家族構成により変化することはあり得る。——すでにいく度か指摘したが、子供 2 人の世帯から子供 3 人の世帯へ、低年齢の子供 3 人の世帯からより年長の子供 3 人の世帯へと移行する際に、急激な変化が起きる時点が存在する。これは各種の欲求の重要性についての再評価に対応している。しかし、急激な変化もそのほかの変化も共に考慮し、すべてのカテゴリーを検討すると、次のことを指摘し得る。すなわち食料の欲求は少なくとも我々が注意した時機においては、住居の欲求に優位し、しかもその優位を維持するということである（なぜなら恵まれない世帯においては住居費はもはや増えず、減少を続けさえするからである）。食料の欲求はほとんど常に衣服の欲求より重要でもある。第一の部分（恵まれない世帯）においては、食料費は最初衣服費よりもより明瞭に増加し、さらに増加しつづけるが、衣服費は減少する。恵まれた世帯においては、食料費はまず最初に増加し、しかも非常に大きく増加する。そして今度は衣服の欲求が増大しはじめる場合、それは食料費を犠牲にしてではない。食料費自体は減少しないからである。衣服の欲求と住居の欲求は他方、共に「その他の欲求」よりも重いように思われる。なぜなら、恵まれない世帯についていえば「その他の欲求」は最初から可能な限り圧縮されており、他方衣服と住居の欲求は最後のカテゴリーに至るまで減少しつづけるのであるが、また恵まれた世帯において、衣服費がとにかく増大し、住居費がもはや変動しないのは「その他の欲求」の犠牲においてであるからである。——衣服の欲求と住居の欲求についてその重さの順序を発見することはもっと難しい。衣服の欲求がより重要であるようには見える。貧困な世帯においては、住居欲求が減少するときにまず衣服欲求が増大し、次いでそれは住居欲求よりも減少の割合がはるかに小さい。裕福な世帯においては衣服欲求は最終的に増加するが、住居欲求は減少する。確かに出発点において住居欲求が衣服欲求よりも裕福に満足させられていなかったか、その結果として住居欲求がこうした制限によりよく絶えることになるといったことがないかどうかはまだ分ら

ない。仮に出発点においてはすべての欲求が満足させられている度合が等しかったとすれば（これはたしかに少し漠然としているが）、重さの序列は次のようになるであろう。食料、衣服、住居、「その他の欲求」、である。しかしこの結果は説明を必要とする。

我々はこれまで、二大別された二つの部分に含まれている世帯はその各々の内部において同じ種類に属し同じ階級に属しているかの如くに、また、支出の系列は一つの集団についてその子供の数が増える度合に応じての進化そのものを表わしているかの如くに述べてきた。しかし、これほど不確かなことはない。我々が到達した結果からは事態を違ったふうに解釈しなければならないであろう。我々は、収入とその構成について検討した際に、基本的な賃金に付け加えられる（男子の、妻或いは子供の）副収入の重要度は家族そのものの増殖と緊密かつ恒常的な関係のうちにあることを見た。従って、ある時点から（そしてある意味では多分最初から連続的に）、以前の収入ならば第一の部（貧乏な世帯）に属したであろう多数の世帯が第二の部に移行する大きな可能性がある。なぜなら家族と共に収入も増加するからである。それゆえ、第一の部に残るのはかなり早くから、最貧の世帯、新しい十分な収入源を見出しえなかった世帯のみとなるであろう。食料費と衣服費の（比率における）突然の増大は、この場合、この第一部のなかで貧困度の最も低い世帯の離脱によって説明されるであろう。そしてこれらの世帯が恵まれた世帯の部に移行することは貧困度の最も低い世帯の支出のなかに見られるいくつかの変化も同じく説明するであろう。なぜなら、そうした世帯が同じ収入をもつということからそれらの習慣と欲求が同じであるということが結果するわけではないからである。食料費の突然の増大と、衣服費の緩やかな増大、そしておそらくその他の支出の緩やかな減少もその原因は彼らの習慣と欲求とに帰せらるべきであろう。逆に最初から、そして子供の誕生まで、第二の部にいた世帯は考えられ得るほどに深刻にはたしかにその支出の配分を変化させはしなかった。このことは平均収入が最も高く、食料費と衣服費が縮小されており、その他の支出が常に非常に高いようなケースを検討すれば明らかになる。——かくして三つの大きな集団が存在するであろう。最も貧困な集団はその家族が大きくなるにつれて、食料費を増加させるためにその他の支出をすべて絶えず減少させることを余儀なくせられるであろう。「その他の支出」は最初から可能なかぎり縮小せられるのであろう。平均的な世帯は、子供が生れるにつれて、或いは子供が大きくなるにつれて、住居費と「その他の支出」を減少させることによって、食料費と衣服費の二つの支出を増加させることになるであろう（この「その他の支出」は、程度はいろいろではあるが、極限までそれを減少させるに足る程度には重い）。最後に、恵まれた世帯は食料費と衣服費の割合を全く（或いはほんの僅かしか）増大させないであろう。これらの世帯は住居費と「その他の支出」を高い水準に維持する傾向があるであろう。これが我々が認めるところでは、直接には確かめることのできない仮説である。我々は恵まれた世帯のうちで、あれこれの収入を以前はもっていなかったものと、もともと持っていたもの、新しい欲求の圧力によって収入を増やしたものと、収入は増やさずに何らかの欲求を満足させるために別の欲求を減らしたものとを区別することができない。しかしこのような説明は全面的に事実と一致する。それはまず次のことによって真実性を得る。世帯が総支出によって分類されている表（当書 p.282 の表）を参照すれば、家族規模は収入の増大と共に増大することを確認し得る。すなわち、1200 マルクから 1299 マルクの収入のものについての *quets8.9* から、それは、2200 マルクから 2399 マルクの収入の

ものについての **quets13.8** および **12.6** に上昇する。この一つづきの **12** のカテゴリーのうち例外はほとんど三つしかない。これは世帯において家族が増大するときには真実の努力が存在すること、および我々の言う平均的集団が全体のなかで重要な位置を占めていることの徴しである。同じように我々の仮説を強化するものは、我々が示した突然の変化を別の形で説明することの難しさである。支出の配分がこのように全く変わるのが子供が 3 人のとき、年長の子供が 3 人のときであるのは何故か。まさにこの数字にはいかなる社会的表象と社会的必要とが対応しているのか。我々はこれらについては全く何も知らない。

■（——は入るか？）——しかしその代り次のことは大いに認め得る。すなわち、家族の増大と共に収入を増加させようとする持続的な世帯の努力は、この時点から、それらの大多数を、我々が二つの部の間に引いた境界線（1800 マルク）の上方に上昇させるということである。

この説明が認められるならば、各階級における家族の増大の支出分配に対する影響は次の如くであろう。影響は下層階級において最も顕著であり、食料費の増大に特に顕著に現れるであろう。食料費は（約）52%から 59 ないしは 60%にまで上昇する。この食料費は中間階級においては 50%から 54 ないしは 55%までしか、また恵まれた階級においては 47%から 49 ないしは 50%までしか変化しない。

衣服費は下層階級においては最初少し増加し、次いで大きく減少する。中間階級においては絶えずゆっくりと増加する。上層階級においては同じ水準にとどまる傾向がある。

住居費については、下層階級においてはそれは最も減少し、中間階級においては減少の度合が小さく（そして特に頻度も小さい）、上層階級においては同じ水準にとどまる（或いは減少してもごく僅かである）傾向があるであろう <sup>(1)</sup>。

- (1) W・アシュレー氏 (M. W. Ashley) は、*The progress of the German working classes in the last quarter of a century* (London, 164p., 1904) のなかで次のように書いている (p.33)。「何人かの統計学者は一般法則として、労働者階級においては（支出に対する）家賃の比率は収入が減少するときには家族の規模に関わらず増大すると (Schwabe の法則といわれるもの) 認めている。他方非常に注意深い現代の観察者たちは、これが全然正確ではなく、貧困階級にとっては家賃はとりわけ家族の規模に依存すると言明している。」彼は注記してつぎのように付け加えている。「これは Toynbee Hall, Whitechapel の M.W.H. ビヴァリッジ氏 (M. W. H. Beveridge) の見解である。Mansion House の失業救済基金事務所 (Unemployed Fund) が集めたデータに基づいて彼は、ある一定の階級において家賃と家族員数との間に存在する緊密な関係を明瞭に示す表を作成した」。これは我々の経験の結果と一致している。

最後に「その他の支出」は下層階級においては最初からきわめて低く、減少することが不可能であろう。逆に中間階級においては減少し、恵まれた階級においては（高いところで）同一水準にとどまる傾向があるであろう。

### III. 総支出の値と支出の配分

いまや我々は金属労働者のアンケートによるデータを同じ方法で研究し、家族の規模が

支出配分に対して及ぼす影響についてそれらが何を教えてくれるかを問うこともできる。しかし二つのアンケートについてすでに示したように、方法と枠組みの相違が存在し、我々としては当面統計事務所のアンケートによるデータに限定し、この経験のなかで、支出総額（これは一定程度平均収入額と一致する）と、各支出カテゴリーの総支出に対する比率との間にいかなる関係が現われるかを追求したい<sup>(1)</sup>。

- (1) これらいろいろの数字の比較を容易たらしめるために、我々は底の一線の上に立つ一連の長方形によって、支出総額に対する各種支出の比較（p.283を見よ）を示した。この図は一本の太い線で区切られた二つの長方形を含んでいる。上の長方形の長い辺（垂直線）は総支出すなわち 100 である。水平部分、1100、1200、等は総支出 1100 マルクから 1199 マルクまで、等の家族カテゴリーを表わしている。総支出に対する各支出の比率は、図上方の底の線を基にして測られている部分（暖房照明費、衣服費、住居費）と、図下方の底の線を基にして測られている部分（その他の支出と食料費）とがある。——（絶対値における）世帯ごとの quets の数は下方の長方形のなかでこの長方形の下辺から三番目の線を基にして測られている。

我々はまず、付録についている表によって quets が 10 以下か以上かによって集団を二つに分けた。そしてそれぞれを 200 マルク間隔で（1200 マルクから 1399 マルクまで、等）、平均収入によって分類した。たしかに最初の検討の際には、10 および 11 の quets の家族までは家族構成が全体において（すべての世帯について）支出の配分に対し著しい影響を及ぼさないように思われた。しかし我々に先立つより綿密な研究によって、10quets の家族と 11 quets の家族との間で家計の均衡について生じる変化を違ったふうに解釈しなければならなくなった。それゆえ我々はこの表を再録することを不必要と判断した（その表で我々は平均値、相対値、総支出に対する比率を計算した）。

\*\*\*\* ■ 1 1 9 9 頁の グラフ 2 8 1 と表 2 8 2 \*\*\*\*

我々は、別のやり方で求めた数字の様相についてその表がもたらし得る偶然的な解明点のみを指示することにする。他方、諸世帯を、総支出を 200 マルク間隔で区分する枠組みのなかに分けるのでは不十分であると思われ、我々の表では少なくとも 100 マルク単位で平均総支出が区別されている。我々は（不十分さが確認されている）第一の表の総額を再録した。なぜならその総額は二つずつ加えられた我々の新たなカテゴリーの総額でもあるからである。そこから引き出し得るものを我々は検討するであろう。——本書 p.262 の表の場合と同じように、平均値を計算した後で、我々は 1800 マルクから 2399 マルクまでの支出総額のカテゴリーに関して各種支出の平均を指標として（すなわち 100 として）とり、計算された平均値を相対値に換算した。なぜならこのカテゴリーは系列全体のなかで中心的な位置を占めており、世帯数も十分に大きいからである。もし我々が単純に全世帯の平均値を計算していたならば、我々の数字は（比較的裕福なカテゴリーよりもはるかに多い）貧困カテゴリーの支出を一層多く表わすものとなったであろう。これは比較をはっきりしないものとするであろう。他方我々は各カテゴリーについて総支出に対する各種支出の比率を計算した。

我々は出発点として有名なエンゲルの法則<sup>(1)</sup>をとり、この法則が我々の経験においてどの程度まで妥当するかを究明することが可能である。一、収入が高くなればなるほど食料費に割かれる支出の比率は小さくなる。しかし同時に食料費は絶対額においては増大する。我々の表では、相対値の系列は絶対額におけるこのような増大を申し分なく表わしている。1800 マルクの世帯におけるこの食料費の低下は非常に規模の大きな家族から規模の小さい家族への移行によって説明される。2400 マルクから 2600 マルクの世帯についてはこれは非常に少数である。比率の減少も同じく明瞭である。■（段落あり？）

1800 マルク以上の全世帯（但し 2600 マルクの 9 世帯を除く）が、食料費の比率については、支出全体がもっと少ないすべての世帯よりも低い。他方、1800、1900、2000 マルクの世帯、2100、2200、2300 マルクの世帯、そして最後の四つの世帯をそれぞれまとめれば、食料費の比率は段を追ってわずかに減少することを確認できる。しかし 1700 マルク以上を支出しない世帯については、食料費の比率はある時は増大しまたある時は低下するのであるが、（上昇についても下降についても）支配的な傾向なるものは確認されない。これは多分、家族構成の異なるものを含む集団の間で比較が行なわれることに起因するのであろう。間隔が 100 マルクごとではなく 200 マルクの表を検討すれば、食料費はまず 54.6%から 51%へ、そして 42.5%へと絶えず減少し、次いで確かに上昇する。集団に含まれている家族が 10 quets 以下か以上に従って集団を分けると<sup>(2)</sup>、第一の部においては（やはり 200 マルクごとに数えられる）カテゴリーは食料費に関して実際次のような比率を示す。つまり、53.3、52.5、51.6、49.3、47.5、48、である。第二の部においてはこの比率は、57、58.8、55.4、53、52、51、42.5、53、52、である。他方、最後の二つのカテゴリーにおいては家族ごとの quets の平均数は他におけるよりも非常に明瞭に上回っている。これこそまさにエンゲルの法則の輝かしい確証とすることができる。——さらに、quets の平均数やその変化も示している図を参照するならば、食料費の運動を曖昧にしている不規則性（線の最初の三分の一および三分の二あたり）は家族構成の違いによって説明される。家族構成が大きくなる時には食料費は低下し、またその逆も成り立つ。それにもかかわらず食料費が収入に比例して変動するという一般傾向は十分に確認される。

(1) 下記 p.471 と注を見よ。

(2) 我々が再録しても無益と判断した表のこと。

二、エンゲルはまた、衣料費の比率は収入の如何にかかわらずおおそ同じ水準にとどまる、と言う。衣料費に関する相対値の系列を検討すれば、それが総支出よりも速く増大すること、そしてその上昇を中断させる一定数の停止、また低下さえ存在する（これは食料費の場合よりも著しい）ことを我々は確認できる。食料費のカーブよりもぎくしゃくしており、とりわけ支出 1200 マルク以降においては著しい（それまでは食料費のカーブにかなり近いところにいる）。しかし逆に行程全体で見れば住居費よりはなめらかである。——衣料費の比率を示す図を参照してみよう。我々はただちに、衣料費の比率は全体として増大することを確認することができる。衣料費の水準は支出 2000 マルクの世帯移行は、そしてほとんど常に、前の水準を上回っている。その上、一定数の不規則が存在する。衣料費

は一方では食料費のカーブに見られる不規則性としばしば関連しているが、これ自体は家族構成によって説明され得る。衣料費のカーブの五つの最小値のうち最初の二つ及び最後の二つは食料費のカーブの最小値に対応している。他方、支出2000マルクの世帯以降では、衣料費の運動と住居費のカーブとの間には終始逆の関係が存在する。一方が低下する時には他方は上昇する。——衣料費の全体としての増大は総額数値からも見える（表の下の部分を見よ）。そこでの衣料費は、比率で9.8、8.6、10.9、11、11.7、12.8、12、12.6、である。——最後に、10quets以下の家計においてはそれは9.6、8.5、10.6、10.2、12、11.4、である。その他の世帯においては10.2、8.9、11.3、11.4、11.6、13、12、12.6、13である。上昇する傾向がたしかに存在するが、それはしかし連続的な形ではなく、逆転があり、ある時には停止するのが見られる。衣料費は部分的には食料費と緊密に結びついているが、他面では衣料費そのものに固有の法則に従っている。衣料費の比率は食料費や住居費、また「その他の支出」のようには変化しないが、しかしすべての収入水準について「おおよそ同じ」というふうでは決してない。

三. 住居、燃料、照明のための支出の比率はあらゆる収入水準についておおよそ同じにとどまるであろう。——住居費についてみてみよう。家賃の上昇運動は、相対値を検討すると、二つのカーブに表れる一連の急激な上昇と下降を通して行なわれる。但しこの二つのカーブはほとんど平行しており、一方は最大値を経由し、他方は最小値を経由する。支出2000マルクの世帯までは、住居費は衣料費のカーブと同じように速く上昇するが、それに続くカテゴリーでは速さがぐんと落ちるようになる。大抵の場合住居費のカーブは食料費のカーブとは逆の方向を向いている。住居費のカーブは、1800マルクから1900マルクへ、1900マルクから2000マルクへ、1900マルクから2000マルクへ、そして1300マルクから1400マルクへ、2200マルクから2300マルクへ移行するところで同じ方向を向いている。ところでこれらの世帯においてはquetsの数は相互に同じままにとどまっている（これらの世帯と比較された他のほとんどすべての世帯については、こうしたことは同じような程度では起こらない）。家族規模が増大する（或いは減少する）たびに食料費は、絶対値において増大する（或いは減少する）、が、住居費の方は減少する（或いは増大する）ということが起り得る（実際、1100マルクから1200マルクへ、1200マルクから1300マルクへ、1400マルクから1500マルクへ、1500マルクから1600マルクへ、1600マルクから1700マルクへ、1700マルクから1800マルクへ、2100マルクから2200マルクへ、2300マルク及び2500マルクから2600マルクへ移行するところでこれを確認することができる）。家族構成がここでは決定的な役割を演じている。——しかし比率を参照しよう。総支出に対する住居費の比率はほとんど常に総支出に対する食料費の比率とは逆の方向に変動する。全体としては、住居費の比率は支出2000マルク以上の世帯については、やはり、支出2000マルク以上の世帯の場合よりも低い（訳注：両方とも2000マルク以上、となっているのは、多分間違いで、後者は2000マルク以下、と書くべきところであると考えられる）。2000マルクのところから住居費は食料費に接近するであろう（両方とも「その他の支出」の増加を可能にするために比率においては多分減少する）。しかし細部においてはほとんど常に（1100マルクから2000マルクのすべての世帯、2400マルクから2700マルク、3000マルクから3100マルクの世帯）一方の上昇は他方における、比率上も相当な下降に対応し、またその逆も成り立つ関係にある。——全体としての減少は（表の下の方の部分の）総額数

字から見られるように思われる。以下は比率の推移である。17.1、17.4、17.4、17.6、17.4（支出 2000 マルクから 2199 マルク）、15.8、19.5（3 世帯のみ）、15.2、14.4、である。しかし、世帯を二つの集団（10quets 以下及び以上）に分けると我々は全く別の結果に到達する。第一の集団においては、住居費の比率はむしろ増大する傾向を示す。17.3%から 19%及び 18.1%へ、次いで 19.2%及び 18.8%となる（最後の比率 12.2%は八世帯における低下を示している）。第二の集団においては、住居費の比率は同じくらいのところにとどまる傾向を示す。すなわち、16.7%、14.8%、16.6%、16.5%、16.4%、16.6%、19.5%（10 世帯）、15.2%、14.4%、である（しかし最後の二つのカテゴリーにおいては、家族は比較的裕福ではあるけれども、著しく規模が大きく、このことは食料費の上昇にも表れている）。——それぞれの表から我々は新たな結論を引き出すことができる。してみれば、これらの事実がいかに複雑であるかを見ることができる。家族規模が大きくなるときに住居費の（絶対額における）減少。総支出に対する住居費の比率が、食料費の比率と同じく、全体として減少すること、但し、ほとんど常に逆方向の二つのカーブをもつこと。少数の世帯については住居費の比率の非常に僅かな増大。ある一定の支出額（2400 マルク）までは、そして家族が余り大きくならない限りにおいては、多くの世帯において同一基準に、しかし直前よりは低い数字にとどまる傾向。エンゲルの法則が検証されるのはこの最後の場合においてのみであり、そしてこのような限度においてのみである。実際彼は食料費と住居費との間にしばしば現れる緊密かつ本質的な関係を考慮に入れなかった。——暖房照明費については、これは我々のすべての表において収入が増加すると共に顕著に減少する。すなわち、全世帯については 5.3%から 3.7-3.6%へ、10quets 以下の世帯については 5.6%から 3.4%へ、10quets 以上の世帯については 5.1%から 3.6-3.7%へ減少する。それは絶対額においては控え目に増加する。それは住居費とも家族構成とも関連的には現われない。ここでもまたエンゲルの法則は当てはまらない。

四. さらにエンゲルは言う。収入が高くなるにつれて雑費の比率が大きくなる。事実、この支出は絶対額では総支出よりも非常に速く増加する。しかし雑費のカーブを 2300 マルクの世帯のところまで止めて見てみると、そのカーブは衣料費のカーブよりも速く上昇するということはない。しばしば停滞、低下が見られる。支出 1500 マルクのところの一つ下降があり（住居費も低下する）、これは家族規模の明らかな増大に対応している。1700 マルクのところでの下降についても事情は同じである（下降は住居費のカーブについても見られる）。2000 マルクのところでの下降には逆にその他のすべてのカテゴリーの支出における明らかな増加が対応しており、2300 マルクのところでの下降には食料費と住居費の明らかな増加が対応している。——比率を参照して見よう。全体として、総支出に対する「その他の支出」の比率の明らかな増大が存在する。2100 マルク以降では一つの例外を除けばすべてのカテゴリーについて、「その他の支出」の比率は 2100 マルク以前よりも大きい。これの変動は他方家族ごとの quets の平均数及び食料費の比率の変動と非常に緊密な関係にあるように思われる。「その他の支出」は食料費が低下するときに増大し、またその逆も成り立っている。これは 1100 マルクから 1200 マルク、1300 マルクから 1400、1500、1600、1700、1800 マルク、2300 マルクから 2400 マルク、2500 マルクから 2600、2700 マルク、3000 マルクから 3100 マルクのところまで目立っている。——（表の下の方の）総額数字においては、全体としての増加は次のような比率から明らかに見て取られる（quets の平均数

が15を越える集団に関連している最後の二つを除く)。すなわち、13、14.5、14.4、15.4、16.8、17.3、22.3、15.6、16.8、である。同様の増加が平均10quets以下および以上の世帯の集団のところで目立っている。双方の集団における増加が連続的でないことはたしかである。1400マルクから1799マルクの第一の集団においては、比率はほとんど変化しない(15.7%及び15.5%)。第二の集団においてはまさに同じとってよい(14.5%及び14.4%)。この場合192世帯が問題になっており、まさに1400マルクから1500マルク及び1600マルクから1700マルクのすべての世帯について、我々の表においては大きな変動が見られるのであるから、こうした全体的な結果の単純さに欺されてはならない。それゆえエンゲルの法則は大まかな集団に限れば成り立つように思われる。

要約すれば次のようになるものと思われる。収入の階程を昇るにつれて他の支出に対する食料費の比率は減少する。住居費の比率は僅かの数の世帯については増大する。ただし他の世帯については一定である。「その他の支出」は増大する。衣料費も増大する(但し住居費と同じ時点においてはでない)。暖房照明費は漸減傾向にある。概略次のようにいい得る。すなわち収入の増加は、人間有機体の直接的維持と更新とに関わらない欲求、その社会的性格がより明瞭な欲求をより裕福に満足させることを可能にする。——しかしこれは一般的にのみ真実であって、消費者としてみられた労働者の実際の傾向についてはほとんど教えるところはない。労働者の資材が大きくなるにつれて、労働者が単に栄養状態をよくする(食料費の絶対額が増えるのであるから)ことにのみ気を使うのではなく、住居や娯楽等の状態をもよりよくすることに意を用いることは確かに当然である。エンゲルがやったように、このようなまことしやかに代えるに科学的正確性をもってすることはたしかに無駄ではなかった。しかし分析の経過のなかで我々は、非常に一般的な結果と並んで、細部についての一連の確認事項は事実が実際にははるかに複雑であることを示しているのを見た。特に、指摘された例外事項は、それらが個人的事例を対象とするのではなく集団を対象としているだけに、また従ってそれらも社会的傾向に対応しているだけに、一層重要性を有するものである。

このような例外は食料費の数字のなかで最も少数であり、それは家族構成によって説明され得ると我々は見た。しかし我々が特に採り上げたもの(200マルク間隔の支出カテゴリーを対象とする)は、多分余りに一般的であろう。より限定されたカテゴリーを検討すれば、収入の増加にともなう食料費の規則的減少はしばしば他の傾向によって妨げられ遅らせられるように見える。——住居費が大抵食料費とは逆の方向に変動するとしても、収入2400マルク以下の僅かの数の世帯についてはそれが(比率において)同じ水準にとどまる傾向を有することも我々は見た。住居費は食料費が減少するごとにほとんど増大するけれども、全体としては減少すること、これは多分家族の増大によって説明されるであろう。しかし、それはどの程度か。また別の傾向が介在してはいないか。——衣料費はその変動の一部については食料費と緊密に結びついているように思われた。しかしそれはまた固有の運動をもってしていることを我々は付言したい。この場合もまた一般的数字は諸傾向の間の葛藤を確認させはするが、諸傾向を区別し測定することは決してできない。——最後に、雑費の比率の増大は決して連続的ではない。雑費を食料費或いは住居費の運動と関連づけること、またあるときは家族構成と関連づけること、これはあり得る説明を示唆することではあるが、それを説明することでは決してない。我々はこのような事実の複雑さを、支



出配分と家族構成の間の関係の研究のなかですでに定式化した仮説に基づいて、説明すべく試みようとしている。我々は支出配分が家族規模と収入規模から機械的に結果するとは考えない。ある種の生活類型（あるタイプの住居、服装、娯楽の種類、がまずは思い浮ぶ）についての（我々の考える意味での）社会的表象が存在するとすれば、構成も収入も非常に多様な家族がその支出は同じように配分する、或いはその傾向があるということを予想しなければならない。このことはしかし逆に、こうした生活類型そのものが社会的思考においていろいろな家族の収入状況および構成を考慮に入れて定義されることを妨げるものではない。類型が決定されるのはこのような形においてのみなのである。しかし、生活諸類型はひとたび社会的表象の対象となるや次のような力を獲得しなければならない。すなわち、類型を受容した世帯、或いは（なんらかの理由で）収入と家族規模の増減にも関わらず自分たちはその類型に従うことができるしまたそうしなければならないと認めた世帯、しかもその収入と家族規模はもはやある生活水準には実際上対応しないような世帯の多数がそれでもなおそれに固執する、といった力である。こうした状況の最良の証明は、収入の非常に異なるものについても同一の支出配分計画が見られること（家族の規則的増減が欲求を比率上増減させるようにも見えない）、或いは（非常に接近した収入水準でも）非常に異なる家族構成のものについても同一の支出配分が見られること、である。このことはデータをこのように作成すれば確認することができる。

p.282 の表のカテゴリーは付録の表にある集団を合わせることによって構成されている。さて、付録の表（我々はこれについて、各世帯の収入、家族構成、支出配分を同時に考慮しつつ測定されていると述べた）は p.282 のものよりもはるかに同質的であり、(p.282 の表のように) 総支出の平均額、さらに支出配分（総支出に対する各支出の比率）も考慮に容れて今度は各世帯を分類するのが有益であると思われた。多くの試行錯誤の後、我々は集団の数を 52 から 34 に減らした（我々が新たに作った集団は世帯の大きさが非常に異なるものを含んでいる点において先の集団とは区別される。しかし世帯の大きさは異なってもそれらはほとんど等しい総支出を有し、同じ支出配分を行っている）。——ところで我々はこの新しい集団を次のように特徴づけられるいくつかの多くなカテゴリーに分けることができる。

まずいくつかの世帯においては食料費が収入の非常に大きな部分を吸収し、「その他の支出」は可能な限り縮減される。時々住居費と衣料費が特別に低いことがあるが、いずれにしてもこれらの支出は、「その他の支出」の減少がそれらによって説明される程度には高い。他方これらの世帯は必ずしも非常に貧乏な世帯ではない。食料費の高い比率が食料に対する過剰な支出を表わしていることもあれば、食料費をけずることが不可能であることを表わしていることもあり得る。これらの世帯が「その他の支出」を犠牲にすることを余儀なくさせられているにせよ、或いはそれを先行しているにせよ、いずれにせよこれこそまさに一定数の世帯がとるところの、一定の生活類型なのである。

カテゴリー  $\alpha$

世帯数	総支出	世帯ごとの quetsの 数	quetsごとの 平均支出	食料費	衣服費	住居費	暖房照明 費	その他の 支出

3	1.180	8,4	140	64,5	9,1	12	8,1	6,5
7	1.260	9,3	136	57	10,2	15,4	5,9	11,8
14	1.500	12,4	121	57,5	9,5	15,1	4,9	12,8
10	1.960	11,4	172	60	10,6	14,8	3,4	11,4
6	3.190	21,6	147	57	14,3	12,6	4,1	11,9

(非常に多様な構成の世帯についてであるが) 食料費の比率の高さによってかなり似かよっている第二の世帯は、「その他の支出」の比率がそれでももっと高いことによって区別される。しかも住居費と衣料費がひどく切りつめられているようには見えない。このような世帯は多数あり、先の世帯よりもおしなべて貧乏であるとはなおさら言えない。ここでもまた前面に来るのは食料費である。そして住居費、その他の支出は収入のかなり小さな部分を吸収するだけである。

#### カテゴリーβ

世帯数	総支出	世帯ごとのquetsの数	quetsごとの平均支出	総支出に対する%				
				食料費	衣服費	住居費	暖房照明費	その他の支出
26	1.440	11,5	126	57	8,9	14,7	4,8	14,6
15	1.650	9,3	179	57	9,6	14,6	4,6	14,4
24	1.700	13,6	125	56,2	11,6	14,6	4	13,8
12	1.820	12,5	146	56,7	11	13,8	4,6	14,8
9	2.650	18,6	142	56	13,4	14,4	3,7	12,8

次に「その他の支出」の額の低いことによっても区別されるが、食料費の割合が少し減っている世帯を見てみると、住居費の割合が明らかに増大している。これらの世帯は、世帯の規模によっても、支出総額によっても先の世帯と区別され得ない。このことはこれらの世帯がきわめて特異なある生活水準を要求しているように見えるだけに一層注目すべき点である。

#### カテゴリーγ

世帯数	総支出	世帯ごとのquetsの数	quetsごとの平均支出	食料費	衣服費	住居費	暖房照明費	その他の支出
24	1.320	9,3	142	54	9,9	18,2	12	5,1
6	1.770	16,4	108	55	10,8	20,5	15,4	4
23	1.800	10,5	172	55,7	11	17,6	15,1	4,1
8	2.090	13,6	154	54,7	12,6	16,2	14,8	4,6

これら三つのカテゴリーは次の点を共通特徴としてもっている。すなわち、食料費の比率が高い、或いはかなり高いこと、そしてその他の支出の比率が低いこと、である。もし

生活のゆとりの程度がその他の支出に向けられる幅によって測られるものとすれば、次に挙げる世帯は（いくつかの例外を除いて）すべて先に挙げた世帯よりも恵まれていることになるであろう。これらのうちで我々はまず、食料費が（比率上）非常に低く、住居費の比率は非常に高く、そして「その他の支出」の比率は平均的な、かなり多数の世帯をとり出そう。

カテゴリー δ

世帯数	総支出	世帯ごとのquetsの数	quetsごとの平均支出	総支出に対する%				
				食料費	衣服費	住居費	暖房照明費	その他の支出
13	1.210	8,7	139	51,3	8,8	20,8	5	14,1
28	1.440	8,1	178	51	8	21,4	4,3	15,4
22	1.670	7,4	225	47,7	9,9	21,2	4,7	16,2
26	1.860	10,5	177	49	11,5	20,4	4,7	14,8
19	1.930	9,8	197	49,5	9,4	21,1	4,2	15,7
11	2.090	8,3	251	48,1	11,8	20,5	3,9	15,6
7	2.210	12,6	176	49	11,4	22,2	3,6	13,3
6	2.350	12,6	186	51,6	11,8	19	4,2	13,6

次の三つの集団は先に挙げたものとは、「その他の支出」の比率がより高いことによるのみ区別される（これは後に挙げるものと共通の性格である）。

カテゴリー δ'

7	1.350	6,5	207	49,5	9,3	17,3	5,7	18
19	2.150	8,2	261	48	11,5	18	2,8	19,6
3	2.480	10,6	234	40,5	11	24,8	3,7	19,8

最後に、少々複雑な一つのカテゴリーが来るであろう。その特徴は次の如くである。食料費の比率が低いこと（先に挙げた大きなカテゴリーと同じように低い）、「その他の支出」の比率が高いこと（その他すべてのカテゴリーよりも高い）、食料費の明らかな増大、そして家賃の一定の抑制、である。

カテゴリー ε

世帯数	総支出	世帯ごとのquetsの数	quetsごとの平均支出	総支出に対する%				
				食料費	衣服費	住居費	暖房照明費	その他の支出
33	1.660	8,8	189	53	11,3	15,2	4,4	16,2
12	1.850	9,6	193	51,5	11,9	16,2	4,5	16,2
17	1.960	10,6	185	51	11,6	14,4	4,7	18,2

15	2.110	10,2	207	52,5	11,5	14,9	4,4	16,8
28	2.230	14	160	50	13,4	13,7	3,6	18,8
7	2.350	12,5	188	52	12,4	14,1	3,4	18,6
6	3.060	14	219	47,4	11,8	15,6	3,3	21,8
4	2.570	10,4	247	44,2	12,6	15,7	3,8	24
8	2.720	13	210	50	12,6	16	3,6	19

これらの表の全体を検討するとき我々が驚くのは、支出がほとんど反対の計画に従って分配されており、全体として非常に様々な収入と構成をもつこれほど多くの世帯を、分類することが可能であったという点である。三つの表 $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ の187世帯は支出総額の54%から60%を、表 $\delta$ 及び $\delta'$ の162世帯は48%から51.5%を、表 $\varepsilon$ の130世帯は47%から53%を食料費に割いている。最初の世帯（表 $\gamma$ の世帯は除く。この例外が表 $\gamma$ の世帯を特徴づけている）は住居費の比率が12%から15%であり、第二の世帯ではそれは16%から22%であり、最後の世帯では14%から16%である。これらの世帯はそれぞれ「その他の支出」に対して、11%から14%、13%から19%、16%から22%を割いている。——他方、収入総額と家族構成は各まとまりごとに異なっていることをとり急ぎ確認しよう。この点をより明らかにするために我々は各集団ごとに、quetごとの平均支出を計算した（そこには家族規模と支出の量が組み合わせて表わされている）。表 $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ においてquetごとの平均支出は121から179へ、表 $\delta$ 及び $\delta'$ では139から261へ、表 $\varepsilon$ では160から219（4世帯については247）へと変動した。——しかし、これら様々のまとまりにおいてとらえられた諸集団を相互に比較することが可能であり、そこではquetごとの平均支出は非常に接近していることに注意しよう。このquetごとの平均支出については、第一のまとまりにおいては、172（10世帯）、179（15世帯）、172（23世帯）、154（8世帯）、第二のまとまりにおいては139（13世帯）、178（28世帯）、177（26世帯）、176（8世帯）、186（6世帯）、そして第三のまとまりにおいては189（33世帯）、193（12世帯）、185（17世帯）、160（28世帯）、188（7世帯）、といった数が見られる。そしてさらに、第二のまとまりにおいて225（22世帯）、207（7世帯）、197（19世帯）、第三のまとまりにおいては207（15世帯）、219（6世帯）、210（8世帯）、といった数が見られる。さて我々が記憶にとどめるべきは各まとまりの内部におけるquetごとの平均支出のこのような非常に大きな多様であり、同時に、この平均支出がしばしば別のまとまりに属する集団間で同じであるという事実である。

収入の相違と家族規模の相違、要するに欲求に対する財源の関係をまず第一に置こう。これはたしかに、様々の生活水準、支出配分の様式によって特徴づけられる下位集団への労働者階級の分解を最終的に説明するもののように見える。しかし、このような下位集団のそれぞれが非常に異なる世帯規模と非常に異なる収入水準を同じく含んでいるのであるから、支出の各カテゴリーの総支出に対する比率が決定される形は幾通りにも解釈することが可能である。食料費に最も多くを割く世帯について検討してみよう。この状態が収入の少なさ、或いは家族規模の大きさ、或いはこれら双方によって余儀なくされている場合は了解することができる。ところで、収入が多くなる、或いは家族が減る、或いは収入が

家族よりも速く大きくなる（或いはその逆）、こうしたことがあっても食料費の比率が同じままであるならば、このことは、食料に対する欲求が当の世帯集団において（他のカテゴリーにおけるよりも）常に不十分にしか満たされていないか、或いは多人数からなる、ないしは貧乏な世帯においては不十分にしか満たされないが、同じ集団の他の世帯においては十分に或いは過剰に満たされているか、或いは他の欲求をほとんど或いは全く発展させなかったことによってこれら世帯のすべてにおいて食料に対する欲求が十分に（或いは過剰に）満たされているかいずれかの徴しである。これらの仮定のうちから選択することは難しく、我々の目的にとって必要でもない。しかし我々はこれらの仮定のそれぞれに一定の役割を振り当てる必要があるであろうと考える。そして、いくつかの世帯において（その構成と収入がどのようであれ）このような高い食料費がやむを得ぬことであるとすれば、他方別の世帯では高い食料費は、たとえ制限される可能性はあるとしても、一種の贅沢であると考えられる。しかし、仮説全体として次のことは依然として確たるところである。すなわち、（多分一定の努力をしてであろうが）構成上および収入上、食料費の割合を減らすことの可能な世帯において一方はそれを拒絶し他方はそれを受け入れるということである。そしてこのことこそそれぞれのまとまりにおいて発達してきた習慣と社会表象の影響を表わすものである。何らかの理由によっていくつかの世帯がより高い収入（家族規模の大きさに対する比率で）を得るようになっても、それゆえ彼らが支出配分についていまや可能になった一定の変化を通じて、理論上あるまとまりから（社会的により高い）別のまとまりへと移行できるようになって、彼らは少しも欲求を感じず、彼らの集団の支配的表象に服従しつづける。

しかし他方では次のこともたしかである。すなわち、多くの世帯は、収入が不十分であるにも関わらずある高い社会的水準にとどまるために努力し、しばしば重大な犠牲にも同意するということである。このことは二つの形で表れる（そして欲求とその価値についてのこれらの二つの異なる評価に注目することはある意味では興味をそそることである）。ある場合には家賃について高い額、可能なかぎり最高の額に上昇することが問題となり、またある場合には「その他の支出」について最高の可処分幅を維持することが問題となる（そして多分、衣料費が最も重要になっていると思われる集団をその他の集団からさらに区別するのが望ましかったであろう）。ここからあらゆる場合に食料費の節減が出てくる。この節減は集団全体によって全体として同意されるものであり、それが可能であるからこそ同意されること、犠牲が余り辛いからこそ同意されるものであることは疑いない。（これら二つのまとまりにおける総支出額は平均で依然として、（訳注：食料費に最も多く割く）第一のまとまりよりも多く、頭割りの食料費の絶対額も同様である）。しかし、この点が本質的に重要なことであるが、全体が受け入れているこの節減は、この全体、まとまりを構成する様々の集団の上に等しい度合で負担をかけるのではないということである。例えば表 8 において、quet ごとの平均支出 139 マルクである第一の集団は（はるかに恵まれている）他の集団よりもこの節減を甘受するのに大きな苦勞をするに違いない。しかし第一のまとまりのなかに見出されるような支出額を有するさらに別の集団は、より高い社会集団に結びつくことに専心することで食料費を制限しなければならなくなり、家賃のために多額の金を支出しなければ落ち目になるのではと恐れなければならぬ。またこれらの集団のなかには「その他の支出」か或いは衣料費の著しい節減が認められる。このことは全く、

彼らにとっては住居が本質的に重要なものであるということであり、彼らよりも稼ぎのよい世帯よりも（絶対額において）少ない食料支出を、よりよい（或いは少なくとも同等の）住居のために、甘受するということである。同じく、表εにおいては、quet ごとの平均支出 160 マルクである第五の集団は「その他の支出」に多くを割くために、食料費および特に住居費を目に見えて節減している。同じ構成で、より高い収入を有する第七の集団とこの第五の集団を比較すると、第七の集団においては、衣料費および「その他の支出」は、第五の集団の場合よりも比率上やや高いけれども、食料費を対象とする節減の努力が小さいわけではない。しかし住居費が節減の対象になる度合ははるかに小さい。それゆえまた我々はここでも一つのカテゴリーを除いて、まさしくその支出を増やすために、すべての支出に一律に圧力をかけることを余儀なくさせられている重要な世帯集団を見出すことになる。ところでこの例外の支出カテゴリーは、贅沢でなければ、少なくとも当該の人々がより裕福になり、本来的に生命維持に不可欠な欲求を満足させる必要性を切迫して感じる度合が小さくなるにつれて展開され意が用いられるところの願望の、満足である。

他方、これら様々のまとまりの地位はいかなるものであろうか。第一のまとまりが他の二つのまとまりよりも下位にあることは認めることができる（第一のまとまりにおけるquetごとの平均支出の額は大抵他の二つのまとまりよりも下であり、食料に対する欲求がより基本的であり、社会的表象の混じる度合も小さい）。一般に、集団の社会的水準を測定するには「その他の支出」の総支出に対する比率、或いは住居費の比率をもってすべきであると言えるであろうか。たとえ「その他の支出」が大きいもののquetsごとの平均支出額と、家賃が最も高いもののquetsごとの平均支出額とがたとえどんなに接近していても、「その他の支出」の比率が最高であるまとまりにおいては疑いもなく諸支出の平均はやや高く、他方家族規模は比較的大きい。一般に家賃支出は子供の数が増えるときには減少する傾向にあることを我々は指摘した。我々は一時的に、支出配分のこの二つの作戦は結局のところ同一の社会水準に対応しており、一般に社会的欲求の他に対する優越が表れるのは（■訳文相違：優越を表わしているが、しかし、この優越が表れるのは）、とりわけ家族が大規模でないときには住居費の比率の高さにおいてであり、或いはまた、家族規模が比較的大きい時には「その他の支出」或いは衣料費の比率の高さにおいてである、と認めることができる。しかしこの点について論ずる前に、我々としては今度は金属労働者のアンケートを参照し、それがどの程度我々の到達した結果を確認するか、またそれがどのような新たな確認事項を我々にもたらすか、を調べなければならない。

## B. ドイツにおける金属労働者同盟のアンケート

### 四. データの状況

金属労働者アンケートは統計事務所アンケートと同一の国で、そしてほとんど同じ時期に実施されたのであるが、また同じ社会層を対象として行なわれたのであるが（但し後者については労働者家計のみをとり扱っている）、それぞれが我々にもたらすデータを同じ群に混ぜ合わせてよいとは判断していないし、結果を比較するにしても最大の注意をもってしてはじめて可能であると考えている。——たしかにそれぞれのアンケートから出て来る

平均収入と平均支出との間の差は小さなものである（収入の額としては、後者統計事務所アンケートの場合 1835 マルク 38、金属労働者アンケートの場合 1856 マルク 19、支出の額としてはそれぞれ 1835 マルク 38 及び 1825 マルク 28、である）。しかしまず、二つのアンケートの間には、食料品の価格が連続的に上昇していた時期における一年という違いが存在する（この事情は多分金属労働者の場合における食料支出の比率の高さに表れるであろう）。他方、統計事務所は家具の新たな取得を住居に結びつけたが、金属労働者の場合には家具は衣料費のなかに（余り正確ではないが）算入されている。このことが本質的に重要な二つの項目についてアンケート相互においてそれぞれ比較することを妨げている。とりわけ二つのアンケートを同種の試みと見なしえないより深い理由が存在する。一方はあらゆるカテゴリーの労働者を対象とし、他方はただ一つの産業の労働者を対象としているのである。産業それ自体がそれに関係しているすべての人間の支出配分の様式に影響を及ぼすということではない。しかし、各産業には給与が非常に異なりまた社会的地位状況も非常に異なる労働者が存在するけれども、収入のいくつかのカテゴリーが一方の産業では他方の産業よりも（比率上）より大きいということがあることを我々は承知している。ここでの平均数値は非常に様々な事象の「合成」を表示するものである。すでにして、もし 1200 マルクから 2500 マルクを稼ぐ労働者家族全体を取り上げ、三つの大きなカテゴリー（1200 マルクから 1600 マルク、1600 マルクから 2000 マルク、2000 マルクから 2500 マルク）に分けるならば、統計事務所のアンケート及び金属労働者のアンケートのそれぞれにおけるこれらのカテゴリーの比率は次の如くである（労働者全体の％）。第一のカテゴリーでは 32.4％と 27.8％、第二のカテゴリーでは 41％と 40.5％、第三のカテゴリーでは 26.6％と 31.7％。これは一般的平均及び類似なるものは、我々がそれについて考え得るところの意味作用からはほど遠いということである。さらに、これらの下位集団を比較することによって、支出配分についてアンケートの間で顕著な違いが存在することがわかる。アンケート報告の p.87 に絶対額における支出表がある。我々は総支出に対する支出比率を計算した（衣料費と住居費とが、上記したようにアンケートによって定義が異なるため、混り合っている）。

	収入 1200 マルクから 1600 マルク		収入 1200 マルクから 1600 マルク		収入 1200 マルクから 1600 マルク	
	154 (統計事務所)	80 (鉄鋼労働組合)	196 (統計事務所)	116 (鉄鋼労働組合)	127 (統計事務所)	91 世帯 (鉄鋼労働組合)
衣服費及び住居費	26,3	25,4	28,8	27,5	29	28,6
暖房照明費	4,7	4,6	4,3	4,4	3,9	4
その他の支出	14	14,1	15,3	15	17	15,6
食料費	55	56	51,8	53,3	50,1	52
総額	100	100,1	100,3	100,2	100	100,2

同じ収入水準の集団間のかかなり驚くべき類似にも関わらず、これらの数字はその意味を自ら隠すところからはほど遠い。とりわけ、類似は統計事務所によってアンケートされた労働者の第二の集団における比率（欄の三番目）と、金属労働者の第三の集団における比率（欄の最後）との間において、それらと金属労働者の第二の集団（欄の四番目）との間においてよりも、かなり大きいということがある。他方、食料費の比率が金属労働者の場合、他におけるよりも常に明らかに高いという状況、これは他のカテゴリーの支出比率に反作用する。

しかし特に（そしてこれはより限定された集団に移行するにつれて深くなるよりほかない暗部なのであるが）、あらゆる産業において労働者がその欲求を（特に家族の増加によって）増大させるにつれてその収入を同じように増大させる可能性を有するとはきわめて考えにくいということがある。ところで我々がすでに見たところであるが、まさにこの点こそ、労働者における支出配分の様々の作戦の研究において考慮すべき最も重要な要因の一つである。一定収入を有する一集団のなかで、以前はそのような収入をもたず、収入が増加した後もその生活様式と種々の欲求の価値評価についてそのあり方を多分全く変えないような世帯の割合が高いこと（或いは低いこと）はどうでもよい問題ではない。新たな稼ぎを得る可能性を増大させる、或いは制限するその他の要因のうち我々は特に産業における労働組織の問題（出来高給、或いは時間給等の労働者の比率、労働分化の大小、これは労働者がある仕事場から別の仕事場へと移動することを可能にしたり、困難にしたりする）を指摘したい。労働者がその主たる給与を増加させる能力、労働の性格、またその期間、その強度（これらは労働者が工場街で働く時間と余力を与えたり与えなかったりする）、産業における見習い期間の年齢と長さ（これは子供の稼ぎの可能性を条件づける）、婦人が働くことのできる工場が近くにあるかどうか、等、これらは産業の労働組織に依存するのである。これらすべての条件が産業そのものの諸条件と関係していること、またそれらがある特定の一産業に属する労働者にとっても、多数の産業に所属する労働者にとっても同じではないこと、これは理解できることである。事実、統計事務所アンケートにおける労働者と金属労働者のそれぞれについて種々の収入源泉の比率がどのようなかを見てみれば、成人男子の収入は前者が 82.2%、後者が 80%、他の家族成員の収入は前者が 8.9%、後者が 10.4%、である。成人男子の収入についてこれまで主たる給与と副次収入とは全く区別されてこなかった。しかし、アンケートによる違いはすでに顕著である。この違いは分化度の高い集団に移るにつれてますます重要になることは確かである。

これこそこの金属労働者のアンケートの結果をそれ自体として、また根拠のない比較に相変わらず耽けることをさけて研究しなければならない理由である。その上さらに、集められた家計簿の数と家計簿の形式の故に、我々はそれを新たに作りかえなければならない。この意味において、簡単に言ってみれば、金属労働者組合が行なったことと、我々が行なわねばならなかったこととの差である (1)。

- (1) これらの資料は四つの表で与えられている。最初の表は、都市ごとに次のものについて示している。職種（これは各都市についてアルファベット順に並べられている）、被質問者の年齢、家族構成（大人と子供の数）、労働時間、家族全体の収入とその源泉、住居の大きさと状況（都市内部、



周辺部、郊外について)、住居の価格、支出の総額、そして各種支出の額、である。表Ⅱは、各種の収入支出、および総収入と総支出を家長の職業別に各世帯について表示したものである(支出に対する職業の影響の研究に際して我々が依拠しているのはこの表である。p.225)。各職業ごとに世帯が家族の成員数に従って並べられている(慣例的な単位によって表されている。p.181)。表Ⅲは各世帯について収入と支出の総額及び種類が収入のカテゴリー(1200 マルク以下、1200 マルクから 1600 マルクまで、2000 マルクまで、2500 マルクまで、そして 2500 マルク以上)に従って示されている。各カテゴリーについて、世帯が家族成員数に従って並べられている。最後に表Ⅳは各世帯ごとの職種、週単位の平均支出(総額及び支出の種類)、週単位の収入及び稼ぎが示されている。ここでの世帯は(表Ⅰの場合のように)都市ごとに分類されている。表Ⅱ、Ⅲ、Ⅳでは食料費の詳細も示されている。

絶対額しか示されていないこと、(統計事務所のアンケートのように)世帯ごとの総支出に対する各支出の比率が計算されていないことのために、我々は、本質的に重要な支出についてなんらかの方向への極端な偏りが見られるものを除去するために、すべての家計簿を点検する作業を前以って行なうことを断念せざるを得なかった(またデータの欠如のために、高額な転貸借がある世帯をも除去することができなかった)。我々はまた、個々人の支出比率の類似性を考慮することによって(大きなカテゴリーの内部における)集団間或いは下位集団間で世帯の比較を行なうことはできなかったし、従って比較的均質な具体的集団を構成することもできなかった。つまり我々の研究の基礎そのものに社会的要素を置くことができなかったのである。これは先のアンケートの場合には行なったことである。さらにこの場合家計簿の数が非常に少ないので、このような集団の数がそれらを典型的と見なし得るには余りに少なすぎたであろうことも認めなければならない。いずれにしても、この点は金属労働者のアンケートと統計事務所のアンケートにおける表の本質的な違いであって、これは前者の一定の弱点である。多分(ただ一つの産業についての)資料の性質そのものからして、そこに保存されているであろう社会的傾向の痕跡を我々が最初から追跡しえなかったことを余り嘆く必要はないであろう。これらの資料は社会的差異ではなく職業的差異から発想された抽象によって獲得されたものであり、集団が小さければ小さいほど資料の偏頗な性格がより大きく現れるであろう。我々が構成しえたかもしれない金属労働者アンケートにおける基本的集団は、統計事務所のアンケートでは我々は非常に様々な職業の労働者を基本的集団のなかに入れることができるのであるが、そのような集団よりもはるかに人為的なものとなったであろう。

## 五. 家族規模と支出配分

我々はまず一つの表を作成した(本書 p.310 を参照)。この表は家族の規模が様々な支出の規模と比率とに及ぼす影響を研究することを可能にするものである。子供の年齢が示されていないので、各世帯に対応する *quets* の数を計算することが不可能であった。それで我々は表Ⅱの慣例的な単位に従うことにし(本書 p.181 参照)、枠組を次のように設定した。すなわち、1.5 から 1.9、2 から 2.4、2.5 から 2.9、等である。表には総額が示されていないので加算は表Ⅲによってすべて我々自身で行なった(表Ⅲでは収入の各カテゴリーにお

いて世帯が家族規模に従って並べられている)。同じく我々は各集団ごとに食料、飲料、住居、移動の各支出を加算した（各支出についても別々に示してあるが）。「その他の支出」は、葉巻、煙草、教養、娯楽、新聞、石鹸、クリーニング、雑費、学校費、保険、団体費、医療費、薬、保険のための支出の合計である。我々はこれらを別々には示さなかった。我々はこれらすべての支出についてその平均を（関係世帯数で総額を割って）計算し、1800 マルクから 2400 マルクの間に含まれる全世帯に関する平均を指標にとって、先の平均の相対値を計算した。さらに我々は最後に、各カテゴリーについて、各種支出の支出全体に対する比率を計算した。——この表が作成されるやすぐに我々には次のことが必要であると思われた。すなわち、収入の違いが及ぼす攪乱的影響をできる限り避けるために、一方では総支出 1800 マルク未満の世帯、他方では総支出 1800 マルク以上の全世帯について、絶対額、平均値、相対額を計算することである。この計算も表Ⅲによって行われた。

第二の表（本書 p.318 参照）において我々はすべての世帯をいくつかの新たな集団に分割し、統計事務所のアンケートの場合と同じ枠組み（1200 マルクから 1299 マルクまで、1300 マルクから 1399 マルクまで、等）を採用して、総支出に従ってそれらの集団の支出を計算した。我々が注目させられる支出の下位区分は先の表の場合と全く同じである。——支出配分に対する家族構成の影響についての研究は、これこそまさにその作用が非常に不均等で不規則な要因であること、家族構成を示すために我々が用いる便宜的な数字は人を満足させるものではほとんどないこと、を我々に教えていたので、我々は家族規模に従って二つの大カテゴリー——この二大カテゴリーの内部で我々は収入規模に従って世帯を分類したであろうが——を区分することは断念した。他方、統計事務所のアンケートに関する限りは無視しえた一要因（この場合は関係世帯のほとんどすべてが大都市で採られたものであった）が、被調査者の住んでいる都市の規模である。我々はすでに、都市の規模は最初検討したところでは本質的な差ではないこと、人口学的な差（住民の数）は経済的機能と習慣の分離（大都市はほんのわずかしが工業を含まず、平均的都市ないしは小都市は労働者の集合体から成り立つとか）を必ずしも伴わず、またそうしたものを表わしてはいないことを示した。それにもかかわらず我々は、小都市ないしは平均的都市は多分大都市の場合よりも田舎出の労働者を多く含むであろうこと、そして低賃金の労働者が多いであろうこと、ところで他方各種のカテゴリーの労働者の社会的態度、彼らの消費、欲求を研究する場合には、こういった点こそが考慮されるべき要因であること、を主張したい。人口 10 万以上の 19 都市とそれ以外の都市との区別はまた特に明瞭である（エアフルトを除いて、問題になっているすべての都市の人口は 6 万以下である<sup>(1)</sup>）。我々にはまた、収入の同一カテゴリーのなかで、彼らの働いている都市の規模に従って、各世帯を区別することはかなり難しいことであった。我々は（各世帯が都市ごとに分類されている）表 I から始めなければならなかった。そして分類された各世帯のそれぞれについて、職種と総支出額を知ったうえで、（世帯が収入によって分類されている）表Ⅲのなかから総支出額と職種と共に、支出の細部全体を把握しなければならなかった。

(1) 問題の大部分とは以下のものである。ベルリン(家計簿数 10)、ハンブルク(12)、ミュンヘン(15)、ドレスデン(8)、ライプツィヒ(7)、ブレスラウ(7)、フランクフルト・アム・マイン(10)、ニュルンベルク(15)、デュッセルドルフ(11)、ハノーヴァー(11)、シュトゥットガルト(10)、

ヒュムニッツ (23)、マグデブルク (10)、エッセン (4)、ケーニッヒスベルク (3)、ブレーメン (6)、マンハイム (3)、カッセル (13)、カールスルーエ (7)。調査された 320 家族のうち 99 家族は郊外に住んでおり、またこれら郊外のうち 30 地域は都市に編入されていなかったと指摘されている。家族は家長の仕事場のある都市に結びつけられている。「労働に由来する収入部分が家計に最も大きな影響を及ぼして、世帯はそのような所得が得られる場所に含まれるべきである」と認めてのことである。さらに、「家賃の減少はこの場合交通費の増大によって相殺される」。

我々はこのように構成された三つの表について、世帯の平均構成と共に、(先の表と同じように) 平均、相対額及び比率を計算した。(■原著・段落確認) このアンケートに含まれている労働者の各集団と統計事務所が検討した労働者の集団について指摘されている差異(前者は、同一産業全体について調べているので、後者には全く見られない抽象によって得られたものである)にも関わらず、また枠組の相違にも関わらず、家族規模が収入の配分に及ぼす影響について我々が到達した一般的結果を確認することが重要である。他方、支出総額がこのような配分に及ぼす影響についての研究に関して我々は世帯の規模に従ってそれらを二大カテゴリーに分けることは断念したのであるから、第二の表に至るに際してこの点を考慮に入れるために、この新たな試みにおいて家族構成の影響はいかなるものであるか、を今後は認識することが一層重要になる。

我々はこの家族構成の影響がゆっくりと連続的であったり、急激であったり、二つの形で及ぼされることを指摘した。そして食料費と住居費においては二種類の、しかし関連した変動を指摘した。この二種類の変動は子供のいない世帯から最も多数の世帯に至るまで、この問題の進化全体を支配しているように思われる。まず絶対額を見てみよう(相対値については本書 p.310 を参照)。——(飲食のための) 支出は非常に明瞭に増加するのであるが多少とも急速に増加する。逆に住居費は非常に顕著な二つの低下を含めて非常に僅かしか上昇しない。さらにこうした運動は部分的に、総支出額と関係している。最初の四つのカテゴリーについては、食料費の明瞭な上昇は規則的に総支出の増大を伴っており、このことは最後の四つのカテゴリーについても同様であり、さらにカテゴリ 3.5 から 4 についても同様である。他方、食料費の上昇運動における減速と住居費の非常に顕著な減少は、家族の増加のさなかにおける総支出の減少に対応している。最初の二つのカテゴリーについては定常的な衣料費は、次いで、総支出及び食料費と共に増加し、次いで住居費と共に急に大きく低下し、次いで食料費そのものと同じく急速に再上昇する。かくして、食料費の連続的な上昇はただ総支出が減少する時にのみ減速せられる。

世帯カテゴリーにおける支出

世帯規模,	世帯数.	総支出		食料費		衣服費		住居費		暖房照明費,		その他の支出	
		平均 (マルク)	相対 値	平均 (マルク)	相対 値	平均 (マルク)	相対 値	平均 (マルク)	相対 値	平均 (マルク)	相対 値	平均 (マルク)	相対 値
1.9 以下	19	1530	74	718	67	219	80	236	78	69	82	260	85

2 - 2.4	27	1580	76	800	75	217	79	261	86	64	76	216	70
2.5 - 2.9	55	1770	86	897	84	216	79	270	89	78	93	295	96
3 - 3.4	36	1790	87	911	86	25	82	269	89	73	87	280	91
3.5 - 3.9	53	1780	86	928	87	229	84	253	83	81	96	265	86
4 - 4.4	34	1930	94	1010	95	240	88	279	91	77	83	296	97
4.5 - 4.9	26	1940	94	1030	97	260	95	270	89	81	96	280	91
5 - 5.4	28	1850	90	1025	97	234	85	255	84	74	88	249	81
5.5 - 5.9	19	1880	91	1070	101	229	84	248	81	75	90	236	77
6 - 6.4	7	2210	107	1210	114	279	102	280	92	90	107	340	110
6.5 - 6.9	9	2250	109	1262	120	290	106	292	96	148	176	250	81
7 以上	7	2600	126	1470	138	361	132	300	98	90	108	345	112

\*\*\*\*\*■確認・表311

最初（家族が増加しはじめるとき）と、総支出の大きな減少が見られるもっと後とを除いて、衣料費は食料費と密接に関連している（つまり食料費と共に増大する）。家賃の上昇ははるかに緩慢であり、その低下もはるかに顕著である。必要の際に人々が犠牲にするのは家賃なのである。「その他の支出」に関しては、その運動は不規則である。それは家賃と同一の時点で家賃よりもなお一層大きく曲がる。しかしその上、初めと終りのところで、食料の増大と時を同じくして固有の深い屈折を示す。以上から次の帰結が得られるであろう。すなわち、家族が増加するにつれて収入があらゆる支出を相関的に増大させることを許さない場合に、減少するのは、或いは増大が緩慢なのは、第一は（すなわち最大なのは）「その他の支出」であり、次に住居費、さらに次は衣料費、そして最後にやっと食料費である。このことは我々が先に（仮説として）示した欲求のヒエラルヒーを確認し明瞭にするものであろう（本書 pp.275-276）。

今や（世帯全体について）総支出に対するこれらの支出の比率を検討しよう（本書 p.311を参照）。興味深いことに、飲食費の比率はカテゴリー2、次いで5、そして5.5に移行するときに三つの急激な（そして安定した）上昇を見、他の時点では停滞（2から3）ないしは緩慢な上昇（3から4、5）があることを指摘できる。こうした比率の増大には住居費の比率全体の低下が対応しているが、しかしこの低下は非常に緩慢で連続的であり、急激な動きはなく、いくつかの不規則性を伴っている（住居費は第一から第二のカテゴリーにかけて食料費と同時に明瞭に増大するが、すぐに低下する）。食料費の比率の急激な上昇に、住居費の比率の急激な低下が対応するわけではない。衣料費の比率は顕著に定常的である。非常に不十分な衣料費の動きと他の二つの支出の比率の動きとの間には何ら恒常的な関係を見る事ができない。「その他の支出」の比率は、食料費の比率が急激に増大するときには明らかに（或いはかなり明らかに）減少する。細部においてみれば、「その他の支出」の動きは食料費の目立った動きに（逆方向に）対応している。しかし全体としてみれば、この支出はカテゴリー4-4.4の世帯までは定常、或いはほとんど定常にとどまっている——ただし次いで非常に明瞭に低下する。——このことは我々が相対値を検討した際の結論を確

認するものである。しかし今は、比較的接近した収入の世帯が比較されている表(311)(■原著・表311orp.311?)を参考にしつつ、このことをより詳しく研究すべきである。

我々はまず、食料費の急激な増加が世帯の二大集団においてすべて、そして均等に生ずるのどうかを問題にするであろう。第一の категорияから第二の categoriaに移行するところではこの点は疑いない。しかし収入の多い集団においては第一の categoriaは数が少なすぎるのでそれに余り重要性を付与することはできない。その代り、収入の少ない集団においては食料費の増大は第一の categoriaから第二へ、そして第三にかけて、顕著である。次いで一連の緩やかな増加が来る(安定的なもののみを取り上げればであるが)。収入の多い集団においては食料費の比率は逆に、category 3.5まで(3.5を含む)のすべてについて定常である(最初は減少しさえする)。急激な上昇が起きるのは category 5 から 6 への移行、次いで 7 から 8 への移行に際してである。これは要するに統計事務所のアンケートに関してなされた考察、余り恵まれていない労働者の場合には最初から(比率上)急激に増大する食料費は、恵まれた労働者の場合には、家族が多人数になったときにも、後になってからしか増大しないということを確認するものである。それはあたかも食料は当初から潤沢で頭割りでは減らすことが可能であるかの如くである。——同様に、恵まれた世帯において住居費が減少するのは少し後になってからである。この住居費の減少は、余り恵まれていない世帯においては食料費の急激な増大の少し後になってからであるのに対し、より恵まれた世帯におけるある category についてはもっと早く起るということはたしかである。他方、余り恵まれていない世帯における住居費の減少の後、住居費の比率は一定にとどまる傾向があるのに対し、恵まれた世帯においてはそれは減少しつづける。これはもはや我々が統計事務所のアンケートについて指摘したこととは正確には同じではない。この場合にはたしかに曖昧な要素が存在する。我々は、人々が家賃価格と共に家具の購入を考えることはもはやなく、むしろ衣服の購入を考えることを見た。こうした点については特に、アンケート間の比較は不可能である。——このような状況のなかでは衣料費も非常に多様な動きを示す。衣服費は余り恵まれていない世帯においては12%から13%の間にとどまっている(余り恵まれない世帯においては全体として食料費の比率は他の世帯におけるよりも少し高い)。また恵まれた世帯においては13%から14%の間にとどまっている。衣料費がこの水準以下に下がるのは、大抵食料費の大きな増加の後であり、余り恵まれない世帯においてはその当初において、その他の世帯においてはもっと遅れてこれが起きる。——「その他の支出」に関しては、大区分の双方においてまず総支出に対して同一の比率にとどまる傾向があり(余り恵まれていない世帯については比率が少し高くさえある)、しかし、余り恵まれていない世帯にあってはより早く減少し、その他の世帯では少し遅れて減少する。この低下はほとんどすべての場合に食料費の増加と関連している。

これらの資料のより詳細な検討は表全体の検討よりも混乱した印象を与えるけれども、また様々の欲求の重要度の順序を際立たせる上で明確さに劣るけれども、また他方我々の確認した点は、先のアンケートについて確認したところを非常に正確にカバーしてはいないけれども、それにもかかわらずこれらの資料の研究は、非常に重要な一般的結論、先のアンケートの限りにおいても同じく到達した結論に至るように思われる。恵まれた世帯においては、食料費の増大と住居費の減少を遅らせ、衣料費と雑費を高い水準に保つ一定の傾向が表れる。余り恵まれていない世帯にあってはほとんど例外なく category を移行す

るごとに食料費についてほとんど位置単位ごとの一連の増加が見られるのに、恵まれた世帯においては、カテゴリ2、2.5、3、3.5については51.5%、50.3%、50%、50%、カテゴリ4及び4.5については52.2%及び52%、カテゴリ5.5及び6については54.6%及び54.9%の比率であること、このことはすでにしてこのような傾向の確かな徴候である。他方、恵まれている世帯において住居費の比率が一層減少するとすれば、その住居費比率が当初において、裕福でない世帯におけるよりもはるかに高いことに注意する必要がある。裕福でない世帯においては住居費の比率が常に圧縮されているがために、減り方がはるかに少ないということがあり得るのである。しかし、恵まれている世帯においては、住居費の減少の後にはいつも住居費がそれ以上減少するのを避けるための努力が見られる。住居費の減少は常に一つのカテゴリの間で、そして時に二つのカテゴリの間で中断される（住居欄の数字を参照）。衣料費については、「その他の支出」についてと同じように、1800マルク以上の支出の世帯を見る場合に非常に多様なその動きを簡単な定式に書き下すことの難しさは、その支出が低下したとしても、少なくともそれ以上低下させることは避けるために、すぐにそれを高めようとする傾向があるからである。これらの支出の低下は、余り裕福でない世帯においては逆に、はるかに明瞭であり連続的である。

最後に、先のアンケートの場合に同じく指摘したように、こうした傾向は恵まれた労働者の集団においては、世帯員数及び子供の数（その年齢）が大きくなる（進む）のと同時に支出も収入も増大した世帯や、恵まれた世帯のカテゴリに移行したものの昔の習慣を守っている世帯が存在していることによって、いく分か曖昧にされることが考えられる。ここでもまた我々は、少なくとも本書 p.318 の表における証明の端初を見ている。その表ではデータは収入のカテゴリに従って分類されているのであるが、高い収入のカテゴリに移行するにつれて、家族の規模は、連続的でもなく例外がないわけでもないが、少なくとも全体としては増大する傾向にある。このことは、収入の増大のかなりの部分は一定数の家族の増大によって説明されるということの徴候ではある。しかし、一定数の増大した家族はその前に恵まれていない世帯のうちに分類されており、その生活様式を余り変えることが出来なかったはずである。

他方しかし（少なくともこれらの表を検討するだけでは）、次の点を明らかにすることは不可能である。恵まれた世帯における食料費の増大と家賃の減少は、一つの集団から他の集団へ移行した家族の介入によって、或いは家族の増大以前においてさえ多く支出していた家族の介入によって、どの程度説明されるかという点である。総支出に従ってカテゴリごとに分類された家計簿を検討すれば多分この点について明らかになるであろう。

## 六. 総支出と支出配分

それゆえデータが総支出別カテゴリで示されている表の検討に移ろう（本書 p.318、322、323 を参照）。すべての都市について我々が知り得ることは以下の通りである。絶対額では（p.318 を参照）、飲食費は全体として、総支出と同じ程度に、そして同じ速さで増大する。上昇運動における不規則性については、家族構成の違いによって部分的に説明され得る（第三の欄）。上昇は家族規模が最も明瞭に増大するところで最も大きい。（家族構成が2.6から3.6に移行するところで）1100マルクから1700マルクへ、（3.2から3.8の

ところで) 1600 から 1700 へ、(3.9 から 5 のところで) 2200 から 2300 へ、という変化である。この上昇の停滞或いは低下はすべて家族規模の縮小に対応している。(3.6 から 3.3 のところで) 1200 マルクから 1300 マルクへ、(3.6 から 3.2 のところで) 1500 から 1600 へ、(4.1 から 3.8 のところで) 1800 から 1900 へ、(4.1 から 3.9 のところで) 2100 から 2200 へ、(5.2 から 5 のところで) 2500 から 2600 へ、という変化である。家族規模の減少が(特に最後の二つの場合)非常に微弱で、ほとんど感じられるか感じられないかの程度であることはたしかである。他方、上昇のかなりの部分は、明瞭なものでさえ、家族が増大するかしないかのところ、或いは減少しさえするところで起こっている。すなわち、(3.3 から 3.4 のところで) 1300 から 1400 へ、(3.8 から 4.1 のところで) 1700 から 1800 へ、(3.8 から 3.9 のところで) 1900 から 2000 へ、(3.9 から 4.1 のところで) 2000 から 2100 へ、(5 から 5 (■原著・5 から 5.2 か?) のところで) 2300 から 2400 へ、という変化である。最後に、家族が増大するところで上昇の遅れ、或いは低下がある。すなわち(3.4 から三.六のところで) 1400 から 1500 へ、そして特に(5 から 5.2 のところで) 2400 から 2500 へ、という変化である。例外は規則性とほとんど同じくらいに多いであろう。たとえ家族構成が一定の役割を演ずるとしても、他の諸傾向がその作用を妨げるべく、或いはそれにとって代わるべく、確実に介入する。——絶対額においては住居費は常に全体として飲食費を同じくらい、或いはそれより少し多いくらいに増大する。住居費の動きはしばしば飲食費の動きと逆方向(或いはほとんど逆方向)である。特に 1100 マルクから 1200 マルク、1500 から 1600、1800 から 1900、2100 から 2200、2200 から 2300、2500 から 2600、2600 から 2800 のところでそうした方向になる。しかし時々それらは同一の方向になる(あたかも増大した家賃が食料費を圧迫したり、或いはその逆であったりするように、住居費と飲食費の動きが対立するのは、とりわけ食料費の減少或いは停滞、或いは急激な上昇があるときである)。——衣服費の動きははるかに不規則であり、ほとんど常に食料費の動きとははるかに明瞭に対立している。1000 マルクから 1200 マルクのところで衣料費の減少は食料費の増大に対応している。

#### 総支出別世帯カテゴリーにおける支出

総支出 (マルク)	世帯 数	世帯 規模	総支出		飲食費		衣服費		住居費		暖房照明費		その他の支 出	
			平均	相対値	平均	相対値	平均	相対値	平均	相対値	平均	相対値	平均	相対値
1000~1099	4	2,3	1170	52	547	51	178	65	136	45	58	69	146	47
1100~1199	11	2,6	1140	55	597	56	141	52	164	54	57	68	170	55
1200~1299	10	3,6	1265	61	735	69	121	44	166	54	65	77	173	56
1300~1399	20	3,3	1360	66	686	65	173	63	167	55	60	71	209	68
1400~1499	24	3,4	1460	71	806	76	150	55	210	69	72	86	205	67
1500~1599	33	3,6	1560	76	828	78	184	67	216	71	71	85	235	76
1600~1699	30	3,2	1660	81	840	79	207	76	248	81	71	85	265	86
1700~1799	34	3,8	1750	85	920	87	214	78	260	85	77	92	259	84

1800~1899	22	4,1	1850 90	990 93	240 88	268 88	67 80	278 90
1900~1999	30	3,8	1950 95	990 93	265 97	291 96	84 100	298 97
2000~2099	28	3,9	2050 99	1060 100	245 86	302 99	90 107	316 103
2100~2199	21	4,1	2155 104	1110 104	325 119	316 104	85 101	297 97
2200~2299	15	3,9	2250 109	1120 106	300 110	364 119	89 106	326 106
2300~2399	13	5	2350 114	1255 118	294 108	323 106	93 111	359 116
2400~2499	5	5	2450 119	1330 126	340 124	354 116	90 107	330 108
2500~2599	7	5,2	2550 124	1339 126	340 124	367 120	106 126	375 122
2600~2799	7	5	2650 128	1254 118	405 148	420 138	97 116	420 136
2800~2899	3	3	2810 136	1618 152	346 127	375 123	95 114	364 118

1200 から 1300 のところで食料費の減少に衣服費の増大が対応している。1300 から 1400 のところで食料費の増大に衣服費の減少が対応している。1400 から 1600 のところで食料費の遅滞に衣服費の増大が対応している。1600 から 1700 のところで食料費の上昇の再開には衣服費の停滞が対応している。1800 から 1900 のところで食料費の停滞に衣服費の増大が対応している。そして、1900 から 2000 のところで食料費の増大に衣服費の減少が対応し、2200 から 2300 のところでも食料費の増大に衣服費の減少が対応し、2500 から 2600 のところでは食料費の減少に衣服費の増大が対応している。2600 から 2800 のところでは、食料費の増大に衣服費の減少が対応している。例外はきわめて僅かであり、さらに二つの曲線は例外的な点においても必ずしも平行しているわけではない。食料費はほとんど常に衣服費を犠牲にして増大し、或いはその逆であるように思われる。——その他の支出は絶対額では住居費と同じくらいに、そしてほとんど同じリズムで増大する。1900 マルク以前では、その他の支出の動きは衣服費の動きとほとんど同じである。1900 から 2500 のところではそれらの動きは常に逆方向であり、2500 から 2800 のところで再び衣服費の動きに従うようになる（これは住居費の動きと同様である）。実際衣服費の変動が最も大きいのは 1900 マルクから 2500 マルクのところである（この場合住居費と食料費ははるかに規則的に増大する）。——絶対値の分析からは、食料費は常に最も重要なものであるが、そのすぐ後に来るのは、場合により、ある時は住居の欲求であったり、ある時は衣服であったりする。ということが結果するように思われる。実際、衣服費は食料費が減少する時、或いは増大の速度が小さいとき、住居費よりもはるかに多く増大する。その代り衣服費は食料費の上昇による制限的影響を、住居費よりもはるかに多く蒙る（なぜなら、衣服費はその場合明らかに低下するが、住居費の上昇はただ遅れるだけだからである）。この点は重要である。諸傾向のこうした多様性がこれらのカテゴリーのそれぞれにおいて代表されている、或いは大抵は代表されている社会集団の多様性を表わすことは考えられることだからである（このような多様性を説明するのは家族構成ではない。衣服費の曲線における最大値ないしは最小値と家族の平均における大小との間には何ら規則的な関係は存在しない）。このことは多分一般に、我々が家族構成および相対値で表わされた支出によって分類された世帯を検討した際にすでに指摘したこと、すなわち衣服費は住居費よりも重要であること、を確認するものであろう。なぜなら、食料費が定常的である、或いは少ししか増大し



ないのは、衣料費の増大を可能にするためである場合の方が、住居費により多くのゆとりを与えるためである場合よりも、はるかに頻度が高いからである。しかし住居費に多く使われる場合が表面に現われるのは間隔をおいてのみであり、そしてそのような場合でさえそれほど高まらない住居についての欲求は、中間期においてもそれほど低下しない。

総支出に対する各支出の比率の検討に移り（本書pp.322-323 参照）、まずすべての都市に  
関係する資料を検討しよう（表の下）。——食料費の比率は収入（或いは総支出）が増大するにつれて小さくなるというエンゲルの法則は大体のところ確認される（■され得る？）。1800 マルクのカテゴリー以前ではこの比率はその次のものにおけるよりも高い。他方、1200 から 1800 のところではこの比率は減少する傾向にある。最大値（1200、1400、及び 1800）、最小値（1500 及び 1600）、そして平均（1500 及び 1700）は減少数列である。1900 マルク以降では、最小値（1900 及び 2200）も、平均（2000 及び 2100）も共に減少数列である。この比率がカテゴリー2300-2500 のところで上昇することはたしかである。しかしこれは家族規模がかなり大きくなることに対応している（家族規模の平均は、3.9 から 5 に移行する。2500 及び、特に 2600 については、大きな減少がある）。最大値と最小値の存在そのもの（これは数列の実数の<sup>リアル</sup>低落を直ちには認識させなくする）については、家族構成の不均衡によって多分説明され得るであろうが、ただし部分的である。ここにもまた多くの曖昧な点が残っている。そして、食料費の比率は収入と世帯規模だけでは説明されえないのである。——住居費の比率はカテゴリー2200 マルクのところまで検討される必要がある。なぜなら 2200 から 2500 のところで、その比率は食料費の例外的な上昇によって低下するからである。食料費そのものはすでに見たように家族の増大によって説明されるのであるが、住居費は 1300 から 2200 のところで全体として増加し、1600 から 2100 のところで全体としてほとんど定常である。他方、1600 から 2400 のところで住居費の運動は食料費の運動と定期的に逆方向になるが、しかしほとんど常に勢いはかなり衰えている。1200 マルクのところ（食料費の例外的な上昇と住居費の減少、その理由は家族規模の急激な増大である）を除いて、2200 マルクのところまでは、これらの支出は同じ方向にある（但し同じ大きさで動くのではない）。運動のこうした鈍化ならびに方向関係の急激な変化は、この場合曲線が表わしているのは多様な運動と傾向の一結合に他ならないと想定させるものである。これは研究してみなければならぬであろう。しかし我々が先に統計事務所アンケートについてみたように、これらの集団においては住居費の比率を同一水準に保つという確かな傾向が存在する。1600 から 2200 のところ（平均的構成の世帯）と 2300 から 2500 のところ（非常に人数の多い世帯）で非常に顕著である。しかしこの場合でさえこの同一水準を保つという傾向が全面的に支配するわけではない。しかも 1000 から 1600 のところでは逆にいまのところ説明できない多くの変動が存在する。——衣服費については全体としてその比率は住居費よりは少し高く増大するが、その運動を簡単には説明できない。衣服費の動きはしばしば食料費の動きと逆方向であるが、住居費の動きとは同方向である。しかししばしばこの逆でもある。しかしながら衣服費のほとんどすべての最小値は食料費の上昇と対応しており（カテゴリー1200、1400、2000、2300 マルク）、そしてほとんどすべての最大値は食料費の低下と対応している（1000、1300、1600、1900、2100、2600 マルク）。この場合も事態は複雑である。しかし我々は先のアンケートにおけると同じく、エンゲルの命題とは逆になるが、あらゆる収入水準について衣服費も住居費と同じく、総支

出に対して大体同じ割合を占め続けはしないこと、そしてそれらの動きは大抵対称関係にあるのに比率的には増大していること、を確認できる。——最後に、「その他の支出」の比率は確かな形では決して増大しない。2000 マルクまでのカテゴリで連続的な増大を指摘するためには三つの最大値を捨象しなければならないであろう。しかし次のところではこの比率は目に見える形で再び低下する。すべての支出カテゴリのなかで、全体に最も定常的なのは「その他の支出」である。逆に統計事務所のアンケートでは「その他の支出」は全体として増大することを我々は確認した。問題を不明瞭にするのは、食料費の比率が（家族規模の増大によって）まさに 2000 マルク以降のカテゴリ（■？）について増大することである。「その他の支出」の比率における増大は、もし食料費が増大しなかったとすれば、2000 マルクのカテゴリを越えて続く想定することができる。

総支出及び都市規模別世帯カテゴリにおける、各支出の総支出に対する割合（％）  
（金属労働者アンケート）

総支出	世帯数	世帯規模	食料費	飲料費	飲食費	衣服費	住居費	住居費及び交通費	暖房及び照明費	その他の支出	
1000~1099	4	2,3	46,7	4,4	51	16,6	12,8	13,4	5,4	13,7	小都市及び平均的都市
1100~1199	10	2,7	47,5	4,9	52,3	12,3	13,6	15,2	5,2	14,9	
1200~1299	8	3,5	54,8	4,2	59	9,8	12,7	13	5,3	13,6	
1300~1399	14	3,2	48,8	5,6	54,3	14,3	10,8	11,6	4,5	15,4	
1400~1499	14	3,8	51,2	5,3	56,6	10,5	13,2	14	5,1	14,2	
1500~1599	20	3,8	47,5	5,6	53	12,8	13,4	14,4	4,6	15,3	
1600~1699	11	3,5	46,6	4,3	51	14,2	13	14,6	4	16,4	
1700~1799	12	3,85	48,5	5,7	54,2	13,8	12,7	13,8	4,2	13,9	
1800~1899	8	4,5	49,5	4,3	53,8	14,2	12	12,3	3,7	16,2	
1900~1999	8	4,4	43,5	3,3	46,8	16	13,4	14,7	4,3	18,3	
2000~2099	9	4,2	48,3	3,3	51,7	11	14,6	14,9	5,5	17,1	
2100~2199	5	4,85	51,7	3,6	55,4	15	11,4	12	3,8	14,4	
2200~2299	2	4,7	43,2	6,5	49,7	16,6	13,4	14,2	5	14,2	
2300~2399	5	4,65	46,5	4,8	51,2	14,1	12,4	13,1	3,8	18,4	
2400~2499	3	4,7	50	7,6	57,6	10	14,2	14,6	3,8	13,9	
2500~2599	3	5,15	45,6	5,1	50,7	13,8	15,5	16,6	4,7	14,3	
1100~1199	1	2,3	43,1	5,6	48,8	12,2	21,4	22,4	2,8	14,2	大
1200~1299	2	4	55	1,9	57	8,9	15,3	15,6	4,7	14	
1300~1399	6	3,5	48,8	5,	54	9,2	15,8	17	4,4	15,2	
1400~1499	10	3	48,2	5,8	54	10,2	16,2	17,2	4,8	14,2	
1500~1599	13	3,3	48,3	5,8	54	10,5	15	16	4,5	15	
1600~1699	19	3,1	45,7	4,9	50,7	11,6	16	17,3	4,5	15,7	

1700~1799	22	3,8	46,9	5	52	11,4	16	17	4,6	15,3	都市
1800~1899	14	3,95	48,5	4,7	53,4	12,2	15,8	16,8	3,5	14,4	
1900~1999	22	3,6	46	6	52	12,8	15,6	17,2	4,3	14,2	
2000~2099	19	3,9	45,8	6,4	52,2	12,4	15	16,6	3,9	14,9	
2100~2199	16	3,9	45,5	4,9	50,4	15,2	15,8	17	4	13,5	
2200~2299	13	3,8	42,5	7,5	50	12,8	16,6	19	3,8	14,6	
2300~2399	8	5,2	50	5	55	11,6	14,6	16,1	4,1	13,9	
2400~2499	2	5,55	44	4,9	49	19,6	14,7	15,6	3,4	12,7	
2500~2599	4	5,3	49,5	4,1	53,5	13	13,6	14,7	3,8	15,1	
2600~2699	6	5,3	42,5	5,5	48	15	15,2	16,5	3,4	16,9	
2700~2799	1	3,1	40,4	2,3	42,6	16,4	23,5	26	4,9	9,9	
2800~2899	3	6,1	51,3	5,8	52,1	12,3	13,3	14,5	3,3	12,8	
1000~1099	4	2,3	46,7	4,4	51	16,6	12,8	13,4	5,4	13,7	
1100~1199	11	2,65	47,3	5	52,1	12,4	14,4	15,9	5	15	
1200~1299	10	3,6	54	3,7	57,8	9,7	13,2	13,6	5,2	13,6	
1300~1399	20	3,3	48,9	5,2	54	12,8	12,2	13,2	4,4	15,4	
1400~1499	24	3,45	50	5,5	55,5	10,3	14,5	15,4	5	14,2	
1500~1599	33	3,6	47,5	5,6	53	11,8	13,7	15,1	4,5	15,1	
1600~1699	30	3,25	46	4,7	50,8	12,6	15	16,2	4,3	16	
1700~1799	34	3,8	47,5	5,3	52,8	12,2	14,8	15,9	4,4	14,8	
1800~1899	22	4,1	48,8	4,6	53,4	12,9	14,5	15,1	3,6	15	
1900~1999	30	3,8	45,4	5,3	50,7	13,6	15	16,5	4,3	15,3	
2000~2099	28	3,9	46,6	5,4	52	12	14,8	16	4,4	15,5	
2100~2199	21	4,1	47	4,6	51,5	15,1	14,7	15,8	4	13,8	
2200~2299	15	3,9	42,5	7,3	50	13,3	16,2	18,3	4	14,5	
2300~2399	13	5	48,4	4,9	53,4	12,5	13,7	14,8	4	15,2	
2400~2499	5	5,05	47,7	6,6	54,2	13,8	14,4	15	3,7	13,4	
2500~2599	7	5,25	47,9	4,4	52,2	13,4	14,4	15,5	4,2	14,7	
2600~2799	7	5	42,4	5,1	47,5	15,3	15,9	18	3,7	15,9	
2800~2899	3	3	51,5	5,8	57,3	12,4	13,4	14,5	3,3	12,9	

さて、世帯を彼らが住んでいる都市圏の規模によって区別し、上に分析したような全体的結果を考える代りに（本書 pp.322-323 の表上部のように）小都市及び平均的都市と大都市において収入のカテゴリー別にその支出を検討すれば、我々は何を学ぶことができるであろうか。——我々はまず、食料費について、小都市及び平均的都市における総支出に対する比率曲線の極端な不規則性と、大都市における、非常に概略的ではあるが、規則性を指摘する。小都市及び平均的都市のカテゴリーに含まれている、やや規模の小さい世帯の数を引き合いに出すことによってこれを説明することはできない。食料費の割合の減少は、二つの場合に現実になっているが、大都市においてのみ明確である。とりわけ、カテゴリ

—1300-2300 マルクのみを取り上げれば（他のカテゴリーは 6 世帯ないしそれ以下を含んでいだけである）、1500 から 1600 のところ、2000 から 2100 のところで明瞭な下降が見られ、その間では同一水準にとどまる傾向が見られる。食料費の比率は急激に減少し、次には家族が多人数になる度合に応じてのみ上昇する。実際、下降は常に堅張である。小都市及び平均的都市における同じ曲線を同じように分解することは不可能である。この場合明らかに種々の地域的影響が介入し得る。そして余り稠密でない都市圏における社会生活の諸条件は、余り多数でもなくしかも離散している構成員の集団に、共通する習慣や傾向が欠如すること、或いは微弱であることを説明するものである。——同様に、大都市における住居費の曲線は速やかに理解することができる。2200 マルク（含む）まではそれは全く定常的である。次いでそれが減少するとすれば、それは非常に明瞭に家族規模の増大と関連している<sup>(1)</sup>。この場合はエンゲルの命題は確認されるであろう。小都市及び平均的都市においては、住居費は大都市におけるよりもはるかに小さいのであるが、1800 マルク（含む）まではほとんど定常的である。そして次には、一つ二つの下降はあるが増大する傾向にある。しかし、相対的に定常の局面においてさえ方向の変化が非常に多くあり、明確な社会的傾向がそれほど明瞭には作用していないのではないかと考えさせるほどである。——衣服費の比率は大都市では非常に明瞭に増大し、1900 マルクまで連続的に増大する。次いでこの増大は、食料費比率の減或いは増と関連する増或いは減を通して堅調となる。家具などの購入が住居費に結びつけられて衣服費には関連づけられなければ、衣服費の比率は小さくなり、その代り、住居費比率は増大するであろう。逆に小都市及び平均的都市においては、1500 から 1800 のところを除いて、衣服費の比率は絶えることなく、そしてきわめて明瞭に、上昇するか或いは下降する。それは全体としては確かに増大するが、その推移は全く非連続的である。最後に、「その他の支出」の変動は大都市においてはその他の都市におけるよりもはるかに小さく、また頻度も小さい。大都市においては 1600 マルク（含む）まではかすかな上昇の傾向が見られ、2300 マルクまでは下降の傾向が見られるが、突然の変化は見られない。逆に、小都市及び平均的都市においては、変動はまず上昇及び下降の連続的継起であり、次いで上昇或いは下降のきわめて大きな動きである。——結局、小都市及び平均的都市においては運動は非常にぎくしゃくとして不規則であり、曖昧であり、その背後に明確な社会的力を見出し得る望みはない。

- (1) 統計事務所のアンケートでは住居費の比率の増大はさほどでもなかったことを想起しよう。しかし金属労働者のアンケートでは衣服費に関連づけられている家具や維持費等が統計事務所のアンケートでは住居費に関連づけられている。

それゆえ、大都市に限定し、それらの相互関係について我々が知りえたところからして、収入の楷程を昇るにつれて支出及びそれに対応する欲求の重要度がどのようなものと考えられるかを問うことにしよう（これのみが我々の措定し得る問題である）。——家族規模が大きくなるにつれて最も重要になると思われた食料費は、金属労働者のアンケートでは収入が高くなるにつれてますますその比率が小さくなる支出である。この比率の減少は連続的に起るのでは決してなく、間隔をおいて起っていることはたしかである。それゆえ、評価の相違が明確になる特定の時点が存在するのである。しかしこのような突然の変化は他

の支出においては表れないのであるから、食料費が絶えず従属しているのは、他の支出のどれかではなく、全体に対してである。衣服費のきわめて明瞭で連続的な増大は（衣服費は絶対額において他の三つの支出より少ないので総支出に対するその割合の増大は他の支出による同じような増大よりもはるかに大きな相対額の増大に相当する）その代り、食料費の縮減によってますます全面に出て来、また最も多く、最初に利益を得るのは衣服費であることを示している。我々の経験によれば、次に来るのは住居費であり、これは定常的であり、次いで「その他の支出」であり、これはどちらかといえば減少する傾向にある。なお「その他の支出」は住居費に比べて絶対額においてどちらかといえば少ないので、総支出に対するその割合の減少は相対額における大きな減少を意味する。食料費の縮減から得るところ最も少ないのは「その他の支出」である。

## 七. 二つのアンケートからの帰結

二つのアンケートについての以上の分析から次の問題に答えることができるはずである。すなわち、二つのアンケートの間にある、各支出の比率の相違から、労働者家族は同質的で判然たるいくつかの集団に分れるということであるのか。二つのアンケートにおける各支出の相違はとりわけその収入の大きさによって説明され得るのか。——我々は支出の配分について家族規模の影響、収入規模の影響について順次検討した。しかし、家族の増大は収入の減少に等しい、また収入の減少は家族の増大に等しいという考え方を受け容れるならば、結局のところこれらは同じことに帰着するであろう。さしあたりこの見方に立ってみよう。

我々は二つのアンケートにおいて、エンゲルが指摘したように、食料費の比率は収入が増大するにつれて減少すること、収入が減少するにつれて（或いは、家族規模が増大するにつれて——これは我々の仮定では同じことである）、食料費の比率が増大することを確認した。この運動は一般的かつ連続的であることが分っているが、しかもこのことは、急激かつ安定的な上昇（或いは下降）の存在を排除するものではない。いずれのアンケートにおいても我々は、小規模の家族から大規模の家族へ移行するところで食料費が急激に増加すること、そして、余り恵まれていない労働者においては当所から恵まれている労働者にあってはもっと後になってから増加すること（これはあたかも恵まれた労働者にあってははじめから食料が潤沢であったかのようなものである）を見た。他方我々は金属労働者アンケートにおいて、収入の低いところから高いところへの以降に際して、食料費の曲線のなかに、家族構成の不等性では部分的にしか説明されえない、最大値と最小値が存在することを指摘した。これら二つの事実はエンゲルの法則の作用範囲を限定する。もし食料費の比率が全体として収入との一定の関係において変動するとしても、この動きのなかには加速と遅滞、そして不規則性が存在し、これらは他の要因によって説明されなければならない。

衣服費に関しては、それぞれのアンケートについて最終的に到達した結論は部分的にしか重なり合わない（このことはこの項目の定義が同じでないのであるから驚くには当たらない）。総支出に対する衣服費の比率は、金属労働者の場合には、少人数の家族から多人数の家族に移行するところで、定常である。統計事務所が検討した労働者の場合には、恵まれていない世帯では、衣服費は子供 2 人の場合と年長の子供 3 人の場合で増大し、次いで減

少する。恵まれている世帯では衣服費はまず定常であり、次いでかなり年長の子供 3 人或いは 4 人になってからは増大する。収入の楷程を上向しているところで衣服費の動きを検討するならば、いずれのアンケートにおいても非常に明瞭にその増大を確認できる。不規則性はあるがそれはいずれにおいても食料費の顕著な動きと等しく関係している（衣服費の最小値は食料費の上昇と、最大値はそれの下降と対応している）。このことから我々は、エンゲルの定式とは逆に、衣服費が比率的には決して定常的ではないことを見ることができた。しかしその動きは複雑に見える。それは収入と共に増大するが、家族が大きくなっても必ずしも減少しない（家族が大きくなるということは我々の仮定では収入の減少に対応する）。家族が大きくなった場合、衣服費が減少するのは食料費が際だって増大した時、すなわち低収入の世帯について年長の子供 3 人以降のみであるが、ともかくもそこまでは増大する。このような場合もあるが他方、衣服費は定常的であることもある。それゆえ衣服費は住居費や「その他の支出」よりも、家族の増大によってもたらされる制限に対してよりよく抵抗する。衣服費はこれらの支出に比べて、総支出の増加及び食料費比率の減少から、より多くまた連続的に、得るところが大きいからである。——ところで我々としては、統計事務所アンケートが扱った労働者のなかからその支出比率に従って作った集団を参考にすればよい。ほとんど常に、衣服費の比率は  $\alpha$  ほどの平均収入が非常に低く、同じに世帯語ごとの数がかかなり低いときにのみ下降する（全体の  $\alpha$  における最初の四つの集団、 $\beta$  における最初の二つの集団、 $\gamma$  における最初の集団、 $\delta$  における最初の二つの集団）。他方、家賃がほどほどで「その他の支出」が高い  $\epsilon$  においては衣服費は最高である。家賃が高く他の支出がほどほどである  $\delta$  においては衣服費も高い（先に挙げた場合を除いて）。衣服費の増大はより高い社会的水準への移行に対応しているのである。あらゆる支出のなかで、食料費の動きに最も対立的な動きを示すように見えるのは、衣服費である。

住居費の比率は、いずれのアンケートにおいても、家族規模が大きくなるにつれて、減少するように見える。しかし住居費比率の動きは最も複雑なものの一つである。収入規模は余りに変りやすいものである。家族規模の増大（或いは縮小）は住居費の変動を規定するのではあるが、それはある時は急激であり（統計事務所アンケートの場合）、またある時は緩慢で連続的であり（金属労働者の場合）、そしてこれは疑いもなく、住居費のなかに家具その他の購入費を含めているかいないかによっているのである。こうした変動を単純な一つの公式に還元することは不可能である。もしも、住居費が収入と共にいかに変動するかを統計事務所のアンケートに求めるならば、特に家族が多人数の場合には、低下への一定の傾向を示しつつも支配的なのは定常状態であり、金属労働者のアンケートに求めるならば、支配的なのは低下であるが、しかしそれは非常に緩慢かつ連続的で急激な変化はない。さらに、暖房照明費は同じく減少する傾向にあり、この支出はあらゆる収入水準について大体同じ程度にとどまると見るエンゲルの法則はここでもまた確認されえない。要するに、浮かび上がってくるこうした一般的方向にもかかわらず、曖昧な点や不規則なところが多数残っているのである。他の支出と同じく住居費も収入規模から機械的に結果するわけではない。

「その他の支出」に関しては、統計事務所のアンケートではそれは家族が大きくなるにつれて減少するのであるが、しかし余り恵まれていない家族においてははるかに早く減少する。金属労働者のアンケートではそれはまず総支出に対して同一の比率を維持する傾向

があるが、まもなく低下する。恵まれていない家族においてはより早い時期に、その他の家族においては少し遅れて低下するのである。このような結論はほとんど重なり合っている。その代り、収入の楷程を昇るにつれて「その他の支出」の比率がどのように変化するかを検討するときに、統計事務所のアンケートについて大きな、全体としての集団に限定すれば、収入が高ければ高いほど雑費の比率は大きくなるというエンゲルの命題は検証されるが、金属労働者のアンケートの場合にはもはやこの命題は成り立たない。初めにかなり不確実な上昇があり、次いではっきりした下降運動がある。(しかし)全体としては、あらゆる支出のカテゴリーのなかで、最も定常的なのは「その他の支出」であると言えよう。さらに上のような相違の重みを強調しすぎてはならないであろう。二つのアンケートの方法上の違い、また被質問者の違い(金属労働者のアンケートは組合員のみを対象としている)はすでにしてこうしたことを予想させていた。それにしても統計事務所のアンケートでは「その他の支出」の動きは見かけよりもはるかに不規則的である。このアンケートの場合、世帯をその構成に従って二つの集団に分ければ、いずれの集団においてもこの支出の増大は連続的ではないと、一連のカテゴリー全体についていずれの集団においても停滞が存在することを指摘できるであろう。このことは、ここでもまた、その他の支出の比率を単に収入に基づいて決めることはできないこと、他の原因が介入していることの徴しである。

実際、エンゲルと、労働者の消費傾向全体をこのようにいくつかの単純な法則によって説明しようとする人々は、各世帯がすでに過去のものである習慣に対する依存のうちにあること、各世帯はその現在の生活水準を部分的には過去の習慣に従いながら決めていることを忘れていたのである。我々は労働者の欲求の現実における性質を検討するであろう。しかし我々がすでに指摘したように、収入水準の高い世帯といってもそのうちのあるものは以前から高い給与を得ていたものであり、他のものは新たに高い給与を得るようになったのである。彼らが高い総収入を得るようになってからの時間は多少とも短いものであるが、彼らが高い収入および昔の生活様式に合った嗜好と判断とを身につけてから、まだほとんど時間が経過していない。このことは、収入カテゴリーで分類した世帯を研究した際に我々が指摘した、支出比率についての多くの不規則性、突然の上昇或いは下降を説明するはずである。このことはまた総収入と総支出が何らかの理由によって減少した世帯についても同様である。労働者の欲求と生活水準をとりわけ分化させるものは、彼らが農民階級との間にもっている多少とも緊密な関係であること、労働者は農民階級から出てほとんど間がないこと、彼らは農民階級との接触をすべて断ったわけでは決してないこと、彼らの両親は多く農民階級であること、等、こうしたことは十分あり得ることである。しかしこうしたことは我々のアンケートには全く表れて来ない。職業も収入もこうした点の徴表とはならない。ところで、同一の収入カテゴリーのなかにこうした点で非常に異なる労働者或いはその集団が溶け合っているならば、それは、我々の目を逃れてはいるが介入してはいるところの、欲求の多様性の一原因である。このことは一般的法則と規則性が顕れ出るのを妨げるものではなく(我々はエンゲルにならって先の頁でそれらを定式化するのに努めたのである)、同時に欲求の複雑さとその例外とを説明するものでもある。

生活水準の違い、それぞれの生活水準を採用する集団の凝集、集団の分離する間隔の深さとその社会的重要性、これらについて上のような法則とその限界から、いま何を結論す

べきであろうか。もしエンゲルによって定式化された法則が単独で適用されたならば、もし非常に連続的な形で、高い収入水準に移行するにつれて食料費の比率が減少し、住居費と衣服費の比率が定常的であり、「その他の支出」の比率が増大するのであるならば、またもし、我々のアンケートの結果からうかがわれるように、住居費の比率は軽微に減少するが衣服費の比率は収入系列の少なくとも両端で明瞭に増大し、そして、簡単には定義できないが中間帯までは嗜好、欲求、それらの満足の違いが二つ或いはそれ以上の集合表象に翻訳され得るようであるならば。もしある収入カテゴリーから別のカテゴリーへの移行が頻繁にはおこらなかったとすれば、或いは、もしこうした移行のそれぞれにおいて労働者がその以前の欲求の種類と重要性を全く忘れてしまうのであれば、そして、あらゆる習慣をすぐになくしてしまい、自らが現在しているところの集団の習慣を採用するのであれば、こうした集合表象が安定し相互に対立し、そして階級表象となることは、想定され得ることである。しかし事態は決してそうではない。家族の増大が、とりわけ家族の稼ぎを増やそうとする努力——これはうまくいくこともあれば失敗することもある——が、ここでは決定的な役割を演ずることを我々はすでに見た。収入が比例的に増加しないのに規模が大きくなる家族は、恐らく社会的地位が変わるであろう。しかし、そのような家族が、彼らを格付けするところの支出を、他の支出は犠牲にし極端に制限してでも、同一の水準に保つことに成功することもあり得る。家族構成とその収入を考察すれば、存続し得る支出秩序とは全く別の支出秩序が、我々の単純な法則に従って、予想されるであろう。より高いカテゴリーに位置づけられるべくして、しかもその嗜好を全く変えないか、或いはすぐには変えない、収入の増えている家族は、エンゲル或いは我々が明らかにした諸関係を確認するものでは決してない。その結果、不規則性、変化、過去の残存物が余りに多く見られ、一家族の支出、特定の支出（特に社会的支出）を考察するだけでは、その家族の収入、金銭的能力を認識するには足りないことになる。しかし、もしある関係（■原稿にチェックあり）が不変でなければ、容易に知覚され得るものでなければ、そのような関係が含まれている社会的表象はその分だけ強制力を失なうであろう。それゆえ労働者階級は、独立の集合意識が展開し、異なる生活水準によって定義されるような、いくつかの集団に分解されるようには見えない。

いまや我々は以上の分析に基づいて次の別の問題に答えたい。すなわち、労働者階級全体に共通する生活水準、つまりすべての労働者が多少とも意識的に到達しようとする生活水準なるものは存在するか。その生活水準の社会的意味は何か、またそれは労働者の労働の機能及び条件によってどの程度説明され得るか。その前にしかし、多様な支出カテゴリーをできる限り詳しく検討し、細部に立ち入り、もし必要があればその複雑さを認識することが有益であろうと思われる。これは我々が到達した結論、すなわち労働者階級のなかには生活水準の多様さに基づく分離は存在しないという結論を確認するための手段となるであろう。これはまた確実に労働者一般の消費傾向をよりよく理解することを助けるであろう。



## 第五章 労働者の食料と住居

### 一. 食料費の詳細

フランス労働局が発表した最近の文書<sup>(1)</sup>のなかで次のように述べられている。「生活費が突然変化する問題は多分二つの局面において検討され得るであろう。一. 時間、空間により、習慣、嗜好、社会的関係と共に変化する生活様式を考える場合。この場合、生活費の変化は實際上収入の変化に順応する。すなわち、労働者の場合には給与の変化に順応する<sup>(2)</sup>。二. 変化しない生活様式を考える場合。生活費の変化についての研究はこの場合、物価の運動についての調査を要求する」(p.10)。しかし、物価と給与のあれこれの変化について分ったとしても、さて様々の欲求は物価と給与との間でいかなる関係にあるのか。これが本質的な問題であろう。今日では労働者たちは昔よりも安い値段である種の食料を購入することができ(これはとりわけ労働局が検討したことである)、さらに、給与からしても、食料費の他の支出に対する比率を昔よりも大きくしなくてもそうした食料をより多く購入できることが分っている。しかしこのことは、彼ら労働者が物価の低下或いは給与の増加を、より多く食するために、或いはよりよいものを食するために利用しようとしているのかどうかについて我々に教えるものでは少しもない。

(1) 「1910年までの各時期における給与と生活費」、パリ、Imprimerie Nationale, 1911

(2) 同時に貯蓄の動きも観察しなければならないであろう。

我々がここで食料費の問題を立てるのはもはやこのような条件においてではない。我々は総支出に対する食料費の割合がどのように変化するかを、時代別にではなく、同一国同時期における家族構成、収入、等との関係において検討した。食料費の割合は一般に家族規模の増大と共に大きくなり、収入が増えるにつれて低くなることを我々は確認したが、不規則性、増大へのはっきりした抵抗、低下への加速をもともなっており、これらを我々は同一のカテゴリーに様々に異なる比率で含まれている労働者の社会的多様性によって説明するであろう。我々はまたこうした要因の結合した作用をよりよく理解するために、食料費をもはや総支出に対する関係においてではなく、またそれ以外の各支出に対する関係においてでもなく、それ自体において、その細部と要素において研究することの必要性をいまや結論するであろう。総額の数字のいくつかはしかし、我々を欺くものである。同じ数字の食料費であっても、それが人数の少ない世帯のものであるか、或いは子供が非常に多い家族のものであるか、食卓にあるのが贅沢で風変わりな料理であるか、必要な栄養を含む沢山の食物だけか、によって全く異なる意味をもつに違いない。我々をしてこのような分析をなさしめるものは、家計についての綿密な方法が有する利点である。

しかしこの方法はこの場合かなり恣意的ではないか。毎年、同一の世帯について見ると食料費は総支出に対してほとんど同じ割合を示していること、このことはこの世帯がこの割合を決して越えないと決意していること、によって説明され得る。このことから毎日行なわれる飲食物、たとえばパンとか牛乳とかワインの購入の削減、制限、また量についての一定の恒常性の維持が生ずるということである。しかしさらに、同一の家族そして同一の個々人における食材についての嗜好の変化、その継続、そして思いがけないもともと

の嗜好への復帰、これらをどうして計算に入れないのか<sup>(1)</sup>。多くの世帯において不規則性の原理が存在するはずであり、その結果として相対的潤沢の時期と窮乏の時期とが明瞭な法則なしに継起するはずである。事態がこのようであるとすればしかし、毎年或いは毎月の終りに食費全体に対する食物の種類毎の比率が恒常性を有することを期待できるであろうか。換言すれば、食物の購入量の多寡を考えれば、食物の多様性を考えれば、また食物欲求の非常な変わりやすさ——種々の時期によって非常に異なる多くの方向にそそのかされ、生理状態のあらゆる変化、気候と温度、個人的体質と気まぐれに従属する——を考えれば、仮に長い時間のなかでこうした不規則性が貯蓄されるのではなく相殺されるとすれば、また、野菜等の支出に対する実の支出の割合に多くの変化が生じないとすれば、それは全くの幸運であろう。

- (1) シュナッパー・アルント (schnapper-Arndt) は NÄhrikelé (講演と論文、1906) の論文の後に、一年間全体について、黒と白の一連の点で、彼が肉の日および肉抜きの日と読んでいるものの連続と交替を示している。その配分はかなり不規則的ではあるけれども、肉の日は連続する12ヶ月について14、9、16、13、16、13、21、17、10、18、14、12、日であり、7月から10月を除いて平均12日から16日である。他方肉の日は大抵接近し集中しており、3日、4日、5日、6日と続くが、肉抜きの日も同様である。この配分が当事者の自由な選択の結果ではなく、特に彼らの労働条件の結果であることは全く疑いない。なぜなら、肉の日はとりわけ当事者たちが仕事の依頼人のところで食事を供された日々だからである。しかしその献立が集められたであろう多数の被質問者に関してこの種類の表が示されていないことは遺憾とすべきである。

我々はいく、連続数年にわたって注意深くつけられた家計簿はほとんどもっていない。——20年間にわたる支出をホフマンが公表した事務員の世帯に関して(p.143を見よ)、彼は食物の七つのカテゴリーのそれぞれについての年々の支出合計を示している<sup>(1)</sup>。我々は各カテゴリーの支出の食料費全体に対する割合を計算し、次の表を得た。

年々の食料費 (事務員の世帯)

年	quet の数	食料費 (指数)	肉とソー セージ 0/0	パンと小 麦 0/0	野菜と果 実 0/0	牛乳と卵 0/0	食用油 0/0	香辛料等 0/8	飲料 0/0
1866	6,5	59	32	21	7,5	19	7,4	13	7
1867	7,5	66	29,5	20,5	9	22,5	10	8	9
1868	8,6	71	26	24,5	7	26,5	7,5	8,7	〃
1869	8,8	72	25,6	27	9	22,5	7,5	8,6	2
1870	9,10	71	29	23,5	7	25	6	9	〃
1871	9,40	82	32	29	6	17,4	5,5	10,5	3,5
1872	9,70	95	27	25,5	8	17,6	10,5	11	12
1873	11	101	32,5	23,5	6	20	7,8	9,7	〃

1874	11,4	104	30	27	5,8	16,5	10,4	10,4	〃
1875	11,8	100	32	24	6,3	15,3	10	12,5	2,5
1876	12,2	101	32	25	6	18	9	10,4	〃
1877	12,6	93	30	24	4,6	21,5	9,5	10	〃
1878	13	92	29	22,5	6,6	21	10,2	10,8	2
1879	13,4	89	30	22,5	6,2	19,5	10,3	11,8	3,7
1880	13,8	90	30,5	23	6,9	17,8	10,1	12	〃
1881	14,2	90	31,5	22	7	16,2	10	13,3	13,4
1882	14,6	91	29	25	7,3	16,5	9,5	13,4	〃
1883	15	90	31,8	21,5	6,4	17	9,6	13,8	3,7
1884	15,4	98	33,5	22,4	6,9	15,8	9	12,3	〃
1885	15,8	102	36	21,8	7,1	14,9	8,3	12,2	3,2

この表はとりわけ次の点で我々の関心を惹く。すなわち世帯の現実的規模（子供の年齢）が変化しても、また、食料費そのものが非常に変化しても、食料費全体に対する各種の食物の比率はかなり狭い範囲内でしか動かず、その限界を越えることは稀だという点である。最後の二つのカテゴリーを別にすれば、事実、肉とソーセージの費用の比率は二九%から32%までの範囲から外れるのは5回だけである。最低（26%及び25.6%）は食料費総額の少なさに対応しており、最大（33.5%及び36%）は食料費総額の多さに対応しているが、しかしこれら二系列の数字の間に恒常的な関係を指摘することはできない。パンと小麦粉の費用は三つの場合を除いて20%から25%の間である。最大のうちの二つ（27%が二回）は肉及びソーセージの費用が少ない或いはほどほどであることに対応している。野菜及び果物の費用は三つの場合を除いて6%から8%、牛乳および卵の費用は四つの場合を除いて16%から22%、食用油の費用は二つの場合を除いて7%から10%である。要するに最も変動するのは牛乳と卵の費用である。この費用は（1877年から78年にかけて軽微な上昇を示すが）全体として減少する。このことは子供が大きくなったこと、および、生活様式の一般的国民的な変化に起因し得る（別の著者たちの言うところでは、スイス人は乳製品の消費が少ない。輸出のためのチーズを作ることがますます多くなっているからである）。これには肉とソーセージの費用の僅かな増加が対応するであろう（1872-3年の前の時期と後の時期とを比較せよ）。——きわめて幅は小さいもののこうした変動にもかかわらず、各種の食物のカテゴリーの比において、非常に近似的ではあるが、ある恒常的なものが残っている。年間収入が2685フランから3503フランまで上昇し、労働所得に加えて772フランの資本利益を期末には得る一事務員の場合と同様、蓄えも少なく気まぐれにもふけない一労働者の食料費においてはなおさらのこと、同じ恒常的なものが見出（■さ）れるだろうと想定することができる。

- (1) 最後から二番目のもの（香辛料等）はまだ十分にしか定義されておらず、最後のもの（飲料）は間隔をおいてしか示されていないが、恐らくずっと以前にしばしば数年前になされた購入をさし

ているのであろう（さらに飲料は食料費総額のなかに含まれていない）。

しかしこのような恒常性はいかに説明されるのであろうか。習慣を引き合いに出すこと、これは答えることにならない。なぜなら習慣そのものもその根拠を有するはずだからである。生理的欲求について語るであらうか、本能が各人を促して彼にとって有利な食物、彼にとって最も有利な食物を求めしめるのであり、かくして給与の等しくない労働者によって採用される摂食体制の多様性が表現しているのは、ただ彼らの得ることのできる自然的食欲の満足の、程度の違いである、と言うであらうか。しかしこれほどわかりにくいことはない。食物への欲求が他のすべての欲求よりも自然的であることは認めよう。なぜなら人体の維持は食物への欲求の規則的満身に最も大きく依存しているのであるから。しかし食物への欲求はとても複雑であり、非常に多くの感覚と器官とに関係し、余りに多くの表象を喚起し、そしてこの表象がこんどは食物への欲求を呼び起こし、という関係にあり、発展変化しなかったということはあるはず、大いに非自然化せざるをえなかった。我々の社会にあって、すべての人体が急速に体力を回復し活力を回復し健康になるためには、人々をその食欲に委ね、食料品倉庫への接近を人々に許し、あらゆる食べ物をその裁量に委ねればよいとは誰も考えないであらう。多くの悪習、無知、偏見を考慮に容れる必要があるであらう<sup>(1)</sup>。

- (1) ランダウジー氏 (Landouzy) とラベ氏 (Labbé) は、『パリの事務員と労働者の一定数における食料摂取に関するアンケート』(パリ、1906)において彼らが観察した人々の食料選好についての表を作成した。彼らの見出したところによれば、砂糖は最も元気をつける食物の一つであるのに（1スー分の砂糖は5スー分のワインに相当すると彼らは言う）、男子の辛うじて25%、女子の辛うじて20%が砂糖を好むという状態であった（しかも、砂糖を好む者のうち多くは一日に角砂糖2個ないしは3個以上は消費していない）。大いに間違っているが、彼らはケーキや菓子を愛好していない。「彼らはそれらを栄養的価値のないものと考えており、それゆえ無価値と判断し、金持ちにまさしくふさわしいものと判断している。食料購入のために勤労者によって使われる、平均1フラン25スーのうち、彼らは75スー、すなわち60%を肉に使う。しかし200グラムの肉は適当な労働に必要な総カロリー量の辛うじて38%を供給するにすぎない。」多くの労働者がサラダや香辛料のような高価で栄養のない食物を摂取している。男子の53.4%、女子の42.7%が朝実質的な食事をとらず、昼間で食事をしない。多数の外国人労働者の間にもこの種の注目すべき状態が見られるであらう。

生理学者や医者が大いに議論の余地ある理論からかなりしばしば着想を得ることは疑いない。座って仕事をしている事務員の多くが肉食の濫用によって苦しんでいるとしたら、労働者の摂食体制から肉を除外する必要があるだろうか。ランダウジー氏とラベ氏はこの点については考えを及ぼしておらず、次のように宣言するにいたっては大げさな誇張である。「興奮性の食品としての肉が栄養摂取において比較的大きな役割を演ずる必要があるのは、ほとんどもっぱら土木従業員や鉄鋼労働者、また市場の人足等のような、背高く頑固な労働者の場合に限られる」。余りにしばしば「節食法」の発明家は一定量の食物のなかに含まれている栄養分があたかもすべて同化吸収されているかのように論ずるのであるが、

恒常的に一定比率の目減りが存在する。すべてが同化吸収されるのではなく、その程度は一定量の条件、すなわち一般的体質、健康状態、胃の素質、神経的ないしは筋肉的疲労、また精神的性向にも依存する。同化吸収に役立つすべての液をつくり出す腺はこうした原因すべてに依存しており、また精神的性向そのものは習慣、想像力、とり巻き、食べ物の卓越性或いはよき嗜好に関する信念及び偏見、等から結果する。この著書の著者たちは、実験室でなされた観察について、それが人間を例外的な条件の下に置いていることを非難している。しかし少なくとも、個人ごとに、体質ごとに、生理的ならびに社会的習慣ごとに、実際の目減りを比較することによって、様々のカテゴリーの食物の現実的栄養価を測定し得るのは実験室においてのみである。

他方、労働者がまず最初に、そして自発的に要求するものが何であるかを、理解する必要がある。労働者にとって、衰弱と倦怠の辛い感情を経験することなくその仕事を続けるためには、彼らが必要とするエネルギー全体をまかなうことだけが問題ではない<sup>(1)</sup>。もし彼らにとって本質的なことが力の幻想を獲得することであるとすれば、いかなる理屈も彼らをしてアルコール、或いはほとんど栄養はないが「腹持ちのよい」食べ物から離れさせることはない。労働者にとって食事がとりわけ味覚を楽しませ、その有機体組織に一時的ながら快い以上興奮を伝える機会であるとすれば、彼らは食事を散文的な作業に変えることを拒否するであろう。余りに仕事を思い出させる作業は拒みたいのである。食事も仕事となればその場合には彼らはそれまでに消費した力および今後仕事に献じなければならない力といった観念をもっぱら意識していることになるであろう。医者は、いくつかのタイプの作業、——軽労働、中位の労働、重労働、産業、湿気のなかでの作業、或いは乾燥状態での作業、過熱状態での作業、或いは酷寒での作業——を区別して、労働生活の展開される特殊の諸条件を十分考慮に容れたと考えている。しかし彼らは精神的なものすべてを無視している。ある種の作業は気がめいる悲惨なものであり、単調であり、それのもたらず精神の連続的緊張によって神経をいら立たせるものである。またある種の作業は感覚を麻痺させ、神経組織を鈍らせ、思考を麻痺させ、余りに繊細で瞬時の印象を十分に感得することには適さなくし、さらにある種の仕事は、急激にかつ短時間力を振うことを要求し、労働者における実質的気力、沈着、勇氣、なんらかの程度における自発性を前提している。衰弱について、また、このような労働の一回或いは数回の継続の結果として生ずる細胞間の均衡の破壊について述べている生理学的公式がいかなるものであれ、これらの労働が同一の種類に属するものであり、それらの間には量的差異が存在するだけであることは全く述べられていない。いずれにしても、これらの労働の特徴を実際に際立たせることができるのは科学でもなく、なおさら労働者でもない。同じく、こうした問題を純粹に心理学的な術語において措定することを妨げるものは何もない。労働者が食物を摂取するときを考えるのは、身体の回復と同じく精神の救済と元気づけである。あれこれの料理、食べ物について労働者が思うのは、一定量の炭水化物とか脂肪分とか蛋白質とかよりもはるかに多く、ある種の満足についての複雑な表象である（この部分に多数の社会的要素が入り込むことを我々は見るであろう）。そして今後は、純粹科学の名において労働者とぶつかるよりも、このような表象を少しずつ修正し、彼らの習慣的評価が十分に考慮されている体制をまず提案することによって、彼らに働きかける方が遙かに有効だと思われるであろう。医師の助言は、健康に生きることを主要な目的とするある種の人々（une humanité）

にとって価値があることは認めることができる。ただ問題は次の点にある。すなわち、生活の大部分を工場のなかで過ごさなければならない集団にとって本質的なことは、食物の吸収同化或いはその他の形式において、彼らの状態に由来する辛い印象作用を最もよく耐えさせ緩和し忘れさせてくれる、即時で確実な害はない満足を一定間隔で獲得することではないのか、という点である。——労働者の食べ物は、大抵自然に適合しておらず、彼らの体を修復せず、往々長期的には体を害するの役に立っているということを確認できるのは、こうした留保のもとにおいてのみである。それゆえ（多数のアンケートからうかがわれるような）労働者が毎年十分に恒常的な食物摂取体制を採用するとすれば、それは決して本能によってではないし、自然な生理学的欲求に一致しているわけでもない。

- (1) 自然的に、そして十分確実な本能によって労働者はまずは最も実質的な食物に向かう。しかし、これが終わるとすぐ彼らは、自分たちに快い物のために、最も栄養豊かな食物を無視する。これは、最近ベルギーのローントリー (Rowntree) 氏によって行われた家計とのアンケートの結果から出て来るものである。彼らはアンケートされた労働者を収入によって三分類している。第一類（最貧）の一五家族は、1フラン換算で、蛋白質 193 グラムと 5700 カロリー、第二類の 15 家族は 144 グラムの蛋白質と 4110 カロリー、第三類の 21 家族は 122 グラムの蛋白質と 3466 カロリーを、平均、獲得している。(Rowntree, Comment diminuer la misère. Études sur la Belgique. Traduction française, Paris, 1911)

それゆえ我々は、社会的諸原因が様々な食料費の規則性と安定性を説明しないかどうかを究明することを余儀なくされた。我々は先の分析の場合と同じ順序に従って、この場合、地域的要因、職業、家族規模、収入がどの程度作用するかを測定するであろう。

労働者の食物摂取は、農民の食物摂取よりも、所在地及び生産物の性格に依存する度合いが小さい。——ソルヴェイ研究所による、ベルギーの 1065 人の労働者の食物摂取体制に関するアンケートは、「食物配分の栄養価、ことに蛋白質の構成内容は地方的環境によって変化する。蛋白質の比率は本来の産業的中心地において最も低い<sup>(1)</sup>」(p.152) ことを証明したように思われることは確かである。それにもかかわらず、結論は、「食物摂取の様々の様態にとって地域的影響が存在しているとしても、その影響は一般的傾向の作用を埋め合わせることはできない」ということであり、この一般的傾向はとりわけ収入の差によって説明される。

- (1) 魚肉についての比率はブルージュの場合少し高く、チーズについてはソエージュの周辺で少し高い。これはブルージュがエルブ地方のチーズの中心地と並んで位置しているのに対し、リエージュはそれに隣接しているからである (p.155)。しかし地域によって異なるのはとりわけ肉の消費である。「ブリュッセルの一主婦は手帳をつけることを引き受ける際に困惑を隠し切れなかった。なぜなら彼女が言うところでは、私たちは毎日肉を食べるわけではないから、ということであった。逆にシャルルロクの産業中心地の一主婦は、義務に非常に細心で恵まれた状況にある人であるが、明らかな満足と共に、私たちは週に 2 回肉を食べます、と言った」。次下は、消費される蛋白質のうち、肉が 20% 以上を占める労働者の比率である。ブリュッセル都市圏 71%、ブルージュ 36%、ガン 32%、シャルルロクとリエージュの周辺では 26% から 29%、ケナでは 49%、リュクセンブ

ルグの田舎では 34%、フランドルの田舎では 18%。同じ集団を世帯ごとに消費される肉の絶対量に従って位置づけてもほとんど同じ結果に到達するであろう。リエージュの周辺とリュクセンブルグにおいては、ベルギーのその他の地域におけるよりもはるかに多く卵が消費される。次に脂肪の消費について見てみると、「地域的影響が他のすべての影響をしのいでいる。例えば豚の脂肉は、リエージュ周辺の労働者の 86%において、脂肪配分の 10%以上を占め、シャルルロク周辺の労働者においては、それが 10%以上であるのは 37%だけである。(ベーコン入りオムレツのリエージュの伝統)。「その比率はリュクセンブルグの労働者においては 73%、フランドルの労働者においては 36 パーセントである。」逆にフランドルの労働者においてはバターとラードが消費される脂肪のなかで比較的大きな割合を占める。バターの方がラードよりも多く消費される。最後に、「野菜の炭水化物による寄与が最も僅かなのはフランドルの田舎であり、それが相対的に最も目立っているのはいくつかの都市（ブリュッセル、ヴェルヴィエ）においてである」。

ドイツの金属労働者たちはまず、異なる都市において、様々のカテゴリーの食物について、彼らの家計簿によって、小売平均価格の表を作成した。彼らによればかなり大きな隔たりが指摘され得る。牛肉は（キロあたり）オッフエンバッハで 1.36 マルク、フランクフルトで 1.43 マルク、ミュンヘンで 1.53 マルク、ベルリンで 1.71 マルクである。逆に豚肉は）オッフエンバッハで 1.80 マルク、ハンブルグで 1.51 マルク、である。仔牛の肉はカッセルで 1.49 マルク、ハーゲンでは 1.84 マルクである。都市によって質が同じでないということがあり得るとするのは尤もなことである。しかしバターはキロあたりニュルンベルグでは 2.54 マルクであり、ヒュムニッツでは 2.97 マルクであり、砂糖はキロあたりハンブルグでは 0.44 マルクであり、エスリンゲンでは 0.53 マルクである。牛乳はブレスラウで 0.17 マルク、フランクフルトで 0.22 マルク、卵は 1 ダース、ビーレフェルトで 0.73 マルク、カッセルで 0.96 マルクである。——しかしながらこれらは極端な数字である。質が余り重要ではない食物のみを取り上げれば、バターの価格は 21 都市中 17 の都市でキロあたり 2.63 マルクから 2.82 マルクの間に含まれ、砂糖の価格は 21 都市中 17 の都市でキロあたり 0.45 マルクから 0.51 マルクの間に含まれ、卵の価格は 21 都市中 16 の都市でダースあたり 0.80 マルクから 0.92 マルクの間に含まれる。このように僅かな地域的差異が消費者の選好に重大な影響を与えるとは考えられない。

全世界帯について、各種の食物のための週（および 1 日）の出費総額が平均で示されている（p.55）パン（3.34 マルク）と肉（3.02 マルク）がまず最大の出費であり、次いでやや間があいて牛乳（1.69 マルク）、次いでソーセージ（1.67 マルク）、次いでバター（1.29 マルク）、動物性脂肪及びオイル（0.98 マルク）、じゃがいも（0.63 マルク）、野菜（0.43 マルク）が来る。食費の平均支出は週あたり 18.67 マルクであった。金属労働者のアンケートの結果による平均比率と、統計事務所のアンケート結果によるそれとを比較するとおもしろいかも知れない。数字（とりわけ食料費総額に対する割合を示すもの）は非常に接近している。金属労働者は、他の労働者よりも、パンを少し多く、肉をやや少なく、ソーセージをより多く、またバターはやや少なく、動物性脂肪はやや多く消費する。しかし、この二系列の平均と、1856 年にフォション氏によって研究されたパリの大工の消費、及び、1890 年にマルサン氏<sup>(1)</sup>によって観察された大工の消費とによって確認された、フランス労働局（office du travail traçais）の家計類型とを比較すると——これはいくつかの枠組み

のずれにもかかわらず可能である——、多くの差異を指摘できる。パリの労働者はかなり多くのパン、肉を消費し、ソーセージと牛乳は相当

三つのアンケートにおける食料費の細目

	総支出における%		食料費における%		
	金属労働者 (P.67)	統計事務所アン ケートにおける 労働者 (P.61)	金属労働者1	統計事務所アン ケートにおける 労働者 (P.61)	フランス労働局 の家計類型2
パン	9.53	8.9	18.3	17	23
じゃがいも	1.88	1.9	3.5	3.6	1.55
牛乳	4.81	5.2	9.5	10	6.7
肉	8.61	9.3	16.1	17.8	30
卵	1.58	1.5	3	2.8	1.1
ソーセージ	4.76	3.1	8.9	6	3.33
魚	0.57	0.8	1.07	1.5	3.1
バター	3.68	4	6.9	7.7	3
チーズ	0.77	0.9	1.44	1.8	3.4
脂肪	2.79	2.4	5.2	4.6	1.35
野菜	1.12	1.2	2.1	2.4	〃
豆類	0.45	} 1.5	0.8	3.	1.12
小麦粉	1.12		2.1		0.4
スープの実	0.65	〃	1.2	〃	〃
素おアイス	0.48	0.5	0.9	0.9	1.8
砂糖	1.29	1.3	2.4	2.6	0.9
果物	1.22	1.3	2.3	2.5	〃
コーヒー	} 1.79	1.8	3.4	3.4	6.1
ココア、茶					
飲料、タバコ	〃	6.3	11.9	12.2	12.9

1. (P.55の数字より) 我々の計算した比率

2. 同上。下の注を見よ。

に少なく、これらほどではないがじゃがいもの消費は少なく、同時に、バターと動物性脂肪の消費はぐんと少なく、チーズ、コーヒー、カカオ、茶は多めに消費する。フランスの調査者が指摘しているように、この世帯は非常に特殊な観察事例をなすにすぎず (p.52)、労働局が、信頼できる条件の下に集められたより広範なフランスに家計に基づかなかったことを、遺憾とすべきであることはたしかである (イギリス商務省のアンケートも全く僅かな保証しかないが)。しかしながら、フランスとイギリスのような二つの国の間では、食物摂取の違いがかなり深刻であり、それぞれにおいて観察された世帯をこの点で比較する



ことはあらゆる意味において困難であることは了解できる。その代り、同一国において同時期に実施されたアンケートの結果が、各地域における労働者の比率がそれぞれで異なっているものの、ある対応関係を示していること、これは消費の地域的差異が決して重大なものではないことを想定させる。

- (1) Salaires et coût de l'existence, etc.における p.52 以下を参照せよ。我々は、公表された価格に従って支出比率を計算した (p.72、表 16、大工の家計、1889 年の支出)。

この点をさらに確認するために我々は次の表を作成した。この表では金属労働者のアンケートのうち、我々が少なくとも 10 個の家計簿を持っている都市のものだけを取り上げている。食料費総額に対する各食材費の割合 (%) を表しているこれらの数字は p.61 の表に示されている絶対額に従って我々が計算したものである (飲料費は食料費総額のうち

食費細目

	食費における%				
	パン	牛乳	肉 ソーセージ、魚	バター	飲料
ベルリン	19.8	7.3	34.5	9.6	9.2
ハンブルク	17.6	9.5	31.5	5.4	10.2
ミュンヘン	19.4	14.6	35.5	2.9	21.8
フランクフルト	19	12.4	28.5	6	12.4
ニュルンベルク	22	13.6	33.6	2.5	15.2
デュッセルドルフ	18.9	10.3	28.5	6.8	12.4
ハノーバー	21.4	7.4	35.7	9.4	8.5
シュトゥットガルト	15.8	15.3	30	6.2	21.6
ヒュムニッツ	24.7	8.6	22.8	14.6	9.3
マグデブルク	17.3	6.1	34.6	7	6.6
カッセル	17.8	10	32.5	6.8	13.2

に含まれていないが、我々は後者を 100 としてその割合を計算した)。この表を十分に理解するためには、各都市における平均支出総額と家族の平均規模とを同時に考慮する必要がある。すなわち、本書 p.208 の表を参照する必要がある。

肉・ソーセージ・魚の支出は大きな差異を含んでいる。ベルリン、ミュンヘン、ハノーバー、マグデブルグでは非常に多く、ニュルンベルグではかなり多く、ヒュムニッツでは特に少なく、デュッセルドルフ、フランクフルト、シュトゥットガルトではどちらかといえば少なく、ハンブルクではきわめて平均的である。同様にパンの支出はベルリン、ミュンヘン、ニュルンベルク、ハノーバーにおいて、ヒュムニッツを除く他のすべての都市におけるよりも多い。ヒュムニッツではパンのための支出はどこよりも多く、そして (奇妙なことだが) 肉・ソーセージ、等よりも多くさえある。パンの消費が最も少ないのはシュ

トウトガルトである。その代りシュトウトガルトでは飲料費支出がミュンヘンと同じくらい大きい。これら二つの都市では、飲料費はベルリン、ハンブルク、フランクフルト、ハノーバー、ヒュムニッツの二倍以上であり、これらの都市の間ではどちらかといえば接近している。ニュルンベルクはこの点では二つの集団の間に位置している。ニュルンベルクではこれらの都市よりも多く飲む。マグデブルクでは逆に飲料費は他のどの都市よりも明らかに少ない。牛乳の消費は南部の諸都市（ミュンヘン、シュトウトガルト、ニュルンベルク）においてその他の都市よりも多く、さらにフランクフルトでかなり多く、ベルリン、ハノーバー、マグデブルクでは特に少ない。

この表はかなり複雑である。このような差異をどの程度地域的な影響に帰すべきであろうか。いくつかの都市における肉とパンの消費の多さは支出全体の水準によって説明され得るとは決して思われない。これらの消費はベルリン、ミュンヘン、ニュルンベルクで大きい。総支出はフランクフルト及びシュトウトガルトと少なくとも同じくらいの高さである（後者は二都市では肉とパンの消費では少ない）。そして、（肉とパンの消費の多い）ハノーバーとマグデブルクでは総支出は低い。食費を考えれば、それがベルリン、ミュンヘン、ハノーバー、シュトウトガルトで大きく、フランクフルト、ニュルンベルクで少ないということは本当である。しかしその際、ハノーバーではパンと肉を多く食べ、シュトウトガルトでは少なく食べるのは何故であるのか。ハノーバーではシュトウトガルトよりも家族規模が大きいからか（5.3と4.4）。そうかも知れない。しかし、フランクフルトではニュルンベルクよりも家族規模は大きい（5.2と4.7）。それにもかかわらず、肉とパンを食べるのが少ないのはフランクフルトであり、それらを多く食べるのはニュルンベルクなのである。食料費総額と家族規模とがそれぞれ別個に作用したり、或いは同時に作用したりすることがあると考えることもできる。しかし、ちょっとした検討では、地域的影響に真の重要性を付与する仮説は簡単には出て来ない。南部の諸都市における牛乳と飲料の消費の大きさは、家族規模の大きさによっても——それらは全体として平均的である——、食料費の大きさ或いは総支出の大きさによっても——それらは都市によって目に見えて変動する——、決して説明されえないと思われる。

しかし、各都市において分類された世帯は余りに数が少ないと同時にあらゆる点で余りに相違しており、これら雑多な集合に対応する平均データは十分な表現性を備えておらず、それらを安易に比較することはできない。我々は別のもう一つのアンケートを持っているのであるから、これと、同じ都市において得られたものではあるが異なる方法によって選ばれた世帯についての、性質を同じくする平均とを、比較することは可能である。もしその結果が一致すれば、そしてそれらが一致する度合に応じて、指摘される地域的影響は明瞭になり、データのあらゆる雑多さと混乱をも貫通して現れて来るであろう。

統計事務所のアンケートでは、表のなかで、様々の都市における食料費の細目は示されていない。しかし、我々の興味を惹くすべての場合について表 I に従って細目を計算することができた（相対値の計算については、上記と同じ指数を採用した。本書 p.284 を参照）。これらの数値は金属労働者の場合の数値と必ずしも全面的に比較できるわけではない。後者は、食料・飲料・タバコの総額に対する各種の食料支出の割合を示している。しかし、我々の興味を惹くのは、二つのアンケートにおいて都市間の違いが同じであるかどうかを調べることである。そしてこれらは容易なことである。

ところで、金属労働者について我々が指摘したところとは違って、肉・ソーセージ・魚のための支出が、ニュルンベルクでは同じく高いままであるが、ベルリンとミュンヘンではきわめて低い<sup>(1)</sup>。この支出はデュッセルドルフでもフランクフルトでもこれ以上は低くは

統計事務所アンケート

			総支出		食費		食費 (%)				
	世帯数	家族構成	平均 (マルク)	相対額	平均 (マルク)	相対額	肉	バター	パン	牛乳	飲料
ベルリン	19	4.3	1920	95	1190	114	23.3	6.8	14.2	8.1	6.8
ハンブルク	1791	4.15	2100	104	1040	100	27.4	7.3	14.4	9.6	8.4
ミュンヘン	19	4.1	1640	81	910	87	22	3.8	12.2	12	292
フランクフルト	103	4.6	2704	133	1122	108	26.5	7.2	15.8	13.2	8.4
ニュルンベルク	454	4.65	1900	93	985	95	28	1.7	16.6	11.2	18.8
デュッセルドルフ	125	5.3	1730	85	900	87	23.4	8.2	18.4	12.5	4.3
ヒュムニッツ	266	5.55	1860	91	1000	96	21.6	13.8	21.6	7.4	11.2
マグデブルク	10	4.8	1591	78	849	81	31	7.7	18.8	8.7	6.1
カッセル	237	5.6	2370	117	1090	105	25.4	8.4	18.2	11.9	6.6

1. うち労働者168 2. 宿屋での全支出は飲料費に含まれる 3. うち労働者 5  
4. うち労働者41 5. うち労働者11 6. うち労働者24 7. うち労働者14

ならない(またもや我々が指摘したこととは逆である)。同じく、ベルリンでもミュンヘンでも、そしてニュルンベルクでも、先の場合のように、他と比べて遙かに多量のパンの消費は見られない。ハンブルクはこの点でベルリン、ミュンヘンを抜いている。デュッセルドルフ、マグデブルク、そしてカッセルはベルリン、ミュンヘン、ニュルンベルク、そしてハンブルクを抜いている。牛乳の消費については、ミュンヘン及びニュルンベルクにおいて明らかに多いが、デュッセルドルフ及びカッセルにおいても同じくらいである。そしてこれらの都市においては家族規模が大きいことは確かである。逆にベルリン、ハンブルク、そしてマグデブルクでは牛乳消費は明らかに低いままにとどまっている。それゆえ、ミュンヘンとニュルンベルクでは人々は他においてよりも多くの牛乳を飲みたくなるということを知っておく必要がある。これらの都市ではまた、人々は別の種類の飲み物もより多く飲みたくなる。我々のデータはここで金属労働者のそれを完全に裏打ちしており、そして、一方でこれら二つの都市とその他のすべての都市の間の、他方でミュンヘンとニュルンベルクの間での差異はかなりのものになっている。最後にヒュムニッツは二つのアンケートで同じような特徴を示している。肉などの最小の消費とパンの最大の消費が見られ、二つの間に正確な相等性が存在する。

(1) 我々はベルリンについてはこれらのデータを労働者世帯についてのみ計算した。アンケートされ

た 73 家族のうち労働者世帯は 19 しかなかったからである。全体として、平均支出は 3180 マルク、すなわち指数値 156、家族人員 4.45 人、であり、各種食材の比率は以下の通りである。すなわち、肉等 28.4、バター10.2、パン 14.1、牛乳 9.9、飲料 9.3。

総じてこの比較からいえることは、大都市の労働者の食様式に対する地域的影響はきわめて限られたものであるということである。すでにグロートヤーン氏は、異なる時代の家計を比較して、産業労働者については消費が地域的類型の放棄によって一樣になる傾向にあることを指摘していた<sup>(1)</sup>。勿論ビールが第一を占めるのであるが、バイエルンの労働者の消費における飲み物の占める位置の大きさ、そして他方では牛乳の占める位置の大きさはとりわけ覚えておく必要のあるものである。この点についての、バイエルン地方とその他の都市との差異は非常にはっきりしたものであり、収入或いは家族構成にかかわらず存続するものである。それゆえこのことを考慮に容れることは重要ではあろう。しかし一般には地域的影響はその他の要因の働きによって覆い隠されており、不明瞭にされており、その他の要因の作用についての研究においては地域的影響を無視するのが正当である。

(1) Grotjahn (Alfred) . Ueber Wandlungen in der Volksernährung, Leipzig, 1902.

労働者の食様式を説明するために、地域的影響と並んでしばしば職種が引き合いに出される。我々はすでに、支出配分一般に対する職種の影響について述べたときに、この問題を扱った。しかしより綿密にこの問題を分析することが可能である。金属労働者のアンケートにおいては、職種ごとの食料費の細目についてはどの表も示していない。しかし統計事務所のアンケートでは、40 の職種（事務員及び労働者、p.55\*）について、細目が絶対額で示されている。我々はすでにそれについては参照している。しかし、これらのデータに手を加え、いくつかの重要な食材支出について食料費全体に対するその割合を計算することが興味を惹くべき事柄であった。我々はしかし労働者の 21 職種を取り上げただけであり、少なくとも 10 は家計簿のあるもの（および非熟練ならびに熟練工の全集団）を取り上げただけである。

職業別食費細目  
(労働事務所アンケート)

	世帯数	家族規模	食費総額 (相対数)		食費 (%)						
					肉	ソーセージ 及び魚	バター	卵	パン	牛乳	飲料
印刷工	10	5.7	117	109	16.4	7.2	8.8	2.5	18.4	10.8	12.3
石工	41	4.8	102	103	20	6.9	9.1	3.8	16.2	8.8	10.6
大工	20	4.7	99	99	16.1	6.4	7	3.7	16.3	9	15.2
建築熟 練工	18	5	98	104	16.9	6.5	9	2.9	17.4	10	12.8
鋳物工	11	4.3	97	102	16.4	8.4	11	3.5	15.5	8.5	11.3

植字工	16	4.2	94	86	16.2	9	9.4	3.5	15.3	9	9.7
庭師	12	3.6	94	99	20.6	9.4	7.2	3.5	13.5	12.9	6.8
熟練工	382	4.5	93	93	17.9	7.5	8.3	2.9	16.8	9.9	10.1
港湾労働者	17	4	92.5	87	18	8.3	6.8	4.3	16.2	8.3	6
各種熟練工	31	4.5	92	92	18.6	6.1	9.7	3.2	16.8	10.6	9.4
金属熟練工	21	4.3	92	88	18.6	8.3	6.7	3.4	16.3	9.2	10.2
金物工	10	5.1	91	92	17.4	7.8	7.8	2.6	17.2	12.4	6.9
鍛冶工	12	3.6	90	91	20	8.9	5.6	3.3	14.3	9.7	11
指物師	42	5	89	92	15.9	8.3	8.5	2.6	19.2	10.1	8.9
熟練機械工	11	4	89	85	19.5	8.5	6.4	4.2	15.6	9.3	48.2
船建築工	10	3.9	88	86	19.6	7.9	7.8	3.5	16.2	8.6	4.9
ペンキ工	26	3.8	88	85	18	5.9	7.8	3.4	14.2	11	14
道路工	13	4.1	88	100	16.2	7.2	4.6	2.8	16.6	13.6	12.9
錠前工	21	4.2	88	90	18	8.7	8.5	2.2	16.4	9.8	9
馬具工	11	4	87	85	19	8.5	7.7	3.9	16.2	10.2	8.2
非熟練工	54	4.9	84	87	18	6.6	5.7	2.8	18.6	10.2	10
繊維労働者	10	5.1	81	86	14.5	7.6	11.3	2.9	19.6	8.1	6
家具労働者（材木労働者）	15	5.2	79	83	16.6	6.8	9.5	2.9	20.7	10.4	6.8

石工、庭師、鍛冶工、熟練機械工、船大工、はその他に比べて、比率上多くの肉を食べる。次に来るのは、馬具工、各種熟練工、金属熟練工、ペンキ工、そして錠前工である。肉の消費の最も少ないのは、繊維労働者、道路労働者、印刷工、木材熟練工、植字工、鋳造工、大工、指物師、である。多分、我々がすでに指摘したように、この場合大きな筋肉的努力を要するかどうかは、野外であれ閉ざされた空間においてであれ、行なわれる労働の種類の違いによるであろうし、そしてある種の労働者をして他の労働者よりも多くの肉を消費せしめるものは、筋肉的努力如何ではない。肉はその栄養的特性以外に、興奮剤として作用する。それは座って作業している人々に対してよりも、消耗的な骨折りに力を尽す頑丈な人々に対しての方が適格的ではある。しかし、（狭義における職種ではなく、多く

の職種に共通する一般的条件の食物摂取に対する影響を想定している) この説明がしばしば欠陥をもっているであろうことを認識するためには、我々が今列挙した職種の技術的条件を検討してみれば十分である。他方、支出総額或いは食料費総額と肉のための支出額との間に十分明瞭な関係は存在しない。しかし顕著なことは、肉のための支出の比率が最も低い集団は一般に、家族規模が大きい集団だという点であり(繊維労働者 5.1 人、木材労働者 5.2 人、印刷工 5.7 人、指物工 5 人、大工 4.9 人、鑄造工 4.3 人、道路工 4.1 人)、またその比率が最も高い集団は家族規模が小さいという点である(庭師 3.6 人、鍛冶工 3.6 人、熟練機械工 4 人、船大工 3.9 人、石工 4.8 人、次いで、馬具工 4 人、各種熟練工 4.5 人、金属熟練工 4.3 人、ペンキ工 3.8 人、錠前工 4.2 人)。それゆえ家族規模の大きさの影響の方が重大であると思われる(ただ石工だけは明らかに例外をなす。彼らについて有効なのは職種による説明であろう)。

我々はソーセージと魚のための支出を同一の集団にまとめた。これらは(少なくとも評価としては)まさに肉の代用品だからである。もし肉の消費が少ないところではすべてソーセージと魚の消費が多いとすれば、そこに埋合せを認めてよいであろう。しかし事態は全くそうではない。ソーセージと魚のための支出の変動は必ずしも常に肉のための支出の変動に追随するわけではないが、しかし、しばしば追随するのである。肉のための支出が多い場合には大抵ソーセージと魚のための支出が多い、或いは、どちらかと言えば多い場合が対応しているのである。ソーセージと魚は非熟練工の場合よりも熟練工の家庭でやや多く消費される(7.5 対 6.6)、これも総支出の違いによって十分に説明され得る。

逆に肉とパンの出費の間には埋合せの作用が存在する。パンは、繊維労働者、木材熟練工、指物師、印刷工、において最も支出が大きく、彼らの肉のための支出は最低である。パンのための支出は庭師と鍛冶工で最も少なく、彼らは肉のために非常に多くの支出をし、ペンキ工はどちらかといえば多めの支出をする。パンのための支出は建築熟練工および金物工でどちらかといえば多めであり、肉のための支出は平均的である。他のすべての集団において、パンのための支出は著しく恒常的であり、職種の直接的影響に帰せられるべき運動は何も指摘しえない<sup>(1)</sup>。

- (1) パンのための支出は熟練工の場合よりも非熟練工において明らかに多いが、熟練工の家庭において増大が見られるのは肉のための支出ではない。

飲料費(我々は小料理屋でのすべての支出をこれに含めた)は大工とペンキ工において明らかに最大である。ミュンヘンとニュルンベルクにおいてアンケートされたこれらの労働者の数は非常に少ないけれども、この減少は地域的影響からは全く独立している。飲料費はさらに、印刷工、建築熟練工、鑄造工、鍛冶工、道路工において大きい。鍛冶工を除いてこれらすべての労働者は、飲料費が平均以上であるが、肉の消費は非常に平均的或いはむしろ少なめである。(肉のための支出が大きい)庭師と港湾労働者、(肉のための支出は小さいが、総支出も非常に少ない)繊維労働者および木材熟練工にあつては飲料費はきわめて少ない。要するに、大工及びペンキ工における飲料費の水準の高さは、職業の影響に帰することができるであろう。他の職種についてはこれの影響を見ることはできない<sup>(1)</sup>。

(1) 道路工の場合飲料費の水準はどちらかといえば高いのであるが、これは明らかに地域的条件によって説明され得るはずである。道路工のほとんどすべてがシュトラスブルグでアンケートされたものである（幾人かはニュンベルク）。ところで、シュトラスブルグでは飲料費の比率はきわめて高い（すなわち 16 パーセントであり、肉のための支出 16.1%とほぼ同じであり、パン 15%、牛乳 15.5%を抜いている。家族の平均規模は 4.1 人であり、平均総支出は 1040 マルクである。）——アンケートの p.71\*で言われているように、飲料費はビールについては一人当たり 118 リットルであったことを見れば、このような消費についての摘要の正確さについて疑問をもってもよいであろう。しかし、大人に対する子供の比率が我々の扱っている世帯については、帝国の全人口についての場合よりも比較にならないほど高いことを考慮する必要がある。

牛乳の費用についてはまず家族規模と子供の数を考慮しなければならない。牛乳代が 10%を越える場合が 12 回あり、そして、この 10%という数字は 8 回、4.5 人から 5.7 人を数える家族に対応する。庭師、ペンキ工、道路工、馬具工は例外である。これは、道路工については地方的影響によって（下記の注を参照）、庭師については、彼らはまだその習慣によって農民に非常に近いという意味において、職種の影響によって、説明されるとしてよいであろう。他の職種においてはこの比率は 8%から 9%の間で変動する。この比率は、非常に貧困な繊維労働者においてのみ特殊的に低い。——その代り繊維労働者においてはバターのための支出が非常に多い。バターのための支出は非熟練工におけるよりも熟練工において明らかに多い。バターのための支出は収入と関係しているようには見えない。バターはある時は（パンに塗る形で）パン等より高価な食品の代用をなし、あるときは、いくらか、贅沢な食品である。——他の食費に関しては、これまで我々が見て来たものが残す幅に主として依存するので、それらを検討しても我々の到達した結論にほとんど変りはないであろう。

要約すれば、石工の肉の消費が多いこと、大工とペンキ工において飲料費が多いこと、そして庭師の牛乳の消費が多いこと、これらは彼らの職種の条件によって説明され得るであろう。他の職業集団についてはすべて、他の説明がより妥当であろう。

それゆえ、位置と職種の作用はどちらかといえば限定されており、明らかに減少過程にある。マックス・ウェーバーは「地域的消費の類型から離れる確実な傾向が、ある一様化された消費を生み出しており、その種類はもはや階級と収入によってしか決せられない」と言った<sup>(1)</sup>。彼は階級を定義することは全くしていないので、我々として可能なことは彼が消費に対する収入の影響について述べたことを取り上げることだけであり、食料の細目と支出総額との間の関係を調べることである。しかし、家族規模は変化するので、まずこの家族規模の作用から調べよう。

(1) Préface du livre d'Abelsdorf: Beiträge zur Sozialstatistik der deutschen Buchdrucker, XXX, 1900.

これはかなり難しい仕事である。統計事務所アンケートの p.30\*の表で、事務員と労働者が区別されていないが、2 人、3 人、4 人、5 人、6 人、7 人、8 人、9 人、10 人の家族の食料費の細目が示されている<sup>(1)</sup>。家族規模が大きくなるにつれて、比率においても絶対額に

においても、最も著しく、最も連続的に増大するのはパンのための支出である（4.5%、5.8%、6.7%、7.6%、8.1%、10.3%、11.3%——8人家族まで）。牛乳代は3人家族へ移行するところで突如増加し、次の二つのカテゴリーに移行するところではもっとゆっくりと増大し、次いで定常となる（3.3%、4.6%、4.8%、4.9%、4.6%、4.7%）。飲料費は比率においては常に明らかに減少し（6.2%、5.2%、4.2%、3.2%、3.1%、2.4%）、絶対額においては最初減少し、次いでほとんど定常となる。肉代については2人世帯から3人世帯への移行のところで明らかに増大する。しかし次いで絶対額においては非常にゆっくりとしか増大せず、比率においては定常にとどまる（7.8%、8.7%、8.8%、8.7%、8.1%、8.7%、8%）。ソーセージと魚代はなお一層定常的である。最後にじゃがいもと小麦粉の費用は連続的に増加しはするがきわめて緩慢である（1%、1.3%、1.4%、1.5%、1.6%、1.8%、——これはじゃがいもについてである）。——要するに、パン代の連続的かつ非常に顕著な増大、当初（カテゴリーからカテゴリーへの最初の二つの移行）において牛乳と肉に関係する増大、そして、飲料費の連続的でかなり顕著な減少、これらはこのアンケートにおける家族の増大の最も純粋な結果である。これを金属労働者のアンケートから得られる結果と比較することは不可能である。金属労働者のアンケートではこうしたデータは同じような形で表には示されていないからである。

(1) 最初の6つの集団は全体の205世帯のうちそれぞれ66を数え、7番目の集団は、30である。

総収入の、或いはむしろ総支出の食料費細目に対する影響の研究のためには、すでに述べた理由（本書 p.184）によって、事務員と労働者が混在させられているカテゴリー（p. 35\*）で満足するわけにはいかない。幸いなことに、それらを分けたカテゴリーごとの細目が示されている（p.62\*-63\*）。これらのカテゴリーはかなり幅が広いものである（総支出1200-1600マルク、1600-2000マルク、2000-2500マルク、2500-3000マルク、と分けられており、労働者世帯数は順に154、196、127、24、である）。しかし以下はそこから指摘できるものである。パンの消費は明瞭に減少する（17.5%、17%、16.4%、16.7%。この最後の軽微な上昇は、最後のカテゴリーの家族規模が5.7人に上昇しなければ——そこまでは順に4.3人、4.4人、4.7人であった——実際のところ明らかに下降に変わるであろう）。収入が高くなるにつれて牛乳の消費（10.6%、10.3%、9.6%、9.1%）も、ソーセージの消費（6.8%、6.2%、5.5%、4.6%）も同様に下降する。その代り、肉の消費は増大するが、しかしどちらかといえばゆっくりとである（17.2%、17.5%、17.9%、19.8%。この最後の増大は、こここのところで家族がこれほど明瞭に大きくならなかつたとすれば、もっと小さなものであつたであろうことは確実である）。飲料費はむしろ全体に上昇するというべきであろう（10%、9.4%、11.8%、9.3%。この最後の下降は、同じカテゴリーについての肉の消費の大きな増加と同じく、家族規模の増大という同じ理由によって説明されるであろう）。タバコ代は増加する（1.8%、2%、2.1%、2.4%）。バター代はどちらかと言えば増加する傾向にある（7.1%、8.3%、7.7%、7.5%）。卵代とじゃがいも代は定常的である。

これらの結果を、金属労働者のアンケートはどの程度裏打ちするであろうか。収入の六カテゴリーごとに（1200マルク未満、1200から1600マルク、2000マルクまで、2500マルクまで、及びそれ以上）、絶対額及び、対総支出比で、食料費用細目表が示されている（p.46）。



我々は、食料費総額に対する食料費細目の比率を計算した。事態を曖昧にするのは、肉、ソーセージ、魚が同一のカテゴリーで示されている点である。他方、集められた世帯の性質が多く転で異なっていることによって、第一の集団は12世帯、第二（■五か？）の集団は21世帯しか含んでおらず、有効なのは主として第二、第三、第四の集団（総数287世帯）だけという事情がある。従ってその他の集団については留保つきで示し得るだけである。——肉代の一般的増大は（ソーセージ代の減少が考えられるが）ここでは比率に表れる[(28)、27.6、29、30.5、(24.3)]。同じことはパン代についてもいえる。先のアンケートにおける同じくパン代は一般的に減少する[(20.7)、21.6、20.4、18.8、(21)]。その代り牛乳代は、減少せず、増大する[(8.6)、9.8、10.3、10.8、(9)]。これはただ部分的にのみ地域的影響に由来すると言える（アンケートされた世帯のうち、ミュンヘン、ニュルンベルク、およびシュトゥットガルトでアンケートされたのは40世帯だけであり、これらの都市においては牛乳の消費は明らかに他におけるよりも大きく、そして多分、その変動は特殊な法則に従っているであろうことを我々は見た）。むしろ、「子供用のその他の食物」の名のもとに別のアンケートでは除外されているものが、牛乳に付加されていることを考慮する必要がある。しかしこれらの世帯に属する低年齢の子供の数を知ることが不可能である。卵代は明らかに増加し、じゃがいも代は減少する。これらは先のアンケートではどちらかといえば定常であった。卵とじゃがいもの動きは非常に明瞭であるので（じゃがいもは4.6%、4%、3.6%、卵は2.8%、3.2%、3.7%）、これらは採用可能だと思われる。この表では、飲料代についてもタバコ代についてもなんら指示されていない。——また、各食品について一人当りの平均支出の表が載せられている(p.68)。我々はこの一人当り、或いは単位当りの消費という概念についてはここでは論じない。かつてこのような概念から発想したことが我々はないのである<sup>(1)</sup>。さらに、この表は先のアンケートの場合と同じ結果に帰結する<sup>(2)</sup>。

- (1) この概念はきわめて抽象的であると我々には思われる。この概念がどのような社会的現実に対応するのかを、我々はほとんど見る事ができない。支出は常に世帯単位で計算され予定される。世帯の支出は、当該の世帯の意識としては、別々に考えられた世帯成員各自の支出の総計では決してない。
- (2) ただし、肉代とソーセージ代がこの表では区別されており、後者は比率において肉代と同じくらい速く増大するのであるが、これは統計事務所のアンケートにおいて我々が指摘したところとは逆である。しかし、二つのアンケートについて、1200マルクから2500マルクの収入の全世帯に関して、総支出に対する各支出の平均比率を計算すれば、次の結果が得られる。金属労働者のアンケートにおいては、肉代の比率は17.8%であり、これは統計事務所のアンケートにおける数字、たとえば、17.2%から19.8%に近いものである。しかし、ソーセージ代の比率は前者においては10%であるが、後者においては4.6%から6.8%である。金属労働者たちが「ソーセージ」の欄のなかに脂肉、ハム、豚肉等の一部、恐らくは全部を含め、他方統計事務所のアンケートではこれらすべてが明らかに肉代に含められているといったことは大いにあり得ることと思われる。従って二つのアンケートの結果は矛盾するどころか、相互に強め合っているといえるであろう。

要約すれば、以上の分析から我々は以下のような一般的傾向を引き出すことができる。

すなわち、収入が増大するにつれて、パン代はソーセージ代（狭義）及びじゃがいも代と同じくきわめて明瞭に減少する。肉代及び豚肉製品は、卵代及びバター代と同じく増大する。飲料代は増加する傾向を示すが、その動きは、牛乳の場合と同じく、余りに地域的条件に依存しており、その変動法則を確実に定めることは不可能である。

これらの結果を、我々がフランスについて到達したものと比較しよう<sup>(1)</sup>。我々はまず、職種と場所の影響力を考慮するべく努めた。この点に関するデータの分析は、データを再録はしないが、我々を次の結論に導いた。

一．我々は、一般的状況と食料総支出とが非常に類似している 2 世帯という六つの場合について、異なる五つの職種（パン焼職人、植字工、土工、雑役工、そして指物師 2 事例）の世帯を二つずつ比較することができた。

二．植字工、雑役工の場合、及び指物師の一事例においては、総支出に対する肉代の比率は二つの世帯において非常に類似しており、雑役工の場合には総支出に対する飲料費の比率は同じであった。

三．これらの場合において、食料総支出に対するその他の重要な食料代の比率は相互の世帯においてきわめて明瞭に、しかししばしばかなりの程度、違っていた。

四．その他の場合においては、相違は食料費のあらゆる部分に及び、時に非常に際立っていた。

五．ポルトヴァンドルの荷揚人夫及びリーユ（Lille）の指物師の食物摂取のいくつかの特徴（魚、コーヒー、バター付パンの多量の消費）は地域的条件によって説明され得るように思われた。

六．その他のすべての場合について、同一職種の二つの世帯において指摘され得る食物の違いは、場所の違いによっては全く説明されえなかった。

- (1) 我々がフランスにおいて 1907 年に企てた家族家計簿によるアンケートは 81 世帯に及び、そのうち 53 労働者世帯、28 が農業世帯であった。家計簿がつけられたのは 4 週間だけであった。労働者世帯については、いろいろな理由から 48 世帯のみを取り上げた。すなわち、パリ 8 世帯、リーユ 8 世帯、リヨン 7 世帯、リモージュ 4 世帯、モンペリエ 5 世帯、ランヌ 4 世帯、トゥルーズ 3 世帯、アニーシュ及びエナンリタールの鉱夫 2 世帯、パヨンヌ 2 世帯、ヌヴェール 2 世帯、キュラン（リヨンの近く）1 世帯、ポルトヴァンドル 2 世帯、である。我々は、各大都市において、同じいくつかの職種の代表者を 5、6 人つかまえるつもりであったが、これは必ずしも常に可能ではなかった。

以上の注記事項六点を条件として、我々はいまや、家族構成と総収入の影響を研究するに際して職種と場所とを抜きにして考えることができる。我々は *quet* ごとの平均給与を各世帯について計算し（p.179 を見よ）、その数字に従って九つの集団に分類した。さらに我々はその各集団について給与および食料費の平均を計算し、各種食料品目の食費総額に対する平均比率を計算した<sup>(1)</sup>。（しかし）明らかに各平均の示す事例数が少なすぎ、例外的と思われるものを除去することはできなかった。（とはいえ）こうした「表現法」は我々にとって指導原理として役立つであろう。すなわちこれらの数字を考察するに際して、それに対応する個々の世帯を忘れることがなくなるであろう。

(1) この表をここに再録することは無駄と我々は判断した。

肉代は恵まれたカテゴリーに移行するにつれて比率上増大するが、いくつかの例外もある。二つのより低いカテゴリーにおいて、そしてそこでのみ、肉代はパン代よりも少ない。肉代が最貧のカテゴリーにおいて比較的高いところにあることは事実である(19.2%)。しかし、この最貧カテゴリーはまず、全体のなかで最も小さい家族を含んでいる。ところで肉代は、すでに見たように他の事情にして同一とすれば、子供の多いところでは少なくなる。他方、非常に貧しい世帯に関してであるが、パン代が福祉事務所から受け取る分だけ増大するとすれば、肉代の比率は非常に減少するであろう。最後に、バター、卵、コーヒー代はこうした世帯においては非常に縮小されるであろう。こうした世帯においては全体として食料費は、それだけで給与を越えるけれども、極端に僅かなものである。こうした事情から次のように想定することができる。すなわち、最小限の肉の消費は労働階級全体において第一級の必要性を有するものとみなされており、この最低水準から落ちることのないように彼らは好ましい或いは必要な他のすべての消費を節約し、公的援助に訴えかけ、そして借金もする、ということである。第二のカテゴリーの肉代の数字は非常に根拠のある平均値であり、そして低い。第三のカテゴリーにおいては肉代はたしかに非常に速く上昇する。これは5世帯のうち二つがレンヌのものであることによる。レンヌでは我々の扱っている全世帯において肉代が平均してどこよりも大きく、パリよりも大きいのである。平均値に根拠のある第四、五、及び六のカテゴリーにおいては、肉代の上昇は非常に明瞭であり、規則的である。第七のカテゴリーにおいては、上昇はきわめて大きい(二七%)。これは五世帯のうち、二つがパリのものであり、さらに別の二つがリヨンのものであることによる。パリとリヨンでは、肉代があらゆる収入水準についてどこよりも大きいと考え得る理由があるのである。第八のカテゴリーにおいては、平均値に十分な根拠があり、第九についても同様である。こうしたこと全体を考慮しつつ我々としては、最低のカテゴリーについては肉代の比率の13%から14%への上昇、最高のカテゴリーについては26%ないしは27%の状態を結論する。

肉代に次いで最も重要なのはパン代(及びケーキ代)である。この費用は逆の方向に変化する。総支出に対するパン代及びケーキ代の比率は、「*quet* ごとの給与」が増大するにつれて、非常に説明のつけやすい不規則性と共に、きわめて明瞭に減少する。第一の(最貧)カテゴリーにおいては、パン代及びケーキ代の数字は、援助物資として与えられるものを加えれば、明らかに24%ないしは25%まで上昇するであろう。第二のカテゴリーの数字は非常に低い<sup>(1)</sup>。第三のカテゴリーについては、その平均値は十分に根拠がある。第四のカテゴリーについてはその平均値は余りに低すぎる<sup>(2)</sup>。第五、六及び第七のカテゴリーについてはその比率が同じく少し低すぎるように思われる<sup>(3)</sup>。第八のカテゴリーにおいては、平均値は先の三つのカテゴリーにおけるよりも低いのであるが、まずまず信頼できる。第九のカテゴリーについては平均値は完全に信頼できるものであり、最低である。要するに、このパン代およびケーキ代の比率は、最貧のカテゴリーから最も恵まれたカテゴリーについて、23%ないしは24%から13%ないしは14%へと変化する。

- (1) この集団のなかで、リモージュのあるパン屋はこの食品目について 12.5%しか支出していない。リールのズボン製造業者はパンと同じだけのコーヒーを消費する (14%)。これらは、リヨンの土工の場合このパン代及びケーキ代の支出比率が高いこと (35.5%) によっては、部分的にしか相殺されえない。
- (2) この集団のなかで、リヨンのパン屋はパン代として 9.3%しか支出しない。
- (3) 第六のカテゴリーのなかには、僅かのパンしか消費しないが、多量の牛乳と飲料を消費するリールの植字工とウーランの皮鞣し工が含まれる。第七のカテゴリーには、並外れた飲み方をするアニーシュの鉱夫 (21.8%) と、パンの支出が 10.8%にすぎないモンペリエのパン屋が含まれている。

全体として、バター代と食用脂肪代はより恵まれたカテゴリーに移行するにつれて減少する<sup>(1)</sup>。食用脂肪代については、カテゴリーを二つずつとれば、次のような比率になる。すなわち、2.05%、2.05%、1.6%、1.4%、0.65%、0.30%、である。

- (1) 第三カテゴリー及び第五カテゴリーに関する二つの大きな例外 (バター代) は、一方については、この集団の 5 世帯のなかにリール及びレンヌのそれぞれ 2 人の労働者が含まれていることによって説明される。これら二つの都市においては、バター代が他におけるよりも明らかに大きいことを我々は指摘しておいた。他方については、6 世帯を数えているが、リールの労働者のほかに、ゴエルのモンティニーの一鉱夫を含んでいるからである。この鉱夫はバターの購入のために、全食料費の 18%未満しか使わないのである。

他方、野菜代およびじゃがいも代の比率を追加すれば、以下のような減少する数字が得られる。すなわち、10.7%、10%、8.9%、9.5%、7%、9.1%、8.3%、8.8%。二つの重要な例外 (第三及び第六カテゴリー) は、卵代が他よりも明らかに多い集団に対応している。しかし、野菜代だけを見てみると、数字の規則性は遙かに小さくなる。野菜代は第六カテゴリーまで連続的に減少し、次いで増大して最後のカテゴリーにおいて最初の水準にまで上昇する (比率)。じゃがいも代は第四のカテゴリーにおいて第五のカテゴリーにおけるよりも明らかに少ない。次のように考えられる。つまり、貧しいカテゴリーにおいては、(普通の質の) 野菜とじゃがいもが (少なくとも部分的には) 肉の位置を占め、人々はそれらを必要によって食するのである。恵まれたカテゴリーにおいては、なお人はじゃがいもを食するけれども、それは好みによってであり、量は少ない。この恵まれたカテゴリーにおいて消費される野菜については、それらは良質のものであるはずであり、それらの価格はその実際の栄養的価値に対応していないはずである。

牛乳については、最初の三つのカテゴリーから次のカテゴリーに移行するところで、総支出に対する比率の明らかな増大が認められる。牛乳代はしかし第七のカテゴリーにおいては顕著に少なくなる。世帯ごとの *quets* の数 (すなわち家族規模) が最小で、従って肉の消費が最も多いのはこのカテゴリーにおいてである。牛乳代は第八のカテゴリーにおいて余り上昇しない。これは飲料代が最多であることに対応している。

飲料代の比率も、最初の三つのカテゴリーから次のカテゴリーへ移行するところで急激に増大する。第四カテゴリーから第七カテゴリーまでは飲料代はほとんど定常である。そ

れは第八カテゴリーのところ目立つようになり、第九カテゴリーではかなり低くなる。しかしこの最後の二つのカテゴリーについては、平均値はほとんど信憑性がない。この飲料費については、ほとんどすべての世帯について最低の数字と最高の数字とが同時に見られるのである。卵代の比率は、それが非常に低い第一のカテゴリーの場合を除いて、4%と5%の間に落ち着く傾向がある。

要約すれば、最も貧しいカテゴリーの世帯とその他の世帯との間には、摂食体制における重大な相違が明瞭に現われている。最貧のカテゴリーの世帯においては、肉の消費はパンの消費よりも少ない支出の項目に属し、他の世帯においてはこの逆である。最貧カテゴリーの世帯は、他よりも多くの食用脂肪を消費し、バターの使用はより少なく、また（普通の質の）魚肉をより多く消費する。彼らは他の世帯よりも、じゃがいも及び野菜の購入のために食費の（比率上）より大きな部分を割き、そしてじゃがいもと野菜とを区別して見てみれば、いずれにしてもじゃがいもを買うためにより多くを割く（野菜代が量的にはほとんど同じであるとしても、質が異なる）。他方で彼らは牛乳代及び飲料代は少ないようである。しかし、この相違は大したことはない。これらの結論はすべて、我々がドイツのアンケートから得た結論とほとんど正確に重なり合っている。

摂食様式の変化は、貧困から裕福へと世帯の系列を上昇するにつれて連続的に生ずるように見えるけれども、ある種の変化（パン代、牛乳代、飲料代）が突然生ずるのは、特に第三カテゴリーから第四カテゴリーに移行するところにおいてである。ただ後に第五カテゴリーから第六カテゴリーに移行するところで同じく突然にじゃがいもの支出が生じ、そしてまた突然野菜がそれほど買われなくなる（これはすでに述べた理由によって野菜代が新たに増加する前のことである）。肉代についてはその動きは余り明瞭ではない。肉代と豚肉加工品代とを合わせれば、次のパーセントが得られる。すなわち、22.4%、16.9%、25.4%、21.2%、25.7%、26%、29.3%、26.2%、30.5%。一番目と三番目の数字のある意味での突出について我々が与えた理由を考慮すれば、増大が最も明瞭なのは第四カテゴリーから第五カテゴリーへの移行のところにおいてである。——こうした算定はなんら絶対的な意味をもたない。このようなあり方は部分的には家族構成の違いによって説明されるであろう。さらに、観察事例が余りに少なすぎるであろう。ただ次のことは記憶にとどめたい。すなわち、より恵まれた世帯に移行するにつれて、ある種の支出、本質的に重要な支出の増減は、（それぞれについて）同時におこるわけでもなく、（全体として）規則的におこるわけでもないという点である。貧乏な世帯とゆとりのある世帯との間にはたしかに一つの溝が生ずるが、その溝は段階的に並べられた一連の切り込みからなっている。正確にどの時点で移行が行なわれるかを言うことはできない。しかしながらいくつかの時点では、突然の変化が存在する。そのような場合を説明する必要があるであろう。

## II 家賃の絶対額

ある労働者が住居を求めるといふ場合には、彼は、食物を買うといふ場合とは全く別の（単に欲求の種類の違いによるのではない）問題を解かねばならないと思われる。選択の範囲がはるかに限定されているのである。これは、大部分の都市においては空部屋そのものの数が限定されていることによるのではない。一定の摂食体制は一定量の様々に異なる

栄養物質から成り立っているのであるが、この栄養物質は多様に、そして一応外見上は消費者の好みに合わせて組み合わせられるのに対して、住居なるものは、あらかじめ用意され、そのままの形で提供されるところの、つまりしばしば借家人に否応なく課せられるところの、特徴、好都合、不都合の結合体である。長い間探すことが必要であり、それでも、昔別のところで経験した好都合な点を保持しつつ、不都合なところはないような住居は必ずしも見つけられない。大抵は、すべての好みを満足させるような家屋を探す代りに、あり合わせの家屋に自らを適応させるところを余儀なくされるのである。少なくともこの点では彼は、あらかじめ社会によって固定された枠組みのなかでしか自らの好みを満足させることはできないのである。

しかしながら、こうした枠組を作りながらも社会（これを代表するのはこの場合不動産業者であるが）は、借家人の志向によって触発されることはないであろうか。これは大いにありそうなことである。それゆえ、労働者の住居を、(摂食体制の場合と同じように)公共の共同寝室或いは貧民のあばら屋から最も裕福な労働者の快適で比較的贅沢な室内に至るまで、その社会的地位を考慮に入れて分類することは無益ではないであろう。面積、明るさ、何階か、位置(通りに面しているか、袋小路か)、そして家具装飾、それらが指針となるであろう。チャールズ・ブース(Charles Booth)氏は、ロンドンにおける生活と労働に関する大きな著作のなかで、とりわけ「つめ込み」の度合(部屋ごとの人数)を考慮してこのような分類を手掛けた<sup>(1)</sup>。シーボーム・ローントリー(Seeböhm Rowntree)氏は、(p.342 及び p.468 に引用されている)2冊の著作のなかで、彼が区分した集団のそれぞれについていくつかの典型的住居を描き出した。この二つの方法についてどう考えるべきであろうか。

- (1) Booth (Charles), *Life and Labour of the people in London*. Londres 1902-1903. 17volumes. 我々は《*Remarques sur la position sociologique du problème des classes*》(*Revue de métaphysique et de morale*, novembre 1905) のなかでこの分類の要約を示した。

シーボーム・ローントリー氏が恐らくははるかに事実に肉薄している。衛生学者と道徳家にとっては特に、一人当たりの空間量、部屋当たり人数といった概念が本質的に重要であるとしても、労働者集団の意識においてそれらが最前列に来るかどうかは確かではない。狭さのために余り健康的でない住居の方が、もっと広くはあるがむき出しで不潔で暗い、或いは貧民窟の奥にある部屋よりも、立地もよく、管理もちょうどもよいといったことはあり得ることである。住居に関する欲求は労働者階級において余りに未展開であり、混乱しており不確定であるため、労働者から見てどのような住居上の利点が最も重要であるかを我々はいまだ知らないのである。——このような場合には調査員の一般的印象に従い、住居の全体的特徴を考慮しつつそれらを分類すべきであろうか。このような方法は、恣意的であることの他に、いくつかの典型的な住居についてしかその詳細を書き出すことができないので、とりわけここで我々が問題にしている点に答えることができない。つまり、最低の住居から最良の住居までの感知不能の推移を通じて移行が行なわれるのか、或いは、感知可能な間隔によって相互に隔てられている住居のカテゴリー(その各々がそれぞれ等価の好都合と不都合との一連の「結合」を含んでいるであろう)が存在するのか、

という問題である。

ブース氏の方法及び「つめ込み」に関する多数の最近のアンケートについては、我々はそれらが単なる実践的関心をもつものではなく、医者および道德家のみならず社会学者もそこから大いに引き出すべきものがあることを確信している。しかしながら、部屋の数および大きさと、そこに住む人間の数および年齢との関係（これはきわめて稀にしか同時には集められないデータである）は、住居の一要素にすぎず、住居の効用の一部分を表わすにすぎず、住居の全体としての効用の客観的かつ恒常的な指標とはなりえないということが一方にあり、従ってこうした特徴によって住居を分類することは、住居欲求についての満足度に従って住居を分類することには必ずしもつながらず、さらに言えば、そうしたことはまずありえない。こうした分類が我々の関心を惹くのはここだけのことにとどまるであろう。他方では、ブース氏の方法及びアンケートから多くを引き出すためには、我々は社会科学の全く別の領域に入り込み、その際に、保存しようと思う新しい概念や新しい事実についての、かなり長い分析を企てなければならないであろう。

我々がこれまで指摘しえた多くの経験から十分に次のことが結論されると思われる。すなわち、社会諸階級の分離、階級内部について指摘し得る社会的下位区分、特に生活水準の差異に対応する社会的下位区分、には一定の形態学的特徴が対応するという点である<sup>(1)</sup>。パリ地域の多くの部分において、特に隣接する区画から区画への移行に際しての平均家賃の減少には、家族員数の増大が対応していることを我々は見つけることができた。しかし、一国の内部では一都市の地域間で、また都市間で、そして国と国との間で、経済状態とその傾向の類似にもかかわらず、我々は人口密度、家屋毎の世帯数、等における相当の相違を見ることができる<sup>(2)</sup>。部屋ごとの住人数といった概念にある集団の意識がどのような意味を付与するかという点を調べる前に、上のような社会的習慣を定義し、それを説明することが必要であろう。しかしそのような研究は、折を見て取りかかるには余りに広大で複雑である。そうした研究は直接に、それ自体のために企てられなければならない。

- (1) デュルケーム氏が、「社会を構成する個人の集合体（■原語 *masse*）、個々人が土地の上に配置されるされ方、集合的關係に作用するあらゆる種類のものの性質及び布置」に関する研究を社会形態学と呼ぶように提案したことを想起しよう（*Année sociologique*, tome II 1899, p.520 sqq.）。経済学的事実と形態学的事実との差異に関する研究、また研究上それらを分離する必要性については、ギユイユ（Gouillou）とボスコ（Bosco）の著作についての書評（*idem*, tome X, 1907, p.683 sqq. et 647 sqq.）及びオバール（Aubert）の著作についての書評（*idem*, tome XI, 1910, p.756 sqq.）を見よ。
- (2) ドイツでは、人口十万以上の都市だけを見れば、一家屋あたり、ブレーメ（■ブレーメンか？）で1人から10人、12都市（ケルン、エッセン、フランクフルト、アムーマイン、ニュルンベルク、シュトゥットガルト、等）で10人から20人、10都市（デュッセルドルフ、ハノーバー、ライプツィツヒ、ドレスデン等）で20人から30人、8都市（ハンブルク、ミュンヘン、マグデブルク、ブレスラウ等）で30人から55人、シャルロテンブルクとベルリンで60人以上（1905年）という状況が見られる。イギリスでは1901年で、王国全体の平均は一家屋あたり5.20人であった。農村部では4.6人、都市部では5.20人である（ロンドンでは7.93人、リヴァプールでは5.55人）。Eberstadt, *Handbueh des Wohnungswesens und der Wohnungsfrage*, Iéna, 1910,

それゆえ、あらゆる住居を（もし必要ならば）異なる社会的価値を表わすものとして、いくつかのカテゴリーに分類することを可能ならしめる、住居のある一つの特徴を認識することは不可能ということになるであろうか。我々はそのような特徴は存在するものと考え。そしてそれは家賃の絶対額以外のものではないと考える。これまで我々は、総支出に対する家賃の割合のみに関心を寄せてきたのであるが、家計とその均衡のあり方、特に各集団における欲求のヒエラルヒーの研究のためには、それで十分であった。住居の具体的現実に到達しようとしている今の場合、絶対額は住居についての最も便利かつ通用度の高い表示だと思われる。——その理由は特に二つ挙げることができる。まず第一に、あらゆる支出のなかで家賃は一年間全体について予測し計算することが最も容易なものだということである。食料、衣服等については、月間或いは年間について大体を知ることができるだけである。それらは後になって加算される小さな支出である。家賃は逆に、重要でもあり同時に非常に確定度の高い支出である。家賃を示す数字は自然に心のなかに刻みつけられる。それがまた社会的事象になるのは自然なことである。他方、労働者階級においては住居欲求は不十分にしか発展していないので、ある住居が提供する様々の利点、その利点の正確な測定値、他の住居に対する関係におけるその住居の「価値」、を不十分にしか評価することができない。逆に、要求される価格は、それが他の家賃よりも高ければ、労働者には住居のより高い価値を表わすもののように見える<sup>(1)</sup>。そしてこれらがそれで思い違いをしてはいないということもあり得ることである。たとえ他よりも少し高い価格の住居が実際は前者よりも劣っているということがあるとしても、高価格の家賃カテゴリーは、全体としては、たとえ高価格でなくとも、より選好度の高い住居と一致している。むしろ、たとえ彼らが間違おうとしても、本質的に重要なことは、彼らがある程度の価格に執着するということであり、一定の価格の方が他よりも求められることが多いということである。ところでこのことは、家賃の絶対額を参照することによって検証されねばならない。

- (1) 家賃の違いは、労働者の目には、価値の違いを表現する。しかしこのことは、家賃価格が労働者にとっては、住居の価値と一致するということの意味するものではない。

しかしこれは可能であろうか。家賃と家具調度費とを同一の欄に入れているドイツ統計事務所のアンケートではこれは不可能であろう。金属労働者のアンケートでは、家賃だけの数字が別に示されている。しかし、転借人或いは下宿人（我々の知るところではこれらは多数いる）の支払う価格が何ら示されていないことのほかに、一方では示されている家賃が余りに異なる諸都市に関係しており、他方ではその数が余りに少ないので、それらから十分に根拠ある結論を引き出すことは不可能である。——それよりは、転貸借の習慣が労働者の間ではほとんど広がっておらず、家賃についての非常に詳細な統計のあるパリのようない都市に限定するほうがよい。

パリ不動産帳簿の表Ⅱ<sup>(1)</sup>によって、我々はすでに久しい以前から、1900年についての（100フラン間隔で分けられた）家賃カテゴリーのそれぞれにおける転借人の数を示す曲線について、いくつかの区における上昇下降の規則正しい交替の存在に強い印象を受けてい



た。例えば第八区においては、またそれほど明瞭ではないが第九区及び第一六区においては、我々は交互に交替する最低数と最高数を認めることができた。最高数は家賃 400-499 フラン、600 フラン、800 フラン、1000 フラン、1200 フラン、1400 フラン、1200 フラン、1400 フランのところにあたり、最低数は家賃 300 フラン、500 フラン、700 フラン、900 フラン、1100 フラン、1300 フランにあっている。以下はその数である（一の位の数省略、一〇の位で切り捨ててある）。最高数には下線を引いた。これらは家賃の実際である。

300f	400f	500f	600f	700f	800f	900f	1000f	1100f	1200f	1300f	1400f
8 区											
200	<u>227</u>	125	<u>136</u>	83	<u>110</u>	54	<u>103</u>	39	<u>83</u>	40	<u>48</u>
9 区											
458	<u>555</u>	217	<u>271</u>	<u>218</u>	<u>218</u>	141	<u>163</u>	72	<u>121</u>	63	<u>63</u>
16 区											
432	<u>456</u>	120	<u>157</u>	135	133	76	<u>87</u>	45	<u>71</u>	38	<u>47</u>
計											
1090	<u>1238</u>	462	<u>564</u>	436	<u>471</u>	271	<u>353</u>	156	<u>275</u>	141	<u>158</u>

他の区と同様、パリ全体については上昇下降の交互交替はそれほど規則的ではない。高価格の住居の数が少なく、価格が低いほど住居数が増える傾向があるからである。それにもかかわらずパリ全体として、不規則性はあるものの上昇下降の交互交替がやはり表れている。

300f	400f	500f	600f	700f	800f	900f	1000f	1100f	1200f	1300f	1400f
1484	<u>1155</u>	312	<u>332</u>	213	<u>185</u>	106	<u>121</u>	57	<u>86</u>	44	<u>46</u>

- (1) Le livre Foncier de Paris, publié par la Direction municipale du Cadastre (M. Albert Fontaine, directeur), Paris, imprimerie Chaix, 1900.

二つの本質的に重要な不規則点は、一つは 300 フランの家賃の数が非常に大きいことであり、いま一つは 700 フランから 799 フランの家賃の数であり、後続のカテゴリーの数よりも大きいことである。

遺憾とすべきは、1499 フランより高い家賃についても、300 フラン未満の家賃についても、上と同じ現象を見ることができなかったことである（前者はますます幅のあるカテゴリーへと分類されており、後者はただ一つのカテゴリーに含められている<sup>(1)</sup>）。——しかしフランス総統計局<sup>(2)</sup>によって出版された最後の巻においては、第 19 表（1852 年から 1908 年までの各種家賃価格——低家賃不動産物件、412——p.450）及び第 21 表（同上、平均家賃不動産物件）において、100 フラン間隔で測られたカテゴリーばかりでなく、40 フランから 500 フランまでの家賃の 2531 住居に関する、各家賃価格の数まで確定することのできるデータを見出すことができた<sup>(3)</sup>。我々にとっては、本書 p.374 の表第 2 の欄の数を出すには家賃の同じ住居（その価格は家賃毎に分類されている）の数を勘定するだけで十分であった。次いで我々は第 2 欄に対応する相対値（第 3 欄）を、150 フランから 360

フラン（含）までのカテゴリーについて各種家賃の平均数を指標（100）として、計算した。その値は 80 であった<sup>(4)</sup>。

- (1) 我々はアルベール・フォンテーヌ氏に、家賃を 100 フランごとに区分したものが少なくとも原稿の形では存在するかどうかを質問したのであるが、その答えは否定的であった。
- (2) *Salaire et coût de l'existence à diverses époques jusqu'en 1910. 527p. in-8° Paris, 1911.*
- (3) 「フランス総統計局はパリ地籍調査局の資料にもとづいて、1852 年、1862 年、1876 年、1900 年の順で、主として労働者家族が住んでいる一定数の家屋における貸部屋の家賃を調べることができた。それに続いてアルベール・フォンテーヌ氏は、ぜひとも各貸部屋についての 1908 年における価格を記載させることを望んでいた」。得られた数字は、「パリの様々の区に偶然分散している家屋およびこれらの家屋のなかに存在している貸部屋」(p.86) を対象としている。フランス統計局局長のマルシュ氏がこの一覧表の作成に際して立てた目的は「住居事情に生ずる変化とは無関係に家賃価格はどのように変動するか、すなわち、様々の異なる時期に同一の家屋の価格の動きはどのようであったか」(p.85) を見ることであった。
- (4) 10 の倍数でない家賃の数はきわめて少ない。我々にはそうした家賃については端数を切り捨てて 10 の倍数とした。

1908 年におけるパリの価格別住居（貸部屋）数（500 フランまで）

家賃価格	絶対数	相対数	家賃価格	絶対数	相対数	家賃価格	絶対数	相対数
40	3	4	200	176	220	360	48	60
50	5	6	210	32	40	370	19	24
60	7	9	220	97	121	380	49	61
70	2	3	230	57	71	390	25	31
80	25	31	240	71	89	400	111	139
90	8	10	250	131	164	410	11	14
100	70	88	260	107	134	420	26	32
110	13	16	270	64	80	430	11	14
120	57	71	280	96	120	440	15	19
130	45	56	290	26	33	450	35	44
140	65	81	300	157	196	460	34	42
150	87	109	310	47	59	470	7	9
160	86	108	320	87	109	480	41	51
170	35	44	330	38	48	490	61	76
180	120	150	340	35	44	500	36	45
190	46	58	350	107	134			

我々はまず、40 フランを出発点として 20 フラン間隔のカテゴリーにおいて、すなわち 60、80、100、120、140、160、180 フラン等のカテゴリーにおいて家賃の数が多くなる確かな傾向を確認することができる。（特に終りの方の）三ないし四つの例外は、家賃が 50、

150、250、350、450 フランの家賃に対応するカテゴリーにも分類される傾向によって説明され得る。この第二の傾向は非常に強力でさえあり、家賃 150 フランは先行カテゴリーのいずれにおけるよりも多数であり、家賃 250 フランも（家賃の 200 フランを除いて）先行カテゴリーのいずれにおけるよりも多数であり、家賃 350 フランは（家賃 300 フランを除いて）家賃 260 フラン以降のあらゆるカテゴリーにおけるよりも多数であり、家賃 450 フランは家賃 400 フラン以後のすべてのカテゴリーにおけるよりも多数である。家賃 490 フランについては、これは税制上の理由によって家賃 500 フランのものよりも多数になる。これらが大部分、家賃 500 フランの偽装態であることは確実である<sup>(1)</sup>。最後に、家賃で最も数の多いものは、100 フランのもの（先行のいずれのカテゴリーにおけるよりも多数である）、200 フランのもの（同上）、300 フランのもの（同上、但し 200 フランのものよりは数が少ない）、400 フランのもの（250 フランのもの以降のいずれのカテゴリーにおけるよりも多数である。但し 300 フランのものよりは数が少ない）、490 フランのもの（実質的には 500 フランである。350 フラン以降のいずれのカテゴリーよりも多数である。但し、400 フランのものよりは数が少ない）である。

(1) パリでは家賃は 500 フラン未満の場合、動産税の対象になることはない。

要するに最も多数なのは、100 の倍数の家賃、次に 50 の倍数の家賃、さらに 20 の倍数の家賃である。調べられた家賃の数は比較的少数であるけれども（2531 である。他方、1900 年にはパリでは 500 フラン未満の家賃の数は 697708 であった）、以上の結果は非常に明瞭であり、家賃全体の全般的傾向に申し分なく一致しているといえることができる。

しかし、我々にとってこのことの意味は何であろうか。労働者借家人が一定価格の住居を嗜好することのうちに、異なる集団が愛着を示す異なる住居カテゴリーが形成される傾向の表れを見るべきであろうか、それともこれは非常に一般的な一現象の表れ、つまり価格決定における「端数のない数」の影響にすぎないであろうか。我々としてはこの作用が広い範囲に及ぶに違いないことを認める。しかし、売り手と買い手、ここでは家主と借家人、が家賃価格を端数のないようにするために合意するという事、このこと自体が説明されなければならない現象である。なぜなら売り手と買い手において必ずしも常に端数が切り捨てられるわけではないからである。家賃が 20 の倍数であるものすべてと、それ以外のものとを別々に合計すると、前者はあらゆる家賃の 64% をなし、後者は 36% である（100 の倍数の家賃は前者に含まれ、50 の倍数の家賃は後者に含まれる）。この場合また、家主の意図（これは同時に労働者の決断でもあるが）を二通りに解釈することが可能である。家主は、労働者の決断をもたらすマイナス方向の大きな差異をつくり出すために、10 フランだけ家賃を下げるか、或いは、10 フランの差は当惑と誘惑の結果、労働者が決断するのを妨げるには小さすぎるものと判断して、10 フランだけ家賃を上げるか、いずれかであるということである。しかし家主の例のこのような意図、借家人の側におけるこのような意向は一般的なものとはほど遠い。なぜなら、家賃の三分の一以上はこのような意味での端数のない数字に何ら固定されてはいないからである。——50 の倍数および特に 100 の倍数をとって見れば、違いが大きすぎ、上のような理由を引き合いに出すことは不可能である。この場合、次の点を認めないわけにはいかない。すなわち、100、150、200、300 といった

数字は集団において社会的意味をもっており、家賃のために 200 フランないしはそれ以上、300 フランないしはそれ以上を出すという事実は、借家人自身の目にも他人の目にも、借家人を「分類する」うえで役立つ、ということである。こうしたカテゴリーのなかには、その水準に上昇するために例外的な犠牲を払った借家人も、苦勞せずにその水準にとどまってはいるが 5 段階或いは 10 段階上昇する力はないと感じている借家人も、同時に含まれているに違いない。このような選好を説明するのは、端数のない数字の通常の役割よりもはるかに多く、社会的に定義された一カテゴリーに対する住居欲求である。これはすでに述べたように、労働者にとって家賃の絶対額は、家賃というものの実際上の「価値」の最も普通の客観的指標であることを示すものである。このことから住居費は、労働者が明瞭に区別される価格の住居に住む集団に分かれる度合に応じて、社会的に増大させられる可能性がある、ということが結果する。

急いでつけ加えなければならないが、この最後の命題は、多くの留保条件のもとでのみ認めることができるものである。我々は 100 の倍数の家賃カテゴリーについて、借家人の平均数を計算し、それを他のすべての家賃カテゴリーの借家人の平均数と比較した。相対数としてそれぞれ 144 および 58 を得た。確かに差は大きく現れている。しかしそれにもかかわらず、第八カテゴリー（これは 100 の倍数の価格よりもプラス或いはマイナス 10 フランから 40 フラン支払うすべての借家人が同じ傾向に従うのであれば、空欄となるに違いない）には、464 と表示される借家人の人数が存在している。他方我々は 50 の倍数の家賃カテゴリーについて借家人の平均数を計算し、それを他のすべてのカテゴリーの借家人の平均数と比較した。相対数でそれぞれ 118 と 52 とを得た。疑いもなく倍以上である。しかしそれにもかかわらず、第四カテゴリー（これは 50 の倍数の価格よりもプラス・マイナス 10 フランから 20 フランを支払うすべての借家人が同じ傾向に従うのであれば、空欄となるに違いない）には、208 と表示される借家人の人数が存在している。——かくして、非常に多くの労働者が次のような性質を有する住居カテゴリーにもとづいて選択する傾向をたしかにもっている。つまり、各カテゴリーの絶対価格はそれ自体として社会的意味をもち、一階級或いはその限定された下位集団に対応するように見えるのである。しかし、労働者のより多数の者はなんらそうしたものに気を使っているようには見えないである。

多くの特徴によって動産費と住居費とは区別されるにもかかわらず、これら二つの対応する欲求の間には非常に明瞭な関連が存在しており、住居の社会的分類は、部屋の特徴のみならず、部屋のなかに置かれている家具の量、質、一般的様相にも基づかなければならない。我々は、我々の知るところではこの分野における、またこのような範囲での唯一のアンケートである、ドレスデンの 87 世帯の家具等目録<sup>(1)</sup> から理解できるところを見てみた。120 は下らない項目をもつある表には、各世帯の有する家具、台所用品、食器類、（余り使い古されていない）衣服及び下着類の数量と種類が示されている。我々としては家具のみに限定しよう。値段および購入後の時間についての表示がないので、単にそれらの数のみを述べることは明らかに、ひどく不完全な情報である。従って我々が到達するであろう結果についてはあらゆる留保をつけることにしよう（その際でも重要な相違点が現れる可能性はあるけれども）。——我々は食事なしの下宿人をもっている世帯はすべて除外した。残ったのは 68 世帯であった。それらの世帯をおよそ比較可能な社会的状況の諸集団に分類するために、その各々について *quet* ごとの月収を計算し、それによって各世帯を分類した。

次いで我々は各集団について、各種の家具（20 カテゴリーに分類されている）の平均数を計算した。さらに我々は各集団について **quet** ごとの大型ベッドの数（分数）を計算した。我々のカテゴリーは全部で 12 である（**quet** ごとで 6 マルク未満から 20 マルク以上まで、但し 14 マルクから 14.9 マルクまで、及び 15 マルクから 15.9 マルクまでは空白<sup>(1)</sup>）。

- (1) 本書 p.465 及び注を見よ。
- (2) この表の再録は不必要と判断した。

最高のカテゴリーと最低のカテゴリーとの間の差異は顕著なものがある。後者のカテゴリーにおいては、**quet** の数に対するベッド数の比率は 0.35 および 0.31 であるのに対し、前者のカテゴリーにおいては 0.22 である。棚類、食器棚類等は後者のカテゴリーにおいては全体で平均 4.5 及び 4.3 であるのに対し、前者のカテゴリーにおいては 2 及び 2.5 である。肖像画及び絵画は後者で 7 から 9.3、前者で 2.6 から 2.8 である。椅子は後者で 7.7 から 8 であるのに対し、前者では 5.8 から 6.1 である。整理ダンス（■原稿はかな。漢字？＝「箆筩」？■）、書き物机等は後者で 2.34 から 3 であるのに対し、前者では 0.71 から 0.78 である。引き出し机と飾り棚は後者で 1.33 から 2.50 であるのに対し、前者では 0.33 から 0.57 である。ソファは後者では 1 であるのに対し、前者では 0.71 から 0.78 である。机は後者では 3 であるのに対し、前者では 2 から 2.45 である。開き戸付■ダンス■、化粧台、縫い物机、姿見、大時計といったものについては、これらは恵まれた世帯に与えられる差異であるが、余りははっきり感ぜられるものではないものの、効力ある差異である。しかしそれでもなおこれらの差の小ささに驚くとすれば、恵まれた家族は恵まれないものよりも半分くらい規模が小さいということに注意する必要がある。前者が **quets**6.5 から 7.1 であるのに対し、後者は 11.8 から 15.4 なのである。

しかし最初のタイプの室内整備から最後のタイプへの移行はどのように行なわれるのか。これはきわめて不規則的である。ソファと机の数は第二から第三のカテゴリーのところで増加する。ベッド、椅子、姿見の数は第三から第四のカテゴリーのところで増大する。整理■ダンス■、書き物机、食器棚、棚類の数は第四から第五のカテゴリーのところで増大する。絵画と肖像画の数は第五から第六カテゴリーのところで、机と飾り棚、そして再び棚類と食器棚の数は第六から第七のカテゴリーのところで、大時計の数は第七から第八のカテゴリーのところで、再び絵画と肖像画の数が第八から第九のカテゴリーのところで増大する。最後に第一〇から第一一のカテゴリーのところで、ベッド、整理ダンス、書き物机、机、椅子の増加が再び生ずる。

たしかに以上のことはすべて非常に恣意的とも思われる。別の世帯を選んでいたらこうした増大の起こり方は全く別のものとなるということもあり得るのである。しかし重要なこと、そしてこうした知見から明らかになることは、これらの増加が同時に起こるものではないこと、増大はあるときはある種のカテゴリーの対象に及び、ある時は別のそれに及ぶということ、そして、増大の後にはそのカテゴリーにおいてある休止と安定のようなものが生まれるということである。

我々として残念なことは、十分な数の事例について、一方では家賃の絶対額と収入総額との関係、他方では支出総額に対する住居費の比率と家賃の絶対額との関係を、検討でき

ないことである。とりわけ残念なことは、食料費の場合と同じ詳しさと、住居費について検討できないことである。これについてはあいにくデータがないのである。

にもかかわらず、この最後の分析の一般的結果を以下のように定式化できる。

一．貧乏な労働者世帯と最も恵まれた労働者世帯について、摂食体制、住居の間取り、設備、装飾（そして多分衣服も）を比較すれば、明瞭に区別され得る二つの生活水準の存在が確認されること（もっとも、労働者と非被用者とでは違いははるかに顕著であるけれども）。この生活水準の違いは <sup>シチュエーション</sup> 状況 の違いによって説明され得る。

二．低い生活水準から最高の生活水準への上昇は一連の連続的推移を通して起こるのではない。あたかも欲求はある種の弾力を与えられていて、一定の間隔で圧縮されたり拡張されたりするかのように、全体は推移する。急速な改善があり、安定がある（もっとも、時には再落下も起こるが）。欲求は実際ごくしゃくと間歇的に満足せられる。本当の飛躍が存在する。生活様式が変化するのは断続的進化を通じてである。

三．しかしそれにもかかわらず、感知し得る相当の間隔が、この点である種の深い溝のように、労働者階級の様々の層を分け隔てているという結果が生ずるわけではない。あらゆる方向に開花すべく一定期間（収入が一定額になるまで）、欲求の全体が縮小しているというわけではない。そうではなく、ある欲求は増長し、別の欲求は停滞し、またその逆でもある、という形である。十分に異なる住居カテゴリーに対応すると思われる四つないしは五つの家賃数字が、ある程度多数の世帯を引き受けるとしても、他方では十分に多数の別の世帯が別の家賃に結びつき、その結果先の住居カテゴリー集団の間に深刻な境界は形成されないのである。

### 三．データの分析の一般的結果

未解決のままにしてあった問題に戻ろう。これまでの観察全体から次のことが結果する。すなわち、最も貧しい労働者世帯の支出と最も裕福なそれとの間には大きな相違が存在する。他方しかし、前者から後者への十分に規則的な一連の移行が存在するわけではない。もし支出の秩序が世帯規模と結びついた収入額から機械的に出て来るのであればそうであろうが。しかしまた、家計の均衡全体に及ぶような、或いはむしろ重大かつ当然に家計の重心を移動させるような急激かつ深刻な変化も存在しない。もし、現実的な隔たりによって切り離された、不平等な生活水準が存在し、労働者階級のなかの小部門が持続する傾向があるのならそうであろうが。以上を仮定したうえで、労働者階級全体に共通な一生活水準、すなわちすべての労働者が多少とも自覚的に到達しようと努めるようなある生活水準が少なくとも存在するかどうか、を我々は問うことができる。

まず我々の扱った二つのアンケートの分析結果を想起しよう。家族の大きさが支出配分に及ぼす影響を検討して我々は次のことを確認できた。統計事務所のアンケートではこの影響は最も貧しい階級において最も顕著であり、とりわけ食料費の増大によって際立っている（食料費は平均的及裕福な集団においてはきわめて狭い範囲で変動する）。家族規模の増大は、貧乏な集団においては衣服費の僅かな増加の後で、ますます大幅になるその現象を結果するが、他の集団においては衣服費はゆっくりと増加するか、同一水準にとどまる傾向にある。家族規模の増大は貧乏な集団においては住居費の大幅な減少をもたらす（し

かし住居費は平均的集団においてもより目立たない程度に減少し、裕福な集団においては辛うじて定常、僅かに減少しさえする)。「その他の支出」は貧困集団において常に最も少なくなる。それは平均的集団では減少し、裕福な集団においては(かなり高いところで)同一の水準にとどまる傾向がある。金属労働者のアンケートでは、家族規模の増大は、食料費の(急激な上昇による)増加、住居費の全体としての減少、をもたらず、他方衣服費は「その他の支出」と同じく、著しく定常的である。貧乏と裕福という二つのカテゴリーに家族を区分すれば、次のように言うことができる。すなわち、余り恵まれていない労働者の場合には最初から急激に増大する食料費が、恵まれた労働者の場合には(家族規模がぐんと大きければ)もっと後になってから増大するということ、それはあたかも最初から食料は十分に豊かであり、従って節約することも可能であるといった形であること、である。同じく住居費の減少は、恵まれていない労働者の場合には他よりも速やかに起きる。しかし次に、住居費は、恵まれていない労働者においては一定にとどまる傾向があるが、恵まれた世帯においては減少を続ける。衣服費はいずれにおいても一定にとどまる傾向にある。

二つのアンケートの結果は(特に方法上の違いによって)正確には重なり合わないけれども、次の点は事実である。すなわち、家族規模の増大と共に食料費が増大する場合には、それはすべての集団についてとりわけ住居費を犠牲にしてまかなわれ、稀に、そしていずれにしても遙かに小さな度合においてであるが、衣服費を犠牲にしてまかなわれるということ、そして衣服費は平均以上の集団においては定常性を維持する傾向があること、である。

しかしようやく、収入が支出に及ぼす影響についての検討に取りかかろう。我々のこれまでの分析は我々に何を教えてきたであろうか。エンゲルがいったように、収入が高くなればなるほど食料費に充てられる支出の比率は小さくなる。しかしエンゲルは、衣服費がおおよそ同一のところにとどまると考えた点でまちがっていた。衣服費は、全体としては、明らかに増大するのである。同じく彼は、住居費はほとんど変化しないと言うときにもまちがっている。住居費は、全体としては減少するのであるが、それは食料費と同じ時点においてではない。最後に「その他の支出」は収入と共に増大する。以上が大体、統計事務所のアンケートが我々に教えるところである。金属労働者のアンケートもこうした結果を本質的な点では確認している。すでに全世帯についての絶対額の検討は、衣服費は住居費よりも重要であることを我々に教えていた。なぜなら食料費が(絶対額において)定常にとどまるか、或いは少々しか増大しないのは、住居費にゆとりを与えるためであるよりも、衣服費を増大させるためであることがはるかに多いからである。我々は大都市に限定して諸支出の比率を検討することによって、食料費は(収入が増えるにつれて)減少すること、衣服費は非常に明瞭かつ連続的に増大すること、しかるに住居費は定常にとどまる傾向があること、を確認できた。

労働者階級は、家族が少数である場合であれ、収入が多い場合であれ、可能になったときから、まず衣服費(そしてしばしば「その他の支出」)を増大させ、住居費の方は同じように早く増大させることは抑止する傾向があると結論できるであろうか。これは議論の余地がないもののように見える。しかし事実は非常に複雑であり、これだけにとどまることはできない。

我々は統計事務所によってアンケートされた世帯をいくつかのカテゴリーに分類した。最初の二つのカテゴリー（ $\alpha$ 及び $\beta$ ）においては、食料費は非常に大きく、その他は非常に、或いはかなり押えられている。第三のカテゴリー（ $\gamma$ ）においては、住居費が大きく、食料費は少し控えめである。しかしこれらいずれにおいても「その他の支出」と衣服費はしっかりと節約されている（衣服費がかなり大きく現れるのは例外的なことである）。第四の集団（ $\delta$ ）は、食料費の非常に小さい比率、住居費の非常に大きな比率、その他の支出及び衣服費の平均的比率を現わしている。第五の集団（ $\varepsilon$ ）は、食料費の非常に小さな比率、家賃支出の一定の抑制、衣服費および「その他の支出」の比率の大きさ、によって他と区別される。他方で、収入額と家族構成はある一団から別の一団へと変化することを想起しよう。いずれにしても、 $\mu$ ごとの平均支出は、カテゴリー $\delta$ では139と261の間、カテゴリー $\varepsilon$ では160と219の間である。それゆえ大体のところこれらは同一水準の世帯に対応している。ところで前面に登場してくるのはこのうち一方では住居費であり、別の一方では衣服費ならびに「その他の支出」である。

かくして、労働者は収入から見て可能であっても、常に断乎として衣服費を増やすことを選好するようには思われない。彼らの一部はこの場合住居費を増やすのである。しかしそれにしてもこの後者に属する労働者の数は少ない。なぜなら全体として衣服費はその低下ないしは上昇に対して抵抗することが住居の場合よりも多いからである。このような選好秩序の意味するところは何であろうか。

すでに述べたことであるが、労働者階級が他と区別されるのは、彼らとその機能を果している間は、その機能そのものが、彼らをして諸関係及び社会環境から絶縁することを義務づけるからである。しかしまさにこの隔離と排除は苦痛であり、異常であるからこそ、彼らが耐えている時間ができる限り明確に制限され確定されること、社会外的なその機能を果し終えるや労働者たちはそれを忘れようと努めること、別の言い方をすれば、労働と本来の意味での社会生活との間の区画線がはっきりと引かれること、こうしたことは理解できることである。これは実際、具体的な形をとって現れるものようである。いったん「労働日」が終り、工事現場或いは工場の出口を通過すれば、労働者は自由に振舞える。すなわち自らの家族、友人、隣人、自らの階級に所属すると感ずるようになる。しかし余りにしばしば、事情は全く異なる。他の人間とかかわるのとは異なる仕事と責務とのためにその気力、活動力、注意力の最良の部分、毎日、一日中、ある人間が費やしたとすれば、罰なしにはすまない。肉体的消耗、精神的麻痺、社会的欲求を満足させる財に対する関心の習慣的欠如、これらが余りにもしばしばその代償である。たしかにこの影響の作用は等しくない。この影響は、労働の多くの条件、強度、持続時間、労働者の抵抗力、要求する能力、労働者を覚醒させる、或いは気晴らしさせる社会的要因の力、と共に変化する。しかし、機械的労働およびそれから結果する心理的性向の社会生活に対する影響が常に存在し、労働が終わったときでさえその影響が表れるに違いない諸傾向の新たな作用が存在する。

この観点からするとき、欲求のヒエラルヒーはある新しい意味を帯びる。我々は、欲求を比較的原始的な肉体的欲求——これは人体的自然を理由として人間のなかに存在し、人体の維持と更新を本質的目的としている——と、社会的欲求——これは人間が結びつく集団、彼が入り込む社会環境全体を根拠として人間のなかに存在し、個人が社会から引き出



し得る利益を利用する能力をますます大きくすることをとりわけ目的とするものである——とに区分するという世間に通用している見解によって権威づけられているところがないであろうか。他方、肉体的欲求の発展の度合は、我々がいま示したばかりの、労働者に対する労働の影響そのものに依存していること、また、社会が労働者に対して接近することを禁じたが無駄であったところの諸領域に対する、この労働の機能の不可避免的な浸透に依存していること、これは理解できることではなかろうか。社会的なもののなかに機械的なものがこのように浸透することをあれこれ解釈しようとしても、また肉体的欲求とその満足のうちの本質的なものを見せようとも、労働者が存在するのは結局のところ、多分まずは工場のため、或いは労働者がますます避けるに違いない辛い必要のためであるからには、そして上のような諸領域が占めるのは彼の真の自然に一致している欲求およびその社会的満足の間だけであるからには、欲求を二つのカテゴリーに分けることはやはり認められることのように思われる。

先験的に人は、摂食欲求を原始的とみなし、我々が「その他の欲求」と呼んだもの（文化、娯楽、保険、団体への参加、等）を社会的とみなすことをためらわないであろう。また人は、肉体的欲求が十分に満足せられてから社会のことを考えることができるのであるから、収入の楷程を上昇するにつれて総支出における食料費の比率が減少し、「その他の支出」の比率が増大する、或いはその傾向がある、ということ——これは実際に起ることである——を予見できたであろう。（しかし）区別は多分、最初に見えるほど明確ではないであろう。食料費に関する我々の研究が明らかにしたことは、食料費の絶対額が増大するにつれて、比率上は減少していても、食料の種類が変化し、社会的固定観念がますます食料の選択に介在するようになるということであった。しかし衣服費と住居費については先験的には何が言えるであろうか。双方とも肉体的欲求に応えるものであることはたしかであるが、しかし、社会的欲求にも応えている。それゆえこれらは混合的な性格をもっている。また一方が他方よりもより社会的であると評価されなければならない理由も人は見ることができないであろう。それゆえ次のように言うべきであろうか。すなわちこれらは上の意味において等価であり、一方が一般的により選好され、他方が選好されることは余り多くないことなどはどうでもよい、と。

いまや取り上げるべき我々の社会における欲求の真の性質、意味、進化の問題全体である。

### 第三部. 消費傾向 欲求の社会学理論のために

#### 一. 個人主義的理論

人間の欲求についてはいろいろに分類することが可能である。我々としては、労働者の消費習慣を研究するに先だって、労働者の欲求を4ないし5つのカテゴリー（食料、住居等）に区別することが■何らかの現実に対応しているかどうかを問うてみる必要があったであろうと思われる。しかし我々はこの区分をどうしても受け入れざるを■得なかった。あらゆるアンケートで労働者の支出はそのような項目の下に示されているからである。さらに、この分類が調査者によって採択され、また被調査者によって受け入れられてきたとすれば、この分類には■何らかの存在理由があるのである。最後にこの分類によって我々は、このように区分された支出カテゴリーと、社会的条件との間の疑う余地のない関連を確認することができたのである。もしこの区分が■まったく恣意的なものであったとすれば、このような関連はどのように説明できるのか。——いま我々が探求しなければならないのはこのような区分の基礎であり、どのような欲求の理論がそれを説明できるか、である。

まず、社会的意識も社会的表象も存在しない、また社会的欲求、すなわち個体の欲求の単なる加算、並置、組み合わせによっては説明できない欲求、も存在しないと仮定しよう。その場合にはさしあたり社会生活の装置全体を除外し、あらゆる欲求の源泉と真の本性をただ個人意識のなかにのみ探らなければならない。これはまことに難しい仕事である。この仕事に最も成功した心理学者たちが我々に教えているのは次のことである。すなわち、人が社会のなかで身につけた習慣を捨象するのに対応して、単純ではっきりしたカテゴリーおよび区分に代って、個体の多様な諸傾向のすべてが登場してくるということである。しばらくこの観点に立ってみよう。

我々は食物の欲求について語る。しかし我々がその食物への欲求と、飲物への欲求、さらには野菜への欲求、牛肉への欲求、豚肉への欲求、牛乳への欲求、パンへの欲求、スパイスへの欲求、砂糖への欲求、等と分けようとは■まったくしないのは何故であるのか。人は、これら後者の欲求は同じ一つの欲求を満足させるための様々に異なる手段なのだ、と言うかもしれない。しかし、これほど独断的なことはない。これら特殊欲求のうちのいくつかは、独立的発展を見せることがあり、他の欲求すべてを自らに従属させることが可能であり、少なくともそれらに重大な制限を課すことが可能である。これら諸欲求の間にはしばしば葛藤が存在する。一方ではもしこれらの欲求が度を越せば、すべてを満足させるための金銭的手段に事欠くからであり、他方では、人体そのものが、すべての欲求が極限まで増大することに耐え■得ないからである。——同様に人はまた、料理が準備され出される様式、食器類の量と質、テーブルクロスを使い方、そしてより高い社会階級の場合にはテーブルの様々な装飾、食堂の照明、召使いの人数等に関係する欲求を、食物への欲求から区別するかもしれない。人はそこに、食物への欲求の名のもとに集められ、恣意的に関連づけられた、基本的欲求とは起源を異にする、付随的諸欲求を見るかもしれない。我々がそれらを基本的欲求と結びつけるとすれば、それは習慣によってである。

別の欲求についても人はまさしくこのように論じるであろう。衣服への欲求は単純ではない。衣服への欲求の名の■下に一つにされている種々の本能のリストには次のものを含むであろう。悪天候から身を守る本能、慎みの本能、(特に、見られることのない肌着に関する)清潔<sup>プロゾルテ</sup>の本能、端正さの本能、気に入られようとする本能、奢侈の本能、その他なおいくつかの本能、である。実際、肌着、タオル、シーツが戸棚に積み上げられている場合の農民が従う欲求、何よりも端正さへの気遣いを身なりが示している労働者あるいは事務員の従う欲求、そして外出用の服装をしている舞踊芸術家の従う欲求、これらは同じ欲求であろうか。ある一つの集団において奢侈への嗜好、あるいは単純な外面的端正さへの嗜好がどの点まで発達しているかを知ることが社会的に我々の関心を惹くとして、この集団における衣服費の平均値は我々にそれについて教えるところありと考えられるだろうか。仕事のための服装と日曜の服装との区別はこの場合、第一近似にすぎないであろう。一つの世帯というものは、家賃、食料等の支出を考慮に入れつつ衣服費を初めから決定するものだと考えるべきではない。それにまた、このように決められた総額から、労働に不可欠の衣服にどれだけ、肌着類にどれだけ、クリーニング等にどれだけ、また、他人の目に好ましく映るため、あるいはそれを身につけていることによって裕福な人という感じを与えるため、衣服の細部にどれだけ、というふうに割当てられていると考えるべきでもない。奢侈的出費、日曜日のための赤いローブの購入等は、多分、必要な靴とかすぐに支払うべき家賃とかを気にかけることなく、また日常的な生活資金を銀行から引き出す覚悟で行なわれるものであろう。それゆえ衣服費は様々の欲求に対応する諸支出の平均に他ならないであろうし、各欲求は多分、別の「衣服費」に対する配慮なしに行なわれるであろう。衣服費は、アルコール、暖房、外套のための支出を、これらはすべて寒さから保護するという口実の■下に■一まとめにする場合の同質性よりも、なお一層小さな同質性しかもたないであろう。自分自身や身内のために靴を買う代りに、ネクタイやステッキなどに、あるいは友人を招待する高価な食事に過度の支出をする人間を我々は同じく先が見えない、不用意と言わないであろうか。そして、様々の欲求の独立性は、それらが相互に対立し合う葛藤において以上によく理解できるところはない。実際それでも我々が衣服の欲求について語るとすれば、それは、その対象がしばしば同じ名称をもち、同じ戸棚に並べられ、同じ商店に売られている様々の欲求を我々が思考に置いて相互に関連づける習慣をもっているからである。しかしこれらはまさに■まったく人為的な結びつきであり、我々の人体あるいは意識においてそれらを検討すれば、それらの根本的な相違を消し去ることのできないような結びつきである。

住居欲求はもっと統一性をもっているであろうか。住居を一つ求める場合に出て来るいくつかの問題を考えて見よう。すでに穴居の人間でも動物や敵から最もよく保護されているものを選好したに違いなく、また、最も暖が取りやすく、さらに最も広いもの(これらは往々矛盾する欲求である)を選好したに違いない。人はただ空気の量や天井の高さのみを考慮するのではなく、明るさ、一般的構えも考慮するし、次いで、階、位置(通りに面しているか、袋小路に面しているか)、そしてかなりの程度まで、地区、仕事に関連しての位置上の便宜、また住民の社会的水準をも考慮するものである(その他多くの細かい部分はこれでもまだ考慮に入れていない)。しかしこれら様々の特徴は、共通点を■まったく、

あるいはほとんどもたない欲求に対応している。これら様々な特徴はそれぞれ独立の理由によって出現し発展したものである。しかし我々はこれらをひとまとめにして考える。なぜなら、家賃全体のなかでこれらの各要素に帰せられる出し分は容易に区別されるとしても、實際上我々には、複雑な料金が載っており、広さ、階、窓の数、地区等が個別に評価されている一覧表が呈示されるわけではないからである。もし我々がその価格を支払うことに同意するとすれば、それは結局その住居が平均してある点までこれら様々の欲求を満足させたということである。しかしそれでもやはりこうした欲求は別々のものである。それらはもう一度分離することがありうる。例えば、人が従来とは位置だけ異なる住居を求める場合、また場所を変えずに下宿人のために人部屋ないし二部屋を節約する場合である。もし家賃が家族規模および収入の高さと十分に規則的な関係にあるとすれば、それは明らかに、ある一定の文明および文化の状態においては、同じ状況にある人々の欲求はこうした様々の対象に関してほとんど同じだということに起因する。なおさらに、こうした欲求に■なんらかの性質の家具類への欲求を結びつけてみるのもよいだろう。家具類への欲求と、ある広さの住居への欲求との関係は、ある立地条件の住居への欲求との関係と比べて強くも弱くもない。これらの欲求は実際、相互に還元不可能な独自のものなのである。

最後に、「その他の欲求」を一つの独立のカテゴリーにすることも■まったく人為的なことである。人がいくつかの欲求をこの名において指示するからには、これらの欲求が異質的であることは疑いもなく暗黙のうちに認められている。しかし、別種の欲求にこれらの欲求を対置する際にはやはり、それらに対して何らかの同一性が付与されているのである。これらの欲求は各部類において、個々人の例外的な欲求あるいは贅沢を満足させるために個々人に残された幅に相当するかの如くである。ところでこの特徴は「その他の欲求」を別種の欲求から区別するものではない。例外的あるいは贅沢な欲求ということであれば、その部類のうちに、労働者の場合であればつけはずしのきくカラー、帽子への欲求、タバコへの欲求（これは食料への欲求に結びつけられている）を入れることができるであろうし、非労働者の場合であれば、エレベーターやシャンペンの欲求を入れることができるであろう。これらは衣服、住居、あるいは食物への欲求と密接なかたい関係にあるものではないのである。その代りにどうして人体の維持と更新を目的とする様々の食料欲求に、保健衛生サービスへの欲求を関連させないのか。——実際、このような近接化・親和化はすべてただ連想によるのであり、連想そのものは言語・商業等の習慣に基づくのである。住居に朝食が付いているならば、朝食を食料の費目に記載することを人はためらうであろう。作業服と日曜に着る服とをもはや同じ服という名前では呼ばなかったら、多分この二種類の支出をもっと明瞭に区別するようになるであろう。しかし、独立的傾向として食料への欲求、衣服への欲求、住居への欲求、「その他の支出」への欲求を語ることはそれらに対して実体的現実性を付与することであり、しかも、これらの欲求がどこからそうした実体的現実性を引き出しうるのかを我々に教えるものではない。

さらに進まなければならない。食料への欲求一般について語ってはならないばかりではなく、飲み物、野菜等への欲求一般、についても語ってはならない。実際にはこれらの欲求のそれぞれは、自体としても非常に異なっており、さらに、状況により、健康状態により、またそれが偶然的に結びついている別種の欲求の性質により、著しく異なっているので、

単一の名称で指示してはならないであろう。水への欲求、砂糖入りの飲料への欲求、ワインへの欲求、アルコールへの欲求は区別されるべきものである。さらにこれらの欲求のそれぞれはなお多数の別の欲求を含んでもいる。例えば水への欲求があるとして、我々の意図と生理的基礎のみを考慮する場合、飲むための水への欲求と、馬に飲ませるための、自分の体を洗うための、家屋等を洗うための水への欲求との間にはいかなる関係が存在するか。そこにあるのは同一の欲求、増えたり減ったりする水への欲求ではなく同一の対象である。同一の対象が異なる欲求を満足させることはありうるが、欲求群に対して同一性を付与することはできないと思われる。同一の対象だからといって、諸欲求が実際には個々別々の意図である場合には、欲求の同一性をもつことはできないであろう。

かくして、欲求をそれについての個々人の意識状態という相において突き詰めればつめるほど、それが多様な心理的素質へと分解されてしまうのが見られ、本質的と言われており、そして社会の中では通常同一の名称で指示されている欲求のそれぞれに付与されている同一性がますます人為的なものに思われてくる。

しかし、もし以上の分析が正確であり、食料、衣服、住居に対する欲求の同一性が名称の同一性にすぎないならば、我々が、各欲求のための支出の数字と総支出の数字との間の非常に規則的で非常に明確な関係を、収入のあるカテゴリーから別のカテゴリーへと移行するに依りて、指摘することができたのは何故であろうか。このような規則性は、各世帯があらかじめ、各支出に収入からどのくらいを充当するかを少なくとも大ざっぱには予定しており、一時的な勢いに抵抗し、必要な場合には、破られた均衡を一定の補償的禁欲によってたて直すことができるものと認めなければ、説明不可能である。換言すれば、一つの世帯は、諸支出を少数のカテゴリーに分類しなければ、支出を予定することは不可能であり、支出のそれぞれを一定の限界内に保つことは不可能であろう。しかしもしこれらのカテゴリーが人為的であり、類似的な欲求の間の現実的で自然な親縁関係を表していないのであれば、そうしたカテゴリーがあらゆる世帯において同じ形で現れてくるのは何故か、支出の分配があらゆる世帯において同数の枠組みと同じ枠組みとを有する計画によって企てられているように見えるのは何故か、を理解することはできない。さてこうした事態は我々が証明したように、諸事実の検討の結果起きていることである。

人間の本性を引き合いに出すべきであろうか。人間の本性なるものは、時代を通じて各個人においてほとんど同じままでであろうし、一集団の様々な成員間においても同じであろう。人間の本性は、それぞれ一定の度合において満足されなければならない諸欲求の総体から成り、数は限られているが一定数の異なる類型を含むであろう。しかし、明らかに余りに多くの変形があり、習慣があり、人間は置かれている様々の状況の影響を余りに多く蒙っており、起源において規定された自然の生理学的類型の存続によって、他の何人かの人間との、欲求に関する現在における類似を説明することはできない。戦闘におけるあらゆる偶発事の後でも、そしてあらゆる混乱を通じて、様々の部隊が判然たる形で存続しているのと同じようにはいかないのである。原初的諸欲求がしかるべき程度において、そしてしかるべき状況のなかで満足させられるという事実のみによって、強度においても形式においても変化することはない、とはいかなる心理学者も認めないことであろう。我々の分析の結果のなかで最も確実なものの一つは、とりわけ支出の秩序が家族構成と収入総額と関係しているということである。同じ性質をもつ人々がまさにこの二つの点において類似し

ているということは、一つの奇蹟であろう。

\*\*\*\*\* 3 1 1 3 7 2 アンケート\*\*\*\*\*

もし人間の本性が変化するものであるならば、少なくとも記憶と経験は人々をしてその様々の満足を比較し、規則を採用することを不可能ならしめるのではなかろうか。欲求がそれを経験する者にとって非常に新しく、それを満足させるにちがいない対象をもっている、彼らにとって非常に疎縁あるいはわかりにくいために、僅かに偶然的にしかそれを味わうことができないといった場合が存在することは確かである。骨董品の愛好家が農家で紡ぎ車を発見するとする。農夫は骨董愛好家を感じている願望の強さを■まったく理解できない。遠方へ急いで行かなければならないような事件によって動転している人物にとっては、彼をそこへ運んでくれる車は値が付けられないほどありがたい。しかし大抵の場合人間は、不決断の状態を脱して何をどの程度まで選好すべきか、を知るためには、経験に訴え、少しは他人のやり方にならえばよい。粗野で無茶な人でも、ラム酒を手に入れるために朝自分の寝台を売ってしまって、晩には泣かなければならなかったといったことがあったとすれば、それを憶えているであろう。感覚あるいは■何らかの情熱の専一的支配に■ふりまわされてはいない人々であれば、単純な反省と良識によって、欲求をその現実的な重要度に従って区別するようになるであろう。諸欲求の性質はしかしそれによって変化してしまうことはないであろう。それらは相互に還元不可能のままであろう。それでもやはり人は、あれよりもこれの方がしかじかの程度、彼を満足させるためには価値があったといったことを憶えているであろう。また人は他の人々の例に従う傾向を有するであろう。それは、自然な共感によることもあり、また、しかじかに振る舞った多くの人々には尤もな根拠があるという理由によることもある。実際彼はその方が具合がよいことに気づくであろう。かくして彼の観念のなかに価値の楷程、彼の活動の結成であり彼の経験を表現する欲求のヒエラルヒーが形成されるであろう。一般的な規則に基づく支出の予測と制限は、こうした条件の■下で、いかなる点において不可能なのであろうか。

尤もな問いではあるが、しかし、我々はこのような「楷程」や「ヒエラルヒー」がどこからその効力を引き出すかについて理解していない。■何ら共通性のない欲求の一列によって意識が支配されている人々が存在する。彼らは各瞬間に、それまで、より切実な他の欲求のために余りに長い間犠牲にしてきたか、あるいは古い習慣によって、あるいは直接のある種の刺激によって喚起せられてか、とにかくその時点で最も強い欲求を満足させようとするものと考えすることは自然なことである。労働者は空腹のときには食料のために給与のほとんどすべてを使ってしまうであろう。もし彼が腹■一杯食べたときに給与を受け取るならば、店頭で注目し狙っているネクタイや服を買うであろう。食べ物も衣服も彼をつき動かさない場合には彼は非常に高いアパートを借りるであろう。彼のやり方のなかにはいかなる秩序も見られず、偶然同じ行動をする別の人の行動と彼の行動との間にはいかなる類似も見られないであろう。それにも関わらず労働者は、憶えている能力があるからには予測する能力をもっているといわれるかも知れない。もし労働者の家計が均衡する傾向を示し、彼らの様々の支出が一定の割合を維持する傾向を示し、そこに無秩序ではなく秩序が存在するのであれば、それは経験が彼らに秩序の価値を教えたということである。

しかしすべてはこのような経験の性質にかかっている。もし経験が曖昧であり、快樂と苦痛の感情にのみ基づいているならば、それは非常に大雑把で不完全な予測しか立てることができないであろう。我々が全収入を食費に使わないことは言うまでもないことである。住むことも着ることもできないからである。しかし我々は食料への欲求をどの点まで制限するであろうか。住居および衣服への欲求について我々ほどの程度の満足を用意するであろうか。これは決めることが不可能である。

しかしながら個人主義者達はこの困難な問題を解決するための一手段を発見したと信じている。それは究極の効用あるいは限界効用の理論であって、ある財が満足させようとする欲求の最後のもの（すなわち最も強度の低いもの）によってその財の価値を説明するものである。例えば 10 個のバケツがあるとして、バケツのそれぞれの効用は、それぞれが多少とも緊急の、異なる一欲求に対応しているのであるから、それぞれ異なるものであろう。しかし、各バケツの価値は最も緊張性の低い欲求を満足させるバケツの効用によって確定ないしは測定されるであろう。なぜなら、もし私がある 1 つのバケツを奪われたとすれば、私が満足させ得ないのは、このような個々に異なる緊急の一欲求およびあの緊急性の最も低い欲求のみであろうからである。この理論において認められているのはまず第一に、各種の財にはある一列の欲求全体が対応しているということ、そして、個人は他者との交換および相互了解のすべてに先立って、内心の本音から離れることなく、自らの欲求を大きさとして漸減的にランク付けすることができるということ、である。他方いま一つ認められていることは、多種多様な財には（より正確には、多種多様な財の一定量には）、我々が述べたばかりの諸条件のなかで同じように個人がランク付けしようとする一列の欲求全体が対応しているということである。このような場合には、各人が予めその支出を比較しその家計を規制することができるものと説明することも可能である。「各人はその消費ないしは支出をどのように配分しているか。明らかに消費から最大の利益を引き出せるように、すなわち与えられた収入と両立しうる最大の満足を手に入れるような形で、である。各人は無意識に、ある均衡点に達するまで、住居のための費目を増やしたり、食料費を減らしたり、あるいは慈善のための費目を増やし観劇のための費用を節約したりして、試行錯誤する。そしてこの均衡点が到達するのは、交換される最後の対象の究極的効用、お好みならば、満足される最後の欲求の強度が等しい場合である。実際、昼間吸う最後の葉巻のための金と最新の新聞を買うための金による満足に等しい満足を与えないならば、考えた末に彼は、この金の使用法を変更して、葉巻を 1 つ減らし新聞を 1 部増やして購入するであろう。それゆえ消費は一種の交換に帰着する。その交換においては、市場は我々の内心であり、交換相手は、我々の闘争している願望である (1)。」

- (1) Gide et Rist. Histoire des doctrines économiques, 1909, p.613 この文章が引かれている章 (les hédonistes, pp.592-623、特に, les écoles mathématique et psychologique) の著者であるジード氏は、その著書 Principes d'économie politique, 7<sup>e</sup> édition, 1901, p.64 sqq.においてすでに究極的効用の理論を非常に明瞭に説明している。

実際のところこの理論はひどい混同に立脚している。この理論の信ずるところでは、諸欲求はそれ自体、人々の中の社会的諸関係のすべてを捨象した、諸量である。近代の内観

心理学が疑いもなく十分に教示したことは、このような誤謬の起源は何であるか、そしてこの誤謬は、意識状態とその原因あるいはその肉体的表れとの間にどのような関係が存在するかについて■まったく認識されていない場合には、それらが混同されることに由来するという点である。しばしば■曖昧さそのものが一目瞭然である。しかし、我々がいま論じている命題にとって有利と思われる一事例を取り上げよう。我々の評価の対象はこの場合非常に明確な数的関係だからである。1つの壺から玉を取り出すときの我々の不確実性が問題であるとして。壺のなかに99の白玉と1つの黒玉があるケースから、99の黒玉と1つの白玉が存在するケースまですべての中間項を経由して移行する場合、黒玉が出てくるのを見る希望は連続的に増大すると考えられるであろう。しかしこれは根拠のない主張である。なぜなら我々の意識状態の綿密な検証は■何らそのようなものを現示しないからである。一回一回の取り出し行為の一系列全体を通じて（その中で数学的意味における確率は増大している）我々の期待が変化しないということも考えられ、他方逆に、ある試行から次の試行へ移るところで、突然大きく変化するということもありうる。いずれにしても、数学的確率が我々の期待の程度を表していると■言うことはできない。もし我々の期待が量的形式を取るとすれば、それはむしろ、我々が期待される事象の確率の数学的度合について外部から知らされているからである、と■言った方がよい。同様に、「市場価格が市場に出掛けた個々人の量的評価の結果として出て来るということは確認されていないし、確認しようもない。なぜなら、本当の所は、量的形式における個々人によるこうした評価は、たとえそれが当該価格の形式に影響するとしても、現実にはそれ自体以前の価格に由来しているのであり、それゆえこのような評価は以前の価格を含んでおり、しかもまた以前の価格を説明するものでもなく、そして以前の価格そのものも、自らと同種の現象によってのみ説明されうるものなのである<sup>(1)</sup>。」そして、さらに大きな問題であるが、もし我々が財に付与されている価格についてすでに外部から知らされていなかったとしたら、我々の内心の評価たる市場において、財と我々にとってのその効用の評価および比較はいかにして可能であろうか。

(1) Simiand (François), *La Méthode positive en science économique*, 1912, p.149.

別の理論家達は、欲求と個人的性向のみを想定するという点を曲げないで、次のようなことが可能であると考えた。すなわち一つの意識の中に閉じこもらないこと、人々が相互に切り離されることが■まったくないこと、人々が多様な形で結びつき影響しあい、その結果として彼らのあいだに作用と反作用の複雑な一体系が形成されると考えること、である。彼らはとりわけ、模倣の事実を引き合いに出す<sup>(2)</sup>。——この際新たに次のような問題を立てるとしよう。すなわち、我々は各々どのようにその支出を配分し、各々が適応する諸規則はどこから来るのか。我々に対する答えは次のようになるであろう。すなわち、我々は将来に対して備えていなければならないということを知っている。いかに将来に対して用心深くあらねばならないかを習得するために我々は、我々の■まわりにおいて同じような経済条件にある人々の行動からヒントを得るであろう、と。もし我々が我々の欲求をこれほど多くのカテゴリーに、■何らかの性質を有するいくつかのカテゴリーに分類するとすれば、それは他の人々が我々にその例を与えているということである。もし我々が、あ



る財に対してある価値を付与するとしても、それによって我々がやっていることは他者の行動を模倣しているにすぎないのである。しかしこれらの例が我々に与えられるのは個々の人によってであり、またこれら他者の行動がいかに多数であろうとも、それらは依然として個人的なものにとどまる。——ここで我々としては、我々の同類達の行動に対して、我々がそれをモデルとして採用しなければならないほど十分大きな価値を付与するのは■何であるのか、と問うであろう。自然的共感あるいは無意識的機械的模倣について語るべきであろうか。しかし、我々の本来の衝動はこれらよりはるかに強力ではないであろうか、そして、我々は他方では、我々の行動の独立性についての理由あるいは言い訳として嗜好の多様性、内的状況の多様性を引き合いに出すことはできないであろうか。たしかに我々は同類のうちの一を模倣するのではなく複数の人間を模倣すると想定されている。重要なのは彼らの数であり、我々がかくかくに行動する「確かな理由」を彼らの数に帰するのは、それが多数だからである。しかしその数はどのくらいであるのか。そして、多数であるという事実は何故に我々の目にとってその威光を増大させるのか。もし我々の遭遇するすべての人間が我々にとって、彼らを越える何者かに■まったく結びついておらず、また彼らを越える何者かを■まったく表していないような単なる個々別々の人々であるならば、彼らのうちの 1 人を模倣することから我々が免れる理由が、同じくこの場合にも通用するであろうし、多分強められさえするであろう。最初の遭遇が私に強い印象を与えているということはある得る。しかし今や私は、私とある 1 人の他者との間のある差異についての観念を有しており、私と複数の他者達との間に差異を見出しても少しも驚かないであろう。私がある方向において行動する個人的諸動機は、他の人々のうちに観察される、別の方向において行動する個人的諸動機のすべてよりも、私にとっては重要である。——しかしながら、ある点で同じよう行動する人々が他の点では異なる行動をするということが私の目に映らないわけではないとも言い得るであろう。その場合、彼らが同じ態度を採用するためには、私は彼らに、ある優越的な理由、動機を想定しなければならない。個人主義的理論家たちがその命題を放棄し、模倣を引き合いに出すことをやめる決心をしなければならないのはここにおいてである。なぜなら、もし彼らが模倣対象と同じよう行動する多数の人々が存在するということによって模倣を説明しようとするのであれば、彼ら個人主義的理論家たちは、多数の人間が同じよう行動するというを説明するために、模倣そのものを援用しなければならなくなる。もし彼らがこのような悪循環を犯すことを欲しないのであれば、多数の個々人による態度および行動の一致は、個別に切り離され、まさに並列されその後で加算される彼らの意識とは別のところ、すなわち彼らが構成する全体、集団の意識のなかにその原理を有するものと想定しなければならない。模倣する、とは、どの程度であれ、一定数の個別の人々の行動に自らの行動を合致させることでは決してなく、模倣される個人のうちに、行動および習慣についての自他を越えるある一規則の現前を認め、まさに規則がそうしたものであるが故にそれを採用する、ということの意味する。

- (2) 経済学者シュモラーが位置づけられるのはこの観点からである。限界効用の理論家たちはアダム・スミスや正統派および自由主義的経済学派の後継者と考えることができるけれども、多くの点でこれら是对立する歴史学派が根本においては、心理学における同じような個人主義的構想から着想を得ていることは奇妙なことである。我々は論文《Les besoins et les tendances dans

l'économie sociale. Revue philosophique, février 1905》を参照。また《Sohmoller, Grundriss..., 1<sup>er</sup> teil, p.15 sqq》も参照。実際彼は、社会のなかに表れる感情や欲求を「意識の循環」の名で呼んでいるけれども、本来的に社会的で個人意識のなかの状態には決して還元されえない表象や傾向が存在することを■まったく理解していない。

## 二 欲求と社会

事情がかかるものであるとして、もし一方で個人が、時々刻々の願望に何の保留も条件もなしに屈服してはならない、来るべき欲求に備えなければならない、従って現在促迫している欲求の満足は制限しなければならない、と確信しているとするならば、また他方でもし、この予見そのものにおいて、そして欲求のそれぞれに対する分け前を決定するのに、彼が参加している集団の他の構成員が為した行為からヒントを得ているとすれば、まず欲求をいくつかの大きなカテゴリーに区分することが必要であること、そしてこの区分の原理が社会的なもの以外ではありえないことは理解されうる。実際のところ個人は曖昧な予測にひたすら従うということはない。しかし、他者の行動を細部において模倣するということもしない。彼は正確に同じ対象を同じ価格で購入するということもしない。我々は大きな範囲の集団において、食料費、住居費、衣服費、その他の支出、の間に一定の割合を維持する確かな傾向が存在することを確認した。家計の一般的枠組は明確化する傾向がある。しかし細部においては多くの相違が存在しており、嗜好、気質、性格の相違が表れるのはまさにこの点においてである。■4つの本質的な支出（クリーニング代および家具調度のための支出はこれらから区別される場合もあればこれらに結びつけられる場合もある）が別々に分けて見られるという事実は、いまや社会的な生活というものの条件によって説明されなければならないと我々には思われる。

多分、我々の欲求の対象およびその役割の多様性が、一部分は、これに関係しているであろう。しかし、■4つの本質的な支出に区分されるという事実についてよく考えて見れば、対象と欲求とが結びつけられる、上とは別の特徴も重要性が小さいというわけではない。食料は人体を修復するのに役立ち、衣服は人体を覆うのに役立ち、住居は人体を保護収容するのに役立つ。しかしもし我々が必要なもののみ限定するならば、我々が経験する、家でぬくぬくと過ごす幸福と、十分に食べていると感ずる満足との間に本当に何の類似も存在しないであろうか。これらの間に密接な関連が存在するという事を証明する傾向があると思われることは、これらの欲求がある程度相互に取って代るという事情である。単純に「眠る者は飢えを忘る」と言うべきではない。しかし労働者が大量のアルコールを飲むとすれば、それは多分彼が家に快適な部屋をもっていないか、あるいは身に付けているものがぼろで、寒さに悩まかしているということであろう。他方で、ほとんどもっぱらその土地の産み出すものによって、あるいは彼がその土地の上で産み出すものによって生活する一農民を心に描いてみよう。彼は牡羊の毛を自分自身で紡ぎ、身にまとうべくそれを織る。彼は消費する野菜のすべてを自らの果樹園から取る。家屋は自分のものなので家賃は払わない。居住の場所としての家屋への欲求は農民にとっては、家屋およびそれに隣接する、食料を得るための土地への欲求とほとんど区別されず、食料とする自然の産物への欲求も、麻、亜麻、羊毛、といった着るための他の自然産物への欲求とほとんど区別され

ない。それ■ゆえ、こうした本質的欲求が区別され、その各々が、対象および形態の非常な多様性にも関わらず、個人の意識にとっては統一の相を帯びるのは一定の経済組織のゆえ、すなわち社会の影響によってである。

#### A. 欲求の形態

社会の影響はまず第一に、支出およびそれが満足させる欲求の形態そのものについて可能となる名称化において可視化される。住居の使用権、衣服、および食料は一般に異なる人物、商店、代理店、等を通じて労働者に販売される。こうした仕事のそれぞれを担当する売り手の間には確かに相違が存在するが、ここで問題なのはそれらの外的側面ではない。なぜなら、肉屋と香辛料店との間の差異は疑いもなく後者と小間物店との間の差異と同じくらい大きいからである。小売商人の（そして同じく家主の）外観、言葉遣い、生活習慣といった外面的特徴はすべて、次のようなより一般的な事実<sup>サービス</sup>に由来している。すなわち、消費者がこれらの店において行なう購買は多少とも重要であること、そしてその結果として、同じ消費者が同じカテゴリーに属する商人のところで行なう購買から購買への時間間隔は、平均して多少とも長いということ、である。この点において（これは支出および欲求の形態と呼ぶことができるのであるが）、食料、衣服、住居への欲求および「その他の欲求」は、大都市の労働者人口においては、明確に分化している。——労働者世帯が予め長期の予測をたてることは極めて稀である。また労働者世帯が食料品を調達するのは、その日その日である。食料は新鮮な状態で買わなければならないし、一回に余り多く支出しないほうが彼らにとっては好都合でもあるからである。掛け買いをさせる商店、商店と交換するための引き換え券を予め発行する消費協同組合が異なる習慣を導入する傾向にあることは確かである。しかし始まっているのは程度における変化にすぎず、まだ大抵は小売商店で支払いをする形で人は物を買っている。またさらに、家具や衣服のために支払われる価格と比較すれば、購入価格が著しく高くなることも稀である。——衣服、靴の購入は比較的大きなことでもあり、稀なことでもある。すなわち、これらを身なりのための年間総支出に帰属させれば■とくに、大きなものとなる。あるいくつかの小間物はあまり高いこと（これらは、食料費における最も日常的で安価な購入品と同じく、衣服費における付属品に相当する）、さらにまた衣服ならびに家具のための商店が契約使用、手付金の習慣を導入していること（それでも人は一回で全支出を投入する）は、あまり重要なことではない。依然として衣服への欲求が強く表れるのはかなり隔立った間隔においてのみであり、それを満足させるためには毎回深刻な努力、重大な犠牲が必要である。——住居費は衣服費のいずれよりも高価であり、月単位で支払われる場合でも相当大きな支出を課する。多分住居への欲求がその全幅の力において、また最も意識的に感得されるのは、ある住所をやめて別の所を探すときのみであろう。人はひとたびある所に落ち■ついてしまえば、なされた選択そのものによって鎖につながれるかのようである。人はもはやほとんどなすべき決定はなくなり、別のところを探すのには重大な支障ないしは深刻な理由を必要とする。——「その他の支出」については、定義そのものによってこれはカテゴリーを構成しないが、しかし、個人的恣意に委ねられた余白のようなものというわけではない。とくに調度類のための出費■は固有のリズムをもっている。これは他のあらゆる出費よりもはるかに

不連続的である。調度類のための出費が行なわれるのは特に世帯をもつ時であり、最大の犠牲を課するのは明らかに調度類である。この出費は次いで子供が生まれたとき（あるいはその数年後）に繰り返され、家具の平均寿命（これは家具の品質および引っ越しの頻度による）にほとんど対応する一定の間隔毎に繰り返される。そこに何らかの規則性が存在するとすれば、それはいずれにしても先の場合におけるよりもはるかに不明瞭であるが、しかし、この支出ジャンルおよび対応する欲求が先の三つの本質的支出から区別されうるためにはこれで十分である。しかし、家具調度のための支出が「その他の支出」から区分されるためにはこれでは■まったく不十分である。

欲求形態におけるこのような相違から多くの帰結が導き出される。まず第一に、同種の商品の購入が頻繁であればあるほど、価格と商品との間に緊密な関係が樹立されるようになり、またこの価格表象はますます欲求そのものに結び付くようになる。この点を理解するためには、様々の売り手たちに対する労働者の態度を観察すれば十分である。食料品を買う■とき労働者はほとんど値切らない。価格なるものは彼には商品の実質そのものの一部であるように思われ、商品と同じように「自然」なものと思われるのである。彼はまもなく、商品の価格を支払う■とき、自分は「払った金に見合うだけのものを受け取っている」と確信するようになる。このことが欲求に対して深刻な変形的作用を及ぼさずにいることは決してない。食料品がしかるべき価格に値する以上は、人体に対して、その価格に等しい効用ないしは楽しみをそれは与えるはずだからである。かくして、嗜好や気質にも関わらず、実際には社会的事実にはかならない価格の圧力の下に、栄養を目的とする諸欲求が規格化し、欲求のヒエラルヒーが樹立される傾向を呈する。値札のついた食料品店の陳列棚のイメージが購買者の意識にのしかかり、彼らはそこに彼ら固有の評価の反映を見出していると信じる。彼ら固有の評価なるものは、実際にはしばしば、陳列棚のイメージ以外に起源をもたないのであるが。このことはしかし、食料品の価格が高騰する際に、消費者たちが抗議し反抗することを排除するものでは決してない。彼らはある種の価格にあまりにも慣らされているので、こうした現象は彼らには異常で途方もないことと映り、自然な価格に人為的な価格が取って代ったように解釈し、その裏にありとあらゆる種類の不可解な陰謀の嫌疑をかけることになる。——逆に、小間物商、仕立て屋、既製服屋のところでは、人はあるいは値切り、ためらい、議論をし、あるいは、価格が固定的である場合には、より安い方へと赴くであろう。ここでは人はもはや一定の価格を一定の対象に結びつけることに慣れておらず、常に欺されまいと恐れている。この場合人は、自分が欺されやすい人間ではないことを示そうとし、あるいは、最も価値のないものを選んだりして、馬鹿にされることができるだけないようにと望む。かくして人は食料市場における条件へと接近する。人はあまり長持ちせずあまり高価でない衣服を好む。その理由は、そのような衣服の場合、真の価値と価格との間の絶対的な懸隔がもっと高価な品物の場合よりも小さいと人は考えるからである。——しかし労働者が最も決心のつかない状態になるのは家主と面しているときである。住んでいる住居と家賃との間の関係は、労働者は次の点で弾力的なもののように見える。すなわち、家賃の値上げに対して労働者はそれに抗議するいかなる根拠も見出しえないという点である。労働者はそれに気づきさえしない。なぜなら労働者は、自分の支払う家賃は自分に与えられる便宜とは比較にならないものという感じをいつももっているからである。労働者の大部分にとって家賃は一種の税金のように思わ

れており、税金については人はそれを免れることについてあまり罪のあることとは思わない。この場合における労働者の傾向は、さらに明瞭に、支払条件に対して出来るだけ劣らない品質で満足するということである。

食料への欲求は一連の多数の支出によって満足せられるが支出のそれぞれは余り大きくないということから、それを限定することは最も困難である、という結果がさらに出て来る。食料の価格は非常に確定的であり、細部まで予測可能である。しかし、住居あるいは衣服のために年間で支出する額を予め計算するほうが、たとえ 1 ヶ月であれ食料費を予め計算するよりも容易であろう。たとえある世帯が家賃に当てられる収入部分および服装のために保留する収入部分をまず「不変の決定」として固定したとしても、明らかに「その他の欲求」が残るのであろうし、そしてこの残余部分について予め、それと食料への欲求とで配分することは困難なことであろう。しかもさらに、収入は全面的に確定しているものではない。また他方、1 年間の中で家賃および衣服費を減少させることもとにかく可能である。それゆえ食料費は変動することが可能であり、その水準は、生存するために厳密に必要なものと、他の欲求をすべて極端に圧縮して食料費に当てられうるものとの間で移動する。——さて我々はすでに、食料費が増大する一つの理由を示した。食料品の購買者は、大抵、その正当な価格を支払い、支払った全額の等価物を正確に受け取っているものとする。しかしとりわけ彼らが信じていることができるのは、その収入の割には自分たちは食料費に使いすぎており、しかしそれでも多分次の週から食料費を少なくすれば、均衡を回復することがかなり速やかに可能であろう、ということである。衣服費の場合にはこうしたことは当てはまらないし、住居費の場合にはさらにこうしたことはない。彼らが衣服や住居による支出超過をある程度節約して埋め合わせることができるのは、半年か 1 年に 1 回別の服が欲しくなる時だけであり、また、引っ越しをするとき（あまり引っ越しをすることを人はためらうが）のみである。かくしてこのような場合において購買者における慎重さの増大が説明されるが、逆に、彼らが食料を購入する場合に支配的な無頓着さも説明される。しかしこのような計算はしばしば裏目に出る。人は贅沢な消費に慣れれば必ず罰せられる。消費者の性向と嗜好は、それらをまだ十分に満足させることができるときに発展する。その結果、食料への欲求は、ただ我々がその形態と呼んだところのものによって、またそれが一連の、時間的に非常に接近した小さな満足を要求するものであることによって、絶えずはみ出る危険があり、家計の均衡を破壊する危険がある。このことは衣服への欲求については妥当性が小さく、住居への欲求の場合には一層小さくなる。

かくして、欲求の形態、すなわち欲求の促進の頻度とその満足のそれぞれの有する相対的重要性を考えるだけで、欲求は本質的な 4 つのカテゴリーに分類される。それらはある意味作用、社会的内容のようなものをもっている。それゆえ欲求のこのような分類は社会の産物である。この分類は社会生活によって人々に課されるところの必要性、彼らの集団構成員がその欲求を満足させるのと同じ程度においてそれを満足させるために、その支出を予測し、支出の範囲を予め計算する必要性、によって説明される。この種の予測は、毎日満足せられることを要する欲求と、多少とも間隔をおいて、ともかくあまり接近していない間隔で満足せられる欲求とが区別されてきていることを想定している。他方この分類はすでにこれらの欲求の多少とも社会的な性格を表わしている。実際、食料への欲求は一定量のあまり関連のない願望へと分散し、全体を見るのが難しいのであるが、この食料への

欲求を特徴づける、限界を越えてしまう傾向は、もしそれが社会の課する規則、制限、組織から逃れるための自然本能の努力でないとすれば、一体何であるのか。そしてまた、衣服および住居への欲求を可能なかぎり制限しようとする傾向は、もしそれがこれらの欲求およびそれを満足させる対象から社会的なものをすべて除去し、それらを出来る限り、雨露をしのぐ避難所、掩護物といった自然的欲求を越えぬものとするための努力でないとすれば、一体何であるのか。衣服および住居のためには最小限を固定し、稼ぎの残りをすべて食料に当てるとするのは最低水準の予測であり、社会生活の最も原基的な形態である。それゆえ、欲求が要請する予測期間が長ければ長いほど、欲求は社会的であるといえることができる。

## B. 欲求の<sup>マテリアル</sup>素材

今度は欲求の素材について検討しよう。我々は、欲求が向かう対象と、主体がそれを求める理由、すなわち主体がそれに付与する意味と価値、主体がそれから期待する満足の種類、欲求の原理ないしは<sup>モチーフ</sup>動機と呼ぶもの、とを区別するであろう。

### 一. 欲求の対象

社会は個々人に対して、彼ら<sup>が</sup>その欲求を満足させる際に、予測能力を用いることを義務づけるばかりではない。社会はまた彼ら<sup>に対して</sup>、彼ら<sup>が</sup>選択しなければならない対象の種類および量を予め決定する。この点についてはあまり強調するには及ばないであろう。バーナード・ショーはその小品「百万長者のための社会主義」(Socialism for millionaires)のなかで最も金持ちの人々を次の点で気の毒がっている。すなわち、近代社会においては商人や産業家、自動車製造業者、洋服屋たちは特別にこの金持ちの人間について考えることはせず、ただ広い範囲の集団のなかで売りつくさなければならない、限られたタイプの商品を消費に供しているという点である。裕福な人間は他の人間よりも大量の衣服、家具調度等を購入することができはするであろう。しかしそれらは余り金持ちではない人々が手に入れるものとますます同じ形の衣服、同じ作りの家具になっていく。このことは部分的にのみ正確なのではあるが、しかし、次の点は議論の余地がない。すなわち、地方的習慣の消滅および大工業の発展とともに、食料、衣服、住居、家具はとにかくある程度広い範囲の集団のなかで画一化される傾向にあるという事情である。

想像できることであるが、■たしかに次のような経済組織が存在していた。すなわち、気質や生理学的体質によって異なっている人々が、職人や商人にその様々な嗜好と合った、変化に富んだ品物を要求していた経済組織である。まだデパートが発展していないある大都市では各自が納入商人を選んでいるといったことは想像できることである。そのような場合でさえ、小商人の数は顧客に比してはるかに少なく、このことがすでに顧客の嗜好および選好にいくつかの制限を加えている。大工業とデパートが大多数の消費者を満足させているところではどこでも、この制限はさらにきつくなり、固有の嗜好を維持し満足させるためには、暇も必要であり、また独特の資質のようなものも必要である。——実際大衆は自らの欲求をまげ、修正し、新たな条件に適合させる。確かに彼ら<sup>が</sup>反発抵抗する能力をすべて失なうわけではない。彼らに供される新たな製品は、彼らの習慣的嗜好と、そし

て彼らの金銭的能力とかなり密接な一定の関係になければならない。しかし、彼らが反抗するとしても、それは常にその選好を、彼らがすでに知っており、多少とも以前から放棄していた商品に再び振り向けることによってである。彼らは社会的に決定された欲求の環のなかを廻ることに甘んじている。そして大抵は、彼らは反抗しない。すでにして彼らの個人的嗜好の一部を犠牲にしたこと、すなわち、流行と産業の変化にしたがってその生理的性向を多様な方向に変容させたこと、このことは彼らの可塑性を高めることに他ならなかったと思われる。

こうしたことの結果はかなり顕著なものがある。まず、より「統合同化された」社会部分に行くにつれて、人体が食料、衣服、住居から引き出さなければならない満足について、あるいはそれらから予想される生理的不都合について、無頓着が増大するということがある。この命題は決して逆説的ではない。

人は上流階級における、衛生、肉体的発達に対するますます大きくなる強い関心を反論として挙げるかも知れない。人々は食餌療法に従い、アルコール等を断っている。人々は日夜部屋部屋を換気し、子どもたちの夜の掛け物はなるべく少なくし、オーバーなしで外出して自らを鍛えている。肉体的運動の増大する権威、冬期のスポーツの流行も同じ傾向を表わしている。しかしこうした新しい習慣が社会的起源のものでないことを、何が我々に証明できるであろうか。それが身体に快いというので自発的にこうしたやり方に到達するのは身体そのものであろうか。我々は、この種の生活が健康、身体的精神的均衡にとって実際は好ましいかどうかについては問わない。スペンサーはその著書『教育論』でこのような新しいやり方を馬鹿げたこととみなしている。スペンサーにとって菜食療法は人を衰弱させるものである。太ってピンク色の類をした小農民は力の外観をもっているだけである。子供をほとんど裸で過ごさせることは、放射熱の形で彼らの生命エネルギーのかなりの部分を奪ってしまう。さらに、最も 19 世紀的特徴を有するこの個人主義者が、18 世紀にルソーによって主張された命題の反対命題をこれほど意識的に採用していることは好奇心をそそることではある。多分彼は、かつてのルソーと同じく、何であれまさに社会的習慣なるものに対する敵意によって引きずられているのであろう。たとえ彼が間違っていたとしても、またこの新しい習慣が生理学に一致していたとしても、これらが由来するところは科学、すなわち社会が定式化し受容している諸命題の総体であって、「自然」でも本能でもない。しかしこれは■確かに、もっぱら科学だけに由来するものでもない。

ソースタイン・ヴェブレンは次のような命題を華々しく主張した。すなわち金持ちは食べ方、身なり、住まい方を通じて、自分たちが働いてはいないこと、暇をもっていることを何よりもまず示したいと欲しているということである<sup>(1)</sup>。かくして金持ちの食事は胃を疲れさせること、体を重くし麻痺させること、あるいは、後に落ち込みが来る人為的な過度興奮を体に伝えてしまうこと、体を鍛えて一定のエネルギー支出をはかるということがないこと、金持ちの衣服はほとんど実用性がないこと、彼等の衣服は人を窮屈にし、首を短く見せ、自分の手で働くことを妨げること、彼らの住居はしばしば真に健康的で快適であるというよりも贅沢であること、婦人および小さい子供についての理想は、長い間、線が細いこと、虚弱な外観、か弱く繊細な作りであったこと、広い肩幅と余りに顕著な健康は人々の間で、鈍重と粗野俗悪の印と見られていたこと、が説明される。こうした偏見は消滅の過程にあるとしても、それは疑いなく社会条件そのものが変容したからである。

往時対立は主として、野外や畑、あるいは通りに面して開いた小さな仕事場で働く農民および職人と、空気や日光が大量に入ってくる城や宮殿やそのなかの一続きの部屋で隠遁的な生活をしてきた貴族の間においてであった。他方知的能力の訓練は一種の贅沢と受け取られねばならなかった。内面的生活と自然な生活との間の差異は、それがほとんど階級の差異である度合に応じて際立っており、一方は他方の停止ないしは鈍化として最も表れやすかったに違いない。しかし大工業の発展と労働者階級の形成以来、外見と生活のこのような対照はその意味を失った。一日の大部分を工場の濃密な、機械で汚染された空気のなかで過ごす労働者たちは、外でも、彼らがすし詰めになっている都市の界隅においても、田園の空気と光を見出すことはない。強度の単調な労働が彼等を憔悴させ、彼らの消耗衰弱は、彼らの劣悪な生活労働条件と同じく彼らの疲れきった顔、やつれた表情の上に読み取ることができ、非常にしばしば貧血的で虚弱なその体全体にその印を刻んでいる。下層階級の人々が「魅力的な顔」をし、一日中閉じ込められていて栄養の悪い下層階級の婦人や労働者が体つきの優美さと青白い顔色によって際立つからには、上流階級の理想も変わらなければならない。現在では財産と閑暇を証明するものは、精力と健康の外観であり、非常に様々なスポーツに多大の時間と努力とを捧げえたという事実である。大抵の場合、実際の<sup>ビアン・エートル</sup>「幸福」は理想の外部にあること、人々は諸能力の幸福な均衡を達成することを■何にもまして望むというわけでないこと、これらはこのような嗜好の過度そのものの結果である。この領域における極端な成功は、現実的には畸形化である。多くの人々は、もっと知的な性質の労働と娯楽においてより快適に消費したであろう時間と活力をこうした運動に捧げる。しかし階級意識にとっては、こうした運動が得になる。知的な仕事については、この文化がより多くの人々に拡大し、とくに功利的目的のための手段のとなつて以降、その威信の大きな部分を喪失している。

(1) ■原著 410■

要するにこうした変容の全体を通じて、労働者は上流階級の人々よりもその肉体的欲望を追求しつづけており、また満足させつづけている。上流階級の人間は、食べるに際してはるかによく考え、自らの嗜好についてはるかに用心深い。彼は科学者の用意する味もそっけもないパスタあるいはエキスで栄養を摂ることを余り反発なしに受け容れるであろう。様々の形と材質の衣服、あまりごわごわせず、軽く柔らかい服、様々の機能に適合した、あるいは動かないことに適合した衣服を着けている■時に上流階級の人間は安楽に感ずること、好みに合った家具、目に快適で心地よい照明、暖房設備の備わった住居こそが彼の独創性を示すものであること、こうした点を人は指摘するかも知れない。しかしこの種の安楽は、多大の努力と窮屈さを代償としてのみ獲得されるものであり、それは社会への適応であり、人体の満足では決してない。もちがよく、あまり流行に左右されず、速やかに慣れることができ、むしろ自分に都合のよい癖と形をつけることのできる衣服を身に着けている■時、労働者はあまり優雅ではないが、しかし窮屈さはない。上っ張りよりも身体にぴったりついているが、ほとんど同じ動き方が可能である。ブルジョア風の衣裳を着けた労働者の集まりのなかに存在する喜劇的なものとは■何か。それは確かに「生きたものの上に被せられた機械的なもの」であるが、より正確には、社会的なものに合致しよう



としない個人的なもの、それを消し去り得ると自負すればするほど目立つ身体的特徴である。——この特徴は社会的なものだけから形成されている快適な内装の特徴とは■まったく別種のものである。住居が満足させる身体的欲求はかなり単調で単純化されたものである。すなわち、座る、横になる、食べて、冬場には暖まるための場所を取る、通りや他人から離れるための場所を取る、等である。労働者の部屋に入ってからすぐにまず想起させられるのは実にこうした身体的欲求であり、その種類や強度、部屋の住人が粗野であるかどうか、あるいは身体が敏感な場合、柔らかい腰掛けと寝台、多少はあれ照明、外部の雑音からの隔離、を要求しているかどうか、は苦もなく読み取れるであろう。これらと比べれば、まあまあ贅沢、本来の意味での社会的諸設備は第二の位置に来る。逆に金持ちの部屋の場合には、身体的欲求そのものに関係するものははるかに目に付かず、各種の部屋の装備によって示されている家具の豊かさと優雅さ、趣味、特に社会的欲求を満足させるためにしつらえているものに目が向く。かくして何らかの若様の寝室を訪れた時、人は、若様はそこでよく眠れたか、暖房と照明はよかったか、などはほとんど思わない。人は肘掛け椅子の錦織り、じゅうたん、机、姿見、を眺める。

かくして社会生活がより盛んであり、組織化されており、複雑化している集団に移行するにつれて、欲求がその「原始的」内容全体を失い、鈍くなり、自然な生物特有の<sup>オルガニク</sup>「印」<sup>アンプレッション</sup>とそれに由来する満足がほとんどなくなるのが見られる。それらは事実においてよりも理論上消滅し、そして自然が復讐するということもありうる。(しかし)社会が自然的なものを忘れるように命ずること、その代りに自然的なものには微弱にしか結びつかない別のものをもって来るように命ずること、社会が人の身体的感覚を社会の好みに従って変形し加工するのに結局は成功すること、このことはいずれにしても議論の余地のないことと思われる。

しかし、このような顕著な可塑性のもう一つの結果なのであるが、社会生活というものは多分、人間有機体の生活を貧困化するようにしか見えない■ときでさえ、それを豊かにしているであろう。社会生活は人間有機体の新たな欲望と満足のほとんどすべてをつくり出す。複雑でめずらしい多くの料理、えり抜きワイン等に対する嗜好は多くの場合、獲得されたものである。習慣が曖昧なぼんやりした性向を展開させ、我々の感受性の不確定部分全体に方向を付与したということである。同じように、人は適切な線で囲まれていると感ずることに身体的安楽を覚える。よくしつらえていて、すべてのものが形においても色彩においても秩序と調和そのものであるような部屋が与える快楽は、大部分身体的なものである。もし仮に人が野蛮あるいは未開の状態に戻るとしたら、また、社会的規則と習慣が消滅したとしたら、それは疑いもなく、このような人為的な身体感覚を取り去るであろう。それゆえこうした人為的な身体感覚の支配は社会的圧力によってのみ説明される。しかし余り洗練されていない嗜好の満足を伴なう、より粗野な感覚が、たとえそれが貧しくされ弱められているとしても、新しい感覚と結合することによって新たな力を引き出し、新しい内容のようなものを受け取るであろう。裕福な世帯のメニューのなかに、最も単純な食料が再び現れ、ますます高く評価されている。家庭用の衣服、そしてすべてが快適さのために犠牲にされている、贅沢な住居における簡素なしつらえの部屋部屋、丈夫なチェアの側におかれているロッキング・チェア、そして壊れやすい肘掛け椅子、これらは■あきらかに身体的欲求を満足させるものである。さらに、社会生活のこのような側面全

体を、社会的なものにおける原始的なものの残存、社会における人間が経験するであろう、社会とそれが課す拘束を忘れたいという周期的欲求、と解釈してはならない。こうした種類の感覚にそれ自体すでに人為的なものとなっており、これらが与える快樂の全体は大抵の場合、より洗練された感覚との対比から生れる。とりわけ、社会の刻印は対象の上にも表れる。ありふれた料理、労働者の通常の食事であるものがより巧妙に調理され、より贅沢な食器で供されること、部屋着、ガウン、室内用の上着が■何らかの凝り過ぎを示すこと、小さな居間や仕事部屋が時代物めかしてあること、これらは、別種の人々の社会に認められるためには、生きものとしての自然の欲求が偽装され異様なものに変形されねばならないことを示している。

どのようなものであれ、社会生活は我々の身体的感受性を大いに拡張した。その理由は社会生活が非常に様々の種類、性質、強度の感覚を十分に体系的な全体へと結合し関連づけるからである。ある食料品はもはやそれ自体として単独で評価されるのではなく、食事におけるその位置、役割についても評価されるものとなる。衣服における細部のそれぞれが他の部分および全体との関係によって活かされるのと■まったく同じことである。ある家具が便利で優雅であるだけでは十分ではない。それが置かれているところで美しく映えなければならない。このように結合されることによって様々な感覚が強化される。これは味覚の教育と呼ばれているもの、あるいは（家具ないし衣服の場合であれば）趣味の教育と呼ばれているものである。このような訓練のおかげで、教養のある人物、裕福な人物は常に拡張される感覚可能性を発見するのである。このように欲求を複雑化し増殖させることによって、増加する対象の上に我々の願望を分散させることによって、社会は一つの支配的な欲求ないしは趣味の専一的支配から我々をますます免れさせるようになる。我々はますますある一つの快樂ではなく、十分に調和のとれた快樂の一全体を追求するようになり、我々の選好は関心ある人々の集団全体に共通なものとなる。このような調和のとれた快樂の一全体は他方で我々を超越する一社会的経験を表しているのだから、我々は、それに含まれており、しかもそのあるものは我々にとって新しいはじめてのものである感覚のすべてを、感受し味わうことができるようにならなければならない。人間有機体の素質によって継続したり取って代られたりする単独の個人的な欲求に代って、相互に関わり合い強化し合い、そして根が交錯し合っている植物と同じように相互につながっている人々の一総体に共通の諸欲求の体系が登場して来ることほど、社会の影響を示すものはない。つまり、集団全体のなかでの人間有機体の感受性の共通形態の登場である。

したがって、社会が我々に提供する物は、単独の、そして原始的衝動の支配下にある個人であったならばそれらがもたらすであろう身体的感覚をますます小さなものにするばかりでなく、さらに我々はそれらの物に関連して、我々からすればそれらが結びついていると思われる諸物の一総体を表象し、我々が物から期待する満足は、この一総体が我々にもたらす満足と切り離しがたく結びついているように思われる。この欲求の体系とはいかなるものであるのか、いかなる原理が欲求の構造を説明するのか。これが我々がこれから探求しようとするものである。いずれにしても人々が集団を形成しているからには、欲求は社会のなかで存在していること、食料への欲求に含まれている多様な傾向は、衣服への欲求、住居への欲求に含まれている傾向と同じく、相互に関連し■あい結びついていること、これはこうした欲求のそれぞれがある統一性をもっていること、そしてこの統一性は社会

的な性質のものであることの新たな証明である。

## 二. 欲求の原理

ある欲求についてそれが社会的であると言うことは、それが幾人かの個人の欲求の合成の産物であり、平均であるということを意味しうるであろう。これはしかし我々の理解するところとは異なる。■確かに■一つの家族が複数の構成員を含み、商人は一集団全体にとって都合がよいに違いない物売るからには、一方の嗜好と他方の嗜好との間で一連の作用と反作用が行なわれるであろう。しかし、集団そのものについての、そして集団にとって好都合なものについての表象が構成員の間で明らかになり、彼らにそれが課されない限りは、多数で強力な一方の欲求が勝利する、あるいは、それが他方と一種の妥協に到達すると言う理由は■なにも存在しない。ある世帯が一定のやり方で食事をし、衣服を身につけ、住まうことを決定するときには、確かに父母の間で、あるいは別の親族、年長の子どもの間で考えの交換があり、議論があり、ある合意が存在するであろう。しかしこれら全体を支配するもの、彼らが合意するに至るにしても、あるいは合意から出発するにしても、それが基づくところのもの、それは一全体と見られた家族にとって好都合なものは何かという点についての観念である。

さて我々はさらに、この社会的感情が二様のあり方で、異なる■二つの「場所」にあるように、存在することを認めなければならない。すなわち、この感情が家族集団の内部に閉じ込められているのに応じて、また、様々な消費行為をなす、あるいは決断する家族集団の構成員が、家族は社会的地位を獲得しており、それを獲得し続けなければならないという観念を抱いているのに応じて、——あるいはこの感情が家族集団から脱する、すなわち、家族構成員が家族はその一部にすぎないより広い社会集団の構成員による評価のことを考えるに応じて、この社会感情は二様のあり方を取るのである。

家族感情と階級感情との間には実際、緊密な関連が存在する。人は普通、ある家族の構成員はすべて、少なくとも一緒に生活する限り、同じ階級に属し、同じ水準にあると考える。社会的地位がとりわけ食料、住居の条件によって表示され、またこれらが緊密な意味における家族全体について同じであるからには、どうしてこれ以外でありえようか。そして、水準の高い条件にある集団につながるものが人間の幸福の大きな部分をなすからには、また他方、同一の世界あるいは同一の環境にあるという感情が人々の間に新たな紐帯をつくり出すからには、家族の構成員が相互に愛し合っている度合に応じて、そして彼らの集団の連帯を強化することに関心を持つ度合に応じて、彼らが社会において分割し■えぬものとして、そして同一の判断によって格付けされ、家族の地位を共通の努力によって維持しようと志向することは当然のことである。

このことが日常の家族生活において表れるのはこの集団のある機能を通じてである。すなわち子供たちに適切な教育を授けることである。階級意識の媒体のようなものであり、いずれにしても階級意識の直接的な徴候である態度物腰、ことば遣い、ものの考え方と判断、習慣が個々人において誠に抜き難く純粋に保持される事実を説明するのは、まさにそれらが、家族の中で早い時期に身につけられたこと、そしてそれらが家族感情そのもの実質からその一部を引き出していること、である。家族のこの教育機能は時折きわめて高度

に発展せられ、教育機能が家族の本質となるほどであり、もはや個人感情に十分な余地を残さないほどになる。両親は子供たちが彼らから見えてところにいることを断念する。子供たちが社会的地位を維持しうるためにはそれが必要だからである。家族の内部では時折、少々冷たい礼儀と見掛け上の無関心の習慣が導入される。これはそのほうが上品に見えるという単純な理由によってである。階級感情は■まったくそれだけで（配偶者間であれ子供と両親の間であれ）家族の凝集力を維持できるほどに強い、あるいは（身分違いの結婚の場合に）時に家族構成員の一人を切り捨てるほどに強いような事例を強調することは無益なことである。別の場合には階級感情は逆に、家族感情のまさに延長線上にあり、家族感情を発展させそれを極端にまで強める。ある家族はその構成員の一人が落伍するのを阻止するために、またさらに、構成員の一人がより高い水準に上昇することができるように、必死の犠牲を自分たちに課すであろう。後者の場合（これは時折あることであるが）、高い水準に上昇した一人が残りの家族を引っ張り上げるに違いないと考えているかの如くである。自分の妻を贅沢に装わせるために過度の労働と厳しい耐乏生活に努める一人の男が従っているのはある階級感情であろうか、あるいは家族感情の一形態であろうか、そしてこれらのいずれでもないであろうか。彼らはある意味で妻に、家族の地位を外で代表する■ための配慮を託しているのであり、しかし同時に彼女に対して疑うべからざる虚栄の満足を提供しているのである。

大抵の場合、ある個人がその家族構成員とは異なる社会的位置に上昇するとき、あるいは上昇しようとするときには、彼の家族に対する愛着は大いに弱まることが確認される。多くの人々が、彼らが入っていく何らか■の新しい世界、家族、あるいは社会集団に適応しようとしている場合に、その生まれ、両親の点で邪魔されるように感じており、また、彼らが身内から受けた、彼らの現在の目的からすれば不完全で不十分な教育について、身内を怨みに思っている。このような場合と、家族の一員が事実上家族から離れることなく、見かけ上個人的な欲望あるいは情熱の満足の■ために生活の安楽および必需品まで犠牲になるように見える場合とを比較する必要がある。例えば、その収入の大きな部分をアルコールに使ってしまう主人や、高価なドレスや化粧品にうつつを抜かしている婦人である。大抵の場合こうした嗜好は、見かけ上でのみ、個人的なものである。大酒呑みが大酒呑みになるのは、酒場に足繁く通ったからである。彼は自分の身内の社会よりも仲間の社会を、家族の喜びよりも街頭の喜びを選択しているのであり、そうしたところでこそ彼は、あまり安定しておらず束の間のもではあるが、社会的でもある集団のなかにいる自分を見出すのである。婦人がおしゃれするのも同じく街頭のためである。彼女は遭遇する人ごみから知り合いの仲間から、是非ともある種の敬意を獲得したいと思っている。他方、家族全体がその安楽と連帯の点で苦しまなければならぬほどの行き過ぎに、他人の目に立派に映るという最初の関心によって、引きずり込まれる人がいるということ、1人の男が飲酒の習慣をもっているのは他の人々をあまりにしばしば「もてなし」たいと望んだがためであり、1人の■婦人が衣裳贅沢であるのは裕福な主婦であるかの様子をあまりに見せたいと思ったためである、といったこともあり得る。こうした逸脱の根源にあるのは、拙く解釈された階級感情と家族感情であり、そして、純粹に個人的な欲望あるいは悪徳について語りうるのは、階級感情も家族感情も消滅したときのみである。これら2つの感情はその腐敗のなかにあつてさえ、依然として緊密に結びついている。

かくして、家族が社会における自らの位置についての一定の観念をもつように、あるいは社会の方がこの家族についての一定の観念をもつようにと、その構成員たちが願望するということがありうることになる。これら 2 つの願望あるいは傾向がしばしば緊密に結びついているものとすれば、我々が欲求の原理について語る際にはそれらを区別することが重要である。実際これら 2 つの傾向、したがって我々の欲求の原理が対立するということがしばしば起こり得る。いずれにしてもそれらは常に相互に制限し合うものである。

\*

\*

\*

ある世帯がその食料費を調整し、その食物を選択するとき、その世帯は他人の評価にはほとんど気を使っていないように思われる。——確かに他人が招待されている食事というものがある。このような食事と日々の食事との間の懸隔は、労働者階級における場合、ブルジョア階級における場合と少なくとも同じくらい大きくなるに違いないと思われる。その理由は、労働者にとっては料理の質と豊富さが少しばかり鷹揚な暮し振りを誇示するための主要な手段であるからであり（別の階級の場合には食器類、家具調度、食事の供し方、アパートが部分的にそれを補う）、また世帯そのものがよい食事から引き出す個人個人の満足は労働者階級の場合、ブルジョア階級におけるよりも大きいからである。招待客がいるこのような食事の頻度と、それらが日常の食事に及ぼす影響を更に知る必要があるであろう。このような食事は多分食料への欲求を発展させるであろうが、しかし同時に、それが生ぜしめる高額の支出によって、食料への欲求を一層制限することを余儀なくもさせるであろう。要するにこうした招待客のいる食事はその世帯の食物習慣によってむしろ説明されるのであり、逆に招待客のいる食事は食物習慣の形成には貢献しないということである。——他方労働者世帯は、召使い用の裏階段と召使いその人という二重の障壁によって他人の好奇心から保護されるということが■まったくない。買い物をするのは主婦自身である。主婦は商店やまた家屋そのもので外の主婦たちに出会う。食料は一般に労働者の思惟のなかでは、他の人々のそれにおけるよりも大きな位置を占めているので、食料について一層よく語り合う。彼ら労働者がしばしばその隣人や友人が食するものに通じていること、彼ら隣人や友人の行き過ぎに憤慨すること、余りの節約を非難すること、彼らの貧困を気の毒に思うこと、隣人や友人の方もそのことを考慮に容れていること、こうしたことにはそれだけの理由があるのである。しかしながらこうした情報は大抵欠陥がある。こうした情報はそれらが交換される集団において、適切な食料の種類に関する一般的見解をはぐくむのにむしろ貢献する。慎しみのない人をはぐらかすことは容易であり、そしてしばしば、意地の悪い探索を逃れることも容易である。——家族が消費する食物について彼ら自身を下す判断の方がはるかに重要である。

労働者にとって、彼が午前中労働で過ごす時間と午後の時間（昼食のために家に帰るとき）との間、午後の時間と睡眠の間との間で、家族生活の最も本質的なものはまさしく妻および子供と一緒に取る食事であると思われる。主婦にとって、彼女が働いていようとあるいは家庭にいようと、食事の準備は家庭における本質的な営みである。子供たちにと

っては、彼らが学校にしようと、外で遊んでしようと、職業訓練に行つてしようと、食事の時間は両親と一緒にいる時間である。工場の仕事から帰った父親が正席を占めて座る家族の食卓と、主として彼の嗜好と選好とに従つて準備されたこうした食事は、集団の長としての彼の権威を周期的に象徴するものである。家族の祝祭、祭日、休日はすべて、より内容豊かな立派な食事によって特に区別される。家族の生活の詩が最も好まれ普及している国々は、物書きたちがつましい世帯の食べる料理を愛情をもって描き、主婦の料理の能力を祝福し、食卓の周りに集まっている子供たちの単純な喜びに感動することに躊躇することの最も少なかった国々でもある。

こうした叙情詩の背後に、家族のなかで取られる食事の労働者にとっての意味がすべて正当に評価されているのを見ることができよう。まずそれは明らかに、彼労働者が自らの力の回復の際に感じる自己本位的な満足である。しかし、労働者のなかで、そして彼がエネルギーを費やしている■時、労働者はすでに指摘したように、その視野から社会を喪失し、単独で事物に面し、孤独の意識をもち、とりわけ情け容赦のない自然のなかに挿入された物質的機械的一手段としての意識をもつ一方で、他方、食物の形で新たな力を見出す■時には、彼は一時的に工場や労働を忘れ、彼がその栄養を更新しなければならないのは工場に戻り労働を続けるためであることも忘れる。少なくとも彼はそうした状態に達しようとする。まさに、食物の消費と労働者の労働との間にはある一関係が存在するからこそ、もし労働者が自らを養うということのうちに、労働の■ために体力気力を回復する義務のみを見るのであれば、彼の食事は彼の生産活動に必要な一要素、一補足物のようなものになるであろうし、そして、社会生活のなかに浸透するのは、それと一つにはならないのに、工場生活のほうであろう。しかしこれは辛く苦しいことである。こうした関係を忘れるためには、密接につながっている二つの相を思考のなかで分離し、消費はそれ自体において目的であり、労働者が労働するのは自らを養うためであり、労働者が自らを養うのは労働のためではないと考えることが必要である。

それゆえ、食事はますます物質的な位相においてではなく社会的な位相において供せられなければならない。また、労働者にとってはそれは社会に戻るための本質的な契機であり手段でなければならない。たとえ労働者が一人で食事を摂るにしても、彼は社会に到達するであろう。なぜならすでに述べたように、「食料への欲求」の名の下に人が集まる傾向およびその傾向を満足させる対象は、大きな度合において社会の産物だからである。労働者が商人のところで食物を選ぶとき、料理が彼に供せられるとき彼はその食物なり料理なりをつくり準備するために協力したすべての活動、そしてそれらが前提している分業全体——アダム・スミスは彼ら労働者をこうした活動、分業に関連づけているのではあるが——を想起することは決してない。それについての彼の感情はむしろ曖昧なものである。彼は食事の順序、ある一定の食物を消費する習慣、それらに付けられる値段がその名にふさわしい社会的制度であることを知っている。彼が社会のしきたりに従いつつ物を食べる■時、彼は集合的な、そして彼の表象および目的においては、物質的かつ社会外的な生産労働の外部にある、広大な生活に参加しているという意識をもつ。

この感情は自分自身のことだけを考えるのではなくその身内にまで考えを及ぼす■時さらに強くなる。家族はその優越的意味において消費統一体である。消費するということは家族の本質的な社会的機能であり、家族の現実性を外に表わす唯一のものであるとさえ言

うことができる。なぜなら、家族が働くのは、たとえ家族全員が工場に行っているとしても（我々の経済システムにおいては）、家族として、ではないからである。したがって労働者は家族の長としてある■時が社会の構成員としての意識を最もよくもつことができるのである。子供に食物を確保すべく母親を動かすところの（最も顕著な）動物的本能に彼は従っているのではなく、（彼がその一員である）家族に対して、社会における位置と地位を確保し維持しようとする社会的欲求に従っているのである。すでに見たように、構成員全体に共通の階級感情をもたない家族は存在しない。ある一定の消費水準、多様な質の食物が一定の割合で並んでおり、可能なかぎり規則的でもありまた変化にも富んでいる食事習慣、これは家族集団においてその社会的位置についての感情を維持するのに最も役立つものである。彼の位置が機械的なものを基準にして決められている工場を離れるとき、労働者は、集合的規則によって決められるもう一つ別の位置、すなわち彼の地位を社会のなかで再発見したいという欲求をもつ。そして、社会の幸福に彼と同じようにそれを熱望している者たちと同じ程度に、また同じ形式で参加できる場合には、彼は自分の地位を失いはしなかったという気持ちをもつ。しかし同時に彼は、彼自身とともにその身内のもの全員をその地位に上昇させること、すなわち彼らに自分たちはその地位に上昇している、あるいはそこにとどまっているという感情を与えることを義務づけられていると感ずる。——労働者たちが食を摂るときに彼らが鼓舞される原理はまさしく以上のようなものである。

\*

\*

\*

大都市の労働者が住んでいる住居の大多数が労働者の欲求を満足させるために建築された、あるいは改装されたと真面目に主張することは不可能である。一定数の労働者は、古く破損荒廃した家屋、「転用された」古いホテルやブルジョアの家屋——今日ほど人々が空気や日光に執着しなかった時代に建てられたもの——に住まっている。昔はいくつかの家族が間隔をおいて住んでいた古い部屋部屋が間仕切り壁で再区分されている。別の労働者たちは、もっと近代になってからの家屋における付属物のような屋根裏部屋、高い階の部屋、あるいは中庭の上の部屋に住み、また比較的裕福な世帯に貸される道に対して正面向きのアパートに住んでいる。明らかにこうした状況は、大部分の大都市がぐくぐり抜けつつある過渡的局面に対応しており、こうした大都市においては人口が増加しつつあり、家主たちはすでにあるものを十二分に利用するために■きわめてゆっくりとしか不動産物件を建築しないことに利益を見出している。我々は別のところで<sup>(1)</sup>、建築業者の努力はパリでは何故に富裕な地区にむしろ向けられるのか、そしていかなる因習がパリにおける労働者居住地区の形成を支配してきたのかについて説明した。しかし他の多くの大都市においても事情は同じであった。労働者用の住居を系統的に建築しようとしたところ（我々が言っているのは住宅会社による安値の産物のことではない。それらは■確かに無視してよいものである）では、労働者が執着するのは何よりもまず家賃の低さであって、快適さ、清潔さ、衛生、優雅さには余り気を使わないと考えられた。そして多分正面がより堂々とした新しい住居にも、労働者が古い地区に見出すことのできる部屋とは大いに異なる部屋は、

ほとんど含まれていないのである。

(1) Les Expropriations et les prix de terrains à Paris, 1860-1900, 1909. p.338 sqq.

我々は■右の著作において、より良好な住居条件についての経験をもたず、そしてそのような経験をもっていたらほかに快適な住居のためならばやや高い家賃を払うことに多分同意したであろう労働者に、この点について教育することが可能でなかったかどうか、という問いを立てている。しかし少なくともヨーロッパにおいては、十分に広い規模でこれを試みたものはいない。そして労働者の受動性のいくつかの理由は確かに理解することができる。その理由はまず、家賃が極めて高いこと、広範かつ高密度の労働者階級の形成が家賃の上昇運動をますます促進したこと、そして労働者たちは■たしかに、支出の僅かな余剰と引き換えた何日かの間良質のものを食べるという贅沢が可能なること、他方よいところに住むためにはより重く持続的な犠牲が必要であり、そのような犠牲の前には人は一般に後へ退くものであること、である。次に、「食卓」の単調さ、ありきたりの同じ食物があまりに繰り返し登場すること、こうしたことは辛いことである一方、狭く貧しく汚くさえある同じ所に長い間生活することによって遂には人はそれに慣れ、不便を感じなくなり、それに執着するようにならざるという点である。心理学者は食事習慣を居住習慣から区別して次のように言うであろう。すなわち、食事習慣においては適応は受動的であり、居住習慣においては能動的である。実際、住居の形状、大きさ、家具装備と折れ合うための一連の反応作用が存在する。これらを修正することはとにかく骨の折れることである。

最後に、もしある都市において労働者が工場にいない時間帯に一方の通りが金持ち連で賑わう傾向があり、他方の通りが貧乏人で賑わう傾向があるとしても、その通りは、非労働者が家に戻る、あるいは家にとどまっている限りは、労働者のものではないことは依然として議論の余地がない。階級が空間的に相互に分離する傾向があるのと同様に、それぞれの階級が同じ場所にいるのは同じ時間でもないし同じ曜日でもない。とにかく労働者が街頭にいる■時、彼らは他の階級の人たちよりも喜んで気持ちよくそこにいるように思われる。多分彼らはそこで家にいるときよりも、取り戻された自由と社会生活の感情をより豊かに経験するのであろう。なぜなら彼らの住居は狭く仕事場のように閉め切られているからであり、非常に厳しく長い間抑圧されてきた社交性が膨らむからであり、そして、家族の外で彼らが再び身を浸すことを好むところは、同じ階級の、さらにはあらゆる階級の人々の流動的な集団だからである。非労働者は街頭である程度控え目を装うのであるが、これは彼らがその社会的本能を満足させる多くの機会をもっているからである。これに対して工場が終わった後の労働者地区における通りの活気は逆の理由によって説明される。社会生活と他の生活とを分かち障壁は、住宅の門であるよりもむしろ工場の門である。それゆえ、通りと住居との間の行き来コミュニケーションがより頻繁になること、外部の猥雑と騒音が内部に浸透すること、そして内部から裏階段、中庭、そしてとりわけ人のいっぱいいる通りからの騒ぎや雑踏に耳を傾けることに興味をもちすぎることに、こうしたことは避けられないことである。さらには多分、住居の管理が悪く貧寒としており、そこへ帰るまでに労働者が外でぐずぐずしているということ部分的にはあるであろう。労働者が並以下の部屋で我慢することの容易さ、そして部屋内部における快適さに関する要求の弱さはすべてこうしたこ



とによって説明されるであろう。

しかしながらすでに見たように、収入と住居費の間にはある関連が存在する。多く稼げば稼ぐほど労働者は、少なくとも同じ比率で家賃を増大させる。そして、労働者のある部分全体が、住居費がいつも余りに削られすぎていたと自覚するようになったと少なくとも見え、住居費の比率そのものも増大するようになる時点が到来する。このような態度の原理はいかなるものであろうか。それは■確かに社会的なものではある。しかし、このような出費について同意が求められるのは家族に対してであるか、あるいはより広い社会集団に対してであるのか。

住居は十分に多様な欲求に対応しており、その多様な欲求がその社会的形態において上記の2つの原理のうちの一つに関連づけられるのに応じて、それらを区別することは興味あることでありうる。人は戸外でも、あるいは共同寝室でも、あるいは1つの寝台以外に1部屋占めて、いずれでも眠ることが可能ではあるが、眠るという身体的欲求が社会の影響の下に、1つの寝台の上で、そして家族用の1つの部屋のなかで満足される傾向にあることを認めることができよう。我々は空気の容量の問題は、労働者もほとんどこれを気にしないのであるが、医学的問題として、除外しよう。しかし部屋ごとの人員数、および1人当りの寝台数はある世帯の生活水準に関する2つの指標である。これらの概念はその社会的内容についてまず検討されなければならない。余りに多くの人間が一部屋に押し込められていて、子供の一人一人に寝台が当らず、両親と子供、男子と女子を分けるだけの部屋がなく、部屋が小さくて両親の一方が間仕切りのようなものを置くにも置けないような場合、集団のなかに、低い社会的水準、従って家族の凝集度の低下に対応する雑居の習慣が成長する。住居が社会的避難所となるのではなく、動物的生存の場、人間が社会の外部のものとなる工場の付属物のようなものとなる。家族がその名に値するのは、その構成員が、家族のなかに、彼らの生理学的衝動を社会的欲求へと変換するための手段、すなわち彼らの諸傾向を集合的形式において満足させるための手段を見出しうる程度に応じたのみである。眠ること自体の欲求は肉体的なものにすぎないが、清潔、隔離、そして快適という一定の条件において（床に就き起床する）という睡眠の欲求は社会的である。家族のなかで身体的欲求に代えてますます社会的欲求を代置すること、これは家族とそれが結びつきたいと要求する社会集団との間のコミュニケーションと関係とを増殖させることであり、その都度到達しうる最高の層のなかに家族集団を参入させることである。

この意味において複数の人間が同じ1つの寝台を共有しないこと、同じ部屋に押し込まれないことは一つの進歩ではある。しかしここにより一般的な一つの原理がある。これは、家族の各構成員に独立の場所を確保するというこの社会的傾向と同時にさらに別の傾向をも説明するものである。その原理とは次のようなものである。社会は各種の欲求を個別的に、そして、一つの欲求が分解されたものであるいくつかの性向のそれぞれを個別的に、満足させる傾向がある。社会は一方では、塊のようになって解きほぐされていない形で表れる諸欲求を、それらのなかに含まれている要素的諸性向を満足させる場所と対象とに分けることによって、分割する。社会は他方では、最初は様々の使用法に対応していた一つの対象あるいは場所に代えて、それぞれはもはや固有の一目的しかもたない複数の対象と場所とを代置する。

1つの住居は、それが広大であればあるほど、それが多数の部屋をもてばもつほど、そし

てこの多数の部屋を最も適切に利用すればするほど、このような社会的要求により対応する。家族全員が詰めこまれているただ1つの部屋のなかで、炊事をし食事をし眠り、そして隣人を迎え入れる。食べ物の残骸が残っている食卓、可動式の炉、寝台とわら布団、背も肘もない腰掛と椅子、洗濯だらい、(複数あればのことだが)いくつかのたらいや水がめ、下着と衣服の箱、すべてが無秩序に隣り合っており、多分慣れによって勝手に分かるのであろうが、そこに認められるのはとりわけ、社会的心遣いの欠如と、社会というものについての観念総体の欠如である。このような条件において■きわめて明瞭なことは、家族がその欲望を満足させるに先立って、考えるための時間も嗜好も手段ももたないということであり、それはあたかも、複数の敵とあいまみえなければならぬのにそれを予見も出来ず、合戦の時間を分けることもできず、手順もなしに一度にすべての敵に対して戦いを仕掛ける軍隊の如きものである。逆に、労働者の■一住居につき台所、食事をし、(必要な場合には客を受ける) 部屋、睡眠をとるための1つないしは複数の部屋、物置き部屋1つがあること、これが物質的生活を組織するために集積的省察に委ねられていた空間についての尺度となるものであり、欲求を区別し予めそれぞれを制限することによって到達された予見の水準についての尺度となるものである。他方、無秩序と不用意は感染性の強いものである。それは、ある方向において獲得された優勢が他方における遅れに巻き込まれないことが重要であるという事情、さらにまた一般的に落胆していることによって、これらの欲求を相互に切り離し、それぞれを独立した一目的とみなすことが重要であるという事情によって、ある世帯がそのすべての欲求に社会的形態を付与するに際してその努力は同じではないし、その程度も同じではないであろうからである。ある人々は台所が清潔であることに執着するであろうし、別の人々の関心は食事をする部屋、夜集まって一緒にいる部屋に集中するであろうし、さらにある人々は特に寝室の家具調度を立派にすることに熱心であろう。そして、あらゆるところで秩序と一定の贅沢をして支配せしめることができなかつたならば無視したであろう物を、最も立派にしつらえられた部分と調和させることが少しずつ出来るようになるであろう。このことは各部分が機能において十分に他と区別される場合にのみ可能であろう。

最後に、欲求の満足を少し遅らせることによって、あるいは、欲求のそれぞれに従う時点時点の間に間隔——この間に人は別の欲求に段階的にその思惟を向けるべく先行の欲求を忘れる——を按配することによって、人はその生理的衝動を弱め、それに関連する、あるいはそれに代る社会表象に展開の余地を与えるということがある。食事をする部屋、あるいは寝るための部屋から離れることがこの場合とりわけ重要である。その場合には人は夕食から就寝までの宵の時間を延ばすであろうし、眠ることを考えるのが少なくなるであろうし、そして空腹が癒えたらすぐさま別の欲求によってつき動かされるということもないであろう。しかし、台所から離れること、食事の部屋から離れることは多分食事の供し方をゆっくりとしたものにするによって、料理をより十分に準備した上で出すことを可能ならしめるであろうし、そして他方では食事の部屋で食べている時間そのものもより明確に限定されたものとなるであろう。睡眠の■ための部屋が複数存在すること、これは家族の全員が同じ時間に寝たり起きたりしなくともよいようにし、読書するための、熟考するための、衣類を整理するための、身■づくろいするための時間をより十分に確保することを可能にし、同時に(先の指摘によって)最も微妙な部分、最も配慮を要する問題に

ついでに集中が、怠け心や他の人間の粗暴な振舞いによって攪乱されることがないようになる。食事をする部屋と、一緒にいて読書をしたり客を迎え入れたりする部屋との分離は、(食事は全体として余り時間を取らないので) はるかに緊急性は低い、しかし、最も裕福な世帯において発展する可能性のある、見栄と贅沢の欲求に対応しているであろう。このような欲求が存在するとき、人が、非常に整然としていて何らかの物質的欲求の満足を少しも喚起しないような部屋を常時もっているために、台所で食事する方を好むことは理解されうることである。部屋の内装に関しても同種の観察がなされうるであろう。人が社会の習慣と選好から最もよく刺激を受けるのは、各人物、各欲求に固有の場所を割り当てることによるのである。

社会は、様々な用途に対応する一対象の代りに、それぞれが固有の一目的のみをもつ様々な対象をもつように我々を促すものと我々は述べた。このことは家具類にも当てはまる。すでに部屋の配分から次のことが結果する。すなわち、家具、化粧品、器具、装飾品、などはそれらが置かれている部屋と結び付いており、部屋の機能を定義しその様相を変容させることに貢献する。もし食べるための、眠るための、料理するためのそれぞれ別の部屋が存在するならば、人はそれぞれのところに、様々な形状、用途、などをもつ椅子、テーブル、キャビネットを置こうとするであろう。中心の部屋には、テーブルに向かって座る椅子と並んで、1つまたは複数の肘掛け椅子、さらにはソファが置かれることがあるであろう。そして、下着類、衣服、食器類、本が1つの戸棚に入れられることはないであろう。いまや、一つの欲求のみに対応する一家具は非常に多彩な形態を取りうることで、そうした家具は有用性は失なわないにしても、複数の目的に役立つ一つの対象よりもはるかに多く無用なものをつけていることがありうることを認めることができる。稀にしか座らない椅子あるいは肘掛け椅子、一日中開くことがなく、重く粗大な、あるいはありふれたものは容れないキャビネット、これらは繊細な細工のものであることがあり、そして同時に、目を楽しませ嗜好を満足させるという実際的目的にも役立つ。家具がこの方向に進化する度合に応じて、その様々な要素が我々の欲求によりよく適合するようになるばかりでなく、全体として、そして多数の部分からなる全体的様相を通して、そうした家具は、発達するのが遅く稀な一欲求、しかし他のあらゆるものよりも社会性の強い欲求、すなわち贅沢の欲求に対応している。さらにより高い社会的水準に到達しようとする、そしてこの方面が前面に出て来る傾向、さらにある種の対象はこれ以外のいかなる役割ももたなくなる、その数も重要性も増大するであろうこと、こうしたことが起きるのである。花瓶、石膏の小像、壁に取り付けられた色々な装飾物、姿見、カーペット、等。

他方でしかし、家族を満足させ、家族に対してその社会的地位の高さについての観念を付与することを目的とするものと、一般に他人およびその評価を目的として選ばれそこに置かれるものとを区別することはこの場合かなり微妙なことである。我々は労働者がその収入のどのくらいを住居および家具に当てうるのかについて知っている。我々は彼らの様々な欲求を分析し、我々が住居への欲求と呼んだところのものが彼らのなかで微弱にしか成長しないことを認識した。大抵彼らはその居住場所の整備において余り他人の目を気にしない。それは他人自身が内装の贅沢さや快適さを評価する能力があまりないからであり、また、労働者にとってそれが本質的な「幸福」でもないからであり、他方では彼らは余りに人に訪問をされることもないからである。(あるいはもし頻繁な訪問者があるとすればそれ

は住居があまりに開け放しのせいであり、そして相対的に他人から切り離された家族生活への欲求が比較的弱いからである)。要するに、家族の直接の構成員以外では、その判断が世帯にとって大いに気になるという人々とはどういう人々であろうか。一方では離れて住んでいる両親であり、親しい友人であり、隣人である。こういった人々にはドアは多少とも規則的に開かれるであろう。他方では、あまり親しくはない友人、仕事の仲間、街の知り合いといった人々であり、彼らはお互いが街のどこに住んでいるかを知っているであろうし、家の前を通るであろうが、中へは稀にしか入って来ないであろう。この後者の人々を気にする度合に応じて（これは弱いのであるが）、街区のあり様、通り、階、住居への通路、裏階段が重要になるであろう。そして、他人に対してよい印象を与えるために人が気にするのはこうしたものでもあるが、特に住居内部の様子である。

しかし、こうした感情（どの街の、どの通りの、どの建物の、住み心地のよい何階に住んでいる、十分な部屋数がある、快適で贅沢な家具がある、といった）は、長い間毎日、すなわち家具のなかで育まれた場合にのみ、強固なものとなる。家族の構成員たちがその社会的地位の高さを他人に確認させることに楽しみをもち、その内装を他人に与えるに違いない印象を目的としてしつらえるようになるためには、まず彼らがその居住条件によって高い社会的水準に到達する満足感を彼ら自身が経験していることが必要である。このような印象を自分自身で折にふれ経験したということがないのにそれを気にするということが、実際よりもよいところに住んでいるように見せたいと思うこと、これは理解し■がたいことである。何故ならこれは、すでに立派な家具がしつらえられ、快適な住居以外のところでは成長し得ない、住居の重要性についてのある感覚を前提しているからである。——こうした諸々の理由によって、ある世帯がある程度までこの欲求を満足させているときにその世帯が従う原理は、まず、そして特に、家族の（精神的）利害であり、ある高い社会的水準との関連において家族の■ために生活条件を確保しようとする関心であり、居住様式によって家族が到達する感情を、家族のなかで育もうとする関心である。家族について、そして労働者について、その隣人、友人、彼が関係する社会的諸集団の構成員がもつ意見についての心配は付随的なものにすぎず、そしてはるかに小さなものである。

\*

\*

\*

社会意識という点で、衣服の重要性は強調しすぎるということはない。さらに、通常衣服について区別される二つの欲求、悪天候から身を守るという欲求と、鮮やかな色彩の生地や際立った形の衣裳によって目を楽しませる欲求から出発して進化と連合という道によって次の点を説明することは■確かに不可能である。つまり、立派な身じまいとか、端正とか、優雅とか豪華とかの観念に人々はいかにして到達したのかという点である。かなりしばしば次の二つの動機、すなわちいわゆる原始的動機と社会的動機との間には対立が存在する。冬の最も保存性のよい衣服と夏の最も薄い衣服は必ずしも最高に優雅なものではない。最も派手な化粧は最も端正ではないし、最良の趣味でもない。実際、衣服の社会的評価は個々人の本能や性向から出て来るものではない、ある独自の判断である（性的起源

を有する、目を楽しませるという欲求はもともと社会的なものではない)。この独自の判断は集合的意識のなかでのみ明確に表明されることができる。この社会的感情は、いったん芽■ばえると、我々がいま述べた個々人の欲求にその刻印を押し、その特徴を伝える傾向がある。

住居について適用されうるとしたのと同じ原理がこの場合にも作用する。社会的生活の影響によって各欲求が特定の対象によって満足せられる傾向をもつようになる。労働者の生活のなかで四つの局面を区別することができる。この四つの局面のなかで衣服は性質を変える。労働、家庭での生活、平日における通りを通過しての往き来、日曜、祭日およびその他の見■ばえすることが必要な■時あるいは期間、である。大多数の労働者は、一つの局面から別の局面に移行するごとに（下着は言うに及ばず）別の服に着替えるということはない。いずれにしても服装の本質的な変化は、平日から日曜あるいは祭日にかけて行なわれる。「日曜の衣裳」をもたないためにはひどく貧乏でなければならない。（もっとも、普段着を日曜のために手を入れて改善せずにいるためにはもっと貧乏でなければならないが）。次には、工場から通りへの移行に対応する衣服の変更が来るであろう。この変更は、仕事場あるいは労働の際に着ている衣服が余りに汚く、あるいは余りに窮屈、あるいは余りに特別である場合には特に、さらに半裸で作業する場合には特に頻繁である。異様な風体の場合、少なくともいくつかの細部が■まったく手直しされていないことは稀である（上っ張りをベストに替え、ネクタイを再びつける）。しかし、変化が街頭での労働者ほど徹底的なものは稀であり、非労働者と間違われることもありうるほどである。それゆえ街頭での労働者は一種の中間的服装をしている。この中間的服装は、彼らの収入と、衣服に対して彼らが付与する重要性とに従って、作業服からは多少とも隔っているが、日曜日の衣裳とも区別されるものである。通りはまだ工場の子供が■まったく溶け込み浸透している一社会環境であり、社会的生活の表象においては、機械、物質的労働、労働者からさらに生産物までのイメージがそこに混じり合っているように思われる。二輪の荷車がここでは、原料、半製品、あるいは完成品を運んでいる。通りには、自分の道具をもった錠前工とか石工とかガラス張り職人とかの労働者が歩いており、あるいは、坑夫や石切り場の労働者や土方などのようにまだ作業服を脱ぐことができず、体についたあらゆるほこり、ごみを取ることでできない労働者たちが歩いている。通りで、あるいは通りの見えるところで営まれる職業が存在する。小売店へは彼らは、仕事が終わった■時と同じく労働時間の合い間にもよく行くだろう。かくして、もはや工場でもなく、しかし（少なくとも平日はまだひたすら社会といえるには至らない一環境が形成される。そしてここから次のような状況が現出して来る。すなわち少しばかり作業服を整えブラシをかけただけの労働者と、短い上着や作業用の上っ張りの代りに色のあせた上着やジャケット、日曜日用の古くなった服、中古で買った、あるいは貰った古い服を着た別の労働者とが屈辱感も遠慮もなく通りを並んで歩いているという状況である。それが明瞭な分離となることは決してない。なぜなら、新しい、あるいはしばしば取りかえられる作業着はぼろになった、あるいは汚い「ブルジョアの」服よりも端正であり、より尊敬されるからである。それゆえ身成りが分類されるのは決して上記のことによるのではない。——家庭着については、通りで着ている服が十分に質素なものである■時には、■まったくもっていないに違いない。

欲求に対する衣服の、このような第一種の適応のほか、別の適応をつけ加える必要が

ある。人は季節によって異なる衣服を身に着ける。(しかし) すべてはむしろあたかも季節の変化に際して社会がその成員に対して衣服の変更を強制しているかのように経過するというのは本当のことである。そして実際のところ、他の手段によって人は寒さから身を護り暑さに耐えるということもありうると思像することができる。ある労働者たちは冬には、十分厚手の外套がないので、上っ張りの下に巻き布と仕事着を着ており、夏には肌着を着けず少し「胸をはだけて」歩いているであろう。またある労働者たちは仕立ての服の上にショールをかけ、毛皮を身に着けるであろう。他方では、社会の構成員はその職業、住居、食べ物、そしてとりわけ体質の多様性によって、寒さや暑さによる苦しみは異なるけれども、彼らはすべて同じやり方で衣服を身に着けている。かくして、季節から季節にかけて服の種類、形、色彩を完全に変える習慣は、それが異なる季節に対応する衣服への欲求を満足させるための、多分より実用的な他の多くの手段のなかから社会によって選択された、そしてすべての人々に対して、その多様性にも関わらず社会によって課せられた一手段であるという意味において、社会的なものである。ところで社会の最上流層においては、外観においても、そして多分一部は実用的理由によって、しかし特に社会的動機によって、さらに一層多様な衣服が作り出され、スポーツ用、狩猟用、海水浴用、遠足用、等の衣服が着られている一方、労働者階級においては、一年中同じ服(ただ細部のみが手直しされている)を着たり、質のよくない既製服で満足したりする。

要するにこうした二系列の適応を通じて我々が見ているのは、社会生活は人々をして、このようなすべての欲求のそれぞれを固有の適合的な対象によって満足させるために、衣服の数と種類とを増殖せしめる、という現象にほかならない。この領域における贅沢さが測られるのはこのこと、衣服の多さと多様性によってである。しかし、多くの衣服をもち、ある環境から別の環境へ、一つの仕事から別の仕事へ、ある季節から別の季節へ移るごとに服を変えるだけでは十分ではない。古着屋で汚く傷んだ服を沢山買う人物の衣裳部屋、時代ものの、非常に風変わりなモードの服を長い間保存する極めてまめな世帯の衣裳部屋は決して贅沢ではないであろう。

人がよいものを身に着けていると見えるためにはまず第一に衣服が新しくなければならず(ともかくあまり着古されてはならない)、肌着類が適切なものでなければならぬ。この社会的欲求は、害虫から護られているという身体的欲求、よい状態のしっかりした繊維によって覆われているという実際の欲求とは、非常に遠くからしか関係しない。労働を思い出させる衣服を、それを思い出させないものと取りかえること、汗が沁みておらずほこりのついていない肌着をつけること、これはより完全に工場のことを忘れることであり、社会の生活に参加することであるという点は了解され得ることであろう。社会の生活においては、上流階級の人々は有閑であることを思わせるようなものを身に着ける傾向があるのである。工場の労働者と社交界の人との間でこの点における相違は深刻である。工場労働者は物質素材と格闘している人間有機体である。彼は、素材との接触において、体を汚し、消耗し、体を傷つける。彼は素材と自身との間にあらゆる侵害打撃に耐えられるような布を挿入する。同時に、彼自身が作用力、運動の素材となる場合には、彼の分泌物はよりおびただしいものとなり、彼の挙措動作はより数多く激しいものとなる。社交界の人間は外部からの汚れや衝撃にさらされることが遙かに少なく、体を使わなければならない

■時にはそれにふさわしい肌着や服を身に着ける。着古された服は我々を不快にし、汚い

肌着は我々に嫌悪感を与える。それらは作業中の労働者の通常の特徴だからである。

次に、衣服は流行しているものでなければならず、優雅で端正なものでなければならない。すでに述べたように服装によって気に入られたいという欲求は性的な根をもっている。しかしこの場合にも、身体的欲求の領域一般におけると同じように、社会的意識が作用し、性的本能を修正し変形し再構成し、その表現およびその内容のほとんどすべてが社会的なものとなるに至っている。さらに、下層の（辛うじて社会的と言いうる）いくつかの社会階層においては、性的欲求は強烈な色彩、粗野でピカピカする装身具、入墨などによって刺激され、さらにまた社会のなかでも、弱められているとは■いえこの種のやり方によって性的欲求が刺激されるということも起こり得る。この程度において性的欲求はもはや肉体的なものでしかない。そしてそれに屈服する者たちは（一時的に）社会から離脱することになる。逆に彼らは、性的欲求を満足させても、彼らを惹きつける服装、装身具、身体の手入れ、香水、等がその物理的特徴の他に、社会的意味を有する度合に応じて、そこに洗練（努力、確保された優雅さ）が認められる度合に応じて、社会のなかにとどまる。自らの階級に著しく統合されており、例外的な体質に支配されることが少しもない男子や女子の場合には、このような（洗練への）欲求は、その対象が彼ら自身の社会集団あるいはそれより優位にある社会集団のなかで用いられている装身具や外的態度（言葉遣いや立居振舞）と共に衣服のなかに現れる■時以外には、ほとんど目覚めることはなく、そしていずれにしても維持され長続きすることはない。多分これ（洗練）は、上流階級にとっては身分違いの結婚を防ぐための（いろいろの手段のうちの）一つなのであろう。しかしこれは同時に、また主として、教養、社交性における優越性の承認でもあるであろう。こうした優越性の承認は生理的衝動と同時に起こり、生理的衝動の性質を深いところで変化させる。かくして男子の労働者あるいは婦人労働者が目を楽しませることを目的として衣裳を着ける際に、あらゆる種類の趣味の誤謬をおかしてでも、そして実際には彼らを引き立たせている服装のうちのいくつかの部分捨てても、かれらが発想するのは大抵上流階級における流行や服装からなのである（例えばよく似合う頭巾風の帽子やコワフの代りに趣味のよくない山高の帽子シャッポをかぶる農民等）。

こうした欲求と、もはや他の人間に性的願望を目覚めさせるためではなく、ほかの人間の関心と敬意を獲得するために贅沢な服や装飾品を身につける際に感ぜられる欲求とを（これらは隣接しているのではあるが）区別しよう。彼らにその地位、社会的位置についてのある高度の観念を付与することが重要である。そうした高度の観念は彼らが衣服のために多くを支出することと優雅の感情を獲得することとを同時に可能ならしめるであろう。先の欲求は労働者全体に共通の、彼らの服装の独自性である一特徴を説明する。この独自性は彼らが上流の階級を模倣する傾向があること、しかもまずは、部分的にしか模倣することができないという事情に由来する。ある者たちはジャケットと一緒に厚手のズボンをはき、取り外しのきくカラーはつけない。別の者たちはけばけばしい模様のネクタイをこれ見よがしにつけ、風変わりなチョッキをつけ、すり切れ貧相な服、つぎの当った靴を■はいている。民農の生活を描いた多くの小説家たちはこのような不調和ちくはぐから喜劇的効果を引き出してきた。実際労働者は余りに長い間労働に縛りつけられており、こと服装に関して自らの趣味を教育し上流階級が身につけているものを学ぶことができるのは、民衆の往き来する通りにおいてではない。彼は既製服店で、裕福な地区の流行をあまり質

のよくない素材で粗雑に模造した服、帽子、ネクタイ、肌着類を見る。しかし全体が同一のトーンで調和するように、これら様々の品をどのように組み合わせるのか。我々がすでに見たように、上流階級の服、そして服ばかりでなく服装のあらゆる細部、また服装の着け方は、彼らが多額の金銭を費やしたことばかりでなく、彼らがそれに多大の時間を割いたこと、それらを選択し、試し、家のなか、鏡の前、さらには訪問で「下調べ」をし、各所（劇場、レストラン、温泉町、等）——そうしたところで模範となるいくつかの集団を観察することができる——を頻繁に訪れるために費やした全時間、を外部に向かって示しているものに違いない。多分、流行とそれの頻繁な変化はとりわけこのことによって説明されるであろう。流れに遅れずにいることはより困難であり、それはより注意深い研究を必要とし、そしてこの点が有閑階級（あるいはそう見られたい階級）を労働者から区別する上で最も有効なのである。

以上から言えることは、衣服への欲求の原理とは、他者の習慣に適合しようとする考えであり、同時に服装を通じて他者に対して自らの社会的地位についての正当な観念を付与しようとするところにある、ということである。しかもこの場合、先の二つの欲求の場合ほどには、家族への顧慮が介在しない点も、衣服への欲求の原理の特徴である。■確かに両親にとって子供たちがぼろを着て歩いてはいないことを知ることは一つの満足であるに違いない。キャビネットに、きちんとして、よく手入れされた衣服、十分に着替えすることのできる量の肌着を持っていること、これは秩序であり、主婦の本質的な美德を実践することである。人間はすべて、自分が立派な服装をしていると自覚している■時には自身についてのある高い観念をもつものであり、その家族構成員の衣服についての表象は、家族がそれ自身について、またその社会的地位についてもつ意識の一構成部分である。しかしこの感情は家族の構成員たちが外から持って帰って来るものである。もし彼らが通りで見られなくとも済むのであれば、もし彼らが工場から家庭へ、またその逆を慌しく通うのであれば、彼らは衣服のための支出をはるかに少なくするであろう。一家族の構成員たちが相互にその着ているものによって評価し合うということがないことは極めて確実なことであり、同じく、彼らが外ですれ違う社会の構成員たちが彼らについて下す直接の判断の根拠が本質的に着ているものによることも極めて確実なことである。（アルコール中毒以外の理由によって）食料費が、あるいは住居費が常規を逸する場合、家計の均衡は危機にさらされる。それによっていくつかの欲求は満足せられないようになるであろう。しかしそれでも家族は全体としてはそのことによって得るところがあるであろう。衣服のための支出が常規を逸する場合、それは家族集団の凝集と幸福に対して一定の害をもたらすであろう。従って、食料費の場合部分的に、住居費の場合はほとんどもっぱら、家族感情（そして家族に関係する限りでの階級感情）の発展度合の尺度となるのに対して、家族とは別の社会集団による判断と評価に対して与えられる重要性は、とりわけ衣服のための総支出の割合のなかに表れるものである。

\*

\*

\*

要約すれば、労働者階級の場合四つの本質的な欲求カテゴリーを区別するのが便利であ



り、この分割が自然なのはそれが社会意識の産物だからである。社会はまず第一に、我々がいろいろな支出を行なう条件を予測するように、そして、各自が行なう予測に従って正確に支出を分類するように、我々を促し、やがて義務づける。ところでこの場合前面に出て来るのは、これらの支出に特有のリズムであり、購買の重要度と購買の間隔である（これは我々が欲求の形態と呼んだところのものである）。この観点からすれば、かなり規則的な支出の三つのリズムが認められる。食料の購入は衣服の購入よりも頻繁であり、金額が小さく、さらに衣服の購入は家賃の支払期日の規則よりは、よりありふれた、極端でない支出を結果する。「その他の支出」に関しては、その規則性の低い（とにかく複雑な）リズムによって、それらを別に分類するのが妥当と考えた。「その他の支出」のこの性質は、見かけ上は■まったく外面的なのであるが、それがすでにして労働者階級において消費対象とその価格との間の関係についての異なる判断をもたらしていることを我々に証明している。食物の価格が自然なもののように見え、その実質そのものに結びついているように見える一方で、私服とその価格の間では、関係ははるかに結び■つきは弱くはるかに恣意的なものと考えられる。住居の価格に関しては、その正確度を測るための基準が労働者には■まったく欠如しており、彼らは家賃のなかに不当で堪え難い一種の税金を見る習慣を速やかに身につけてしまう。

次に我々は、社会は個人のために、そして彼らの代りに、我々の欲求対象の種類と量を予め予測準備することを指摘した。社会のこの作用は最初消極的である。解体、制限、そしてとりわけ代替の■ゆるやかな、そして系統的な作用を通じて社会は我々の欲求から最初の有機的内容全体を徐々に抜き取り、社会のなかに統合される度合が低ければ低いほど個人のなかで自発的に確立される傾向のある、様々の生理的満足の価値階程を破壊する。より教養のある集団に移行するにつれて、こうした集団において経験され評価される性向と満足のなかに含まれる「自然な」欲望と喜びの割合は減少する。しかしこの作用は同じ程度に積極的でもある。社会生活は人間有機体の生活を、それに新しい無限の展望を開くことによって豊かにし、それを複雑化し、洗練する。欲求が社会のなかで形成され、明確化され、進展するということから結果するのは、人がより高い社会層に上昇する度合に応じて、欲求が多少とも一貫した、そしてますますぴったりと脈略化された体系のなかで、次第に相互に結合するということである。ところで、このような欲求がある生活水準に対応するという、欲求が生活水準を表わすということ、このことは欲求が相互に結合していることによって強度を増し、各欲求が、他の諸欲求の有する力全体から力を獲得するという事情を説明するものである。しかし、あらゆる種類のすべての欲求がかくして一挙に個人個人の性向の無政府的多様性と結びつくわけではない。社会は直ちに次のような性質を有する独自の一欲求を代置するわけではない。すなわちこの独自の一欲求の性質とは、それがあつた生活水準の全体に関係するものであり、別の一連の欲求——別の生活水準に対応し、その各々は一集団全体を通じてその統一性において、強力で明確なものである——を変えるにしてもそれはただ程度においてのみといったものである。このような統一は（もしそれが可能であるならば）まず、基本的欲求はその種類に従ってすでにくつかりのまとまりに分けられていることを意味する。我々は、様々の種類の財、対象は区別されういくつかりのまとまりを形成すること、なぜなら社会のなかで我々は、相関しているいくつかりの満足や性向を結合し全体、まとまりとして考える習慣をもっているからであること、を

確認できる。しかし何故に人はこのような分類集団あるいはまとまりをつくり出すのか、何故にそれらを区別するのか、そしてそれらの各々に対して社会はいかなる意味を付与するのか。

問題は我々の欲求の原理の研究に■とり組むことであった。もし我々の欲求が社会の産物であるならば、その原理は（その形態および対象と同じく）社会によってのみ説明され得るはずである。様々の経済的財に対して我々が付与する価値は、それらが我々に提供する社会的満足の種類に特に依存している。ところで労働者は工場の外では、少なくとも二つの社会集団と結びつく。一つはその家族であり、いま一つは通りや、様々の公共的な場所でその構成員と接触する社会一般である（社会においては特に友人、労働者階級の人間である）。したがって彼の社会的表象、要求、満足は二つのグループに分けることができる。一方は家族（およびそのなかでの彼）が、社会のなかでそれが占める地位についてもつ意見に関連するものであり、他方は、家族が社会に対して、その社会的地位について与える、あるいは与えたいと思う見解に関連している。（一般に）家族のなかで満足せられ、家族の構成員が集合的統一性の意識に接近しそれを獲得する主要な機会である、社会的欲求としての食料への欲求は第一のグループに入るように思われ、衣服への欲求は逆に、家族には非常に僅か、■きわめて間接的にのみ関係するにすぎず、家族はその一部分にすぎないより広い社会の意見に対して付与される重要性の度合いに応じて、発展するように思われた。住居への欲求はより複雑である。いずれにしても労働者の生活条件、彼らの生活態度と観念は、彼が定義する金銭的努力においては、（広義における）社会についての表象は非常に目立たぬ控えめな役割を果たすにすぎないものと想像させる。それゆえ、その金銭的努力にほとんど唯一介在して来るのは、家族、その物質的、精神的幸福、その生活水準についての観念であろう。しかし、住居の選択および措置において家族外の社会の意見が考慮されること、特に考慮され得ること、これは社会意識において、住居への欲求に対してある独立の地位と存在性を保持せしめるものであろう。

### 三. 結論—家族と労働者階級—

以上の分析から、本質的な欲求とその数は社会によって説明されることが確かに結果する。しかし、このことから（ある家族規模の、ある収入水準の、さらにある職業の、ある場所の）集団において、その重要性の順序、その相対的強度がどのようなものであるか、あるいはどのようなものでありうるか、を演繹することはできない。これについて十分に知るためには、事実に当ることが必要であろう。これは我々が本書の先の部分において試みたところである。そして我々は確かに、我々が到達した命題の意味全体をいまやよりよく理解することができる。——いくつかの命題は■まったく消極的である。我々は、大都市の労働者階級において、職種と産業の違い、場所の違いが支出配分にどのような影響を及ぼしうるかを調べたのであったが、それは無駄であった。このような要因が作用した例外的ないくつかの事例は、条件と現象との間における規則的一般的関係の存在を結論することを許すものではない。——他方、世帯規模および収入水準と支出配分との間に現れる関係の研究は、まずそれらがいかに複雑であるかを我々に教えるものであった。かつてエンゲルによって定式化された単純で古典的な比率でもって満足することを妨げる、例外、不規

則性、不明瞭は明らかに別の社会作用によって説明されるものである。この別の社会作用、それらの起源と役割については我々は（すべての事実に応じて）いくつかの仮説を立てることで満足しなげらなかつた。我々は、このような不規則性の一部は低い収入カテゴリーの家族から高い収入カテゴリーの家族への頻繁な移行（移行した後でも家族は少なくとも一定期間昔の生活習慣を保持し、支出のある一定の絶対数値あるいは相対数値を固く守り続ける）、あるいは逆の移行（これは多分頻度がはるかに小さい）によって説明されるものとする。なおこれはまさに、明らかに労働者階級全体についてより一般的で共通の傾向の一結果にほかならない。労働者は習慣に執着する。彼らはその生活水準の低下を拒否する。他方では、高い条件についての明瞭な観念もなく、とりわけ経験もなく、収入が増加したときでさえ、彼らにはその支出の配分を変更するためにいくばくかの時間が必要である。しかし変化が生じた■時には、まさにそれは待たれていたものであるが■故に、その<sup>シヤンジエマン</sup>変化は深刻なものとなる。かくして集団間には顕著な差異が<sup>ヴァリアシオン</sup>つくり出されることとなる。かくして、ある時点では、高い収入水準に移行するにつれて<sup>ヴァリアシオン</sup>変化は不規則で不連続なものとなる。

このような偶然性にも関わらず我々は、正確にはエンゲルの法則に対応しない一定数の法則を引き出すことができた。——■確かに収入が増加するにつれて食料費全体の比率は減少する。しかしこの減少には、まず第一に遅滞と急激な運動とが存在する。さらに、食料費のより詳細な研究によって我々は、（エンゲルが言ったように）食料費の絶対額が増大するばかりでなく、消費される料理の種類（いろいろな食物の比率）も何らかの方向において変化することを示した。世論が何らかの理由によってより多くの価値を付与するもの、金持ちのために取っておかれているように見えるものが別のものと取って替わる。下層の労働者と上層の労働者の摂食体制は根本的に異なるものとなる。さらに進んでいくつかの献立を比較することによって次のことを示すこともできるであろう。すなわち、最も貧しい労働者たちの摂食体制は単調であると同時に不規則でもあるのに対して、最も恵まれている労働者たちのそれは食事に変化を与えると同時にそれを「秩序化する」ための心遣いをますます示すようになること、その結果支出の数字そのものはこの場合、実現された進歩、すなわちより多数でもあり強力でもある満足を与えながらも節約して知性と共に使われた同額の支出、を不完全にしか示していないこと、である。——収入の階程を昇るにつれてあらゆる種類のその他の支出のために使用可能な金銭の比率が増大することはいつものことである。しかしエンゲルは住居費および衣服費の比率は大体同じくらい維持するであろうと言ったとき誤ちを犯したと我々には思われた。我々は、全体として衣服費はかなり連続的に増大し、住居費は（比率において■つねに）非常に早く定常になり、そして減少しさえすることを確認した。これはまさに本質的な一結果であり、我々が提起したばかりの欲求の重要性全体を理論的分析に従って、この結果から認識することができる。我々を驚かすのは、住居費についての一定の抑制である。住居費は食料費によって全面的に条件づけられてはいない。なぜなら収入が増大するにつれて食料費の比率は低下するからである。住居費の抑制は収入上の余裕の欠如によっては少しも説明され得ない。なぜなら衣服費は増大しつづけるからであり、さらに少なくとも統計事務所のアンケートにおいては（他の多くのアンケートにおいても確認されているが）、その他の支出の比率（最も重要なものは保険、精神的社会的欲求に対応しているものである）も増大しつづけるからである。

このことから我々は次のように結論する権利を有するであろう。すなわち労働者たちはそれができるようになるや、よい住居を求める代りに、内装や家具等を改善する代りに、彼らが自由にできる余剰の金を、家族の外、広義における社会のなかに対象を有する支出に当てること、そして彼らは、衣服、娯楽、通りの、あるいは彼らの階級の集団とより緊密に彼らを接触させるあらゆるもののために、住居を犠牲にするということである。

労働者の家計と事務員の家計を比較したときすでに我々を驚かせたことは、この二つの集団における、全体支出に対する家賃支出の比率の差が高い収入水準に移行するにつれて大きくなる点であった。ドイツ統計事務所アンケートによって掌握された世帯を、その支出の一般的配分様式に従って五つないしは六つの大集団に我々が分類した■時、我々はそれらをさらに二つに区別した。(133世帯の $\delta$ と130世帯の $\epsilon$ である)。第一の集団は家賃のためのかなり大きな支出(他のすべての支出は制限されている)によって特徴づけられ、第二の集団は家賃についての一定の抑制と衣服費の明確な増加および「その他の支出」の■きわめて大きな比率によって特徴づけられる。ところでこれら二つの集団は、先行の三つの集団によりも(その収入によって、またその家族規模を考慮して)高い水準にあるものである。しかし集団 $\epsilon$ は集団 $\delta$ の世帯よりも平均して明らかに裕福な世帯を含んでいる。それゆえ、家賃支出はかなり早く動かなくなり、後に(比率において)低下する傾向があるが、総額においては食料費と同じくらいであることは確実である。さらに、労働者の住居とその他の階級の人間が住む住居との間での差は、両者の摂食体制の間の差よりも遥かに大きい。

予測できたことであつたと思われるが、労働者が深く感じているあらゆる経済的欲求の中で最も成長していないのは住居への欲求である、ということを実験的研究によって確認することが必要であつた。住居への欲求が成長していないという点によってまさに労働者階級は上流階級から区別され切り離されるのである。——この半世紀来、主として労働者が住んでいるパリの住宅では家賃が大いに上昇したとはいえ、裕福な地区における家賃の上昇はしばしばより顕著であり、そしてともかくもそこでの住居条件はより一層改善された。——裕福な地区のなかに、そして、裕福な人々の住んでいる住宅<sup>メゾン</sup>のなかに、かつては、そして今日では、どのくらいの割合の労働者が含まれているかを調べることは興味あることであろう。あるいは我々が多いに間違っているかも知れないが、その割合が50年足らずの間に多いに減少していることが確認されるであろう。そして、たとえ投機を引き合いに出すことはしないとしても、家主のやり口を非難することは■まったくしないとしても、また裕福な人々の階級に対していかがわしい策略の■ゆえに嫌疑をかけることはしないとしても、誰が一体労働者集団の空間のなかで孤立することを願つたであろうか。もし労働者の住居があまり快適ではない状態を続けてきたとすれば、それは我々が述べたように、労働者階級のなかで、よりよい住居への強い欲求が成長してこなかったからである。今や我々は次のことをつけ加えることができるであろう。それは、家族生活に対する、またそれと結びついているすべての満足に対する嗜好が、労働者をして金銭上若干の犠牲を覚悟してでもよりよい住居を要求せしめるほどには強くなつてはいないということである。

我々はいまや、工場の外で、すなわち社会生活のために捧げられるに違いない、年の空間および一日のなかのある時間部分全体において、労働者の労働条件の影響がどこまで広

がっているかを測定することができる。——我々が述べたように工場は社会的なものを何も含まない環境であり、そこでは労働者は材料、生産物、機械、動いていない物体の間で孤立しており、しかも絶えず身をこわばらせており、不自然なほとんど人間らしくない姿勢でいる。労働者の状況は次のような事情によって説明されうる。すなわち、分業の進展はとりわけ、一方では実際の遂行の諸機能を相互に切り離し、他方では、作業の指示、組織化、相互の作業の適合化および他の集団の欲求への適合化の機能を（労働者から）分離することにあつたという点である。必然的な基礎ではあるが、下位の基礎としての、人間と動かない自然との間の関係の上に、人間と人間との間の集団と集団との間のますます複雑な諸体系が建てられている。ところで社会生活全体はこの諸体系のなかに集中している。社会生活は、このような体系の外に出るや、固体のなかに流れている先端から出てゆく電気のように、消え去る。素材の方を向いた遂行主体はかくして、彼らのなかに流れていた社会生活のすべてが去り、失われるにまかせる。——家族はこれとは最も対極にある環境である。その構成員を結びつける紐帯は——これを人は血の紐帯とか呼ぶのであるが——何よりもまず社会的であつて、物質的ではない。相互の関係は機械的ではなく、生々としておりしなやかである。人は家族のなかで一つのものとして考慮され評価されるどころか、また無差別に外の誰かと取りかえがきくどころか、家族のなかで（しばしば家族のなかでのみ）その人間の感情、嗜好、美德、欠点、全過去、すなわちその人間を独自の個人たらしめるもの、取りかえられ■得ないものが認められるのである。家族が統合された一集団を形成すればするほど、それは家族的親密のある種の色合いとして家族を取り巻く物々、部屋、家具、家屋全体とそのまわりにまで広がり、それらを家族の生活圏とその関心圏のなかに引き込む。

しかしながら、家族がこの役割を十分に演ずるのは、その構成員がこうした欲求を感じているという条件においてのみである。家族がこうした種類の、あるいはさらに別種の（というのは、家族は我々の教養の主要な源泉、両親、隣人、友人の親しい集団の心にまで浸透する最も直接的な道でもありうるからである）満足を供給しうるのは、そうしたものを感じるゆとりと願望をもっている場合のみである。家族生活への嗜好が弱まったとすれば、それはその人物が、物質的素材から最も遠く離れていると感じる社会部分、機械的で骨の折れる労働を最も完全に忘れることのできる社会部分との最も親密な接触に入る能力を失った（多分はかつて一度ももったことがない）ことの、そして彼が産業的活動時間の■あいまには社会生活が隣接する機械的諸力の影響によってさらに鈍らされ、分散させられ、重苦しくさせられている地帯にとどまっていることに満足していることの、最も確実な徴しである。

事実、工場と家庭との間の道はまさにそうした地帯であり、すでに見たように、住居はあまりにしばしばそうした地帯の付属物ないしは延長にとどまっている場合がある。確かに、往来があり、新住者の通りがあり、それぞれの間に一連の中間的な通りが存在している<sup>(1)</sup>。大都市のいくつかの部分における、木々が繁り屋敷に囲まれているある種の通り、広場、並木通りは田舎風の生活を思い出させそれを模しており、鉄柵に守られた芝生や庭とほとんど連続している。しかし労働者地区においては、逆に、集合住宅および「住宅地区」内部の庭と人通りの多い道との間は連続している。そして、家々は、それらと道との間に実質上の障害物ができるように内部的に按配されてはいない。ところで、大きな通り

や比較的狭い通りを通行する群衆は、辛うじて視線を交わしながら小路を歩く単独の個人に分解するか、あるいは比較的漠然たる集合意識が一瞬間生じる、断続的でかりそめの集団を形成するかする。娯楽、運動、屋外スポーツへの共通の欲求、共通の好奇心（ショー・ウインドーの前での、あるいは■何らかの悲惨な光景ないしは街の道化師のまわりでの野次馬根性）、やむを■得なければ、喜び、悲しみ、あるいは怒りの集合的昂揚（これはしかし危機の時期を除けば■まったく長い間隔をおいてからしか起こらない）、これらはある種の群衆心理学が我々に教え得る事柄とほとんど異なることはなく、確かに社会意識の最低水準のものである。このような集団においては個人は個性を欠いた単位となるか、あるいはそうしたものとどまり、彼らの作用と反作用、そこから見えてくる諸関係のシステム全体は、自由度と変動の度合の若干の増大にもかかわらず、物の間の機械的関係を模している。パスカルが言ったように、「通行人を見るために窓のところにいる人物について、もし私がそこを通るならば、私を見るために彼はそこにいたと私は言えるであろうか。否である。なぜなら彼は特に私のことを考えているわけではないからである」。事実、通常の観察者は、階段の対称型の並び、窓とバルコニーの背後に、家庭生活の多様な局面を発見する以上に、一定の限定された数の枠内にある服装、衣服の下に、表情、身振りの下に、ほとんどすべての紋切り型の下に、存在の多様性と独自性を発見することはないであろう。2人の友人、家族のなかの好意的な2人の構成員がこのような匿名の群衆の真ん中で出会うこと、これは完全な田舎で出会うのと同じ、あるいはほとんど同じくらいの驚きと共に現■われ、一瞬そこに立ち止まるような、真に社会的な一隅をなす。過度の激しい社会生活によって疲れた都会人にとっては、通りは田園の孤独とほとんど■程度の休息の場である。人はそこで調整され人間化された自然の環境のなかにいるのと同じような感覚を少しばかり経験する。この場合、社会の方が解体され、少し「機械化」される。社会有機体論の社会学者が社会のなかに生命体のあらゆる機能を見ようとする■時には、彼らは確実に誤る。この比較が（たとえ不正確ではあるにしても）適用されて最も誤ちが少ないのは、都会の集団、そこで生み出される運動と交通、都市の中で異なった明確な役割を果たしている地区や通りにおけるそれらの自発的な組織化と分化、に対してである。とにかく、通りの硬直性と狭さ、あるいは（逆に）広さ、広場と家屋のかたまりの地理的形態、交差点が示す方向指示の全体、上り坂と下り坂、雑踏、通行の流れの方向と分岐、これらはそれらに従わなければならない個人に対して、自分が運動している物質の一分子にすぎないという観念をますます押し付けるものである。そして我々は、このような物質的表象のなかにさらに速度の意識を導入する、ますます機械的になる運輸手段の全体については敢えて語らない。通りに降り立ちそこで分散する家族の構成員たちはある時間の■あいだ、不活性固体を支配する法則の部分的影響の下にあることになる。通りが「外部」すなわち外の世界を意味するのは、極めて文字通りの意味においてである。

- (1) 道路におけるこれら二つの種類についてはすでに引用した我々の著書 (Les Expropriations, etc.) p.167 sqq.を参照せよ。■対応箇所不明?→原著 448 の注

労働者の家庭内がすべてこのような雰囲気によって浸透せられているということから、それによる多くの結果を理解することができる。労働者たちは工場を出た後、家への通り

を急ぐのではなく、多くは通りをほつつき歩いており、あるいは急いでいたとしても、通っている際にあらゆる種類の影響から余りに強く印象づけられ、通りのあらゆる種類のイメージに吸収されるに身をまかせる。彼らはたとえ十分では決してないにしても、それだけで彼らのある程度満足させる社会生活をそこに見出す。この原因は家族生活の不完全な組織にあると言ふべきであろうか。むしろ原因は多分結果であり、家族がその構成員各自を「解体する」諸力に挫折し、この力が次第にその作用力を家族のなかにまで拡大するのをゆるすのは、家族構成員各自が帰路にある間そうした諸力から身を護るに足るだけの社会表象と社会感情でもって彼らを武装させるのに家族がほとんど成功していないからである。実際ここでは原因と結果を区別する必要はない。労働者にとっての街頭生活の重要性と家族のまとまりの弱さは、工場、労働者の労働条件から彼らの生活条件に向かう放射作用によって同時に説明される。それゆえ労働者階級における支出配分と上流階級におけるそれとの間に指摘される差異は（その差異は消費の領域において労働の事情を表わしているのであるから）、労働者の労働が必然的に「社会の外」で行なわれるという、労働の根本的性質に帰せられる。

しかしこのようにして、労働者階級の内部に、ある一つの社会的特徴があるとして、その下位分類は見られないこと、この階級の統一性が全きままにとどまることも同じく説明される。——上流階級においては事情が異なることも考えられる。我々の目的は上流階級をその文脈と要素において研究することでは■まったくなかった。しかしながら、多くの指標から、上流階級には複数の社会層が重なっていると認められること、そしてこの複数の社会層は相互に（非職業的な）かなり希薄な関係をもっているだけであると推測してよいであろう。上流階級における下位区分の原理が所有している財産、あるいはある種の支出が想像させる財産であることは多分正しいであろうと思われる。これは導管とサイフォンの一体系によって結ばれた非常に多数の花瓶を想像してもよいであろう。このサイフォンは水位が同じものとだけ連絡をとるのである。このことは花瓶が相互に十分に遮断的な形で存在していること、花瓶のそれぞれの内部に一定の水位が確定されていることを前提している。すなわち、その生活水準、金銭的能力が少なくともあるいくつかの支出に現れているような、明確で統合されたいくつかの家族が必要だということである。このようなあり方は確実に上流階級のものであり、我々は次のことを認めても誤ることはないと思信している。すなわち、財産の外的微しとしての他の支出の重要性がいかなるものであるにせよ、この場合住宅費が大抵首位に来るということである。このことの理由は理解することができる。労働者との対比において他の階級を特色づける特徴の一つは家族生活に当てる費用であり、また、家族生活の強度は住居の質と緊密に関連しているので、大抵住居の価格は総収入との特定の一関係（収入によって変化しうる関係）のうちであり、この関係は家計全体の重心のようなものであり、家計の均衡条件を決定するようなものであることを確信することができるであろう。かくして一方では、いくつかの最頻住居価格が十分明瞭な間隔によって区切られており、他方社会意識においても家賃支出のそれぞれの額には他の支出のそれぞれの場合の特定の額が結びついていることを理解することができる。いくつかの一定の生活水準にはいくつかの区別され得る社会階層が対応している。——このことは、多くの家族がその住居支出について度を越すという仮説を排除するものではない。むしろ、これは通常、住居支出とその他の支出との間で比率は固定的であり、明らかによ

り可視的な後者が非常にしばしば前者の徴しとなるからでないとするれば何故であるのか。

我々が労働者階級のなかに、明確に定義された様々の生活水準の間のこのような間隔を見出さなかったこと、これは労働者階級がいまだ住居の社会的重要性を意識していないこと、を証明している。そこに、その異常な労働条件の結果としての、労働者階級構成員における社会的感情と願望の衰弱の最も確実な影響を見ることができよう。我々は、人々が社会の影響のもとに、いかにその欲求の満足をますます予測するようになるか、欲求を全体として見るようになるか、そのために多様なそれらの傾向をいくつかの本質的なグループに分けるようになるかを説明した。このことはそれだけですである程度の秩序であり予測であるが、しかし不完全である。彼らは、本質的な欲求そのものを相互に関連づけられない限りは、そしてそれらのある生活水準へと組織しない限りは、道なき道にとどまっている。ところで彼らはこれができなかった。彼らはこの本質的な欲求のうちの一つについてその最大の重要性を少しも認識しなかったからである。これは疑いもなく彼らに予測と計算の最も真剣な努力を要求するものであり（金額の大きさによるというよりも、支払いが長期の間隔で一度に払い込まなければならず、このような支出は将来を拘束することによる）、しかしそれによる満足の程度は彼らの生活全体をもっとも大きく条件づけるものでもある。もし彼らの一部がこのことを納得し確信し、この目的のための真の犠牲を引き受けたならば、彼らがある共通の集合意識に結びつき、他の部分から社会的に分化するであろうことは疑いない。他方、労働者の給与の低いこと、彼らの稼ぎの必然的な制限については言わないとして、もし労働者階級のある部分が全体としてこの欲求を深刻に経験していたならば、彼らはそれを満足することを得たであろう。このような家族の間の関係、相互に家のなかで集まる習慣、これは住居への欲求を一層発展させる、少なくともそれを強固なものとするのに貢献したであろう。やがて、食料と衣服への欲求が住居への欲求と緊密に結びつき、それに従属するようになるばかりでなく、家族が個人的<sup>オルガニク</sup>体質的傾向の占領から免れるようになる度合に応じて、また家族が予測の能力をもつようになる度合に応じて、他の欲求がその上に接木されるであろう。つまり、知的社会的欲求、特に子供たちの将来を確実なものとしようとするますます顕著な配慮、等である。——しかし、事実の研究はこうした点について我々に何も明らかにしなかった。困窮者よりは少し楽な世帯に移行した後では、よりよい住居に住まうためのある種の努力が存在することは疑いない。しかしその努力は速やかにその目的を達した。多分労働者階級における住居支出について下方限界は存在せず、上方限界は存在するであろう。労働者階級の住居支出の上方限界は（上流階級の住居支出と比較して）かなり低いところに位置しており、それを越えるものはきわめて稀である。

\*

\*

\*

我々は本書において諸階級の進化を研究することを課題とはしなかった。この研究を終えるに当たっても、「将来の展望」について一瞥を加えたり、階級諸集団から出て来るであろう



うものについて■何らかの仮説をたてたりすることはしない。我々は我々がいま到達した観点から、われわれが社会体のなかに見た本質的な二つの「断絶」を解釈するにとどめたい。

我々は、農村における集団は、家庭生活への職業生活の不断の浸透によって特徴づけられることを述べた。しかしだからと言って家庭生活が崩壊させられたり鈍らせられたりするということが結果するわけではない。なぜなら家庭生活の方も職業生活に浸透したそれを包み込むからである。農夫は自分の家の見えるところでしばしば家族と共に働いており、(その労働の辛さにもかかわらず) 素材を前にして孤独を感じずことは■まったくない。彼が多くの場合少なくとも主導性と独立の外見を保持していること、これは彼の労働を工場で行なわれる労働から区別するものである。農村の家庭集団は土地と伝統的な仕事に非常に適応しており、農夫が労働の場から遠く離れることなくほとんどすべての社会的本能を満足させ得るような、独自の社会生活の一類型を実現している。村の祭りや集まりは一瞬この地平を拡大し、家族の範囲を越えるいくつかの欲望を目覚めさせ満足させ、農民の家族集団相互の、そして家族集団の社会全体への周期的な(他方ではかなり表面的な) 順応を生ぜしめる。これは分散したいというよりも分割された集合生活であり、自足しており、自らを越える志向はない。それゆえこれを都市の集合生活に比して社会的に劣るものと考えすることは適当でなく、単純に別のものと考えべきである。

大工業の発展と大都市の形成は、一般的結果として次のことをもたらした。すなわち、一方では職業生活と家庭生活とを深刻に切り離し、双方を孤立化させ、他方では、職業生活そのものにおいてさえ、生産労働を二種類の機能に分割した。一つは社会の真只中で遂行され得るものであり、人間を社会的関係のなかにもみ込むものであり、いま一つは素材や機械を前にして人間を孤立化させ、作業を遂行している間は社会から出ることを彼に余儀なくさせるものである。——これら二つの分解のうち第二のものは、社会の非農民部分を社会生活への明らかに不平等な参加によって特徴づけられる二つの全体、すなわち二つの階級に分割するという結果をもたらした。——第一の分離(職業生活と家庭生活との分離)は、形式的で明瞭に思われるけれども(なぜなら労働者は労働時間の■あとは、事務員が事務所の外部にいるのと同じように、工場の外部にいるのであるから)、二つの階級に同じ作用を及ぼしたのではなかった。その作用は上流階級にとっては現実的であった(さらに、その作用が最も圧迫的でなかったのは上流階級においてであった。なぜなら、この作用によって区別された生活の二つの部分は両方とも社会的であったからである)。家族のなかで強度の集合生活が自由に成長することが可能であり、この集合生活は類似ないしは接近した経済水準のいくつかの家族を相互に結びつけ、結果としてさらに集合生活を強化するに至る。上流階級がいくつかの区別をされた排外的な社会層に(多分) 分解するのはこうした事情による。職業生活と家庭生活の分離の作用は労働者階級にとっては見かけだけのものであった(それにもかかわらず労働者階級の場合この作用は最も必要なものであった。なぜなら、社会生活のために保留された生活部分を、社会の外部で展開される部分とのあらゆる連続的關係から解放することが問題だったからである)。工場で身についた習慣は余りに頑固な性質を示し、労働者が自身のなかにもみ込む社会的人間を目覚めさせることは余りに困難であり、労働者が十分堅固な基礎の上に家族生活を構成し家族生活の欲求を強く経験する能力をもつようになることはできなかった。彼労働者は、家の内部および住

居の重要性についての深い感情のなかにあつて、自らの諸欲求を明確な生活水準にまとめ上げるべき原理を見出すことができなかつた。彼は自らの欲望と性向のなかに、ある不完全な秩序を導入し、それらをいくつかのグループに集めることで満足した。それらのグループに予測が行使されていることはありうるのであるが、しかし、グループ相互間はゆるんだつながりによって関連づけられているだけである。彼は社会生活のこうした半ば表面的な地帯にとどまっており、そのなかでいまだ余りの受動性と無気力のうちに生きている。

しかし労働者階級の意識は、それが深さにおいて失つたものを広がりにおいて獲得した。社会の有する最大の富を剥奪され、他の人々よりも「社交的」でないにもかかわらず労働者はより「連带的」である。これは驚くには当たらない。人々が最も緊密に接近し、人間社会が一つであると最も強く感ぜられるのは、威嚇的あるいは兇暴な物質的諸力の現前するなかにおいてであり、なんらかの<sup>カタストロフ</sup>大災害の後であり、あるいは自然力との闘争の過程においてである。しかるにしばしば繰り返したように、ほとんど常時自然素材と接触し、その抵抗と格闘し、それを克服するために、しばしば潜在的に危険をはらんでおり、そして常に苦痛の多い孤独を耐えるのは労働者の機能なのである。なぜならば、人間は生来社会のために作られているからである。彼らが社会に戻るや否や、彼らの最初の反応が、彼らと運命を共にするすべての人々と一体をなしているという当惑した感情であること、これは予想することができる。そして、労働者階級の運命がどのようなものであろうとも、その構成員すべてにおけるこの自覚的な連帯がどのような形においてであれ存続することは、おそらく真実であろう。

付 I  
家計調査  
参考書目および批判的考察

この著作において我々は最も最近のドイツにおける 2 つのアンケートの分析に課題を限定したが（その理由については先に説明した）、これに先だって我々は最も重要な他の家計調査すべてについてその内容を検討した。この作業は我々が検討した 2 つのアンケートがそれらに先行する他のものよりも広く堅実な研究上の基礎を提供するものであることを確認する上で不可欠のものであった。そして他方、先行の調査はかつてにおける支出の変遷の研究にとって明らかに最も重要な資料であり、それらの種類と価値の概略を確認することは役に立つことであった。

我々のレビューが完全であると言うものではない。とにかく我々のレビューは、ドイツ帝国統計事務局のアンケートの pp.14\* - 16\* にある参考書目よりも多数のアンケートを対象としている。他方この統計局アンケートの参考書目においては、各種アンケートが時代順、国別に並べられているのであるが、我々はそれに加えて継続期間および採用されている方法に従って分類することを試みた。最後に、機会あるごとに我々はこのレビューに、多少とも一般的な理解範囲にある批判的考察を付け加えた。——原則として我々が採り上げたのは大都市における産業労働者の家計のみである。

A ——本来の意味における（実際につけられた）家計

家族の家計簿は多くの方法によって入手されている。我々は調査の「対象」によってつけられた家計簿と、調査員によって作成された家計簿とを区別する。

一．自発的につけられた家計簿

当事者が、依頼されてではなく自分自身のためにつける家計簿が存在する。このような家計簿には自発的という長所、すなわち真正さという長所を認めなければならない（なぜなら当事者は自分自身のためにつけるのであって、他人がそれを見ることを考えないからである）。他方では、一時的に収支をつけるという事実が世帯の生活習慣を変容させるという事情を心配する必要もない（なぜならこのような自発的な記帳は、その世帯の傾向そのものの方向において行なわれるからである）<sup>(1)</sup>。そのような家計簿は作成者が亡くなっている古いものであることもあり<sup>(2)</sup>（これは説明、訂正、補足を得ることを不可能にする）、家族の長あるいは主婦によってつけられたものもある（主婦がつける場合にはその夫が外とする支出は表れない）<sup>(3)</sup>。

(1) これはシュナッパー・アルント (Schnapper Arndt) が「目前に見出される家計簿」(die vorgefundene Bücher) と呼んだところのものである。Vorträge und Aufsätze, 1906, p.27.

(2) 例として同上の「17 世紀における 2 人の靴職人の家計簿から」(Aus dem Budget zweier Schuhmachergesellen des 17. Jahrhunderts) を参照。

- (3) 同じく同上、ネーリケーレ「シュワーベンの国民生活からの社会統計学的小描」Närikele, ein sozialstatistisches Kleingemälde aus dem Schwäbischen Volksleben, pp.190-250, 南部ドイツ一小都市における貧乏なお針子の家計簿研究。彼女は35歳から48歳まで家計簿をつけたが、最後の4年間つまり1879年から1882年までのものしか保存しなかった。また、ヘンリエッテ・フェルト、平均的一市民の10年間の家計簿、イエナ、1907、(Henriette Fürth, ein mittelbürgerliches Budget über einen zehnjährigen Zeitraum, Iéna, 1907)を参照。フランクフォルトで事務員になった旧商人家族によって記帳されたもの。特に、(カール・ハンブケによって再録されている、私経済の支出予算、イエナ、1888年、das Ausgabebudget der Privatwirtschaften, Iéna, 1888)の、ホフマン(Dr.E., Pfarrer)によって入手された2つの家計簿を参照。20年にわたってつけられたものであり、1つはその妻が食料品店を営んでいる事務員がつけたもの、いま1つは、会計帳簿の形で中等学校教員がつけたものである。(Hofmann, Zwei Haushaltbudgets über einen Zwanzigjährigen Zeitraum, Archiv. Für soz. Gesetzgeb., Bd. 6, 1893)

## 二. 調査者からの依頼に応じてつけられた家計簿

調査者からの勧めによって記帳された家計簿は、次のような場合には、先の自発的につけられたものとあまり区別することができない。すなわち、当事者が中断していた家計簿を再開したにすぎない場合、当事者に認識の機会が与えられて、その後彼自身で、彼を煩わしもせず、結局のところ彼の趣味にもあっているこの作業を継続するような場合、さらに彼の家に台所用の記録簿がある場合、そして彼が領収証を保存する習慣をもっている場合である。しかし大抵このような家計簿は、実際人為的に獲得される資料になってしまうであろう。なぜなら労働者は家計簿をつけるためには多少とも大きな、そして彼の習慣に反する努力をしなければならないからである。(しかし)このことから明らかに一つの利点が生ずる。それは調査が堅実でとりわけ予測的計画的な家族のみを対象としなくなるであろうという点である。このような家族はこの理由によって典型的とはみなしえないであろう。しかし調査者にとって当惑するような状況も多数出て来る。習慣の欠如、ぞんざいさ、不信、そして悪意、実際よりも貧乏に、あるいは豊かに見られたいという願望、などである。それにもかかわらず対象となるのが赤貧の労働者になることは稀である。ほとんどすべての調査者が言うところによれば、きちんとした家計簿を入手できるのは「十分に恵まれている」労働者からのみであり<sup>(1)</sup>、あるいは少なくともまじめで勤勉な労働者——これは労働者の集団一般における一カテゴリーである——からのみである。

- (1) ランドルトは「家計統計の方法と技術」、フライブルク、ライプツィヒ、1894年(Landolt, Method und Technik der Haushaltsstatistik, Freiburg und Leipzig, 1894)のなかで、家計簿をつける能力がある確信できる労働者のみを選ぶべきであるという原則を立てている。アドルフ・ブラウン(Adolf Braun)のニュルンベルクの調査書の冒頭にも同じ指摘が見られる。そして我々が扱った金属労働者のアンケートそのものにおいても、「比較的俸給のよい労働者のみならず、平均あるいはそれ以下の労働者の家計簿をも入手すべくできる限りのことがなされた」(p.7)と言われていたけれども、同じページに、信頼できる人物にのみ質問が向けられたことが記されている。

多分経験によって、被質問者に渡されたメモ帳における排列といった技術的問題は解決することができたであろう。ある人々は、ランバルトが行ったバーゼルでの調査のように、当事者にその収支を別々のページに自由に記入してもらうか、あるいは、簡単に同じページ上に収入には下線を引いて時間順に記入してもらうか、の方法をとった<sup>(1)</sup>。大抵の場合被質問者には書式あるいは目録手帳が渡され、それらにはいろいろなケースが分けられており、労働者はそれに記入すればよいことになっている。——コントロール〔訳注：調査・実験の結果を類似するものと比較して意味認定すること〕については、調査者が比較基準を決定するのが最もよいであろう<sup>(2)</sup>。食料費については、献立てと食料購入とについて毎日二重に記入することを依頼し、それらを比較するのが便利である<sup>(3)</sup>。他方、都市の労働者の食料は農民階級におけるよりも様々であり、彼らの習慣は規則性が低いけれども、やはり購入について周期的な反復が存在し、さらに、標準的な買いだめ期間のようなものが存在する。これによって一期間における購入を参照しつつ、別の期間の購入を照合確認することが可能になる。このことは時に衣服についても同様である。いくつかの地方においては、人々が肌着を買い、服を新しいのに変える決った期間、特に祭りの週がある。しかしこれは小都市のことであろう。別のところでは、1907年におけるルイズ・ボラード・モア（Louise Bolard More）によるアメリカの調査——これについては述べるつもりであるが——で行なわれたやり方を採用することができる。「衣服費についての記録がなかった■時には調査者は家族構成員の各々が着た衣服のすべてについて■一つずつ■きわめて注意深く検討した」。これは主婦にとっては彼女が年間買ったものを思い出す機会であった。もちろん、調査期間のはじめと終りに衣服と家具についての完全な目録を作成するのがなお望ましい（我々はル・プレとランドルトがドレスデンで作成した目録について語る機会があるであろう）。いくつかの支出、住居費とか税金は誤りの危険なく表わされるであろう。しかしこうした大きな支出カテゴリーのほかに、忘却による、あるいは意図的な多数の省略が存在しうる。それらが表れるのは貸借対照表においてであるが、しかし、最初の段階で「現金」の形であったもの、および負債、債権が記録されているという条件が必要である。その場合、（期間の始まりと終りにおける）二つの貸借対照表および週間ないしは月間の対照（表）のなかに、収入と支出、比較可能で対応するはずの（負債と債権の）二つの額が記入されることになるであろう<sup>(4)</sup>。

- (1) Landolt (Carl) Zehn Basler Arbeiterhaushaltungen, Zeitschrift für schweizerische statik, XV II Jahrgg. 3 Heft, Bern, 1891.
- (2) ランドルトは、家計簿をつけると決心した、そして彼がその財産目録を作成していた80世帯のうち、1年間家計簿をつけ続けることを決心させたのがわずか17世帯であった事情を語っている。彼は時折彼らを集め、そこで、得られた結果について一緒に議論し訂正した。「彼らのうち出て来たのは、第1回目が74名、2回目が43名、3回目が28名、等…。週に1、2回——と彼ランドルトはつけ加えている——私は、手帳を交換するために彼らの家におもむき、厳格なコントロールを行なった」。前出、p.282.
- (3) これは我々が1907年4月にフランスでシーボーム・ローントリー氏（Seeböhm Rowntree）に協力して4週間にわたって81の家計簿を作成した際に用いた方法であり、彼ローントリー氏が「貧

(4) ■原著 461■

三. ■一年あるいはそれ以上にわたってつけられた家計簿

別の方法によるいくつかの調査を検討する前に、我々が持っている本来の意味での（あるいは少なくとも最も重要な）家計簿がどのくらいの期間にわたってつけられたものであるかを見ておこう。この場合、複数年にわたる会計簿（Haushaltungsbücher）、年次毎の会計簿（Jahresausgaberechnungen）、そして一年未満の間つけられた家計簿の三つに分けることができる。最初のもは最も稀なものである。我々はすでに（p.458.■注3）、H・フェルトによる（非労働者の）家計簿、ホフマンによる家計簿について述べておいた。ハンプケは同じところで引いておいた著書のなかで、一年間から4年間にわたってつけられた六つの家計簿を基礎にしているが、そのうちの五つについては1年間の会計簿だけを公表し<sup>(1)</sup>、6番目のものについては<sup>(2)</sup>3年間の空白をおいた二つの年次会計簿<sup>(3)</sup>を公表している。

(1) ペンキ屋（画家？）1人（支出総額 801 マルク）、仕立て屋の親方1人（1,254 マルク）、金利生活者、旧商人1人（3,045 マルク）、大製造業者1人（7,945 マルク）、高級官吏1人（18,206 マルク）。

(2) 鉄道事務員、支出 1,046 マルクから 1,117 マルク。

(3) カール・フォン・ケラー（Karl. V. Keller）は *Wirtschaftsrechnungen* (*Zeitschrift für die gesammte Staatswissenschaft*, 62 jahrg. 4 Heft, Tübingen, 1906-et *Wirtschaftsrechnungen*, Leipzig, 1908) において、10年間、1895-96 から 1904-05 年の家計簿、そして 1907 年までのその継続分（収入 2,057 マルクから 3,570 マルクまで）を公表した。ゲルロフ（Gerloff）は、小学校教師 2 人の家計簿、1 人はシュテッティンの小学校教師のもので、1901 年から 1906 年までつけられており、もう 1 人はグレフェルトの小学校教師のもので、1904 年から 1906 年までつけられているものを公表している（*Haushaltungsrechnungen zweier Volksschullehrer*, *Annalen des deutschen Reichs*, 41 jahrgg., n°3, München, 1908）。これら数年にわたる家計簿の大部分は労働者のものではないけれども、数が少ないので我々としてはそれらを例として挙げておく。

複数年にわたってつけられたこれらの家計簿は、それだけで多くの疑問に答えることを可能にする。例えば子供および両親の年齢が支出秩序に対して及ぼす影響をどのように測定するか。異なる年齢の構成員からなる世帯を比較するだけでは不十分であり、同じ時期に同じ集団について記録された表を作成しなければならないであろう。このようにして得られる曲線は、これらの家族のそれぞれの変遷についての直接的な研究によって、その曲線がそれらと平均的に十分一致することが確認されない限りは、虚構のものにとどまるであろう。——条件はなんら変わらないと前提して、時間における継起の代りに、同じく、支払期限がすべて同じ時点で守られていた一部類を取り上げることが試みられている。フランス労働局<sup>(1)</sup>が、生活費がどのように変化したかを計算するために、1889 年に労働者が消費した多数の食品を取り上げ、1841 年におけるそれらの価格がどれほどであったかを

調べる時、それらが前提としているのは、消費は当時も今日も同じような量で行われており、欲求は変化しなかったということである。これははるかに短期のことであるが、ドレスデンの統計局がやっていることでもある<sup>(2)</sup>。同じく、デンマークの統計局がコペンハーゲンの世帯が消費する食品の地方都市における価格およびその逆の場合の価格を示す■時にそれが前提としているのは、これらの世帯がある土地から別の土地へ移るに際して嗜好も習慣もなんら変えなかったであろう、ということである<sup>(3)</sup>。——しかし、もしこのような前提をおくことに同意しないならば、もし経済的条件一般のみならず集団の欲求も変化すること、しかも多分かなり不規則に変化することを考慮に入れようと欲するならば、連続する数年間、あるいは多少とも離れた間隔で年次を取って、同じ家族を観察しない理由を理解することは容易ではない。この点は何人かの論者たちも感じたところであった。そのうちの一人の論者<sup>(4)</sup>は次の点に専ら関心を向けている。すなわち田舎を■すてて都市に出る労働者たちはそのことによって自分たちの生存条件を改善することになるだろうか、という問題である。彼は、少なくとも一年来都市で同じ職業に従事して、ケーニッヒスベルクの労働者となっている、家族の長、あるいは独身者、田舎の旧日雇い労働者を対象にしている。彼は彼らの移住の直前および直後に彼らの家計簿を再現した。彼は我々がいまこの時点で取り組んでいる方法は用いず、主として質問というやり方でこれを行なった。しかし、これらの家族のなかに会計簿をつけることのできるいくつかの家族が含まれているであろうことは想像できる。このような調査は十分に長期間追求されれば、そして、多数の世帯を対象とするならば、大いに有益であろう。

- (1) *Bordereaux de salaires pour diverses catégories d'ouvriers en 1900 et 1901*. (1900年および1901年における労働者各種カテゴリーの給与明細書)。
- (2) ■p.465の注(2)を参照。現実につけられた家計簿と、それらがより最近の価格でもってつけられた場合の計算との間の期間は2年である。
- (3) ■p.466の注(4)を参照。
- (4) Mulert (Oskar) . 24 Ostpreussische Arbeiter und Arbeiterfamilien. Ein Vergleich ihrer ländlichen und städtischen Lebensverhältnisse. Gustav Fischer. Iéna, 1908, p.228. (24人の東プロシ■ア労働者および労働者家族。彼らの農村における生活環境と年における生活環境の一比較。)

(1925Pのこの(2)注(2)P.465の注(2)を参照・・・後  
で調整の書き込みあり)

年次の家計簿はもっとも多数存在する。1880年、ベルリン統計局は、2つの年間家計簿を入手した。1つは家具製造職人のものであり、いま1つは靴屋のものである<sup>(1)</sup>。1883年、バリンは1880年、1881年、1882年の6つの年間家計簿を公表した<sup>(2)</sup>。そのうちの3つは労働者によってつけられたものであり、他の3つはベルリンの一公務員、一金利生活者、そして一商人のものである。1890年にはフランクフォルトの3つの年間家計簿が公表された<sup>(3)</sup> (■p.461の注を参照) 1897年にはマックス・メイ<sup>(4)</sup>が大部分1年間を通じてつけ

られた 20 の家計簿を集め、そのうちの 4 つだけは大都市（人口 10 万人以上）の労働者によるものであった。著者は大都市、小都市および田舎における生活条件の違いを研究することに特に関心をもっていた（地名は省略されている）。1901 年ニュルンベルク<sup>(5)</sup>で 1 年間（1899 年 2 月 1 日から 1900 年 1 月 31 日まで）つけられた 44 の労働者の家計簿が集められ公表された。800 人の労働者が家計簿をつけることを申し出て、着手しさえしていた。世帯の年間支出は 725 マルクから 2,195 マルクの間であり、家族の構成員数は 2 人と 10 人の間であった。この調査はそれが行なわれた当時には最も重要なものの一つであり、これほど多数の家計簿を 1 年分入手できた、明らかに最初のものであった。しかしこれの加工は確かに余りにぞんざいであり、このことがその利用を難しくしている<sup>(6)</sup>。1904 年と 1907 年にドレスデンで非常に興味ある 2 つの調査が表れている<sup>(7)</sup>。そこでの世帯の財産目録の作成は、家計簿をつけること自体への導入および準備として役立つはずであった。しかし 87 世帯のうち 1 年全体を通じて（1903 年 4 月 1 日から 1904 年 3 月 31 日まで）家計簿をつけたのは 41 世帯だけであった。他方、支出については、4 人から 7 人の家族構成の 25 家族の最も重要な消費項目（食料および飲み物）が公表されるにとどまっている。計算が試みられたのは、これらの家族の支出が、同じ消費量について 1905 年から 1906 年にかけてならばどのくらい高くなっていたであろうか、という点だけであった<sup>(8)</sup>。1905 年にフォイヤースタイン（Feuerstein）は 26 の家計簿を公表したが、そのうちの 21 は会計簿から作られたものである。7 つは年間全体を通じてつけられたものであり、17 は 3 ヶ月から 6 ヶ月のもの、2 つは 2 ヶ月のもの、もう 1 つは 1 週間のものである<sup>(9)</sup>。以上はドイツにおける家計簿である。他の国については、1891 年にランドルトが公表したバーゼルの 10 の年間家計簿を挙げるができる（■p.460 の注を参照<sup>(10)</sup>）。他方では、デンマーク統計局によって集められた労働者の年間家計簿が 50 ある<sup>(11)</sup>。こうした調査の稀少性そのものが克服されねばならなかった困難を明らかにしている。これまでの道程を推し測るためには、ベルリン統計局によって 1880 年に大変な苦勞と共に集められた 2 つの家計簿のことを考えれば十分である。1908 年にはシェーネスブルクだけで 52 の家計簿を入手できたのであり、また、1899 年から 1900 年にかけてニュンベルクで大変な苦勞と共に集められた 44 の家計簿を、1900 年に金属労働者組合が入手した 320 の家計簿と比較してもよい。家計簿を手に入れることに全力を傾注して、せいぜい 5、10、20 の年間家計簿を入手したバーリン、ハンブケ、ランドルト、フォイヤースタインの個人的努力に代って、例外的な手段を有する大組織の集会的業績が登場しつつある。

- (1) 労働者階級の支出 (Ausgaben der arbeitenden Klasse. Statistisches Jahrbuch der Stadt Berlin. VIII Jahrgg (1880) . Berlin, 1882, p.164.)
- (2) 労働者階級の家計 (Ballin (Paul) Der Haushalt der arbeitenden Klansen, Berlin, 1883.)
- (3) バーデン大公国の葉巻労働者に関する、ヴェリスフォーファー (Wörrishoffer) によって 1880 年に公表された調査は人口 2 万人以下の都市に住む労働者ばかりを対象にしており（その住民は家庭産品を消費し、居住家屋等を所有している）、従ってここでは我々の関心をひかない。
- (4) 労働者はいかに生活しているか (Wie der Arbeiter lebt, Berlin, 1897)。同じ著者による昔の著書、「労働者の家計簿」(Zehn Arbeiter Budgets, 1891) は、問題の家計簿が 2 週間しかつけられていないことのほかに、労働者が田舎に住んでいるという特殊性を示している。博愛家で、労働者



たちに家計簿をつけるようにすすめたのは、雇傭主である。これら 10 世帯のうち 7 世帯は雇傭主から「特別手当」を受けており、雇傭主はその工場にあらゆる種類の慈善事業を導入している。彼らがどこに住んでいるのかは示されていない。明らかに、ある種の命題を論証することが課題にされている。

- (5) ニュンベルク労働者の家計 (Haushaltungs-Rechnungen Nürnberger Arbeiter)、ニュンベルクの労働者事務所においてブラウン (A.Braun) によって 1901 年に処理された。
- (6) 世帯の員数は示されているが年齢は示されていない。特に一つの表から別の表に移行するや余りに多くの脱漏、順序の転倒、不正確な表記が目立つ。例えば、総支出のリストと各カテゴリーの支出の支出総額に対する比率が示されている中心的な表を検討すると、この表の数字と別のページにおける数字との違いが次のように見られる。中心的な表では 1969.26、となっているのが p.XXX では 1996.26 となっており、以下同様に、1863.85 が p.78 では 1864.42、1636.42 が p.35 と p.77 では 1638、p.77 では 1372.02 が脱漏しており、1553.89 が p.35 では 1566.12、1543.06 が p.35 では 1542.86、1428.03 が p.77 では脱漏、1415.29 が p.XVIII と、p.77 では 1425.49、さらに、次の種類の表では八つの違いがある。これは 44 世帯としては大きなことである。なお、この本に含まれているデータから様々のカテゴリーの支出に対応する職業を見出すことは、20 世帯を除いては我々には不可能であった。——これはしかし組合による調査の体質的な欠陥では決していない。金属労働者の調査は最大の注意でもって作成され補正されている。
- (7) ドレスデン 87 労働者家計の財産目録 (ドレスデン市統計報告、第 13 冊)、ドレスデン、1904 年、および、ドレスデンの近年における主要生活物質の小売価格と、物価変動が労働者家族の支出予算に及ぼす影響 (報告、等、第 161 冊) ドレスデン、1907 年 (Inventarien von 87-Dresdner Arbeiter haushaltungen (Mitteilungen des Statistischen Amtes der Stadt Dresden, 13 Heft) Dresden, 1904 et die Dresdner Kleinverkaufspreise der wichtigsten Lebensmittel in den letzten Jahren und der Einfluss der eingetretenen Preisänderungen auf das Ausgabebudget einer Arbeiterfamilie (Mitteilungen, etc., 161 Heft) , Dresden, 1907.
- (8) これらの家計簿はドレスデンの組合連合の協力によって得られたものである。家計簿が公表された 25 家族は、4 人家族 12、5 人家族 6、6 人家族 3、7 人家族 4、に分けられる。子供は 14 歳以上か以下かが示されている。特に熟練労働者が問題になっている。
- (9) フォイヤーシュタイン、バーデン地方シュヴァルトツヴァルトの時計工場労働者の賃金と家計、(Feuerstein,H., Lohn und Haushalt der Uhrenfabrikarbeiter des badischen Schwarzwaldes, Volkswirtschaftliche Abhandlungen der badischen Hochschulen, VII Bd., 4 Ergänzungsband, Karlsruhe, 1905) 我々は l'Année Sociologique, 10<sup>e</sup> année. pp.616-620.においてこの調査について説明し、著者の方法を批判した。これらの家計簿は 1903 年から 1904 年にかけて、著者の非常に注意深く丹念な監督のもとに作成された。
- (10) 家計簿の方法と技術 (Methode und Technik der Haushaltsstatistik、Leipzig, 1894) において彼はさらにトゥルガウの刺繍工場の型デザイナーの家計簿を公表し、賃金統計と家計 (Lohnstatistik und Haushaltbudgets, Schweizerische Blätter f. Wirtsch.und Soz. Polit.III Jahrgg., n°19, Bern und Leipzig, 1895. ) ではこれら 11 の家計簿にトゥルガウの別の 4 家族の家計簿を追加している。
- (11) Danske Arbejder families Forbrug. 1.Afdeling: Byarbejdere, 2. Afdeling : Landarbejdere, Donmarks statistik, Statistike Meddelelser, 4 Reihe, Bd.6, Heft 6 u. Bd.11, Heft 2.

Kopenhagen, 1901—Rubin M. (デンマーク国家統計局長官)。デンマーク労働者家族の消費 (Consommation de familles d'ouvriers danois, Bulletin de l'Institut International de Statistique, XIII, 3, Rome, 1903.) ルービンの論文は、この調査の一般的結果を説明しているものであり、要約された表を含んでいる。国家統計局は調査の準備段階で有能な様々の人物からの助力を受けており、そのうちの何人かは労働者階級の人々である。89人の小学校教師、コペンハーゲンでは職業別協同組合委員会が、家庭手帳を配り、家計簿への記帳を監督した(1897年全体を通じて)。入念な検査の後、それらのうち251家計簿が取り上げられた(都市から50、コペンハーゲンから27、地方都市から23、農村から201)。「我々のデータは——と報告書は言う——比較的恵まれた労働者からもっぱら集められたものであり、彼らは会計帳簿をつけることができ、その世帯は十分にきちんとしたものであった」。消費されたものの量についての指標は必ずしも常に入手することはできなかった。また、しばしば支出総額だけにとどまり、肉、魚といった一般的な項目で満足しなければならなかった。財産目録を作ることは断念しなければならなかった(財産目録は結局のところ年収の使用法に関する調査の枠からははずれている)。「なぜなら、動産の査定が一定の規則を■まったく欠いている恐れがあり」、そして財産目録の作成できる家族が数百存在する場合には特に画一化の恐れがあるからである。——要約された表は時に先入観にしたがって作成されており、この点が我々に不信を抱かせる。かくして、p.44の表(品目)(地方或いはコペンハーゲンにおける職人或いは日雇い労働者に関する、単位ごとの年間支出の比率)において著者は「住居」と「その他の支出」を一つに括り、見掛け上のある規則を獲得している。彼は言う。「この小さな表は我々に次のような二つの性質を同時にもつ支出配分を呈示している。すなわち、一方ではあまりに画一的であり、明らかに家計簿は同じ社会層に属する家族から集められたものに違いないと考えられ、他方しかし、この表は家族の支出能力の違いを正確に表現するものとなるほどに規則的な形で変化する(原文のまま)という性質である」。しかし先のページ(p.43)に戻ると、住居支出についてある重大な差が見られ、これは説明を要するものであったろう。——さらに労働者の50の家計簿というのは余りに少数であり、これを多数のグループに分けることはできないことである。表3(収入および家族規模別単位ごとの年間支出の平均)は、最大数が一つから4つの家計簿のみを含むいくつかのカテゴリーを載せており、平均の基礎とするには不十分である。

#### 四. 一年未満の家計簿

こんどは毎日会計帳に、あるいは家族それぞれの記帳の仕方につけられた、きちんとした家計簿ではあるが、期間が1年未満のものである、第二のグループに移ろう。——我々がすでに見たように、支出の研究のためには1年という期間はやはり、なしうる切断のなかで最も人為性の低いものである。支出の調査者は、十分意識して、1ヶ月の結果を12倍することがある。これは勿論、その価値を増大せしめるものではない<sup>(1)</sup>。1年未満の期間つけられた家計簿は、しかし、■まったく有効性がないというわけではない。シュナッパー・アルント(Schnapper-Arndt)は正当に、すべては研究の目的によること、「非常に短い期間、例えば1ヶ月、1週間、数日のものであっても正確な観察は、もしそれから根拠のないことを引き出そうとしないならば、価値がないわけではない」ことを指摘している<sup>(2)</sup>。

- (1) 彼らは余りにしばしばこのことをわれわれに前もって知らせない。しかし 12 の倍数の呈示は我々を教育するという点では十分である。それは、引用された文献の付記の p.458 のハンブケによって集められたかなりの数の家計簿の場合である。例えば、デーによって (*Annalen des deutschen Reichs, Jahregg 1880-81* から) 引き出されたミュンヘンの労働者の家計簿である。彼は一日分の食料費を年間日数で積算するところまで行く。またベルリン郊外の薬剤師のところの雇い人の家計簿 (*Concordia, 1882, Nr.72-73, Mainz*) でも、一週間の支出に 54 が掛けられている。
- (2) 既出文献、p.458 の注 1 を参照。

まず最初に、年間家計簿が不可欠とはいえない一問題がある。我々が見たように食料支出は同一世帯について年次による変化が最も小さいものである。食料支出は月次でも恐らく極端には変化しないであろう。ローントリー氏は 1902 年<sup>(1)</sup> にヨーク市の労働者家族に関する一調査の結果を発表した。彼は第一次貧困 (これは収入総額が生命の維持に不足するような貧困である) の範囲を、(生理学者による) 必要最低限の食料価格と観察された家族の収入とを比較することによって、測定することを目指したものであった (彼によれば、労働者階級の 15.46% は第一次貧困の状態にあった)。食料の不足を直接的に示すために彼は、1 週間から 13 週間の間、10 家族に、食料の重量と ■ とともに家計簿を作成させた。これは、ソルヴェイ研究所 (l'Institut Solvay) の調査者たちが比較的最近立てたのと同種類の問題である<sup>(2)</sup>。——我々は次のような単純な問題に答えるためであれば、わずか数週間つけられた家計簿でもほとんど十分な情報を我々にもたらし得ることを認める。すなわち、事実として消費された食物の量と必要な食物の量、実際の食料支出とあるべき食料支出、これらの関係はどのようになっているか、食料支出と総支出との関係はどのようになっているか (この後者については多数の留保をつけなければならないが) といった問題である。

- (1) Rowntree (B.Seebohm), *Poverty. A study of town life.* London, Macmillan, 1902, p.462.
- (2) A・シュロッセ、E・ワックスワイラー、ベルギーの 1065 人の労働者の摂食体制についての調査、ソルヴェイ研究所、社会学研究所叢書、注およびメモ、第 9 分冊、ミッシュ、トゥロン、ブリュッセルおよびライプツィヒ、1910 年、p.260 (A.slosse et E.Waxweiler. *Enquête sur la régime alimentaire de 1.065 ouvriers belges*, Institut Solvay, travaux de l'Institut de sociologie, notes et mémoires, fascicule 9, Misch et Thron, Bruxelles et Leipzig, 1910, p.260) 10 の職業カテゴリーが検討されている (土工、石工 (maçon)、石切工 (carriers)、石炭坑夫 (houilleurs)、機械技師、手動織機職人、機械織機職人、手作り靴職人、機械靴職人、印刷工)。財産目録用の手帳が地域の代表者に渡され、消費記録用の手帳が主婦に渡された。後者は毎日 14 日間にわたってつけなければならないものであった。生理学的調査の結果は次の通りであった。「一方では蛋白質の消費に不足が見られる。他方では、非常に少ない蛋白質消費のなかで、動物蛋白の割合は、相対的に、余りに大きい。3 分の 1 を若干越える事例において、潜在的エネルギーの供給は職業の遂行が要求する厳しい作業に対応していない」。調査全体として、消費される食物の量、あるいは栄養上の実質の問題のみが扱われている。労働者が作業の遂行のために何を支出するかについては、彼らに質問さえされていない。

しかしローントリー氏の家計簿の意義はさらに別のところにある。彼の家計簿は一週間

或いは一月間の家計簿という、別のカテゴリーの家計簿、別のところで別の方法によって行なわれたある調査の説明ないしは補足として作成された家計簿のすべて、と関連づけられている。実際家計簿は時折専門研究の一部をなす。今の場合がそれである。家計簿は、食事の際のいくつかの料理と同じく、家族およびその生活条件の描写における一断片にすぎない。そして実際のところ、住居と住人の様子についていくばくかの概観を我々に示し、彼らの貯蔵食料の断片のいくつかを我々に示し、家主、隣人、司祭等についての彼らの発言を紹介した後で<sup>(1)</sup>、彼らがどのような食生活をしてるかをも我々が看取するのを妨げるものは何も存在しない。こうした資料の価値は調査内容そのものの価値に等しく、またその価値を決めるのは、方法としての特殊専門研究のある種の一般的批判であろう。——このモノグラフィーという方法を主として採用してはいない調査に時に含まれている短期間の家計簿についてはもっと用心してかかる必要がある。非常に急いで、あまり保証もなしに獲得されたデータをそれによって補強しようとしているかに見える。かくしてアメリカの大規模の調査——これについては後に立ち戻るであろうが——においては、いくつかの事例においては会計簿がつけられていた、と書かれている。(これまたアメリカのものであるが) ルイズ・ボラード・モア (Louise Bolard More) の調査においては、200の家計簿のうち50は1週間から1年間つけられた会計簿に基づいていると書かれている。しかしだからといって他の家計簿がもっと価値があるわけではない。そして他方では、つけられた期間の長さによる家計簿の分類については、より正確な情報は与えられていない。我々はこうした家計簿の利用のうちに、単なる見せかけの支壁のみを見る権利を有する<sup>(2)</sup>。

- (1) この種の研究の典型としてヘルツフェルト (エルザ) (Herzfeld) の次の著書のみを挙げておく。Family monographs. The history of twenty-four families living in the middle west side of New York City. New York, 1905. p.105. 我々はこの著書を l'Année Sociologique, vol. X, p.605 において分析し、その方法について論じておいた。
- (2) 短期間の家計簿のもう一つ別のカテゴリーとして、労働者の最貧層によってつけられた家計簿があるであろう。例えばチャールズ・ブースの大著 Life and Labour of the people in London, London, Macmillan, 1902-1903, 17vol. (最初の2回のシリーズ、9巻、Poverty et Industry. 第2版) では、第1巻には、5週間にわたってつけられた家計簿30が見出される。明らかに我々はここでいくつかの特殊な困難に遭遇する。そしてもし貧しい家族についてそれを補正することなく、またたがをはめることなく、その習慣、やり方の核心部分を知ろうとするのであれば、別の方法は不可能であろう。他方これらの家族は赤貧状態にあることによって、短期間の観察でも多分彼らの慢性化した窮乏についての正しいイメージを得ることができるではあるが、しかしそれについて確証を得ることはできない。さらに、社会階級の研究にとって、この下層の社会層は、共通意識にのぼることがなく、最も興味を惹くものではなく、最悪の場合には、表面的に認知されることがありうるのみである。

なお、1年未満の家計簿を用いて一定地方の労働者の状況と支出を確定しようとする、かなり限定された数の調査が存在する。これらはもはや食料の研究にとどまてはいない。またこれらは家計簿をモノグラフィーの補足ないしは付属物とはみなしていない。家計簿は時間上の制限にも関わらず、自立的な社会研究の一手段となっている。かくしてベル

ギー<sup>(1)</sup>、バーデン大公国<sup>(2)</sup>、そしてバイエルン<sup>(3)</sup>で調査が行なわれた。他方、個々の人物も同じ条件で家計簿をつけさせるという仕事をしている<sup>(4)</sup>。

- (1) 1891年4月におけるベルギー労働者の給与と家計、産業労働会議から提供された資料、ブリュッセル、1892年(4月1ヶ月間のみ家族手帳につけられた労働者の家計簿 188)、Salaires et budgets ouvriers en Belgique au mois d'avril 1891; renseignements fournis par les conseil de l'industrie et du travail; Bruxelles, 1892 (188 budgets ouvriers tenus, sur livrets de famille, pendant le seul mois d'avril) . 農業省、商業省、公共事業省の工業局によって公共されたもの。p.578
- (2) カールスルーへ近傍における 17 自治体における工業労働者の境遇。Die Verhältnisse der Industriearbeiter in 17 Landgemeinden bei Karlsruhe. Bearbeitet von Fabrikinspektor Fuchs, und bgg von der Grossherz-Badischen Fabrikinspektion. Karlsruhe, 1904. 5月および6月の7週間のあいだつけられた 14 の家計簿が見られる。
- (3) バイエルン事業所労働者の経済的狀態に関するバイエルン工場・事業所監督官の報告書。1905年度報告付録文書。Erhebung der königl-Bayerischen Fabriken-und Gewerbe Inspektoren über die wirtschaftliche Lage der gewerblichen Arbeiter Bagerns. Beilageheft zu den Jaknesberichten für 1905.ここには、36の家計簿が見出され、その一定数は、1ヶ月ないしは数ヶ月の間毎日つけられた家族手帳からの結果である。
- (4) ドイツ印刷業における社会統計、Abelsdorff (Walter) , Beitragäge zur sozialstatistik der Deutschen Buchdrucker, Volkswirtschaftliche Abhandlungen der badischen Hochschulen,IV Bd.4. Heft, Leipzig, 1900. ここには 15 の家計簿が見出される(ドイツ 11 都市における印刷係長、植字工、印刷工)。2ヶ月にわたってつけられたもの(1897年10月および11月)。これはこの種のものの中で最良のもの1つである。毎日きちんとつけられている。

ベルギーの調査は他の2つよりも我々の関心を惹いて当然である。これははるかに多数の世帯を対象としている。またずっと以前から準備されていたものと思われる。そしてとりわけ、エンゲルによって■きわめて真剣に仕上げられたものであり、彼はその結果を 1853 年のベルギーの調査の結果と比較した(後者では家計簿は質問紙の方法で得られていた)<sup>(5)</sup>。我々は次の2点を注記するにとどめる。記入すべき質問用紙と産業会議部に宛てられた指示(これはエンゲルの論文の p.76 以降に再録されている)を検討すると、我々が目にしてるのは労働者が毎日つけた本来の意味での家計簿ではなく、会議部が記入した質問用紙であると思われる(会議部が家族手帳を基礎にしているかどうかは明記されていない)。そして会議部が記入した質問用紙では月間の各支出の合計(あるいは消費された各種の食品の量)のみが記入されている。他方エンゲル自身は、年間支出を得るために4月の月間支出を12で掛けること——これはこの結果を1853年の年間データと比較するために必要なのであるが——はほとんど不当であると指摘している(pp.83-84)。しかしなお追加して彼は、月間支出を得るために1853年の年間データを12で割ることも同様に不正確であろうと指摘している。そして彼は、記入あるいは口頭による質問という方法によって集められた1853年のもののような年間家計簿は同じように多数の掛け算を含んでいるという指摘をして安心する。これは1853年の家計簿が現実には月間のものであるのか年間のものである

のかは分からないということを確認することである。しかしそれならば 1891 年の家計簿についても事情は同じである。なぜならこうした事情は省令の第 7 節 (p.80) から生じているからである<sup>(2)</sup>。それゆえ、もしこれらの月間家計簿が実際につけられたものであるとしても、それらは支出の一部(何よりもまず食料)についてのみ月間のものであり、その他の部分については年間のものである。しかしその他の部分についても、本来の意味での家計簿ではもはやない。実際それらは食料についても本来の意味での家計簿では決してない(なぜなら支出について日毎に示されていないからである)。それらは年間算定に統合された月間算定である。そしてこのことは、世帯手帳の記入とは別の方法による家計簿の検討に我々を向かわせるものである。後者の別の方法のなかに世帯手帳の記入という方法はむしろ包含されているはずであろう。

- (1) エルンスト・エンゲル、ベルギー労働者家族の生活費、過去と現在、家計調査による比較、Engel (Ernst) . Die Lebenskosten belgischer Arbeiter-Familien früher und jetzt. Ermittelt aus Familien-Haushaltrechnungen und vergleichend zusammengestellt. Bulletin de l'Institut International de statistique, Tome IX, premiere livraison, Rome.1895, p.124.—1853 年の調査の結果はデュクペシヨール (Ducpétiaux) によって絶対額で公表されており、体系的な表に加工分類されていない。デュクペシヨールが到達した結論——これをエンゲルは付録の p.22 に再録している——は、エンゲルが言うところによれば、「推論というよりもはるかに多く直観」である。1886 年にある調査が試みられているが、これは■きわめて不十分なものであった。66 の家計簿が集められたが、■きわめて少数のものが手帳にもとづいており、いくつかは雇傭主によって提出されたものであり、それらは大抵不完全なものである。アルマン・ジュラン (Armand Julin) は、しかし、la Réforme sociale への論文 (n°4,5,1891) のなかでこれらの家計簿を先行のもの (l'ouvrier belge en 1853 et 1886 d'après les Budgets comparés de la Commission de statistique et L'Enquête de travail) と比較している。1892 年の当局から公表されたものは、いかなる程度においても彫琢のあとが見られない。エンゲルは 1857 年の研究、ケーニッヒライヒザクセンの生産および消費状況、(die Produktions und Consumtionsverhältnisse des Königreichs Sachsen) ——これは上記 Bulletin de l'Institut. intern. de statist への論文の付録。p.54 に全部再録されている——において 1853 年のベルギーの家計簿とル・ブレの家計簿とを比較しているが、1895 年に当の研究を発表しており、そこではベルギーの 2 つの調査は新しく全面的に作り直されている。
- (2) 「次の支出すなわち住居の維持費、家具の購入と維持費、教養文化費、税金、暖房照明費、衣服費等々は、1890 年 4 月については、1890 年におけるこれらの支出の総額を 12 で割ることによって得られるであろう」。

## B. 口頭の指示にしたがって作成された家計簿

我々がもっている大多数の家計簿は実際、家計帳を毎日つけることによって作成されたものではない。時間の損失を嫌だと思ふ場合もあれば、調査の範囲を非常に多数の世帯に広げるためにそれを簡単なものにするのを余儀なくされる場合もあり(外延的方法)、また、直接的で継続的な観察の効用が認められなかった——その理由は問題になっている事実が比較的慣れ親しんだ事柄であり、記憶によって再現することが可能あり、偶然あるい

は個々の気まぐれによると考えられる細部における変化は重要とは見られないからである——場合もあれば、個人による記入がいかかわしく思われた場合もあり、さらに、まずは例外的なものの特別の状況を除外していくつかの平均的事例に限定することによってこそ真実の、あるいは真実性の高い結果により確実に速く到達することができると思われた場合もある。

#### 一. 概算によって作成された家計簿

この種類の家計簿の最初の部類はすぐに入手することが可能である。社会観察家は労働者、雇傭者に対して、そして職業上労働者と頻繁に関係する別の人々に対して質問する。労働者は1日、1年、あるいは別のある期間に、食料、クリーニング等のために、平均どのくらい支出するか、と。ヴィレルメ<sup>(1)</sup> (Villermé) の重要な著作が、■いろいろな方法で入手した一連のこの種の情報を含んでいる。それは例えば次のように言うであろう<sup>(2)</sup>。ある織物工の家族では、父親は1日に30スー、母親は20スー、子供は11スー、つまり年間915フラン稼ぐ。もしその家族が屋根裏部屋1つ、小部屋1つ、地下室1つ、寝室1つを住居として使っているとすれば、その家賃は40フランから80フランである。平均家賃を60フランとしよう。食料費は夫については1日に14スー、妻については12スー、子供については9スー、つまり年間638フランである。しばしば複数の子供がいるから738フランとしよう、家賃と合わせて799フランである。その他の出費用に117フランが残っている。概算作業は誰の目にも非常に明らかである。しかも、実際に作成された非常に多数の家計簿に従って出された平均値がこのような結果からほとんど隔たっていないということもあり得る。しかし我々はこの点については何も知らない。しかし同じ箇所には次のような「個人事例」が挙げられている。すなわち、旧軍人で製糸工場の職工長でありそこで1260フラン稼ぐ男子がともかくも家計簿を作成した。(彼は結婚しており、4人の子供があり、そのうちの1人は5ヶ月であり、他は7歳から10歳である)。家賃は1日当り20サンチーム、年間73フラン、食料費は2フラン80、つまり年間1022フラン、その他の支出一日当り36サンチーム、つまり年間131フラン40、総額1226フラン40、である。10サンチーム単位の誤差のこのような厳密さは人に誤った幻想を抱かせる性質のものである。しかし人は、この職工長が毎日の食費を度のように計算するのを知りたいと思うであろう。これは明らかに平均値である。しかし、彼はその平均値を、年間支出を365で割ることによって得ているのか(この場合は会計帳をつけることを意味する)、あるいはそれは概算であるのか(しかしこの場合にはこの概算は何に基づいているのか、そしてこの概算は今度はそれ自体が年間食料費を計算する基礎となるのか)。ヴィレルメの家計簿の大部分は、下宿代、食料品価格、家賃に関するデータ(為になるものではあるが)を使って作成されたもののように実際のところ思われる<sup>(3)</sup>。この点について2人の実業家の意見によってルーアンで作成された6つの家計簿は非常に教訓的である。この家計簿は「白パンが半キロにつき15サンチーム以上はしなかった普通の時期——白パンが半キロにつき19サンチームであった1831年の終りの価格から見て普通の時期」のものである。これは次の問いに対する1つの答えである。すなわち、ルーアンでは(田舎では)1人の男子あるいは女子は平均どのくらい支出するかという問いである。そしてヴィレルメはその数字について、家賃はも

つと高い、と指摘する。そして彼が子供のいない世帯の支出の計算法に問題ありとするのはただこの点を理由としてである。子供のいない世帯の支出は、男子と女子の支出を加算し、女子の住居費、照明費、暖房費を差し引くことによって得られるとする計算法である。しかしこれは異論の余地のある、再構成という方法そのものである。しかもこれらの平均は何を意味するのであろうか。そして同一の労働者が賃金を受け取り、平均の家賃を支払い、食料、衣服等のために平均の支出をするということは考えられることであらうか。労働者が食料費を増やすために住居費を減らすかどうか、減らすとすればそれはどんな労働者か、子供のいない世帯の食料費が男子労働者および未婚の女子労働者の食料費総額よりも多少とも大きいかどうか、等を知ることができたら我々には興味ある事柄であらう。このような問題にはこのような家計簿は■まったく答えることができない。それはまさにこれらの家計簿が近似値であり、平均値だからである (4)。

- (1) 木綿、羊毛、絹製造業労働者の肉体的精神的状態についての一覧。Villermé. *Tableau de l'état physique et moral des ouvriers employés dans les manufactures de coton, de la laine et de soie*, Paris, 1840, 2vol.
- (2) Département du Nord, *Industrie cotonnière, Fabrique de Lille, 1835-37, tome I*, p.100.
- (3) 彼は例えば次ぎのように言うであらう。サン・カンタン (Saint-Quentin) の非常に貧しい 1 世帯。毎日の支出。世帯全体のパン 4 スー 2 分の 1、いんげん豆、じゃがいも、時に下等牛肉、豚肉入りの貧弱なスープ 6 スー、これに、みずぼらしい住居のための 2 スー、あるいは 2 スーと 2 分の 1、の支出をつけ加えなければならない、と。これは単に、生存のための最低限費用はどれだけか、という問に対する答えにすぎない。しかし、どのような世帯がこのように生活するであらうか、どのような場合にこのような世帯にも施し物やアルコール等が入って来るであらうか。
- (4) 従ってこの結果のなかで最も教訓的なのは下宿代である (例えば、ランスの工場 p.236、アミアンの工場 p.307)。しかし勿論これは家族の生活条件そのものについては不完全な観念を提供するのみであり、労働者の性向の多様性を把握することを妨げる画一性の一要素である。家計簿については、これらはおそらく、生活費について別途集められた資料を提示するための好都合な枠組みであらう (そしてこれは小学校教師を介して集められた小売価格についての情報を最も具体的に提示するためにすでに引用した著書 *Bordereaux de salaires pour diverses catégories d'ouvriers en 1900 et 1901*. において労働局も利用した枠組である)。しかしこれらはそれ自体としては新しい事実資料ではない。——さらに、クロワ・ルス (Croix-Rousse) の職長の家計簿には何の価値があるのか (p.383)。そこでは総支出は正確に 1500 フランであり、食料費は 900 フランであり、家賃は 200 フランであり、その他の支出は 400 フラン…である。

## 二. 質問紙によって作成された家計簿 (外延的方法)

以上のような概算方から、これから我々が述べようとしている質問紙による家計簿への移行がそれと分らぬほどのものであることは■確かである。ヴィレルメから得られる情報の方が価値が高いということさえあり得ることである。なぜなら彼はそれらが見積もりであることを我々に少しも隠しておらず、確認された事実として我々に呈示されているものの多くについても事情は少しも異ならないことを隠していないからである。それにも関わ



らず、観察された類似の事例の数がはるかに多いこと、(各質問について)採用された枠組みあるいは調査用紙の統一性によって、質問紙による観察は全体として区別すべき一集団を形成している。他方我々は、それらの作者にとって、このような観察がその価値を引き出さなければならないのはとりわけ、各事例についてその数が多数であることからであり、また、彼らが接近しようとしているのは本来の意味における統計の方向に向かってであること、を承知している。——調査を方法によって分類することが可能であるが、その方法は■つねに被調査者に対する質問であり、ある時は生きた声で、ある時は質問紙を使用する。ただ、観察についてのこのようなあり方は■つねに必ずしも明示されていない(調査者は本来の意味での家計簿についての作者よりもはるかに控え目である。多分彼らは彼らの用いる方法がいかに問題の多いものであるかを感じているからであろう)。他方では、こうしたやり方の間に本質的な差異は存在しない。たしかに、質問紙と同時に、口頭での説明をしなければならないのである。そして質問紙が満たされたら、補足的説明と情報を要求することが必要なのである。さらに、質問される問題の数と種類によって調査を区別することも可能であろう。表に並べることの出来る数字を多数集めることに専念した調査者の大部分は、通常本来の家計簿に付随するもの、すなわち家族、住居の記載、財産目録、さらに、4つ5つの最も重要なもの以外のその他の雑費の詳細、を無視してきた。ある場合には、非常に限定された研究を課題としているときでさえ、収入(支出)総額と住居費<sup>(1)</sup>あるいは支出総額と食料費<sup>(2)</sup>で彼らは満足してきた。しかしながらこのような調査は家計簿のカテゴリーには入らず、むしろ小型の統計であるとも考えることも可能であろう。

- (1) 例えば、「1863年12月関税と酒税のために設置されたハンブルク市政府■並びに市民の委員会の議定書案」1864年から借用された4万808人のハンブルク市民の「家計簿」■(?)では、収入と家賃が、そして、先に引用したハンブケの著書では1886年におけるハレの264家族の家賃が挙げられる。ハンブルクの場合には、収入の数字が大きくなればなるほど貯金できるのであるから、収入の数字が支出総額を示していないことを理由に彼はハンブルクのデータを信用せず、郵便職員——彼らは「その支出が大体収入に見合っており」、ハレの中央税庁における彼らの処遇についての資料を集めて——について研究し、そしてハレのいくつかの裕福な家族——彼はこれらの家族の支出総額についてのデータを入手した——について研究した。彼は家賃税局で家賃の数字も集めている。——ファイクの著書、バルリンのクリーニング業における家内経営と工場経営、**Johannes Feig, Hausgewerbe und Fabrikbetrieb in der Berkiner Wäsche Industrie (Schmollers Forschungen)**, 1896.においては、28人の家内労働者とその家族、14人の仕立屋とその家族、47人の工場労働者とその家族の週の平均収入、年間収入、家賃が示されている。
- (2) クーナ、オーベルシュレジエンにおける産業労働者住民の食料事情。Kuhna, *die Ernährungsverhältnisse der industriellen Arbeiterbevölkerung in Oberschlesien*. Leipzig, 1894. 調査は1891-92年にかけて念入りに仕上げられた。彼は信頼できる人物(企業職員、公務員)に調査用紙を送付した。調査用紙は高地シュレジエンの労働者407人、別の地域の労働者43人に関しては利用可能なように書き込みが行なわれた。特に小売価格と食料品の出所(どこで、どのような理由で購入したか)を把握することに専念して、彼は他の支出(衣服、住居、暖房、照明)についての情報も収集した。アルフレット・グロトヤーン(Alfred Grotjahn)はその有名な著書、国民の食料の変遷について、**Alfred Grotjahn, Ueber Wandlungen in der**

Volksernährung, Sohmolleriohe Forschngen, XX, 2, Leipzig, 1902, p.72 において、クーナの著書における「資料の正確さについて疑いを起こさせる、生理学的観点のいかがわしさ」を指摘している。

各種の方法はここではとりわけ国によって異なるように思われるので、調査をドイツ型、アメリカ型、イギリス型と区分しよう。

第一のドイツ型にはまず 1853 年のベルギーの<sup>(1)</sup> 調査——これについては先々述べた——、ついで 1875 年のシュレジエンの調査<sup>(2)</sup> が含まれる。ベルリン統計局は、我々が先に述べた (■p.464) ■二つの本来の意味での二つの家計簿調査のほかに、質問用紙法によって一定数の家計簿を、1879 年と 1900 年に収集している<sup>(3)</sup>。しかし特記する必要があるのはベルリン統計局が 1903 年に行なった調査である<sup>(4)</sup>。ヒルシュベルク (Hirschberg) は序のなかで、最初試みられた家族手帳による調査<sup>(5)</sup> はほとんどうまく行かなかったので、外延的方法に訴えたと述べている。記入された 1115 の質問用紙のうち、908 がきちんと作成されたものであった。労働者、職人、そして 18 人の事務員からのものであった。支出は 600 マルクと 4000 マルクの間である。ヒルシュベルクは、これらは、補足的情報と訂正とを必要とするものであるにも関わらず、大部分、加工し分類しさえすれば「きわめて大きな価値を獲得する」見積もりであると認めている。彼の結論によれば、この外延的方法は生産的であった。しかし、質問紙というやり方に対する原則的異議のほかに、多数の欠落を指摘しなければならない。借金、貯金、下宿提供あるいは転貸からの収入、現物の収入あるいは利益、贈り物に関係する質問が存在しないのである。もしこれらにはあまり大きな重要性を与える必要がないということであれば、このような計算自体、あまりに不確実な見積りだと言わなければならない。注意深く (そして経験に富んだ丹念な調査者が必要であろうが)、シュナッパー・アルントが復元的具体性<sup>(6)</sup> と呼んだ方法を適用するのでなければ、評価見積りは不正確なままであろう。この復元的具体性とは例えば、家具類の目録をつくり、それぞれについていつどのようにそれらが購入されたかを、領収書、計算書に基づき、となりの世帯と比較するなどして、明らかにしようすることにある。復元的具体性はこうした苦勞なしには少しも現れてこないであろう。

- (1) デュクペショー、ベルギーにおける労働者階級の家計簿、1855 年、Ducpétiaux. Budgets économiques des classes ouvrières en Belgique, 1855. この調査はケトレ (Quetelat) が主宰していたベルギー中央統計委員会の勧告によって行なわれた試行作業の後、国際統計会議によって準備されたものであった。区毎に 3 つの家計簿の割合で 199 の家計簿が集められた (そのうち 49 は農民のものである)。3 つの社会的カテゴリーに分けられており、「典型的」な家族 (父、母、16、12、6、2 歳の 48 の子供) に対応している。これから一般的結論として、下層階級の労働者世帯は、想像されているよりもはるかに栄養状態が悪いことが明らかになった。他方、我々が先々述べた有名な法則をエンゲルが定式化したのはとりわけこの調査に基づいてのことである。
- (2) フリーフ、シュレジエンにおける工場労働者の経済状態とそれに最も適合的な家具調度。Frief, Die wirtschaftliche Lage der Fabrikarbeiter in schlesien Einrichtungen, Breslau, 1876. 彼は 5 人 (大抵は父と母、稼ぎのある 1 人の子供あるいは他の家族構成員、そして 14 歳以下の子供 2 人) からなる労働者の家族 235 人の支出および収入についての情報を質問紙法によって獲得した。

- (3) 労働者階級の支出、Ausgaben der arbeitenden klasse. Statistisches Jahrbuch der Stadt Berlin, VII Jahrgang, 1879. 調査は15世帯を対象とし、1879年におけるそれらの支出がどれくらいであったかを年末に質問している。——貧困階級における家計統計、1900年(ベルリン市統計局刊行、付録、1902年) Statistik von Haushalt-rechnungen minderhemittelter Bevölkerungsklassen in Jahre, 1900 (Veröffentlichungen des statistischen Amtes der Stadt Berlin, Beilage, 1902.) ここでは142世帯の収入と支出が質問紙法によって測定されており、これらの世帯のうちのいくつかは事務員と商人である。
- (4) 1903年における貧困階級の賃金測定と家計(ベルリン市統計局刊行、ベルリン統計、第3分冊) Lohnermittelungen und Haushaltrechnungen der minderbemittelten Bevölkerung in Jahre 1903 (Berliner Statistik, hgg. Vom statistischen Amt der Stadt Berlin, 3 Heft) - (1905年3月帝国労働新聞、第3年度、収入と生計、ベルリンにおける企業労働者の生計. Reichs-Arbeitsblatt, mars, 1905, 3<sup>e</sup>année. Einkommen und Lebenshaltung. Beiträge zur Lebenshaltung und Lebenshaltung. Gewerblicher Arbeiter in Berlin. も参照)。——この第3分冊の pp.1\*-48\*は給与を扱っており、pp.49\*-60\*は家計簿を扱っている。pp.1-38には給与表が含まれており、pp.39-75には家計簿の表(3)が含まれている。しかしこれらの表の構成は当を得ていない。最初の表は世帯構成と絶対数での収入規模を与えており、第2の表は相対値パーセントでそれらを示している。第3の表は(■まったく無用な)、第1の表の繰り返しである。ただ、世帯の数とそれらの赤字と黒字とを示すかわりに、各カテゴリーに含まれている各職業(13に分けられている)の世帯数が含まれている。これは、大部分の欄はただ一つの世帯には対応しているのであるから、大きなスペースの損失である。そして例えば収入カテゴリー別の支出のような、我々がやらなければならなかった、本質的な合計の額は与えられていない。
- (5) 年鑑統計。Statistische Jahrbuch, VI, p.132, VII, p.164.IX, p.184.
- (6) 前出、p.25以降。

農民あるいは小都市の労働者の家計については依然として考慮に入れずに、ベルリンに適用されたのと非常に近い方法によって行なわれたドイツの4つの調査について言及しておこう。ナッセ<sup>(1)</sup>(Nasse)は彼に伝えられた情報に基づいて、1889年についての炭坑夫10家族の年間家計簿を収集している。マンハイム<sup>(2)</sup>では、12の都市労働者家族(および16の農業家族)の支出合計が、訪問と質問、そして書式の記入という方法で集められている。ヴェルテンブルクの5つの家計簿<sup>(3)</sup>、フォルツハイムの19の家計簿<sup>(4)</sup>はすべて質問用紙法によって得られたものである。続く2つの調査は直接にベルリンの方法から着想を得たものである。1つは運輸労働者に関する研究の補足である<sup>(5)</sup>。いま1つはサン・ペテルスブルクにおいて1908年に行なわれたものである<sup>(6)</sup>。報告者が述べているところでは、彼らは主観的評価で満足しなければならなかった。サン・ペテルクブルクの労働者はベルリンの労働者よりも支出を計算することに慣れていなかったもので、年間の支出ではなく先月の支出だけしか要求できなかったのである<sup>(7)</sup>。

- (1) ナッセ、ザールブルッケンシエンおよびイギリスにおける炭坑夫の家計、Nasse,R, Über die Hauskaltung der Bergarbeiter im Saarbrückenschen und in Gropbritannien (Jahrbücher für Nationalökonomie und statistik, Folge, Bd.) , 189.

- (2) マンハイムおよびその近郊における工場労働者の社会的状況、Die Soziale Lage der Fabrikarbeiter in Mannheim und dessen nächster Umgebung (hgg. Von Wörrishofer) , Karlsruhe, 1891. 入手されている家計簿は内容上不均等である。支出の詳細が示されているのは2つだけである。大抵は家賃と食料費が記録されているだけである。これらの数字の一定数は十の位で端数が切り捨ててある。このことは存在するのはただ近似的な算定だけであることをよく示している。
- (3) 1898年ケーニッヒライヒ・ヴェルテンベルクにおける企業監督官年次報告書、Jahresbericht der Gewerbe-Aufsichtsbeamten im Königreich Württemberg für das Jahr 1898, p.147sq.
- (4) フォルツハイムの装身具労働者の社会的状況、Die soziale Lage der Pforzheimer Bijouterie-Arbeiter, bearbeitet vom Fuchs, und hgg. Von dem grosherz-badischen fabrikinspektion, Karlsruhe, 1901.
- (5) 運輸企業における被雇傭舎および労働者の状況に関する研究、Untersuchungen über die Lage der Angestellten und Arbeiter in den Verkehrsgewerben, hgg. Vom Verein für Sozialpolitik, 1902.ベルリンの書式に従って作成された質問用紙がベルリンで配布され、得られたのは14の家計簿であった。
- (6) ペテルスブルク労働者の家計簿. Haushaltungs Budgets Petersburger Arbeiter, von serjev Prokopowitsch. Archiv für Sozialpolitik, Bd XXX, 1910, p.66. ロシア帝国技術協会は熟練労働者組合の代表の助力を得て、1016の回答を得、そのうち632だけが採用された(例えば収入の20%を越える赤字となるような家計簿、ただ1つの項目の支出が給与全体に等しくなるような家計簿はすべて除外された。しかしこのことは実に恣意的なことと思われる。これによって他の質問用紙の場合には記入がよりまともになされていたということが証明されるものでは決していない)。
- (7) 最後になってやっと、転貸家賃をもっている労働者については、差分だけを家賃とみなすということが述べられている。しかしこの計算には議論の余地がある。

アメリカの調査には顕著な特徴として非常に多数の世帯に及ぶという点がある<sup>(1)</sup>。最も重要な調査としては、1901-1902年に行われたものがある<sup>(2)</sup>。1890-1891年には、製鉄労働者、鋼鋼労働者、石炭労働者、綿業労働者、羊毛労働者、ガラス労働者についての生活費が研究されていた。1901-1902年の調査は25440家族(すなわち124108人の人間)を対象とし、主要な産業中心地で集められたもので、非常に正確に工業人口の大きさに従って33の州に配分されている。調査は年間1200ドル以上は稼がない世帯に限定されていた。調査は1年全体を対象としている。データは統計局の専門的かつ経験豊富なエージェントによって、一般に主婦に対する——しばしば家族の他のメンバーに助けられてであるが——個人的アンケートを通して収集された。統計局のエージェントはまず彼ら自身で小売価格を研究することから始めた。多数のこうした情報は記憶によって得られるものであったが、必要な情報のすべて、あるいは大部分は、対象家族の一部についてしか得ることができなかった<sup>(3)</sup>。——これら公式の調査と並んで、アメリカにおける私的な調査はより地味であるが、同じ外延的方法を適用しており、観察された世帯の数において他の国々の私的な調査を上まわっている。それは例えば先に一言した(■原書 p.470) 調査である<sup>(4)</sup>。観察された200の世帯の支出を算定するに際して、「1年全体を通じて帳簿がつけられていな

い時には、様々なカテゴリーの支出は勿論見積り (estimates) に過ぎないが、家族の収入総額、その生活水準、主婦の節約あるいは浪費の習慣、様々な生産物の近所における市場価格、これらについての知識はそれぞれの場合について主婦の情報を補足し確認する上で役立った」。他方、主婦が整理能力、入念さ、あるいは知性を欠いているように思われるケースは除外された。(観察された家族が一般に平均よりも優れている they get on somewhat better than others ことはそれと認めることができる。) この平均以上の家族の場合、このことが我々に最大の保証を与えるものであることは(方法ゆえの) 多数の留保にもかかわらず、十分に調査結果の吟味の上に反映している。1909年にまたニューヨークで行なわれた調査<sup>(5)</sup> はさらに広く、391家族に及んでいる。

- (1) 「労働監督官第三次特別報告」 3<sup>d</sup> special report of the Commissioners of Labor, Washington, 1893. は、1892年11月以前に合衆国統計局によって公刊されたすべての家計簿の分析と索引 (Carroll, D, Wright の指導による) を含んでいる。イリノイ、1879-80 (529 家族)、1881-82 (21 家族)、1883-84 (2129 家族)、メイン、1887 (5 家族)、マサチューセッツ、1875 (397 家族)、ミズーリ、1880 (147 家族)、1891 (75 家族)、ニュージャージー、1885 (356 家族)、オハイオ、1877 (61 家族)、1878 (83 家族)、1879 (97 家族)、1880 (114 家族)、1885 (353 家族)、1886 (137 家族) ——すなわち、合計 4504 家族を対象とする 14 調査である。他方、上記とは独立の調査研究によって、労働監督庁は、(1885年の82の家計簿のほかに) 全米で集められた 8544 の家族 (44158 人) の家計簿を公刊した (Cost of production, 6 and 7 annual report of the Commissioner of Labor, Washington, 1890 et 1892)。しかしこれらは産業における生産費に関する大規模な調査の個別事項に■過ぎない。
- (2) 生活費と食料の小売価格、Cost of living and retail price of food. 18 annual report of the Commissioner of labor. Washington, Government printing office, 1903, p.865 家計簿とその分析は p.13 から p.631 を占めている。表は p.109 から始まる。
- (3) 表 4 は 2567 家族の支出に関する詳細部分を提供している (これらの家族に付いては必要な情報が得られた)。表 5 は「正常な」11156 家族の収入と支出を提供している (「正常な」家族とは、働いている夫、妻、そして多くとも 5 人の子供、そしてみな 14 歳以下、を擁するもので、家族外の構成員をもたず、下宿人あるいは転貸人、そして使用人をもたないものであり、そしてこの表は、彼らの家賃、暖房費、照明費、食料費、衣服費、その他を示している)。我々にはこれらの表だけが取り上げるに値するものと思われた。
- (4) モア、賃金労働者の家計、ニューヨーク市における生活水準と生活費の研究、Louise Bolard More. Wage-earners budgets, a study of standards and cost of living in New-York City (Greenwich house series of Social Studies, n<sup>o</sup>1) ,New - York, Henri - Holt and Co, 1907,280 pages. 1903年11月に開始されたこの調査は1905年の9月に終了した。この調査はニューヨークの中心部(マンハッタン島)に位置する一地区に限定されており、同じ家族によって何代も住まれている古い家屋が、最も近代的なタイプの「共同住宅」と最貧困の住民——国際色豊かで、労働者階級の研究にとってはユダヤ人の住んでいるイースト・サイドよりも典型的な——が住んでいる集合住宅と隣り合っかなり複雑な性格をもった地区である。調査は対象となった家族の長のうち、100人は非熟練労働者、45人は熟練労働者、55人は著者が「事務・職員階級」(clerical class)と呼んだもの——会計帳簿係、事務員、警察官、守衛——に属する。——複数の週の間の食料費の正

- (5) ニューヨークにおける労働者家族の生活水準、Coit Chapon, *The New-York City*, New York, 1909. 我々はこれについて、*l'Année Sociologique*, t. XI, pp.665-671. で書評をし、その方法について論じている。

イギリスの公式統計は、同じく質問紙法によるものではあっても、ドイツおよびアメリカの統計とは、1週間の家計簿に対する偏愛によって区別される。イギリスの公式統計では1889年に34の家計簿が集められている<sup>(1)</sup>。しかし、英国商務省によって企画された大規模な調査においては、英・独・仏で<sup>(2)</sup>「労働組合およびその他の労働関係団体を通じて」質問用紙を配布して数年間のあいだに、これら3国において、1905年の「正常な週」についての、それぞれ1944、5046、5605の家計簿が得られた。しかしそれから引き出し得る非常に一般的な結果しか提示されておらず（五段階の収入水準のそれぞれについての平均支出額、総支出に対する食料費および家賃の比率、食料費総額に対する、主要消費品目支出の比率）、このことが本来の科学研究のためにデータを利用することを不可能にしている。他方ではこの一般的結果自体もかなり異論の余地があるものと思われる。我々が見た金属労働者調査の報告者は次のように言明している(p.20)。「あらゆる誤解を避けるために、我々の手にしている家計簿は我々に■まったく別の結果を伝えていることを想起しなければならない。我々は、英国商務省が挙げているもののほぼ2倍の給与を目にしている。したがって、食料費、衣服費、等もイギリスの調査によるものとは非常に異なっている」。ところで、ドイツの調査がはるかに注意深く行なわれたことは確かである。他方労働組合は、ドイツの労働者は他の国の労働者のいずれよりも給与が低いことを示す刊行物を批判することに何の利益も見出さない。金属労働調査の報告者はさらにつけ加えて次のように述べている。「イギリスの刊行物が収入のなかに付随的収入を入れているかどうかについて、我々は調べることができない」。そして彼はその後次のように言うことができるのである。すなわち、このような（そしてその他の）欠落は、国と国との比較を妨げるものではない、なぜならイギリスの調査者はいかなる場合にも同じやり方をしたはずであるから、と。しかしこれは■まったく不正確である。調査の価値は多分、それが給与、家賃、小売価格、等について我々にもたらすデータによって決まるであろう。しかしこの場合の非常に多数の家計簿は収集の仕方が余りに手早すぎた。

- (1) 労働者の支出に関する報告書、Returns of expenditure by working men, collected by Labour Department of Board of Trade, Labor statistics C.5.861, London, 1889.
- (2) 労働者階級の生活費、Cost of living of the working classes. Report of an enquiry by the Board of Trade into working class ドイツの町市における生活費、Cost of living in German towns. Report, etc., London. 1908. フランスの町市における生活費、Cost of living in France towns. Report, etc., London. 1909. —要するに国際貿易体制が生活条件に及ぼす影響を測定することが問題であったことはよく知られていることである。すべては純粋に実践的なこの目的に従属していた

ように思われる。他方、次の表から自由貿易政策に有利になるように引き出しえた基本方針も、理解することができる。

週毎の平均支出 (マルク)	食料費	住居費	衣服費	暖房照明費
ドイツ	8.83	1.56	2.13	1.01
大英帝国	14.66	3.52	4.38	1.93
合衆国	16.55	6.08	6.20	2.37
フランス	10.76	2.30	3.20	1.44
ベルギー	10.17	2.10	4.44	1.24
スイス	11.23	1.91	3.04	1.79

### 三. モノグラフィー的方法によって作成された家計簿

ル・プレ（およびその後継者）によるモノグラフィー関連の家計簿は、先の二つのカテゴリーの家計簿とは、作成の際の入念さ、詳細部分の豊富さ、その数の少なさによって区別することができる<sup>(1)</sup>。彼ル・プレが適用し推薦した観察方法はこの意味においてむしろ集中的である。しかしながらこれらの家計簿は口頭情報によって作成されたものであるため、ここでこの点について述べておくべきであろう。「観察されてきた家族をできる限り正確に描写するための第一の条件は——とル・プレの最良の協力者の1人であるフォション（Ad.Focillon）は言う——その家族の家に住み、その構成員が共通の屋根の下での自らの役割についてかわるがわる自身で物語るのを聞いたことがあるということである」<sup>(2)</sup>。労働者とその仲間に「長時間の、綿密な、正確な、そして細部にわたる質問」を受けさせ得るためには、「研究対象たる家族の信頼を獲得する」ことがまず必要である。同じ方法を適用した調査者デュ・マルサン氏（M.du Maroussem）は、彼のやり方をより正確に我々に伝えている。一定期間（例えば1ヶ月間）「パン屋、肉屋、八百屋等のすべての代金を数え上げてもらう。記憶は考えられるよりはるかに精密なものである。かなり稀ではあるが時には記憶が1冊の会計簿によって助けられることもある」。次いで、次の6ヶ月間「ときたまの訪問を継続し、おしゃべり——ここにはもうメモ帳は現れない——のなかでの確認のための質問は注意深く目立たないような形で行なうことができれば、モノグラフィストとしてはその家族の家計簿を最終的に括ることができよう。彼には時間の経過のなかで二つの有益な援助がもたらされているであろう。一つはその家族を長い間知っている人々の意見、いま一つは観察されている家族の信頼、時にはその愛情でさえある<sup>(3)</sup>」。

- (1) ル・プレ（Frédéric Le Play）は1855年に（フオリオ版で）1冊の資料集 *Les Ouvriers européens* を出版した。これは都市および農村の労働者家族についての57の描写からなっており、彼が長期の旅の間に、また世界各地およびパリにおいて、研究のために選び出したものである。彼の著作の新版がツールで1879年から80年にかけて出版された。第1巻は観察法について、2巻は東洋の労働者について、3巻はフランス北部の労働者について、4、5、6巻は西洋の労働者（安定・

動揺・解体)について論じている。ル・プレの方法を適用するために1856年に設立された「社会経済学の実践的研究のための国際学会」*Société internationale des études pratiques d'économie sociale* は、「二つの世界の労働者」*Les ouvriers des deux mondes* と題されたシリーズにおいて非常に多数の労働者家族についてのモノグラフを発表している。このシリーズは、1899年7月においては91のモノグラフを含んでいた。国際統計協会 *Institut international de statistique* の会報 (tome V, première livraison, Rome, 1890) には、「ヨーロッパの労働者」および「二つの世界の労働者」における統一的枠組みによるモノグラフ100家計簿の比較、序文シェイソンおよびトッケ、*Les budgets comparés de 100 monographies de familles, publiés d'après un cadre uniforme dans 《Les ouvriers européens》 et 《Les ouvriers deux mondes》 avec une introduction, par E.Cheysson et A.Toqué.*が掲載された。このような家計簿の意味は(相互の比較からではなく)主として、詳細なモノグラフィーとの関係に由来するのであるから、数字しか登場しないこのような一覧表の存在理由はほとんど理解することができない。それでもしかしこれらは100の家計簿のうち51がフランスに関係していること(そのうち14はパリおよびその郊外)を我々に教えてはいる。

- (2) シェイソンおよびトッケ前出論文 p.47 に引用されている。
- (3) デュ・マルサン、労働問題、*Du Maroussem, la Question ouvrière, 4 volumes, Paris, 1891-94.* (第1巻、パリの大工、は独立の大工についてのモノグラフィー(上記 p.346 を参照)を含んでいる。第2巻、サン・アントワヌ郊外の高級家具師は、奢侈的家具の指物師、通常家具の指物師、*trôleur* の指物師のモノグラフィーを含んでいる。第3巻、パリの玩具師は、「毛虫のなかのやっこさん」*《ouistitis en chenille》* の職人、鉛の兵隊、厚紙の型師(これについては家計簿が欠けており、資産目録のみ)のモノグラフィーを含んでいる。第4巻、パリ中央市場と食品流通は、果物競売の仲仕、果物および初物の取次店の日雇労働者のモノグラフィーを含んでる。)
- (4) 前出引用書、第1巻、p.223。

我々はル・プレとその弟子たちによって採用された支出表示<sup>(1)</sup>の統一的枠組について、また家族のモノグラフィー一般について述べたこと(■原書、p.163 以下およびp.157 以下を参照)をここでは繰り返さない。フランスの経済学文献は労働者の家計簿について比較的少数しか紹介していないように我々には思われるとしても<sup>(2)</sup>、ル・プレは正当な資格においてこの調査方法の発明者と見なされてきたし、現在においてもそう見なされうること、他方では、科学的帰納推理として認めるにはあまりに少数であり異質混合ではあるが彼が集めた家計簿とモノグラフィーは、歴史家にとっては依然として第一級の資料<sup>ドキュメント</sup>であることを忘れてはならない。

- (1) ただ一般に、衣服、下着類、家具についての詳細な目録が(大体の価格と■ともに)家計簿に付加されていることを注記しておく。
- (2) 我々はまたド・レイボーの「マニュファクチャー体制の研究」(3巻、絹、綿、羊毛、パリ、1867年)、*Études sur le régime des manufactures, de Reybaud (3 volumes : la soie, la coton, la laine. Paris, 1867)* の中に含まれている、ヴィレルメのものと同じく、大抵は概数による家計簿に言及しなければならない(しかしながら、綿についての巻では、ミュルーズおよびその周辺の綿業労働者)



働者 10 世帯の収支を含む表 (pp.392-93) が、個人的データに■もとづいて作成されているが、どのようにかれらが集められたかについては我々は知らない。——他方、「下着類製造業における家内労働に関する調査」 *Enquête sur le travail à domicile dans l'industrie de la lingerie, publiée par l'office du travail (Paris, 1907-1908)* においては、第 1 巻パリについて、で労働者についての 66 のモノグラフィーと 11 の家計簿が見出され、第 2 巻シェール県について、では 5 つの家計簿 (pp.211-225)、ロワール=シェール県については 1 家計簿 (p.353)、アンドル県については、25 家計簿 (pp.633-669) が見出される。これらの家計簿のうちあるものは質問紙法によるものであり、ほかは近似法 (先述を参照) によるものである。このことはあちこちに置かれている次のような指示から分かることである。すなわち「家計簿はほとんど常に純粹に理論的なものである」 (第 1 巻 p.672)。「衣服、履物、薬剤等のための支出がどのくらいに■昇るかを、概算にせよ把握することは不可能であった」 (同上、p.670)。「家計簿は、2 つの週、すなわち夏の 1 週間と冬の 1 週間の支出を数え上げることによって作成された」 (同上、p.706)。